

明らかに周りの奴らの生きる世界が違う件

ポルポル

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

何やら世界観がぐちゃぐちゃな世界に転生したけど色々あってもう平穩に暮らしたいと思っていた主人公が意図せず美味しいポジにいる兄さんとして色んなジャンルに巻き込まれていく話。

魔法少女の家の近所のお兄さんとか伝奇ものの通りすがりの意味ありげな兄ちゃんとか。そういう美味しいポジが好き。

小説家になろうでも投稿しました。



707	巫女・妖狐 13	
688	ヤンキー少女4 / 巫女・妖狐12 / MS10	
671	巫女・妖狐11 / ヤンキー少女3	
654	巫女・妖狐 10	
644	GBF? 5	
625	GBF? 4	
612	巫女・妖狐9	
602	巫女・妖狐8	
595	ヤンキー少女2	
580	巫女・妖狐7 / ヤンキー少女	
564	巫女・妖狐6 / 巫女・妖狐1	
544	巫女・妖狐5	
533	巫女・妖狐4	
521	巫女・妖狐3	
509	巫女・妖狐2	
497	巫女・妖狐	
477	巫女3 ↓ 妖狐1	
467	巫女2	
446	MS9	
426	MS8	
410	MS7	
390	SK1 (MS、M)	
378	???	
367	??	

## 魔法少女？

高校生の時、家族旅行中だったオレは交通事故に遭い、家族を失った。運転席にいた父と、助手席にいた母は即死、後部座席にオレと共に乗っていた妹と弟は辛うじて息があり病院に担ぎ込まれたが、治療の甲斐なく間もなく息を引き取った、らしい。奇跡的に生き残ったオレはその事故の衝撃でそれまでの記憶を失っていて、代わりに今の『オレ』の記憶を手に入れていたのだ。思い出した、とも言い換えられる。

ジャンル、つてのがある。ネット小説が好きなオレは、インターネットで小説を探するとき、ジャンル分けによる検索に大変お世話になった。恋愛、SF、ファンタジー、ホラーなど、ジャンルつてのは多岐に渡る。当時人気だったのは、転生というジャンルであった。端的に言えば、現代社会で死んだ人間が剣と魔法の世界や、現代によく似てはいるが異なる文化や法則のある地球に生まれ変わる、あるいは転移し、特別な力を持ったり持たなかったりして、物語が始まる、といった具合である。

事故後、昏睡状態だったオレが目を覚まし、オレがその『転生』をしたのだということに気づいたのは、しばらく経ってからだった。意識を取り戻した直後など、状況が分からなさ過ぎて、慌てふためいて混乱していた。死んだ記憶もないのに明らかに記憶の中のオレよりも若い体になっている上に、顔も違うし体格も違った。なんなら髪の色も量も生え際も違った。

最初こそ取り乱したし、オレは自分の頭がイカれたんだと思った。だが、しばらくしてから気づいたんだ。

そうか、と。オレは転生したんだ、と。

かつての記憶を事故で取り戻し、その代償に今生の記憶を失ったんだと、そう悟った。

事故の後のことは、それ以上特筆すべきことはない。事後処理のあれこれに関しては、信頼できるかはともかく、入院中のオレのもとに通い詰め、親身になってくれているように感じた弁護士に丸投げした

ので、知らないのだ。

今のオレの体の持ち主であった『東堂雷留』とうどうらいりゅうには、亡くなった家族以外に身寄りが無かった。だからオレは前世でしていたこともあって、『東堂雷留』が暮らしていた家での一人暮らしを望んだ。オレを心配してくれた弁護士は高校生の一人暮らしに懸念を示しオレを諫めたが、しかしオレは押し切った。結果から言えば、紆余曲折あったもののオレの希望は通り、高校生から大学生となった今でも一人暮らしを続けている。一人暮らしに際して必要なその他もろもろの手続きも、全部弁護士に丸投げした。担当してくれた弁護士さんには頭が上がりたくないし、これからも長い付き合いになる、というかするつもりである。鳴藤という名の弁護士なのだが、彼が敏腕であることがもうわかっているの、今後何か困ったら全部頼むつもりであるからだ。

その後、事故で留年したオレは元の高校を退学し、単位制の高校に編入。自分のペースで勉強して卒業し、現在は一人暮らしの大学生である。事故で家族を亡くし、これまでの記憶を失う代償に前世の記憶を取り戻した一人暮らしの高校生(単位制)、こんなシチュエーションがあつて、何もなければ——と確信していたのだが、現実には全くもって何もなかった。何かイベントのようなものが発生するのではないかと期待していたのに、本当に何もなかった。単位制ゆえに幅広い年齢が入り乱れる高校でさえ、学園もの的なイベントも一切発生することは無く、今に至る。つまりオレは、傍から見れば弄ることも出来なさそうなほど重い過去を持っているだけの、平凡な大学生だった。

転生、という非現実な出来事から以後何もない退屈な日常を数年過ごし、期待もとうに消えうせた頃——大学生になって半年後、事件は起きた。

大通りを曲がって直線に進んだのち旧街道に入り、さらに脇道へ逸れ、細い道を通った先に、『東堂家』は建っている。この地域には昔から住んでいる人が多く、一軒家ばかりが建ち並んでおり、オレの家の隣もまた例によって一軒家であった。

その物件は、東堂家を含めた周囲の家が軒並み年季の入った一軒家

ばかりの中、唯一真新しい近代的な家屋であったため、周囲の家の中では一際異彩を放っている。さぞブルジョアな一家が暮らしているのだろうと思える見た目だが、その家は長い間空き家であった。真新しい作りなのは、前の持ち主が同居していた老親のためにバリアフリーを取り入れた大規模リフォームを行ったためらしい。そして空き家だったのは、そのリフォームのあと間もなく老親が亡くなり、残された独身の一人息子は海外へ転勤することになり、家を手放すことにしたからだそう。そうして、新築同然の空き家が発生した。それは東堂家が事故に遭う少し前の出来事らしい。長い間買手が付かなかったのは、ほぼ新築のために相応に値段が高い割に、都市部から離れ交通の便が悪いという立地条件ゆえのこと。

その家を買う手が付いたのは、オレにとつての事件から二か月弱前のことだ。とある一家が都会から引越して来て、新たな住居に東堂家の隣を選んだらしい。最近では都会が物騒で、娘のために田舎暮らしを選んだ、と挨拶に来たお隣さんが話していた。確かにここ最近ではガス爆発だの不発弾爆発だの物騒な事件が都会で立て続けに起きており、連日ニュースで騒ぎになってたが、娘のためとはいえ即座に田舎への転居を選択できるとかこの人らすげえバイタリテイだなあと呑気に思ったものである。よって、共働きのゆえに娘が家に一人でいることも多いから、迷惑でなければ気にかけてやってほしいと、ぺこぺこ頭を下げられたオレが、分かりましたと頷いたのは仕方ないことだろう。

とはいえ特に関わり合うこともなく、顔を見掛けたら挨拶をする程度である。

話を戻すが、オレの家はその一軒家の向こう隣りにあって、帰路に就く際、必然的にお隣さん家の前を通らざるを得ない立地にある。

墓参りを終え、帰路に就く途中、T字路を曲がり、東堂家のある道へ入った直後、遠くに小さな女の子の姿が見えた。それは件のお隣さん家の一人娘『茶都山茶々』であった。

茶々ちゃんは慌てた様子で自分の体の至る所を弄っている。それを見たオレが最初に抱いたのは、「なにやってんだあの子」という感想

で、次に抱いたのは「何か探してそんな動きだな」という所感だった。後から聞いたところによれば、自宅の鍵をどこかに失くした場面だったらしい。

茶々ちゃんは泣きそうな表情を浮かべていて、わたわたと落ち着かない様子だった。

彼女の両親から頼まれた手前、困っていて見過ごすことも寝覚めが悪い。オレは茶々ちゃんに声を掛けることにした。しかし大声を出すことは憚られた。如何せんまだ距離があり、ただでさえ過去の経緯から奇異の目で見られているオレだ。近所迷惑も考えれば大声を出すという選択は憚られる。よってオレは普通に声が届く距離まで近づこうと足早に歩きだした。そのとき、茶々ちゃんは意を決したような表情を浮かべてガッツポーズを取ったのだが、直後に信じられないことが起きたのだ。

茶々ちゃんの体が突如として浮かび上がり、そして輝き始めたのだ。

驚いたオレは思わず立ち止まった。

その出来事は一瞬のことだったはずだが、気づけば茶々ちゃんの服はふりふりの可愛らしいドレスのようなものに変わっていた。そして浮かび上がったままの茶々ちゃんの顔の前には、ピンクハートの形をした宝石のような意匠が先端にこしらえられた水色のステッキがふわふわと浮いている。茶々ちゃんは宝物でも扱うような所作で空中のステッキへと両手を伸ばし、その柄を両掌で包むようにして握った。

茶々ちゃんの公然での発光と『変身』にオレは呆然と立ち尽くし、啞然と瞬きを繰り返していた。オレ自身混乱していて正確な記憶は無いのだが、茶々ちゃんは何やら呪文のようなものを唱えていた様思う。そして決めセリフらしき言葉と共に、掲げたステッキを振り下ろすように突き出すと、なんと茶々ちゃんの家の門が、ひとりでに開いたのである！

そして再び茶々ちゃんの体が輝くと、次の瞬間には、茶々ちゃんは最初に見た通りの格好に戻っていて、浮いてもいなかった。綺麗なス



テツキは握ったままだったが、しかしそれもただのオモチャの様にはか見えない。先ほどまで感じられた神秘的な雰囲気が消えている。

オレは「まさか」と唇を戦慄かせた。

オレはそのとき、『転生』後から平穏な生活が長く続いていたために、非現実的なことが発生することに対して諦念を抱き始めていた。いや、もはや諦めていたと断言した方が適切だろう。だからこそ受けた衝撃は凄まじいものがあった。

遂にそのときが来たのだと、精神は高揚し、心臓は高鳴った。

そしてオレの中の冷静な部分はこう言った。

——魔法少女ものかよ。

オレはどうすればいいんだ。

魔法少女モノに大学生なんて出て来るか？

昔から知ってるとかでもなく、最近引越した先で会ったばかりの、近所のお兄さんでしかないぞ……。

「え……？」

茶々ちゃんの小さな眩きが、今度ははつきりと聞こえてきた。閑静な住宅街という状況以上に、何か別の力が働いているように、そのか細い戸惑いの声は、オレの耳にはつきりと届いたのだ。そして人知れず悩んでいたオレの意識もまた茶々ちゃんへと誘われる。

『魔法』で閉じられていた門を開き、彼女を悩ませていた問題に一段落がついてようやく、少し離れた場所に立つオレの方にまで意識を割けるだけの余裕が出来たのだろう。そんなドジっ子ちゃんは、視界の端にオレを捉えた後一瞬停止したかと思えば、小さく戸惑いの声を発し、今度はぎぎぎ、とでも音がしそうな動きでオレの方に首を向けた。

目と目が合った。

沈黙し、見つめ合う大学生と小学生(推定魔法少女)。さすがにオレから動くべきだろうと、オレの中の冷静な部分が告げて、オレは止まっていた足を前に進めた。茶々ちゃんの少し前で止まり、内心を押し隠し、努めて平静な態度で声を掛ける。

「やあ、茶々ちゃん。こんにちは。元氣そうだね。オレのこと分かる？」

安心させるべく、なるべく柔らかく穏やかな声音を発することを意識しながら、オレは冗談めかして自らを指さした。

「あ……。えっと、はい！　らいるお兄さんこんにちは！　わたしは元気です！」

「……」

「……」

挨拶が終わったところで、再び沈黙が訪れた。

何をしてたの？

そう聞くのは簡単だ。

しかし茶々ちゃんが何か言いたそうな表情を浮かべ、上目遣いに何うような視線をオレに送って来るため何やら圧を感じ、にこにここと笑みを浮かべるに留まらざるを得なかった。

そして茶々ちゃんは意を決したという様子ながらも、不安げに首を竦めつつ、おずおずと口を開いた。

「あの……」

「どうしたの？」

「そのお……み、みちゃいましたか!？」

問いの中身は十中八九、さっきの魔法少女ムーブのことだろう。

勢いよく尋ねるのは良いが、声がでかいぞ。誰かが聞いてたらオレが変に思われるだろう。あいつは何を見たんだ、と勘繰られるかもしれない。

さて、どう答えるべきか。

見てない、と言うのは簡単だが、茶々ちゃんの様子を見るに、見られたらうことはもう確信しているだろう。いうなればこの質問はただの確認であり、オレがどう出るかを見るための試金石であると同時に、この状況をどうすべきかを考えるための時間稼ぎ。それか、何の裏表もない馬鹿正直なポンコツ少女か。

恐らく後者だろうことを茶々ちゃんの慌て具合から察したオレは、内心に何かがふつつつと沸き上がるのを感じながら、偽りなく答えることにした。

「見たよ」

「み、みちやいましたかっ!? あわわわわ……!!」

茶々ちゃんの表情が目まぐるしく変わる。目も白黒している。相当慌てているようだ。

「あのあの!! な、なにを見ましたか!？」

「なにを見たか……?」

「は、はい!」

少し黙って考えているオレに、茶々ちゃんは不安げな視線を向けながら、そわそわと体を動かしており、時折「あわわわわ」と不安げに呟いている。

オレは茶々ちゃんの問いに、やはり素直に答えることにした。どう反応するかという興味と、もっと慌ててみせてくれるんじゃないかという期待があったからだ。

「しいて言うなら……魔法少女、かな?」

「あ、あわわわわ!! あわわわわわわ!!」

茶々はオレの返答を受けて、なんとも可愛らしい所作で唇を戦慄させた。目を白黒させて、両手で握りしめ、胸の前に掲げていた杖を前後に動かしている。どうやら無意識の動きのようだった。

「あのあの! えっと、これはその、違うんです! えっとえっと!

その、あの! 違うんです!」

滅茶苦茶慌ててんなこの子、可愛い。

「違う? 何が?」

「あの、えっと……!! その……!」

茶々ちゃんの目が潤みだした。やばいな、泣くぞこれ。パニックになつて情緒が崩壊し、涙腺が決壊寸前だ。

やはり魔法少女といえ、秘密がつきものである。魔法が使えることは知られてはならない事案だったか。オレは茶々ちゃんを落ち着かせるために、こう言った。

「上手だったよ」

「え? じよ、じようず……ですか?」

「うん。それ、あれでしょ。ほら。日曜の朝にやってる……何とかっていうアニメの。オレも昔、アニメの三刀流の剣士のごっこ遊びした



んの今の言動は、魔法を見られて焦ってます、以外のなにものでも無かった。

だがオレは考えた。関わろう、関わりたい、と思っていた非日常が目の前にあつて、しかし考えを改めた。

茶々ちゃんが本当に魔法が使えたとする。だがこの子はその事実を隠そうとしているんだ。それを追及する権利なんてオレには無いだろう。ただのお隣さんだしな、オレ。なるようになる。それに、子供には隠しておきたい秘密などたくさんあるのだ。オレも小僧の頃、ボタン式の信号機のボタンを手当たり次第に押して回ったという隠しておきたい秘密がある。茶々ちゃんとオレの秘密に関して、今のところ善悪の差は明らかだが、まあ似たようなものだろう。それをわざわざ暴くのは正直どうかと思う。

茶々ちゃんが普通の女の子ならば、それはそれでいい。オレの言葉が正しければ、公道で魔法少女のごっこ遊びをしてしまったという、将来笑い話になりそうな、ちよつとした黒歴史をお隣のお兄さんに見られた、というだけだ。流行のアニメの真似、ごっこ遊びなど誰もがやるだろう。

そして、わざわざそんなことをねちねちと指摘して子供の熱を冷ますような大人が周りにいたか？

いや、いなかつたね。可愛らしい子供が元気に遊んでいる。それが例え寂しい一人遊びでも、無邪気でいいじゃないかとスルーするのが大人だろう。

はつきり言えば、非日常はあつたんだ、とオレは感動を覚えている。だがまあ、無くても構わない。どちらでもいいとも思っている。しかし無関心なわけじゃない。ただオレは大学生になってしまつて、いつかあつたはずの熱は、やはり既に冷めてしまつていたんだ。

だから、非日常があつたんだと、そう思わせてくれた、そう思えただけで、オレは満足してしまつた。

「ありがとう、茶々ちゃん」

そう呟いたオレは大人の余裕を滲ませて微笑みを浮かべている。しかしオレ自身、その微笑みの中に寂しさという色が滲んでしまつ

ていることに気づいている。大人になるって哀しいことでもあるのねと、かつての熱を失ってしまった自分の変容に、寂しさを隠すことが出来なかった。

「え……う？」

それを子供特有の感受性か、敏感に察知した茶々ちゃんが戸惑いを見せる。オレは何も気づいていないふりをして、穏やかな声で続けた。

「でも茶々ちゃん、この辺だつて車の通りが無いわけじゃないからね。道路で遊ぶのは危ないから、魔法少女ごっこになるのはおうちに入つてからにした方がよいよ」

「えっ……？ あ、はい！ そ、そうします!!」

「ふふ。元気でいいね。それじゃあ、またね」

オレは微笑みを浮かべたまま手を振って、自宅へ足を進める。

「あの、お兄さん！」

「うん？」

茶々ちゃんから掛けられた声に立ち止まったオレは、体を斜めにする形で振り向いた。

「またあした！」

可愛らしくぶんぶんと手を振る茶々ちゃんを見て、オレは失笑した。

恐らくだが、それが彼女にとってのクラスメイトや先生、友達との別れの挨拶であり、定型句なのだろう。会えばおはよう、こんには、と言うように、別れの時には彼女はまたあした、と口にする。

だが小学生と大学生では生活リズムが違い過ぎる。今日の様に早々会えるということはないだろう。茶々ちゃんも分かっているのかいないのか。

「そうだね。明日もまた会えると良いね」

オレも野暮なことは言わず、微笑んでそう言った。

それを聞いた茶々ちゃんは満開の花のように笑みを咲かせる。なんともまあ純粹で可愛い小学生である。

そしてオレは今度こそ帰宅した。

## 現代バトルファンタジー？

魔法少女との出会いから数日後のことだ。その日、オレは大学の講義を1限目しか取っていないかったため、5限目まで授業をぎゅうぎゅうに詰めている友人の恨み言を背に一人優雅な帰路に就いた。

大学と東堂家はかなりの距離があり、県を跨ぎこそしないが市はいくつか通り過ぎねばならない。そのため行き来には電車とバスの乗り継ぎが必要だった。オレは乗りなれたバスを降り、通いなれた駅に入る。シヨップピングモールと繋がっている、そこそこ大きな駅である。

建物の中に足を踏み入れたとき、違和感を感じた。人の気配が無い。静かすぎた。電車の走る音も、発着を告げるアナウンスも、人の歩く音さえも、何もかもが消えていた。

そのとき、平日の正午前である。終電後でさえもう少し音がするだろう静寂だ。

「なんだ……？」

まさか、と期待する。

だがここは東堂家、さらに言えば茶都山家および茶々ちゃんの通っている小学校のある場所からは遠く離れた場所だ。しかも平日。茶々ちゃんが異変を察知しここに来るまでには相応の時間がかかるだろう。空間転移でも出来れば話は別だが、鍵をわざわざ開けていたところを見るに、そういう類の魔法は使えなさそうである。

だとすれば。

もしかして……。

魔法少女になんかこう、『誓い』みたいなものを抱かせるための……。

序盤で、助けられなかった、みたいな。ハード系の……。

……犠牲者ポジ？

そう考えると、嫌気が差した。

「なんだ？」

突如、轟音が鳴り響き、地面が揺れた。どこかで爆発でもしたのか

とも思ったが、音の質的に地震に近い。

『始まった』のだと思った。

ぱらぱらと天井から土埃が落ちて来る。

崩れる、と危機感を抱く。未だに続く揺れにたたらを踏みながら、オレは必死に走り、来た道に戻る。建物から出るべきだと思ったのだ。

そして、空を仰ぎ見る。

轟音は続いている。既に先ほど感じた静寂など存在しない。まさかあの気味の悪かった静けさを恋しく思うことになるとは思ってもなかった。

空は血の色に染まり、そこから中から黒い煙が立ち上っている。周囲の建物はある場所を中心に円状に倒壊し、火の手を上げていた。

倒壊した建物の中心地、そこに立つは山ほどの巨大な怪物。6階立てのマンションくらいはあるだろうか。鋭い瞳、鋭利な牙と爪、全身を覆う黒い鱗に、力強く振り回される巨大な尾に、巨大な一對の翼。  
ドラゴン  
竜やんけえ……。

非現実的な出来事を目の前に高揚など無かった。

巨大な黒竜が咆哮を上げる。距離はかなりあるはずだが、その空気の震えはオレのもとまで届き、オレの肌を刺す。

黒竜が旋回し尾を振り回せば、辛うじて形を留めていた建物は完全に崩壊し、地面がめくり上がる。局所的に見れば、下手な天災より余程質の悪い災害だ。

どうしたものか。

オレは黒竜をじっと見つめた。

「うん……？」

時折、黒竜が身を振るのだ。まるで野球ボールを横腹に投げつけられた人の様に。

そして、気づいた。最初、黒竜はただ乱雑に暴れているように見えたが、しかしよくよく見ると何か意図を持った動きにも思えて来る。

オレは目を凝らして暴れ回る黒竜を見つめる。

何かが黒竜の周りを飛んでいる。いや、跳ねているのか？



思えば定期的に、黒竜から離れた場所に積み上がった瓦礫の山が、突如として崩壊し、土煙が立ち上っている。まるで何か小さなものが激突した、あるいは何かがあるから飛び出たかのようにだ。

やはり、何か小さなものが黒竜の周りにいるように見える。そして黒竜はそれを鬱陶しく感じ、人間が蠅や蚊を追い払うために手を振り回すように暴れている。

「なにがいるんだ……？」

さらに目を凝らす。限界まで目を細めて黒竜を見ると、何か点のようなものが見えて、それが徐々に近づいて来ていた。

人だ!!

かと思えば、それはオレからそう離れていない駅の壁に激突した。

「ええ……」

オレはドン引きしながら、飛んできた人間が激突した壁を見上げる。

ぱらぱらと土埃が舞い落ちる乾いた音がする。

「……っ」

一つ、二つと、小さな瓦礫が転がり落ちて来た。オレは巻き込まれないように、距離を取りながら、人間が激突した壁を伺うように見上げる。

「あっ」

壁にめり込んでいたと思われる人間がずり落ちて来るのに気づいたオレは思わず声を上げた。

「女か？」

落ちて来たのは人間だった。それもオレよりも若そうに見える女の子で、刀のようなものを握っている。

黒く長い髪は土埃に塗れぼさぼさだ。着ている水色のワンピースには血が滲んでいるし、そこら中が破れている。片足は生足だけでなく、黒い下着も覗いているし、片方の肩は完全に丸出しで、鎖骨や肩甲骨まで見えている。下着の紐も切れているようだ。

それを煽情的と感じるには状況が殺伐とし過ぎていて、何より女の子の状況が痛々しい。だって女の子の手足はヤバい方に曲がって

るし、白いのもちらちら見えてるし。

状況から見て、飛んできた、というかあの黒竜に吹っ飛ばされてきたのだろう。まるで漫画やアニメの戦闘シーンのようだ。

オレは思った。

——これ絶対、魔法少女モノじゃねえ！

これは割と大人向けのバトルファンタジーだ。じゃなければ、こんなスケベな姿の女がリョナられて出てくるわけが無い。例えば登場人物が首ちょんぱされるようなとんでもない魔法少女モノなんてあるはずがないんだ。

というかこの女の子の見た目って高校生くらいだし、魔法少女って感じじゃない。主人公の女の子が30歳になっても魔法少女と題打つ魔法少女モノなんて存在しないんだ。魔法少女の年齢は高くても中学生までなんだ。

そうなることやほりこの世界は魔法少女モノではない。

茶々ちゃんのアレはなんだとも思うが、目の前にあるものが真実だ。あれは見間違いだっただ。それか……そうだ。茶々ちゃんは次世代だ。続編の主人公で、今は卵といったところか。茶々ちゃんが高校生になったころ、彼女の物語は始まるのだ。だとすればオレはそれまでは無事なはず……。

いや、本当にそうか？

彼女が主人公になった時、昔に『事件』で死んでしまった隣の家のお兄さんという、彼女の回想の中だけで出て来る役という線も……。

いや、それは置いておこう。

今は目の前の女の子が気になる。見た目の惨状がヤバイ。普通に心配になる。

「君、大丈夫？」

オレは声を掛けたが、うつ伏せに倒れている女の子からの返答はない。気絶しているのだろうか？

「うつ………いったあ………」

かと思えば、女の子は小さな呻きを漏らしながらすぐに動き出した。割と元気そうな「いったあ………」である。手足が折れ曲がってい

て中身もちらちら見えていたはずだが、今は真つすぐ繋がっている。見た目より酷い状態じゃないだろうか？

女の子は握っている刀の柄を両手で掴み、それを支えにして体を起こした。項垂れて、土埃に塗れ乱れた黒く長い髪を垂らしながら、忌々し気にこちらを睨んでいる。

「あなたねえ、そんなところで遊んでないで……」

なんでこっち？

黒竜の方じゃねえの？

オレはそう思ったのだが、オレの顔を見た途端に女の子の目は驚いたように丸くなった。そして小首を傾げ、気の抜けたような声を漏らした。

「あらあ……う？」

女の子は困惑したように呟き、こう続けた。

「違う……わね……う？ うそでしょ……。なんでまだ人が……。結界は……」

ははーん、なるほど。

オレは一人納得する。

彼女は誰かとオレを見間違えた。だから最初オレを睨みつけて来たのだ。恐らくはあの黒竜と戦うにあたっての仲間だろう。そして彼女たちは結界なるものを発動していたのだ。オレがさつき感じた静寂はそれ。彼女の言う結界がオレの知識と似たようなものなら、人払いとか、異界化させるとか、そういったものと思われる。もしかすると、ここ最近都会で発生していた物騒な事件は、これが関係しているのかもしれない。

「……ッ」

オレが呑気に推理していると、女の子が目線を黒竜の方へ飛ばした。舌打ちの小さな音がする。

「？」

オレも彼女に倣い視線を黒竜の方へ向けようとしたが、女の子がいきなりオレに突っ込んできた。

「うおっ」

腹にタツクルを受け、オレの体はくの字に折れ曲がる。そのまま彼女の肩に担がれる形となる。オレは上半身を振らせて自分の肩越しに彼女の肩を見上げる姿勢となり、言った。

「いきなりなにすんの？　びっくりした」

「なんでそんなに平然としているのか分からないけど……」

彼女は困惑したような、呆れたような口調でそう言った。そして真面目そうながらも、どこか色気のある声音でこう続けた。

「舌を噛みたくないならそのお口、閉じておいた方が良いわよ。それと、下も見ない方が良いかしらね」

そう言われてしまえば当然、オレは下を見る。まあ担がれてる姿勢上、正面を向くと彼女の背中からお尻に視線がいつてしまうのは仕方がないことだ。

彼女の破れたワンピースから飛び出る生足と際どい下着が奥に覗くお尻が視界に入る。が、彼女が言った下を見ない方が良いとは、下着を見たら報復をするとか、そういう忠告ではないだろうことは状況からして明らかだった。

オレは空を飛んでいた。先ほどまでオレ達がいた駅は巨大な瓦礫が突き刺さり、崩壊している。あの黒竜が投げ飛ばしたのだろうか？　きつと彼女は、いきなり飛行することになったオレを案じてくれた。そして、駅の惨状を見て、もしかしたら死んでいたかもしれない、という恐怖をオレに感じさせないために、彼女はオレに下を見るなど窘めたのだろう。

見た目はアレだけど良い子だな、とオレは思った。

「君、良い子だね」

「……？」

本心を口にしたオレに、彼女は困惑した様子である。

オレから泣きごとが飛んでくるとでも思っていたのかもしれない。残念だがオレは高所恐怖症ではない。高いところも平気だった。

彼女は近くの建物の壁や屋上を足場に跳躍を繰り返し、黒竜から離れていく。

そして長かったようで短かった飛行時間、というか跳躍時間が終わ

り、オレを担いだ彼女は軽やかな足音を立ててどこぞのビルの屋上に降り立った。風が凄い。

彼女はオレを優しく降ろしてくれると、ちらちらとオレの全身を一瞥する。

怪我がないか、確認してくれたのかもしれない。やはり良い子だ。「ありがとう。大丈夫だよ。やっぱり良い子だね。というか優しい人？」

オレが本心からそう言うと、彼女は怪訝な表情を浮かべて言った。「そう言うあなたは変な人ねえ……」

言い終わった彼女は小さく微笑んだ。ふふ、と微笑みによる吐息が漏れる。

綺麗な女の子だ。少なくともプロポーションはモデルのようだ。そして優しくもある。

だがオレは、ワンピースが破れ放題で肌面積がとんでもないことになってるのにやけに堂々としている変な子だな、とも思った。

そう思っていると、彼女はふるふると頭を振って、こう言った。「違う！ そんな話をしている場合じゃないのよ！」

む、と表情を顰めた彼女は黒竜の方へと視線を向けた。釣られてオレも視線を向ければ、黒竜は何やら身じろぎをしているように見える。彼女の仲間が戦っているのかもしれない。

「なにから話せばいいか……こんなこと初めてだし……」  
顎に指を当てて口ごもる彼女をじつと見つめる。

自信満々な感じだった先ほどから比べると、少しばかり覇気が薄れているように感じる。それが先ほどまでの雰囲気とのギャップと同時に、見た目の年齢相応の幼さを感じさせて、彼女の愛嬌を引き立たせていた。

思案を終えたらしい彼女が、オレを見据えて、こう言った。

「ええと……。ここからあまり離れないで、かといってあつちには……」

あつち、と言いながら彼女は黒竜の方へと視線を向け、こう続けた。「……近づかないで欲しいの。お願い、できるかしら？」

小首を傾げ僅かに目を細める彼女は、女から男への『上手なお願い』の仕方の一つを熟知しているようだ。

オレは彼女のお願い内容が気になって、オレは問いかけた。

「近づかないでっていうのは分かるけど、離れないでっていうのはなんで？ 普通、ここからできるだけ離れて、じゃないの？」

「……あ、あらあ？」

「どうかした？」

オレの問い返しに対し、彼女は戸惑ったように瞬きをしている。先ほどまで見せていた色気のようなものが霧散し、またもや見た目の年齢相応の幼い所作が表面化している。

「……あの。私、お願いしたんだけど……」

「そうだね」

「なんで……？」

オレの返答に、彼女は考えるように視線を伏せた。長いまつげと、長い黒髪が揺れる。彼女が何かを考えている様子を見せている今この時も、遠くでは黒竜の咆哮と轟音が聞こえている。どういう状況下にあるか分からないが、オレの推測が合っているなら、今も彼女の仲間が戦ってる最中なのではないだろうか。

「別に言うこと聞きたくないとかじゃなくて、なんで離れたらダメなのか知りたいだけなんだ。どれくらい離れたらダメなのかくらい、知っておいた方が良いと思って」

「そ、そうね……。そういうことね。それなら……」

そう言っただけで彼女は再びオレに視線を向ける。戸惑いを引つ込めて（引つ込めきれないが）、再び艶のある所作を見せながら、オレにそう言った。

「あなたを見失いたくないの。命の危険があれば逃げてもいいわ。ただし、あの黒竜がいなくなったら、分かりやすい場所に姿を見せてね。分かったかしら？」

「分かった。君が分かりやすい場所にいればいいんだね」

もつと色々と事情を聴きたいが、さすがにそんなことまで根掘り葉掘り聞けるような状況じゃないことは分かる。オレはそれ以上の追

及はせず、彼女の言葉に頷いた。

「そう。そういうことよ。ふふ、お利巧さんね？」

「お利巧さんって……。そんな小学生に言うみたいなの……」

「あらあ……？」

彼女は再び困惑したように小首を傾げた。

今度は引つかかるようなこと言っていないだろ。初対面の歳上に年下がお利巧さんとか、普通に失礼だし。怒らず、呆れた様な物言いで窘めたオレを褒めて欲しいくらいだ。

「私、あなたのこと褒めたのよ……？」

「ありがとう。でも、お利巧さんって褒められ方はあんまり嬉しくないかなあ」

オレは肩を竦めて苦笑した。苦笑を浮かべているのを見て、彼女はうつすらと目を細める。妖艶なそれではなく、何かを確信したというような、鋭いものだった。

「ねえ」

彼女はすつとオレに近寄って来て、体をオレに寄せて来る。彼女の大きな胸が腕に当たる。オレの片脚は彼女の破れたワンピースの中に潜り込み、彼女の生足とワンピース越しの脚に挟まれた。彼女がオレにしな垂れかかる。

なにやってんだこいつ、とオレは正直思った。

柔らかいと思う。長い髪に隠れていて分かり辛かったが、顔のパーツも整っている。彼女は普通に美人だった。だがあまりに血生臭い、というか実際に血塗れで血の悪臭が凄いし、遠くでは爆音轟音雄叫びが続いているしで、とてもではないが欲情を抱けるような状態ではない。と言うかこの女（女の子からランクダウン）、片手に刀を握ったままなのだ。普通に身の危険を感じる。何より臭い。離れて欲しい。体を綺麗にしてきてくれたらウエルカムなのだが、さすがに血塗れは困る。感染症も気になるし。

だが、オレは耐えた。

この女が何を考えてるかは分からないが、何か意図があつてのことだろうから。

そう思っていたのに、女は甘えるようにオレの腕に頬ずりをして、上目遣いで誘うように目を細めると、こう言ったのだ。

「あなた私のこと、どう思うかしら？」

「根は優しいけどそれ以外は変な女」

即答だった。

ぴしり、と何かが固まり、そして罅の入る音がしたような気がした。彼女には妙な自信が見て取れたし、もしかしたらプライドを傷つけてしまったかもしれない。だが名前も知らない血塗れの女が（助けてくれたらしいとはいえ）意味不明で不快な言動を続けていれば評価も相応になるだろう。

彼女はオレから離れると、一步、二歩と後退していく。最初の一步はよろけていたが、その後からはしつかりとしたものだ。

オレから離れた女は、俯いたままその長い前髪をかき上げる。そのときに一瞬だけ見えた彼女の表情は、見た目の年齢相応な少女の穏やかな笑みだったように思う。髪が降り表情は見えづらくなったが、晒されている彼女の口元は、何か欲しいものが手に入ったかのような、嬉しさや幸せを感じ頬が緩むのを抑えられない、そんな類の微笑みのように思う。

彼女は小首を傾げて、優しい声音でこう言った。

「やっぱりあなた、変な人ね」

オレの返答は決まっていた。

「君は優しいけど失礼な人だね」

オレの返答を聞いて、彼女の口元がゆっくりと緩まるのが見える。「ふふ。変な人。……ねえ、名前も知らないあなた。この後、良かったら私と遊びませんか？」

彼女の誘いに対するオレの返答は決まっていた。

「先にシャワー浴びてくれる？」

「あらあ？ んふ。それは『お誘い』かしら？」

彼女はお誘い、という部分で声に艶を付けてくる。喉を擽る様な声音だ。

この女は痴女だなど、オレは確信した。高校生っぽいのに……。ま



さかR指定モノだったりするのだろうか。

「絶対よ？ 約束だからね？」

弾むような声音でそう言った彼女は、最後に一つ微笑みを残して、屋上の床を蹴りつけ飛び立った。彼女は再び、黒竜との戦いに繰り出したのだろう。

その姿を見て、オレは思った。

やっぱり魔法少女モノじゃねえよこれ。だって空飛べないもん、あの女。

彼女は跳躍していた。自由自在に飛行しているわけではないのだ。魔法少女は飛べてなんぼだろう。つまりあの女は魔法少女ではない。

ならばこの世界は一体どんなジャンルの……。

「……少し寒いな」

ビルの屋上は空が近い。必然的に体感温度も下がる。幸いにも彼女は屋上に出入口がある場所にオレを降ろしてくれたので、オレはそこからビルの中に入った。階段を降りていく。いつの間にか、黒竜の咆哮も、建物が倒壊するような轟音も聞こえなくなっていた。

代わりに聞こえてきたのは人の声。

そして、オレの存在を咎め拘束するガードマンのものだった。

このビルのガードマンに捕まったオレはそれなりに説教されてから解放された。外に出て周囲を確認したが、黒竜の姿も無ければ、ビルも全て無事だった。遠くには駅もちゃんとある。何一つとして、朝見た景色と変わっていない。

その後、オレは一応の約束を守るためにしばらく周辺をウロウロしたのだが、結局日が沈んでもあの女が現れることは無かった。

白昼夢でも見ていたのだろうか？

オレは地元に着いてから、駅の近くのチェーン店でハンバーガーを買い、それを頬張りながら歩いて帰路に就いた。

追放……？

あれは何だったんだろう。大学の空き時間、図書室で勉強をしようとしていたオレは、ふと先日のことを思い出した。

街を破壊する巨大な黒い竜と、それと戦っていたと思われる高校生くらいの女の子のことだ。

あれから数日が過ぎている。

ニュースでは都市の一角でいきなり建物が爆散し倒壊したと連日騒がれている。その場所というのが、オレの記憶が正しければ、あの黒竜が暴れていた場所のはずだった。まあ、オレも黒竜のことは遠くから見ただけで、正確な位置は正直なところ分からないので、「その辺のような、そうでもないような……」といった程度のものである。爆発自体はともかく犠牲者はいない。関連性もありそうでなさそうな、微妙な感じではある。しかし関係ありそうな気がしてならなかった。

一体、アレはなんだったんだろう。単なる偶然の可能性の方が高いだろうが、しかし立て続けに非日常を目の当たりにしたことが理由か、オレの中で羨びていたはずの好奇心がむくむくと顔を出し始めていた。

とはいえ、大学が忙しい、ようなそんでもないような微妙な感じを理由に、わざわざ調べに行こうとは思わなかった。

ほんとのところは、調べに行った結果「何も関係なかった」と判断せざるを得なかった場合、寂しい現実を目の当たりにしてしまうので、それを忌避したというのものもある。

オレは転生したし、非日常は実は気づいていないだけでそこにあ。そう思いながら生きていた方が楽しいというか、精神的に気楽なので、あるかもしれないし、ないかもしれないという状態で放置しておきたかった。

オレは今、大きな黒い怪獣が暴れ回るパニック映画を見ている。大学の空き時間での視聴なので、当然大学内にいるわけだが、図書室にはDVDを見るためのブースがあるので、そこで暇をつぶしているというわけである。勉強しようと思って来たのだが、ふと目に付いて見

始めてしまったのだ。

「しまった……」

ふと腕時計を見ると、講義の時間がかなり過ぎていた。映画が思っていたよりも面白かったので、オレは熱中しすぎてしまったのだ。ならば仕方ない。オレは講義のことは忘れることにして、一時停止していたパニックホラー映画を再生した。後で同じ講義を取っている友人から今日の授業の内容を聞いて、家で勉強しよう。

「ふう……」

そうしてオレはパニック映画のシリーズを完走し、一息ついた。ずっと座っていたので腰が少し強張っている。ヘッドホンを取って立ち上がり、伸びをする。そして荷物を纏め、借りたDVDを返却するために受付へと向かった。

「雷留様、こんにちは」

「ん？ やあ、明日香さん。こんにちは」

映画ブースから離れ、DVDを返却し、図書室の出入り口へ歩き出したオレに声を掛けて来た女性がいた。この人は朝光院ちようこういん明日香と言う名の女性で、オレと同じ学年で、同じゼミを取っていて、同じ講義を受けている、何とも奇遇な人である。オレは彼女を見て、いつものように言った。

「今日も素敵な髪型だね。こだわりの髪型を持って手入れしているのが分かるよ」

彼女は銀髪ドリルだった。いわゆる縦ロール、お嬢様御用達の髪型である。服装もお嬢様御用達のドレスっぽいものだ。靴もそう。

上から下まで見た目全部凄いが、オレは彼女との初邂逅のとき、なによりその髪型に衝撃を受けた。顔も整っている女性だが、何よりもその髪型に視線が吸い込まれてしまう。そして、それは今でも同じだ。会うたびにすげえ、と感嘆の吐息が出る。毎日（会うわけではなく、本当に毎日かは分からないが）、彼女の髪型はいつも決まっていた。寸分違わぬセット。左右で長さの誤差は数ミリも（数ミリの誤差なんて分かるわけないが）無いと思わせるほどに手入れされた艶やかな髪は、頻りに美容院に通っている証だろう。銀色が地毛と

言うことはないだろうから、染めてもなおこの艶やかさ。素晴らしいキューティクル。どれほど手間暇を掛ければそれほどの髪を維持できるのか……。それはきつと凄まじい努力の賜物だろう。その情熱に、オレは敬意を示さずにはいられない。何故ならオレは髪なんて数か月に一回切る程度だし、風呂上がりには髪を乾かすなんてこともしない不精だからだ。

「ありがとうございます。わたくし、雷留様に褒めて頂けると、本当に嬉しいんですよ」

僅かに頬を染めて微笑む姿はまさに優雅なお嬢様である。図書室であるからか、小声なのも気配り上手な印象を受けてポイントが高い。オレは普通に喋ってしまったので、反省すべきだろう。図書室なんて普段来ないため、そういうマナーを忘れてしまっていた。

「そう？ オレも本心から言ってるから、素直に受け取って貰えると嬉しいよ」

「ええ。雷留様が素直でいらっしゃるのは、わたくし存じていますわ。今も……うふふ」

明日香さんは、と小さく笑う。オレの音量がさつきと比べて小さくなったことで、彼女の声を聞いたオレが、ここが静かにすべき場所だということを思い出したことに気づいたのだろう。それが面白かったようだ。

しかしまあ、なんともお上品な笑い方である。前世のオレの周りにいた女性たちは、「ちよーうける！ケラケラ」みたいなタイプしかいなかったたので、新鮮だった。

「それに、雷留様のお言葉ですもの。わたくし、信じたい、とも思っています」

「そう……？」

信じているとか、疑ってないとか、じゃなく、信じたい、というのは彼女独特の、奇妙な言い回しである。オレはここに毎回引っかかりを覚えるが、まあ口癖だろうといつものようにスルーした。

しかし、本当にすごい。尊敬に値する。だってそうだろう。毎日だぞ、まいにち（毎日かは分からない）。それでいて、優雅で気品あふれ

る立ち振る舞いで、毎日こんな大変そうな髪型のセットをしていることをひけらかさない。大変アピールも、毎日頑張ってますアピールも無い。そう在ることが当然のことだと言わんばかりに、彼女はただ自然にその髪型でそこにいるのだ。

それだけ、彼女のフアツションへの思い入れ、熱量は凄まじいのだろう。恐らくはムダ毛の処理や、プロポーション作り、そしてその維持にも余念は無いはず。それはつるつるの顔肌、白魚のような指先や整えられた爪を見れば、その努力の片鱗だけでも伺い知ることができるといふものだ。

ここまで来るともはや尊敬しかない。女性は美への向上心が凄いと聞くと、ここまで一生懸命な人をオレは知らない。そして女性の知り合いなど数えるほどしかない。何故ならば野郎という方が楽しいからだ。ただ一つ懸念があるとすれば、それなりに仲良くさせて貰っている明日香さんに、オレの女性の基準が定まってしまうかもしれないことか。彼女が髪型一つとっても、美への意識が凄い人だと言うことは伝わったと思うが、世の中そういう人ばかりでもない。彼女はきつと芸能界、それも世界で昇り詰めることができるだろう逸材だ（とオレは勝手に思ってる）。そのうち芸能界デビューとかするんじゃないだろうか（と思っている）。他の女性を見て、明日香さんと比べてしまうような矮小な人間にはなりたくない。今のところなっていないと思うが、気を付けるべきだろう。ノンデリにはなりたくないだ。

それはそれとして、（この髪型）凄いなあ。オレは彼女に会うたびに敬意を抱いている。講義でオレの視界に彼女の姿が映りこんでいると、どうしても「すげえ縦ロールだ……」と感心してしまう。

時間もかかるだろう。セットのための道具とか、髪や肌の質を維持するための化粧品みたいなのも必要だろう。オレには計り知れぬ努力をしているはずだ。

いやあ、凄い。オレには出来ない。維持する努力と根性、そして決して髪型を変えないという彼女の固い意思に、オレは毎度心の底から

敬意を表する。口に出すと長くなるし重そうなのでやめとくが。

「ど、どうしてそういうところだけ……っ」

「え？　そういうところ？　どういうところ？」

彼女は急に視線を逸らし、俯いてしまった。しかもその肩は小さく震えている。

え？

なに？

オレなにか変なこと言ったかな？

でもオレ、「そう？」としか言っていないんだけど。それ以前は普通だったし。

オレって「そう？」って言葉だけで明日香さんの気持ちをそんなに逆撫でしちゃうような奴なの？

それとも、体調でも悪いのかな？

でもそんないきなり震えだすようなことある？

あるにはあるか……。

「明日香さん、大丈夫？　ちよつと様子が……」

「い、いえ。なんでもありませんの。お気になさらないでくださいまし」

彼女は腕を動かすと、自分の手の甲と指先を掌で覆うようにして、胸の前に置いた。まるで指先の震えを抑え、隠すかのように。そしてぎこちないような、それでいて嘘偽りないと思わせられるような笑みをオレに向けて来る。

「そう……？」

何か隠したいことがあるんだろう。というか、これ以上深入りして欲しくない、みたいな感じかな？

普通に心配だなあ。でも本人が気にするなって言ってるしな……。男気で踏み込んでもいいけど、本当に踏み込んで欲しく無かったら申し訳ないからな。取り返しがつかなくなるこつてあるし。

とりあえず今は様子見して、今後また同じようなことがあったら、でいいか。

「なにか悩みがあるなら相談に乗るよ。オレで良かったら、だけど」

「そ、それは……わたくしを心配してくださっている、と受け取っても……？」

「もちろん」

明日香さんの恐る恐ると言った様子の言葉に、オレはすぐさま頷いた。

明日香さんがそういう確認をわざわざオレにしてくるということは、悩みがあるということ間違いのないだろう。そして、悩みを打ち明けられる人間があまりいない、とも思える。

誰かに縋りたいが、縋れない。信頼したいが、信頼できるかどうかわからない。頼っても良いのか、そうでないのか、悩ましい。オレは敵ではなくとも、寄りかかってもいい味方なのか、判別を付けかねている。そんな感じかな？

なんとなくだが、そういった内心が今の言葉から感じ取れた気がする。

結構重い話だったりするのかな？

何も出来ないかもしれないけど、友人として話し相手くらいにはなれるか。だけでもし、縦ロールの維持が辛いとかなら、オレはどうすればいいんだ……。オレは彼女の縦ロールへの情熱と努力に敬意を表しているが、本心では彼女も縦ロールはもうやめたいなんて思っていたとしたら……。支えるべきか、受け入れるべきか……。

「ふふ」

悩んでいると、目の前の明日香さんから小さく笑い声が零れた。

「雷留様のお気持ち、わたくし、とっても嬉しいですよ」

「オレの気持ち？」

「ええ。雷留様がわたくしを助けたって思ってくださいっていること……わたくしのことをとっても、とおーっても心配してくださいること……わたくし、強く感じましたの。ありがとうございます。でも、ご心配なさららないで？ わたくしに悩みなんてありませんもの」

彼女は嬉しくてたまらない、という感情を、その笑みを使い表情全体で示している。彼女の中にあつた迷いか悩みか、抱えていたものに区切りがついたのかもしれない。

だからオレは小さく息を吐きながら、こう言った。

「そっか。それなら良かった」

オレはほっとした。彼女の表情的にも、？せ我慢とかではなさそう  
だ。

オレがしようもないことで悩んでしまったという事実は今は消し  
去るとして、オレが明日香さんのことを心配している、ということが  
伝わったのは良かった。人間、心配してくれる人が近くにいてこ  
とを感じられれば、勇気とか活力みたいなのが湧いて来るからな。マ  
ジで。そして自分です納得できる答えも出て来るだろう。オレも混  
乱してるときは弁護士先生に助けられたし。

そうであれば、とオレはこう言った。

「さつきも言ったけど、何かあれば相談に乗るからね。それじゃあ、ま  
たね」

「えっ」

「え？」

オレのあつさりとした別れの言葉に、明日香さんはきよとんと瞳を  
丸くした。ハトが豆鉄砲喰らった、みたいなの。なんでそんなに驚いて  
るの。

だって、オレと明日香さんは図書室でたまたま鉢合わせただけだ。  
彼女は図書室に何かしらの用があつてここに来たんだろうが、オレは  
用事を終えて帰るところだった。お悩み相談も無いならここでさよ  
ならするのが自然な流れだと思うんだが。

それともまだ何かあるのかな？

そう思い、オレはこう言った。

「やっぱり、話があるのかな？」

「そ、そうですね。ええ。ええ。そうですね。少し、悩みを聞いて  
いただけたら、と思います」

そう言った彼女の眼が僅かに泳いでいたのをオレは見逃さなかつ  
た、が、自分で「悩みなんてない。大丈夫」と言い切った手前、改め  
てオレに相談を持ち出すのが気まずかったのだろう。オレにも、彼女  
は大丈夫そうに見えたが、実際はそうでなかったらしい。見誤った結



果だが、まあ、まああることだ。ともかく、彼女に「相談するに値する人間」だと思つて貰えたことは、信頼の証として喜ぼう。

「ここじゃなんだから、どこか場所を変えようか」

オレは率先して歩き出した。オレの少し後ろに彼女が続く。図書室を出て、構内を歩く。その途中、オレは後ろにいる彼女に話しかけた。

「隣、歩かないの？」

後ろに付かれると話しづらいので、隣に来るように明日香さんへ伝える。すると明日香さんはこう言った。

「よろしいのですか？」

よろしい、とは一体？

並んで歩くことに良い悪いなんてあるのか？

隣を歩くんじゃないやねえ、なんて100年前の亭主関白な男でさえ言わないと思うんだが。それとも、そういう教育をされてきたのだろうか。男の隣を歩くな、みたいな。

なにそれヤバイ。そんな家こんな時代にあるの？

見た目完全に西洋のお嬢様なのに、間違つた大和撫子育成機関みたいなところで厳しい修業でも受けてたのかな？

そこでオレは気づいた。恐らく、悩みと言うのはそれだ。だから彼女は最初渋つたのだらう。男の隣を歩くな、なんて教育をされるような場所にいたのだとすれば、男に悩み相談なんて出来るはずもない。そんなことはするな、と教わっている可能性もある。だとすればこれは由々しき事態だ。

オレは立ち止まった。彼女もまた立ち止まる。一歩歩く。彼女も一歩歩いた。オレと彼女の距離は変わらない。背中越しにそう感じる。

だからオレは振り向いた。そして彼女を安心させるように微笑み、気持ちを伝えた。

「並んで歩こう。その方が話もしやすいからね。どこに行くかとか、歩きながら決めようよ。明日香さんが嫌じゃなかったらだけどね」

「嫌だなんて、そんなことあるはずがありませんわ」

立ち止まっているオレに、彼女は一步、二歩、三歩と近づいて来る。そしてもう一步を踏み出して、彼女はオレの隣に立った。

オレは思った。

なんか普通に寄って来たな、と。オレの考えが正しければもつと忌避したりすると思うので、どうやらオレの取り越し苦労だったようだ。

にこにこしてオレを見上げて来てるし。ちなみにだが、彼女は女性の中では背が高い方だが、オレは男性の中でも背が高い方である。

何だったんだろう、と思いつつ、まあいいかとオレは進行方向を戻し、歩き始めた。彼女もまた歩き出す。

大学を出たオレだが、オレは大学周辺の地理に詳しくない。オレが大学と家を行き来するのは電車とバスで、バスは駅から大学への直通だからだ。そしてオレは大学から駅の途中でバスを降りたことはない。よって相談を受けるに都合が良さそうな場所も知らなかった。

そこでオレは恥を忍び、明日香さんに質問をした。

「明日香さん、どこか良い場所を知らないかな？ オレはこの辺の地理に疎くて」

「雷留様はバスでの移動でしたものね」

「そうなんだ。それに、オレは外の景色もあまり見ないからね」

「では、携帯電話を？」

「そうだね。ずっと弄ってるかも」

「現代っ子、ですわね」

明日香さんは口元を伸ばした指先で隠しながら笑った。徹底したお嬢様な所作に、感心する。見た目高飛車系だけど、立ち振る舞いは深窓の令嬢って感じた。

「そう言えば、雷留様はお車の免許をお持ちだとお聞きしましたが」

「そうだね。車の免許は持っているよ。持つてるけど……あれ？ それ、明日香さんに言ったかな？」

「……」

明日香さんは微笑みを浮かべたまま黙ってしまった。蠟人形みたいに、表情が微笑みで硬直し動かない。数歩進んでも変わらない笑み

に困惑したオレが立ち止まれば、彼女もまた立ち止まった。やはり微笑みはオレに向けられたまま動いていない。

彼女の頬を一筋の汗が流れた様に見える気がした時、彼女が口を開いた。

「ええ。そうですわ。雷留様が、田辺さんとお話しされていたところをお聞きしてしまいました。申し訳ありません。盗み聞きのような真似になってしまつて」

「ああ、そういうことか。大丈夫。気にしなくても良いよ。そういうことはままあるし」

「ありがとうございますわ」

にこり、と明日香さんが微笑む。

田辺、というのはオレの友人のことだ。初年度で講義を取りまくつて後半は遊ぶという考えから、現在地獄の講義三昧の日々を送っている。今日も朝から晩まで講義のはずだ。それはそれで賢いやり方なのかもしれないと思うが、オレは適度にやりたいので、講義はぼつぼつと取る形にしている。

それは良いとして、話は車の免許についてだったな。話を切つてしまったオレは明日香さんにこう問い返した。

「ごめんね。車の免許の話だったね。それがどうかしたの？」

「はい。お車はお持ちではありませんの？」

「車？ まだ持つてないけど、買おうとは思つてるよ。ただ、気に入つた車が無くてね。高い買い物だし、初めての車だし、ちゃんと吟味したくて。新車にするか、中古にするか……軽自動車か普通車か、それもまだ決められてないんだ」

「どのようなお車にしたいか、などもっ…」

「そーだねえ。四角いのが良いかなつてのは、漠然と思つてるよ」

「角ばつたお車がお好みですか？」

「カッコいいかなつて」

「角ばつたもの……。では、色はいかがでしょう？ 赤や青、黄色などお好きな色はありますか？」

「好きな色、か。特にこの色が良いつてのは無いんだけど」

「好きな色は無い……。では、赤と緑でしたら？」

「この子なんかやけに質問してくるな、と思いつつ、何か意味があったことだろうと考えて、オレは話を続けることにする。もしかしたら相談するにあたってオレの人となりみたいなのを探る、最終段階かもしれないし。」

「どっちでもいいんだけど……赤と緑なら、緑かな」

「では、赤と青でしたら？」

「うーん……。青？」

「では、青と緑でしたら？」

「あー……。難しいな」

「では、雷留様。今日の空は快晴ですが、今日の空は雷留様にとってどのように映りますか？」

「空？ 綺麗だなんて思うよ」

「でしたら、雷留様はいわゆる空色、がお好きなのもかもしれませんわね」

「そう言われたらそうかも」

明日香さんのなんかの心理クイズだったのかな？

明日香さんにそう言われると、妙に納得してしまった。

「四角くて空色のお車、まずはそれで探してみませんか？」

「そうだね。車と電車の乗り継ぎも疲れるし、いいかもしれない。ありがとう、明日香さん」

「そんな。わたくし、雷留様のお役に立てとても嬉しいですわ！」

オレはちよつと嬉しくなって明日香さんに微笑みかけた。明日香さんも嬉しそうにはにかんでいる。

そうしてオレがどんな車を買いたいか、という話を掘り下げていくうちに、気づけば駅が目前に迫っていた。

まずい、とオレは思った。明日香さんの相談に乗るはずだったのに、いつの間にかオレの車選びの相談になってしまったのだ。

言い訳をさせて貰えば、オレは話の途中でちよくちよく明日香さんの悩み相談に話を持って行こうと、話題を変えるための言葉は発した。だが明日香さんはそれを退けて、オレの車の話に戻ってくる

のだ。そうしているうちにここまで来てしまった。歩いたのは1時間と少しくらいだと思う。

だが相談に乗ると言って遂行できなかったのは事実であり、オレは明日香さんに気持ちを伝えた。

「ごめんね。悩み相談に乗るって言ったのに、ここまで結局歩いて来ちゃった」

「そんな。謝らないでくださいまし。わたくし、雷留様とのお散歩、とても楽しかったですわ」

「そう？　でも、どうしようか。この辺でもよければ、今から話を聞くけど……それとも……」

「あー！　わたくし、思い出しましたわ！　南口を少し行った先に、おしやれなカフェを見掛けましたの。雷留様さえよろしければ、そちらに行きませんか？」

「カフェ？　良いの？　周りに聞かれちゃうってこともあるかもしれないよ？」

「大丈夫ですわ」

大丈夫なんだ。実は大した悩みじゃないのかな？

ともかく、今度は明日香さんに先に行って貰い、オレは付いていくこととなった。

カフェに着くと、明日香さんは勝手知ったるとばかりの足取りで店の最奥までスタスタと歩いて行く。

これ絶対この店の初心者じゃねえだろ。見掛けました、じゃねえ。この子、通い慣れてやがる。

と思いつつ、オレは彼女に付いて行き、席に座った。

立てかけられたメニューを迷うことなく手に取った明日香さんはオレに二つあるメニューのうち、一つを差し出して来た。それを受け取ったオレはメニューを開き、目を通す。

少ししてオレはメニューを閉じ、元あった場所に戻した。明日香さんも同じタイミングでメニューを戻したため、オレは一声かけて呼び鈴を鳴らした。なんとも耳心地のよい音色であった。

すぐに来た店員に、オレはこう言った。

「アイスコーヒーと、モンブランを」

「わたくしも同じものを」

かしこまりました、と店員は行儀よく丁寧に頭を下げて去って行く。

「同じものなんて奇遇だね」

「ほんとう。奇遇ですわね」

奇遇だ。

明日香さんは微笑んでいる。雅だ。

が、お悩み相談が本題である。少し待って注文品が届いてから、オレは明日香さんに問いかけた。

「それで、明日香さんは何を悩んでいるの？」

「実は……わたくし、皆さまよりも年が上なのです」

なるほど、とオレは頷いた。明日香さんは浪人生だったか。

だが気にするほどのことかな。大学生ってそんなもんじゃないのか？

しかし女性ならではの悩みということかもしれない。失礼を断って明日香さんに聞いてみれば、現役合格の人達よりも一年上というだけだった。

なんならオレなんてダブリどころかトリプルなんだけど。一応だが、安心させるためにオレはその事実を明日香さんに伝えると、明日香さんはそのことは知っていたと答えた。

「実は、それで雷留様に興味が湧きました……」

「うーん。オレがみんなより2つ年上ってことを知って気になったってこと？」

「はい……」

明日香さんが申し訳なさそうな表情をしている。何故そんな表情を浮かべるのか疑問だ。

確かに、彼女とオレの接触は大学に入学して数日、どんな講義を取るか悩んでいる際に、彼女の方から話しかけてきたのが始まりだった。そのとき、既にオレが年上だと知っていたのだろう。別に隠してもいなかったし、友人の田辺とそう言う話をしたこともあるので、例

によって聞こえていたのかもしれない。

「なるほどね。それで、同じ悩みを抱えているかもしれないオレに、その悩みを打ち明けてみよう、と思っただけだね？」

「そういうこと、ですわね……」

彼女はやはりどこか申し訳なさそうにしている。

よく分からないが、不安の表れなのかもしれない。だとしたらオレが伝えるべきことはこうだろう。

「オレは別に歳が上つてことに負い目なんてないし……明日香さんも気にしなくていいんじゃないかな？　大学もそうだけど、学ぶことに年齢なんて関係ないよ」

「そうですね。わたくし、気にしないことにいたしますわ。雷留様、ありがとうございます。わたくしスッキリしましたわ」

明日香さんは快活な笑みを浮かべた。

なんか思ったより呆気なく悩みが解決したような……。

拍子抜けだが、良いことではある。よかったよかった。

「役に立てたみたいだね。良かったよ」

「はい。重ね重ね、ありがとうございます」

明日香さんは小さく頭を下げた。上下する縦ロールが気になって  
いるオレに、明日香さんはこう言った。

「あの雷留様、よろしければ今日のお礼を差し上げたくて。次の日曜日、よければ雷留様のお時間をわたくしにいただけませんか？」

「日曜日？　特に用事もないし、構わないよ。けど、お礼なんて別に良いよ。オレは何もしてないし」

実際、オレは何もしてない。本当に。謙遜でもなく。だって「気にしなくていいんじゃない？」って言ったただけだし。しかし明日香さんは納得できない様子で、強めの語気でこう言った。

「わたくしは気にしますわ。雷留様。わたくしを恩義に報いない女にするおつもりですか？　雷留様。わたくしを助けると思って……」

「そこまで重く考えなくてもいいんじゃないかな？」

「……読めない」

明日香さんが小さく何かを呟いた。聞き取れず、問いかけ直した才

レに、明日香さんは首を振って「なんでもありませんわ」と小さく答えた。そして不安げにこう続けた。

「ご迷惑、でしょうか？　そうでしたら、わたくしも……」

尻すぼみに言葉を途絶えさせた彼女の様子を見て、オレも何故か悪いことをしている気になって来る。根負けしたオレは、実際嫌と言うわけではないので、了承を伝える。そうすると、彼女は満面の笑みを浮かべて喜んだのだ。

だが、突如として彼女の表情が強張り、眉間にしわが寄った。こんな明日香さんの姿は初めて見たので、オレは首を傾げた。

「どうしたの？」

「いえ……」

オレの問いかけに対して、明日香さんは意識の浮ついたような返事をした。目線はオレではなく、オレの後ろの方、店の入り口へと向いている。オレは身を捻って後方へと体を向ける。黒い服の男たちがこちらへ向かって来ているところであった。

オレはこう思った。

ええ、なにあのシークレットサービスみたいな連中。

確かに来店あるいは退店を告げる鈴の音が鳴ってはいたが……。あの黒服、もしかして明日香さんのボディガードとかかな？

在りえる。この子めちやくちやいとところのお嬢様って感じだし。

なんだろう。この非日常が始まった感じ。既視感があると言うか……。少しばかりオレの精神の高揚が始まったのを感じる。

ずかずかと連なり近寄って来た黒服の男達が、オレ達の傍で立ち止まる。そして規則正しい動きで、入り口からオレ達の傍まで一列に横並びになった。

オレは困惑した。

なんだ。何が始まるんだ。

想像できることと言えば……。例えば赤い絨毯でも転がして敷き、明日香さんにお迎えに上がりました、なんて言ったりするとか？

からんからん、と再び誰からの来店を告げる鈴の音が鳴る。オレが視線を向けると、何やら着飾った若い男と、明日香さんに勝るとも劣



らない綺麗なドレスを着た女が腕を組んで入店して来たのが見えた。そしてこちらへと歩いて来る。さすがに赤い絨毯は無かったか。

腕を組んだ男女はオレ達の傍で止まると、オレを一瞥した後、目を細めた。見下すような嘲笑を向けられて気分が悪い。男女はすぐにオレから視線を外した。興味無さそうに、あるいはいないものとして扱うかのようにだ。そして今度は明日香さんを見つめる。

座っている明日香さんは静かに男女を見上げて、こう言った。

「わたくし、今忙しいんですの。後にしてくださいさらない？」

この男女はやっぱりというか、明日香さんの知り合いらしかった。まあ見た目御曹司とどこぞの令嬢っぽい組み合わせだ。明日香さんの知り合いじゃないわけがないだろう。これで全くの他人だったら逆に面白い。

男女は愉悦を滲ませた嘲笑を浮かべ、見下すような視線を明日香さんに向けて、こう言った。

「明日香。君の素行不良は目に余る。よって、君との婚約を破棄することにした」

「あら、まあ」

明日香さんはわざとらしく驚いた様子を見せ、口元を指先で覆った。

「では、そちらの方と婚約を？」

明日香さんはどこか楽し気だ。しかし苛立たしげでもある。男女のうち、女性には憐れみを、男性には苛立ちを向けているようだ。

どうしたものか、とオレが男女と明日香さんの間で視線を彷徨わせる中、男はこう言った。

「そうだ。彼女は素質が高く、気立ても良い。君のような下劣な女とは違ってね。君はぼくの好みの格好もしないし、ぼくの神経を逆なでばかりする。そんな君を反省させるため、父上に君を下界へと追放させたが……他に男を作ろうとは、とんだ阿婆擦れだ。君は不快だよ。とてつもなくね。よって、君をこのまま下界へ永久追放することとした」

御曹司君が言った。それに続けて、お嬢様が口を開く。

「あなたのような出来損ないは不要と言うことよ。わたしが、彼の妻になるの。阿婆擦れは消えてくれるかしら？」

明日香さんへの心の無い煽り。腹が立つな。  
同時にオレは思った。

——あ、悪役令嬢追放もの、だと……？

驚いた。魔法少女、かと思えば、現代バトルファンタジーモノだったはずだ。しかしここにきてこの展開は、間違いなく何らかの物語と考えて間違いないはず。だとすれば一体これは……。あの黒髪の女と黒竜の一件にどう繋がる？

気になる言葉もあった。下界、素質。なんだ？ 明日香さんは確かにきれいな人だが、まさか天界の天女とかそういうのだったりするの  
か？

それとも、あれはやはり白昼夢で……。茶々ちゃんと明日香さんが本筋だとすれば……。どうだ？

いや、魔法少女と悪役令嬢追放系が重なり合うヴィジョンが……。  
気づけば、店内がざわついている。他の客や店員が注目している。  
良い見世物のようだ。実際、この男女は見世物にすることで明日香さん  
を辱めようとしているのかもしれない。  
……。

ところで、オレはどんな立ち位置なんだ……？

婚約破棄の理由にするための間男……？

ここにオレを連れて来たのは明日香さんだから、つまり明日香さん  
に利用されたということだろうか？

それは別にいいけど……。なんというか、後日この御曹司君に闇討  
ちとかされないだろうか。

「ういふふ」

突然聞こえた鈴の音のような笑い声は、明日香さんのものだった。  
意識を戻されたオレは明日香さんへと視線を向ける。

「よろしいのですか？ わたくしは構いませんが、きつと後悔なさる  
と思いますわよ？」

「後悔？ 後悔があるとすれば、君のような阿婆擦れが僕の婚約者

だったという汚点だけだ。だがそれも、君を追放すれば、無かったことになる」

「そうですか。それは良かったですわ。では、よい最期をお迎えくださいませ」

明日香さんは自分の顔の前で両手の指を絡め合わせると、小首を傾げ、にこりと微笑んだ。御曹司君の顔が分かりやすく怒りに染まる。「本当に、腹立たしい女だ。おぞましい売女め。我らの恥さらしもないところだ」

御曹司が吐き捨てるように言った。

さすがにオレも黙ってはられない。オレは立ち上がった。友人を目の前でここまでコケにされて、黙っていることは出来ない。あとからオレが「うーん、あのとき知らんぷりしてたのさすがに薄情過ぎるよなあ」と後悔するからだ。

だからオレは御曹司を見つめて、こう言った。

「君はとて失礼な人だね。歪んでいて、醜悪だ」

「なんだと?」

御曹司が不快気に表情を歪め、オレへと視線を寄越す。

「目障りだ。消えろ」

「彼女に謝るんだ。彼女を傷つけるようなことを言ったことをね。オレも友人を目の前で侮辱されて、とても不快にさせられた」

「……なんだと?」

御曹司は驚いたように言葉を零しながらオレを見て、こう続けた。

「もう一度命ずる。消えろ」

「君が彼女に謝ってくれたならそうするよ」

オレがそう言うと、御曹司は戸惑ったように視線を揺らしている。なんか最近こんな感じのやり取りをどこかでしたような気がする。

「……バカな。下界の者が何故オレに……」

御曹司は恐怖すら感じている様子で僅かに後ずさろうとするが、女と腕を組んでいるためにその場にとどまった。御曹司の喉奥から、と小さく苦悶の音が零れた。

「いや、そうか、下界だからか。だとすれば……っ!!」

御曹司は怒っている。普段からおべっかを使われて担がれて生きて来たのだろうか。齒向かってくる存在が許せない様子だ。

気になるワードは多々あるが、見た目的にも確信を持てるのは、こいつが金持ちだということだ。金持ちを敵に回すのも面倒くさいが、オレには別に守るべきものなんてないので、問題はない。

御曹司は令嬢の腕を弾き、突き飛ばした。令嬢が小さく悲鳴を上げる。野蛮だなあ。

御曹司は赤色に染まり始めた瞳でオレを睨みつけて来る。オレもまた、睨みはしないものの、御曹司をじつと見つめ返した。

……ところで、赤色に染まり始めた瞳って何？ さっきまで明日香さんと同じように薄い茶色っぽかったよね？ 急に色が変わるカラコンなんてあるの？

自問自答だが、オレはこう答える。

そんなカラコンがあるわけがない。いや、あるかもしれないが、これはそうじゃないだろうということは分かる。

『下界』だの『追放』だの、今日日どんな金持ちでも言わないようなワードだろう。繋げ合わせれば、自ずと答えは見えて来る、気がする。彼らは天上に住まう天使、とかそういう感じの存在なのかもしれない。神じゃないだろうなと言うのは分かる。何故なら神々しくないからだ。だが、それなりにやんごとなき存在のような気はする。

そんな人？相手に齒向かって、オレはこの後どうなってしまおう。別に後悔はないが……。まあ、なるようになるか。しようがない。

御曹司の瞳が深紅に染まり切り、妖しい輝きを放ち始める。

なんか不穏な感じになって来たな……。とんでもないことが起きそうな予感がする。

オレはただ謝って欲しいだけで、御曹司と口論たをする気なんて全然無いんだけど……。喧嘩とか苦手だし。

けど……アレはあまりにも酷い言葉の羅列だった。あんなものを叩きつけられた明日香さんの心は、どれだけ傷ついただろう。それを思うと、オレはとても胸が痛い。今は事なかれと見過ごして、後で

明日香さんを慰めたりフオローするという手もあるだろうけど、オレはやっぱり、居ても立ってもいられなかつた。何故かと言えば、御曹司にも言ったことだが、オレも十分に不快な思いをしたからだ。

ようこそ、とオレを抱擁しようとする非日常のかいな、その気配を感じる。

しかしそれは、とんとん、と突然響いた軽く乾いた音によって、霧散した。

オレと御曹司が音の方を見れば、明日香さんがテーブルを指先で叩いている。視線を集めた明日香さんは御曹司の方へ細めた視線を向けて、こう言った。

「それ以上はおやめなさいな。ここでのそれは禁じられているはずですわよ。お叱りを受けるものではありませんこと？ あなたは未だ、次期でしかないのですから」

「貴様ア!!」

明日香さんの言葉に、御曹司は顔を真っ赤にする。効いてるなあ……。

しかし強く握った握り拳を震えさせながらも、御曹司はオレ達に背を向けた。叱られるのが嫌だったらしい。現在の感情よりも、何やら知らないが定められた規則みたいなものを優先したようだ。

御曹司が大きな歩幅で乱暴に歩き出した時、明日香さんは御曹司の背中に声を掛けた。

「よろしいのですか？ 多くの方に見られましたか」

「どこまでも……ツ!! 父よ、約定に従い使用する! ——忘れろ!!」

明日香さんの言葉を聞いて、御曹司は苛立たし気に怒鳴り、店から出て行った。続いて、令嬢と黒服が続く。

最後の黒服が出て行ったと思ったら、店内は何も無かつたかのよう  
に元に戻った。こちらを見る人もいないし、店員も普通に業務に戻っ  
ている。

「なんだったの今の？」

謝って貰いたかつたが、まあ退散させたということでもとりあえずは

良しとしておこうと思う。

仕方なく座り直したオレは、明日香さんの方へと向き直り訊ねた。明日香さんに気持ちを吐き出して貰い、少しでも心を軽くしてもらいきっかけになれば、と思った。

しかし明日香さんは哀し気な瞳を空色に染めながら、こう言った。「……雷留様。本当に申し訳ありませんでした。そして、ありがとうございます。もう会うことはございません。どうか、お忘れくださいませ」

意味が分からない。迷惑をかけてしまったので、これ以上迷惑を掛ける前に姿を消します、ということかな？

いや、それはあまりに……なんというか友達甲斐が無いというか、寂しい選択ではないかな？

呆然とするオレをそのままに、明日香さんは立ち上がった。そしてオレの隣を通り過ぎる際に、小さくこう言い残した。

「さようなら……」

鈴の音が聞こえる。明日香さんは退店したようだ。

小さくなつていく鈴の音を聞きながら、オレはこう呟いた。

「何だったの今の……」

残された二人分の伝票が、オレの財布を軽くした。

ヤンキー？

翌日、オレは明日香さんを探し、大学の構内をウロウロと歩き回っていた。お茶代を請求するため、ではない。金銭的なことは、たとえ友人関係であっても、いや友人関係だからこそ有耶無耶にすることはよろしくないことだと思っているが、昨日は状況が状況だったので仕方ないだろう。お金の話はまた後日にちゃんとするとして、明日香さんのことを心配していた。

あのとき明日香さんは気丈に振舞っていたが、きつと傷ついていたはずだ。彼らの話を鵜？みにするならば、あの御曹司は明日香さんの婚約者だった男ということになる。仮にも婚約者からあんな侮辱を受けて平静でいられるはずもない。

色々と疑問に思うところはある。あの御曹司たちが現れたのは、何故あのタイミングだったのか。下界やらのワード、瞳の色の変化などがそれだ。だが、それは二の次だ。あのときに御曹司にも言ったことだが、オレは友人を侮辱されて不愉快だったし、侮辱された本人である明日香さんの心が心配だった。

疑問はある。気になることはある。正直なところ、気になってしかたがない。だが、オレはそれを、「それはそれ」として心の片隅に格納することができるだけの自制心があつた。

だが、どれだけ大学の構内を探しても、明日香さんの姿は無かった。田辺に明日香さんの姿を見ていないかと尋ねると、明日香さんは数日前から休学しており、大学では姿を見ていないと言う。そのとき、なんとなくだが、田辺が虚ろな表情をしていて、声音にも力が無いような感じがしたが、多量の講義を受けている弊害だろうと思ひ、微糖の缶コーヒーを奢っておいた。オレの好みである。

しかし、どういうことだ？

昨日、いたよね……？

いやでも、昨日は図書室で会っただけで、彼女が講義を受けている姿は見えない。オレに用があつてわざわざ休学した大学の、それも図書室にまで来たのか？

何の用で？

そう思うと、そもそも彼女は何か用があつて図書室に来たはずなのに、入つて来て早々オレと一緒に出て行つた。

何の用だったんだ。悩み相談はオレ側から提案したことだし……なんだつたんだらう……。

あの御曹司は下界だのなんだの言つてたし、しかも眼が写○眼みたいに変色してたし、なにか特別な力が働いて……。現実とか認識の改変とか、そういう系の……。昨日思った通り、やっぱり明日香さんは天界の天女とか天使とか……。じゃあ婚約者つてなんだ。追放とか言つてたが、どこ追放されたんだ……。

これでは講義にも身が入らない。今日は一限から最後まで講義を入れていのに、気づいたら一日が終わつていた。

日も暮れて辺りが暗くなつた頃に講義が終わり、オレは最後に同じ講義を取つていた田辺と並んで大学を出る。田辺は「つかれた」と伸びをしながら、「たまには夕飯を一緒にしないか」とオレに声を掛けてくれた。

明日香さんのこともあつて、気持ちを切り替えたかつたオレは、田辺の誘いに乗ることにした。

共に同じバスに乗つて、いつもの駅に辿り着く。そして田辺に誘われるままに、駅前にあるカラオケ店にオレは足を踏み入れた。オレ達は荷物をソファの上に放り投げて、思い思いの場所に腰を下ろした。二人で使うには、少し大きな部屋だった。

「ライさんつてなんつーかあ？ 落ち着いてつからさあ？ カラオケとかで騒ぐのは嫌いなタイプかと思つてたぜ。断られると思つてたからよく。ダメもとだったんだけど、誘つてみるもんだなあ。」

「歌を歌うのは嫌いじゃないよ。それに、オレは自分が落ち着いてるとは別に思つてない」

「そういうところなんだよなあ。なんつーの？ 年上の余裕つて奴？ 感じちやうよなあ。包容力つて言うの？ なんか何でも受け入れてくれそうな感じ、あるよなあ！」



「そうかな？ でも、褒めてくれてるんなら嬉しいよ。ありがとう。君は愛嬌がある人だね」

「愛嬌？ あんのかなあ？ あ、でも、姉貴は可愛がってくれてると思うんだよなあ。よく遊びにつれてってくれたし？」

「お姉さんがいたんだ。確かに、そんな感じがするかも」

「そんな感じって、どんな感じ？」

「愛嬌があるってことだよ」

「そっか」

田辺は気の抜けたような喋り方をする隙だらけといった感じの男だが、これで多くの講義を上位の成績で履修している優等生でもある。友達も多いようで、男女問わず、彼の周りに人は絶えない。だからこそ、オレは気になって訊ねた。

「どうしてオレを誘ってくれたの？」

「ん〜。ライさんと帰る時間被るのって週一回だしさあ。しかも一緒に大学出るなんて久しぶりじゃん？ だからこのチャンスは無駄に出来ないって感じで？ ライさんっていつも気づいたらいなくなってるしさあ。結構前からこの時間に誘おうと思ってただけどさあ。いつもこの時間、講義終わったらライさんすぐいなくなってる気イすんだよなあ」

「そんな足早に帰ってるつもりはないけど……。田辺がそう言うなら、そんなのかもね」

そんな他愛もない話をしながら、デンモクを使って歌いたい曲を探していく。田辺はアレがいい、これもいい、と一曲目に歌う曲を何にするか迷っているようだ。優柔不断なようである。

オレは一言断ってから、一曲目を送信した。流れ出すのは、落ち着いた感じのアニソン、そのイントロだ。それを聞いた田辺はぱつとデンモクから顔をあげて、笑った。

「その曲知ってんぜ〜！ ライさんってアニソン聞くんだなあ。意外だなあ！ オペラとか聞いてるんだと思ってたからよお〜！」

「オペラって……。仮に聞いていても、カラオケでそれは歌わないよ」

田辺の言葉に、オレは噴き出してしまった。これが『天然』という

ものだろうか？

オレが一曲歌った後、田辺はオレの歌を褒めてくれた。興奮した様子で、上手だと一生懸命に伝えてくれる。

田辺は裏表がなくて、曝け出した一面は人懐っこい善良なものだ。意図してかは分らないがユーモアもあり、雰囲気も柔らかく人を和ませるものだ。彼を慕う人が多いのも理解できる。改めて友人になれた感謝を伝えるべく、オレは田辺にこう言った。

「田辺。君はやっぱり愛嬌があるね。人を穏やかな心にさせる才能もある。間違いなく、君の美徳だよ」

「な、なんだよお。そんな褒めんなってライさんよ」

田辺がはにかんで頭を掻いた。一応断っておくが、田辺は坊主頭のマッチョマンである。筋トレを日課にしている、家に筋トレマシーンをいくつか購入している程の筋金入りだ。だからこそそのギャップもあって、人を惹き付けるのかもしれない。

「あ、オレこれにしよかな」

田辺がデンモクから歌う曲を送信した。片思いを歌った、切ないラブソングだ。オレは思わず目を瞬かせてしまった。

「意外だね」

「あ、ライさん今見た目で判断したろお？ ダメだぜそういうのはよお」

「はは。ごめんね」

「いいけどよお」

田辺はそう言いながら、歌い始めた。ビブラートが凄い。声も高い音域も出ている。結果、採点はオレよりも上だった。

「凄い特技だね。歌手になれそうだけど」

「ん。そんなうまいわけじゃねえと思うんだけどなあ。気持ち込めて歌ったからかなあ？」

「気持ちを？ もしかして、誰かに片思いをしているの？」

「……」

田辺は少し切なそうにはにかんで、マイクをテーブルの上に置いて、ソファに腰を下ろした。

「ごめんね。もしかして、触れて欲しくないところだった？」

「いやあく謝んねえでくれよ、ライさん。話の流れ的にそうなっちゃまうのはしょうがねえよ」

田辺は苦笑している。

急に空気が重くなったなど、オレは思った。場を和ませようとして  
いる田辺の笑みが、逆にその悩みの深刻さを物語っているようであ  
る。オレは心配になり、こう言った。

「よければ相談に乗るよ？ もつとも、オレはこの年まで恋愛をした  
ことがないから、役に立つかは分からないけど」

「ん〜」

オレの言葉に、田辺は悩むように唸り始めたが、少ししてあっけら  
かんと笑い、こう言った。

「今はいいや」

「そっか。いつでも頼ってくれていいからね」

「ありがとよお〜。やっぱライさんは包容力あんなあ〜」

オレは田辺に微笑みかけたが、それ以上は追求しなかった。田辺も  
また、その話題を以後口にしなかった。その後も田辺の歌には気持ち  
が乗っていたが、ラブソングを歌うことは無く、まるで鬱屈した感情  
を発散するかのようになり、ロックな曲ばかりを歌っていた。

興が乗ったオレ達は、二人で終電直前まで歌い続けた。田辺は  
『オール』、つまり徹夜でのカラオケ続行を希望したが、オレはそれを  
丁重に断り、帰宅する選択をした。特に理由はないが、しいて言うな  
らば気が乗らなかつたからだ。歌うことは嫌いではないが、徹夜して  
するほどでもない。酷く残念がる田辺に対して、オレは苦笑しつつこ  
う言った。

「また来よう。誘ってくれれば喜んで付き合うよ」

「ライさん、また付き合ってくれんのか？」

「うん」

「やったぜ〜！」

オレが答えると、田辺は分かりやすく嬉しそうな表情を浮かべた。  
本当に裏表がない。感情がすぐに顔に出るタイプだ。しかも根が善

良なのだろう。田辺との付き合いは大学に入ってからだだが、人を不快にさせるような悪感情を田辺がその表情に浮かべているところを見たことが無い。たまに「薄情者〜！」なんて恨みがましい言葉を、講義が終わったので颯爽と帰ろうとするオレに対して投げかけて来るときもあるが、当然本気ではない。顔が笑っているし、そんな彼を見た周りの友人たちは「あんたホントにライさん好きだね〜。大型犬みたいじゃん」などと揶揄って遊んでいたりする。そんなやり取りを外野を交えてできる程に、田辺の雰囲気は優しく人懐っこく、その懐は開かれているのである。

喜んでいる田辺は続けてこう言った。

「ボウリングとかも良いのかあ〜？」

「いいよ。経験はあまり無いけど、田辺となら楽しそうだ」

「お〜！ 楽しみだなあ〜！」

オレは田辺とボウリングで勝負する光景を想像し、笑った。

オレが勝とうが田辺が勝とうが、田辺は飼い主が帰って来た犬の様に大騒ぎをするだろう。全力で楽しむ姿が目につかぶ。先ほど田辺には姉がいると聞いたとき、オレは「それっぽい」という感想を抱いたが、まさに弟みたいなやつだ。これは田辺の姉も、田辺に構うのは楽しいだろう。

オレとしても楽しい時間だったが、退室の時間が来てしまった。オレ達は店を出て、駅へ向かう。その道中でも取り留めのない話をしながら駅に辿り着いたオレ達はそこで別れ、別々の帰路に就いた。その後、一人終電に揺られ、東堂家の最寄りの駅にて降りたオレは、ゆくりと歩みを進めた。

田辺と二人で遊んだのは初めてだが、楽しかった。彼を中心とした友人たちの輪もまた、きつと楽しいものに違いないだろう。

そんなほんわかとしたオレの心は、帰路の途中で鳴り響く騒音によつてしぼんでいった。

オレがこの時間に外を出歩くことは稀だが、それにしても、今日はやけに騒がしい。大通りを歩くオレの隣を走る車道には、先ほどから何台ものバイクが往復しているのだ。騒がしさの原因は、蛇行運転を

繰り返すバイクの群れが放つ排気音だった。テールランプが帯となり、まるで一つの生き物のように揺れている。バイクは大小様々で、ハンドルが厳ついものになっていたり、後方の部分が肥大化していたりと、いわゆる改造車であることは明白である。暴走族だろうか？

いわゆる特攻服のような衣装を身に纏い、時代錯誤に感じなくもない髪型をした女性たちが運転しているところを見るに、暴走族でもレディースと言われる人達だろう。近所迷惑な話である。

「危ないなあ。それに煩い」

オレはこの騒音から逃れるために、いつもより早い場所で道をそれ、裏道を通って帰ることにした。煌びやかな大通りとは異なり、電灯も満足に整備されていない道だ。暗く静かな道のはずだが、遠くにはやはり騒音は聞こえている。せつかくの楽しい時間の思い出が台無しである。

落胆を感じながら歩いていると、バイクの騒音に交じって唸り声のようなものが聞こえた気がした。オレは立ち止まり、音のした方へと視線を向ける。そこには個人が経営している小さな自動車工場があつて、暗闇の中目を凝らすと、その工場の壁に何か影のようなものが寄りかかるようにして蹲っているのが見えた。気になったオレは、ゆっくりとそちらへと近づいていく。

「ちツ……見つかったか……」

豊富な胸をサラシで覆い、素肌に血と土埃で汚れた白い特攻服を身に纏った少女が工場の壁を背にして座り込み、オレを鋭く睨みつけている。少女は長い長髪にパーマを当てていて、傍らに木刀を転がしていた。化粧もとても厚い。明日香さんとは違う方向でも気合が入っていた。平時ならば強気な美人といった風貌であるが、その表情は酷く辛そうに歪んでいて、殴られたのか腫れている。脇腹も痛そうに押さえているところを見るに、どうやら体中に怪我を負っているようだ。心配になったオレは少女に声を掛けた。

「君、大丈夫？ 怪我をしているようだけど、何があつたの？ 救急車を呼ぼうか？」

「救急車だあ？ んなもん呼ぶんじゃねーよ。情けねえ」

オレの問いかけに少女は悪態を吐いて拒絶を示した。しかし殴られたと思しき少女の顔は赤く腫れているのに、全体の顔色は悪く、呼吸も荒かった。放っておいたらこのままここで倒れてしまいそうだ。放つては置けない。心配である。

だがオレは同時にこうも思った。

——昭和のヤンキーもの……？

平聖が終わり、霊和を迎えた今の時代に、こんな気合いの入ったレデイスが存在するのか。警察は何やってんだ警察は。

そんなオレの考えをよそに、少女はオレから逃れるようにオレに背を向け、木刀を力ない所作で拾うと、木刀を支えに、もう一方の手は壁に付けて、よろよろと立ち上がった。しかし足にきているのか、少女は数秒も立位を保ってはいられず、ふらついて倒れそうになる。少女は壁に肩から寄りかかり、気だるそうに俯いている。乱れた髪がセツトされた形から飛び跳ねていた。

状況から考えるに、さっきの暴走族の集団は無関係ではないだろうが……。縄張り争い、いわゆる抗争というやつでもしているんだろうか。

そんなことを考えていると、少女が壁を離れ、一歩、二歩と歩き出した。見かねたオレはこう言った。

「君、動かない方が……」

「うるせえじじい！ 話しかけてんじやねえ!! ……ッ」

オレの声掛けに、少女は怒声を返して来た。しかし少女は自分の大声という、その程度の衝撃でさえ痛みを感じて立ち止まってしまった。それほどに、少女は傷ついているようだ。少女はまた歩き出すが、足取りはおぼつかず、今にも倒れてしまいそうだった。オレは少女に近寄ると、一言断ってから、ふらつく少女の体を抱き留めるように支えた。

「離せやじじい！ 触んじやねえよ痴漢野郎が!!」

「落ち着いて。大丈夫だから」

じじい、と言われるのは少し傷つく。少女の歳の頃は中学生から高校生くらいだろうが、この年頃の少女にとって大学生はもう爺なんだ

ろうか。確かに小学生の時のオレは、大学生をおっさんだと思っ  
た。しかしじじいとまでは……。

そんな考えは速やかに心の片隅に蹴飛ばして、オレは興奮している  
少女を落ち着かせることに努めた。

「大丈夫だよ。何もしないから。落ち着いて」

「してんじゃねえか！ はなしやあ!!」

少女が暴れる。一、二発顔を殴られた。しかしオレは少女を離さな  
かった。何故ならば、少女の足腰に力が入ってないことは、オレに寄  
りかかってきていることから分かったからだ。少女の口と上半身は  
暴れているが、下半身は既に脱力してしまっているのだ。オレが手を  
離せば、少女は固いコンクリートの地面に倒れてしまうだろう。少女  
もそれは分かっているはずだが、暴れるのを止めようとはしなかつ  
た。少女はまるで傷ついた野良犬のように、オレに弱みを見せまいと  
しているのだ。少女を案じている旨を伝えるオレに、少女は強い言葉  
で威嚇し続けた。

「うるせえんだよ！ きめえなてめえ!! 死ねじじい!!」

「危ないよ、そんな怪我で動いたら。痛いんだろう？ 動かない方が  
良い」

オレは思った。このままではオレが逮捕される。少女の言う通り、  
放って帰るのがベストなんだろう。所詮は他人事であるし、不良な少  
女の自業自得のような状況にしか見えず、わざわざ関わる理由もな  
い。少女は続ける。

「てめえにや関係ねえだろうがじじい!! きえろや!」

いつもなら遺憾の意と共に不快感を示すところだが、今の少女は興  
奮していて、錯乱状態にある。それを咎めることはオレには出来な  
かった。少女は今、周り全てを敵だと認識しているのだ。味方がいる  
のだと言う認識を持つことすらできない恐慌状態にあるとも言える。  
だからオレはオレの考えを伝えるべく、こう言った。

「確かに、オレと君に交友関係はない。君が大人なら、警察だけを呼ん  
ですぐに帰るよ。でも、君はまだ子供だ。子供が傷ついているのを見  
て助けない大人なんていないよ」

「っ、っごども……?」

急に少女が大人しくなった。オレは少女の表情を見る。腫れあがった目元や頬が痛々しい。可哀そうだ。少女は殴られて腫れた瞼の奥にある瞳を丸くしてオレを見つめていた。

ようやく会話が出来そうだと少し安堵したオレはこう言った。

「そうだよ。君、まだ高校生くらいだろう? オレからしたらまだ子供だ。だから心配なんだよ。君が大人でも当然心配はするけど、子供ならなおさらだ。こんな夜中に、人気の無い道で座り込んで怪我をしてるなんて、君本人に何を言われても、放つては置けないよ」

「子ども扱いしてんじやねえよ……」

何か思うところがあつたのか悪態を吐く少女だが、その言葉は弱弱しい。内心は分からないが、少女を不快にさせたようで、オレは謝罪の言葉を口にする選択をする。何故ならこの年頃の青少年の心は複雑だからだ。やっと会話ができるようになったのに、下手に精神を逆なでして元の木阿弥になるのは憚られる。

「気に障ったなら謝るよ、ごめんね。君の意思を尊重して、今は警察も救急車も呼ばないことを約束する。だからまずは場所を変えよう。本当は今ここで、君に何があつたのかを詳しく話して欲しいんだけど、オレの予想があつてるなら、喧嘩とかに巻き込まれたんじゃないか? 大通りの暴走族がもし君を探しているなら、ここに居るのはあまり得策では無いよね?」

オレは穏やかな声を意識し、ゆっくりと少女に話しかける。それは人を落ち着かせる効果があるからだ。少女は考えるように唸ったあと、こう言った。

「……マジで呼ばねえんだな?」

「約束するよ」

少女が言った確認の言葉に、オレは力強く答えゆつくりと頷いた。少女は静かに目を閉じて、大きいため息を吐くと再び瞼を開けた。少女は目を細め、眉根を寄せると、忌々し気に小さくこう呟いた。

「12分後……」

「えっ?」



近くにいたので聞き取れたが、少女は時間を気にしているような言葉の口にした。12分後に何かあるのだろうか？　こんな状況で人と待ち合わせ、なんてことは無いだろう。

オレの疑問を遮るように、少女はこう続けた。

「分かった……。つれてけ。あたしや歩けねえ」

少女の声音は弱弱しいものながらも、その口調は尊大で、頼み事は横柄なものだった。きつとそれは、彼女が彼女自身の心を守るために見せた強がりであり、必要なことだったのだろう。そして同時に、それはオレに見せられる精一杯の弱みでもあつたはずだ。そう捉えたオレはただ「ありがとう」と一言伝えて、彼女に肩を貸して歩き出した。しばらくして、少女がこう切り出した。

「どこ行くんだよ」

「近くにオレの家がある。そこで少し休むといいよ」

「ふん……」

少女は小さく鼻を鳴らした。オレはその所作に、どこか諦念というか、失望のような色を感じ取った。いかがわしいことをするような人間だと思われてるのだろうか？　やっぱりこいつもか、みたいなことを思っただけのような印象を受けた。

先ほどの態度からしても、人を安易に頼れず、信じられず、弱みを見せられない性質なのだと察せられる。だが今の短いやり取りでオレは、彼女が「人を疑う要素」をこそ探してしまう子なのだと感じた。そういった性質を持つ人に多く見られる共通点に、「人を信じることを恐れるあまり、信じずにいられる理由を探す」といったものがある。何か裏切られた、と感じた時、やっぱりそうだった信じてなくてよかった、と心を守るための作用。

それが正しいのだとすれば、この少女は……余程傷ついているらしい。暴行を受け怪我を負っている体もそうだが、心のことだ。考えすぎかもしれないが、もしかすると家庭に問題があるのかもしれない。これは今まで以上に気を遣った方がよさそうだ、とオレは思った。

無言で歩くのも気まずいかと思って、オレは彼女に声を掛けることにした。

「大丈夫かな？ 痛くない？ 歩くペース変えようか？」

「うるせえ。黙って歩けじじい」

あんまりな返答だったが、先ほど考えた通りに気を遣うべく、オレは微笑みを浮かべてこのように答えた。

「そっか。元氣そうで安心したよ」

オレの言葉を聞いて、彼女はバツが悪そうな表情を浮かべた。そして僅かに唇を噛んで、俯いてしまう。

もしかすると、彼女は自分の口が悪いことを気にしているのかもしれない。素直になりたくてもなれず、攻撃的な言動になってしまう人はそれなりにいるものだ。しかしそれは仕方のないことでもある。そうならざるを得ない人生を歩んできたのだろうし、彼女の場合は、今の状況が状況だ。危機的状況にあつて、彼女の心は心身を守るために張り詰めているのだろう。つまり、彼女の「うるせえ。黙って歩けじじい」という言葉は「大丈夫。そのまま」と言い換えることができる、とオレは捉えた。オレは「気にしてないよ」ということを言外に伝え、彼女を安心させるべく、微笑んでこう続けた。

「大丈夫だよ。気にしなくてもいい。分かってるから」

本当はなんにも彼女のことを分かってない可能性は大いにある。オレの推測が的外れで見当違いであり、普通に彼女の性格が悪くて、今オレがしていることに対して「利用してやる」くらいにしか思っていない場合だ。だがまあ、そのときはそのときでいいだろう。明日香さんの時もそうだが、結局のところオレがやりたくてやってることだし。

オレの言葉を聞いて、彼女はびくり、と小さく震えて俯いてしまった。なんだろう、今のは。

怖かったかな？

気持ち悪かったかな？

「あんたは……」

「着いたよ」

彼女の言葉を遮る形になってしまったが、話は後で聞くとして、オレは自宅に着いたことを彼女に伝えた。隣の茶々ちゃんの家は既に

電気が消えている。小学生はとつくにお休みの時間だ。

「結構でけえな……」

「そうだね。一人暮らしには大きすぎるかもしれない。ああ、そうだ。安心して欲しい。今も言ったけど、オレは一人暮らしだから、他に誰もいないよ」

「それ、安心するところじゃねえだろ」

呆れた様におレを見上げて来る彼女に、オレは小首を傾げる。公共機関に知られたくないような事情を抱えているのなら、オレに家族がないことは彼女にとって都合がいいと思っただが。そこまで考えて、一つ思い当たる。彼女は女性だ。年若い女性が一人暮らしの男の家に不本意ながら上がることになって、「安心して」は違ったか。

「そうかもしれない。うーん、なんて言えばいいんだろうね……。警戒はしなくてもいいよ、とか？」

「なんだよそれ。そんな変わってねえだろ。つーかあたしに聞くんじゃねえよじじい」

彼女はそう言つて、小さく笑った。少しだけ緊張が解けたようだ。オレは少し安心して、家の扉を開けた。

玄関に入り、木刀を靴箱に立てかける。そして靴のまま家の中に入った。彼女を降ろす手間を省くためだ。

彼女はオレが自宅に土足で足を踏み入れたことに驚いたようで、目を丸くしてこう言った。

「じじいの家って土足で入る家なん？」

「いや、違うよ」

「じゃあ、なんでじじいは靴履いたままなんだよ」

「君も靴を脱いでないけど……？」

「そういう話をしてんじゃねえんだよクソジジイがよお！」

少女が怒鳴った。時間も時間だし、近所迷惑だ。隣の家には小学生が寝ているし、起こしてしまい、睡眠不足で勉学に差し障る様なことになればご両親に謝らなければならなくなる。オレはそれに関してはこちらと伝えるべきだと思い、真面目な声音で、彼女をこう窘めた。「お隣さんちには小学生の女の子がいるんだ。騒ぐのは止めて欲し

い」

「……け。わーっただよ」

すごく不服そうではあるものの、彼女は了承を示してくれた。ありがとう、と伝えながら洋室に入る。彼女はふん、と鼻を鳴らした。

オレは部屋の電気をつけ、ソファへと歩き出す。そして彼女をソファに降ろした。彼女は力なくソファの背もたれに寄りかかり、大きく息を吐きながら、天井を見上げた。パーマの掛かった長髪がソファの背もたれの向こう側に流れて揺れる。彼女は疲労困憊な様子で、脱力していた。

少しは安心したのかもしれない。

それと、実はこのソファはオレが仕入れたお気に入りの一品で、人をダメにするクッションに勝るとも劣らない座り心地をしている。それに和んだのも多分にあるだろう。

オレはソファに寄りかかって座り、動けないでいる彼女の足元にひざまずき、ちゃんと一言断ってから靴を脱がせた。そして立ち上がり、立った状態で自分の靴も脱ぐ。そしてオレは、指先に自分と彼女の靴を引っかけるように持ち上げて、彼女を見下ろし、こう言った。「靴を履いたまま家に入った理由だけど、君を早く休ませてあげたかったからだよ。ゆっくりしてて。今、救急箱持ってくるからね」

「……っ」

微笑みを彼女に向けた後、オレは振り返って玄関へ向かった。鍵をかけ、チェーンをする。彼女の関係者がこの家に来ることは無いと思うが、一応は念のため。

そして二階に上がり救急箱を持って降りると、彼女はソファで横になり、その心地よさを体全体で感じ取っていた。オレはそれが微笑ましくて小さく笑った。すると彼女は腫れあがった顔を別の理由でほんのりと赤く染めて、睨みつけて来る。怒鳴って来なかったのは、先ほどのオレの頼みを覚えていてくれるからだろう。彼女は代わりに、小さくこう言った。

「……んだよ」

「気持ちいいよね、そのソファ。オレも気に入ってるんだ」

「べつに、んなことねーし」

彼女はオレから顔を背けた。オレは苦笑を浮かべ、彼女の傍に跪き、救急箱の箱を開けた。とはいえ、オレは医療などに詳しいわけじゃない。傷があるところを消毒して、絆創膏やガーゼを貼ったりするくらいしか出来ない。それでもしないよりはマシだろうが、出来るなら病院に行ってほしかった。

「……っ」

傷に染みるのか、時折彼女が身じろぎし小さく息を漏らす。その都度、オレは「がんばろう」と声を掛けた。そして処置が一か所終われば、ねぎらうつもりでその箇所を優しく撫でる。

手足の処置を終えて、オレは彼女に座り直して貰った。背中の処置をするためだ。それを伝えると、彼女は特攻服を脱いでくれて、背中を曝け出した。オレは黙々と背中の処置をする。

「背中、終わったよ。サラシの下は……」

オレは「自分でして」と伝えようとした。さすがにサラシの下と腹部の処置は出来ないかな、と思ったのだ。だが、彼女はおもむろにサラシを解き出したではないか。度胸あるなあ、とオレは思った。

手を止めているオレに、彼女はどこか挑発するような声音でこう言った。

「なんだよ？ どうかしたか？ ん？」

彼女の得意げな声には、オレが照れたり取り乱したりすることを望んでいたことがありありと滲んでいる。だが残念ながら、オレはそういうのには強い。だからオレは自然にこう返した。

「びつくりしちゃったよ」

「ち、つまんねー」

オレが全く動じていないことが分かったのだろう。彼女は小さく悪態を吐くと、鼻を鳴らした。癖なのかな？

背中中の処置を終えて、オレは彼女にこう言った。

「胸部はお願いできるかな？ その間、オレは廊下に出てるから、終わったら言ってね」

「なんだよ？ あたしの胸触りたくねーのか？ 今なら合法的に触れ

るぞ？」

彼女は背中越しにそう言った。

彼女の声音は少し硬かった。今の言葉が本心ではないことは明らかだ。であれば、彼女はオレの反応を試しているのだらうし、だからこそ「乗ってくることを期待しているのだらう。そうすれば、彼女にはオレを「信じない理由」が出来る。

正直、オレとしてはどっちでも良いんだけど……なんか、この子すげえ荒んでるからなあ。

そう思ったオレはこう答えた。

「そんな自分を軽んじるようなこと、言つて欲しくないよ」

「ふん。真面目ぶりやがって。ジジイが。てめえだってホントはそうしたいって思ってたんだらうがよ！」

彼女の言葉からは、彼女の生活歴が少し伺えた。

てめえだって、という言葉はつまり、彼女がそう思ってしまうような目にあつたことが以前にあるということだらう。

オレは男で異性愛者のため、当然、異性に対しての性欲はある。端的な否定には嘘が入ることになるし、彼女はそれをきつと見逃さないだらう。少なくとも、オレはそう思った。

オレに彼女の考えや悩み、苦しみは分からない。下手なことを言うべきではない。ならばいつも通り、オレはオレの気持ちを伝えるしかない。

だが言葉だけでは無意味だともオレは思う。疑心暗鬼が根強く見える彼女が最も欲しているものは、一つ二つの言葉ではなく、言葉に則した行動とそれに伴う結果だ。彼女は言葉ではなく、相手の行動や表情、雰囲気といった、全体を俯瞰して見ている。

「……君は、とても繊細な子だね。いや、そうならざるを得なかった、と言うべきか」

「……。いみわかんねえ」

彼女は力なく呟いた。オレは俯く彼女の隣に救急箱を置き、こう言った。

「前はお願いできるかな？ その間、オレは廊下に出ているから」

彼女の背中越しにそう言った。オレは彼女の返答を待たずに動き出し、廊下に出た。ついでにそのまま歩いてキッチンへ向かう。冷蔵庫を開けてプラスチックのボトルを、棚からコップを取り出して、ケトルに水を汲み電源を入れた。少しして湯が沸き、ボトルの中の液体をコップに注ぎ、さらに湧いた湯を注ぐ。柑橘系の爽やかな香りが湯気と共に昇り、鼻を擽った。お盆の上にコップを乗せ、彼女のいる洋室へと戻る。

扉をノックして、待つ。少しして、彼女の声が聞こえた。

「とつくに終わってるっつーの。いつまでそこにいる気だよジジイ」  
入ってよかったらしい。オレが黙ってても入ってくると思っていた彼女は、いつまで経ってもオレが入ってこないものだから痺れを切らしたようだった。扉を開けて中に入った。サラシを巻きなおし、特攻服を着直した彼女は、訝し気な表情でオレの持つお盆に視線を向けている。

オレは彼女に近づくと、お盆の上のコップを差し出した。彼女はコップとオレを見比べて、こう言った。

「なんだよ」

「ホット檸檬だよ」

「だからなんでそんなもん……」

「オレの好きな飲み物なんだ。君にも飲んでみて欲しくてね。淹れたてであったかいよ。ほっとするんだ」

「湯気昇ってんだから、見りや分かんだよジジイ。っーかほっとするって、ホット檸檬だからってわけじゃねえだろうな」

「え？」

「このクソジジイが。あたしが滑ったみてエンなってるだろうが。てめえのせいだからな！」

「だからあまり大きな声は……」

「うるせえー！」

彼女はオレから引く手順るようにコップを奪い去った。彼女はそれを片手で持ち上げ、呷るように勢いよく飲むようにしていたが、その動きは直前でぴたりと止まった。彼女は両手でコップを持ち直し、

ふー、ふー、と可愛らしく息を吹き、ホット檸檬に向けて風を送り出す。そしてちび、と舐めるようにホット檸檬を口に運んだ。

「どうかな？ サービスで少し濃い目にしておいたんだ」

「うっせえジジイ。なんだよサービスって」

サービスはサービスだ。友人の家で出されたカルピスが濃い目だと嬉しいだろう。そういう小さな幸せの積み重ねが心の安らぎには重要なんだよ。

実際、彼女はオレの言葉にぶつきらぼうに返答したが、僅かに目じりが緩んでいるのが分かる。腫れてはいるが。

彼女がホット檸檬を半分ほど飲み、会ったばかりのときのような興奮状態からは完全に抜け出したことを確認して、オレはこう言った。

「たいへんだったね」

彼女は困惑した様子で、しかし恐る恐ると言った様子にも見える所作で、オレに視線を向けて来た。

処置を行っていて気づいたのだが、小さな傷が多い。それは昨日今日のものばかりではなく、彼女が日常的に傷を負っていることの証明でもあった。虐待されているのか、あるいは喧嘩を毎日のようにしているのか……。やはりどこか役所に相談した方が良いと思う。だけど、約束は約束だ。今その約束を破れば、彼女の間人信が増悪することになりかねない。乗りかかった船だし、最後までしつかりと責任は取ろう。オレは改めて決心した。

「べつに、たいしたことじゃねーよ」

彼女はぷい、と目線を逸らし、吐き捨てるように小さく言った。そしてこう続ける。

「いつもんことだ」

そう言った彼女の言葉にはどこか嫌悪のようなものが滲んでいるように思えた。それはオレへと言うよりは、彼女自身に向けられたもののように感じる。そしてそのことへの疲弊も滲んでいるように思える。

だからオレは彼女にこう返したのだ。

「だろーね。オレはそれを言ったんだよ」



オレの言葉に、彼女はゆつくりとオレに視線を戻す。オレは続けた。

「傷を見たけど、古いものも多かった」

そう言ったオレへ、彼女は咎めるように鋭い視線を刺してくる。

「なんだあ？ てめえも止めろって又カす口かよ？ おあいにく様だがな、あたしや好きでやってんだ。男相手だつてひるみやしねえんだよ」

「勝気そうだもんね」

「はあ？ なんだこのジジイ。意味わかんねーよ」

彼女はオレをバカにするように、呆れたようにそう言って、天を仰いだ。コップを持ったまま手をお手上げ、というように小さく広げたことで、傾いたコップからホット檸檬を零し掛け、慌ててもとに戻している。

「色々、聞きたいことは在るんだけどさ。君、オレにそういうの話したくないでしょ？」

「たりめーだろクソジジイ。なんで見ず知らずのてめーに身の上話しなきゃなんねーんだよ。言つとくけど、これに関してもあたしや感謝なんてしねーからな」

「それは別にいいよ。オレが好きでやったことだから」

「へっ。あーやだやだ。そうやって善人ぶってるやつが、あたしや一番キライなんだよ」

「だろうねえ。そんな気はしてたよ」

オレがそう言うと、彼女は気持ちの悪いものを見るようにオレに視線を向けて、こう言った。

「アンタさあ、なんなんだよ。なにがしてえんだよ。さつきから何も見えねえし」

「見えない？ 何が？ もしかして君、目が……」

「うるせえジジイ。見えてるよ、あっちのカレンダーの祝日の内容もな！」

もしかして目に何か異常が起こっているのかと思って心配したのだが、そうでもないらしい。月末にある、大砲記念日とかいう意味の

分からない祝日を日付ごと読み上げたので間違いないだろう。

気になるが……今は置いておこう。

オレは改めて彼女に向き直り、こう言った。

「君は……体にはたくさん怪我を負って、心にもたくさん傷を負って。きつと、君は凄く頑張つて来たんだろうね」

だからこそ彼女は繊細だった。様々な事象を繊細に捉えなければ、彼女自身を守ることが出来なかったからだ。そしてだからこそ攻撃的だった。そうしなければ繊細になった自分を守ることが出来なかったからだ。内からも外からも、自分にも他人にも攻撃され続けた彼女の心身は酷く傷ついている。今の彼女に必要なものは休息だ。そう思った。

それが正解なのかは分からない。結局オレには、自分の気持ちを伝えることしか出来ないからだ。心が嘘偽りなく伝わるように、言葉を尽くすことしか出来ない。そう言う意味では、言動含めて全身で、かつ自然に自分の感情を伝えられる田辺は凄いと思うが、今は良い。

果たして、オレの言葉を聞いた彼女は息を呑んで動きを止めた。眼球だけが小刻みに動いている。

「だからオレが言いたいのは、今は休んで良いんだよってことかな。オレは、君の敵じゃないからね」

過酷な長い旅をしてきた渡り鳥が少し羽を休めるように、オレを止まり木だとも思っておけばいい。彼女の言動はオレから見ても、痛々しく感じる。

「ど、同情かよ」

俯いた彼女がコップを包む手を震わせながらそう呟いた。オレは彼女の前でしゃがみ、こう言った。

「どうだろう？　ただ、疲れたら休むのは当たり前のことだよ。そうは思わない？　誰だって休む。オレだってそうだ。でも君は若くてエネルギーに溢れてて、休むことに無頓着みたいだから……人生の先輩として少しアドバイスをしたかったんだ。ほら、オレは君の言うようにジジイだからさ。よく聞かないかな？　ジジイは説教が好きなんだよ」

オレは立ち上がり、彼女の頭をぽんぽんと軽く触る。初めて会ってからずっと威嚇し、体を大きく見せていた犬や猫が、小さく丸まったように見えたのだ。

「オレは二階で寝るから、一階は好きに使って良いよ」

そう言い残して、オレは洋室を出た。振り返る直前、彼女の肩が小さく震えているような気がしたが、気のせいということにして、オレは廊下を歩き階段を昇り、その途中で階段を降り、洋室に戻った。

彼女は少し赤らんだ目で、訝し気にオレを見ている。

オレはこう言った。

「寝る前にお風呂入ろうと思ったんだけど、着替えここに置いてたんだ。あ、それ」

「しまらねーんだよジジイ!!」

オレが指さした着替えに彼女は勢いよく手を伸ばし掴み取ると、力一杯オレへ向けて投げ飛ばした。

それを受け取ったオレはシャワーを浴び、寝た。

次の日の朝、オレがいつもより少し遅く起きた時、彼女の姿はもうどこにもなく、ただ味がやけに濃くて、具材がとき卵のみと言う味噌汁だけが、キッチンの上の鍋の中に満たされていた。

後日、この辺の暴走族がひとつ残らず壊滅したという話を町内会の集まりに出席したときに聞いた。たった一人の人間が、しかも無傷で、それをやったのは「金夜叉」と異名を取る金髪の女番長で、「この辺で暴れるんじゃないやねえ!」あの人の睡眠の邪魔になるだろうがよお!!」と叫んで本人が暴れ回っていたとのことだ。

……まあ、いいか。

それとさらに後日、最近この辺で家屋を物色するような動きをしている金髪の不審者を見掛けるので、空き巣などに注意してくださいという回覧板が回って来た。

用があるなら普通に来ればいいものを……。まあ、自意識過剰なだけで本当に不審者の可能性もあるし、戸締りはちゃんとしておこう。

## 魔法少女？ 2

先週から金髪の女不審者の出没情報がたびたび報告されているのだが、そのせいで地域住民の間に不安が広がっているようだ。とりわけ小さな子供のいる家庭ではそれが顕著である。昨今の物騒なニュースも相まって保護者たちの緊張も高まり、遂には緊急の町内会が開かれることになり、オレも諸事情からその集まりに出席することにした。結論から言えば、不審者の目撃情報に焦れた地域住民たちは有志を募り、朝と晩のパトロールが実施されることとなった。オレも自分が無関係だとは思えず、何も用事の無い土日だけではあるものの、パトロールに参加する旨を表明した。

というのも、実はあの夜、あの金髪の女の子は、東堂家の玄関靴箱に立てかけておいた木刀を忘れて帰っているのだ。もしかするとだが、不審者の正体があのヤンキー少女で、彼女は木刀を取りにたびたびこの辺に現れているものの、毎度タイミング悪くオレが不在にしていたために目的を果たせず、周辺をうろついては帰る、ということを繰り返しているんじゃないかと思ったのである。

ただ、少しばかり疑問に思うところもあって、それというのも、木刀が傘立てにささっていたということである。

ヤンキー少女と出会った次の日の朝、妙に味の濃い味噌汁を飲んだ後、外出しようとしたオレは、もう数年も前から使う者がいなくなり埃を被っている傘達と、オレが使用している真新しい傘と一緒に、その木刀が傘立てに突き刺さっているのを発見したのである。しかしあの夜、オレはヤンキー少女の木刀は傘立てに挿したのではなく、靴箱に立てかけたはずだった。当然、あの日は風呂に入っただけに二階にあがって眠ってしまったので、ヤンキー少女の木刀には以後触れていない。だとすれば、傘立てに木刀を差し込んだのはあのヤンキー少女ということになるわけだ。

そのような理由から、オレは『忘れた』という自説に懐疑的でもあった。しかしそうなると、じゃあなんで傘立てに木刀をわざわざ入れてから帰ったのか、という疑念が今度は持ちあがるが……。

考え得る可能性としては、あのヤンキー少女はオレが二階で就寝した後、一度帰ろうとして玄関まで行って木刀を手に取ったが、しかしオレの話を思い出して考え直し、手に取った木刀を手ごろな傘立てに差して再び部屋に戻った、といったところだろうか。わざわざそうしたのは……几帳面だったから、とかかな。自分でもちよつと無理やりな推測だとは思うけど、他に考え付かないので仕方がないだろう。オレとまた話したいというのなら、それはそれで別に受け入れるんだが、それも会えないことにはどうしようもない。

しかし、もしも噂の『金髪の不審者』があの子の子なら、なんとも巡りあわせの悪い。金髪の不審者はたびたび目撃されているが、オレはそれから一度たりともその不審者を見掛けていない。当然ヤンキー少女の姿も見えていない。オレは不審者とヤンキー少女が同一人物かも分からないので、確認をしておきたいという考えもあった。ヤンキー少女だった場合は木刀を返せば事件は終わると思うし、また会いたいというのなら約束を取り付ければいい。不審者の正体がヤンキー少女とは全くの別人だった場合は、パトロールへの参加を継続しながら警察に頼ることになるだろう。

そして今日はオレがパトロールに参加する初日である、土曜日の早朝である。

オレはヤンキー少女と出会った時のために、木刀を持っていくことにしたのだが……。

木刀をむき出しで持ち歩くとオレの方が職務質問を受けかねない。そう考えたオレは、木刀を家に放置されていたテニスのラケットを入れる袋に突っ込み、長さが足りず剥き出しになった柄の方にはバスタオルを巻きつけカモフラージュを施した。そしてそれを背負ったオレはパトロールに参加するために家を出たのである。

そしてオレは今、集合場所である公園にて温まった体を落ち着かせるために、スポーツドリンクを飲んでいたところであった。

もうパトロールが終わった、というわけではない。では何故に体が温まっているのかと言えば、パトロール前にラジオ体操を行うことになったからだ。せつかく早朝に集まるのだからと、町内会の老人たち

が予定に盛り込んだらしい。

いつの間に……オレが参加した集会ではそんな話は……。

と思っていたが、どうやらオレが参加していない平日のパトロールのときの世間話の中できっとんとん拍子に決まったようである。夜はともかく、早朝において小さな子を持つ親世代は仕事やその準備などで忙しいために参加ができず、早寝早起きを心掛ける健康的な老人たちで行わざるを得ない。土日はその限りではないが、既にパトロールを何度か行っている者達の意思決定権が強く、逆らえる者などいなかった。その結果が、朝のラジオ体操習慣の復活だったようだ。

ラジオ体操なんて面倒くさい。

何故ならば、記憶にないほど昔にやったきりで内容など覚えていないからだ。そう思いつつも、集まった老人たちがいやに楽しそうに、和気あいあいとラジオ体操の準備をしているものだから、「君も参加するだろうか？」などと言われてはオレも断れず、しぶしぶ参加することとなった。あまり栄えていない地域であるからか、周辺住民の横のつながりは強く、そのせいかな近所住まいの老人達の中で、東堂家に起きた悲劇を知らない者はいない。前のオレや亡くなった兄弟のことも小さい頃から知っているし、なんなら亡くなった父が電柱に立ち小便をしていた時分から知っているらしい。

パトロールのために集まった人たちの中には、東堂雷留が生まれて少しして亡くなったらしい祖父母と友人だった者もいて、彼らの忘れ形見であるオレを気にかけてくれる者も少なくない。記憶をまっさらにして帰って来たときと伝えた時、老人たちのうちの何人かはその場で泣き崩れるくらいには、東堂家と周辺住民の仲は良好だった。

そんな横のつながりが強い地域ではあるが、それはかえって排他的な団結に繋がりがやすいという弱点もある。共働きの忙しいがゆえに町内会などに中々参加できていない茶都山家がこの地域に馴染んでいる（かは分からないが、特に村八分的な扱いはされていない）理由は、オレが茶々ちゃんと同様と仲良くしている（というかある程度気に掛けている）、というところが大きいだろう。

まだ茶々ちゃんの魔法少女事件が起きる前のある日、オレがコンビ

二に昼飯と飲み物を買って出かけたときのことだ。オレは家を出てすぐ、散歩中の老人の一人に捕まった。その日は特に用事も無かったので立ち話をしていると、何か気配でも感じたのか、一人、二人、と近隣の家から暇をしている老人たちがわらわらと出てきた。

そしていつしか「皆で飯を食おう」という話になって、その場に集まっている老人の一人である、近所で一人暮らしをしているお婆さんの家へ、オレは飲み物を買って行けないまま攫われていった。

しかも「せつかくだから」と出前を取ることとなり、オレは老人たちの奢りで贅沢な昼飯にありつけることとなったのである。飲み物は、家主のお婆さんが紙パックのオレンジジュースとリンゴジュースを用意してくれた。子ども扱いされていると思ったが、リンゴジュースは好きなので何も言わず有難くいただいた。オレが礼を言ったり、リンゴジュースをいただき、更におかわりまですると、御婆さんは何故か嬉しそうに注いでくれた。そんなわけで、その日は昼間から豪華な出前を喰らい、酒を浴びるように飲む老人たちの相手をしていただけが、途中、ひよんなことから、越して来たばかりだった茶都山家の話題となった。案の定というか、近隣住民との繋がり薄い茶都山家に対して、老人たちからはじんわりと悪意の滲む言葉がちらちらと出始めた。それまでは老人たちの話には相槌を打っていたオレだが、女子会ならぬ老人会が悪口でヒートアップしそうな様子が見えたため、オレはそのときこう言ったのだ。

「しょうがないですよ。時代が悪いですよ、時代が。共働きで、町内会にも出られないほど、両親共に仕事に忙殺されるような時代が。娘さんも一人でお留守番をすることが多いみたいです。家族の時間もなかなか取れないなんて、むしろ可哀そうだと思います」

オレがそう言えば、別に彼らも根は悪い人達ではないので、見方を少しは変えてくれる。自分の昔のことでも思い出しているのか、一人の老人が「そうかもしれないなあ」と、酒を片手に、酔いの回った赤ら顔でしみじみと呟けば、場の空気は一気に憐憫へと傾いた。そうして老人たちが抱えていた茶都山家への不満は流された、と思う。

「ワシの若い頃は親父とずっと一緒だったなあ……」

と誰かが言えば。

「ずつと畑にいたものな。サボりやぶん殴られた」

と誰かが懐かしさを滲ませ、微笑みを交えた相槌を打った。そうして老人たちの話題は自分たちの若い頃の話へと移り、再び談笑へと戻ったのである。そうなつてしまえば、誰かが茶都山家への不満を零しても、誰かが「まあまあ」と諷めてくれるようになる。

そうして、オレは出前で届いた高い食事と安い（けど美味しい）リングジュースを対価に、昔話で盛り上がる老人たちの話し相手として、その日一日を捧げることになった。

というわけで、オレは近所付き合いはそれほど疎かにはしていないし、良好な関係を保っているのだから、ラジオ体操をやるのだと言われれば、面倒くさいとは思いつつも、乗り気な老人たちに付き合う以外に選択肢はない。

だがこれがどうして、やってみると意外と気持ちのいいものだった。率先してやろうとはまるで思わないのだが、やったらやったで悪くは無いいものではある。

そしてラジオ体操を終えたオレは、老人の一人から貰ったスポーツドリンクの入ったペットボトルを傾け、喉と体を潤していたというわけである。

「おにいさんー！」

ふう、とペットボトルの呑み口から口を離し移動しようとしたオレを、幼い声が呼び止める。

声の方へ視線を向ければ、それはお隣さんの女子小学生である茶都山茶々ちゃんだった。本人は一生懸命走っているのだろうが、オレからすると、とてとて、と効果音が聞こえるような走り方に思えてしまう。

あの子はあまり運動神経は良くないのかもしれない。

ラジオ体操には一緒に参加していたが、声を掛けられたのは、今日に関してはこれが初めてである。オレは老人たちに捕まっていたし、茶々ちゃんも茶々ちゃんも、友達だと思われる見知らぬ女児と一緒にいたので、タイミングが無かったのだ。



駆け寄って来た茶々ちゃんの少し後ろを、その見知らぬ女兒が歩いていた。気にはなるものの、茶々ちゃんの友達ならすぐに紹介してくれるだろうと思い、オレはまず茶々ちゃんへ挨拶をすることにした。

「茶々ちゃん、おはよう。朝から元気だね」

「おはようございます！ おにいさんもげんきそうですね！」

オレの挨拶に、茶々ちゃんは元気よく挨拶を返してくれた。オレを見上げる茶々ちゃんの表情は明るく、笑顔だ。オレはなるべく茶々ちゃんに視線を合わせるようにしゃがみ、こう言った。

「君もパトロールに参加するのかい？」

「そうです！」

「じゃあ、悪い奴が居たら魔法でやっつけちゃうんだ？」

「え!? あ、あ、あわわわわ……！ る、瑠璃ちゃん！」

オレの冗談めかした言葉に、茶々ちゃんは困ったように眉を寄せ、きよろきよろと視線を彷徨わせる。そして思い出したように後ろを振り返り、ちようど追いついた見知らぬ女の子へ、助けを求めるように声を掛けたのだ。オレは視線をそちらへ向けて、笑い掛けながらこう言った。

「はじめまして。君は瑠璃ちゃんって名前なのかな？ 茶々ちゃんのお友達かい？」

「ええ。そうよ。わたしは茶々の友達で、名前は瑠璃川瑠璃。そういうあなたは東堂雷留さんで間違いないかしら？ それとあなた、人名前を尋ねるときはまず自分から、って格言を知らないかしら？」

めちゃんこ強気な女の子だなあ。

初対面の年上男性にも物怖じせず、覇気のある声で挨拶をやりきった女子小学生に対するオレの第一印象はそれだった。

茶々ちゃんは赤みがかった茶髪を短く整えている普通の少女に見えない。しかし瑠璃ちゃんは……なんというか……うーん……。瑠璃ちゃんの髪は長く、そして瑠璃色だった。しかも翡翠色のメッシュが入っている。そんな長髪を一つのおさげに纏め、鎖骨のあたりに流している。小学生にして翡翠色のメッシュの入った瑠璃色の髪の毛とは一体……。

染めている？

小学生でそこまで気合いが入っているとすればオレとしても恐れ入るが……。

地毛、と言う可能性は……あるのかな？

ぱつと見だが、毛の根元まで瑠璃色で、地毛の色はどこにも見られない。染めたばかりなのかもしれないが……どうだろう。どっちなんだろう。

ここ最近、妙なことが立て続けに起こってはいるが、逆を言えばここ最近までオレの日常は何の変哲もない普遍的なものだった。当然、髪の色も標準的な日本人のものばかりで、あつて茶髪や金髪程度のものであった。一度だけ、冬の富士山のような頭をした人も見たことはあつたが……さすがにアレは自前の色では無かつたと思う。生え際に黒が見えてたし。

少し考えていたが、それが気に障つたのか、瑠璃ちゃんがその切れ長の瞳を細めて、オレにこう言った。

「なにかしら？ あたしの顔に何かついてる？」

不満を全開にしている瑠璃ちゃんは、妙に攻撃的なように思えた。

目と鼻と口、なんて意地悪な返しが、蓄えた知識の中から咄嗟に想起されたが、小学生にそれはいくらなんでも大人げなさすぎるだろう。オレは苦笑し、こう言った。

「ごめんね。確かに、失礼だった。君の言う通りだよ。改めまして、オレは東堂雷留。よろしくね」

オレがそう言うのと、瑠璃ちゃんはぱちぱちと目を瞬かせてこう言った。

「分かってくれればいいのよ。分かってくれればね」

「気を付けることにするよ。ありがとう。ところで、オレの名前を知っているってことは、茶々ちゃんから聞いたのかな？」

「ええ。そうよ」

満足げに頷く瑠璃ちゃんは、強気ながらも素直なようである。

オレは瑠璃ちゃんにこう続けた。

「茶々ちゃんはオレのことを何て言つてたのかな？」

「えっ!? おにいさん!」

オレがにこやかに訊ねると、茶々ちゃんは慌てた様にオレに声を荒げた。それを見て、瑠璃ちゃんがにやりと笑う。

「茶々はあなたのこと、落ち着いた大人の人って言ってるわよ。それと、かつこいいって」

「瑠璃ちゃん!」

瑠璃ちゃんが嗜虐的な笑みを浮かべてそう言うと、茶々ちゃんは真っ赤になって瑠璃ちゃんに抱き着いた。

「やめてー!」

茶々ちゃんが密告の中止を訴えながら瑠璃ちゃんの体を揺する。

瑠璃ちゃんの体は想像以上にくんがくんと揺れている。オレから見て、茶々ちゃんは非力そうな女の子に見えていたのだが、実際には茶々ちゃんは結構パワーがある子ようだ。そうか、この子パワー系か。

がくんがくんと体を揺らされ、首もぐわんぐわんと揺らされながら、瑠璃ちゃんが悲鳴を上げるように言った。

「や、やめるから放しなさい!」

「ぜったいだよ!」

しかし茶々ちゃんはまだやめない。

瑠璃ちゃんは再び叫ぶように言った。

「わ、わかったから!」

「ぜったいの、ぜったいだよ!!」

「わかったからああああ!!」

そうしてようやく、瑠璃ちゃんは茶々ちゃんから解放された。瑠璃ちゃんは顔を赤くしていて、息も荒いながら、せつせと乱れた髪や衣服を整えている。そして瑠璃ちゃんは少し怒り気味に、茶々ちゃんへとこう言った。

「あんた馬鹿力なんだからやめてよね! あたしはか弱い女の子なの!」

「だ、だって! だってだって! 瑠璃ちゃんが変なこと言うから! わたし悪くないもん! 瑠璃ちゃんが悪いんだもん!」

オレの膝元で小学生女児二人がわちやわちやしている。二人の会話を聞いて、オレは思った。

茶々ちゃん、馬鹿力は否定しないんだな……。

確かに、あのまま続けていれば瑠璃ちゃんの頭が吹っ飛ぶんじやないか、と思うくらいに体が揺れていた。首の動きが体の動きに追いついていなかったのだ。正直、瑠璃ちゃんの脳が揺れてないか心配になる。そしてそうなる、とととて、という茶々ちゃんが走るときに感じた擬音が、どすどす、というものに変わることを止めることは出来なかった。

しかし揺さぶられた当の本人である瑠璃ちゃんは元気そうである。首が強いのかな。そう思っていると、瑠璃ちゃんが茶々ちゃんへと言った。

「ほんとのこと言っただけでしょ!?! それをあんなふうにするなんて、この馬鹿力!」

そう言う瑠璃ちゃんだが、なんか嬉しそうにも見える。茶々ちゃんをいじることを楽しんでいるようにも見えるが……。

「むう!」

茶々ちゃんが怒ってます、と表情で示しながら、手を前に突き出すようにして瑠璃ちゃんへ迫る。

瑠璃ちゃんが再び体を揺すられるのか、はたまた他の懲罰を喰らわされるのかは分からないが、しかし危機に晒されているはずの瑠璃ちゃんはどこか嬉しそうにも見えて……。

オレはそれ以降何も考えないことにして、こう言った。

「二人とも。まだ朝早いんだから。騒いだりしたら、近所迷惑になるでしょ? 話は小さい声でしようね」

ラジオ体操をして近所迷惑も何もないかもしれないが、子供の声とは想像以上に響くモノ。このあたりで制止しておいた方が無難だろう。

こうして、オレの膝元で起きた小学生女児の戯れは終わりを告げる。

その後二人してオレに謝って来たのだが、茶々ちゃんはしおらし

く、瑠璃ちゃんはつんとそっぽを向いてと、二人の性格がよく顯れた謝罪の仕方であった。

オレは、少し離れたところでこちらを見守っていた町内会の人達に、小さく会釈することで謝罪の旨を伝える。すると町内会の人達は小さく手を上げて返してくれた。

オレは再びしやがみ、二人にこう問いかけた。

「二人とも、ここに来たってことは、パトロールに参加するつもりなのかな？」

「わたしたちはおにいさんが——」

「そうよ！ あたしたちもパトロールに参加するつもりできたのよ！」

茶々ちゃんが何かを言おうとして、瑠璃ちゃんが茶々ちゃんの口を手を当てて塞ぎ、言葉を引き継いだ。だから静かになさいって。

今、オレに何か関係があるようなことを茶々ちゃんは言った。オレはじつと二人を見る。二人は顔を寄せ合って何かを囁き合っている。どうやら瑠璃ちゃんが茶々ちゃんを小声で叱りつけていて、茶々ちゃんは「あわわわわ……」と焦っているようだ。

「オレがどうかした？」

オレが訊ねると、ち、と舌打ちが返ってきた。瑠璃ちゃんからだ。しかし瑠璃ちゃんはその表情を瞬時ににこやかなものに変えて、こう言った。

「あたし、一度会ってみたいと思ってたのよね。茶々から話を聞いてたから。それで、あなたが今日のパトロールに参加するって聞いて……」

「ここに来たってことか。オレに会いたいなんて、光栄だよ」

どうやら瑠璃ちゃんは茶々ちゃんからオレの話を聞いて興味を持っていたらしく、オレに会うためにここに来たようだ。そうなるど、やはり茶々ちゃんがオレのことを何と言っていたのか、詳しく聞いてみたい欲求に駆られるが、茶々ちゃんはどうやらそれを知られたくは無いらしいので、ここはこれ以上の詮索は避けておこう。

そう思つて話題を変えようとしたオレに、瑠璃ちゃんはこう言っ

た。

「雷留さん」

「なにかな?」

「アレって、雷留さんのよね?」

「ん? ああ、あれ?」

瑠璃ちゃんが言いながら指さした方向にあったのは、テニスラケット入れに突っ込まれ、バスタオルでぐるぐる巻きにされた木刀だった。

オレは頷いて、こう言った。

「そうだよ。と言いたるところだけど、預かりものなんだ。だからオレが持つてはいるけど、オレの物ってわけでもないんだ」

「預かりもの……。ねえ、それって誰から預かったものなの? どんな人?」

「ん……。ごめんね。それはちよつと言えないかな」

瑠璃ちゃんはやけに真剣な表情で詰め寄って来た。迫真だ。鬼気迫っている。オレはちよつと瑠璃ちゃんの勢いに気圧されて、気持ち引き気味に立ち上がった。瑠璃ちゃんから距離を取るためだ。しかし困った。オレは瑠璃ちゃんの質問には答えられない。あの木刀の持ち主が、金髪で白い特攻服を着た金髪の女性です、なんて言えば、不審者との繋がりを疑われかねない。不審者が例の彼女ならば、「オレの知り合いだから大丈夫です」と言えば丸く収まるのだが、もし違ったときにオレは責任を取ることが出来ない。だからオレは不審者の正体を確認しなければならぬし、その前にヤンキー少女のことを明かすことは出来ないのだ。

すると瑠璃ちゃんは凄く疑念に満ちた瞳をオレに向けて来た。ちよつと傷つく。まるで不審者を見るような目だ。

話を変えろという意味でもそうだが、オレは少し思うところがあった、瑠璃ちゃんに問いかけた。

「君は……。どうしてアレがオレのだって分かったの?」

オレの問いかけに瑠璃ちゃんが答える前に、茶々ちゃんが反応を示した。

「え？ だってアレ、おにいさんと同じ……」

「茶々あ!!」

茶々ちゃんの言葉を遮って瑠璃ちゃんが叫び声をあげ、瑠璃ちゃんは茶々ちゃんの口を塞いだ。

オレは微笑みを絶やさず、こう問いかけた。

「オレと同じって、なに？」

「あ、あわわわわ……」

瑠璃ちゃんの拘束を無理やり引きちぎるようにして（パワー系）自由になった茶々ちゃんは、今度は自分で口を塞いでしまった。掌で覆われた口からは、くぐもった「あわわわわ」が聞こえて来る。瑠璃ちゃんは苦虫をかみつぶしたような表情でオレと茶々ちゃんを見比べている。聞かれたくない質問をされて、どう突破するか考えているようだ。

瑠璃ちゃんは茶々ちゃんの手を引いて、オレから離れていく。オレは二人を見送った。すぐに戻って来るだろうと思ったからだ。

「どう……のよー！ ば……ー！」

「あわわわわ……」

「あわ……じゃな……よー！」

なにやら揉めているようだ。小声で話しているので聞き取り辛い。

「しよ……ない……」

「でも……は……」

「あん……せ……しよ……。きお……けし……」

「で……だ……」

「はじ……から……そ……ため……」

二人で密に寄り合い、ここそそと話をする女兒二人を見守る大学生って中々シニールなどころではある。パトロールもそろそろ始まる頃合いだし、それほどまでに答えたくないなら別に答えなくてもいいんだけど……。木刀とオレの何が同じなのか気にはなるが、仕方がない。

匂い、とか？

いや、さすがにここまで匂わないと思う。自分がそんなに臭いとは

思いたくない。それとも、木刀を隠しているバスタオルに見覚えがあるとか？

それなら在り得るかもしれない。テニスラケット入れはともかく、バスタオルはちゃんと使ったら干してるので、茶々ちゃんはそれを見たことがあるのかもしれない。だがアレをオレのものだと言ったのは瑠璃ちゃんの方だからな……。オレに分からない何かがああの木刀にあるのかもしれないな。なにせ茶々ちゃんは(暫定)魔法少女だし、その友達だっという瑠璃ちゃんも関係者だろう。もしかすると魔力的なモノを感じる、とか？ オレに魔力が……。まさか……。とちよつと浮かれるオレである。

でもあの木刀はオレのじゃないぞ。もしかして、オレの持ち物であるバスタオルかテニスラケット入れの方で判断したのかな？

だとすればそれはそれで、というかそつちの方が興味が湧くんだけど。

好奇心と疑問を抱き、思考をしていたオレに、瑠璃ちゃんがこう言った。

「雷留さん！ こつちに来て貰えるかしら！」

茶々ちゃんは申し訳なきように俯いていて、その横で瑠璃ちゃんは手招きをしている。

なにかありそうだなあ、と思いつつ、オレは言われるままに二人の方へと向かおうとした。そんなオレに、少し離れたところにいる町内会の人から、「そろそろ行くぞ」とパトロールの開始を告げる声が掛けられる。

オレは「直ぐに行く」という意味を込めて片手をあげて見せ、それを返答とし、改めてオレは二人の方へと向かった。

二人に誘われるままに公園の遊具の裏へと足を運んだオレは、周囲へ視線を向ける。遊具が邪魔で町内会の人達からオレ達の姿は確認出来ないし、道路側に人の気配はない。

オレは周りの確認を終えて、二人にこう言った。

「ここに何かあるのかな？」

正直、オレは期待していた。観念したこの子たちがオレに真実を告



げてくれるのではないかと。

「雷留さん、目を閉じていてくれるかしら」

オレの前に立った瑠璃ちゃんが、オレを見上げながらそう言った。よく分からないが、それを求めて来るなら良いだろう。キスをしてあげる代わりに黙ってて、なんて的な展開も、大人の世界ならばありえなくはないかもしれないが、さすがに小学生ではないだろう。そもそも身長も含めて色々の違い過ぎて、小学生がちよつと（色んな意味で）背伸びしたくらいでは届かない。

次の瞬間、閉じたまぶた越しにさえ感じ取れる光が、オレの目の前から発せられた。

なんだなんだ、何が始まるんだ。

そう思いながら、少しの精神的な高揚を自覚しつつ、目を閉じて立っていたオレだったが、特に何も起こらず、光は収まった。

少しして、オレはこう言った。

「もう、目を開けていいかな？」

少し待てど、返事はない。

「……？」

不思議に思ったオレは、目を開けた。周囲を見渡したが、周りには誰もいなかった。

「どっへ……」

小首を傾げたオレは、オレを呼びに来た町内会の人に戻るようになれ、戸惑いながら皆が集まっているところへと向かった。

その途中、木刀を回収しようと思ったのだが、何故か木刀がなくなっていた。少し探したがやはり見つからない。しかもパトロール員の中に茶々ちゃんと瑠璃ちゃんの姿が見当たらず、町内会の人達も、彼女たちやオレが持って来た物のことを知らないと言う。これは無関係ではないだろうと思うが、周りの人から訝し気に見られたので、オレは「気のせいだった」と今ははぐらかすことにした。パトロールが終わったらあの子たちを探してみよう。瑠璃ちゃんはアレに興味を示していたし……もしかするかもしれない。あまり考えたくはないことではあるが、確認はしておいた方が良さだろう。

そしてすぐにパトロールが始まったため、オレは先ほどのことはひとまず置いておくことにし、パトロール員として責務を全うした。

パトロール中、なんか空に変なデカイ鳥が飛んでいて、しかもそれが空に向かって突き進む二本のレーザーみたいなものに呑み込まれるのを見掛けた。レーザーみたいな光の帯が消えると、小さな黒い点のようなものが見えて、どこかへと飛んでいった。恐らくアレは鳥だったと思うが、あのデカイ鳥はいつたい……。しかし周りの人に聞いたら、やはりそれについても誰一人として気づいていなかったの  
で、オレはその話はそれ以上口にはしなかった。見間違いとも思えないが、オレにはどうしようもない。

そしてパトロールの後、オレは老人たちに連れ去られゲートボールに付き合うことになり、オレの半日はあのデカイ鳥のように消え去った。

神様……？

同日。

早朝のパトロールを終えて町内会の老人たちに捕まりゲートボールに参加していたオレだが、昼食後には一度解放された。さすがに昼食後から夕方のパトロール開始までの間も皆で一緒にいることにはならなかった。しかし例外もあり、老人たちのうち一人暮らしをしている人たちはそのままパチンコ店へと出かけてしまった。オレも誘われたが、オレはギャンブルに興味は無いので、同じようにパチンコ店への移動を辞退した老人たちと一緒に、丁重にお断りさせて貰った。

とはいえ、夕方には二度目のパトロールが行われることが決まっています、それにも参加する予定のオレは遠出をすることは出来ない。また、夕方のパトロール後に再び集会に呼ばれた場合には、早朝よりも長く拘束されることは想像に難くない。というのも、酒が好きな老人が多いため、夕方のパトロールの後には本格的な酒の席が設けられることが目に見えているからだ。そしてその催しにはほぼ全員が参加すると思われるため、オレも辞退することは難しいだろう。

オレは今、近隣を不規則に練り歩いている。

目的は、消えた木刀と二人の少女を探すためだ。公園の搜索はゲートボールの最中に済ませてある。

しかし、一体どこへ消えてしまったんだろうか。

消えたことに限って言えば、木刀に関しては弁償すればまだなんとか……。

ただ、あの木刀がヤンキー少女にとって大切なものだった場合、代替品を用意するだけでは済まないこともあるだろう。出来るなら見つけ出したいところではある。

ただ気になるのは、やっぱり周囲の反応だ。

確かにあったはずのオレの荷物と、二人の女子小学生が同時に消えた。だがその場にいた全員がそれを認知していない。消えたところを見ていなかったどころの話ではなく、最初からそんなものが存在し

なかったという認識である。全員が、全員。

荷物に関しては……今日集まった人達がたまたま全員、他人の荷物に対して全くの無関心な人種だったと考えれば、苦しいが分からないわけではない。

だが、子供たちは別だ。彼女たちはオレや老人たちと一緒にパトロール前のラジオ体操に参加していた。騒いでいた姿を見ている人がいたことも間違いない。しかし周囲の人達は木刀や少女たちが消えたことを不思議にも思わず、最初から存在しなかったかのように扱っていた。オレはパトロール前、子供たちが騒いだときにオレが会釈した町内会の人にも確認を取ったが、返答は他の人と同じだった。そんな小学生は見えていないという。

不可解だ。本当に不可思議だ。

あの場にいた全員が口裏を合わせている？

それこそありえない。

何の得があつてそんなことをする？

集団催眠か何かだとして、ならなんでオレはそれに掛かっていない？

やはり説明がつかない。

目を離した際に攫われた、と言う話でもないんだ。

オレが目を瞑っていたのは一分にも満たない時間だ。オレの目の前にいたはずの少女二人を、言葉一つ出させずに連れ去るなんてこと、出来るわけがない。というか、目をつむっているとはいえ大人が目の前にいるのに子供を攫うわけがない。

やはり二人は自分の意思でオレの前から姿を消したと考えるのが自然だ。じゃあオレの荷物はどうやって持って行ったんだろう。人の目を掻い潜って持っていくのは無理だと思う。さらにいえば小学生二人が何人も大人の記憶を消すなんてことがそもそも不可能なんだが。

そもそもの話、オレの荷物は本当にあの子たちが持って行ったのか？ オレが目を閉じていたほんの僅かな時間で？

荷物とあの子たちの雲隠れが別件ならそれなりの答えが……いや、

だとしてもあの子たちの存在を覚えていない町内会の人達の説明はどうやっても付けられない。結局、在りえる可能性として出てくるのは、町内会の人達が口裏を合わせて知らないふりをしている、ということになるが、やっぱりそれこそ考えにくいわけで。

人の認識や記憶を改ざんするなんて、それこそ魔法や超能力でもない限り無理だ。

色々考えてはみるものの、一番辻褄が合うのが魔法や超能力というのは、いささか頭が痛い。

とりあえずその辺は捨て置いてと開始したパトロールでは、奇妙な巨鳥と空高く伸びる二つの光の帯を囿らずも発見した。しかしそれに関しても、パトロールに参加していた人達は無反応を貫いていた。オレが指摘しても、彼らは「なにもない」「なにもみていない」とオレに告げたうえで、今朝の質問を含めて、「だいじょうぶか？」とオレの心を労わった。

ここまで来ると、オレは引き攣った愛想笑いを返すしかなかった。オレからすると「あなたたちこそ大丈夫？」という感じなのだが、多数対一の状況、大丈夫じゃないのはやはりオレの方なのだろう。この類の変人扱いは何度されても慣れないものだ。嫌な気持ちになる。

そういえば、とオレは思った。

以前、似たようなことがあった。それもつい最近だ。

それは、銀髪ツインドリルお嬢様こと、明日香さんと時を過ごした喫茶店で起きたことだ。

あの喫茶店において、御曹司一行の存在は明らかに異物であったはずだ。そしてそんな彼らとひと悶着を起こしたオレや明日香さんもまた、他の客や店員からすれば異物側の存在として映る。印象に残らないはずがない。

実際、ひと悶着の最中、他の客や店員は、オレ達を注視していた。そのはずだった。なのに、客や店員たちは、御曹司一行の姿が消えた途端、まるで何もなかったかのようにオレ達から意識を外したのだ。

正確には御曹司一行が出て行った後じゃあない。あのととき、御曹司はなにやら格式ばった物言いのあと、「忘れる」と強い口調で言い放った

が、そのあとだ。客や店員がオレと明日香さんへの興味の一切を失くしたのは。

そしてレジ前にいた店員は、明日香さんが料金未払いで退店した際にも、オレの退店の際にも、何の反応も示さなかった。いや、オレの場合はちゃんと料金を要求されはしたが、それだけだ。

料金を払い退店する直前、オレは「申し訳ありませんでした」と、騒ぎを起こしたことに対して謝罪を伝えたが、それに対して店員は小首を傾げ、「何のことでしょうか」と言い放った。あの不思議そうな表情は、決して演技などでは無かった。そして戸惑いつつ退店するオレに対して、店員は「ありがとうございます」と、笑顔でオレを見送った。

あのととき、店員は嫌な顔一つしなかったのだ。店員の教育が行き届いている、などという話ではない。

普通、店内で妙な騒ぎを起こしたオレに対して、店側は小言の一つくらい言うはずだ。言うべきだ。嫌味とかの意味でなく、他の客を守ると言う意味で、店側は店内で騒ぎを起こした存在に対し、すべからく注意をしなければならぬ。でなければ、何かあった時に他の客を守らない店として店の評判が下がることは避けられないだろうし、そうなれば客も離れていくことになる。「他のお客様のご迷惑になりますので」と、それくらいは伝えるだろう。そしてオレが謝罪したタイミングは、その絶好の機会だったはずだ。

しかし、何もなかったのだ。

(暫定) 魔法少女と、今回、公園で起きた異常。

黒竜と異常な身体能力の刀女と、街中で起きた原因不明の事故。

瞳が変色する御曹司と銀髪ツインドリルお嬢様風学友と、喫茶店で起きた異常。

明らかに普通じゃない。普通じゃないことが続いている。これらが無関係とは思えない。いやなんというか、個々に繋がりはあるとは思えないんだけど、根っこところが無関係じゃないというか。魔法とか異能とか霊力とか妖力とか、要はかつてオレが求めていた何かがあるのだろう。

魔法少女（暫定）だけならまだ良かったのに……。黒竜と刀女、そして友人までそれっぽいなんて……。

次々に現れる非日常の兆しは、オレの外堀を埋めていく。否が応でも認めざるを得ない状況に立たされていることを感じる。そしてそれはとても……とても息苦しい感覚だ。精神的な高揚と共に素直に受け入れられたなら、オレとしても楽だっただろうに。

「なんで今になって……」

悶々とした思考の坩堝に嵌まりながら歩いてみると、交差点に近づいていた。前方斜め上へ視線を向ければ、歩行者用の信号が点滅を始めている。

オレは考えを振り払うように頭を振った。

ともかく、預かりものの木刀を取り戻してヤンキー少女に返さなければならぬ。そして消えた木刀に関する有力な情報を持つていそうなのが、少女二人だ。もう少し探して見つからなければ、一度家に戻ってみよう。実は本当にオレの勘違いで家に木刀があるかもしれないし、茶々ちゃんもお隣さん家にいる可能性だってある。

二人の少女を探し、木刀を見つける。

今はそれだけを考えておこう。余計なことは考えないこと。それが精神的な安定を保つための秘訣だ。

オレは立ち止まって、交差点を見渡した。

歩行者はいない。車の通りも無いようだ。

「危ないー」

突如、甲高い叫び声が交差点に響いた。咄嗟に声の方へ視線を向けると、交差点の向かいに女性が立っていた。続いて、大きなエンジン音。視線を反射的にエンジン音の方へ向けると、目前に迫るトラックの巨体。時間がゆっくりと流れるような奇妙な感覚の中にと、トラックがいきなり横転し、ぐるりと大きく回転しながら、向かいの交差点にいた女性の方へと滑り向かっていく。

今度はオレが危ない、と叫ぶ番だった。しかし声を出すよりも早く、トラックの巨体の向こう側に、女性の姿は消えてしまった。

オレは青信号に変わった交差点を駆け渡る。横転したトラックは、

後方から建物に激突して停止している。オレは真つすぐにトラックの運転席へと向かう。

「なんだ？」

トラックへ向けて走るオレの前に、真つ黒な靄のようなものが現れた。見方によっては何かの入り口のようにも見える。黒い濃霧を避けようと一度進行方向を変える。すると、その黒い濃霧もまた、オレの動きに追従するように位置を変えた。何度かそれを繰り返すが、黒い濃霧はその度に必ずオレの進路を塞ぐ。まるで向かい合う通行人が道を譲り合うように、オレと黒い濃霧は共に動き続けた。

霧だけに切りがない。オレは黒い濃霧を避けることを諦めて、直進する。黒い濃霧はまるでオレを歓迎するかのように蠢いた。そしてオレは黒い濃霧に呑み込まれ、こう言った。

「なんだったんだ？」

黒い濃霧を素通りしたオレは、真つすぐにトラックの方へと走る。肩越しに振り返り見た黒い濃霧は僅かに震えているように見えた。だがそんなことは今はどうでもいいことだ。黒い濃霧を放つて、オレはトラックに接近した。

フロントガラスからトラックの運転席を覗いたオレは、小首を傾げこう言った。

「いない？」

中には誰もいなかった。まさか事故の衝撃で窓から投げ出されたのだろうか。そう思って周囲を見渡すが、人影はない。では一体どこへ行ったのか。

あの女性のことも気になる。周囲を探すが、誰もいない。とりあえず警察を呼ぼうと携帯を取り出すが、圏外になっている。こんな街中で圏外になることがあるのか。電話料金はきちんと払っていたはずだが……。それにしてもタイミングが悪い。

「なんだ？」

上空から騒音が聞こえる。プロペラ音のようだ。見上げれば、ヘリコプターが飛んでいる。報道ヘリだろうか。もう事故を聞きつけて来たのか。



そう思つて、様子が変なことに気づく。プロペラ音が大きくなっている。ヘリコプターも大きくなっている。近づいてきている。墜落しているのだ、と気づいたとき、ヘリコプターは急に旋回し、トラックが激突したビルの中腹に激突した。大きな窓を突き破って中へと突っ込んだらしい。ヘリコプターはそのままビルに残り、ガラス片だけが落ちて来るが、オレには当たらなかった。

「なんだ？」

またも後方から大きな音がした。爆発音だ。振り返ると、オレが先ほど信号待ちをしていた場所にまたトラックが突っ込んでいた。先ほどよりも小さなトラックだったが、燃料に引火したのか爆発し、黒煙を巻き上げている。

上空からまたも騒音が聞こえた。今度はなんだ、と思いながら見上げると、飛行機がオレの方へと垂直降下してきている。飛行機を見つめながら、オレはこう呟いた。

「ええ……」

飛行機は突如としてくるり一回転し、オレの上空を滑るようになり、抜け、周辺の建物を巻き込みながら墜落、爆発したのだ。

「なにが起きて……。……。わ……。と……」

困惑に言葉を呟かずにはいられなかったオレだが、急に足元がおぼつかなくなり、たたらを踏んだ。眩暈がしたのかと最初は思ったが、地響きが聞こえて来て、地震が発生したのだと気づいた。オレの体は上下に揺らされ、ビルもまた同じように揺れていた。どれくらい揺られていただろうか。ぴしり、と嫌な音がして、上空を見上げれば、トラックとヘリが突っ込んだビルに罅が入っている。このままでは倒壊しそうだが、生憎足元が悪く動けなかった。

やがてビルに入ったひび割れが広がっていき、ビルが大きな音を立てて倒れ始める。が、揺れが大きかったせいか、一度オレの方へと倒れようとしたビルは一度大きく戻り、反対側へと倒れて行った。とんでもない轟音が響くと同時に、揺れが止まる。

「あれ……。空が……」

いつの間にか、空が暗くなっていた。見上げれば厚い雲が天を覆っ

ている。ぽつりぽつりと水滴がオレの肌に触れ、瞬く間に豪雨が訪れる。雨雲は積乱雲へと変貌し、雷鳴と雷光を携えて停滞していた。空が一瞬青白い光を放った。空気を引き裂く轟音が轟き、凄まじい速さで飛来した落雷は、オレのすぐ近くの電柱に直撃した。激しい音を立てて電柱と電柱を繋ぐ電線がはじけ飛んだ。

「なんなのこれは……。世紀末かな？」

戸惑いが大きかった。情報量が多すぎる。

「あれ？ 晴れたな……」

急に雷鳴が鳴りやみ、雨が降り止んだと思えば、厚く空を覆っていた雲まで消え去って、眩い太陽が姿を現した。晴天を見上げるオレの遥か上空を一本の飛行機雲が通過していく。ミサイルのような形をしていたが、きつと飛行機だろう。アレは落ちて来なかった。良かった。

さらに上空に点のようなものが見えて、オレは目を凝らした。徐々に大きくなっていくそれは、まるで隕石のようである。だが、その実態を確認するよりも前に、その黒い点のようなものは一瞬発光し、消えた。

「どうしたものか……」

周囲の惨状を見渡す。警察に連絡できれば一番いいが、携帯は圏外のままだ。異変に気付いた警察が自ら来てくれるのを待つしかない。周囲に人の気配が無く、巻き込まれた人がいなさそうなことは不幸中の幸いかと言えるかもしれない。

ただ飛行機やヘリに乗っているだろう人達がどうなっているかは分からない。あの惨状で生きているとは思えないが……。もうオレ個人でどうこう出来るような状況じゃあないことは分かる。オレに出来ることは警察にこの出来事の様子を伝え、原因究明を願うことくらいだろう。

しかし、人の気配が無いのは気になるな。ここまでの騒ぎだから、避難しているだろうことは分かる。分かるんだけど、いくらなんでも不自然過ぎるほどに人の生み出す音が聞こえない。

この感じには覚えがある。あの刀女と出会ったときの感じだ。も

しかして、と改めて周りを見渡すものの、それらしい気配はない。

……？

視線を動かしていたオレが前を向くと、目の前にしれつと豪勢な扉が現れていた。煌びやかな装飾を施された、白い扉である。試しにドアノブを回し、開けてみた。

扉の向こうの側の景色は変わらないものだった。燃えているトラックと倒れた電柱があるだけだ。ドアを閉めて、一步離れる。後ろからノイズのような音がして、振り向いた。まるでテレビの砂嵐のように、オレの目の前だけが妙なことになっている。音が鬱陶しいので蚊を掃うように手を振れば、それは霧散し、音も止んだ。再び前を向くと、白い扉は消えていた。

「今度はなに」

オレは、引き続いてオレの周囲に起きたある現象に対し、疲弊感を滲ませながら呟いた。小さくため息を吐く。

今度は騒がしい出来事では無かったが……オレを取り囲むように、光が円を描いていた。下から光をなぞる様にして視線を動かし、空を仰ぐ。遠い遠い空まで続く光の柱がそこにはあって、オレはその中に呑み込まれている。この光が地面から空へ向かっているのか、はたまた空から地面へと落ちてきているのかは分からない。いや、多分前者なんだろうな。

そう思ったのは、オレの周りに散らばっていた石やガラス片が重力に逆らって、ゆっくりと浮上していることに気づいたからだ。SFでよくあるような、家畜がUFOに攫われるような感じである。

オレは歩いてその光の円柱の範囲外へと位置を変えた。光の筒の外側から中を観察する。ゆっくりと空に持ち上がったいた石やガラス片が急に動きを止め、そして地面に音を立てて転がり落ちた。その間もなく、光の円柱は空中に霧散するようにして消える。

……。

ふと足元を見た。

アスファルトの地面だったはずのオレの足元が、真っ黒い何かに変わっている。まるで奈落にでも続いているのでは、と思わされるほど

に深く暗い円だった。穴、だと思わなかったのは、オレが靴越しに地面を感じていたからだ。だから、ただ黒く染まっているだけだと思っ

た。オレは穴を見つめながら、大股のカニ歩きで、すすつと位置を変えた。そのまま黒い円をじつと見つめ続けていると、黒い円は僅かに振動しながら縮小していき、やがて元のアスファルトに戻った。

夢？ それともなにか脳に障害が生じていて、幻覚でも見ているのだろうか。在りえない話ではない。この体はかつて、一家が死亡するほどの交通事故に巻き込まれたことがあるのだ。

だとしてもあまりに物騒過ぎると思う。気づかないうちにストレスが溜まってたか？

それとも……また何か……。

「わ……」

突如として突風が吹く。オレは咄嗟に顔を腕で庇い、目を瞑った。しばらくすると風が収まって、オレはうつすらと目を開いた。腕をそうつと降ろす。

ゆつくりと周囲を見渡したオレは、小首を傾げた。

周囲の景色が様変わりしている。

きよろきよろと周囲を見渡すも、景色が元に戻ることはない。ここには交差点もないし、墜落して来た飛行機やヘリコプターもないし、交通事故を起こしたトラックも無い。

代わりに現れたのは、寂れていながらも、大きな神社の社だった。神社の鳥居の下にオレは立っていたのだ。整備された街の交差点で世紀末を目の当たりにしていたはずだが、今は心地よい静けさの中にある。

一体何が起きているんだろう。

夢にしても突拍子が無さ過ぎると思う。

それともまた、何か変なことに巻き込まれたのか。魔法少女にしては物騒だし、刀女の関係にしてはあの世紀末は物理的過ぎるし、ヤンキー少女は……勘だけと違うと思う。じゃあ明日香さんの関係かな？

確か明日香さんはあのとき、御曹司に対して滅びがどうか言っただし、それかもしれない。

それとも、全然別の……？

うーん、分からない。

現実感の無いことが続き過ぎて、これ全部オレの見てるただの夢だっけって貰えた方が凄く気が楽なんだけど……そうじゃないんだらうなあ。

正直、いい加減ちよつと疲れるよ。

内心で愚痴り、オレは小さくため息を吐いた。

『匂わせ』が過ぎると思う。ちらちら見せて来るのは止めて欲しい。やるならもつと盛大にオレを巻き込んでくれないかな。

それかいつそのこと「非日常はあります！」って誰かとどめを刺してくれても良い。それが叶ったなら、オレは自分が『転生者』なのだと、胸を張って言うことができるのに。

オレはうんざりとした気分で神社の社を見上げた。神社。神の住まう社。

いつそ神頼みでもしてみようか。気休めにはなりそうだな。

オレは賽銭箱へ向かい、石の道の上を歩き出す。すると、風を切る音を鳴らしながら、オレの目の前を何かが横切った。今度はなんなの。

オレは目の前を横切った何かへ視線を向ける。少し離れた場所に植えられていた木の幹に、黒光りする何かが突き刺さっていた。

アレは……。

忍者御用達の暗器、苦無だ。何故そんなものが？

「おのれ、何者じゃ？」

困惑していると、耳元で女の声が聞こえた。腹の底から絞り出したような低く重い声音である。

いつの間にか、後ろに女が立っていた。それも、女の吐息と肌の熱を感じられるほど近くにだ。しかも肩から回された女の腕がオレの首を絡め取っている。

もしかするとこの神社は関係者以外立ち入り禁止だったのかもし

れない。気づいたらここにいたオレとしては濡れ衣だが、相手からすると不法侵入でしかないし、謝っておくべきだろう。事情を話せば分かってもらえるはずだ。

そうかな？

本当に分かってもらえるのかな？

気が付いたらここにいた、なんて世迷言を。

また気が触れていると思われるのがオチだろう。

「何を黙しておる。答えい。あるいは語れぬ所以があるか？」

悩んでいるオレに痺れを切らしたらしい。

女はオレに質問に答えるように急かす。それも、首元に冷たい何かを突きつけるといふオマケつきである。

オレはちら、と視線を先ほどの投擲物へと向ける。木に突き刺さっているのはやはり苦無だ。オレの首元に付きつけられている冷たいものも多分そうだろう。

そして女はこう続けた。

「御柱の御前じゃ。虚偽謀りは神罰が下ると心得よ」

それを聞いて、オレは思った。

御柱の前で刃傷沙汰を起こすのは良いの？

しかし発言した結果、女に逆上されて殺されてはたまらない。女の手元が狂えばオレはお陀仏だ。神社の前でお陀仏というのも違うかもしれないが、どちらでもいいだろう。

「おのれは何者じゃ」

女はさらに急かす。「はよ答えい」とばかりに、女はオレの首筋にちよんちよんと何かを当てて来る。

オレは第一声を何にするかを考えた結果、こう言った。

「こんにちは」

「……。おのれ、よもや気狂いの類か？」

女の言葉に警戒の色が増す。そして女は続ける。

「それとも、儂を侮っておるか？」

オレの首に女が纏わりつかせている腕の力が少し増した。

オレは穏やかな声音を心掛けて、こう言った。

「なにか誤解をされているようなので、まずは挨拶を、と思ったのですが……。不快にさせてしまったのなら謝ります。勝手にこちらへ入ってしまったことも、重ねてお詫びします」

「……」

女は沈黙している。続きを話せ、ということだろう。

オレはこう続けた。

「オレはただの迷子です」

「ただの迷子じゃと？ 童でもあるまいし、おのれのような迷子がおるものか。もう少し上等な謀りを口にせい。言つたはずじゃ。此は御柱が御前。嘘偽りは神罰が……。……む？」

女は最初、オレの返答を鼻で笑い切つて捨てようとした。しかし女の言葉尻から徐々に力が抜けていく。オレの首に纏わりつく女の腕からも僅かに力が抜けた。

背後からは身じろぎをするような気配と衣擦れの音が聞こえた。何かを探しているような動きである。

今、オレのうなじを撫でたのは女の髪だろうか。くすぐったい感触がした。

拘束は緩まったが、オレはあえて逃れようとはせず、穏やかに語り掛けることを意識して、こう続ける。

「気づいたら目の前に神社があつたので、参拝しようかと思つたんです。けどあなたの様子からして、ここは入つてはいけない場所だつたことが分かりました。勝手に入ってしまったことは改めて謝ります。申し訳ないです」

「……真か？」

背後から再び身じろぎをするような気配と衣擦れの音が聞こえた。また何かを探しているのだろうか。さつきよりも首の振りが早いのか、オレのうなじを、さつ、さつ、と何かが撫でる。

そして女の動きは止まり、こう言った。

「謀りではないのか……」

女の声は呆けたものだった。オレの首に纏わりつく腕からは、既に力が抜け切っている。

オレの心からの謝罪が通じたらしい。

オレはちら、とオレの首からわずかに離れた女の腕へ視線を向ける。

白く長い袖。和服である。

神社で白く長い袖の和服を着た女。巫女さんだろうか。

物騒な出迎えだが世の中物騒なのでそれくらいの武装はしているのは、最近の神社では普通なのかもしれない。いや、普通にちよつと行き過ぎだと思ふし、苦無も普通に考えて銃刀法違反だと思ふ。神社とかは境内ならそういうの許されたりするのかな？ 聞いたことないけど。

オレが思考している間、女もまた沈黙していた。

女の吐息がオレの首筋を撫でていて、くすぐつたい。

あの、とオレは一言断つて、こう言った。

「離してもらえませんか？ オレはあまり女性に慣れていないもので、こうずつと密着しているのは少し……」

「あ、いや、しかし……」

オレの問いかけに、女は口ごもる。女は戸惑っているようだ。

オレはさらなる一押しにこう言った。

「離していただければ、オレは帰ります。お騒がせしてしまつて申し訳ありませんでした」

「……」

女は少しの沈黙の後、オレの首から完全に手を放してくれた。そして、一步、二歩と後ずさる音が聞こえる。

オレは振り返り、女を見た。

まず最初に目に入って来たのは、やはり巫女服だった。高級な生地が使われているようだ。赤い袴も同じく、安物ではないだろう。

女は手に何も持っていないかった。巫女服の中に隠したのだろう。結局、オレの首筋に突きつけられていた何かの正体は分からないままである。

女は長髪だった。髪飾りで後ろ髪を結ってはいるが、前髪は自然に流している。どこことなく刀女に雰囲気似ている気がする。とはい



え、刀女は長髪を前も後ろもストレートに流していて、某ホラー映画の井戸から出て来る怪異のような髪型だった。一方で巫女さんの方の前髪は片目が隠れるくらいの長さだし、毛先はふんわりとしているので、違いは分かりやすくはある。

巫女さんは上から下へ、オレを観察するように視線を動かしている。まだ警戒されているのだろう。オレは改めて頭を下げ、謝罪の言葉を伝える。

すると巫女さんは戸惑ったようにこう言った。

「改めてお尋ねいたしますが、お前様はその……まことに迷い子であられると?」

なんか急にめちやくちや口調が変わったね。

まあ、不審者と参拝客では見せる態度も違うということなのかもしれない。

オレは頷いて、こう言った。

「いやあ、お恥ずかしい話です」

オレの言葉に、巫女さんはきよろきよると視線を動かし始めた。何かを探しているのかもしれないし、一応の参拝客に手荒な出迎えをしたことを悔いているのかもしれない。

まあでもしよがないと思う。どっちが悪いかと言えば、不法侵入したオレだろう。

オレは改めて頭を下げ、こう言った。

「では失礼します。重ね重ね申し訳ありませんでした」

最後の謝罪を伝え、オレは歩き出した。巫女さんの隣を通り過ぎ、鳥居へと向かう。あと数歩で鳥居を抜けるとい位置まで来たとき、背後からこのように声が掛けられた。

「もし……お待ちくださいとうございます」

オレは立ち止まり、巫女さんの方へ振り返った。

巫女さんはオレに対して姿勢を直し、こう続けた。

「知らぬとはいえ、御無礼を働いてしまいましたこと……。私わたくしからもお詫び申し上げます」

そう言つて巫女さんは綺麗な所作で頭を下げた。そうされるとか

えって申し訳なく思うのが人情である。オレも同じようにまた頭を下げた。

「いえ。オレが悪いんです」

「そのようなことはございませぬ。私の不徳の致すところでござい  
ましよう」

「いえ。オレが勝手に入って来たのが悪いんです」

「いえ、私が……」

「いえ、オレが……」

お互いにぺこぺこ頭を下げ続けて埒が明かないので、オレは途中で頭をあげて、こう言った。

「ではこれで手打ちということだ」

オレの言葉に、巫女さんもまた頭をあげて、驚いたようにオレを見る。

「お前様はそれでよろしいのでございますか」

「互いに悪いと思ってるんですから、そうしないと終わりませんよ」

「左様でございませれば、そのように」

再びぺこり、と巫女さんが頭を下げる。

綺麗な所作である。そして言葉使いが古風で雅だ。少しハスキーな感じもする声音も合わさって、聞いていて落ち着く感じがする。さっきの物騒な感じとのギャップだろうか。惹きつけられるものがある。

とはいえ、出て行くと言った手前、長居することも出来ない。ここが何処かも分からないが……見た感じ周りは山なので、山を下りて人に会ったときに聞けばいいだろう。

オレはもう一度頭を下げ、背を向けた。そして今度こそ神社を出ようとして、再び「もし」と巫女さんから声が掛けられて、振り向いた。「どうかされました?」

「いえ……ただ、もう日も隠れております。夜は獣も出ますゆえ、危のうございます。お前様さえよろしければ、こちらで夜を明かされてはいかがでございましょう」

巫女さんがそのように言った。

それを聞いて、オレはこう思った。

日本昔話……？

いや、なんか違うか。ちよつとさつきから思ってたんだけど、やっぱり変だよな？

そもそも街にいたはずなのに変な（といつたら失礼か）神社にいるつてもおかしいが、ちよつと話してただけなのに昼間から夜になるつても、時間の流れが……。

オレ、記憶が飛んでたりする？

実は自分で歩いて来たのにその間の記憶が無くなってから、気づいたら場所が変わってる、と思っちゃつてるとか。パトロールどうしよう。木刀とか茶々ちゃん探すのも途中だし……。

オレが悩んでいると、巫女さんはこう続けた。

「夜はほんに危のうごぎいます。今宵は特に……」

なんだろう。

なんか違和感があると言うか、妙な感じがする。

この周辺が熊とか猪が出る地域なら別におかしなことは言っていないんだけど……。

それだけじゃないような……。

でもさつきオレが帰るつて言った時は、この巫女さんは特に何も言つてこなかった。

オレが本当に帰るかどうか試していて、それでオレが実際に帰ろうとしたから、オレの言葉を改めて信じてくれたつて感じなのかな？

巫女さんは困つたような表情だ。オレを心配してくれているのが分かる。

分かるんだけど……。

この人の心の中ではいったい何が起きたんだろう。どういう心境の変化が……。誤解が解けた、と言えばそれまでだけど。

しかし、巫女さん、か。神に仕える女性……。

アルバイトも結構いるつて聞いていたし、オレは巫女をサラリーマンと同じく「そういう仕事」だと思つてたけど……。

もしかしてこの人は違うのかもしれない。だって、やっぱり苦無と

か普通の巫女さんは持つてないでしょ。

ちよつと話を聞いてみたい。

茶々ちゃんのときはこんなことが続くと思つてなかつたから、大人の対応としてスルーした。

刀女の時はあの子が忙しそうだったから最低限の会話で終わらせた。

明日香さんは「なんだったの？」つて聞いたけどすぐに帰つてしまった。

今朝なんてそういう話をする前に茶々ちゃんたちはいなくなつてしまった。

泊めてくれるなら、ゆつくりと話も出来るだろう。

結局今の今まで、もしかしたら、で止まっていた疑念に、答えが出るかもしれない。

オレはお言葉に甘えて、巫女さんの案内に続くことにした。

巫女？

「どうぞこちらへ」

巫女さんは掌で進む方向を示しながら小さく頭を下げると、オレに背を向けて歩き出した。オレが泊まらせて貰える場所まで案内をしてくれるようだ。

オレは巫女さんのふわふわとした後ろ髪を見つめた。黒髪の長髪は、時に重い印象を見る者に与えるものだ。べったりと張り付くような感じと言えはいいだろうか。しかし、彼女にはそれが全くない。むしろ、その艶やかな黒色には清潔感すら感じられる。それはきつと、彼女の髪先に掛けられたゆったりとしたウェーブによるものだろう。思えば、巫女さんの前髪もそうだった。目元を隠すくらいにまで伸ばされた前髪も、後ろ髪の様になふわふわとしていた。

これは所見だが、彼女の髪型は、彼女の美貌や愛嬌を引き立たせるために、よく考えられてセットされたものなのだろう。彼女の髪型は、何十年前前に一世を風靡したアイドルの髪型と類似しているように思える。しかし、そこは現代のファッションセンスを取り入れ、そして彼女自身の魅力を重ね、新たな領域へと昇華させている。

彼女の雰囲気には、手折れてしまいそうな無垢な儂さと、惹きつけられる艶やかさが混在していた。大人しく清純そうな娘にも見えるし、ねっとりとした色気を支配し切っている女性にも思える。

オレは彼女を、不思議な人だと思った。綺麗で可愛い、という形容詞がぴったりだとも思った。ただ、それは外見に限って言えばの話だ。

オレは彼女の性格を知らない。

いきなりクナイを投げつけ、首元に恐らくは凶器を突き付けて尋問を始めるという初邂逅を鑑みるに、かなり苛烈な部分が彼女の内面にあることは、疑いようがないだろう。

だからこれ以上は何とも言えない。

ただ、容姿だけで言えば、彼女はとても魅力的な女性である。質素で着飾っているわけでもないのにそう感じるのは、やはり彼女の髪型

がその容姿と絶妙に噛み合っているからなのだろう。そう考えると、髪型とはなんとも奥深いものだと感じせざるを得ない。

オレはまた熱心に髪の話を……。

髪といえば、どうしても彼女のことを思い出してしまう。

明日香さんは今頃どうしているだろうか？

彼女の髪型や髪質も凄かった。

出来るならばもう一度会って話をしたい。

もちろん髪の話ではなく、あの日の出来事についてだ。

しかしあの日からこれまで、明日香さんの目撃情報は無く、音信不通のままだ。

明日香さんは自分の連絡先を誰にも教えていなかったらしく、オレや田辺側から彼女に連絡を取ることが出来なかったからである。田辺は明日香さんと連絡先を交換していたつもりだったらしく、「あれえ？」と自分の携帯の電話帳アプリを見ながら首を傾げていた。しかし実際には登録されていなかったもので、田辺の思い違いなのだろう。

彼女の連絡先を誰も知らないという事実を知ったのは、彼女が休学してからのことだ。オレも連絡先くらい聞いておけば良かったと思うが、後の祭りである。

明日香さんには、聞きたいことが色々ある。しかし彼女と連絡を取りたいのは、やはりそれなりに親しくさせて貰っていた友人が、突然音信不通になったことに対する心配と寂しさの方が大きい。変なことに巻き込まれていなければいいんだが、あの日のことを踏まえれば、音信不通となった明日香さんが平穩無事で居るとは思えない、というのが正直なところだ。

ちなみにだが、オレも明日香さんと似たようなものである。というのも、大学でオレの連絡先を知っているのが、田辺と事務くらいだからだ。さらに言えば、田辺に連絡先を教えたのはあのカラオケの日のことである。

田辺としては、もっと早くにオレの連絡先を知りたかったらしい。だが、オレが神出鬼没である(田辺からするとそうらしい)ことで中々

その機会に恵まれず、また、断られたらショックだからという理由から、中々言い出せなかったとのことだ。

しかし二人でカラオケをして、腹から声を出し合ったことで互いに分かり合えた（らしい）ことから、思い切って行動に出た、ということからしかつた。カラオケ店の薄暗い小部屋の中、照れたように坊主頭を搔いていた田辺の姿を見て、オレが苦笑を零したことは記憶に新しい。

「もし……。どうかなされましたか？」

そんなことを考えていると、巫女さんの声が聞こえ、ふと我に返った。

巫女さんは賽銭箱の前で立ち止まり、オレの方を見つめていた。

「やはり、私の働きわたくしました先程の狼藉をお気になされて……」

「いえ、違います。少し考え事をしていて。すみません。行きましよう。案内をお願いします」

要らぬ心配をかけてしまった。

オレは小さく頭を下げ、巫女さんに合流すべく歩き出した。

オレが歩き出したことを確認し、巫女さんもまた歩き出す。巫女さんは賽銭箱の前を横切り、社に沿って奥へと進んでいく。

巫女さんの後に続くオレは、巫女さんと同じように賽銭箱の前へと進んだ。しかし素通りはせず、その場で立ち止まった。そしてなんとはなしに、社を見上げる。

趣のある、古い社だ。掲げられた額も古く、神社の名前が掠れていて読めない。鈴も綱も無い。古ぼけた綱が梁に結ばれているだけだ。経年劣化で千切れたのだろうか？

巫女さんがいるにしては、あまりに栄えていない神社である。手入れがされている様子がまるで無い。人々の記憶から忘れ去られた廃社のようだ。

そうなる、かえって靈験あらたかな感じもする。オレは趣があつて良いと思うが、人によっては不気味さを感じるのではないだろうか。所感だが、この神社にお参りをしたいと思う人は少ないと思う。

だからこそ、オレは先に行く巫女さん呼び止めようと思った。

「申し訳ないですが、少し待っていただけませんか？」

巫女さんが足を止め、ゆっくりと振り返る。不思議そうな表情を浮かべた横顔が見えた頃、オレは賽銭箱の方へと体を向けなおした。

オレは懐から財布を取り出した。中から一万円札を摘まみ出す。

「お前様……」

巫女さんが零した小さな驚きの声を聞きながら、オレは摘まんだお札を賽銭箱の中へと差し入れた。

一泊させて貰うのだから、ある程度は包んでおいた方が良いでしょうと思ったからである。

しかし直接現金を手渡すことは憚られたので、折衷案としての行動だ。とは言っても、オレは外泊の経験がほとんど無い。一万円が宿泊料金として多いのか少ないのかも分からない。あまり多すぎても厭らしいし、かといって中途半端な額にするよりは良いと思ったのだ。

手を合わせたオレは、この社に祭られた名も知らぬ神へ「宿泊させて貰います」と感謝の言葉を心の中で伝える。もしも本当に神が座す社ならば何かアクションがあるかもしれないと思い、そのまま少し待つ。特に何もなかった。少し肩透かしの気分である。

そうして参拝を終えたオレは巫女さんの方へと体を向けた。巫女さんはオレをじっと見つめている。

なんだろう。

熱い視線だ。だが、好意といった感じではない。

驚きの色が強い。そんなに驚くようなことだっただろうか。

それほど、この神社には参拝客が来ないのだろうか。そう考えると、少し切ない気持ちになる。やはりもう少し包んだ方がよかったのだろうか。

巫女さんの方へ向き直り、オレは少し頭を下げた。

「すみません」

巫女さんが目を丸くした。

「なにゆえの謝罪でございませうか？」

「お待たせしてしまっただけ」

巫女さんは一瞬きよんとして、それからクスクスと笑った。



「そのようなこと。どうかお気になされませぬよう」

何が面白かったのか、巫女さんは笑いが収まらないようだ。揺れている肩も止まらない。

巫女さんは振袖を指先で掌に挟むように持ちながら、掌を口元へと運んだ。長い振袖が巫女さんの口元から下を隠した。

「私は御柱に仕えし巫女でございますれば、参拝を歓迎こそすれ、咎めるなどあり得ませぬ。むしろその逆……至福の時にございましたも」

巫女さんの目元は緩んでいる。

「それは……なんというか……」

オレは口籠り、僅かに視線を逸らした。

彼女はこう言ったのだ。

オレがこの社に祀られる神に参拝したこと、そしてそんなオレの姿を見ていた時間は、至福の時だった、と。

彼女の表情は甘く緩んでいる。心の底からそう思っているのだろう。

なんというか、雰囲気が違うのだ。

だからこそ、オレは確信した。

——この人、色んな意味でガチの巫女だ。

重い。

率直に言えば、オレはそう感じた。

この人は正しい意味での信者なのだ、とオレは理解した。

まあ、だからどうということはない。

彼女は神社で勤務するれっきとした巫女であって、街角で「あなたは神を信じますか？」などと問いかけて付き纏ってきたりする類の人間ではないのだ。ないはずだ。

神社の名すら摩耗するほどに古い神社、古い神をひっそりと奉じる巫女さんだ。ならば敬虔な信徒であることを誇りこそすれ恥じることなど無いだろう。

ここは相当な田舎なのだろうか？

代々守って来た、とか？

だとしたら気になることもある。廃社と見紛うまでに社を放置していたことだ。もしかしたらだが、一度途絶えた信仰を、彼女が掘り起こしたのかもしれない。例えば、実家の古い物置や納屋からこの神社のことが記された書物が出て来て、色々あつて熱心な信奉者となつた、みたいなの。

だとすれば非常に興味深い。非日常うんぬんを抜きにしても、是非とも聞いてみたい話だ。この神社の歴史、そして彼女がこの神社の巫女になるまでのストーリーに興味がある。

だが、気を付けなければならぬこともあるだろう。

政治や宗教は考え方が人それぞれで、語り合うには中々に難しい話題である。と、オレは認識している。

オレは無神論者というわけでもないが、宗教への帰属意識は低い。信心深い人が聞けば不快感を覚えるようなことを、無自覚に口にしてしまう可能性も否めない。彼女のアイデンティティを尊重し、無遠慮に踏み込まないように注意する必要があるだろう。

今更だが、今の時代にここまで神を深く信仰する巫女さんが存在するとは思わなかった。

ただ、一つ思うところはある。

失礼な考えかもしれないが、オレは彼女をどうにも巫女らしくないと感じてしまうのだ。

あくまで、これは「巫女さんは清らかなものである」というオレのイメージをベースとした所見ではある。

なんというか、この巫女さん、自然な所作の中に艶が滲み出ているのだ。妙に色っぽい。

色っぽい、という点ではあの刀女と共通点がある。しかし、あの子は露骨に色気を出そうとしていた（というか背伸びしてる感があった）。

明らかに人生経験が段違いである。

だからこそ、オレは確信した。

——この人は年上だ。

恐らくオレが感じている違和感は、彼女が巫女になる前に培ってき

た人生経験が醸し出すものなのだろう。

巫女さんは賽銭箱の前を曲がって通り過ぎ、社伝いに進んで行く。石畳の階段を上り、本殿の裏手へと回った。裏手には更に小高い山がそびえていた。

木々の間に見える社務所と思しき建物は木造のものだ。木だけ。コンクリートやトタンどころか、石すら使っていない木造の箱だった。

巫女さんはここに寝泊まりしているのだろうか。神社自体それほど大きな印象は無かったが、この社務所の建物はなんとというか、あまりにもその、控えめに言って寂れている。まるで掘っ立て小屋のようで、巫女が寝泊まりする場所として相応しいとは思えなかった。それとも正面から見ると小さく見えるだけで、奥行きが凄いのだろうか。

こんなところというのも失礼だが、若い女性が一人きりで暮らせる場所なのだろうか。巫女さんの家族や、他の神職がいるとは思えないのは、あの寂れた本殿を見ているからだ。

「どうぞ、こちらにご宿泊なさいませ」

巫女さんが立ち止まり、オレに道を譲る様に脇へと避けた。

オレも立ち止まる。

オレは黙って巫女さんが掌で示す方向へと視線を向ける。オレは押し黙った。巫女さんがオレに『泊まれ』と言っているのは、やはりあの木造家屋だ。大ききで言えば豪邸なのだろうが、いかんせん造りが『豆腐』だった。広く取った四隅に柱を立てて壁を設けました、みたいな。ログハウスと言えばおしゃれに聞こえるが、さて。

確かに材料の木には困らないと思う、もしかしてこれ、自作だったりするのだろうか。

だとしたら凄い。気合いと根性が極まっている。巫女としての覚悟が違うのだろうか。オレにはとうてい真似できそうにない。尊敬に値する。

電気は通っていないんだろうな、とか。

隙間風入ってきそうだな、とか。

雨漏り大丈夫かな、とか。

虫が飛んでたら嫌だな、とか。

現代っ子の不安を尊敬の念で吹き飛ばす。

極端な話、野宿するよりはマシだろう。

そう自分に言い聞かせ、オレは巫女さんの案内に従って社務所(?)へと向かった。右端にある玄関、引き戸の前で立ち止まる。

オレの横にいる巫女さんが手を伸ばし、引き戸をこじ開けた。こじ開けたと表現した理由だが、凄い音がしたからである。何か引つかかっているのに、パワーでゴリ押ししたような豪快な音だった。

オレは無言で、じつと巫女さんを見つめた。

引き戸を開けてくれた巫女さんは佇まいを正し微笑んでいたが、やがて小さく視線だけを逸らした。なおも見つめるオレに巫女さんはほほほ、とわざとらしい笑い声を小さく出しながら、振袖で口元を隠した。

オレには滑らかに開いたように見えたが、あの音だ。扉と巫女さんの間でなにか戦いがあつただろうことは察せられる。建付けが悪いのかもしれない。だが、巫女さんはあまり触れて欲しくはなさそうだ。まあ、自宅の不備を突かれることに好い気はしないだろう。触れないのが吉だ。

オレが社務所に足を踏み入れると、壁で区切られた空間があつた。もしかしたら壁など無い巨大な空間が待っているのかと思つていたので、少し安堵する。

右側の壁に沿って土間があり、左側には式台が設けられ、小さく区切られた部屋がある。

色々と気になるものが多い屋敷であるが、ことさらオレの目を惹いたのは竈だった。

竈の上には鉄鍋が置かれている。

人生で初めて見た。竈が未だに現存している地域が日本にあつたなんて、というのはさすがに大袈裟な感想だろうか。

近づいてみると、竈の中には何かが入っている。薄い茶色が見える。

あれは。

——じゃがいもだ。

オレは疑問ゆえに思わず顔を顰めた。竈の中でじゃがいもが煮込まれている。それも多量に。

——何故じゃがいもだけがこんなに。

後ろでは再び豪快な音がした。巫女さんが扉を閉めたようだ。そのすぐ後に、後ろから声が聞こえた。

「お恥ずかしゅうございます」

声に振り返ると、巫女さんがすぐ傍にいた。早い。足音も聞こえなかった。

オレが言葉を発する前に、巫女さんはこう言った。

「夕餉の準備をしておりましたもので……」

要はご飯の準備をしていたときに人の気配を感じて飛び出して来たのでそのままにしてしまっていた、ということだろう。

恥ずかしがるのそこなんだ、とはちよつと思つた。オレなら鍋一杯のじゃがいもを煮込んでいることにちよつと気恥ずかしさを覚えただろうからだ。じゃがいもが好きなんだろうか。まさか今日の晩御飯がこれだけということは無いだろう。

しかし木々に囲まれた神社で自炊か。

凄いと思う。

今の時代、文明から距離を取つた生活をあえて選ぶ人もままいるが、実際に目にするのと改めて感心する。

しかもこの人は火を起こすところからして、マッチやライターに頼っていないようであるから大したものである。オレがそう思つたのは、竈の近くの台の上に石がいくつか置かれていたからだ。アレは恐らく、火打石に違いない。

湧き上がる感心が止まらない一方で、不便そうだなとも思う。まあ、そこはこの人が選んだことなので、オレが口を出すこともないだろう。

それにしても……。

オレは視線を周囲に巡らせた。

式台を上がつた部屋の隅には雑多なものが積み上げられている。

古そうな木箱、壺、鏡、人形などだ。よくみればサッカーボールやゴルフクラブもある。濁った何かが入ったペットボトルや、色の濃い一升瓶も転がっているが、それは見なかったことにしよう。

これは恐らくだが、この人は物置代わりに社務所（？）を使っているんじゃないか？ 社務所の中を物色したわけではないので断定はできないが、なんというか、巫女さんの部屋にしては色々統一感がない。置かれているものは古そうなものから比較的新しめなものまで、時代感もバラバラだ。というか、神社らしいものが置いてない。

「いかがなされましたか？」

巫女さんは小首を傾げてオレを見つめている。

オレは巫女さんを見てこう言った。

「いえ。色々飾ってあるなと思いました」

散らかってる、とはさすがに失礼な物言いだろうと、言葉を選んで言ったオレに、巫女さんは納得したように頷いた。

「代々受け継がれし神器を奉っておりますゆえ。どうかお触りになられませぬよう、ご容赦いただきたくございます」

なんと、積み上げられた雑貨はこの神社に代々伝わる貴重品らしい。その割には置き方があまりにおおざっぱと言うか、もう用が済んだからてきとうに放り投げていたら、そのうちに山になっていた、みたいな感じを受けるけど、巫女さんが言うならそうなんだろう。ぶつちやけゴミ屋敷と大差ない気もしないではないが、それをあえて指摘する理由もない。オレはノンデリにはならない。

オレは再び家の中を眺める。

本当に、ログハウスだ。素材を活かしているのだろう。竈のある地べたから一段上がった屋敷の床には、畳など一切ない。板間と呼んでいいものかと悩んでしまうのは、その床が丸太だからだ。丸太がそのまま並べられて、床となっている。まるでいかだのようだ。ここで寝ると腰を悪くしそうである。

まさかここで寝ることになるのだろうか。

正直、ちよつと嫌だな。

そんなオレの内心が聞こえたわけではないだろうが、タイミングよく、巫女さんがこう言った。

「どうぞ、奥の部屋をお使いくださいます。ご案内いたします」

巫女さんは履物を脱ぐときさっさと部屋に上がり、いかだのような床を進んで行く。

オレも巫女さんに倣う。再び建付けの悪そうな引き戸をこじ開けた巫女さんの後に続き、奥の部屋に入った。

期待通りと言えばそうだし、裏切られたと言えばそれもそうだろう。

奥の部屋は巨大な空間だった。最初にオレが危惧していた通りの構造。壁の無い、大広間だ。奥行きは50メートル以上はあるだろうか。壁の低い位置には等間隔に燭台が設けられていて、淡い炎が揺れている。

しかし、開放感が凄い。まるで体育館だ。

周囲を見渡せば、壁際にはやはり雑多な品が積み上げられている。床は、だいたいが先ほどの小部屋と同じようなかだ造りだったが、奥の方はどこどころ綺麗な板になっている個所もある。

もしかするとだが、この家はまだ施工の最中なのかもしれない。丸太で床を作ってから、少しずつ削って床板に変えていつているとか。だとしたら部屋の中の木くずが凄いことになりそうな気がするけど。

それか、床造りの最中に削ることを諦めて、壁や屋根の施工に取り掛かったか。その場合、彼女が一人で一からこの家を造り上げたという前提があつての話ではある。お金が無くて大工が途中で消えたという線もあるが、やはり触れるべきでは無いだろう。すごく気になるところではあるけれども。

「今宵はこちらでおくつろぎくださいませ」  
くつろぐ。

出来るだろうか。この丸太の上で。

オレは何も言えなかった。

しかし巫女さんが不思議そうに小首を傾げるものだから、オレは慌てて了承を伝える。

巫女さんは夕食の準備をしてくと退席しようとするが、オレはどうにも居心地が悪く感じてしまい、こう言った。

「お世話になるのですから、何かお手伝いさせてください」

「そのようなことは……。いえ、その御心遣い、かたじけのうございませ。であれば、薪割りをお願いいたしたく。なにしろ女手一つ、薪の調達はいささか骨が折れますゆえ」

「分かりました。薪割りをする場所まで案内して貰えますか？」

とはいうものの、不安もある。

果たしてオレに出来るだろうか。薪割りはかなり大変な作業だと聞いたことがある。

食材を切るとか皿を洗うとか、そういうのの手伝いを考えてたんだけど……。まさか、とんでもない肉体労働をすることになるとは。

歩き出した巫女さんに続いて、来た道を戻る。豆腐屋敷の外に出て、壁伝いに歩く。豆腐屋敷の壁が終わり、オレ達も一度曲がった。豆腐屋敷から少し離れた場所に、屋根だけの小さな建物があつた。近くには薪が大量に積み上げられている。

巫女さんは屋根の下、梁からいくつか吊り下げられている灯籠のようなものに火をつけた。周囲が明るくなる。

巫女さんは実践と口頭を交えて、オレに薪割りのやり方を一通り伝えてくれると、どこかへと去って行った。

見事なスイングで感心させられた巫女さんの薪割りを思い出しながら、オレは手に持った斧を言われた通りの手順で薪へと振り下ろす。

斧は見事に薪に突き刺さって停止した。

苦しい戦いになりそうだ。

しばらくして、汗だくのオレを呼びに来た巫女さんはあまり増えない薪を見て、綺麗な指先で口元を隠しながらところどころと笑った。

オレは誤魔化すように愛想笑いを浮かべざるを得ず、額に滲んだ汗を腕で拭った。

道具を片付けたオレに、巫女さんは風呂に入るように告げた。

オレが汗だくになることを見越し、既に湯を沸かし終えているとの



ことなので、オレも有難く入らせて貰うことにする。

再び巫女さんの案内に従う。その際、巫女さんからプレゼントを貰った。オレが割った薪である。記念にどうぞ、とのことだ。使い道は考え付かないが、記念なので貰っておこう。多分もう二度と人生で薪割り、をすることは無いと思うから。

薪割り場からそれほど離れていない場所に風呂場はあった。

小さな小屋だが、中はしっかりと整備されている。風呂桶も丸太そのままの造りではなく、きちんと形になっていた。巫女さんのこだわりだろう。色々と逞しく感じるが、巫女さんもお風呂を好む一人の女性ということだ。

服を脱ぎ、湯の温度を確認すると同時に掛け湯をする。頭から湯を被り、顔を掌で拭った。

そこで思う。

この湯はどこから調達しているんだろう。水道が通っている様子はない。木の小屋の中に、木の風呂桶があるだけの建物だ。シャワーも無ければ蛇口も無い。

井戸でもあるのかもしれない。だが、水は重いものだ。運ぶのも一苦労である。

つまり、彼女はわざわざオレのために大量の水を汲んできて、湯まで沸かしてくれたということになる。

現代社会で暮らしていれば、それは何の苦労もないものだ。

しかしどうやらここはそういうものと隔絶されている田舎だ。

火を起こし維持することには薪が必要で、しかも薪を用意するのも一苦労する。それを、初対面のオレのためにここまでしてくれた。

彼女の好意には頭が下がる思いである。これが巫女ということなのだろう。素晴らしい女性だ。初邂逅での粗暴など補って余りあるほどの心の根の優しい人だ。

オレはそう感じた。

「お湯加減はいかがでございますでしょうか？」

引き戸の向こう側から声が届く。

巫女さんがいるようだ。

オレは先ほどの考えを伝えるべく口を開いた。

「ありがとうございます。とても良い湯加減です。それと、重ねて感謝を伝えたいです。少し見ただけですが、ここでの暮らしは水も薪もとても貴重なものだと思います。それを初対面の迷子なオレに、ここまで振舞ってくれて……本当にありがとうございます。夕飯をご馳走していただけることもそうです。あなたのご厚意と優しさに、心からの感謝を。あなたは、とても優しい人だ」

「巫女さんからの返事は無い。」

オレはこう続けた。

「今更ですが……」

本当に今更で申し訳ないところだが、聞いておくことがある。

「オレの名前は雷留です。東堂雷留。東のお堂に、雷を留めると書いて、トウドウライルです。あなたの名前を教えて貰えますか？」

「雷留様……。私は……」

扉の向こうから声が聞こえた。

「巫女さんは一度口籠り、こう続けた。」

「雅みやびと。そう呼びくださいませ」

「雅さん……」

雅。

雅。

口の中で巫女さんの名前を反芻する。

可愛らしくて美しく、清純でありながら艶やかな巫女さん。

「……なるほど。名は体を現すと言いますが、それは本当だったようですね。あなたも、そしてあなたのお名前も、とても素敵だと思います」

「まあ、御冗談を」

くすくす、と扉の向こう側で小さな笑い声が聞こえる。

オレはこう言った。

「本気ですよ。あなたは本当に、雅な人だ」

心からの言葉を伝えた。昔に色々あったから、オレは人の好意、優しさが決して当たり前のものでは無いことを知っている。だから

オレは、人から向けられた心遣いには、感謝の気持ちをちゃんと言葉にして伝えたいと思っている。

しかし、あまりくどいとかえって迷惑と言うか、心象を悪くさせてしまう懸念もある。なので、オレは本当に想ったことを、率直に伝えることにしているのだ。

言い終えてスッキリしたオレは、湯船に浸かり静かに息を吐いた。

巫女さんの声は途切れてしまった。

どうかしたのだろうか？ いきなり黙られると少し不安になる。

そう思っていると、何やら小さく衣擦れの音が聞こえてきた。そして、さらに巫女さんの声が扉の向こうから聞こえて来る。

「雷留様。おせ」

そこまで聞こえて、巫女さんの声が途絶えた。

オレは小首を傾げて、扉の向こうへと問いかけた。

「どうしました？」

返事は無い。

「雅さん？」

返事は無い。

オレは風呂から上がり、壁に掛けてある浴衣のような白衣に手を伸ばす。巫女さんが用意してくれていたものだ。

オレは白衣を羽織る。体に付着した水分が吸い取られる感覚を覚えながら、帯を締め、扉を開けた。

「雅さん？」

外には誰もいなかった。

なにかあったのだろうか？

用意されていた履物を使わせて貰い、歩く。辺りは暗く、豆腐屋敷の壁にある灯籠の明かりが無ければしつかりと歩くことは難しいだろう。

豆腐屋敷の入り口にまで戻って来た。

雅さんは中にいるだろうか。

扉を軽く叩く。重い音がした。中に響いている感じが無い。扉を開けようとくぼみに指先を添える。

思ったよりもスムーズに開いた。

中を覗き見る。雅さんの名を呼ぶが、返答は無い。ここにはいないようだ。

困った。

見知らぬ暗い場所だ。下手に動き回ることは避けた方が良さだろう。

しようがなく、オレは雅さんが現れるのを待つことにした。

しばらく待って、お腹が空いてきた頃、雅さんが戻って来た。

戻って来た雅さんの姿を見て、オレはこう言った。

「あの、大丈夫ですか？」

雅だった髪型はぼさぼさで、巫女服はところどころ破れ、泥と赤いなにかで汚れている。血だろうか。

「なんのことでございませうか？」

雅さんは小首を傾げ、不思議そうにオレを見ている。

色々と気になることがあるが、最も気になる個所について、オレは伺うように聞いてみた。

「口元、血が滲んでるようですけど……」

す、と巫女さんの目元が陰しくなる。

雅さんは口元を指先で拭くと、懐から取り出した手ぬぐいで指先についた何かを拭った。そして、オレの位置からでは見えない、手ぬぐいについた何かを見て、驚いたようにこう言った。

「まあ」

雅さんは続けた。

「お恥ずかしゅうございます」

汚れた巫女服の振袖で口元を隠す所作をしながら、雅さんは頬を染めた。

「紅が乱れておりました……。お恥ずかしゅうございます……。お恥ずかしゅう……」

消え入りそうな声だった。

そして、こう続けた。

「雷留様。なにとぞ……。なにとぞ、堪忍してくださいまし……」

雅さんの小さく竦ませた体が震えている。その潤んだ瞳は揺れ、縋る様な視線を、上目遣いにオレへと向けている。

染まった頬は艶やかで、口元を隠す振袖を掴まむ指先は震えていた。

本当に恥ずかしがっていると感じる。

というか、聞いているこつちが申し訳なく感じるほどに、真に迫った羞恥の表情と声、所作である。

だが、ぶつちやけ口紅が乱れてたとか、そんなレベルの惨状ではない。

だが、雅さんがそこまで「これ以上は触れてくれるな」と訴えるなら、どうしようもない。オレもさすがにそれ以上踏み込む気にはなれなかった。

そして例の様に扉をこじ開けた雅さんの案内で再び豆腐屋敷の中に入ったオレは、てきとうに腰を下ろし、食事を持ってくると退席した雅さんを待つことになった。

雅さんはもう食事を摂ったとのことで、一人で食事を頂く。どういうわけか、あの大量のじゃがいもが料理として出てくることは無かった。魚に山菜、お米に漬物、そして吸い物に茶と、和食らしい和食をオレは頂いた。あのじゃがいもは一体……。

そのことも含めて、出来れば雅さんと色々と話をしたいのだが、行ったり来たりと忙しく動く雅さんを呼び止めることも出来ない。何をしているのかも気になって、洗い物を手伝いたいとお願いしたのだが、今度はやんわりと断られた。

そして食後しばらく、オレは特にすることもないまま、敷いて貰った布団を見つめていた。

天井に電球が無いと言うのはこれほど不便なのか、と実感していたところである。燭台の火のほとんどは消え、残すはオレの傍にある一つだけだった。

だからこそ、気づいた。

むしろ、何故今まで気づかなかつたのだろうか。

暗闇の中に、ほのかに光を放つ何かがある。燭台の炎ではない。揺

れていないからだ。

照らされ、光を反射しているわけではない。

それそのものが光を発している。

導かれるように、そこへ行く。

そして、見つけた。

広い部屋の隅に積み上げられた品々の中にあつたそれを、オレは手に取り、持ち上げた。

「バスタオル……」

光を放つ何かとは、公園で失つたはずの荷物だった。

正確には、木刀を包んでいたバスタオルとテニスバッグである。

テニスバッグとバスタオルが光を放っていたのだ。しかし中に木刀は無い。

オレはそれを持って、敷かれた布団のところへと戻った。

布団の上に並べる。

なんでこんなところにオレの荷物があるんだ。

それも、使い古され、ほつれの目立つバスタオルと、(掃つたものの長年の埃がちよつと残つたままの)テニスバッグだけが。それも光つた状態で。蛍光塗料なんて塗つてない。

「雷留様……」

扉の向こう側から、小さく落ち着いた声が聞こえて来たからだ。

雅さんの声だ。

オレは扉へと視線を向ける。

丁度いいと思つた。

オレの荷物について話を聞く必要がある。

今度ばかりは踏み込まないという選択肢は無い。オレにはオレの荷物に何が起きているのかを知る権利があるし、義務もある。

問いかけようとしたオレに先んじて、雅さんがこう言つた。

「一夜のお情けを賜りたく……」

扉の向こう側から届いた雅さんの言葉は、情欲の滲んだ艶やかな声で紡がれた。

——わけがわからないよ。

「あの、どういう意味ですか？」

お情け、という言い回しに心当たりはあったものの、なぜそうなったのか心当たりが無い。そのため、オレの問いかけ第一声は急遽変更された。

オレの問いかけ第一声に、雅さんは扉の向こうで小さく笑ったようだった。

「女の私に申させたいなどと……いじわるなお方……」

雅さんの声に艶が増した。悦んでいるというのか。

「私に、一夜のまぐわいのときを、お恵みくださいませ……。雷留様の精を、私の胎に注いでいただきとうございます……」

欲情掻き立てる艶を帯びた声だった。

だからこそオレは額に手を当てた。頭痛はしないが頭が痛い。

初対面のオレを性交に誘うとは、どうやら彼女は性に関する価値観がオレとは異なるようだ。

そしてオレの感じていた印象が正しかったことも分かった。アハ体験だ。スツキリして気持ちがいい。

オレの耳に、再び衣擦れの音が届く。

分かる。

この女、脱いでいるな？

「雷留様は初心でいらつしやるとのこと……。私にお任せいただけましたなら、必ずやと極楽へとお導きいたします」

——私がリードしてあげるよ、童〇君。

ということらしい。

オレは思った。

——すげえセリフだ。AVかな？

子供に読み聞かせる日本昔話など烏澁がましい。

これは、見せられないよ！な類の官能伝奇。旅人と交わる一夜妻、巫女の話は定番だろう。

忌憚のない意見だが、オレは好きだ。

さらに言えば、彼女はきつと相当な手練れだ。

彼女の言葉には、チェリーをアルカディアへ導くだけの技量を有

しているという自負が滲み出ていた。実際にその経験があるのかも  
しれない。そしてそれだけの技量を身に付けられるだけの経験も豊  
富そうだ。

興味はあるし、欲求もある。据え膳喰わぬは男の恥と言う名言があ  
ることも知っているし、勿体ないとも思う。

ワンナイトラブという格言もある。それも別に悪いことでは無い  
だろう。

雅さんは魅力的な女性だ。きっと素晴らしい夜になるに違いない。  
とりあえず、断ろうと思う。

失礼かもしれないが、性病のリスクは無視できない。

今しがたの雅さんが言動からして、雅さんが不特定多数の男性と関  
係を持っていることは明白だ。少なくとも、オレはそう捉える。

それに関してはさつきも言ったが、別に悪いことだとは思っていない。  
あくまでオレと彼女の価値観の違いでしかないからだ。

だが、性病がこの世に存在する限り、不特定多数の人間と肉体関係  
を持つということは、必然的にそのリスクが跳ね上がるということと  
同義だ。快樂とリスクのどちらを取るかの話で、オレはリスクを取っ  
たというだけのこと。

さて、問題はどうか切り出すか、というところである。

性病怖いんで断ります、と直で言うのはさすがにデリカシーが無さ  
過ぎるだろう。

何を考えてオレを夜伽に誘って来たのか分からないことには……。  
いや、いいか。

どんな理由でも断ることに変わりはないのだから、素直に言えばい  
い。

「雅さん。誘ってくれてありがとうございます。すごく嬉しいです。  
でもオレはパートナー以外とするつもりはありませんので。こうい  
うのも変な話ですが、御引き取りください」

「雷留様には……心を決めたお方がおられるのですか?」

「いえ、いません。欲してはいますけどね」

「でしたら……一夜だけでも私をお求めになっただけだけませぬ



か」

「できません。これはオレの信条の問題です。申し訳ありません」

性病のリスクを懸念しているという事実を押し隠し、オレは自分が堅物であるかのように振舞い、それを貫く。

なお食い下がって来る雅さんに若干嫌気が差す前に、オレは話題を切り替えた。

「ところで、雅さん。オレも聞きたいことがあったんです。この広間の隅に、オレが今朝失くした荷物が置いてありました。よく似たものかとも思ったのですが、どうにも似すぎているようだ。テニスバッグとバスタオルです。それともう一つ、実は探しているものがあって……木刀なんですけど」

雅さんの言葉が止まった。

「この山積み品の品のどこかに在るんじゃないかと思ってるんですけど、探してもいいですか？ 一応断っておきますけど、オレは決して雅さんが盗んだとか思っているわけでは……」

「——まさか、視えておったのか」

扉の向こう側で息を飲む音が聞こえて来た。口調が初邂逅のときのものに近くなっている。独り言のようだったが、やっぱりこっちは素なのかな？

ともかく、雅さんはきつと何か知っている。オレは確信した。

「あの、実はオレ最近悩み事があるって、それも含めて話を聴いていただければと……。……雅さん？」

返事が無い。

「雅さん？」

「この短時間でまたも……ッ！ おのれ……ッ」

何やら扉の向こうで雅さんが悪態を吐いている。

オレは扉に手をかけ、言った。

「開けますよ？ いいですか？」

さつき衣擦れの音がしたので、雅さんが全裸の可能性がある。そのため一声かけてからと思っただが、返事が無い。

「雅さん？」

返事は無い。

既視感がある。さつきお風呂でも、雅さんは急にいなくなつて、しばらく姿を見せなかった。

オレは目の前の引き戸を動かす。やはり、隣室に雅さんはいなかった。

オレはテニスバッグの中にバスタオルと汗で濡れた服、そして記念に貰った薪を突っ込んで大広間を出る。土間に降り、外へ出るための扉の前に立つ。くぼみに手を入れると、今度はスムーズに開いた。

「凄いい風だ……」

夜なので遠くは見えないが、近くに見える木々は物凄く揺れている。まるで台風の日のヤシの木のようなだ。

吹きすさぶ風の中、遠くに光が見える。オレの手にあるバスタオルが同じ色の光を放っている。関係があるのだろうか？

導かれるように、オレは光の方へと進む。生い茂る木々の中へ入るが、光を見失うことは無かった。

そして気づいたら、家の裏手にテニスバッグを持って立っていた。

——— なんてだよ……。

久しぶりに本気で落胆した。

もしかしたら何か掴めたかもしれないと言うのに。

また白昼夢でも見ていたのかと思うが、今度はしつかりと証拠がある。オレが今着ている服が、風呂上がりに借りた白衣だったからだ。そして汗に濡れた服と薪がカバンの中にあつたが、テニスバックもバスタオルも、もう光つてはいなかった。

ただ一つ収穫はあつた。バスタオルとテニスバッグが戻つて来たことだ。

そしておそらくだが、木刀はまだあの神社にある。

一度家で着替えたらまた探索に出ようと思ひ家の表に回ると、東堂家の門の前に人影が見えた。

背中を扉に預け、片足をぶらぶらと泳がせている。

タンクトップにダメージジーンズ、髪はポニーテールというなんとモワイルドな格好だ。そしてあの金髪。間違いない。あの夜の女の

子だ。

金髪の女の子はオレに気づくと目を丸くして固まった。頭の後ろで組んだ腕がゆっくりと解かれて降りていく。ぷるぷると震えている女の子に、オレは言った。

「こんにちは。久しぶりだね」

「こ、こ、こ」

鶏かな？

女の子が吃音状態になっている。

「こんなどころで奇遇だな！」

女の子が元気よく言った。

「そうだね」

ここオレの家だけだね。

ちよっと和んだ。

## ヤンキー？ 2

雅と言う名のスケベ（とも違うなんかエロい）な性の価値観がオレとだいぶ違う巫女さんとの別れの後、金髪のヤンキー少女と再会した。世紀末染みた大事故の連発、奇妙な巫女さんとの邂逅、失くしたはずの荷物の発見と意味不明なことが畳み掛けてきたこともあって、金髪のヤンキー少女との再会は、オレの心を落ち着かせてくれた。

人間、未知が続くと脳の機能が著しく低下するのだな、とオレは感じた。そして日常の中に戻ると低下した脳機能が回復するのだな、とも思った。

ヤンキー少女はヤンキーなだけで、特に変わったところは無い普通の女の子だ。だからだろう。ヤンキー少女を見た時、ずんぐりとしていたオレの思考が軽くなったのだ。

そうか。

オレは彼女を見て安心したんだ。

となると、存外、オレも度重なる異変によってストレスを感じていたらしい。

「な、なんだよ。人のこと見てニヤニヤしやがって。み、見せもんじゃねーぞ！」

不躰なオレの視線に不快感を抱いたのか、ヤンキー少女が強い語尾で言った。

ニヤニヤしているつもりは無かったが、ヤンキー少女を見つめていたことは確かだ。

オレは片手をあげてこう言った。

「ごめんね。その恰好がよく似合ってたから、まじまじと見ちゃってたみたいだ。君の魅力がよく引き出されてると思う。君はセンスがいいんだね」

言いながら、オレはテニスバッグを持っていない手を顎に持っているき、口元を隠すように掌を広げ、指の腹で両頬を摩った。

「でも。オレ、そんな変な顔してた？」

むにむにと自分の両頬を押す。

ヤンキー少女は唇を震わせている。焦ったように目も揺れていた。「い、いや……。その……。ニヤニヤは、してなかった、かも……。です……」

先ほどと違い、語尾が弱弱しい。

ヤンキー少女は項垂れている、とまではいかなくとも、少し首を垂れている。

落ち込んでいるように見えるが、オレの感想が気に入らなかったんだろうか。

それとも、先程強い口調でオレに言葉を放ったことを後悔しているのだろうか。

多分、後者だろうな。

この子は繊細で、だからこそ自分を守るために攻撃的になつてしまう弱点があることは、あの日の夜のやり取りで察している。もちろん、攻撃的な人間のすべてがそうであるなどとは思ってはいない。

あの夜は、この子はそうじゃないかな、と違ってそういう対応をした。そしたらぴったりとはまったみたいなので、彼女に関してはそうだったという話である。

良かった、というのが正直なところである。

もしもオレの考えが間違っていて、例えば若さゆえの万能感から来る傲慢さが攻撃的な言動を生じさせていたならば、オレの対応は『見下されている』と捉えられるリスクもあつたからだ。

あの夜は彼女が切羽詰まっている様子だったからオレも少し性急な距離の詰め方をしたが、本当ならもう少し時間をかけて生活歴や価値観を知り、人となりを知つたうえで関係を深めていきたいところである。

安易な信頼や信用は、自分を傷つけることになるからだ。オレはそれを経験として知っている。

ともかく、オレはニヤニヤはしていなかったらしい。

良かった。

二十歳のオレが中学生くらいの子にニヤニヤと視線を向けているなんてことになれば事案である。

ふと思ったオレは、彼女に問いを投げかけた。

「じゃあ、オレはどんな顔してたの？」

「あう……」

ヤンキー少女が梅干を食べた時みたいに顔を窄めた。

そんな顔になるような質問だとは思えないんだけど、彼女にとっては違ったらしい。

「オレ、そんな答えにくい顔してた？」

「ち、ちげえよ！」

ヤンキー少女は強く言い切つて、うつむき気味に視線を逸らした。かと思えば、ちらちらとオレに視線を送つて来る。

この仕草で考えられるのは。

照れているか、怯えているか。

といったところだろうか。

オレ自身は怯えさせるようなことをした覚えはないから、年上の男性とのコミュニケーションにあまり慣れていないがゆえの羞恥があるのかもしれない。

しかし、あの夜の言動からして、彼女は年上の男性に対して、なにか嫌悪感や侮蔑のような感情を抱いている様子があった。そう考えると、怯えという線も無くはないか。

後者の場合を考えると、茶々ちゃんにするような対応は避けた方がよさそうだ。

彼女が何を考えて再びオレの家を訪ねてきたのかは分からない。ただ、オレを頼りにして来たのなら、受容の姿勢をメインにした方がよさそうだ。

「大丈夫だよ。気にせず言ってみて？ 別に怒らないから。君の感想を聞いてみたいんだ」

「あう……」

微笑みを交えてそう言うと、彼女は今度は唇だけをきゅ、とすぼめて体を小さく縮こめてしまった。ちら、ちら、とオレへと視線を向けてくる。

距離感を測りかねているのだろうか。

言い辛そうにしているところを見るに、オレを不快にさせてしまうのではないか、と考えている可能性がある。

それは大事なことなので、オレとしては嬉しいところである。

強気なのは彼女の長所だと思うが、無遠慮に強い言葉を使い続けると敵を作りやすいし、せっかくの縁が離れていくこともあるだろう。そうなれば彼女自身が将来損をするので、オレでコミュニケーションの経験を積み、引き出しを増やしておくのは悪くないと思う。

オレの視界の先で、彼女の唇が緩んでいく。

「か、か」

「か？」

また吃音みたいになってる。

かつこいいい、とか言ってくれるのかな？

「関係ねーだろ！ あたしがあんたをどう思っても！」

彼女から発されたのは拒絶の言葉だった。

残念。

だけど、あんた、か。じじい、じゃないんだな。

それだけでも前進したと捉えて良さそうだ。

まあ、立ち話はこれくらいで終わりにしておこう。

オレは本題に入るべく、こう言った。

「ところで、今日はどうしたの？ 家の前にいたってことは、オレに会いに来てくれたんだよね？」

「あう……」

まただよ。

そんな人見知りな印象は受けないというか、初対面の時ははずばずば言って来た覚えがあるけど、どうしたんだろう。

とはいえ、分からなくはない。

あの日の夜、彼女は怪我をしていて自暴自棄気味な興奮状態にあった。落ち着いて思い返したとき、自分の言動に思うところが出てきたのだろう。

オレは続けてこう言った。

「丁度良かったよ。オレも君に用があつてね。会いたいと思って探し

ていたところだったんだ」

「あたしに……？」

意外そうな表情を浮かべた彼女に苦笑する。

「そうだよ。君、オレの家に木刀を忘れていったろ？」

オレの言葉を聞いた彼女は妙に嬉しそうな顔をして、身を乗り出すように言った。

「そ、そうだよ?! 木刀を忘れたんだよ! あー、忘れちゃったっけなあ、木刀!」

凄じい喰いつきである。

彼女に勢いにオレは内心でちよつと引きながら苦笑を浮かべ、こう言った。

「ただ、話したいことって言うのはそれだけじゃないんだ。いくつかあつて……これから時間あるかな?」

「あ、あるよ!?! しょうがねーな! 時間あるからしょうがねーな!」  
「別に無理しなくても、ちよつと待ってくれれば……」

オレの言葉を遮るように、彼女がこう吠えた。

「あ、あるつつってんだろ!」

「そう?・ならよかった」

いちいち突つかかかって来るのは正直面倒くさいところだが、彼女なりにコミュニケーションに一生懸命なんだろうことは分かるので、苦笑で受け流すことにする。

オレは彼女に、というか家の鉄柵に近づいて行き、鍵を開ける。きい、と音がして柵が開き、オレは玄関へ向けて進んで行く。

「……?」

オレは気配を感じて後ろを振り向いた。

無言の彼女がオレの後に付いてきている。

結構ぴつたりと。

もしかしなくても、オレの家に上がるつもりなんだろうか?

どこか落ち着ける飲食店にでも連れて行って食事(オレは腹は空いてないのでデザートくらい)でもと思ってたんだけど。

確証がないのでオレはそのまま帰宅のための動きを続ける。



テニスバッグの中を弄り、ズボンのポケットの中から鍵を手探りで取り出し、家の扉を開ける。

その間も、やはり彼女はぴったりとオレの後ろについている。というか、そわそわしている。

扉が開くのを心待ちにしているようだ。

彼女を家にあげるのは別に良いんだけど、彼女はそれでいいんだらうか。

一人暮らしであることは伝えているはずだ。うら若き乙女が、一人暮らしの男の家に腹を見せた猫みたいなの無警戒さで上がり込もうとするのはいかがなものだろう。

まあ、今更なただけど。

「ここで待ってて」と今から伝えるのは簡単だが、ちよつと悩むところだ。見た感じだが、完全にその気な彼女に恥をかかせることになりそうに憚られる。

例えば。

「別にあがる気なんてねーし!! ざけんなじじい!」とへそを曲げられ意固地になられたら面倒だ。かといって、オレの家に上がるものだと思いついていた自分の勘違いに気づき、それをオレに気づかれたと察したときの羞恥心で、彼女がまた「あう……」と縮こまってしまいうのも、それはそれで可哀そうだ。

というか、オレが気まずい。

もつとはやく、家の門を開けるときに伝えておけばよかった。玄関扉の前で伝えようとしたのが仇となった形だ。

仕方がない。

ここは彼女に任せよう。

扉を開けて、彼女がどうでるか見てから対応を決めよう。

オレは玄関扉を開けると、自分の体で扉を押さえるようにして隅に寄った。そして半身になって道を空け、彼女へと視線を向ける。

すると、彼女は躊躇う様子もなく、オレの前をスーッと、当たり前前の様に通り過ぎて行ったのだ。

オレは思った。

あ、やっぱそうなんだ。

そんなオレの内心も知らず、そして彼女はこう言った。

「お、お邪魔しまあ……す……す……」

そして彼女はいそいそと靴を脱ぎ、式台を上がると、ごく丁寧なことに靴まで揃え始めた。

なんだろう。

可愛い。

まるで小動物が与えたエサをはむはむしているのを見ているような気分だ。

彼女、見た目はギャルを越えたヤンキーなんだけど。というか、工事現場に居そうな感じなんだけど。

彼女の間違いと言うか、勘違いをオレが把握してるからだろうか。彼女を見守ろうとする母性や父性のようなものが、オレの中にむくむくと顔を出すのが分かる。

このことは墓まで持って行ってあげよう。

「な、なに笑ってんの」

オレを見る彼女は訝し気に、どこか恥ずかし気に言った。

微笑みが零れてしまっていたようだ。思えば、家にお客さんが来るなんていつ以来だろう。

正直、記憶にない。

だからか、オレ自身もちよつと嬉しいのかもしれない。

でも、それは別に伝えるべきことではないだろう。

「なんでもないよ」

オレはそう言つて、こう続けた。

「いらつしやい。ゆっくりしていつてね」

「……あう」

まただよ。

唇を小さく閉じて、彼女は縮こまってしまった。

さつきから、そんなに変なことを言ってるつもりはないんだけど、彼女にとってはそうではないらしい。

何か事情もありそうだ。

そう思いながら、オレはリビングへの扉を開いた。

「適当に座ってて。飲み物を用意するから。リンゴジュースで良い？」

「え？ あ、うん」

「お菓子とかもあるけど、食べる？」

「え？ あ、うん」

「遠慮しないでいいよ」

そう言いながらキッチンの方へ向かい、冷蔵庫からリンゴジュースとシュークリームを取り出した。シュークリームはコンビニで売っている、小さなシュークリームがいくつか入っているものだ。自分で食べようと思って先日買ったものだが、まだ賞味期限も迎えていないし、封も開けていないので大丈夫だろう。

シュークリームを皿に乗せ、リンゴジュースを入れたコップと一緒にお盆に乗せてリビングへと戻る。

彼女は借りてきた猫の様に小さくソファに座っていた。

さつきから思っていたんだが、あの夜と違い過ぎて違和感を覚える。傍若無人な態度を取られるよりはよっぽどいいんだけども。

あれから、どんな心境の変化があったんだろう。気になるところである。

オレは彼女の前にお盆を置いて、こう言った。

「少し待っててもらえるかな？ 着替えたいんだ」

「……だ、大丈夫。です」

「ありがとう。ごめんね。そんなに時間はかからないと思うけど、暇ならテレビも付けていいからね。DVDプレイヤーには怪獣映画が入ってるけど」

「か、怪獣……？」

彼女は驚いたようにオレを見た。

そして、小さくこう呟いた。

「意外……」

「変かな？」

「へ、変じゃねえけど……」

驚きからか素の口調が出た彼女は、それに気づいていないのか、更にこう続けた。

「その、北極物語とか見てそうな感じだし」

それは数十年前に一世を風靡した、北極に取り残された探検隊を描いた大ヒット映画の題名である。

「はは。それはそれでチョイスが渋いな」

見た目で判断して失礼だが、まさか彼女の口からその名を聞くことになるとは思わなかった。

オレは思わず苦笑を浮かべた。

すると、彼女も小さく噴き出すように笑った。緊張が少しは取れたようで、思わぬ収穫だった。

「じゃあ、着替えて来るね。少し待ってて」

「……はい」

しおらしく返事をした彼女を残し、オレは二階に上がった。

自室に荷物を置いて、さっさと着替え、下に降りる。

さすがにか、彼女はテレビは付けていなかった。

シユークリームは既に無くなっていた。

リビングに入ったオレを見ながら、彼女はおずおずと口を開いた。

「あの……」

「うん？ どうしたの？」

「シユークリーム、ありがとな。こんなの、久しぶりに食ったから……」

彼女ははにかんだ笑みを浮かべている。喜びが滲み出ているのが分かり、オレとしても嬉しい限りである。

なのでオレはこう返した。

「なら、出した甲斐があった。そうだ。もつと食べる？ 遠慮しないでいいよ。君に喜んでもらえる嬉しいからね」

「あう……」

まただよ。

でも、なんとなく分かって来た。

どうやら彼女、オレが彼女の意味や言葉が無条件に受け入れると今

みたいにフリーズするらしい。慣れていないようだ。

逆を言えば、彼女は基本的に自分の意見を受け入れて貰えないか、否定や拒絶をされるような環境に、日常的に置かれていたということだろう。根が深そうだ。

オレは彼女の返事を待たず、彼女の目の前の皿を手に取り、キッチンへと向かった。再び冷蔵庫からシュークリームシュークリームの箱を取り出し、残ったミニシューを皿にのせてリビングへと戻る。ちよつとカクリーが多いかなとも思うが、若いから大丈夫だろう（残酷）。

「はい。どうぞ」

「あ、ありがと……」

彼女はほんのりと赤面している。

恥ずかしいのだろう。しかしその目はシュークリームに釘付けだ。

「遠慮しないで。……謝らなきゃいけないこともあるし」

「……え？」

オレの言葉に、彼女は不安げに瞳を揺らした。

オレも机を挟んで彼女の前に座り、まずはこう言った。

「とりあえず、名前、教えて貰える？」

「あ」

名前を交換していなかったことを忘れていたのだろうか。彼女は呆けた表情を浮かべている。

「信乃しのぶ。信じるに、えっと……その、こういうの書いて……」

彼女は宙を指先でなぞり、一生懸命漢字を書き始めた。

オレの方からは反転した字になるわけだが、なんとなく分かった。

「それで、しのぶってんだ。あたし」

「なるほど。難しい漢字じゃないけど、いざ伝えるとなると難儀する字だね。オレも例が分からん」

「あんたもか……」

言い方的に、ちよつと期待されていたのだろうか。

しかし、それにしても少し安堵しているようにも見える。「乃」という漢字の例を挙げられないという仲間意識の方が強そうだ。

オレは続けて言った。

「信乃ちゃんは、苗字はなんていうのかな」

「……言いたくねえ」

ヤンキー少女改め信乃ちゃんはそう言うのと眉根を寄せて俯いてしまった。

「ここも根深そうだな。」

「なんだろう。」

苗字が嫌いなのか。だとしたら両親と折り合いが悪いのか。

それとも、有名な苗字だったりして、それを知られると不都合があるのか。

分からないが、無理に聞き出すことも無いだろう。

オレは頷いて、こう言った。

「そっか。無理には聞かないよ。信乃ちゃんのタイミングに任せる」

「……わりい」

少し空気が重いので、話題を変えるべくオレはこう言った。

「オレの名前は雷留。東堂雷留。苗字の方は表札で見えて知ってるかもしれないけど、名前は雷を留めるって書いてライルって読む。改めてよろしくね」

「よ、よろしく……」

信乃ちゃんはおずおずと続けた。

「あの、ライルさん。さっき言ってた『謝らなきゃいけないことがある』ってのは……」

「ああ、そのことだけだ」

「ごくり、と彼女が生唾を呑み込む。」

何を謝られると思ってるんだろう。そんなに身構えられると、こっちの方が緊張するんだけど。

「君がうちに置いて行った木刀なんだけど……失くしてしまいました。本当に申し訳ない」

オレは頭を下げた謝罪した。

「……は？」

信乃ちゃんはぼかんとした表情を浮かべている。まあ、当然の反応だと思う。

「なんだ……そんなことか……。てつきり……」

信乃ちゃんの様子からして、木刀はそれほど大切なものでは無かったらしい。

「てつきり?」

「あ、いや、気にしねえでくれ。でも、なんで失くしたんだ?」

信乃ちゃんの問いに、オレは一から順を追って説明した。

最近、近所に金髪の不審者が出るという話があり、もしかしたら木刀を取りに来た君かもしれないと思って、木刀を持ってパトロールに出た矢先に木刀を失くしてしまったことを。

「ふ、不審者……。あたしが……」

信乃ちゃんの顔がみるみると青ざめていく。

「ライルさんに迷惑を……」

あ、これヤバイかも。

オレはすぐさまフォローに入る。

「大丈夫。あくまで噂だ。君のことかどうかはまだ分からないよ」

「で、でも金髪で女でこの辺うろついているって……」

うろついていたのは否定しないのか。

「うろついていたの?」

「え、いや、その……。はい……」

うろついていたらしい。

オレは思わず苦笑を浮かべながらこう言った。

「普通に訊ねて来てくれたらよかったのに」

「え?」

信乃ちゃんは目を丸くしている。

もしかして気付いてなかったんだらうか。

だとしたら相当抜けてるぞ。

「まあ、今はちようど……。何と言えばいいかな。温泉……。でもないんだけど、ちよつと旅館に泊まってて」

「あ、それでさっきの服?」

「まあ、そんなところかな」

本当はもつと複雑な事情があるのだが、あまり詳しく話す必要は無

いだろう。

オレは話を続けた。

「お詫びと言ってはなんだけど、弁償をさせて欲しい」

木刀の在り処に心当たりが無いわけではないが、戻ってくるという保証はないし、再会した以上は筋を先に通しておくべきだろう。オレの管理不足が原因なのは間違いないのだから、仕方がない。

「代金を教えて貰えれば、用意するよ。同じ木刀を買うのがいいんだろうけど、オレは木刀を売ってる場所にまったく覚えがないから、申し訳ないけど君の方で……」

「別にアレは……。あつー！」

彼女はそこまで言って、口を噤んだ。

そして思い立ったように立ち上がり、オレに何かを叫ぼうとして、また座り直した。

「どうしたの、急に」

「自己嫌悪」

「え？」

何か叫ぼうとしていたが、その口にはしなかった内容で自己嫌悪に陥っているらしい。何を言おうとしたのか気になるが、聞かない方が良さだろう。

なんかまた重い感じになってしまったので、少し話題を変えようと思っただけはこう言った。

「そういえば、信乃ちゃんは何の用でうちに来たの？ やっぱり木刀を取りに来たってことで良いのかな？」

「それもあつけど……」

ちら、とオレを見て、信乃ちゃんが口を閉じる。

他に何か理由があるらしい。

「……」

「どうしたの？」

黙り込んでしまった信乃ちゃんに、オレは穏やかに話しかける。

「……」

信乃ちゃんはちら、ちら、とオレに視線をくれるが、口は開かない。



少し待ってみようと思ひ、微笑みを浮かべたまま信乃ちゃんの手元へ視線を向ける。目を合わせるとプレッシャーが辛いかなど思つての行動だった。

そうして、信乃ちゃんの手がぎゅ、と拳を握ると同時に、信乃ちゃんは勢いよく言った。

「あ、あんたに会いに来た!!」

男は度胸、女も度胸、とでも言うような啖呵だった。

面食らつたオレは数度続けて瞬きをする。

「そっか。オレに会いに来たんだ……?」

とりあえず彼女の言葉を受容し、ゆっくりと切り返す。

「会いたいと思つて貰えるのは素直に嬉しいけど……。それは木刀を取りに来たつてだけじゃなくて?」

「あ、あんたが言つたんだろ!!」

彼女はそう言うが、心当たりが無い。

なんて言つたかな、あのとき。

確か、一階を好きに使つて良いとかだったか。いや、それでまたオレに会いに来るつてことは無いよな。さすがにこれから先ずつと永遠にこの家の一階を好きに使つて良いと言う意味で言つたわけじゃない。そう言う意味で捉えられたならさすがに訂正しなければならぬ。

だが、彼女もそこまでじゃないだろう。

となれば、きつと別の言葉なわけだ。

他に印象的な言葉と言えば、「休んで良い」とかか。あれも、今はつて枕詞を付けたと思つたが、とりあえず聞いてみようか。

「信乃ちゃん。もしかしてうちに休みに来たの?」

かあ、と信乃ちゃんの顔が赤くなつた。

当たつていたらしい。

良かった。何やら妙な信用を向けられているのは感じていたので、それを裏切らずに済んだことにオレは安心した。

「そっか。それは……中々、自分からは言い辛いことだったね。悪かつたね。恥ずかしい思いをさせてしまつた」

「こ、子ども扱いすんじゃないやねえよジジイ！」

「ジジイ扱いしないで欲しいなあ」

オレは苦笑を浮かべながら、考えをまとめようと思考する。

信乃ちゃんが家の近所をうろついていたことが事実であることが分かった。

だとすれば金髪の不審者の正体が彼女の可能性も高まる。

今夜のパトロールに彼女を連れて行って、オレから町内会の人達には謝罪と、今後はこんなことが起きないように対策も一緒に伝えよう。

対策は……。

彼女をこの家に寄せ付けないか、約束をした時だけ来てもらうようにするかの二択か。

彼女の様子からして、オレは彼女にそれなりに慕って貰えていることは分かるので、前者はさすがに取れない。となれば後者になるわけだ。連絡先を教えておけばいいかな。

とそこまで考えて、時計を見る。

オレはどれくらいあの神社にいたんだろうと思ったのだ。

午後の二時。町内会の人達と別れてから一時間ほどしか経っていない。そう言えば、あの大事故はどうなったんだ。

オレはリモコンを手に取りテレビをつけ、チャンネルを次々に変えていく。どのチャンネルでも、あの大事故のニュースはやっていなかった。

「夢……？」

「……？」

不思議そうな顔をしている信乃ちゃんだが、今はちよつと対応してあげられない。

オレは考えを続ける。

あの神社が現実にあったものだということは確かである。疑う余地はない。

だが、あの大事故に関しては分からない。そして、一時間の間にどうやって神社に行って帰って来たのかも分からない。

正直なところ、少し混乱している。

また精神科に行く必要があるのか、とかつての嫌な記憶が蘇る。

継る様な気持ちで、オレは信乃ちゃんにこう言った。自分でも弱弱しいと感じる声だった。

「信乃ちゃん。魔法とか、超能力とかつて……あると思う？」

信乃ちゃんの方を見ず、テレビをじつと見つめながら言った自分の言葉に、苦笑する。

二十歳を越えた男が、恐らくは15歳前後の女の子に問うような内容ではない。恥ずかしいし、愚かだ。

オレは忘れてくれていい、と今の質問を取り消そうとした。

その前に、彼女はこう言った。

「は？」

信乃ちゃんの言葉は短かった。

呆れか、困惑か。

——君は事故のショックで……。落ち着いて……。あの子は……。……解■人■害……

かつて医師が言っていた言葉がフラッシュバックする。

それを忘れるために、オレは普通に、心穏やかに生きることを決めたのだから。

「も、もしかして、ライルさんも……？」

オレは思った。

も、つてなんだ。

今度はオレが困惑と疑念を向ける番だった。

まじまじと信乃ちゃんを見つめるオレに、信乃ちゃんは何を思ったか、酷く興奮した様子で立ち上がりつた。

鼻息が酷く荒い。鼻の穴が広がっていることは気づいていないことにしてあげよう。

そして信乃ちゃんはこう言った。

「あ、あたしきー！ 未来が視えんだよ!!」

オレは思った。

信乃ちゃん、君……。

——ヤンキーモノじゃなくて、SFかよ。  
とんだ近くに答えが転がっていて、オレは乾いた笑いを零すほかな  
かった。

既に失った若さゆえの勢いが、オレは少し羨ましかった。

## ヤンキー？ 3

ソファから立ち上がった信乃ちゃんは、鼻息荒くオレを見つめている。

信乃ちゃんの瞳は爛々と輝いていて、興奮していることは明らかだった。これまで誰にも打ち明けられなかった悩みを開示できるかもしれない相手が現れて、歓喜しているように見える。

さて、オレはそんな信乃ちゃんになんと声をかけるべきだろうか。初邂逅のときから思っていたことだが、この子には余裕というものが無い。

たびたび攻撃的な面が現れていることから、それは間違いないだろう。

だからこそ、あの夜と比較したときに感じられる彼女の変化は、オレの対応が間違っていないならば、心を開き始めてくれていることの表れと見て良いと思う。

それを踏まえた上で結論を出す。

オレは慎重になるべきだ。

信乃ちゃんがオレに秘密を明かしたことは、オレに対して絶対的な信頼を抱いているから、というわけではないと思うからだ。

他に縫うものが無いこと。

これが一番大きな要因だろう。

そして、彼女がまだ若く、その精神が発達途中であるということもそうだ。彼女はまだ、感情の発露を留める術を持たない。それは彼女との関わりが短いものであっても、十分に感じられることだ。

他に縫うものが無く、激情を抑えきれない。

だから彼女は勢いのままに言葉を口にしたのだ。未来が視えるなどという、普通に考えればあまりにも馬鹿げた与太話を。

オレはテレビを消して座り直し、微笑みを意識して、興奮している様子の信乃ちゃんへと視線を向ける。

「落ち着いて、信乃ちゃん。ほら、座りなよ。飲み物のおかわりを持ってくるから」

「あ、あたしは本気でツ!! あんたもやっぱり……っ!!」

オレは座つたまま掌でソファを示し、座る様に促した。

しかしオレを見降ろす信乃ちゃんはそう言つて、悲し気に表情を歪めてしまった。

興奮して話す言葉には、本人の思い込みや感情論が多く入る。支離滅裂にもなりやすい。それを避けるための提案だったのだが、信乃ちゃんはそうは捉えなかつたらしい。

オレは小さく首を振つた。

すると信乃ちゃんはその表情に悲哀の色をさらに濃く現した。余程心の傷が深いのかな。

オレは宥めるように手をあげて、こう言つた。

「信乃ちゃん、落ち着いて。大丈夫だよ。誤解させたようだから謝るけど、恐らく君が考えているだろうことは、オレの言動には全く繋がらない。オレはただ、長い話になりそうだからその準備をしようと思つてるだけだから」

オレが言い終わると、信乃ちゃんはぽかんとした表情を浮かべた。オレの言葉の意味を理解しかねているようだ。

「君も、積もる話があると思うしよ」

信乃ちゃんはぽかんと硬直している。

「ゆつくり君の話の話を聞かせて欲しい、とオレは思つてるんだけど……。どうかかな?」

ぱち、ぱち、とゆつくりと瞬きをした信乃ちゃんは、次の瞬間、物凄い速さで首を上下に小刻みで動かし始めた。

どういう意図があつての動きかは……まあ分からなくはない。

オレは小さく笑い、こう言つた。

「首、取れるよ」

オレは小さく笑つた。

「あう……」

信乃ちゃんは顔を真っ赤にして、見た目にそぐわぬ（失礼）行儀の良さで、ちよこんとソファに座つた。

オレは席を立ち、再びキッチンへ向かつた。冷蔵庫に保管されてい

る飲み物の中から、濃縮還元果汁100%のちよつとお高めのリンゴジュースを選び、リビングへと戻った。

信乃ちゃんの前に置かれているコップへ、とぶとぶとジュースを注ぎ、オレもソファに座る。

オレは信乃ちゃんを見据えて、こう言った。

「まず、最初に言っておきたいんだけど……」

すると彼女はびくりと身体を震わせ、姿勢を正すように背筋を伸ばしてこちらを見た。緊張しているのか、その表情には若干の不安の色が見える。

「どうやらオレの言葉を聞き逃さないよう集中してくれているようだ。」

「こういうところを見ると、やつぱりまだまだ子供なんだなって感じてしまう。年相応って言えばいいかな？」

まあ、でも、こんな状況での一言目がこれってのはちよつと怖く感じるかもしれない。

何を言われるんだろう、と委縮してしまっただろう。これはオレのミスだな。

「夕方にちよつと用事があつてね。出なきやいけないんだ。もし話がそれ以上長く続きそうならまた後日か、用事の後でいい？」

「……？」

信乃ちゃんは無言のまま小首を傾げた。

「実は町内会の集まりがあるんだ。色々事情があつてどうしても抜けられなくてね。申し訳ないんだけど、そこは分かつて欲しい」

「え、あ、いや……別にそりゃ構わねーけど……」

信乃ちゃんは困惑した表情を浮かべたかと思えば、呆れた様にオレを見つめて、こう続けた。

「あのさ、KY（空気読めない）って言われねえ？」

「うーん……？ オレはなるべくマイペースでいることを意識してるから……。それをKYと呼ぶなら……そうかもしれない」

「それをKYつつーんだよ!!」

「そうなのか？」

違くないか？

何故ならオレは別に空気を読めていないわけではなく、マイペースを崩さないようにしているだけだからだ。空気をあえて読んでいないというわけでもない。

それこそ、彼女が何を望んでいるかを察して、その期待に応えたつもりだ。

けどそこを議論しても意味は無いだらう。

彼女がそう思うなら彼女の中ではそうなのだ。別に彼女の認識を訂正させるほどの問題でもないし。

しかしオレが不服に思っていることが伝わったのか、彼女は口調荒くこう続けた。

「こ、こないだも!!」

そう怒鳴った彼女は何か気づいたように表情を気ままずげに変え、怒り肩をしゅんと降ろし、小さくこう続けた。

「……そうだったじゃん」

拗ねた様に唇を尖らせる彼女に、オレは苦笑を浮かべた。

「そっか。なんかごめんね」

「え、あ……。べつに、謝ることじゃねー……です」

信乃ちゃんは、ふい、と顔を背けてしまった。

機嫌を損ねてしまったようだ。だが、怒りの感情を感じないところを見るに、傷つけたというわけではなさそうだ。

続ける言葉を持たないのか、信乃ちゃんは気ままずそうにしている。

未来が視えるっていう話をすればいいのに自分から話題を変えないということ、オレに再び口火を切って欲しいということか。

となると、信乃ちゃんはそういう甘え方の子なのかもしれない。

いわゆる誘い受けてやつ？

自分から行くというよりは、切っ掛けだけを作って、最終的には構って貰う方向に流れを持っていく感じの甘え方。

違うかもしれないけど。

だとすれば、とオレは思った。

なるほど。面倒くさい子だ。



オレは微笑みの下に内心を隠し、こう言った。

「それで……未来が視えるって話だったけど、今日ここに来たのはそれに関してなのかな？」

「……え？ ああ、うん……そーだけど」

信乃ちゃんは一瞬きよとした表情を浮かべた後、こくりと首肯した。

そして訝し気な表情でオレを見る。

「どうかした？」

「いや……信じてくれんのか？ あたしのこと……」

信乃ちゃんはまるで怯えた子猫のようだ。

落ち着いた彼女は、自分の立ち位置が視えて来たらしい。

勢いで秘密を打ち明けた結果、再び自分が傷つくリスクに晒されているという現状が。

さて、どう答えようか。

信乃ちゃんの様子から推測するに、信乃ちゃんは過去に他の誰かへ秘密を打ち明けたことがあるんだと思う。そしてそのとき、信乃ちゃんは望む対応を貰えず、傷つくだけで終わった。

それはまあ、そうだろう。

だって、未来が見えるなんて、そんなの普通じゃない。

信乃ちゃんが当時どういう子だったかは分からない。けどもし今と変わらない格好と言動だったのだとすれば……最悪、薬物乱用を疑われて警察沙汰になりそうだ。

たとえば信乃ちゃんの言動が、絵にかいたような真面目な優等生のそれだったとしても似たようなものだとは思う。

最初は冗談だと流されるか、相手のノリがよければ雑談として盛り上がるかもしれない。だがそれは決して信じてくれたわけではない。

そして若く未熟な精神は、諦めることを知らない美徳を以て、「本当なんだ」「信じてくれ」と縋りつき、最後には相手から精神疾患を疑われ、孤独感と絶望感の中に沈むのだ。

それは仕方のないことだ。

誰しも自分の持っている常識から逸脱しているものに対しては、恐

怖や忌避感を抱くもの。

『相手の世界』と『自分の世界』が明らかに違うとき、人は排斥に動く。それは人類の歴史を見ても明らかである。

そもそも、信乃ちゃんが本当のことを言っているという保証もない。

未来が視える、なんて絵空事を真面目に捉え信じたとしたら、恥をかくのは信じた方だ。普通なら、そんなことはまともに取り合わないか、一笑に付して終わる。

オレは嫌いではないが、信乃ちゃんの格好は申し訳ないが一般的に見て、他人に好印象を与えるものではない。

まず、こいつは何を考えてるんだと訝しがられるだろうし、親身に相談に乗った後に掌を返されバカにされるかもしれないという警戒心も湧くだろう。

正直、オレだってそうだ。

見た目云々ではない。

会って二回目、名前すら本名かも分からない身元不明の少女から、突然「未来が視えます」なんて言われて鵜呑みにするなど有り得ない。それをするのは考え無しのただの馬鹿だ。

だからこそ、オレはオレの話を信乃ちゃんにはしない。

オレはこの子のことを、オレの悩みを明かすに足る相手だとまだ認識していない。まあ、そもそも中学生くらいの女の子に二十歳の大学生が真剣な人生相談というのも……ちよつとね……。

でも信乃ちゃんの方がオレにそう在って欲しいと望むなら、それは榮譽なことだと思うし、出来る範囲でなら力になりたいと思う。

思考を纏めたオレは、不安に揺れる信乃ちゃんの瞳を見つめてこう言った。

「え？　嘘なの？」

「ううう!？」

信乃ちゃんが目を見開いて唇を震わせ始めた。

「ウソじゃねーよ！　あたしを嘘つき呼ばわりすんじゃないやねー!!　やっぱアンタも——」

「してないよ」

怒鳴り声をあげた信乃ちゃんに怯まず、言葉を遮って、オレは端的に告げた。

「してないよ」

じつと信乃ちゃんの瞳を見つめる。彼女の過激な反応は、きつと過去にそういう扱いをされたがゆえのことだろう。

オレは安心させるために、肩の力を抜いた微笑みを浮かべた。

たとえ信乃ちゃんがどれほど取り乱しても、オレは決して動じず、平静を保つ。そうすれば、信乃ちゃんも落ち着くだろう。

オレを見つめる信乃ちゃんの表情が、ゆっくりと歪み始める。

信乃ちゃんがオレの所作に何を感じ取ったのかは分からない。

泣きそうに見える表情の信乃ちゃんは、唇を震わせながらこう言った。

「あんたは……ちげえのかな……？」

震えた声だ。

怯えたような瞳がオレを見つめる。

信乃ちゃんはオレに縋ろうとしているのだな、と分かった。彼女はオレに依存したがっている。

抛り所が無く、孤独でいることに疲れているがゆえに、盲信できる存在を求めているんだろう。

オレはそんな信乃ちゃんを見て、強い憤りを覚えた。もちろん信乃ちゃんにはない。この子にそんな表情をさせる程に劣悪な、彼女を取り巻く環境に対してだ。

頭を抱えたい気持ちだが、それをしては信乃ちゃんに不安を抱かせてしまうからできない。おくびにも出さず、内心でだけため息を吐く。

オレは信乃ちゃんを見つめて、問いの答えを告げた。

「ごめんね、信乃ちゃん。その問いにはまだ答えられない。君がオレと誰を比べていて、何が違うと感じたのか……。オレはその答えを持ってない」

信乃ちゃんが傷ついたように瞳を揺らす。拒絶されたと感じたの

だろうか。

少なくとも、オレがこの子の望んだ答えを返さなかったということは間違いない。

繊細だなあ。分かるけど。ホントに伝え方には気を付けないと……。

でも下手なことと言って盲信とか依存されても困るし、この子のためにならないと思うんだよね。

いやさ、確かに凄い面倒くさいことではあるし、オレが骨を折る義理も無いんだけど、さすがにね。ここまで露骨に助けを求められてるのに放って置くってのはちよつと出来ない。

「だから、まずは教えて欲しいんだ。君が何を考えていて、何に苦しんでいて、何をしたいのか……。前に言ったと思うけど、オレは別に君の敵じゃない。君が何か辛い思いを抱えてるってのは、今も凄く伝わって来てるからさ。言い辛いつて思うなら、それはそれで構わない。オレとしては何か悩んでそうな君のことは心配だし、気になりもするから、教えて欲しいと思ってるけどね」

「なんであたしのこと……」

信乃ちゃんが言い淀む。

オレはその言葉の先を想像し、引き継ぐように言った。

「気にするのか、って？」

信乃ちゃんは頷き、躊躇うように話し始めた。

「最初に会った時だって……。あんな格好のあたしをなんも聞かずに家にあげやがって……!!」

最初は弱弱しかった信乃ちゃんの口調が荒くなる。止められないのだろう。

強い口調とは裏腹に、その表情は痛々し気に歪んでいる。

あー、これは遮っちゃダメだな、とオレは思った。

何言われるんだろうと思いつつ、オレも腹を据えて傾聴の姿勢を取る。

信乃ちゃんは荒く続けた。

「おかしいだろーがよー！ アンタおかしいんだよ!! アンタの周りだ

け全然視えねえし!! 隕石で地球は滅亡するはずなのにしねえし!!  
意味わかんねえ!! 意味わかんねえんだよ!!」

信乃ちゃんはテーブルに突っ伏した。握られた拳が震えている。  
ごめん。意味分かんないのこっち……。

語彙が乏しいのは、彼女が錯乱しているからだろうか。感情のコン  
トロールを失っているようだ。

気になるワードが結構あったけど、今そこを突くことはさすがに出  
来ない。物凄く気になるが。

「なんでアタシがこんな!! おかしいだろーが!! おかしいだろーが  
!!」

信乃ちゃんの叫びは、世界を呪うような、怒りと哀しみが詰まった  
ものだった。

オレの周りだけ見えないってどういうことだろうな、と思いつつ、  
オレは彼女が落ち着くのをじっと待つ。

「信乃ちゃん」

落ち着いて来たのか、突っ伏したまま黙り込んだ信乃ちゃんに、オ  
レは声をかけた。

びくり、と信乃ちゃんの肩が揺れる。

やっちまった、とか思ってるのかもしれない。後悔とか羞恥に苛ま  
れてるのかもしれない。

オレは思った。

——今更だから気にしなくていいよ。

さすがに口にはしないが、そう思いつつ、オレは言った。

「話、聞くよ」

オレはさつきから考え方も捉え方も変えていない。

オレの言うこともやることも別に変わらない。

「なんで……」

ぽつり、と信乃ちゃんが言った。

オレはこう続けた。

「話してみても、信乃ちゃん。オレは君の敵じゃないからさ。力にな  
りたいんだ」

「なんでえ……っ」

信乃ちゃんの声が震えている。体勢的に表情は見えないが、泣いているように思える。忙しい子だ。それだけ追い詰められてたつて事だろう。

恐らくだが、理由がない（というか理由の分からない）優しさが怖いのだろう。オレのこの対応が優しいかどうかは分からないけど、信乃ちゃんの反応的にそんな感じがする。

それほどまでに、この子は愛を注がれてない、あるいは愛を受けているという実感を得られずに生きてきたんだと思う。そしてあの夜の言葉を鑑みるに、えぐい裏のある表面上の優しさに晒されていたところか。

可哀そうに。痛ましいことこの上ない。

オレとしては、信乃ちゃんがもうこれ以上ないって程に言外の助けを求めて来てるのを感じるから付き合ってるんだけど、信乃ちゃんは納得できる理由が欲しいようだ。それとも、「なんで」とはまた別の誰かに向けられた言葉かもしれない。

ならば、とオレは独白のような信乃ちゃんの言葉に、こう返した。

「君が苦しそうにしてるから。今はそれだけだよ」

「分かんねえよ……！ 分かんねえよ……！」

信乃ちゃんが弱弱しく言う。

まいったな。

オレのちよつとした弱音からとんでもないことになってしまった。やはり感情に振り回された言動は碌なことにならないと痛感する。もうちよつと信乃ちゃんとの距離が縮まってからの悩み相談だったなら、ここまで拗れることは無かっただろうに。

まあ、しようがない。切り替えよう。

ちら、と壁に掛けてある時計を盗み見る。

時間はまだあるし、根気よく行こう。

「さっきも言ったけど、別に今言わなくなたっていいんだ。君が話したいと思った時で良い。今日で縁が切れるわけでもないし、またうちに遊びに来てても良いしさ」

そしたら、そのうち話したくなるかもしれないし、もしかしたらオレに相談するまでもなく自己解決できるかもしれない。

それか……。

「他に信頼できる人がいるならその人に……」

「いねえからきてんだろーが!!」

ばつと顔を上げた信乃ちゃんは目が赤い。

この野郎、と怒ってるのか哀しんでいるのか呆れているのか、あるいは全部か、ともかく何とも言えない表情でオレを睨みつけている。「さつきから聞いてりやよ！　なんだよクソジジイ!!　もつとねちっこく近づいて来いよ!!　露骨にアタシんこと狙ってくりやいいじやねーかよ!!　君の味方だの信じて欲しいだのきめえおっさんみてエなこと言ってみろや！」

信乃ちゃんが放つ怒声と共に唾が飛び散る。

頬に掛かった信乃ちゃんの唾が冷えていく感覚がある。拭きたい気持ちをもつところらえて、オレは信乃ちゃんの気持ちを受け止めた。なるほど。

そういう甘い言葉を掛けて来る人、男の裏を何度か見たことがあるらしい。

オレは試されていたのかもしれない。いや、それだと語弊があるか。今のあれこれは演技じゃなかったと思う。

今までの信乃ちゃんの経験とオレの対応があまりに違うから混乱が強すぎて素が出てきたって感じかな。多分、これが信乃ちゃんの素なんだと思う。

追い詰められて糸が切れそうになってただけで、この子、意外と強い子なのかもしれない。

オレは思ったことを口にした。

「信乃ちゃん……」

「んだよジジイ」

ぐし、と目元を腕で拭いながら、さらに言えば鼻も水も素手で拭いながら、信乃ちゃんがオレをぎろと睨み悪態を吐く。

オレは近くのティッシュに手を伸ばし数枚箱から抜き取って信乃

ちゃんに渡し、こう言った。

「なんかさ、その方がらしいね。オレは嫌いじゃないよ」

「あう……」

そう言った信乃ちゃんは気の抜けた様にソファに腰を下ろした。

思わず微笑みを漏らしたオレを見て、信乃ちゃんは苛立たし気に、しかしどこか恥ずかしそうに眉根を寄せて、言った。

「うっせークソジジイ」

そう言った信乃ちゃんの肩の力が抜けたのが分かった。

オレは信乃ちゃんを見守ることを選び、静かに時を待つ。

そして、信乃ちゃんはぼつりぼつりと身の上話を始めた。

オレは思った。

——長かった……っ!! 実際の経過時間以上に……っ!!

そう思ったのは束の間だった。

信乃ちゃんの話す内容が結構深刻だったからだ。

信乃ちゃんは父親の顔を知らないらしい。信乃ちゃんの母親が信

乃ちゃんを妊娠したと分かるやいなや失踪したとのことだ。

信乃ちゃんは、母親から頻繁に暴力を受けていたらしい。

信乃ちゃんの母親はいわゆる夜の仕事をしていた、まともにコミュ

ニケーションを取った覚えがないと。

信乃ちゃんの母親は信乃ちゃんが幼いころから毎日のように自宅

へ男を連れ込んでいたらしい。しかも日によって違ったと。

狭い家の間取り上、薄い壁や扉越しに母親と男の「声」を聞いてい

たらしい。

それで気づいたらスケバン（死語）をやったとのこと。

信乃ちゃんの話聞きながら、オレは思った。

——アレ？ 未来予知の話は……？

未来予知ができることを明かしたら誰にも信じて貰えずに、みたいな話じゃなかった。

普通に人生相談だった。

いや、可能性としては考慮していたことではある。ただ、想像以上に重かったのでちよつと思考をリセットしただけだ。



信乃ちゃんは続けた。

それだけでもしんどかったのに、ある日、さらなる転機が訪れた。当然、悪い方に。

信乃ちゃんの母親が連れ込んだ男が、信乃ちゃんに乱暴を働こうとしたらしい。

さすがにオレも、信乃ちゃんを取り巻くあまりに劣悪な環境に憤りを抱いたところで、信乃ちゃんは事も無さげにこう続けた。

「まあ、そいつは準備してた木刀で半殺しにしたんだけどよ……」  
半殺しにしたらしい。

強い。

準備してたということとは、そのときから未来が視えていたのだろうか。というかうちに置いてった木刀って……。

聞いてみるとそうだった。なるほど、そこに繋がるのか……。

そして信乃ちゃんは母親に自分が乱暴されそうになったことを伝えたが、取り合って貰えなかったとのこと。

聞いている感じ、男が何かをする前にいきなり木刀で半殺しにしたみたいだから、まあ母親の反応は分からないでもない。どうにも数日前に自分が乱暴される未来が視えたので、その男が家上がった直後に後ろから木刀で殴りつけたらしい。

行動力が凄い。

だけど、母親からすれば自分が連れ込んだ男を錯乱した娘が凶器で暴行を加えたわけだから、分からないでもない。そして信乃ちゃんは必死に未来が視えたと訴えたが、ヒステリックを起こした（やはりそれ自体は分からないでもない）母親から手酷い拒絶を受け、家を飛び出した、と。

その後は友人を頼ったり、未来予知を駆使してなんとか生活をしていたらしいが、まあその間も男関係で色々あったらしい。しかも信乃ちゃんを襲おうとした、というか信乃ちゃんに襲われた男がなんと暴力団関係者だったらしく、街の暴走族を使って信乃ちゃんに追い込みをかけたのだ。腕つぶしには自信があった信乃ちゃんだが、さすがに多勢に無勢で負傷し、そしてあの夜に繋がったとのことだ。

オレは思った。

オレ、大丈夫かな……？

ていうか信乃ちゃんは大丈夫なのか？

あー、そう言えば信乃ちゃん、この街の暴走族全部潰したって噂になつてたっけ。

信乃ちゃんがやったで合ってるんだよね？

「ん？ ああ。構成員に闇討ち掛けて一人一人金玉潰した」

聞いてみると、物凄い言葉が返って来た。

うーん、想像以上にとんでもない女の子である。

この子、狂犬とか呼ばれるやつだろ。ああ、夜叉か。

そら夜叉とも呼ばれるよねっていう……。

普通に傷害罪な気もするが、自首を勧めた方が良くいんだろうか？

いや、今はそこじゃない。

聞いた話を頭の中で整理して、オレはまずこう聞いた。

「その暴力団関係の人ってのはどうなったの？」

「わかんねえ。多分、まだアタシンこと探してると思う」

「そうか……」

悩みながら呟けば、信乃ちゃんは血相を変えた様にこう続けた。

「あ、いや、付けられたりしてねえから!! ライルさんに迷惑は——」

オレは信乃ちゃんの言葉を遮って、こう言った。

「いや、相手が組織なら目撃情報があれば辿れる。付けられてるとかは今の時代そんな関係ないよ」

「そんな……」

信乃ちゃんの顔色がみるみる蒼褪めていく。

こう言っってはなんだが、この子ちよつと頭が……。

まあ、それはいい。

「分かった」

オレはそう言っつて、少し考えを纏めたくて押し黙る。

信乃ちゃんが蒼褪めた顔のまま不安そうにオレを見ている。

オレは携帯を取り出して電話帳アプリを起動し、電話番号を押し

た。数秒のコールの後、聞きなれた声が電話口から聞こえて来る。

相手の名乗りを聞き終えてから、オレは言った。

「こんにちは、東堂です。突然すみません。ちよつと問題が起きまして、力を貸して欲しいんですが……。はい。急な頼みで申し訳ないんですが、明日にでも……。あ、いえ、そうじゃなくて。はい、実は暴力団関係者とちよつと……。いえ、友人が少し……。いえ、おっしやる通りです。はい。はい。すみません。あー、ちよつと用事が……。え？ いいんですか？ すみません。ありがとうございます。はい、分かりました。あ、それとですね……。実は、別件というわけでもないんですが、児童問題に強い弁護士を紹介も……。はい。はい。おっしやる通りです。すみません。はい。はい。ありがとうございます。助かります。感謝しています。はい。ご迷惑おかけしますが、よろしくお願いします」

耳元から電話を離し、ディスプレイを確認する。

電話が切れたのを確認し、テーブルの上に置いたオレは、改めて信乃ちゃんを見る。

信乃ちゃんは蒼褪めたまま、呆気に取られたようにオレを見つめていた。

オレは微笑んでこう言った。

「もう大丈夫だよ。信頼できる弁護士に相談したんだけど、すぐに動いてくれるって。今日の夜に会うことになったから、君も来てくれる？」

「ぱち、ぱち、とゆつくりと瞬きを繰り返す信乃ちゃんに、オレは言った。

「大丈夫だよ」

「べ、べんごし……？」

「うん。ちよつとした伝手があつてね。頼つてみた」

「なんで……」

信乃ちゃんが困惑したように言うが、なんでもなにも、もはやオレも巻き込まれてるし。まあ、巻き込まれてなくても、信乃ちゃんの家庭環境の件を聞いたときから相談はすることは決めてただけだ。

信乃ちゃんは混乱した様子をそのままに話を続けた。

「え、あ、いや……だって……あたし、未来が視えるって言うて……」

「そうだね」

「そうだねって……ふつう、信じねーだろ……。アタシの話なんて……。全部、ガキの与太話だって……」

「そうだね。普通はそうだと思う。オレが今、普通だったら明らかに愚かな選択をしたってことも分かってるよ」

今夜の相談もタダってわけじゃないし。でも、そのことは語るべきことじゃない。

そして、信乃ちゃんが何を言いたいのかも、分かっているつもりである。

「だったら、なんで……」

信乃ちゃんは困惑を露わにオレを見つめている。本当に訳が分からないと言った様子である。

でも、まあ、その答えは簡単だ。

疑って傷つけるより信じて自分がバカになった方が良い、なんて洒落たことは考えもしない。

君を信じるよ、なんて無垢な善良さも特にない。

ただオレが、かつて『傍にいて欲しかった人』に成りたかっただけだ。

だからオレは、今回の信乃ちゃんの問題に対してはあっさりと答えを口にした。

「そりゃ、オレが君に言ったんだから。休んで良いよって」

「……え？」

信乃ちゃんはぼかんと口を開いたまま固まってしまった。

オレは微笑みを浮かべ、穏やかな口調を意識しつつ、こう続けた。「これまで、よく一人で頑張って来たね。あとは頼れる大人に任せて

いいよ」

そして最後、オレは信乃ちゃんのこれまでを労わる気持ちを込めて、優しく語り掛けるように言った。

「お疲れ様」

信乃ちゃんはおれの言葉の意味を理解できなかったのか、変わらず呆けた様子だった。

しかしほろり、と信乃ちゃんを目じりから一筋の雫が零れ落ちる。信乃ちゃんは自分の頬を触り、指先についた湿り気を見つめる。

信乃ちゃんの唇が震える。

くしやり、と信乃ちゃん表情が歪む。

信乃ちゃんは両掌で顔を覆い、しばらくの間、静かに肩を震わせていた。

おれは静かにリビングを出て、扉を背にし、こう思った。

——この後、見回りあるんだよね……。

消えた茶々ちゃんたちや木刀のことなど、結局おれの疑問は何一つ解決せず、信乃ちゃん『異能』の真偽も付かないまま、新たな問題を抱えただけである。

でも取っ掛かりはありそうだし、今はそれでよしとしよう。

おれは少し歩き、目の前の扉を開ける。

そして目の前の器に座り、我慢していた生理現象を解放した。

## ヤンキー？ 4

時間がかかってしまった。最近は便秘気味だったので、溜まっていたものが多かったということだ。

これほど長くここに座っていたことなどこれまで無かったので自分でも驚きだが、おかげでかなりスッキリして気分が良い。痛みはなく、もりっと出た感じである。

特にそういったことに効果があるものを食した記憶は無いが……。いやもしかすると、雅さんから頂いたあの食事が良かったのかもしれない。日本の伝統料理は体に良いと言うし。思えば、体全体の調子が良い気がする。これからは日本人らしく、和食を中心にした自炊にしていくことにしよう。

トイレの水タンクに備えられていた蛇口で手を洗いながら、オレはそんなことを考えていた。

「やあ、おまたせ」

オレは軽く手を上げて、信乃ちゃんへ声を投げかけた。

自分が少し高揚している自覚はある。嬉しいことがあって、体の調子が良いので、精神的にも好調になったためである。

しかし信乃ちゃんは白けた表情でオレを出迎えた。

信乃ちゃんはソファにだらしなく背を預け、両腕を大きく広げ、ソファの背もたれの上に乗せていた。脚は大股に開き、片方はソファの上に行儀悪く乗せられている。

混乱して嗚咽を漏らしていた状態から、だいぶ落ち着いたようだ……。

いや……。とオレは思った。

——落ち着き過ぎじゃね？

まあ、感情の振れ幅が大きい子だから、一回感情を爆発させたら案外スッキリするタイプってことなのかな。

内心呆れつつも、感心する。そして、泣き続けられるよりは良いかと納得する。

しかし、なんだろう。なんでこの子、こんな態度悪くなってるんだ

ろう。なんでいちいち昔のヤンキー漫画みたいな感じになるのかな……。

「なげーよ！　いつまでクソしてんだよアンタ！　しまらねーな！」

オレにそう言い放った信乃ちゃん、じと、と無言でオレに視線を向けて来る。

睨みつけてくる感じではないが、不満はありますって感じた。

オレは疑問を抱くと同時に、瞬間的な自問自答によって納得を抱く。そして付け加えるならば、普段の締めりがとても良いからこそ、今これほど時間がかかったのだ。これが同年代の気の置けない同性の友人ならば「いや、締めりが良すぎて中々出なかった」と直球の下ネタで失笑を狙いに行くが、さすがに中高生年代の女子にそれは事案だろう。

いや、それは良い。言葉にもすまい。忘れよう。

まずオレが思ったのは、何故この子は人が生理現象を解消するためには掛けた時間について言及してくるのか、という大人なら至極真つ当な疑問である。プライバシーの侵害も甚だしいし、一人一人が当たり前を守るべき尊厳を傷つけるような行いである。社会でそんな言動を見せれば、ドン引きされること間違いない。

しかし瞬時にその疑問は解消された。

信乃ちゃんは恐らく中学生くらい。そしてこの年代の子たちの中には、生理現象について、何故か異様に敏感な子がいる。オレも記憶がある。学校で生理現象を解放していた男の子が、同級生の悪ガキに見つかり、揶揄われ、その情報を面白おかしく喧伝されていた。しかしその子は生理現象を解放したことを恥じることなく（まあ、当たり前なんだけど）、堂々と胸を張っていたので、かつてのオレは尊敬の念を抱いたものだ。

これはオレの非常に質の悪い偏見でしかなく、そんなことを考えているとバレたら信乃ちゃんを傷つけることになるかもしれないが、失礼ながら、信乃ちゃんはそういうことしそう。

「話がひと段落したと思ったから席を立ったんだけど……、まだ何か……オレに話しておきたいことがあったのかな？」

オレは信乃ちゃんの言及を鮮やかにスルーして席に着き、話を変えた。

「べつにねーけどよ……」

信乃ちゃんは不満げに眉を寄せる。

オレはあえて露骨に、ソファに乗せられている信乃ちゃんの脚へ視線を向ける。

信乃ちゃんはオレの視線に気づいたようだ。まあ、気づいて貰うために大袈裟な所作をしたわけだから、気づいて貰えなければ困るんだけど。

信乃ちゃんはダメージジーンズを履いているが、そのダメージはかなり大きく見える。

控えめに表現すれば、信乃ちゃんの生い立ちを知った今、それがファッションとしてのダメージなのか、そうじゃないのか、ちよつと判別しがたい程度のダメージである。

つまり露出されている肌面積が多いということだが、オレが信乃ちゃんの脚に視線を送った理由にそれは全く関係ない。

単純に、それほど親しくない他人の家、しかも年上の前で取るにはあまりに横柄な態度であるので、さりげなく窘めるための視線の動きである。

とはいえ、期待はしていなかった。その辺の察しが良い子ではないということとは、既に把握している。

一応段階を踏んで、オレは信乃ちゃんと視線を合わせてこう言った。

「脚」

信乃ちゃんはぴくんと眉を動かし、ぴくりと口端を緩めさせた。一瞬のことだった。

信乃ちゃんは黙ってオレを見つめて来る。

「降ろそうか」

「……っ」

信乃ちゃんは小首を傾げた。

それが悪いことだと理解していない様子である。



「よくないよ、それ」

む、と信乃ちゃんが表情を顰める。

どうやら彼女を不愉快にさせてしまったようだ。

とはいえ、それで怯むオレではない。

彼女の性格は短い関わりながら掴めている。

彼女は基本的にプライドが高く、人からの指摘を素直に受け入れることが難しい気質の女性だ。しかし同時に、それが彼女の繊細な本質を隠し、心を守るための鎧でもあることもオレは理解している。

確かに彼女は今、顰め面を浮かべ、不愉快そうにオレを睨みつけている。だが……これはオレの想像でしかないがその内側では、めっちゃめっちゃ冷や汗を流してパニックになっているんじゃないだろうか。

——ヤバイ、失敗しちゃった。どうしよう。

そんなことを思っているかもしれない。そしてそう彼女が思いながらも直ぐにその態度を改められないのは……。恐らく、自分の非を認めることが出来ないというよりは、非を認めた結果オレに嫌われるとか、落胆されるとか、そういうことを恐れてのことだ。子供が親から当たり前に注がれるべき愛情を満足に受けられなかったという彼女の境遇を踏まえて考えれば、たぶんそうじゃないかと思う。

つまり、自分が非を認めなければ自分は悪くないし失敗もしていない。そして自分が何も悪いことをしていないし失敗もしていないのであれば、自分が嫌われたり落胆される理由もない。

——という無理筋の理論武装。

それを笑うつもりはない。何故ならそれは、家族から愛されなかったと自認している彼女が必死になって作り上げた心の鎧だろうからだ。

愛されなかったのは自分が悪いからではないのだと。

おかしいのは周りの奴らなのだ。

彼女は自分を守るためにそうならざるを得なかった。

ただなあ。

彼女の話聞いた感じ、実際に彼女の周りの人達はちよつと普通じゃないと思う。

「あたしの周りの奴らおかしすぎだよなあ……」と線引きしてしまえば強く生きられそうだが、それが出来ないからこそ苦しいんだ。要は、愛して欲しい、受け入れて欲しい。彼女にあるのはただそれだけなのだ。

ちよつと哀しすぎる……。

まあ、それはそれとして、悪いことは悪いって言うけどね。

オレは静かに続けた。

「その態度、年上の前で取るにはあまり褒められたものじゃないよ。話をするにも相応しくないし……」

オレは穏やかに続けた。

「不愉快になることもある」

オレがそう言った瞬間、信乃ちゃんの表情が瞬時に蒼褪める。

が、脚は降りない。

ちら、とオレは信乃ちゃんの表情を見た。

信乃ちゃんはきゅ、と唇を引き締めて、ぶるぶると震えながら、虚空を見つめている。

オレは思った。

—— 怯えすぎイ！

オレは一般論を言っただけで、別に怒ってはいない。

ちよつと指摘しただけでそんなになるなら最初からしなければいいのにも思うが、それが悪いことだとすら思わなかったのだろう。

無知と言うのか……いや、そうか。

きつと彼女は、彼女の母親の「そういう姿」をずっと見て来たから……。

待たされたことで不貞腐れています、ということアピールする方法を、彼女はそれしか知らなかったのだ。

傷つきやすいくらいに純粋で、なのに態度は露悪的で、しかもそれを自覚していないうえに、注意されると失敗をした自分は嫌われてしまふと怯え、ならばその前に嫌ってやると敵意を向けて来る……。

オレは思った。

—— 本当にめんどろうだな、この子。

まあ、一度踏み込むと決めた以上、最後まで面倒は見ると。

「怒ってないよ」

虚空を向いていた視線がゆっくりとこちらへ戻って来る。

オレは続けて言った。

「まだ話があるんだよね？ だったら、お互い気持ちよく話が出るようにしようよ」

柔らかく微笑んで言ったオレに、信乃ちゃんは目を泳がせている。めちやくちや困ってるなあ。

どうすれば良いのか分からないのかな。脚を降ろせばいいだけの話なんだけど。

「大丈夫だから」

オレは念を押すように続けた。

この大丈夫って言うのは、君が非を認めても別にオレは君を責めないし、嫌ったりもしないよ、という意味表示である。伝われば良いんだけど、露骨過ぎても逆効果だと思うし。

やがて信乃ちゃんは、オレの顔を伺いながらおずおずと姿勢を正した。

オレは内心で安堵の溜息を吐く。そしてそれを悟られぬように、軽い調子で言った。

「ありがとう信乃ちゃん！ 気を使って貰っちゃったねー」

「えっ……っ？」

信乃ちゃんが驚いたようにオレを見る。

オレはにっこりと笑みを浮かべてこう続けた。

「だって信乃ちゃん、オレが嫌な気分になるって言ったら直してくれなきゃない？ それってオレの気持ちを慮ってくれたってことでしょ？」

「え、あ、いや……。それは……」

「違った？ オレはそう受け取ったんだけど」

「いや、え……っ？ あ、あんたが言ったから……」

信乃ちゃんはしどろもどろだ。すごく困っているのが分かる。

まあ、オレの言ったことが普通か普通じゃないかと言われると普通

じやないってことは分かってる。当たり前前のマナーを指摘して、信乃ちゃんはその通りにしただけだし、礼を言うようなことではないのだから。

だがそもそもとして、他人を自分の思い通りに動かそうなんてことはおこがましいことだっていう考えがオレにはある。それが当たり前前の礼儀だったとしても、オレの頼みを聞いてくれたって言う一点を見てお礼を伝える。それはオレなりのポリシーだ。とはいえ、相手の礼儀知らずな態度に不快にさせられて、それを指摘して直させたって考えると、お礼を言うなんておかしい話だと考える人がいるのも分かる。

というか、信乃ちゃんは絶対そっち系の人だと思う。

なんなら、例えば道の真ん中でタムロしている集団が居たとして、信乃ちゃんはそれを注意するどころか不快な気分させられた瞬間に殴りかかりそう（偏見）なイメージがある。

なので、そういう意味でも信乃ちゃんは自分の価値観とオレの言動が異なり過ぎて困惑しているのだろう。つまり、彼女はこれまで培ってきた彼女の常識でオレを測ることはできないのだ。だから彼女はオレの言動にいちいち困惑している。

もつとも、オレだって仮にこれが田辺だったならいちいちこんなねちっこくは言わない。言っても軽く「ありがとう」くらいだろう。そもそも田辺はこんな不躰な態度は取らないだろうが……。

オレとしてもいちいち言うのは面倒くさいが、信乃ちゃんはちよつと特殊なので仕方がない。

オレは、どうにも常識に欠ける信乃ちゃんにその間違いを指摘したうえで、オレに信乃ちゃんの失敗や無知を嘲笑う敵意や悪意のようなものが欠片も無いことを伝えなければならぬ。

彼女の臆病な自尊心を尊重し、尊大な羞恥心を刺激しないように距離を詰める。

ぶつちやけ一步間違えたら癩癩を起こしそうな危うさを感じてるのでオレとしても気が気ではない。そうなったら面倒くさすぎるし。まあ、オレの何気ない一言で彼女を傷つけたくないってのもあるけ

ど。

だからオレは彼女と話すとき少し間を置くようにしている。考える時間が欲しいからだ。まあ、今の信乃ちゃん言葉は想定範囲なので、オレは割とすぐにごう返した。

「そうなんだよ。君が今言った通り、オレが信乃ちゃんにお願いをした。そして信乃ちゃんはオレが嫌な気持ちにならないように、それに応えてくれた……」

にこやかに微笑みながら、続ける。

「それって信乃ちゃんがオレとの関係を大切にしたいって思ってるからこそでしょ？」

「そ、それは……」

信乃ちゃんは目を泳がせている。否定しないってことはオレの言ったことは間違いでは無いんだろう。

オレは嬉しさを溢れさせた笑みを浮かべてこう続けた。

「嬉しいよねえ」

相手が自分との関係性を大切にしたいと相手が考えてくれるというのは、実際嬉しいものである。

ふふ、とオレは小さく笑いを零した。

信乃ちゃんは顔を真っ赤にして「あう……」と俯いてしまう。違ったら痛い奴になるところだったが、当たっているようなので良かった。

信乃ちゃんはオレとの関係を大切にしたいと考えている。それが改めて確認できたので、オレは続けて言った。

「信乃ちゃんもなにかあれば遠慮なく言ってね。とはいえ……トイレの指摘はちよつとマナー違反かな？」

冗談めかして笑うオレに、信乃ちゃんはこれ以上ないというほどに顔を真っ赤に染めている。

「少しずつ覚えていこうね」

最後にダメ押しとばかりに怒ってないよ、見捨てないよ、見守るよという意志を添えて終わりだ。

恥ずかしそうに小さく縮こまっている信乃ちゃんを見る。顔を

真っ赤にして泣きそうな様子だが、どこか嬉しそうな表情を浮かべているようにも見える。

説教されて嬉しいんだろうか。まあ、母親を始めとして、周りの大人たちからは放置されたり下心ありきのコミュニケーションしかされてなかったみたいだし、今回みたいな年上との真つ当な話し合いってのが新鮮なのかな。

そうだよなあ。一人の人間として見て貰えてなかったってことだもんなあ……。

うーん。さすがに可哀そう過ぎる。

オレが今ねちつくく伝えたのは、「相手を不快にしないよう互いに配慮しましょうね」という、人間関係における基本中の基本でしかない。人前でげっぷをしないとかが、くちやくちや音を立てて食べないとか、そんな当たり前の話なのだ。普通ならばいちいち意識しなくても出来ることだし、出来ない自分が困ることもある。

情けは人の為ならずという言葉があるが、まさにそれだと思う。我慢しすぎると毒だが、基本的には人を不快にさせないように自分を律することは、巡り巡って自分自身の人間関係を円滑にする。

残念ながら、信乃ちゃんはそれが出来てない。それは信乃ちゃんが悪いんじゃないで、他者を思いやる心、道徳心を育めるような環境にいなかったがためだ。

生きづらかったことだろう。

それが悪いことだと学べない不幸。恐怖心から己の無知を受け入れることが出来ない不自由。これまで彼女が感じていただろう苦労を思うとオレは哀しい。切なくなる。願わくばオレとの出会いをきっかけに、優しい人達とのたくさんのお会いが信乃ちゃんに訪れますように。

「ふああ……。つと、ごめんね。少し眠気が……」

ふいに襲って来た眠気に、オレは欠伸を抑えられなかった。生理現象でどうしようもないとはいえ謝罪を伝えたオレは、疲労感を自覚した。信乃ちゃんとのコミュニケーションにだいぶ頭を使ったからだろうか。

夕方のパトロールまではまだ時間がある。オレは席を立ち、申し訳なさを表情に浮かべ、言った。

「ごめんね。色々あって疲れてるみたいだ。少し仮眠をとって来たいんだけど良いかな?」

「えっ。アタシはどうすれば……」

「くつろいでていいよ。お腹すいたらその棚に菓子パンがあるから食べてもいいし」

「そういうことじゃねえよ!!」

席を立ったオレを、信乃ちゃんが慌てた様子で呼び止める。

「なに?」

「アンタさ、その……。今更だけどよ、アタシがなんかするとか思わねえのかよ……?」

「何かって?」

「盗みとか、そういうの」

「……するの?」

「するかもしれねえって話をしてんだよ! どうすんだよ、アタシがそういう奴だったら!」

「うーん……」

オレは少し考えを巡らせる。

やる奴はそういうことわざわ言わないから大丈夫でしょ、とか。

そういう返答じゃないんだろうな、たぶん。信乃ちゃんが求めている答え。

だから信乃ちゃんの言う仮定を拒絶して「信じてる」とか自分の考えを押し付けるのも違うと思う。ぶっちゃけ、家の鍵をかけないとか、この辺の人達の気風が一昔前の田舎っぽくてそれに染まってただけだし。言われてみると確かに、と自分の不用心を省みるほどだ。

信乃ちゃんが盗みをしたらどうするか、かあ……。

なんと返すべきか。やっぱり、素直に感情を伝えるの良いんだろうと思う。

だからオレはこう答えることにした。

「いやあ、それは哀しいかなー」

オレは笑いながら言った。

信乃ちゃんはきよとんとした表情を浮かべる。

どうやら予想外の返答だったらしい。

信乃ちゃんはハトが豆鉄砲をくらったような表情でオレを見つめて言った。

「は？ 哀しい……？」

「そうだね。うん。哀しい」

「……」

「……」

信乃ちゃんが黙ってしまった。オレからも特に言うことは無いので黙る。

少しの沈黙。

信乃ちゃんはオレを凝視している。眼球が小刻みに動いている。なんか信乃ちゃん呼吸してないように見えるんだけど、そんなに驚くこと言ったかな……。

なんだろう。さすがに何考えてるか分からないな。怯えてるとか怖がってるって感じじゃない。でも近い何かを感じる。信じられないものをみているような。

あ、「ふー」と大きな鼻息の音が聞こえた。呼吸を再開したらしい。

「……ねーよ」

そうして、ぽつりと信乃ちゃんの独白が聞こえた。

「ん？」

「しねーよ！ アタシは盗みなんてしねー!!」

信乃ちゃんが立ち上がって啖呵を切る様に言った。仮定の話だし言い出したのは信乃ちゃんだけど、凄く鬼気迫るものがある。

オレは笑って言った。

「なら良かった」

「だから……っ。なんでそんな嬉しそうに……っ」

信乃ちゃんが苦虫を噛み潰したような表情で何かを呟いたが、残念ながらオレには聞き取れなかった。

「じゃあ、そういうことで。またね」



ひらひらと手を振ってから、オレは仮眠を取るために二階へと向かった。

## ヤンキー？ 5

浅い眠りの中、部屋の扉が開く音がした。

意識が僅かに覚醒する。

ベッドで眠るオレの近くで、衣擦れの音がする。うつすらと瞳を開き、音のする方へと視線を向けた。するとそこには、半裸の信乃ちゃんが立っている。今まさに全裸になろうとしている彼女の存在に驚きながらも、オレはむくりと起き上がった。

信乃ちゃんはブラジャーを外そうとしている格好のままむくりと体を跳ねさせて停止する。

そんな信乃ちゃんを見てオレは言った。

「どうしたの？」

「……」

信乃ちゃんは無言で停止したまま、視線だけをきよろきよろと動かしている。そして意を決したように言った。

「だ、抱けよ」

その一言を皮切りに抑えが利かなくなったのか、信乃ちゃんは今よりも大きな声で言った。

「抱けよ！ アタシを!!」

途中だったブラジャーの脱衣をやり遂げ、信乃ちゃんが上半身を曝け出す。何処とは言わないが綺麗な色をしているし形も良い。

ふう、とため息を吐く。混乱している思考を整えるためだ。

信乃ちゃんがむくりと跳ねる。

特に他意は無い溜息だったが、信乃ちゃんはそうは受け取らなかったらしい。

「服を着て貰って良いかな？」

オレの言葉は聞こえているだろうが、信乃ちゃんは構わずオレの方へ近づいてきて、オレの頭を抱きしめて来た。柔らかいものがオレの顔にあたる。押し付けられているようだ。

オレは信乃ちゃんの背中を手を回し、数回タップし、離れるように示す。だが信乃ちゃんはオレを抱きしめる力を強めただけだった。

そんな信乃ちゃんに、オレは静かに問いかけた。

「急にどうしたの?」

「いいから抱けよ! 嬉しいだろ!」

信乃ちゃんは必死の声色だ。

うーん。今の言葉から考えると、信乃ちゃんは自分と性交をすることが男性にとつての喜びであると認識しているようだ。まあ、境遇を考えると当然の思考だろう。この行動に至った理由は、弁護士と繋げたお礼とかそういうのだろうか。

軽い女と捉えるべきか。はたまた「この人ならば」と心と股(ド直球下ネタ)を開いてくれているのか。後者だろうとは思う。雅さんがそうだったが、そういうことへの価値観は人によって違うのでそういう人もいるだろうし、それが悪いとは思わないが、オレにとつてはちよつと展開が早い。

だからオレは信乃ちゃんの背中に回した手でタップを続けながらこう言った。

「気持ち嬉しいけど、疲れてるから寝かせて欲しいかな」

「あ、アンタなあ!」

信乃ちゃんは怒ったような呆れたような、そしてどこか嬉しそうな声で吠えた。オレを抱きしめる腕の力が強くなる。

そして少し間を置いて、信乃ちゃんは小さく言った。

「……なあ」

信乃ちゃんは穏やかな声色で続けた。

「アタシのこと、抱いてくんねーかな。アンタになら良い。ううん。アンタに……抱かれてえんだよ」

それは安らかな声だった。

信乃ちゃんは続ける。

「初めてなんだ。初めてのことばつかなんだ。アンタは違うんだ。アンタみたいなやつにアタシ、初めて会ったんだ。アンタが欲しい。アンタが欲しいんだ」

一つになりたい、信乃ちゃんはそう言った。

オレは思った。

——18禁のSF昭和ヤンキーモノなの……？

うーん。めちやくちや求愛されてますね……。

距離の詰め方間違えたか……。どこを間違えちゃったかな。正直、心当たりが無い。

いや、荒んだ境遇に在って突如として現れたまともな大人の異性だ。そういうふうに想ってしまうのも無理はないかもしれない。これまで彼女が周囲の男性から性的にしか求められてこなかったということを鑑みてもそうだ。自分の体に価値があつて、それを捧げるこゝとが最高の感謝の示し方と捉えているんだろう。とはいえ、信乃ちゃんがおれにちゃんとした好意を持っていて、純粋におれと性交をしたと思つてくれているという可能性は否定しない。

今のは熱心な口説き文句だった。求めてくれるのは純粋に嬉しく思う。まあ、断るんだけども。

問題は、どのように断るかと言うことだ。雅さんのときとは状況が違う。言葉は選ぶ必要があるだろう。

おれを抱きしめている信乃ちゃんの腕が震えている。緊張しているんだろう。一生懸命、必死に思いを伝えてくれているのは分かる。だからこそおれも真摯に対応すべきだろう。傷つけないように。

「嬉しいよ、信乃ちゃん。おれをそんなに思つてくれるなんて。でも……」

びくり、と信乃ちゃんの体が震える。

おれの言葉から、誘いを断られることを察したのだろう。信乃ちゃんの腕に力が籠る。絶対に離さないという意志が伝わつて来る。

「なんで……いいだろ！ 減るもんじゃねーんだから！」

信乃ちゃんが言った。

それって本来は男側が言う安いセリフだよなあ、と内心で思う。

「男なんてアタシとヤルことしか考えてねーんだから……っ!!」

そう言いながら、信乃ちゃんがおれをこれ以上無いほどに強く抱きしめて来る。正直苦しいしちよつと痛い。

おれは喋れるように頭を動かして言った。

「信乃ちゃん、君、言つたじゃないか。おれは違うって」

「だ、だけど……！」

信乃ちゃんの声は震えていた。

顔は見れないが、なんとなく今の信乃ちゃんの表情は分かる気がする。

「か、彼女にしてくれなんて言わねーからさ！ セフレでいいから！抱かせてやるってアタシを！ な？ ヤリ捨てても良いからさ！」

信乃ちゃんが継る様に続けた。

よくない兆候だ。依存傾向が見える。こうならないように気を付けていたつもりだったけど、信乃ちゃんの愛への飢えを見誤っていた。

信乃ちゃんのそれを、敬愛と性欲の区別がついていない、と諭すのは簡単だけど……これじゃあ多分、引かないだろうな。彼女も必死なんだ。ここまでやったからには、引つ込みもつかなくなってるだろうし。一般的な断りの言葉じゃこの場は収まらない。

そう考えていると、信乃ちゃんがオレから手を放した。

そして強く両肩を押される。オレはベッドに仰向けに倒れ、その上に信乃ちゃんが馬乗りになる。

信乃ちゃんの目は狂っていた。いや、狂気的な愛欲に染まっていたというべきか。漫画的な表現だとぐるぐるしてるアレだろう。オレを見降ろす信乃ちゃんの頬は紅潮しており、息も荒かった。

だからこそ、オレは冷静になった。

そして焦りと哀しみを抱く。

表情に出ていたのだろう。信乃ちゃんがオレの表情を見て僅かに固まった。半裸の女体を前にオレがまったく性的な興奮を抱いていないどころか、場違いな表情を浮かべていることに困惑したようだ。

それはそうだ。オレは今、哀しみを強く感じているんだから。

だからオレは静かにこう言った。

「ダメだよ、信乃ちゃん」

そして信乃ちゃんは言った。

「だ、ダメじゃねーよ。なあ、ライルさん。JKを抱けんだけぞ？ もつたいねーって。ヤンねーとき！ な？ シようぜ？ な？」

信乃ちゃんの声に欲情が戻って来る。完全におっさんの発言だ。強引に迫られたときの世の女性の気持ち少しわかった気がするが、今は置いておこう。

オレは再び言った。

「信乃ちゃん、ダメだよ」

信乃ちゃんが何かを言う前に、オレは静かに続けた。哀しみを抱いたその理由を告げる。

「君は、君のお母さんと同じ道を進んじやいけない」

信乃ちゃんが息を呑んだ。その瞳が揺れている。

「オレはそういう人間関係を否定するつもりはない。だけどね、信乃ちゃん。君が君のお母さんとの関係性に少しでも不満を抱いているなら……。君は君のお母さんと同じ道を進むべきじゃないと思う。絶対」

信乃ちゃんの顔から血の気が引いていく。

オレは信乃ちゃんの下から信乃ちゃんを見つめる。どいて欲しいが今は言うまい。

オレは穏やかに、優しく微笑んで続けた。

「オレの言ってることは分かる？」

オレの問いかけに答ええない信乃ちゃん表情がくしゃくしゃに歪んでいく。

泣くのか。いや、泣いても良いけども。泣いたらスッキリするからね。

どうすればいいか、分からないんだろうなあ。人の繋ぎ止め方とか、距離の詰め方とか。

信乃ちゃんを安心させるという意味で受け入れるのは簡単だけど、それじゃあ信乃ちゃんは信乃ちゃんのお母さんと同じ道を辿ることになる。オレ以外にそういう対象を見つけたときとか、オレと何らかの理由で距離が生じたときとかに、その穴埋めのために肉体的に男を求めようになる。

今は見様見真似、母親と同じやり方しか知らないからこそその行動だ。しかしオレが今これを受け入れてしまえば、それはもう見様見真

似ではなく、信乃ちゃん自身の成功体験になつてしまう。性交だけに。それはまあよろしくは無いだろう。そこまで考えることもないかもしれないが、いつか子供が出来た時、信乃ちゃんが信乃ちゃんの母親のような行動に出ないとは限らない。虐待は親から子へ継承されてしまうという報告もある。

信乃ちゃんのことを考えるならここは受け入れるべきではない。というか、普通に常識的に考えても受け入れるべきではない。断り文句としてはかなり卑怯な物言いかもしれないけど、オレはこれが一番響くと思つたので是非もないと思う。

信乃ちゃんは泣きそうな表情のまま固まっている。

オレは体を起こし、信乃ちゃんの肩をぽんぽんと打った。

「困つてる？」

「え……？」

信乃ちゃんがオレを凝視する。またハトが豆鉄砲をくらつたみたいな表情だ。

信乃ちゃんは続けてこう言った。

「はっ」

意味不明、と表情全体で表している信乃ちゃんに、オレはこう問いかける。

「いや、困つてそうだなつて思つて」

オレの言葉を聞いて、信乃ちゃんがとんでもないものを見るような目でオレを見る。眉を寄せた、しかめっ面だ。

「このあとどうすればいいか分からなくなつてるんじゃないかと思つただけだ」

「……」

信乃ちゃんは答えない。だが右往左往する眼球の動きが、信乃ちゃんの内心を如実に物語っている。現状の理解が追いついていないんだらう。

拒絶されるわけでもなく、受け入れられるわけでもない。信乃ちゃんからすれば、とんでもない方向から窘められて受け入れられた、という状況になるんだらうか。

「とりあえず、どいてくれる?」

ぽかんとした表情を浮かべる信乃ちゃんは未だに固まっている。

オレは信乃ちゃんの股の下から這い出るように移動する。そしてベッドの縁に腰かけた。信乃ちゃんの肩に布を掛けてあげると、信乃ちゃんはようやくやく、ゆつくりと動き出した。体の前を隠すようにして布を持ち、オレの手招きに従って隣に座った。

「どうしてこんな……って言う用語と語弊があるかもだけど、こんなことしたのかな?」

「……」

信乃ちゃんは俯いて答えなかった。

オレから言うのは嫌だったが、仕方なくこう言った。

「オレのこと異性として好きになったの?」

「あう……」

信乃ちゃんが頬を真っ赤に染める。

だろうな、とは思っていた。行動が極端というか。これしか好意の表し方を知らないんだろう。

「二目ぼれとかワンナイトラブって言葉もあるし、それ自体を錯覚だとか気の迷いだとか一時的なモノだとか、そういうふうに言うつもりはないけど……寝込みを襲うのはちよつと、ね?」

「……」

黙って俯く信乃ちゃんにオレは語り掛けるように優しく告げる。

「よくないよね?」

「……はい」

信乃ちゃんの声はしよぼくれていた。

どうしてしたのか、という問いかけはしない。さつき聞いたし。オレのこと好きになった、というのが理由だろう。いわば衝動的、本能的なものだ。

「オレは性急なのは好まないけど、情熱的なのは良いことだと思う」

信乃ちゃんがまた弾かれたようにオレを見た。顔に困惑が溢れ出てる。

お前は何が言いたいんだ、とでも言いたげだが、さきほどの狂氣的、



倒錯的な色はその瞳からは消えている。良かった。

「ありがとうね」

「……なにが？」

信乃ちゃんが疲れた様に言った。

オレは笑って言う。

「オレの言葉を聞いてくれたから」

「……」

信乃ちゃんが黙る。

さつきオレが言った「関係」の話思い出しているだろうか。

今回は意欲的な信乃ちゃんからその気の無いオレに、という状況だったが、逆なら刑事事件不可避である。今回でもその気になれば刑事事件に出来るが、オレにその気はない。言ってしまうば子供のしたことだし、未然に防がれていることでもある。

「どうして止まってくれたの？」

信乃ちゃんはオレの意図を掴みかねているようだが、流れに任せることにしたらしく、こう答えてくれた。

「婆のこと……思い出したから……」

信乃ちゃんは俯いて、か細い声で続けた。

「アンタの言葉……聞いて……。アタシ……あんな風になりたくない……って……」

信乃ちゃんの声は震えていた。本当にか細い声だった。

オレは体を後ろに軽く逸らし、天井を見上げてこう言った。

「そうだよ。なりたくない自分って……あるよねえ」

オレもそうだ。

必死に何かを訴える相手を頭から否定し、拒絶する。

そういうふうにはなりたくない。もしもそうなりそうなら、誰かに止めて欲しい。そう思うから。

信乃ちゃんがそう言ってくれるなら、良かった。オレはそれが出来たらしい。

「偉いよ、信乃ちゃんは。ちゃんと踏みとどまれたじゃないか。自分の意思で。信乃ちゃんは、信乃ちゃん自身がなりたくないと思うよう

な人間じゃなかった。それを確認できたのって、結構ラッキーなこと  
だと思うよ」

そう言つて笑いかけたオレを、信乃ちゃんはやはり信じられないも  
のを見るように見た。

信乃ちゃんは言つた。

「アンタ……。ホントおかしい……。いや、すげー人だよな……」

べつにすぐくないよ、と否定はしない。オレは凄くないと思つてい  
るが、信乃ちゃんがオレをそう思うのは自由だし。ただ、頭のおかし  
い人というニュアンスはちよつと頑張つて否定するけど。そうじゃ  
ないようだし。

「そうかな?」

「そうだろ。アタシとは違う。なんか、すげえ人だ。わけわかんねー」  
そう言つて信乃ちゃんは俯いたが、そのあとすぐにまた「わけわか  
んねー」と言つて、小さく笑つた。そして再びオレを見て、こう言つ  
た。

「怒んねーの?」

「叱つたよ」

オレの返答に、信乃ちゃんは小さく噴き出した。

そして穏やかな声で、甘えるようにこう言つた。

「ね、肩かして貰つて良い?」

「良いよ」

なんか口調がまた変わったな、と思いつつ、オレは了承の返事をし  
た。

オレがそう答え終わると、信乃ちゃんはゆっくりとオレの肩にしな  
垂れかかる。

信乃ちゃんはオレにもたれかかり、目を閉じて小さくこう呟いた。

「アタシとヤンない?」

「ヤンない」

オレが即答すると、信乃ちゃんは続けてこう言つた。

「もう少しこうしても良い?」

「良いよ。でももう少しね。オレももう少し寝たいんだ。ごめんね」

信乃ちゃんが小さく嘖き出して、こう言った。

「なんでアンタが謝んだよ。でも、そっか……。……そっか」

信乃ちゃんは何かを納得したらしい。そっか、と小さく繰り返している。

正直すぐにも離れて欲しい、というか服を着て欲しいんだけど、たぶん今信乃ちゃん的情绪が大変なことになっていると思うので、そこは目を瞑る。もう少し落ち着いてから言えればいいだろう。

少しして、信乃ちゃんがオレから体を離す。

オレに言われる前に、信乃ちゃんは自分から脱ぎ捨てた衣服を拾い、着始めた。

オレの性癖だろうか。目の前で着替えられると裸体を見せられるよりも刺激が強く感じる。

着衣を終えた信乃ちゃんはオレの前に立って、こう言った。

「アタシの男になってよ」

「それは男女の交際って意味で受け取って良いのかな？ ごめん。応えられない」

すう、と信乃ちゃんは息を吸った。答えは分かっていたが踏ん切りをつけるために腹を決めて告白した、といった男らしい様子である。が、脚は震えている。相当ショックだったようだ。罪悪感が凄い。

信乃ちゃんにはつこりと笑い、言った。

「アタシ、アンタに会えて良かった」

「ありがとう。すごく嬉しいよ。本当に」

会えて良かった、なんて今まで言っただけのことには無い。普通にめちゃくちゃ嬉しい言葉である。

信乃ちゃんはオレに背中を向けて、部屋を出る。その際、こう言い残した。

「おやすみ」

「おやすみ」

信乃ちゃんの挨拶に同じ言葉を返して、オレは再び仮眠に戻った。

その後、仮眠を終えたオレは階段を降りてリビングへ向かう。

その際、どたどたと騒がしい音がリビングの中から聞こえてきた。

信乃ちゃんなのは間違いないだろうけど、なにをしてるんだらう。そう思いつつ扉を開けると、信乃ちゃんは凄く綺麗な姿勢でソファに座っていた。オレが降りてきた気配を察知して礼儀正しく待っていたようだ。素直か。

信乃ちゃんを見て思わず笑ってしまったオレに、信乃ちゃんは恥ずかしそうに頬を染めた。

「な、なんだよ……っ。アンタが言うからだろお！」

羞恥で泣きそうな様子でか細く吠える信乃ちゃん。仮眠前に言ったことを気にしていたらしい。だがその表情や声音にぎこちなさや気まずさは感じられない。さっきのことも含めて、信乃ちゃんの中でも区切りがついているようだ。

オレは「ごめんごめん」と手をあげながら彼女の前に座り、笑ってしまった理由を伝える。

「素直な良い子だなと思ってね。微笑ましくて、つい」

オレの言葉に、信乃ちゃんは急に困ったような表情を浮かべて言った。

「良い子じゃねーよ、アタシはよ」

……なるほど。

信乃ちゃんの反応を見て、オレはすぐにこう告げた。

「そうだね。悪い子だ」

信乃ちゃんは弾かれたようにオレを見る。

ショックを受けた様に見える。しかしその瞳には奇妙な期待のようなものを抱えているように見えた。というか、オレの罵倒に嬉しうにしているまである。被虐趣味でもあるのかと疑いをもちそうになるが、そうじゃないだろう。

オレはこう続けた。

「どつちでも構わないよ。信乃ちゃんが良い子でも悪い子でも」

「……っ？ どういう意味だよソレ」

信乃ちゃんが怪訝な表情を浮かべて問いかけてくる。だがやはり、どこか期待の滲んでいる表情と声色だった。

信乃ちゃんの問いにオレはこう答えた。

「信乃ちゃんは信乃ちゃんってことだよ。良い子なところも悪い子なところもあるってだけ」

信乃ちゃんが気色ばむ。

めちやくちや嬉しそうだ。溢れそうな笑みを抑えるのに必死だが抑えきれない、という奇妙な顔になっている。

信乃ちゃんは言った。

「ンだよソレ」

そう言いつつ、めちやくちや嬉しそうだ。

信乃ちゃんは嬉しそうな表情のまま俯いた。そして顔をあげたとき、信乃ちゃんは神妙な表情を浮かべていた。その表情のまま、信乃ちゃんは言った。

「さつきはゴメン」

「うん」

オレは柔らかい笑みを浮かべて聴く姿勢に正して信乃ちゃんを見つめる。

「アンタの気持ちを、その……なんっーか……確認しなかった」

「そうだね」

「それと……止めてくれたから。アリガトな」

「うん」

「アタシ、アンタに惚れた」

「うん」

「気の迷いとか、なんかこう、年上に淡いなんたらみてえのじゃねーからー」

「うん」

そこまで話して、信乃ちゃんは困惑したように首を捻った。

「そんだけ?」

「そんだけ? って?」

「いや、だから……。困るとか、さつきみたいに、応えられないとか、そういうの……。それに、イヤじゃねーのかよ。これからアタシ、アンタにヤイロイロと世話なるわけだし……。こんなオンナがずっと傍に居んだぞ?」

「嫌じゃないよ。信乃ちゃんはオレが止めてって言ったらちゃんと止めてくれるから」

それ不快だからやめて、って言っても止めない人も多くいる。オレはそういう人とは距離を置くことにしているが、信乃ちゃんはちゃんと止めてくれるので距離を置く理由はない。

「気にしなくて良いのに」

「気にするだろ、フツー！ やっぱアンタおかしいって！」

立ち上がって吠えた信乃ちゃんだが、すぐに肩の力を抜いて座り込んだ。

オレは言った。

「実はおかしいって言葉はオレ、少し不愉快なんだよね」

「すみません！ もう言わねえ！ 二度と言わねえ！」

信乃ちゃんがヤケクソの様に吠えて、そして呆れたような笑みを浮かべて、言った。

「なんつーのかな……。アンタって、アタシとは……。なんつーか住む世界？ ってのがちげえ……。っ」

瞬間、信乃ちゃんが雷に打たれたように跳ねて硬直する。

「ええ……。？」

オレは何かの発作かな、と思った。

信乃ちゃんも不思議そうに首を捻っている。

「大丈夫？」

「変な感じした……。あのさ、ライルさん」

「うん？」

信乃ちゃんはすぐに話を切り替えて来たので、特に問題ないとオレも判断し、続きを促す。

「アタシ、アンタに惚れた」

「うん」

さつきも聞いた。

「ぜってえアタシに惚れさせるからなー！」

「……」

そう来るとは思わなかったが、そういうのもあるだろう。

信乃ちゃんは顔を真っ赤にして可愛らしくオレを睨んでいる。それが今までで見た信乃ちゃんの表情で一番自然なものに見えて、オレは小さく笑った。

なんか凄いことになったな。

なんて考えつつ、オレは思った。

——未来予知の話は……？

## ヤンキー？ 6

パトロールの時間まであまり無い。込み入った話ばかりあえず後にしよう。取り急ぎ、町内会の皆さんからされている信乃ちゃんの指名手配を解除してあげなければならぬ。

集会所へと向かうため、信乃ちゃんと共に玄関を出て、カギを掛ける。腰ほどの高さの鉄柵の門を抜け、敷地外に出る。信乃ちゃんが門を抜けたところで鉄柵を締め直した。軋むような錆びた音がする。簡単な留め金を掛けたオレは信乃ちゃんへと振り返り言った。

「お待たせ。行こうか」

オレの言葉に頷いた信乃ちゃん表情は見えない。信乃ちゃんは今、フードの付きのパーカーを着ていて、フードを深くかぶって貰っている。パーカーはオレのお古だ。追われる立場にある信乃ちゃんに配慮してのことだが、ダンスに長い間仕舞っていた古着を着せることになってしまったて申し訳なく思う。

「ごめんね。臭くない？」

歩き出してしばらく、並んで歩く信乃ちゃんにオレは言った。

「え？ いや全然。むしろ……」

フードの奥に信乃ちゃんの瞳が覗き見えた。

言い淀んだ信乃ちゃんに、オレは小首を傾げて続きを促した。文脈からすると肯定的な返答が続くと思われるが、さすがに「良い匂い」と続くとは思えず、何と言うのか気になる。

信乃ちゃんは少し間を空けて言った。

「その……」

「うん」

「ライルさんの匂いがすんだよな」

……なるほど。

非常に反応に困る返答だ。

文脈からすると、信乃ちゃんはオレのお古のパーカーからオレの匂いを嗅ぎ取り、そのうえで好感を抱いているらしい。体臭に好感を抱く相手とは遺伝子的に相性が良いとかなんとか聞いたことはあるけ



ど、言及すべきでは無いだろう。そして当然ながら衣服は洗濯してから片付けている。パーカーからするのはオレの体臭ではない。タンクの中で家の匂いが染みこんでしまったか、カビの匂いであることは断っておきたい。

そして実のところ……家を出てから今まで、なにやら信乃ちゃんがやけに静かだなと思っていた。同時に呼吸音が規則正しいとも感じていた。その答えが分かったかもしれない。もしかしてだが、信乃ちゃんは深呼吸をしていたのでは……？

何のために？

というのは今しがた答えが出たわけで……。

「……」

これ以上、話を掘り下げたくはない。嫌悪感を感じているわけではないということは断言しておくが、それはそれとして、どうか少し沈黙させて欲しい。

数瞬悩む。だが、素晴らしいと思える答えを出せなかった。観念したオレは静かに微笑みを浮かべ、こう言った。

「そっか！」

これこそが全てを曖昧にし直前の話題をどこぞへと流すという大人の必殺技、愛想笑いである。

その後、隣から妙に視線を感じながら集合場所に着いたオレはパトロールに参加する人たちが集まるのを待って、謝罪と事情の説明をする事となった。

金髪の女不審者とは恐らくこの信乃ちゃんのことであり、オレを尋ねてきたは良いものの中々会えず、結果として不審者に見られてしまったこと。

そこまで話をして、一人、訝しげな様子で前に進み出て来た男性がいた。

「雷留君の言うことは分かったが……」

男性はそう言いながら、フードを取って素顔を晒している信乃ちゃんを値踏みするように凝視する。不躰だとは思いが、いかんせん事情が事情だ。この男性にも確か小さな子供がいたはずだし。オレが

言ったことを鵜呑みにすることは難しいと言ったところか。そこはオレの徳不足だし仕方がない。

だが横目に見た信乃ちゃんは不愉快そうに眉を寄せている。今にも舌打ちをしたり悪態を吐いたり唸り声を出したりしそうな様子だ。オレは信乃ちゃんを根は良い子だと思っっているが、基本的には触るモノ皆傷つけるナイフのようなスケバンである。年齢よりも未熟だからこそ、これから関わる大人次第でどうにでも転ぶだろうが、今は人の家で人生相談中に膝を立てるような、ちよつと世間を知らなさすぎる女の子である。きつとこのまま放置すれば、オレの懸念は取り越し苦労では終わらないだろう。

オレは信乃ちゃんの肩に手を置きながら、男性へと言った。

「もしかして、信乃ちゃんのことをご存じなんですか？」

「いや……ご存じって言うか……」

男性は小さい声で反応したものの、その視線が信乃ちゃんから動くことは無かった。一方で、横目に見える信乃ちゃんは驚いた様子でオレを見上げていて、その表情からは剣呑さが消えている。オレに気を取られ、男性の視線のことはすぐに意識から外れたようだ。

オレは男性へと続けてこう言った。

「なにか気になることでも？」

「いや……この子というか、不審者の方なんだが……」

男性はようやく信乃ちゃんから視線を外すとオレの方を向いた。困惑が滲んだ表情だ。

歯切れの悪い男性の返答内容に、オレは少し安堵する。信乃ちゃんを探る様な様子から、無いとは思うがこの男性が信乃ちゃんを追う半グレの関係者である可能性を考慮したからだ。結果から言えばやはりそれは取り越し苦労だったようだが、別の意味で聞き捨てならない言葉を聞いた。

「それではまるで信乃ちゃんと例の不審者が別人かのようなおっしやり方ですが……」

オレの問いかけに男性は困ったように眉根を寄せて小首を傾げ、腕を組むと俯きながらこう言った。

「いやあ、うーん……。どうなんだろう……。いや、遠目だったからなあ。オレもなあ……。でもなあ」

唸る様に自問自答をしながら悩んでいる男性の様子に、今度はオレが困って眉を寄せてしまう。

どうやらこの男性は不審者を遠目ながら目撃したことがあるらしく、そのときの不審者の外見とここにいる信乃ちゃんの外見になにやら相違が見られるようだ。

一人で悩んでいても埒が明かないだろうと、オレは男性へと声を掛けた。

「なにか引つかかることが？」

「いや、髪がな。オレが見たときはもつと短かった気がして……。うちの嫁さんと同じくらいのさ。ああ、うちの嫁さんの髪、これくらいなんだけど……」

そう言っつて男性が持ち上げた指先は顎のラインで振られている。

それを見て、オレは思った。

——くつそややこしいことになってきたやんけ。

不審者と信乃ちゃんが別人の可能性なんて一切考慮していなかった。

え、なに？ 信乃ちゃん君もしかしてサスペンスとかミステリーとかそつち系も兼ねてたりする？

なんて考えを微塵も表に出さず、オレは信乃ちゃんの方を見ながら努めて穏やかに訊ねた。

「信乃ちゃん。その髪ってウィッグじゃないよね？」

「地毛だけど、なんで？」

信乃ちゃんは状況を理解していない様子で、不思議そうに小首を傾げながら長いポニーテールの髪先を指先で挟み持ち上げてオレに見せてくれる。少なくとも髪を解いたとき、その長さは顎先では留まらないだろう。

男性の見間違いだと言えばそうかもしれないけど、最近オレの周りで起こっている妙な事の連発を考えると、これもちよつと警戒心を抱かざるを得ない。

どうしたもんか、と悩むオレに、男性がこう続けた。

「それに……。その子、未成年だろう？ もうちよつとトシ行つてた気がするんだよな……」

不審者の年齢が、ということだろう。

つまり金髪の女不審者は遠めに見て成人していると判断できる容姿をしていて、髪は短い。

それは初耳の情報だ。

いや、そうか。考えてみれば分かることだったかもしれない。

もしも件の女不審者が信乃ちゃんのような見るからに未成年のヤンキー系だったなら、町内会の人達はパトロールでの現状維持ではなく、さつさと警察に相談していたはずだ。しかも最近は暴走族が暴れていたから関連付けて考えるのが自然。危険は身近にあると考えざるを得ないし、生活安全課に任せた方が話が早い。

オレの家の近所に出没するという話や目撃情報が出始めた時期から、オレは信乃ちゃんがそうなんだと単純に考えてしまったけど……実はそうじゃない？

「なるほど……」

とりあえずオレは信乃ちゃんに向き直った。

「ごめん信乃ちゃん。君のことを不審者呼ばわりしてしまっただけど、目撃された不審者が君じゃない可能性が出てきた」

「え、まじ？ アタシ不審者じゃねーの？ やったじゃん」

あんまり気にした様子も無く、「なんかよく分かんねーけどラツキー」くらいの軽い感じの反応を見せる信乃ちゃんを見ると、逆に申し訳なくなつてくる。

「本当に申し訳ない」

オレが深く頭を下げると、信乃ちゃんは慌てた様子で言った。

「別に良いって！ ライルさんちの近所ウロウロしたのはマジなんだし……。それに、もしかしたらなんだろう？ アタシだって別にいつもこの髪型ってわけじゃねえしさ」

信乃ちゃんは謝るオレをフオローしようとして、何故か自ら不審者である可能性をアピールし始める。根はいい子なんだよな。未熟なだけ

で氣遣いだってちゃんときてる子だし。だからこそ罪悪感が湧いて来る。

確かに信乃ちゃんの言うようにまだ薄い可能性の話でしかないんだけど、実際に信乃ちゃんと不審者が別人だった場合、オレは信乃ちゃんにとんでもなく失礼なことをしたことになる。とはいえ、あまり食い下がって謝罪するのもかえって鬱陶しいだろう。冤罪を掛けてしまったかもしれない立場にあるオレが信乃ちゃんのために出来ることは、この事件の真相を解明することか。

そんなに大袈裟なことでもないかもしれないけど、こうなった以上、信乃ちゃんの面倒は最後まで見るところを改めて決意する。

それから少し話をした結果、町内会でのパトロールはまだ続けることになった。

また、信乃ちゃんには不便を掛けることになるが、この辺りを出歩く際は帽子を被って貰うことにした。そのうえで尚も金髪の女不審者が目撃されるようなら、信乃ちゃんは不審者ではないという証明になる。もともと信乃ちゃんは追われる身にあるから丁度いいだろう。

信乃ちゃんが追われているという件に関しては、本当は警察に行った方が良さんだけど、本人がどうしても行きたくないと言えないんだよな。まあ、なんとなくその辺はセオリーっぽいなと予想は出来ていたけど。

そうして町内会の集まりは一端解散となり、オレ達は帰路に就いた。

信乃ちゃんを伴って曲がり角を折れ、オレの家のある一本道に入るとき、オレは思わず足を止めた。  
いる。

東堂家を越えて少し先にある電柱の影に、確かに東堂家の方を見ているらしい金髪の女不審者。遠目だから分かりづらいが、確かに女性的なシルエットで、かつ成人していそうだ。何故ならパンツスーツ姿である。確かに未成年には見えない。

「……あいつか？」

低い声がオレの耳に届く。信乃ちゃんだ。

「どうだろう……」

ぶつちやけあいつだろ、と本当は思ってはいる。だが信乃ちゃんへの冤罪疑惑もあって、ちよつと断定する勇気が無いオレである。

「ライルさんの知り合いじゃねーんだよな？」

「まあ、そうだね。多分知らない人だと思う。遠くてまだ分からないけど」

「だったらあいつから直接話聞いてやろーぜ」

「そうだね……。その方が話も早……。え？　ちよつ」

オレが言い終わらぬうちに、信乃ちゃんが駆け出してしまった。

やりかねないというか、確かにそうするだろうな、という納得があった。

信乃ちゃんを呼び止めたいところだが、あまり大きく名を呼んでしまうのは彼女の立場上憚られる。

だが相手は不審者（仮）だ。何を持っているか、何をしでかすか分からない。いくら男相手に大立ち回りをしてきたらしい信乃ちゃんでも、危険なことに変わりはない。

オレは少し遅れて駆けだした。

が、追いつけない。

しかし信乃ちゃんは足が速い。健脚だ。

オレが信乃ちゃんに追いついたときには、既に信乃ちゃんは不審者（仮）の行く手を阻むように立ち、睨みつけていた。走ったからか、パーカーのフードは外れている。

不審者（仮）は信乃ちゃんに危害を加える様子も、敵意や不信感を感じる様子も無く、強く困惑しているようだった。というよりは、怯えている……。？

そりや、いきなり見えず知らずの人間が全力疾走で走って来て睨みつけてくればその反応も普通のことだと思っただけ。怯え方がなんか……。

乱れた息を落ち着けて、オレは無言で向き合っている二人の傍で立ち止まった。

不審者（仮）は、パンツスーツ姿のキャリアウーマンといった外見

の女性だった。その胸元に薄い黄色の宝石のようなものを飾ったブローチのようなものをつけており、ふんわりと遊ばせた薄い金色の毛先は顎先で纏まり整っている。切れ長の瞳は意志の強さを感じさせるが、どこか優し気な雰囲気を滲ませていて、きつい印象は感じない。同じような切れ長の瞳の信乃ちゃんとは異なる印象を受ける。パンツスーツ姿と相まって、出来る女という感じだ。劇団のメインとかにいそうな感じ。

「……。な、なに……」

金髪の女性は僅かに声を震わせながら、オレと信乃ちゃんの間で視線を彷徨わせている。小動物のような所作と見た目にギャップが生まれて少し混乱するが、オレは落ち着いた声音を意識して言った。

「オレはこの子の友人で、東堂雷留です。この子は——」  
「信乃だ」

信乃ちゃんの立場上あまり情報を広めたくなくて偽名ないし名を伏せようと思っていたが、オレが言い終わらぬうちに信乃ちゃんが名乗り、一歩強気に前に出た。オレは内心の溜息を隠し、意識を切り替えて続ける。

「信乃ちゃんです。突然すみません。少しお話を聞かせて頂きたくて。不躰だったのは謝ります」

「てめーなにもんだ？ あ？」

下手に出ているオレを他所に、信乃ちゃんはヤンキーモロ出しで女性に詰め寄り始める。話がこじれるからやめてほしい。

「ひい」

小さな悲鳴が金髪の女性の口から零れた。いや、これもう無罪だろ。そう思いつつ、オレは信乃ちゃんの肩に手を置いた。

「信乃ちゃん、ちよつとオレに任せて貰ってもいい？ 話を聞いてみたいんだ」

「わかった。……おいてめえ、あんま舐めたこと——」

「信乃ちゃん待って待って」

「えっ、でも」

信乃ちゃんがちよつと失礼すぎるので止めに入る。信乃ちゃんは

驚いたようにオレを見るが、オレは信乃ちゃんへ哀しみの表情を見せてから、金髪の女性に頭を下げた。

「重ね重ね申し訳ないです。この子が失礼を……」

「えっ……。ま、まあ……う？」

恐る恐る答える金髪の女性は、まだ怯えている様子だ。申し訳なきが積もる。

一方で、信乃ちゃんは不満そうな表情を浮かべてオレを見ている。オレを睨みつけてきているわけではないが、まあ納得は出来ていない様子だ。というか泣きそうである。信乃ちゃんからすれば正義感からの行動を、よりによってオレからケチを付けられた形になるわけだから気持ちはわかる。

「信乃ちゃん。この人がもし全然関係ない人だったら信乃ちゃんが悪者になっちゃうからちよつと抑えよう？ 信乃ちゃんがオレや近所の人達を守るためにやってくれてるのは分かってるからさ。ありがとうね」

「……」

信乃ちゃんの耳元で、小声でそう伝えれば、信乃ちゃんの雰囲気がちよつと柔らかくなった。というか、頬が緩んでいる。守るとかそう言う言葉好きそうだなと思っただけど正解だったみたいだ。ちゃんとこの子の想いは汲み取れたらしい。

改めて金髪の女性に向き直る。

「改めて謝罪を。それと、少し話を聞かせて頂きたいんですがよろしいですか？」

「……。少しなら……」

金髪の女性は信乃ちゃんの方をちらちらと怯えを滲ませて見つ、オレにはしつかりと目線を合わせてくる。

「まず……お名前をお聞きしても？」

「……。名前……」

おや？

とオレは内心で疑問を抱く。

名乗ることに消極的だ。



まあ今の世の中個人情報秘匿が推奨されているから、おかしい話ではないかもしれないけど……。まさか自分の名前が分からないなんてオチはないだろう。さすがに。

「何とお呼びすればいいかなと思ひまして。オレ達は不審者ではありません。先ほども名乗りましたがオレは東堂雷留と言ひまして、その家の人間です」

「……。そこ……？」

「おや？」

とオレは内心で再び違和感を抱くが、話を続ける。

「ええ。その家です」

東堂家を指先で示す。金髪女性は東堂家を一瞥し、オレを見た。

「……。そう……」

そういつて金髪の女性は黙ってしまった。無口な人だな。

表札が見えたのか、「……。東堂……」と納得したように呟いている。信じて貰えたらいい。

だが、オレや東堂家に対する反応があまりに乏しい。やっぱり、オレの家を見ていたわけではないのか？

何なんだろうこの人。

「改めて、お名前をお聞きしてもいいですか？ 何とお呼びすれば？」

「……。葵……」

「葵さん、ですね」

「……。用件を言つて……」

葵さんがぼそりと呟く。

落ち着いたようだ。怯えた様子ももうない。

ささて、なんて聞こうか。

「葵さんつて、もしかして最近この辺に越して来た方ですか？」

「……。どうして……？」

「いえ、綺麗な方だなと思ひまして。オレはずつとこの家で暮らしているんですが、きつとお見かけしていれば忘れることは無いかな、と」

「ナンパ……？」

信乃ちゃん、もうちよつと黙つてようか。

「……。違うわ……」

「そうなんです。では、ご友人がこの辺に住んでいる、とか？」

「……。ご友人……」

考え込むように呟いた葵さんの表情からは何を考えているか読み取れない。

「ライルさん？」

ちよつと静かにしてて信乃ちゃん。

「ええ。それとも、ご親戚とか？」

「……。親戚……」

親戚。そう呟いてから少し間を置いて、葵さんの表情が劇的に変わった。

何かを耐えるような、辛そうな表情だ。

「……。いない……」

そう絞り出したように呟いた葵さんの様子には、色々と察するところがある。

オレは申し訳なさそうに言った。

「すみません。気を悪くされたなら謝ります」

「……」

何も言わない葵さんの様子からすると、オレが彼女の気を悪くしてしまったことは明白だった。

「ではやはりご友人が？ それとも、お仕事かなにか……」

まずいな。

というのも、信乃ちゃんがそわそわとし始めているのが横目に見えるからだ。オレの質問というか尋問というか、迂遠に情報を引き出すとする姿勢は、どうにも信乃ちゃんとそりが合わないらしい。今にも核心に迫りそうな様子だ。

うーん。もつと直接的に聞いた方が良いのかな。この辺で不審者の目撃情報が頻発しているんですが、何かご存じではありませんかと。

でもこの人が不審者じゃない場合、要らない不快感を与えてしまうことになるからなあ。

「……。何なの……」

葵さんが苛立たし気に呟いた。

「どうやら先ほどの質問で害した気分が大きかったらしい。失敗してしまった。こうなっては仕方がないか……」

「いえ……この辺でちよつと見慣れない人がいるとどうしても気になつてしまう質でして。ほら、田舎だとそういう話、聞きませんか？ よそ者だとか、そういうの。まあ、そこまで言うつもりはないんですが、なんというか……癖、みたいなものですかね」

横目に見える信乃ちゃんがソワソワソワソワしている。

「もうなんかめんどくせーよライルさん！ なあ、アンタ、葵つつつたっけ？ どういう了見でこの辺うろついてんだ？」

と今にも言い出しそうだ。だがオレのために耐えてくれているよ。うだ。オレは嬉しいよ。後で伝えよう、この素直な思い。

「……。面倒……。消えて……」

「えっ？」

葵さんがため息と共に呟いた。

思わずつぶやいたオレの横から、信乃ちゃんが一步踏み出した。

「なんだあ、その態度！ ライルさんが下手に出てりやつけ上げりやがって！」

信乃ちゃん、ちよつと三下ムーブやめて。気持ちわかるけど。

信乃ちゃんが怒鳴ると、びくり、と葵さんの体が跳ねる。ビビリか？ でもオレにはそうでもないし、悪態も吐くしな……。やつぱり見た目とかの問題なのか。

そんなことを考えていると、突如、葵さんの胸元のブローチ、その薄い黄色の宝石が輝きだした。

オレはそこで既視感を覚える。

そう言えば、あの宝石の形……。

「うお、まぶし！」

信乃ちゃんの声。

同時に、目を眩ませるほどの光がオレ達を呑み込んだ。

光が収まったとき、葵さんの姿はどこにもなく、妙な既視感と嫌な

予感がオレの中にむくむくと沸き上がり出す。

隣を見ると、少し安心した。信乃ちゃんがそこにいたからだ。

「……あれ?」

信乃ちゃんが言った。

「なにしてたんだっけ、アタシ……? アレ……?」

信乃ちゃんはオレを見て小首を傾げている。

「なあ、ライルさん。アタシ達なにしてたっけ?」

信乃ちゃんは本当に困惑した様子でオレを見つめている。

「あれー?」

信乃ちゃんは可愛らしく小首を傾げ、ポニーテールが揺れている。

振り返ったオレは肩を落としながら東堂家からゆっくりと視線を

流し、明かりの無い隣の家を見つめた。

オレは思った。

——そっちかあ……。

記憶の混濁により少しパニックになっている様子の信乃ちゃんを伴い、宥めつつ帰宅したオレはリビングのソファに信乃ちゃんを座らせ、飲み物を提供し、向かいに座った。

信乃ちゃんはソワソワとした様子でオレ……というか、オレの隣の空席を見つめている。来たいのかな？

「信乃ちゃん、大丈夫？」

「えっ、あー……。わかんねえ……」

「頭痛とか吐き気とかはある？」

「いや、そういうのはねえけど……」

信乃ちゃんは町内会の集まりから退出した後の記憶が無いようだ。信乃ちゃんの間接だと、気づいたら東堂家の前に立っていたということになる。記憶の混濁によるパニックはオレも経験があるので、心中は察するところだ。

しかし……。今回の件で確信したが、世の中に何か、不思議なことは確実に存在するようだ。さすがに信乃ちゃんがオレを担いでいるとは思いたくない。葵さんとグルになってオレを担ぐ理由もないだろう。認めざるを得ない。正直なところかなり複雑な心境だ。どうせならもつとなにか劇的なイベントを経て、感動と共に世界の真実に辿り着きたかった。しかしオレが今まで必死に「無い」ものとして、諦念と共に受け入れ忘れ去ろうとした「異変」は、なんてことの無い日常の中で、電信柱に張られたいかがわしい広告を見つけるようなノリでオレのもとに現れた。

せめて信乃ちゃんの「未来予知」の話聞いて、その結果、みたいな感じでも良かったと思うんだけど。いくらなんでも軽すぎんか？

世の中そんなもんか。

一方でそんな達観した考えもある。人生の変化、岐路なんて突然やって来る。東堂家を襲った事故も、亡くなった東堂家の人間や運転手にとっては直前まで全く信ぴょう性の無いイベント、アクシデントだったはずだ。宝くじに当たる、交通事故に遭う、異能の存在を知る、

似たようなものだろう。直前までは在り得ないと考えていて、でももしかしたらと、可能性を否定しきれないもの。

ぐちぐちと考えても仕方ないが、オレのこれまでの日々は一体何だったのか。本当に複雑な心境だ。喜びはある。オレは「真実」を語っていた。それはオレにとつて、とても喜ばしい事実だ。

習慣的に一般常識の中に在ろうとしていた後遺症のせいか、まだ心のどこかで『真実』を信じ切れていないというか信じたくないというか、理性が混乱しているのは感じているが……。例えるならば犬だと思つて飼つてたペットが熊だつたくらいの混乱か……。恐怖と言つてもいいかもしれない。オレが必死に守ろうとしてきた普通・常識が崩れ落ちる恐怖。

だがオレはそれを受け入れなければならぬし、乗り越えなければならぬ。それも、今、ここで、今すぐに、だ。

オレは今混乱しているし、前述のように恐怖心に似た感情すらも抱いている。だが、一番混乱しているのはオレではない。信乃ちゃんだ。記憶の連続性を保っているオレと違い、彼女は今、明らかに記憶障害を起こしている。しかも、恐らくは人為的に。

今オレが信乃ちゃんに「気のせいだよ」とか、「疲れてるんだよ」だとか、そんな誤魔化しを入れて、有耶無耶にすることは簡単だ。信乃ちゃんはきつとオレがそう言えば、半信半疑ながらもそういうものだと受け入れようとするだろう。

それは、かつてのオレのように。

彼女はきつと、魚の骨が喉元に刺さっているかのような違和感と疑心を抱いたまま、これからの日々を過ごすことになる。オレの時のように深刻なものではないし、月日と共に忘れていくような些細なこともかもしれない。だけどそれをオレがやってしまったら、オレはオレを許容できない。素直でいるというオレの在り方にも、オレの在りたい大人の姿にも反してしまう。先ほど信乃ちゃんに言ったような、「なりたくない自分」の『ヴェイジョン』がそこにある。

有耶無耶にすることが正しいというか、それが大人の配慮だと言う考え方もあるだろう。オレがオレのポリシーを守るために信乃ちゃ

んを犠牲にしようとしているという考え方も出来る。今ここでのオレの選択によつて、何かが大きく変化する可能性だつて十分にある。何が正しいかなんてオレには分からない。ここで黙つて恐怖に背を向けるか、足元を崩しながら現れた真実っぽいものに向き合おうとするか。

信乃ちゃんに迷惑を掛けることになるかもしれないと思うと気が引けるが、ここで有耶無耶にすることを選べば、オレはこれから先ずっと歪みを抱えたまま生きることになるだろう。きつと、逃げ癖が付く。

本当に大きな選択と言うのは、突然やつて来る。

「ふっ……」

オレは小さく笑つた。

腹が決まつたからだ。

オレは信乃ちゃんに感謝しなければならぬだろう。

この子のおかげでオレは今、「大人」でありたいと強く思っている。「これまでの自分」に怯む己を乗り越えるだけの力を貰っている。

奇妙な出会いで、まだ短い付き合いだが、なんともまあ、得難い奇縁じゃあないか。きつとオレとこの子の付き合いは長いものになる。そんな予感を抱いた。

そうなるか、という点だ。思えば、気になることはあつた。あの刀を  
持った女子高生の発言や、瞳の色が変色する明日香さんやその関係者の振る舞いに、茶々ちゃんたちの言動。雅さんは……どうだろう。あの  
人なんかPONな匂いがしたけど……。でもなんかクナイ突きつけて来た  
時に変なこと言つてたし……。あの世紀末的な大事故の連発もそうだけ  
ど、ちよつと情報過多で頭がつかないな。

ただ一つ共通していそうなのは、どうやらオレはその辺の影響を受けていない  
ということだ。何かを守られているのか、オレ自身がそういう能力者なのかは  
分からないけど。

「とりあえず、記憶障害以外の異常はないつてことでもいいのかな？」

「うーん、たぶんそうかな」

「一応、病院行く?」

「いや、良いよ……ほけんしよとか持ってねーし」

「それはそれで結構問題だよねえ……」

ホントにな。明らかに問題が多すぎんだよ。日常的なモノも非日常的なモノも。

信乃ちゃんも落ち着いて来たようなので、本題に入る。

「信乃ちゃん。どうやらオレ達は何か……裏の世界に関わってしまったようなんだ」

「……そりや、まあ」

信乃ちゃんが「え、今更?」みたいな顔でオレを見ている。

だがオレの言う裏っていうのはちよつと意味が違う。

「あ。ヤクザとか半グレとかそう言う意味の裏じゃなくて、魔法とか超能力とかそういうののこと」

家を出る前にも似たような話をしたし、信乃ちゃん自身が「未来予知」の力を持っていることらしいことから、やはり「今更?」といった様子で、怪訝な表情である。

「……そりや、まあ」

オレが何を言わんとしているのか測りかねているのか、探る様に言った信乃ちゃんだったが……。

「はッ!?!」

信乃ちゃんは弾かれたようにオレを見て、食い気味にこう続けた。

「ラ、ライルさんやっぱそういう……っ!?」

「あ、いや、そういうわけじゃないんだけど……。ごめん」

神妙に話し始めたオレの様子から、信乃ちゃんはオレが魔法使いとかそういう存在だと勘違いしたようだ。でもオレ自身にこれといった分かりやすい何かがあるわけではないので、否定する。誤解させてしまったことは、小さく手を上げて謝罪した。

すると、信乃ちゃんは恥ずかしそうに俯いてしまった。小さく「あう……。」と呟きながら。

それが可愛らしくて笑ってしまったオレに、信乃ちゃんは「な、なんだよっ!」



と、頬を染めた涙目で可愛らしく睨みつけて来る。

「本当にぐめん。可愛くて」

「ぐっ！ うー……っ！」

唸り声まで上げ始めたところを見るに、信乃ちゃんは余程恥ずかしいらしい。

オレは信乃ちゃんから有難くも好意を向けて貰えているなーという自覚はある。だからこそ信乃ちゃんが、さっきの葵さんに向けたような態度をオレに取ることが出来ない、ないし取りたくないと思ってくれているだろうことも。

可愛らしいがあまり意地悪するのも酷い話だと思い、ここまで切り替えて話を始めることにする。

「とりあえず信乃ちゃんの未来予知の話は置いておくとして、オレの知ることと考えを伝えるよ。さっきオレ達は集会を終えて、この家の近くに金髪の女性が立っているのを目撃した。そして、葵と名乗った金髪の女性から話を聞いていたんだけど、その話の途中に彼女の体……正確には胸のブローチの宝石が急に発光してね。気づいたら葵さんはいなくなっていて、信乃ちゃんは葵さんに関する記憶を失っていた。これはオレの予想でしかないんだけど、彼女は何か……」

そこまで言って、先を続けようとしたオレの中に戸惑いと羞恥心が湧き上がって来た。いい年した大人がその言葉を口にする事への抵抗を強く感じるが、オレはそれを呑み込んで強く続けた。

「魔法とか超能力とか、そういう不思議な力を持っているんだと思う」

言った。言い切った。

清水の舞台から飛び降りるような気持ちだったが、やり遂げた。達成感が凄い。一皮むけたというか、自身の成長を感じる。

「ええ……？ ウソ、マジで!？」

なんで信乃ちゃんがそんな反応なんだよとは思うが、信じていないわけでは無いらしい。どこか喜びのようなものを感じるの、同類を発見したかもしれないからか。

だが、徐々に信乃ちゃんの雰囲気は剣呑なものに変わっていった。目力が凄い。

「なあ、ライルさん。それってさあ……？　その女があたしの記憶、消したって……こと？」

怒ってんなあ。

しかも結構ガチ目な奴。

記憶操作なんて有り得ない真似をされたら、人はまず恐怖とか嫌悪感とかを抱くモノだと思っていたが、信乃ちゃんはどうかやらそうではないらしい。

しかしそうだな。記憶の人為的な操作なんて普通なら在り得ない現象で、本来なら考慮する必要もないことだけど、それが速やかに実現できて、しかも自分が被害を受けたとなれば話も変わる。確かに恐ろしいことではあるが、それは同時に人の尊厳を踏みにじる行為でもある。怒るというのも当然の反応の一つだろう。

オレは感心し、

「おお……」

と思わず感嘆の言葉を口にした。

「……？」

困惑している信乃ちゃんへ、オレは続ける。

「信乃ちゃん。オレは今、君の強さに尊敬の念を抱いている。怯んだっておかしくないのに……そこで引かなかったのは、間違いなく強さだ」

弱点と長所は表裏一体とはよく言ったものである。

攻撃的という弱点が、今は彼女の精神を強く支える長所に転じている。

「カツコイイよ信乃ちゃん。ホントに」

オレの言葉を聞いて、少しの間ぼかんとしていた信乃ちゃんだったが、その顔は急激に茹でダコのように赤く染まった。

「あう……」

弱弱しく呟いた信乃ちゃんは目の前のコップを手に取り、ずずず、と水を飲む。分かりやすく照れ隠しな感じで、コップで顔を隠しながら。

水分を取って少し落ち着いたのか、コップから顔を放し、信乃ちゃ

んは言った。

「つ、つまりさ。そいつがあたしの記憶を消したわけだろ？」

話が戻った。分かりやすいやり直した。どうやらさっきのやり取りは無かったことにしたいらしい。

オレは信乃ちゃんの意を汲んで頷いた。

「そうだね。そして、葵さんは恐らく、オレの記憶も消そうとしたはずだ。だけど、オレの記憶は消えてない」

「そう！ それ！」

信乃ちゃんが前のめりに言った。

「ライルさんなんで!? もしかしてライルさんだけ視れないのと同関係あんのか!？」

なるほど。口ぶりからすると、信乃ちゃんの未来予知能力で知る未来では、オレは存在しないらしい。テーブルに乗り上がりそうな信乃ちゃんをやりわりと手で制す。

「それは分からないけど、似たようなことに心当たりがあってね。総評すると……どうやらオレは、そういうのに影響を受けないみたいだ」

「すげえ……！ なんかすごくねそれ!? やっぱライルさんすげえよ

！ あたしあライルさんは普通の優男やさおじゃねえって思ってたんだよ

！ そうだよなあ！ やっぱライルさんはすげーんだなあ!!」

語彙力……。

信乃ちゃんは何故か我がことのように喜んでいて。テンションが上がっている信乃ちゃんを見ていると微笑ましい。その普通じやないって言い方にはちよつと思うところがあるけども。

信乃ちゃんは一通りはしゃいで落ち着いて来たのか、にこにこ信乃ちゃんを見ているオレに気づいたようで、恥ずかしそうに座り直した。のぼせたような様子で、信乃ちゃんは言った。

「いや、なんか……すげーな。一日ですげーことがいっぱいだ。あたし、頭パンクしそう」

オレは思った。

——いや、それオレのセリフ。多分オレ信乃ちゃんの倍以上や

べえこと一日で経験してっから。

オレの内心に気づかず、というか気づかせないようにしているんだが、信乃ちゃんはどう、とため息を一つ吐き、続けた。

「で、どうすんだ？ その葬って女への返し」

考え方がもう生粋のアウトローというかなんというか……。

「返しって言うのは……報復って意味だよな？ 止めておいた方が良いと思う」

「……なんで？」

やる気満々だった信乃ちゃんはオレの返答を聞いて一転、氣勢を削がれたといった様子でオレを見つめている。

オレは言葉を選びつつ、考えを伝えた。

「確かにまるで実害の無いオレはともかく、信乃ちゃんは実際に記憶を失うという実害が出ている。報復する理由は充分だと思う。怒る理由だって尤もだ。だけど今のところ、信乃ちゃんはある短時間の記憶しか失っていないし、他に実害は見られない。触らぬ神に祟りなしとも言える。彼女は明らかにオレ達とは住む世界が違う、未知の存在だ。能動的に関わって行くべきじゃない。はつきり言っ……危険だ」

「……やられっぱなしでいろってのかよ」

「そうとも言えるかもしれない。納得できないってのも分かるよ。力、理不尽に屈することは誰にとっても決して愉快なことじゃない。それはそうだ。だけど、考えてみて欲しいんだ。本当に一瞬だった。花火が開くくらいの一瞬の間に、葬という女性は、一人の記憶を改ざんしてみせた。それ以上のことが出来ないという保証はない。もしここ一か月くらいの記憶を消されたら？ 信乃ちゃんは自分が追われているということすら忘れて実家に帰り、半グレたちにわけも分からないまま捕まるかもしれない。もしもすべての記憶を消されたら？ 自分の名前すら失ったらどうするの？」

「……。そんな未来は……視えねえよ」

「……」

困ったな。

それを言われるとどうしようもない。

信乃ちゃんの未来予知の詳細を知らない。どのような形で、どのような内容を視られるのか、信乃ちゃんの口から聞くことでしか知り得ないオレには。

だから結局のところ、オレは自分の気持ちを素直に伝える以外に出ることはない。そこはずっと、誰に対しても変わらないオレのスタンスだ。

「君のことが心配なんだ。これ以上、君に傷ついてほしくない。短い付き合いだけど、オレ達、結構仲良くなれたと思ってる。だから辛いんだ。君が傷つけられるのも、オレのことを忘れてしまうのも」

だからオレはオレの都合を伝え、頼むしかない。

何を言おうとも、根つこのところでは人が人の行動を左右することは出来ないし、してはならない。

自らの行動を決定するのはあくまで本人の意思で在るべきだと、オレ自身が強く思うからだ。東堂家を出る前に信乃ちゃんに伝えた様に。

何が正しいかなんてのも含めて、価値観は本当に人それぞれだから、信乃ちゃんがオレの願いを振り切っていくなら、オレはそれを受け入れるしかない。

「……」

「……」

そうして、長い沈黙の末、信乃ちゃんはぽつりと、拗ねるように呟いた。

「分かったよ……」

そう言った信乃ちゃんの顔は真っ赤に染まっていた。オレを見て、今度は大きく叫ぶように言った。

「分かったよ！ 分かった分かった！！ 分かった分かった分かった分かった！！ 分かりましたー！！」

さらに「分かった」と連呼する信乃ちゃんの顔は本当に真っ赤つかだ。オレと目を合わせようとすらせず、首をぶんぶんと上向きで左右

に振っている。

凄いきり乱し様だが、ともかくオレはほつと息を吐く。

「ありがとう、信乃ちゃん」

安堵から零れた笑みがオレの顔に浮かぶ。

分かった連呼を中断した信乃ちゃんはちらりとオレを見て、かと思えばくしやりと表情を歪めた。

ぐい、と信乃ちゃんがさらに上を向く。首を痛めそうだ。

「信乃ちゃん……？」

上を向いたまま固まった信乃ちゃんのことを心配になったオレは、立ち上がってテーブルを回り傍に近寄った。

信乃ちゃんはオレに顔を見せようとせず、体ごと反対を向いてしまった。今度は顔を下にして。信乃ちゃんの顔を覗き込もうとする、さらにそっぽを向いてしまう。

信乃ちゃんの体が小刻みに揺れている。しゃっくりをしているようだ。

「信乃ちゃん……？　大丈夫？　もしかして、やっぱり何か体の調子が……？」

今になって記憶を消されたことへの後遺症か何かが生じて来たのだとすれば話が変わる。すぐにでも葵という女を探し出す必要があるだろう。そう思い、確認を取ろうと信乃ちゃんの手を掴むと、弾かれた。

「だ、だ、だいじょうぶだっていってんだろ！」

いや、言っていない。

そう思ったが、それよりも気になることがあった。叫んだ信乃ちゃんは鼻声だった。もしかして泣いている？

「やっぱり何か異常が出て来たんだね？　……分かった。信乃ちゃん、今日の先生との会食は一度延期しよう。ここで待ってて。オレがあの人を探してくる。大丈夫。必ず何とかするから。ベッドまで歩ける？　難しいならソファで横に……」

そこまで言って、オレは口を噤んだ。

胸に飛び込んできた重さにたたたらを踏みんだ。

信乃ちゃんが急に身を寄せてきたからだ。

「信乃ちゃん……っ？」

「うるせー！ だいじょうぶだって、いつてんだろー!!」

ヤケクソ気味に叫んだ信乃ちゃんに、オレはようやく状況を理解した。

多分、だが。これ、異常が出たんじゃなくて、また感極まって泣いてんな……。

忘れていたわけではないが、この子、人の優しさに飢えてたんだっ

た。  
有難いことに、オレの気持ちは信乃ちゃんにとって、本気で痛いほどに伝わっているらしい。伝わり過ぎていると言うべきか。

「うー!!」

オレの胸の中で唸り続けている信乃ちゃんのそれは、きつと照れ隠しから生まれたものなのだろう。

オレは一つ息を吐いて、信乃ちゃんの頭をゆっくりと優しく、何度も撫でおろした。

さて。

信乃ちゃんにした説明には、少し補足と訂正がある。

やられっぱなしでいろ、というのは違う。もちろん、無かったことにするつもりもない。

信乃ちゃんにはそうとも言えると答えたが、オレはそれで終わらせるつもりはなかった。

あのと看見た、葵と言う女が胸に付けていたブローチの、黄色い寶石。あの形は……茶々ちゃんが魔法少女に変身する時に持っていたステッキに備えられたものと酷似していた。そしてあの葵という女は恐らく……茶々ちゃんの家を見ていたと思われる。その理由は分からないが、彼女が茶々ちゃんの関係者である可能性は高い。さすがに茶々ちゃんのことを信乃ちゃんに伝えるのは憚られたため伏せたが、オレはオレなりに彼女のことを調べてみるつもりでいた。

血眼になって探し出すような行動を取るつもりはないが……。今

後、もしオレが葵さんを見掛けたなら、今度はさっきのような迂遠なものではなく、直球で事情を聴くつもりだ。可能なら信乃ちゃんへの謝罪とケアを強く要請する。

オレは思った。

——友人を傷つけられるのは、オレとしても非常に不愉快だ。



くう、と可愛らしい音がした。発生源はオレのすぐそば。オレの腹の近くだが、オレの腹からではない。信乃ちゃんだ。

信乃ちゃんは数歩下がり、小さく笑った。

「腹減った」

へへへと笑いながら、信乃ちゃんはあっけらかんと言った。特に恥ずかしそうにはしていない。生理現象への羞恥心は無いらしい。空腹で思考が切り替わったのか、先ほどまでの感傷的な様子も見られない。落ち着いたようだ。どうにもアンバランスな子である。もつとも、今日たびたび見せている泣き虫な信乃ちゃんの方がイレギュラーなのであつて、素はこつちだろうとは思ふ。東堂家に軽い気持ちで羽休めに来て、実際にリラックスできたことで情緒が爆発して涙腺が緩んでいるが、それも今だけだろうなと思う。慣れてくれば精神的に不安定になることなく受け入れられるようになるだろう。そう在って欲しい。

オレは普通のことしか言っていないし、信乃ちゃんくらいの年齢の子ならば、それは当たり前前に享受すべき大人からの気遣いだ。

信乃ちゃんは純粹と言うかなんというか……。世の中には下心を伴ってそう言うことができる人もいるし、本当に心配になる境遇である。

「御飯にしようか」

泣くにも体力を使う。信乃ちゃんは今日だけで何度も泣いているから、疲労も大きいだろう。一般的にはもう夕飯の時間でもあるし、オレだって空腹は感じている。

「……」

「……？」

台所に向かったオレの後ろを、信乃ちゃんはとことこと付いて来る。付かず離れずくらいの距離だ。

冷蔵庫の前で立ち止まったオレの傍で、信乃ちゃんは立ち止まりオレを見ている。じつと。

「どうしたの?」

「えっ? あー……」

オレの問いかけに信乃ちゃんは目を丸くした。オレの後ろを雛鳥みたいについてきたのは無意識でのことか?

「テレビでも見てていいよ? これから作るから時間かかるし。……ああ。今日はご馳走するよ」

「え、まじ!? ライルさんあざっす! やっぱすげえなあ! 飯も作れんだ!」

現金なもので、信乃ちゃんは夕飯をご馳走すると言えばわかりやすく喜んだ。さつき信乃ちゃんは保険証も持っていないと言っていたから、財布も持っていない可能性が高いからなあ。とりあえず今日は深く掘り下げずに世話をしようと思っている。長い付き合いになりそうだし、これは出世払いかな。

ふと思いつく。炊飯器を見た。電源は入っていない。そうだ。米が無い。あるにはあるが、炊いていなかった。今日は町内会の集まりだから御飯はご馳走に預かれると思って準備してなかったんだ。こうなっては仕方ない。

「ごめん、信乃ちゃん。お米炊いてなかったんだ。お弁当で良い? 買って来るよ」

「えっ……」

そんな見るからに落胆されるとこっちも気落ちするから止めてほしいと思う。

「お弁当はいやだったかな?」

「いやそんなことねーよ! 奢ってもらうのに文句言うつもりねーって! んな奴いんならあたしがぶっ飛ばしてやる!」

信乃ちゃんは握りこぶしを作って意気込んでいるが、さつきの落胆した表情をオレは見ている。

「残念そうだったけど……?」

「いやそりゃ、その……。ライルさんの手作り、食えると思って……」

「はは、なに言ってるの。上手だね」

弁当よりオレの手作りを所望しているらしい。だがオレの出来る

料理はチャーハンとカレーと麺類と焼肉と野菜炒めくらいだ。大した違いはないというか、弁当の方が絶対に良い。

しょんぼりとしてみせる信乃ちゃんに思わず突っ込んでしまったが、信乃ちゃんは慌てた様子で続けた。

「世辞じゃねーよ！ 弁当なんかよりライルさんの手作りの方が一億倍良いに決まってるんだろ！ ……まだ食った事ねーけど」

「そっか。ありがとう」

ママの御飯の方が良い！

なんて子供が言ってくれた親の心境はこんな感じなんだろうか。まだ一回もご馳走したことないけど、そう言って貰えるのは嬉しいものだ。

でも改めて考えるとオレも疲れているし、今から何か作るよりは弁当で済ませたい気持ちもある。機会はこれからもあるだろうし、今日は弁当にして、手料理は後日振舞うことにしよう。

「思えばこの後は弁護士先生との約束もあるし、弁当でさっさと済ませちゃおう。でも嬉しいよ信乃ちゃん。今度……明日にでも料理作ってあげるからね」

「明日……？」

信乃ちゃんが不思議そうにしている。

そういえば伝えてなかったな。

「家、帰れないんでしょう？ 今日までどう過ごして来たのか知らないけど、もしよければ今日は泊まっていきなよ。空き部屋があるから、そこで」

「まじ!?! いいの!?!」

すげー勢いで喰いついてきた信乃ちゃんに若干引きながら、頷いた。

「もちろん。嫌じゃなけー」

「嫌なわけぬえー！ マジ助かる!! マジ感謝だつて!!」

「そっか。じゃあ、すぐにお弁当を買って来るよ。ちよつと待ってて」

「あたしも行くよー！」

「いや、さつきは仕方なかったけど、信乃ちゃんはしばらく出歩かない

方が良いと思う。すぐ戻って来るから、ちよつと待って貰えないかな？」

「……えー」

まあた不満そうな顔をする。

とはいってもそれは可愛らしい不貞腐れ顔だ。駄々をこねる子供のそれで、本気のそれではない。要は甘えているということだろう。

「頼むよ。ね？ そうだ。好きなものはある？ 買ってくるよ」

「好きなもん……かあ……」

うーん、と唸りながら考え始めた信乃ちゃん。

「あのさ……」

「うん？」

「その、メシって言うか……アイスってダメか？ バニラの……」

「ああ、バニラアイス？ カップので良い？」

オレの返答を了承と受け取った信乃ちゃんの表情がぱあ、と明るくなる。

「あ、いや！ やっぱいい！ さすがに凶々しいわな！」

信乃ちゃんはすぐに哀しそうな表情を浮かべて断って来た。

未練たらたらな様子を見てしまうと、かえってご馳走したくなるのが人情と言うものだろう。それに、個人的にもその一言が言えるのは好感が持てる。

「大丈夫。今日は遠慮しなくて良いよ。冤罪を掛けてしまったこともそうだし、木刀の件もあるし。オレからのお詫びだと思って」

「でもさ……泊めて貰って飯まで貰ってそのうえデザートまでつてのは……前だつて助けてもらったし、このあとも……」

なるほど。信乃ちゃん的にはご飯をご馳走することの方が重いらしい。

ここでオレの方から引き下がってもいいんだけど、心の底から喜んでいたさっきのあの表情を見てしまっているから、今度はオレの方が心苦しくなりそうだ。サプライズで買って来ても良いけど、それはそれでまた同じ問答をすることになるだろう。それもまた面倒くさい。

だからオレはこう言った。

「信乃ちゃん、さつきバナラアイスってオレが言ったとき、凄く嬉しそうだったからさ。信乃ちゃんに喜んで貰えるとオレも嬉しい。オレ、信乃ちゃんがアイスを食べて喜んでくれるところを見たくなくなっちゃったや」

「う……」

信乃ちゃんが口元を窄めて固まった。

そして頬が赤く染まる。

信乃ちゃんは恨みがましそうにオレを見つめて、気恥ずかしそうに目を逸らした。

「ずりいよ、ライルさん。そんなん……」

ほそほそとか細かい声で呟いた信乃ちゃんの姿を見て、オレは勝利を確信した。別に勝ち負けの問題でも無いけど。

「じゃあ、買ってきたら受け取ってくれる？」

「たっ！ たくっ!! しゃあねえな！ そこまで言うなら!! ……いい、いただきます……」

「じゃ、決まりだね。ちよつと待ってて。すぐ行ってくるから」

オレは財布を持って玄関へと向かう。

信乃ちゃんは移動するオレの後ろをとことこと付いて来る。

靴を履いて玄関を開いたとき、信乃ちゃんに声を掛けられてオレは一度立ち止まった。

「あ、あのさー！」

「ん？ どうしたの？」

振り返ったオレが見たのは、何か思いつめたような様子の信乃ちゃんの姿だった。目線が上下左右に忙しく動いていて、口をもごもごと動かしている。

「その……あたしが言うのも変な話かもしれねーけどよ……」

「うん？ 大丈夫だよ。言ってみて？」

何を言いたいのか分からないが、言うほど変なことでも無いだろう。

オレは話の続きを促す。

「……その」

しかし信乃ちゃんは中々答えない。そんなに言い辛いことなのだろうか。

何やら物凄く悩んでいる様子なので急かすのも可哀そうだが、時間はそこまで無いので早めにして貰いたいところではある。

「あれだったら帰って来てから話を聞くけど……」

「……」

オレの提案に、信乃ちゃんはいやに傷ついたような表情を浮かべた。下唇を噛んでいる。

なんだ……？

帰ってからでは都合が悪いらしい。

「大丈夫。言ってみて」

仕方がないのでしつかり振り向いて信乃ちゃんに発言を促した。

信乃ちゃんは眉を強く寄せた。ぎゅ、と目を瞑っている。腹のあたりに持ち上げた両手の握り拳が震えている。

なんだ？

トイレなら別に使ってもいいけど……多分違うと思うんだよね……。

「その……いい……」

黙って続きを促すオレに、信乃ちゃんは絞り出すように弱弱しく言った。

「いってらっしゃい……」

そう言った瞬間、オレは思わず頬を緩め、信乃ちゃんの顔は今まで見たことが無いほどに真っ赤に染まった。

なるほど。言いたかったんだね。

久しぶりに聞く言葉だったから、オレとしても嬉しかったらしい。自然に生じるオレ自身の頬の緩みが愛おしかった。

「行ってきます」

小さく手を振って、オレは東堂家を出て行った。

少し、歩く。

心が温かい。子供に出世を見送られる親の心境とはこういうものなのか。

憧れ、みたいなものがあつたんだろうか。オレではなく、信乃ちゃんのことだ。

過酷な境遇で育った彼女は、ずっとそれを言いたかったのか。その言葉に言葉を返してくれる人を求めていたのか。これをオレから彼女に直接聞くことは決してないけど、きつとそうなんだろうなと思つた。

ただ、葵と言う女性への態度や、初対面の時のオレへの態度、今も節々に出ている強気な態度。それとは正反対の、素朴な愛、というか触れ合いを求める純粋な子供のような信乃ちゃん。どつちも信乃ちゃんだよということは都度伝えておいた方が良さだろうけど。なにしろ……あの子が根底で求めているのは多分他者との交流による精神的安寧なんだけど、それがぶつ飛んで一時は性的接触にまでド直球に飛躍したからなあ。

ペルソナと言う考え方があつた。

簡単に言えば人は相対する相手によって見せる側面を変えろと言ふものだ。大人にとつては当たり前になつてしまふことというか、老若男女共通して行われている普通のことだ。だけど年頃の子供にとつては凄く大きな悩みと混乱の基になるものでもある。本当の自分とつて一体、みたいなの。歳を取つて行けば自ずと受け入れられるものだろうけど、信乃ちゃんはそれらの乖離がちよつと大き過ぎるから、たぶん本人も戸惑つていふことだろう。泣きだしてしまふのは多分その戸惑いの振幅が彼女の中でキャパオーバーを起こすからだろうし。これまでは泣けもせず、必死に攻撃的な仮面で取り繕つて来たんだろうから、進歩であることは間違いない、と思ふけど。

それはそれとして、葵と言うあの女性は一体何者なんだろう。

家を出た時、茶都山家はまだ暗いままだつた。まだ誰も家に帰つていないようだ。それはそれで心配なことではある。茶々ちゃんと葵さんにどんな繋がりがあるのかなるべく早く聞いておきたいところだが、小学生の茶々ちゃんがまだ帰つていないというのは心配だ。今朝一緒にいた……瑠璃ちゃんだったか。あの子の家にいるとかならないんだけど。

しかし改めて思うけど、朝、たぶんオレ、あの子たちに記憶消されそうになつてたんじゃないか？

分らないけど、なんかそんな話が聞こえたようなそうでもないよな……。

しかも、だ。葵さんや茶々ちゃんたち、あの一瞬で人前から姿を消せるってことは記憶操作の他に、瞬間移動みたいな力も持っているってことじゃないか？

可能性でしかないけど、もしそうなら凄いやなあ。大学に通うのが凄く楽になる。車、要らないよね。

そういえば、信乃ちゃんはどうやって今まで生活して来たんだろう。実家を追われているにしては身綺麗だったし、この間の怪我也悪化している様子はなかった。血色も良くて、やつれている様子も見られない。お風呂とかには入れていそうだし、御飯にもそれほど困っている様子も無さそうだ。

ふう、と一つため息を吐いた。

雅さんのこともそうだし、世紀末大事故のこともある。本当に、考えることが多すぎて頭が痛い。明日の大学は休もう。単位はまだ大丈夫のはず。後で過去に欠席した講義をチェックして置こう。それと、田辺に欠席の連絡も……。

「……………」

コンビニに向かい、足元を見つつ、考えながら歩いていくとき、何か違和感を感じた。この違和感には覚えがある。

人の気配が無い。静かすぎた。車が走る音も、人の歩く音さえも、何もかもが消えていた。

いやな予感がする。あときは正直、茶々ちゃんとの出会いの数日後ということもあって期待半分、現実逃避半分と言った具合だったが、今はちよつと勘弁してほしい。本気で。もうオレの頭は限界なんだ。やることも考えることも多いんだ。頼む。

しかしオレの願いは届かなかった。

「お……………わ……………つと……………」

轟音。たたらを踏む。



少し先の道路が突如として爆発した。何かが飛来し、アスファルトに激突したのだ。砕けたアスファルトと共に土煙が舞い上がり、オレは目を閉じて両腕で顔を覆った。

なるほど……。どうやらこれまでオレを放置プレイし、自重によって心を蝕ませて来た運命という奴は、ここに来てアップを始めたらしい。畳み掛けて来るのをやめるつもりはないし、オレを逃がすつもりもない、と。

本当に、何が起きているのやら。だが有難いことに、今のオレは信乃ちゃんのおかげでグレードアップした後だ。

土煙が晴れていく。

オレは近づいた。

アスファルトが吹き飛んだ剥き出しの地面に、人影が倒れている。

女だった。前に会った、あの時の女だろうか？

あまり覚えてないけど、確か変な女と言う印象を持った記憶がある。多分そうだろうと思う。状況があまりに酷似しているし。分かりたくなかったけど、やっぱりあれは夢じゃなかったのかあ。

女は動かない。心配になって観察する。

黒く長い髪は土埃に塗れぼさぼさだ。着ている服には血が滲んでいるし、至る所ところが破れ、肌が見えている。タイツが破れ片足はむき出しで、スカートは破損し黒い下着が覗いている。片方の肩は完全に丸出しで、鎖骨や肩甲骨まで見えている。上の下着は……。真っ赤に染まっているけどサラシだな。妙な成長を感じる。以前と同じような状況だ。いや、片腕片足が惨いことになっている。この間よりも酷い惨状だ。

だが、大きく違うこともある。

女が纏っている服の残骸だ。以前は何色だったかは忘れたが、ワンピースのような衣服だったと思う。だが今、目の前にいる女は……。まさかのセーラー服。

「高校生……？」

この辺では見慣れないデザインだけど、アレは多分学生服だ。彼女はその容姿からすると中学生であるとは思えないので、高校生か。

いや、今はそんなことはどうでもいい。普通にヤバイ状況だし、心配だ。生きているんだろうか？

「君、大丈夫？」

反応が無い。

気絶しているのだろうか？

それとももう亡くなっているのだろうか？

「うっ……いったあ……」

かと思えば、女は小さな呻きを漏らしながらすぐに動き出した。なんとなく思い出して来た。あのときと同じように、やはり割と元氣そうな「いったあ……」である。折れ曲がり中身が見えていたはずの手足が、オレの目の前に瞬く間に修復されていく。無惨になっていた片腕に至っては、なんと繋がった。

女の子は傍に転がっていた刀の柄を握りしめ、一度うつ伏せになると、両肘を支えに体を持ち上げた。そして、土埃に塗れ乱れた黒く長い髪を垂らしながら、忌々し気にこちらを睨んでいる。

「ふう……ふう……。あなたねえ、そんなところで遊んでないで……」  
なんか聞いたようなセリフだな。

オレはそう思ったのだが、女はオレを見た途端、驚いたように目を丸くした。そして唇を戦慄かせながらこう言った。

「な、あ、あ、あ、あなた……っ！」

突如、轟音。

咄嗟に音の方を向いたオレが見たのは、遠く離れたビルが突如として爆発し、崩れ落ちる瞬間だった。

「ええ……？ テロ？」

以前と違い、周りには何もいない。確か前は馬鹿でかい西洋風の黒い竜がいて、暴れ回っていたはずだ。

「……っ！ 白夜……っ！」

女が言った。

女の方を見ると、女は倒壊したビルの方を見ている。

オレは女に近づくと傍にしゃがみ込む。

「大丈夫？」

「あなた……」

女が驚いたようにオレを見る。

女は困惑した様子でこう言った。

「なんでまたあなたがここに……。結界は……。いえ、今はそんなことより……」

女は少しふらついたと思えば、すぐにすんなりと立ち上がってしまった。

女に差し出した手が空を彷徨い、オレは静かに手を戻した。

「あなた、逃げなさい。ここはとても危険なの」

少し緊張した様子の女は倒壊したビルの方を見ながら静かに言った。かと思えば、女は弾かれたように上を見る。

オレも彼女に倣い視線を上に向けようとしたが、腹に受けた衝撃でオレの体はくの字に折れ曲がる。

「うおっ」

女にタツクルされた。前もこんな感じだった気がするが、オレはそのまま彼女の肩に担がれる形となる。オレは上半身を振らせて自分の肩越しに彼女の肩を見上げる姿勢となり、言った。

「いきなりなにを……」

「喋らないのー!」

浮遊感と、風を感じた。

オレの目の前にあった地面が遠くに離れていく。

女が地面を蹴り上げて跳躍したようだった。

そしてオレ達がさつきまでいた、アスファルトがめくれた地面に、何かが激突した。そしてすぐ、巻き上がった土煙の中から何かが飛び出してきた。

「ええ……?」

それを見て、オレは思った。

——馬やんけえ。

そのシルエットは紛れもなく馬だった。その硬い蹄で地面を抉り飛び上がった馬は、宙で蹄を鳴らし、自在に空を駆けている。

いや、馬か……?

確かに見た目は馬っぽいけど、良く視れば角があ

る。小さな蝙蝠のような羽がたてがみに沿って羽ばたいているし、何より禍々しい鱗に覆われていた。

ユニコーン？ ペガサス？ なんかカメラみたいだな……。

「前も言ったかもしれないけど、舌を噛みたくないならそのお口、閉じておいた方が良いわよ。それと、目も閉じてなさいな。あまり、アレを直視しない方がいいわよ」

以前も聞いたようなことを言った女だったが、その口調は早く、声にはあまり余裕が無い。少し焦っているように感じる。

小さく舌打ちが聞こえた。僅かな歯ぎしりのような音も。

女からだ。

夜空に光が走り、遅れて轟いた音があった。たまに聞く音。雷鳴だ。そんな悪い天気では無かったはずだが、突然に。

破裂音と共に、視界が一転する。空が急速に遠のいていく。かと思えば、再び地面が目の前に現れた。

女が空中で回転して宙を蹴りつけたのが、破裂音。空が急に遠のいたのは、オレを抱えた女が回転したことでオレの視線が空を向き、そのうえで女が急降下したから。そして最後に再び地面を見ることになったのは、地上目前で再び女が回転したからだ。

地面に降りた女はしゃがみ込む。地面とオレの顔がすれすれに近づく。

「急にごめんなさい。大丈夫だったかしら？ 舌は噛んでない？」

「やっぱり君、良い子だね」

「あなたねえ……っ！」

なんか大変そうな状況でオレを心配してくれた女もとい女の子に本心を伝えたオレだったが、彼女は怒った様子で言う。

だからオレはすぐにこう言った。

「オレはだいじょうぶ——ぶっ」

言い終わらぬうちに浮遊感がオレを襲う。

女の子が再び地面を蹴って路地へと駆けこんだからだ。

オレは今も地面を見ているが、上空で光が迸っていることが分かった。さらに少し首をもたげると、女の子が走って来た道をなぞる様

に、次々に雷鳴が地面を焼き焦がしているのが見えた。

……。

もしかしてこれ、攻撃されてる感じだったりするのかな？

雷を操る馬みたいなUMA。

え？

麒麟、つてこと？

なんかそんなようなことを昔どこかで知った気がする。

そんなことを考えていると、突然女の子が叫んだ。

「白夜！」

何かの名前だろうか。

女の子が叫んだ次の瞬間、人影が上空を通り過ぎる様子が地面越しに見えた。

ふわり、と浮遊感。

女の子が進行方向から真逆に反転し、オレを抱えている方とは逆の手を伸ばしたのが分かった。そして、何故かオレを抱えている女の子の体がぶるりと震えた。

だが、彼女の背中側に頭があるオレには何が起きているのかを見ることは出来ない。

オレは言った。

「たぶん、また助けてくれたんだよね？　ありがとう。もしよければ降ろして貰えないかな？」

「あなたねえ……。……。なんでそんなに呑気でいられるのか分からないけれど、こんな状況なのだし、もう少し緊張感を持った方が良いわよね？　肝が据わっていると言うよりも、愚かに見えてしまうもの」

女の子の息は少し荒い。

「そうかな……。ちよつと不愉快だけど。でも、言われてみればそうかもしれない……。」

「そうかもしれない、じゃないの。そうなのよ。あなたねえ、状況お分かりかしら？」

女の子の息は少し荒いが、口調は落ち着いたものに戻っている。少

し妖艶さを感じる、うろ覚えだが以前と同じような雰囲気だ。

オレは言った。

「分からないから聞かせて貰いたいんだ。となると、話をするのにこの格好はちよつと失礼だと思って」

「あのねえ……。やつぱりあなた変な人ねえ……。さすがにちよつと引いちゃうわあ……。？」

彼女は呆れた口ぶりで言いながらも、オレを降ろしてくれた。

オレよりも小柄で、破損した服を纏った血塗れの女の子を見る。痛々しいが、あんなに俊敏に動いていたところから、見た目ほどひどい状態ではないのかもしれない。あるいは、見た目ほどひどい状態だったのが、さつき見た様に瞬時に回復してしまったのか。一つ言えるのは、ただの女子高生ではないだろうということだけだ。

「ありがとうございます。オレは東堂雷留って言います。君の名前は？」

「あのねえ、そんなことはどうでもいいのよ！ いえ、どうでも良いわけではないけれど、優先順位は高くないの。黙ってて貰えるかしら」  
確かに一理ある。

ここでオレの意思を強行させるのは迷惑だろうし、さすがに違うだろう。オレは少しの哀しみを表情に滲ませながら頷いた。

「……。彩乃よ。実道地彩乃」

「ありがとうございます。それと、無理強いしたようで申し訳ないです」  
女の子改め彩乃さんは大きくため息を吐いたうえでだが、名前を覚えてくれた。改めて近くで見た彩乃さんは日本人離れたスタイルというのか、骨格が日本人ぽくない感じがするものの、名前はバリアリの日本人だった。

「良いわよ……。でもなんでこんな形で……。もつと別の……。いえ、良いわ。時間が無いから手短かに伝えるけれど、逃げて。遠くに。出来ればあなたが来た方向にずっと。あれは……」

彩乃さんは空を見上げた。

「ならってオレも空を見上げれば、遥か上空でさつきの馬のUMAの人影が戦っているようだ。遠めでよく分からないが、成人男性のようだ。」

「あの子と一緒に反対側に遠ざけるから、なるべくはやく。お願いね」  
以前のような全身で妖艶さを醸し出すような所作は無かったが、彩乃さんは小首を傾げ、上目遣いにオレを見つめた。しかし目に遊びが無い。細めた瞳は妖艶さを感じさせる流し目のようであり、その実、鋭い。有無を言わさないという凄みのようなものを感じる。

「君は……大丈夫なの？」

オレの問い返しに女は少し驚いたように目を丸くして、すぐに何故か嬉しそうに目を細めた。

「非力な男が余計なお世話。ほら、さっさと行きなさいな。……良い子だから」

小馬鹿にするような言葉だが、なんとなくオレはそこに温もりのような何かを感じた。年下の女の子が年上の男に向けるには少し不思議な、オレが信乃ちゃんに向けているものに似たような、慈しみにも似た温もりを伴うなにかを。

さて、どうするべきか。

彼女はもともと、あの馬のUMAと戦っていたようだった。オレは偶然紛れ込んだ一般人で、当然、あんな化け物と戦うような力はない。主人公のような力もないし、肉体的にも精神的にも、何か覚醒するような予兆もない。

非常に心苦しいが、彼女の言葉に従うことが最善だと思った。ここでごねるのはただのエゴだろう。それも、人に迷惑を掛けまくった上に被害を拡大させる最悪のタイプの。

オレはすぐに頷いて、彩乃さんへ言った。

「ありがとう。君もどうか無事で」

「……変な人ねえ」

そう告げて、オレは駆け出した。背中から彩乃さんの呆れたような、しかしどこか嬉し気な声が聞こえてきた。

走る。走る。だがそう距離を進まぬうちに、息が上がって来た。葵さんを見つけて走り出した信乃ちゃんのを追い掛けたときにも思い、でも直視しなかった現実がここで襲い掛かる。

すなわち、運動不足。

ペースが落ちるが、しかしちゃんと走る。

轟音が聞こえた。さつき、ビルが倒壊したときのような音。

思わず振り返る。倒壊するビルが見えた。遠くだ。それ自体に危険はない。

次の瞬間には、また新たな轟音が鳴り響く。

目の前の道路のアスファルトに彩乃さんが叩きつけられて、アスファルトがひび割れた。

「ぐ、が……っ！」

痛みに悶える彩乃さんの苦悶の声が痛ましい。

「げ、なぎ……!!」

足を止めていたオレに、絞り出すような声が届く。

ごぼり、と溺れるような音がした。彩乃さんの喉に血液が溢れているのだろうか。

「逃げなさい!! はやく!!」

しかし次に発された彩乃さんの言葉は、絹を裂くような悲痛な叫び声ではあるものの、しっかりと発音されていた。超再生能力、ということだろうか。アスファルトに叩きつけられて見るも無残な肉塊寸前だった彩乃さんの体はすでに元の姿を取り戻し始めている。

そんな彩乃さんの向こう側に、視えた。

UMAだ。上空から彩乃さん目掛けて駆け下りて来ている。その鋭い一角に雷を纏わせて。

思わず駆け出していた。咄嗟だった。言い訳はしない。本当に、考える前に体が動いてしまっていた。

オレはUMAよりも一瞬早く彩乃さんのもとに辿り着いた。

彩乃さんが驚いたように目を大きく開いたのが見える。

オレは彩乃さんの体を覆うように抱きしめ、胸の中に隠した。

「バ……ッ!!? 逃げなさい!!」

彩乃さんの体を内側に隠したまま、オレは馬のUMAに背を向けた。

咄嗟だった。何故そうしたのは分からない。ただ、思わず体が動いた。多分、彩乃さんを守りたかつたんだと思う。こんな状況でも他



者を思いやれるような、優しい人だから。これで嫌な奴なら放って逃げるところだが、オレの心が自分の命よりも目の前の優しい子を選んでしまったんだから仕方ない。

本当に、申し訳ないと思う。

信乃ちゃん。

帰ってこないオレを、信乃ちゃんは どう思うだろう。本当に申し訳ないと思う。

願わくば、約束の時間になっても現れず、連絡も寄越さないオレを案じた先生がオレの家を尋ね、オレの帰りを待っているだろう信乃ちゃんとの縁を結び、あの子を助け出してくれることを……祈る。

そして。

オレと彩乃さんの少し手前、まるで磁石で反発するように軌道を変えたUMAは単独で地面に激突した。

「……」

ぱらぱらと、舞い上がった土埃と小石が落ちる音がする。UMAは動かない。

彩乃さんは無言だった。状況を理解できていないようだ。硬直している。

オレも無言だった。だが、彩乃さんとは少し違う。

オレは昼に見たトラックやらのことを思い出していたからだ。

オレは思った。

——お前あれと同類かよ……。

自分でも短慮なことをしたと反省しつつ、そして命の危機に晒された割には思ったよりも落ち着いている自分自身にも驚きながら、ぴくりとも動かないUMAを見る。

死んだ?

いやあ、さすがにそれはちよつと都合が良すぎるか?

実際これどうなんだろう?

オレの『能力』、と言って良いのか微妙なところだけど、オレに何かあるのは多分そう。ただこれ、どうなんだ?

確実に言えるのは、オレは自分の意思では何もしていないということだけ。死に瀕してなにかがオレの中で起きた、なんて感覚も一切ない。さつきあつたのは死の受容と信乃ちゃんへの謝罪の気持ちだけだった。

いやあ、なんなんだろう。オレに何か守護霊的なのがいり……する?

だとすれば東堂家の人……なのかな?

でも、オレの記憶が本当に『真実』なのだとなれば、今のオレと元々の東堂雷留の中身は違うってことだから、東堂家の人がオレを守る理由はあんまりないというか……。むしろ今のオレが東堂家とのこの体に居座っていることに不快感を感じて呪ってきてもおかしくないとも思うし……。

ストレスで熱が出そうだ。

とりあえず、今は目の前のことに集中しよう。

とはいっても、オレは彩乃さんを庇った格好で背中越しにちらと見てただけだから、何が起きたのかを視覚的にも詳細に把握できているわけじゃない。

見ていた感じでは、UMAが勝手に転んだって感じだった。

アレ、普通に生きてそうなんだよねえ……。

うーん。

馬の転倒は命に関わるってことは聞いたことがあるし、人間だって

打ちどころが悪ければ転倒しただけで命を落とすことはある。だから無いとは言えないけど、でもそんな即死する？ しかもアレ明らかに化け物だしなあ。確かに自爆してもおかしくない速度と転び方だったけども。

分からない。

彩乃さんの方が詳しくそうだし、彼女の見解を聞きたいところだ。

そう思っつてオレの腕の中の彩乃さんを見つめる。

「……」

ぽかーんつて感じ。

半開きの口と真ん丸くした瞳はUMAを凝視していてまるで動かない。

「大丈夫？」

オレは彩乃さんから少し離れ、立ち上がった。あんまり触れているのも良くないだろうと思った。信乃ちゃんみたいに自分から来るならある程度は受け入れるけど、今回は違うし。

すると彩乃さんは離れたオレを、ぎこちない動きでゆっくりと見上げた。その際、汚れてはいるがそれでもなお黒く艶やかなストレートの長髪がさらりと肩から流れ落ちる。

垂れた長い前髪から覗く彩乃さんの表情は直前の危機を乗り越えたという安堵よりも、何が起きたか理解できないという困惑の色が強いように思う。彩乃さんはオレを、得体の知れないものを見るように見つめていた。

「立てそうかな？」

腰が抜けているかの様に動かない彩乃さんに手を差し伸べる。

彩乃さんはオレの顔と差し伸べた手を交互に見てから、おずおずとした様子でオレの手を掴んだ。小さな柔らかい手だった。剣ダコとかもないんだな、と内心で思った。

オレの手を掴んで立ち上がった彩乃さんは、特に痛がる様子は見せなかった。立ち上がり方もスムーズ。血塗れで服装もボロボロだが、肉体的な損壊はもう見られない。あまりまじまじ見るのも失礼なので一瞥で留めたが、大丈夫そうである。不思議なものだが一応、聞い

ておくことにする。

「怪我は大丈夫？」

「え、ええ……」

「そう？　なら良かった」

戸惑い気味の彩乃さんから視線を外し、オレはUMAの方を見て続ける。

「あれももう大丈夫そうだけど、君の見解を聞かせて貰えるかな？」

オレの言葉を聞いた彩乃さんは、何故かオレの方を信じられないものを見るような表情で見て来る。

「あなた……一体……」

そんな変なこと言った？

あーそう言えばさつき彩乃さん、なんか言ってたな。

あんまり見ない方が良いのかなんとか。

アレ……なんだっけ。そうだ、SAN値。なんかそういうのあるのかもしれない。

でもごめん。マジで分かんないの。何も感じないの。

オレを見る彩乃さんからは困惑と若干の……恐怖、かな……を感じてる。でも嫌悪はなく、どちらかというところと畏怖のような。

オレは今、彩乃さんからどういう風に見えているんだろう。

結界がどうのというのとは前も言っていた気がするけど……。結界と言えば現代ファンタジーとか、伝奇的なやつでは定番の概念だ。オレが前世……で良いよね。その前世で読んでいたネット小説でもよく採用されていた能力とか技とか設定とかか。一般人を遠ざけるとか、異空間を作り出して対象を隔離するとかそういうのだ。

彩乃さんの視点では、オレはそれをものともせずに見れた正体不明の年上男性。一回目は偶然で片付けられるけど、二回目は……はい。怪しいね。さすがに何か感じちゃうよね。それはそう。

ただ、オレは本当に何もわからない。彩乃さん側の事情も、オレ自身のことも。ほんとに分からない。だからオレとしても何をどう言えば良いのか、どう対応すれば良いのか凄く困っている。信乃ちゃん

とは別方向に凄く困るし話をするにも時間もかかりそう。ただオレはちよつと急ぎなので、なる早で帰りたいと言るのが本音ではある。「オレは……そうだね。通りすがりの大学生、なんだ。ただのね。ちなみに夕飯を買いに向かつてる最中なんだ。あとアイス」

「それを信じるだけでも？　あまり馬鹿にしないでほしいわねえ……」  
喋り方そのものは割と柔らかいんだけど、棘を感じる物言いだった。疑念、困惑、警戒心。彩乃さんの中では様々な感情が渦巻いていることだろう。

「信じて貰うしかない。ただ、オレもこの後用事があるから早めに……」

「……ねえ？」

彩乃さんの口調が変わる。媚びるような湿り気のある口調だ。その吐息に甘い色が乗る。しなを作り、長し目上目遣いにオレを見て、こう言った。

「教えて？　あなたのこと……」

彩乃さんがゆっくりとオレに手を伸ばした。オレの首に手を回し、オレを抱こうとしてくる。オレは数歩下がって避ける。

彩乃さんの瞳がすつと細まる。

「やっぱり、ね。以前もそう。私の妖力を跳ね除けておいてただの大學生だなんて……。ちよつと私のこと舐め過ぎじゃないかしら？」

「気に障ったのなら謝るよ。ごめんね。ただオレも一つ聞かせて貰いたいんだけど、どうしてそんなに苛ついてるのかな？」

オレの問いを聞いて今、彩乃さんの口がひくひくした。

オレが嘘を吐いている、と彩乃さんが思っていることは分かる。彩乃さんはオレが『何か隠し事をしている』と思っていて、その『オレの隠し事』の内容に、彩乃さんは心当たりがあるような感じもする。苛立つ理由としては充分かもしれない。

でもオレはそこに違和感がある。

彩乃さんってその程度で苛立つような人なのかな、と。会って二回目な上でちゃんと話せたわけでもない。本当に単なる第一印象しかないけど、彩乃さんには割と余裕がある女性と云うか、優雅な印象

を持つていた。実はハプニングに弱くて取り乱しているから、という可能性はある。だけど、この間も今もオレを担いで逃げ回ったり、オレを逃がそうとして色々アドバイスしてくれたりと、ハプニングにも冷静に対応している彩乃さんをオレは見ている。

オレの勝手な印象だけど、彩乃さんならまたすぐにオレに「逃げなさい」って促したり、有無を言わさずオレを担ぎ、彼女なりの安全圏に連れて行ってくれたりしそうだな、と。

だから彩乃さんが苛立っている理由が他に何か、ちゃんとしていそうな気がするんだけど、残念ながらそれが何かが分からない。

だからその理由、オレに対して彩乃さんが抱いているだろう蟠りを解消して、気持ちよく話が出来るようにしたかった。

だけど逆効果だったようで、彩乃さんはさらに苛立ってしまったのが今の結果だ。

彩乃さんは疲れた様に額を抑えた。さらにため息もつく。オレもそうしたいけど失礼かなと思っしてしなかった。されてもやり返すのはちよつとね。

「……」

彩乃さんは不機嫌そうに黙ってしまったている。

なんだろう。オレの何が彼女の癪に障るんだろう。

というか、妖力って何？

あー……。彼女はその妖力というのに絶対の自負があって、それが効かないオレが気に入らないとかか？

だとしたらもうどうしようもないよ……。オレだって訳が分からないんだから。許して欲しい。

何と言えば良いのか……。

長くなりそうだけど、だからこそ困る。信乃ちゃんを待たせてるわけだからね、オレは。

ただオレが思うのは、この件は信乃ちゃんるときとは違ってオレが能動的に関わる意味を感じないということ。彩乃さんの感じからするとひと段落したようだし、もともと彩乃さんはオレに逃げるように言ってくれていたわけだから、帰ってもいいだろう。どうしても言

うのなら連絡先を伝えて後日と言うことで了承して貰おう。

「悪いんだけど——」

オレが話し始めた瞬間、彩乃さんが弾かれたように視線を動かした。彩乃さんは空を見ている。

「これはまた……最高のシナリオねえ……？ うふふ……楽しくなつてきちゃった」

彩乃さんはそう言った。努めて楽しそうに言おうとしているのだろうが、声に抑揚は無い。絶望、諦念、疲労、そういうものが滲んでいた。無理に笑おうとしているのが分かる、歪な横顔だった。

倣ってオレも彩乃さんの視線を追った。空だ。

空が割れていた。雷雲のように渦巻く雲の海の中に横たわる裂け目は、まるで雪山に横たわるクレバスのようだった。その裂け目は徐々に広がっている。そしてその裂けめの向こう側には、夜の闇よりもなお深い深淵が覗いていた。

見た感じからそうなんだけど、彩乃さんの反応的にも、不吉の予兆であることは間違いなさそうだ。

隣にいる彩乃さんが手を動かした。彩乃さんは自分の下腹部に手を当てて目を閉じて、力ない溜息を一つ小さく吐いた。

さっきのオレのように腹が痛い？ というわけじゃないと思う。さすがに。

そして彩乃さんはこう言った。

「そう……。そういうこと……」

オレは思った。

——どゆこと？

彩乃さんの様子からするとなんか相当悪いことが起きているらしい。これはオレの予想でしかないけど、雰囲気的には異世界からラスボスが来ようとしているとか、封印されてた何かが解き放たれようとしているとか、その類だろう。そう考えるとヤバそうなんだけど、現実感が……無いと言うか、慌ててもどうしようもないと言うか。

「動じないのね……」

オレのことだろう。何か含みがあるような言い方だった。彩乃さ

んは一体オレに何を見ているのだろうか。オレをどういう存在だと思ってるんだろう。一般人だとは絶対思われていないんだろうな。て。凄く歯がゆい。

彩乃さんが静かに目を伏せた。その姿は弱弱しい。まるですべてを受け入れた……いや、諦めてしまったかのような、哀しみを宿した姿だった。妖艶さと言う生の力も、オレを気遣ってくれていた優しさもない。何もかも、魂さえもが抜け出てしまった抜け殻のような弱い姿だった。

例えるなら、長年連れ添った飼い猫が亡くなり、流す涙も枯れ果ててしまった人、みたいな……。そんな彩乃さんの姿がオレの胸を切なく締め付けた。

もうつらい。彩乃さんの雰囲気が見ててつらい。何が起きているのか、なにがあつたのか分からないけど、ただつらい。

「彩乃さん……？ 凄く辛そうだけど、大丈夫？ オレで良ければ話を聞くとよ」

「あなた……」

彩乃さんは目を丸くして、ゆっくりとオレの方を見た。そしてその表情が何とも言えないものに変わる。本当に得体の知れないものを見るような、そんな目をしていた。

「どういうこと……？ 『違う』とでも言うの……？」

いや、それはオレが知りたい。頼む。お願い。君の設定開示して。

「まさか、本当に偶然……？ それにしてはあまりにも……」

彩乃さんの言葉の節々に困惑と迷いが見て取れる。文脈的には、オレが敵か味方か測りかねているといった感じだ。どうやらオレの気遣いをちゃんと受け入れてくれていているらしい。それは嬉しかった。気持ちが伝わりと嬉しいものだ。

空の裂け目は徐々に広がっている。オレにはどうすることも出来ない。オレが出来るのは……。うん。しないよりはいいだろう。次の瞬間には何が起きるか分からないからこそ、自分の気持ちは伝えておきたい。悔いの無いように。



「彩乃さん、オレには何が起きているのか分からないけど……。もしかして君はこれまで凄く頑張つて来たんじゃないかな？」

「なにを……？」

「あの空の裂け目が何なのか、オレには分からない。彩乃さんがオレに何を見ているのかも分からない。ただ、あの裂け目が良くないもので、君がアレを見て何か……絶望を感じたつてことはなんとなく分かる」

「以前会った時もそうだし、今もそうだ。君は傷だらけになりながら、何か得体の知れないものと戦っていた。きつと以前のモノや今の馬みたいなUMAだけじゃないんじゃないかな？ 君は多分、ずっとああいうのと人知れず戦い続けてきた。……違う？」

「……そうね」

「違つたらごめんだけど、君はきつと何かを守るために戦つてる」

「……」

彩乃さんは少しの間を置いて、覇気のない声でこう言った。

「いいえ、そんな高尚な理由じゃないわ。……復讐。それだけよ……」

「そっか……」

……。

違つたらしい。含みのある言い方だったから、違わない可能性もあるけど、そこまでは分からないな。しかも別方向に重めの答えだった。だがオレはあまり間を置かず続けた。

「教えて欲しいんだけど、あのUMAや以前君が戦っていた黒い竜を放置していたらどうなっていたの？」

「というか、あのUMAホントに死んだの？」

「とは内心で終える。」

「放置なんて有り得ないわ。アレは私を狙っているのだもの。ただ……そうね。もしも私がアレらに殺されるようなことがあったなら、多くの人間が死んでいたでしょうね。無慈悲に、惨たらしく」

……。なるほど……。

「ということとは、君は自分の命を守るため、そして復讐のために得体の知れない怪物たちと戦っていた、つてこと？」

「……そういうことになるかしらね。それで……？ 得体の知れないあなたはいったい何者で、何が言いたいのかしら？」

そう言つて彩乃さんはオレの方を向いた。

最後の謎解き、みたいな雰囲気彩乃さんには申し訳ないんだけど、残念ながらなんとなくしか分わかつてない。

「彼らの仲間——」

「ありがとう」

「えっ」

「えっ」

やべえ。彩乃さんの言葉に被せる形になってしまった。だがとりあえずそのことは後でまた聞くとして、努めて穏やかに続けた。

「なんとなくだけでも分かったよ。君は……自分の命の危険に晒されているにも関わらず、何の関係もないオレを守ろうとしてくれた。やっぱり君は優しい人だ」

実際には分からないけど、オレはそう受け取った。

彼女はあの怪獣に命を狙われていながら、この間と今、彼女からすれば得体の知れない他人であるオレを守ろうとしてくれていたのだと。しかも結構細かい気遣いまでしてくれていたし。彼女にとってあの怪獣たちがどれくらい脅威なのかは分からないけど、例えばオレが熊とかライオンに襲われていたとして、果たして他者にそこまで気を配れるかどうかは分からない。出来る人もいれば出来ない人もいる。ただ出来ない人に優しさが無いとは言わないし言いたくもないけど、それが出来る人はきつと凄く優しい人なんだろうなと思つた。

そして、そんな優しさをオレにくれたことが有難く、嬉しく思う。他人からの優しさって当たり前前に貰えるものじゃないからねえ……。

だからオレはこう続けた。

「変な女だなんて言つて申し訳なかったです。案じてくれてありがとうございます。改めて凄く嬉しいと、そう思つてます。それを伝えたくつて」

彩乃さんはぽかんとオレを見ている。

が、次の瞬間。

「あはは」

彩乃さんは失笑した。すぐに口元を押さえてしまったが、目元は綻んでいる。一瞬見えた彩乃さんの笑みはとても美しいものだった。

彩乃さんの雰囲気に戻る。諦念に支配されたものではなく、さつきまでの艶やかな自信に満ちた魅力的なモノに。

「あなたはやっぱり変な人ねえ……」

彩乃さんは目を細めてオレを見る。

「これから何が起きるか分かっていてその余裕なのかしら？」

「いや、逆かも。なにが起るか分からないから、かな。これは経験談なんだけど、パニックになっても碌なことにはならない。あと、言いたいことはちゃんと書いておいた方が気持ちが良い。もちろんオレから言うだけじゃなくて、相手の考えていることも知りたい」

「ふふ。そうね。それが正解なのかも。言われてみれば私にもそういう経験はあったわ」

「話が早くて助かるよ」

「……。あなたみたいな男性もいるのね」

「そりゃあいっぱいいると思うけど………どういう意味なのかな？」

「ふふ。なんでもないの。そうね………私の方こそごめんなさい。どうやら私の勘違いだったみたいだから」

「それは……変な人っていうオレへの印象がっつことかな？」

オレの問いかけに彩乃さんは楽し気に目を細めて言った。

「いいえ。あなたはとっても変な人よ」

彩乃さんは楽し気に笑っている。

ただ一度、彩乃さんはUMAの死体を一瞥して

「アレのことは気になるけど……」

と呟いた。

だが彩乃さんは吹っ切れたような雰囲気ですら再び空を見上げた。

広がり続けている裂け目を、力強く見据えている。やはり先程空を見ていたときのような諦念はもう彩乃さんには見られなかった。精神的に持ち直してくれたようだけど、どうなんだろう。何が起きてるのかはやっぱりわからないけど、なんとかなるんだろうか？

「さあ、もうお行きなさいな。さつきと同じように、同じ方へ。今日のことは忘れて……日常に戻りなさい。さつき言っただものね。用事とやらもあるんでしようし……。あなたにも家族がいるでしょう？」

大丈夫。アレは……私がなんとかするから」

……用事はあるけど家族はいないんだよね。

しかし凄く含みのある言葉だ。今の彼女からはなにか悲壮とは違うかもしれないけど、覚悟のようなものを感じる。彼女の様子からすぐに思いついたのは「オレを置いて先に行け」に似た何かである。相打ち覚悟的な。

復讐とか言ってたし、彩乃さんの命を狙ってるのかも言ってたし。あの怪物に家族を殺されたとかそういうのかもかもしれない。

で、今、オレの言葉を聞いて彼女の中で何か変化が起きた。

そんな感じかなあ……。

「何か……オレに手伝えることはあるかな？ まだよくわかってないけど、大変なことが起きているってことは何となくわかるから」

「あら意外。それくらいはあなたにも分かるのね。鈍感そうなのに」  
「彩乃さん？ オレは真面目に聞いて」

オレの言葉は途切れた。

何故ならば、オレの唇を柔らかい何かが塞いだからだ。

オレの目の前には長いまつげが揺れていた。

「どうしたの急に」

「ふふ。やっぱり変わらないのね、あなたは」

数歩下がってオレから離れた彩乃さんは楽し気に微笑んでいた。まるで悪戯に成功した無邪気な子供のような笑み。それは初めて見る表情だった。大人びていた彩乃さんの、セーラー服に似合う年相応の笑みだ。血塗れで破れまくってるけど……。

思えば今日って休日だけ……。高校ってやってるのか？

部活とかならあるのかな。

なんか……。もしかして……。この子、平日から今までずっと……。

「ほら、あなたは生きなさい。用事、あるんでしよう？ 待たせちゃダ

メよ」

「……本当に大丈夫なんだね？」

どうすればいいだろう。いても何か出来るとは思えないけど、でもさっきのUMAの展開がもしオレ在りきのモノなら居た方がいいんじゃないかなあとも思う訳で。

「大丈夫よ。あなたにはきつと分らないでしょうけど、私今、とつても熱いの。今までもずっと熱かったけど……この熱はきつとこれまでとは少し違う……」

彼女は優しく微笑んだ。

覚悟ガンギマリな感じがする。一人で盛り上がっている、と言うと語弊があるけど、最終決戦のノリだよなこれ。こう言うと気まずいけど、今の彩乃さんはちよつと冷静じゃないと思う。取り乱しているわけではないけど、平常心を保っているわけでもない。酷い言い方になるけど、ちよつと自分に酔ってる感じするよね。

そんなことを考えているオレを他所に、彩乃さんはオレにも聞こえるか聞こえないかくらいの小さな声で続けた。

「長く戦つて来たけど……。人からお礼を言われるのって……こんな暖かいものなのね……」

彩乃さんの髪が風もないのに揺れる。そして、彩乃さんは力強く叫んだ。

「白夜!!」

遠くの倒壊したビルが間欠泉のようにはじけ飛び、中から何かが飛び出したのが見える。人影だ。さっきの成人男性だろうか？

オレはそのまま空を見上げた。

空の裂け目が縮んでいる。

あれ？ 縮んでいる……？

「……あ、あ……」

彩乃さんも気づいたらしい。

さっきまでの雰囲気霧散し、その空を見上げる背中に戸惑いが溢れだしているのが分かる。

——ああああああああああああああ。

やがてオレ達が見守る中、深淵が覗くクレバスは消滅し、ただの夜空がそこにあるだけとなった。

クレバスが閉じ切ろうとした瞬間、何か断末魔のような声を聞いた気がする。

「……」

「……」

気まずい沈黙を破り、オレは言った。

「大丈夫そう？」

「そ、そうね……。大丈夫そう……」

物音がした。

石の転がる様な音と、馬の嘶きのような泣き声。

音の方を見れば、UMAが立ち上がっている。脚を振り、首を振り、鼻息荒く蠶を揺らしている。

非常に元気そうだ。

「んー……？」

UMAはオレと彩乃さんの方に奇妙な動きで、まるで何かに引つ張られるように、オレ達の方を向いた状態で近づいてきた。彩乃さんは身構えるが、UMAはまた磁石で反発するように、やはりオレ達の方を向いたまま上空へと後退していく。まるで逆再生のような動きだった。

オレは思った。

——これなんか時間巻き戻ってね？

やがて上空で止まったUMAは助走をつけるように前足を振ると、大きな嘶きを上げて空を蹴りつけ、オレ達の方へと駆け出した。

困惑していた彩乃さんだったが、そこはなんというか歴戦の猛者みたいな様子で瞬時に切り替えたようで、構えを取った。その構えを取るまでの間に、ぱっと刀が彩乃さんの手の中に出現したのには驚いた。彩乃さんは力強く刀を握ると地面を蹴りつけて跳躍し、UMAと激突。その首を横一文字に薙ぎ払い、切り飛ばした。

「おー……」

オレは見事な腕前に感嘆した。

が、グロい。

彩乃さんがオレに背を向けたまま地面に降り立った。長い髪を振り乱すその後ろ姿は美しかった。彩乃さんはオレに背を向けたまま残心し、そして刀を大きく振るい、その刀身に着いた血を飛ばす。そしてゆつくりとオレの方を振り返ってる最中に消えた。

「ええ……っ？」

喧騒が戻って来る。車の音もそうだ。

これは夢か……？

そんなわけない。

だけどとりあえず、今は現実逃避をして考えるのをやめよう。

「信乃ちゃんの弁当買わなきゃ。アイスも……」

少し歩き、オレは最寄りのコンビニに足早に駆けこんだ。

——からんからん。からん。

どこかにいる誰かの手が力なく垂れさがり、刀が地面に転がった。誰かは膝から崩れ落ち、ぽろぽろと泣いた。

## 漢（オトコ）

コンビニで二人分の弁当とアイスを買って帰路に就く途中、オレは気が気では無かった。不審者扱いされそうなので露骨に挙動不審な態度は見せず普通にしていたが、内心ではどきどきで歩いていた。また何か起きるのではないかと。

歩きながら考える。

一体、さっきのは何だったんだろう。

彩乃さんはUMA相手に苦戦していたと思っただけど、最後には一刀両断で格好よく勝利していた。直後に消えてしまったので確信は無いんだけど、それに違和感を感じている様子は無かったように思う。あの空の割れ目も思わせぶりに現れたと思っただけ勝手に消えたとし、意味が分からない。

オレに何かあるとして、なんだろう。

ぱっと思いつくもので可能性が高そうなのは、やはり『異能の無効』だろう。

葵さんや恐らくは明日香さん達が使っていたと思われる『記憶操作』の無効、信乃ちゃんや未来予知からの欠落、彩乃さんの言う境界のすり抜け。彩乃さんに関しては、多分あの言動からすると『魅了』もオレは弾いていたっぽい。もしかしてたけど雅さんの最初の言葉からして、あの人やあの場所にも結界的な何かがあったのかもしれない。そういうのを全部弾いたり無効化するような力が、オレが持っている力の正体か？

でも、世紀末大事故のような明らかな物理現象も無害で終わってるんだよね。正直、龍だの超人だのよりもアレの方がよっぽど分かりづらい。たださっきのUMAの挙動からして、トラックとか飛行機とかがあのUMAと似た何かなんだろうということとは想像がつく。アレも偶然じゃなくて、何か超常的なモノが意図的に起こしたことだったとか？

今にして思えば、最後の方は結構露骨だったし、在り得る。

まあでも、いかにせんちよつと多すぎるんだよ……。ジャンルが力



オス過ぎる。確かに世の中色々なことがあって、例えば日本では当たり前のことだったり有り得ないことが、外国ではその逆つてこともあるだろう。海外旅行どころか国内旅行すら満足にしたことのないオレの世界は、きつとオレが思う以上に狭いものなんだろうとは漠然とだけと思う。

例えば戦争なんかはオレにとっては歴史の話だけど、実際最中にある国だってある。その辺の自動販売機の下に転がっているような、どこかの誰かが「まあいいか」と捨て置いたような額の金銭を巡って殺人が起こる地域だって世界のどこかにはあるだろう。

異能に限った話でもなく、世の中にはオレの知らないことはたくさんある。今回目の当たりにしまくっている非常識も、実は今までオレが知らなかったり視えていなかったというだけで、実は知る人ぞ知る真実だったということなんだろう。それを言えば、前世の記憶を持っているオレの存在だって、そうじゃない人からすれば十分に非常識な存在だろうし。

そう考えると、ちよつと気持ちが悪くなる。やっぱり世の中にはオレの知らないことがたくさんあるんだなあ、あまり深く考えず、そのまま受け入れるのが精神的にも良さそう。適応して来たというか慣れてきたというか、感覚が麻痺して来たというか……。

変化していく自分に苦笑してしまうけど、悪い気もしない。やはり信乃ちゃんには感謝しなければ。

歩く途中、オレは一人細かく首肯を繰り返す。

オレは一連の件を『交通事故や強盗に襲われるといったような、低確率だけど在りえなくはない潜在的な脅威』が増えたという認識で落ち着けた。警戒するに越したことは無いが、しすぎても生活に支障が出る。普通に生活していく分には問題ないと考えよう。

ただ気になるのは、『秘密組織』のようなものが存在しているのかわらないのかだ。

創作ではよくある話だ。政府公認だったり、政府は非公認だけど存在は認知している裏の治安維持機関とか。逆に政府に勘付かれないように、異能を使って不正に利益を享受している犯罪組織とか。その

辺はどうなんだろう。

信乃ちゃんは何にそういう異能を持っている人と会ったことが無いようなことを言っていた。あんな大規模な戦いをしていた彩乃さんなら詳しくそうな感じはするけど、離れちゃったからなあ。また会えると良いけど、どうかな。

そうだ。葵さん。彼女、それっぽい感じ。するよね。

今度茶々ちゃんに会えたらその辺も聞いてみようか。

あの子、体全体で秘密を知られたくないアピールしてたから心苦しいけど、この件に関してはオレだけの問題じゃないし。

「いやあでも今日一日で凄い経験しちゃったよなあ……」

夜空を見上げて呟いた。

良いか悪いかは別にしても、得難い体験だったことは間違いない。

「ただ、ほんとに……。もうちよつと早く来てくれてばなあ」

オレはもう成人した。

まだ大学生の身で社会人になったわけではないけど、もう子供でもない。

少年漫画の主人公のような未知を夢中で追いかけるような若く輝かしい熱は冷め、ようやく身についてきた一般的な社会常識から自らはみ出すような無鉄砲さも無い。別に代わり映えの無い日々を嘆いているわけでもない、あまり劇的な変化を好まず、普通で素朴な生活を送ることを幸福とする、普通の大学生なのだ。……少なくとも感性は。

……。しかしうるさいな。

というのも、また大通りをバイクの集団が騒音を立てて走っているからだ。

最近はずかだったけど、また懲りもせず暴走ならぬ珍走を始めたらしい。迷惑な話である。

さて、家に着いた。

茶都山家は未だ暗く、誰も帰って来ていないようだ。

玄関を開け、家に入る。

「ただいま」

自然とそう口にしていた。行きに信乃ちゃんに言われた言葉は、オレが思う以上にオレにとって大きかったようだ。

無意識にオレは返事を期待していた。

だが、返事はない。

がさがさとナイロンの音を鳴らしながら廊下を歩く。

トイレか？ いや、トイレの電気は点いていない。

眠ってしまったのだろうか。

テレビの音が聞こえる。

リビングに入ると、電源が入ったテレビはそのままに、人の姿は無かった。

……。

いやな予感がするねえ……。

「信乃ちゃん……？」

返事はない。

弁当の入った袋を台所の上に置いて、ソファへと向かう。

テーブルの上に紙が一枚置かれていた。こう言っては何だが、あまり綺麗とは言い難い字だった。

手紙を手に取り、文字をなぞる。

——ごめん。

「信乃ちゃん……」

書かれていたのはそれだけだった。

困り果てたオレは、自分の額をわし掴むようにして擦る。

目を細めて考える。

あの子は泊まることに乗り気だったし、この後の約束に期待もしていた。それがこんな置手紙を残して姿を消すなんて、明らかになにかトラブルだ。

家が荒らされた様子はない。何者かが押し入って来て攫われたとか、そういうことではないだろう。

「なんだ？ 何が起きたんだ……？」

考える。

信乃ちゃんはオレに好意を持ってくれていたし、オレだって信乃ちゃんには好感を持っていた。短い関わりだが関係は良好で、お互いにとってそれなりに心地良いものだったはずだ。嫌になっ出て行つたとは考えにくい。オレが家を出た後で、オレと信乃ちゃんの関係性以外の理由で、すぐにこの家を出なければならぬような理由が信乃ちゃんに出来たと考えるのが自然か。

そしてオレの帰りを待てないほどの急ぎの用事。だけど置手紙を残せるくらいの猶予はある。そしてその手紙には信乃ちゃんがこの家を出ていく理由は書いていない。書かなかった……。それとも書けなかったか……。

未来予知が関係しているかもしれない。何かオレに不利益が生じるような未来が視えたとか。いや、信乃ちゃんは自身の未来予知では何故かオレを認識できない、というようなことを言っていた。だとすれば、もつと物理的な理由。

……なんか推理サスペンスみたいになつてきたな。

なんて考えている場合じゃない。

とても心配だ。

あの子は取り巻いている事情が事情だから、楽観視はするべきではない。というか、オレはもうオレの周りで起きる事象に対して大丈夫だろうという自信が無い。多分、なんかある。

いつそ警察に連絡するか？

だけどどう説明すればいい？

会つたばかりの女の子が手紙だけ置いて家から消えました、なんて警察は取り合ってくれないだろう。

穴が空くほど手紙を見ても新しい情報は出てこない。

この家に誰かが来たわけではなく、自主的に信乃ちゃんが出て行つたと考えれば……。

呼び出されたと考えるのが自然だろう。

固定電話を見る。履歴には何も無い。集会に顔を出したせいで信乃ちゃんの情報が洩れ、この家に攫いに来たとか、コンタクトを取つ

て来たとかいうわけではない……か……。可能性は消しきれないけど。

信乃ちゃんの手帳に直接連絡が来たとか。誰が？　そもそもそんな簡単に、のこのこと呼び出されるものなのか？

でもなあ、あの子の場合、めっちゃくちや煽られたら行きそうな感じはする、確かに。うーん……。

いやこの際もうどうやってとか、誰がとかはいい。5 W 1 Hのアレだ。アレ。そう。ホワイダニツト。

なんで家を出て行ったのか。逆に、なんで出て行かないけなかったのか。

あの子が行かざるを得ないような状況ってなんだろう。

スケバン風の子。葵さんへの態度からして、割と正義感が強い。最初にオレが抱いた、昭和のヤンキー物っていう印象……。

そういうのでよくある様な展開……。一人でどこかに行く、呼び出される……。

そこでオレは閃いた。

友達が攫われたとかか？

うわ。在り得そう。

信乃ちゃんが今までどうやって生活していたのか。

相棒の家に居候してたとか、友達の家を渡り歩いてたとか。そして、その人が人質に取られてしまった。それか、ぼこぼこにされたとか。

そして信乃ちゃんはそのことを何らかの手段で知り、オレ宛てに簡単な手紙だけ置いて出て行った。理由を書かなかったのはオレを巻き込まないため、とか。

そう仮定して、どこに行った？

どこに呼び出された？

定番は港、工場跡。他に何かがある？　廃ビルとかの廃墟。人気の無

い大きめの公園。でも彼女の場合、敵対者に半グレだけじゃなくてヤクザ崩れも混ざってる。どこかの組事務所とかの可能性もある。

いや……。待てよ。

アレか。さつき、久しぶりに暴走族が走ってた。きつと無関係じゃない。

確かあっちの方には廃棄された工場があったな。

そして、オレは思った。

——よし。警察呼ぼう。

もし信乃ちゃんがいなくなった理由が全然違うものだったら誠心誠意謝ろう。ゴミ拾いとかの警察署関係のボランティアをして償おう。

オレは家を飛び出した。

通りに出てタクシーを拾い、廃工場の方へと向かって貰う。その途中に携帯で110番し、状況を説明。救援をお願いする。

廃工場へ向かう裏道に入る門に差し掛かった時、タクシーが止まった。見るからに暴走族といった見た目の男二人が道の真ん中にバイクを止め、道を封鎖していた。

困ったタクシー運転手が「どうします？」と聞いてきた。

オレは言いたかった。

——関係ない。行け。

いや、さすがに言えない。一度退き返して貰い、離れた場所で降りる。

さてどうするか。

「ねえ、さつき金髪の女の子、あっち行ってたよね？」

「ああ……。なんか暴走族が集まってみたいだし、大丈夫かな？」

嘘でしょ。

オレのすぐそばを、廃工場がある方向を見ながらカップルが通り過ぎて行った。

オレは思わず呆れが混ざった笑いを零してしまった。

「間違いないみたいだな……」

警察を待つのが無難だろうけど、ちゃんと来てくれるかな？

なんか色々あって遅れたりしないかな？

そもそも今どういう状況なんだろう。

信乃ちゃんが家から出て行ったのはオレが帰って来るまでの間だ

から、信乃ちゃんがここに来ただろう時間と今にそこまでズレは無いと思うけど……。

どうする……？

正面突破は無理だろう。本当にあるかどうかとも分からなければ、仮にあつてもどういうものなのかすらも分からないオレの何かに頼るのは不安が過ぎる。勇んで行ってボコボコに殴られて信乃ちゃんに対する人質にされるのはマズい。

忍び込むかあ……。

この辺の地理は知っている。暴走族が封鎖していた道を通らず工場敷地内に入るには、いくつかの家を経由すれば行ける。この辺は一軒家が多く、廃工場と隣り合う一軒家があった。

オレは近場の家のチャイムを鳴らした。少して家主が出て来る。今日の集会にはいなかったが、先日のパトロールには参加していた人だった。

「おや、雷留君じゃないか。どうしたんだい？ よく私の家を知ってたねえ」

「こんばんは。食事どきに申し訳ありません。この度は個人的に訪ねたわけではないんですけども……実はちよつと込み入った事情がありました。お宅のお庭を通らせて貰いたいです」

「え、庭を？ まあ、別に良いけど……」

良いのか……。

「それと図々しいのですが、お隣さん家の電話番号を教えてくださいたいんです」

「隣の？ どうして？」

「お庭を通らせていただきたくて」

「……ええ？ お隣の庭も!? どうしたの？」

「実は廃工場に入りたいんですけど、チンピラが道を塞いでまして」

「ああ……。確かになんか集まってるねえ。うるさくてかなわんよ……。だが何故そんなところに？」

「実は知人が廃工場にいるようなんですが、どうやらチンピラと揉めているようで」

「ほう……。それは……。警察には？」

「もう通報しています。ただ、来るまでの間に何かがあるか分かりません。傍にいてあげたいんです」

「……もしかして女の子かい？」

「そうです」

「……なるほど。なるほど。分かった。良いよ。お隣さんには私から連絡しておこう」

「ありがとうございます。本当に助かります」

家主に深々と頭を下げて感謝を伝えたあと庭を進む。昇るのに苦戦していると家主が脚立を用意してくれたので有難く使わせて貰い、お隣の庭に降り立った。するとお隣さんが脚立を持って庭に出て来てくれた。どうやら最初の家の家主が廃工場に続く家々に電話を掛けてくれているらしく、「事情は聴いた」と協力してくれた。

そうやってオレはスムーズに道路を使わない道なき道を進み、廃工場の裏手へと辿り着く。金網で区切られた先に入りたいが……。

暗闇に目を凝らす。実は先ほどここに来るまでの間に、この辺の金網が破損しており、子供が通れるくらいの穴が空いていることを聞いていた。近所の小僧たちがそこから入り込んで探検をしているらしく、近いうちに塞ぐ予定だったそうだ。

あつた。オレは這いつくばり、匍匐前進でその穴から敷地内へと入り込んだ。

遠くに明かりが見える。倉庫のような場所に人影が集まっているようだ。

物陰に隠れながら進む。

「なんだ……う？」

オレの気配に気づいたのか、男の声が聞こえた。

オレは物陰に隠れたが、足音が近づいて来る。どうする？

周囲を見渡す。近くに転がっている段ボールに気づいたオレはそれを被り、身を潜めた。

「……気のせいか」



男の足音が遠ざかっていく。オレは思った。

——ステルスアクションかな？

信乃ちゃん、君はちよつとジャンル属性盛り過ぎ。

「……無事で居てね」

オレは段ボールから出て、再び倉庫へと近づいて行く。

ゆつくりとだったが、かなり近づくことが出来た。

オレは倉庫から少し離れた場所に止められた高そうな車の陰に身を潜め、倉庫の方を覗き見た。

いた。

信乃ちゃんだ。

大勢の男に囲まれている。

タンクトップに、ダメージジーンズ。今日の昼過ぎに会った時の姿だ。パーカーは見なかったが、置いてきたんだろうか。

信乃ちゃんは肩で息をしている。立っているのが辛いのか項垂れ気味だ。しかし鋭い視線で周りの男達を睨みつけている。

遠目で分かりづらいが、信乃ちゃんの目の周りは赤く腫れ、鼻血も流しているようだ。頬も腫れあがっている。信乃ちゃんが鉄パイプのようなものを握った片腕を持ち上げ、その手の甲で口元を拭った。口も切れているのだろう。多分、拭いたのは口から垂れて来た血だ。そして口元を拭った方とは反対側の信乃ちゃんの腕。赤黒く腫れている。だらんとぶら下がっているのは折れているからだだろうか。酷い。

信乃ちゃんの周りを見る。特攻服を着た男達が何人も転がっていた。鉄パイプや木刀も転がっている。信乃ちゃんが倒したのだろうか。凄い。

信乃ちゃんがよろめいた。そんな信乃ちゃんを支えたのは、信乃ちゃんの後ろにいた見知らぬ女の子だった。長い前髪で顔は見えない。地味目な子だ。

信乃ちゃんは後ろの女の子に支えられながら、たたらを踏んで持ちこたえた。そして女の子を庇うようにその子の前に移動する。

そして信乃ちゃんと言った。

「こいつぁ関係ねーだろオが!! ど汚ねえ真似しやがってクソが! それでも金玉ついてんのかてめーら!? おら、てめーだよ! そのクソチビ! あたしより背低い短小が光モンちらつかせていきってんじゃねーぞ恥さらしが!!」

「んだアツ!? てめえっ!!」

暴走族らしい背の低い男が一人反応し、持っていたナイフを振りかぶって信乃ちゃんに襲い掛かった。

信乃ちゃんは男が振るったナイフを片腕で持った自身の鉄パイプで弾き、その腹に横なぎに一発叩き込み、呻きながら腹を抑えて前のめりになった男の頭に鉄パイプを振り下ろした。

!?!?

鈍い音を立てて、男はその場に崩れ落ちる。

死んだ……?

それは別に良いけど、信乃ちゃんが殺人犯に……。いや、これは明らかに正当防衛か……。

というかすげえな信乃ちゃん……。

さらに今の男に続いて襲い掛かって来た男たちを片手の鉄パイプだけで信乃ちゃんが捌き切った時、小さく火薬音が響いた。

まだやられていない信乃ちゃんを囲む男数人と、信乃ちゃんの動きが止まる。

緊張が場を支配し、一瞬無音になった。

そんな中、スーツを着た男が一人前に出た。何かを持ったまま器用に拍手をしている。

「素晴らしいねえ。君のような女の子が居るとは」

「……」

信乃ちゃんは荒い息のまま、男を睨みつけている。

「君が玉を潰した男は一応、うちの盃を受けていてね」

「それでその返しが、コレか? ちったア情けねーとか思わねえのかよ?! ああ!? 関係ねえこいつまで巻き込みやがってよオ……ッ!!

拳句の果てにやア、ガキ一人にチャカまで持ち出しやがって……ッ  
!」

さっきの小さな破裂音。それはサイレンサーの付けられた拳銃から発せられたものだった。

信乃ちゃんの足元には小さな穴が空いている。銃痕だ。やばいってこれ。むちやくちやじゃねーか。

「俺としても気は乗らないが……俺達にもメンツつてのがあつてね」「はっ！ メンツだア!? あたしのしよんべんでも引っかけてやるよ!? 数で囲むしか能のねえチンピラ!! チャカ持ち出すカス!! てめえらみてえのがメンツなんざ語ってんじやねえよ!! 女一人にやられるような玉無しに代紋くれてやるなんざてめえも大したことねえんだろうな!!」

「威勢がいいねえ……。ま、その通りだよ。金払いが良かったとは言え、アレに盃を分けたのは確かに失敗だった。汚点だよ。ま、綺麗にしたけどね」

信乃ちゃんの表情が険しいものに変わった。

「殺したってことかよ?」

「とんでもない」

男は笑った。

「アレは海水浴を楽しんでいるよ」

「クズが」

信乃ちゃんの罵りを無視し、男が続けた。

「君も不運なことだ。憐れなものだよ。少し調べさせてもらった。愚かな女を母に持つ可哀そうな女の子だ。見目は良いし、なんならうちで使つてやつても良かった。きつと良い値で売れたらうに、今じや見る影もない。そして、もう二度と元に戻ることも無い。これからそうなる。残念だよ」

男は半笑いで残念そうに首を振った。

「やつてみるや。そのまえにてめえの金玉潰してやる」

「おお……いいねえ……!」

男はぶるりと身震いして、楽しそうに笑う。

「その威勢、震えるねえ……。どうだ? 俺が飼つてやつてもいい。全裸になつてそこに這いつくばれよ? 赦しを請え。なア?」

「はっ、んなもん、死んだほうがまだ」

「俄然、君をモノにしたくなってきた。迷うなあ」

「ぺっ、と血の混じった唾を吐き捨てた信乃ちゃんに、男は再び身震いをした。

きもいって……。

状況は分かったけど、警察はまだ来ない。どうすべきか……。

考えていると、信乃ちゃんの後ろにいた女の子が震えながら信乃ちゃんのタンクトップの裾を握った。

「桃香……ごめんな。巻き込みまっつて。こんなつもりじゃなかった」

「……」

桃香と呼ばれた女の子は声も出せないほどの恐怖に震え続けている。

「おい、てめえら。こいつは……関係ねえ」

「それで？」

男が言った。

「解放しろ」

「してください、だろお？」

「……っ！ てめえらの狙いはあたしだろおが!! もうこいつはいいじゃねえか! ああ!」

「健気と言うか……分かってないねえ。信乃ちゃん? 怖い顔して怒鳴って無駄無駄。君がそういうことを言うほど、その子は関係ある、つてことになるんだよね」

信乃ちゃんは苦々し気な表情で言った。多分、意味がないことはもう分っているだろう。でも言わずには居られなかったんだと思う。

「こんなオンナは知ら——」

「だめえ……!」

信乃ちゃんの声を遮ったのは、桃香という女の子だった。

信乃ちゃんは?!と驚いたように振り返り、言った。

「お前、声……!?!」

信乃ちゃんの反応的に、もしかして桃香ちゃんは、何らかの理由で

喋ることが出来ない子だったのか。

桃香ちゃんは信乃ちゃんの背にそつと震える体を寄せると、信乃ちゃんに何かを囁いたようだった。

信乃ちゃんは悲痛に表情を歪ませた。

何を言われたんだろう。

「信乃ちゃんさア。その子助けたいんだよねえ？ だったら、分かるよね？ どうすればいいか、さ？」

したり顔で言った男を、信乃ちゃんは凄まじい表情で睨みつける。睨みで殺せそうな表情だ。

信乃ちゃんは鉄パイプを放ると片手で自分のタンクトップに手を掛ける。

まだ警察は来ないのか。

仕方ない。なるようになる。飛び出そうとしたオレの目に飛び込んできたのは、さつき信乃ちゃんが鉄パイプで弾き飛ばしたナイフを拾い、男の方に走り出した桃香ちゃんの姿だった。

「ば、なにやってんだ桃香ア!!」

桃香ちゃんの足は遅い。

男は手に持っている拳銃を桃香ちゃんに向けた。その銃口は斜め下を向いている。脚を狙ってるんだろう。

「分かんないかなア？ 遊びじゃあないんだよねえ、これ」

男が引き金にかけた指を動かそうとしたとき、一気に場がざわついた。

信乃ちゃんは落とした鉄パイプを拾い、桃香ちゃんの後を追いかける。

信乃ちゃんの周りを囲んでいた男たちは別の方を見た。

エンジン音。闇を照らすライト。劈くクラクション。

そう。男たちが慌てた様子で見ているのは勝手に拝借した高そうな車を爆速で走らせているオレだった。

「な、なんだあ!？」

男が銃口を車の運転席にいるオレに向ける。

桃香ちゃんはオレの登場に驚いて足を止めており、すぐに追いつい

た信乃ちゃんに後ろからお腹に手を回される形で抱き寄せられ、引き戻された。

そして男がオレに向け引き金を引いた。

火薬の弾ける音がする。

戸惑い無さすぎい!!

「ぐああああああああああああああ!!」

叫び声が響いた。

だけど、それは身を屈めているオレのじゃない。スーツの男から発せられたものだ。

拳銃の引き金は引かれ、そして暴発した。男の手がはじけ飛び、血しぶきが舞った。

手を押さえて蹲った男の前でオレは車を急カーブさせ急停止、運転席の窓を開けて叫んだ。

「乗って!!」

オレの声を聞き、そしてオレの顔を見て、信乃ちゃんは目を丸くした。

「な、なんで……っ」

「はやく!! 助けに来た!!」

オレがそう言った次の瞬間、信乃ちゃんのはは泣きそうに表情を歪め、そして堪えるように下唇を噛む。

「桃香乗れ! 味方だ!!」

信乃ちゃんは叫びながら桃香ちゃんを車の後部座席に押し込み、自身もまた飛び乗って来る。

オレはアクセルを吹かし、爆速でその場から走り出す。金網を突き破り工場の外に出たとき、パトカーのサイレンの音が聞こえてきたのが分かった。おせーよばかがよ。来てくれてありがとう。

「大変だったね、本当に。とりあえず、もう大丈夫」

バックミラー越しに後部座席の二人に笑い掛けるが、信乃ちゃんはまだ状況を呑み込めていないようで張り詰めた表情をしているし、桃香ちゃんは怯えた様子で信乃ちゃんに引っ付いている。

だからオレはこう言った。

「いや……。大丈夫じゃないかも」

二人に緊張が走る。

オレは少しおどけたように続けた。

「オレ、ペーパードライバーなんだ。教習所ぶりなんだよね、運転」  
泣きそうな笑みを浮かべた信乃ちゃんは言った。

「ライルさんってやつはKYだよ……」

はあ……。と信乃ちゃんはため息を吐くと、車の背もたれに力なくもたれかかった。

信乃ちゃんの雰囲気や和らいだことで危機を脱した実感が湧いたのだろう。桃香ちゃんが嗚咽を漏らし始め、そんな桃香ちゃんを信乃ちゃんはそつと抱き寄せた。

折れてる方の腕で。

オレは思った。

——漢だ……。

夜を走る。

向かう先は、病院だ。

慣れない運転をなんとかこなし、オレ達は無事に大病院に辿り着いた。また変なところに迷い込んだりしないか不安だったが、何もなくてよかった。そういう露骨な現象が無かったというだけで、もしかしたらオレが気づいていないような何か起きていた可能性はある。だけどそこまで考えると精神的に疲れてしまいそうなのでやめておく。

二人を病院に運び込み医者に預けたオレは待合室で待たされることになったんだけど、その間に再び警察と、加えて弁護士先生に今日の都合が悪くなったという連絡を入れた。

警察を毛嫌いしている様子の信乃ちゃんには後で苦情を入れられるかもしれないが、ここまで大事になった以上は仕方が無いだろう。国家権力に庇護して貰えば信乃ちゃんや桃香ちゃんの安全だって保障される。甘んじて受け入れてもらうしかない。

電話を終えて一度院内に戻ると、看護師さんに呼び止められた。

どうやら大怪我をしている信乃ちゃんと、怪我はないが精神的に衰弱している桃香ちゃんはそのまま入院することになるらしい。保護者と連絡を取れないかと聞かれた。残念ながらオレは二人の保護者は知らないで本人たちに聞いてほしいと伝えたのだが、二人とも保護者には連絡を入れたくないと頑なで、困っているとのことだ。

困った。信乃ちゃんは分かるけど、桃香ちゃんにも何か複雑な事情がありそうだ。

配慮はしてあげたいところだけど、さすがに保護者に連絡しないとこの選択肢は取れないだろうし……。うーん。悩んでいると看護師さんから妥協案を提示された。それは簡単に言えばオレが保証人になるということらしい。もしものときの入院費とか、身元の保証とか、そういうの。

……？

ちよっと待つて欲しい。



最近までオレは、今生を前世とそれほど変わらないと思っていた。年号が若干違ったり、歴史上で起きた事件の年代に前後があつたりと確かに微妙な違いはあつたが、一般常識はそれほど変わっていない。そう思っていた。

「だけどこれって……なんか融通が利き過ぎと言うか……。それで許されるものなの？」

「そういうものなんだろうか？」

「それともこの病院が特別なだけ？」

「そもそも話として、オレが知らなかっただけで前世でも実はこういうものだったのだろうか？」

「だとしても、オレにそこまで身を切る義理はないんだけども……。見捨てるのは忍びないけど、さすがにそこまで面倒を見るのは……。」

悩む。

東堂家の遺産と払われている保険金は莫大なので金銭的には困ってないしやろうと思えば何とかなる。だからと言ってオレは別に慈善家でも資産家でもない。ご飯を奢る程度ならたまになら良いけど、さすがに今回の規模がでかすぎる。これを引き受けたとしたら、オレには金銭的なものだけでなく、社会的な責任まで大きく押し掛かって来る。ただの大学生にはあまりに荷が重い。普通は在り得ない。オレは社会的に見れば責任の取り方なんてまだ知らない、いち大学生でしかないんだから。それを平然と病院側が提案するというのがちよつと信じがたいというのが正直なところだ。責任を全うできる自信があれば良いんだろうけど、そんな経験はない。もしもその責務を果たせなかった場合、オレだけでなく二人にもしわ寄せが行く。

「即決は出来ない。一度、二人と話をすべきだろう。」

そんな話をしていたとき、サイレンの音が聞こえてきた。オレの通報を受けて警察の人が到着したらしい。警察の人が病院内に入ってくる。オレは手を上げて警察の人を呼ぶ。看護師さんが答えを急かしてくる。警察の人が近づいて来て事情聴取を求められた。看護師さんが答えを急かしてくる。

ちよつと待つて欲しい。オレは聖徳太子じゃない。

とりあえず、一つずつ片付けて行こう。

まず、警察の人にはオレの知る限りの情報を先に話し、連絡先を伝え、後日ちゃんとした事情聴取を受けるからと、申し訳ないが本日はお引き取りを願った。

もともとさっきの再通報は最初の通報者としての義務と、信乃ちゃんたちの保護を願うための通報だった。話すことを話せばとりあえずオレからは用事は無い。あれからどうなったかという情報も気にはなるが、今のところ優先順位は高くない。

オレのことは不満そうだがそれで引き下がってくれた刑事さんたちだったが、今度は信乃ちゃんたちへの事情聴取も求めた。しかし今、彼女たちには何よりも休養が必要だ。彼女らへの事情聴取は後日にして貰う。そこは絶対に譲らない。有難いことに、それについては看護師さんたちも同様の意見だったようで、刑事さんたちは不満そうだったが帰ってくれた。

その後答えを急かしてくる看護師さんに、改めて彼女たちと少し話をした旨を伝えた。刑事さんたちを帰した手前罪悪感もあるが、これについては急用だ。この問題は今処理しないと、彼女たちが病院から放り出されそうな気配すら感じる。

信乃ちゃんたちがいる病室に通された。

包帯でぐるぐる巻きにされてベッドで横になっている痛々しい姿の信乃ちゃんと、その傍に置いたパイプ椅子に座る桃香ちゃんの姿が目に入って来る。

信乃ちゃんは桃香ちゃんに黙って見つめられて困っている様子だったけど、オレの姿を見つけると嬉しそうに笑った。

近づいて来るオレに少し身構えている桃香ちゃんから少し距離を取り、横になつている信乃ちゃんの足元で立ち止まる。桃香ちゃんに小さく手を上げて挨拶すると、強張った様子のまま小さく会釈をしてくれた。

信乃ちゃんが言った。

「ライルさん！ さっきは助かった!! マジありがとう!! ライルさ

んまあじでカツコよかった!! 映画みてーだった!」

映画みたいだったのは君もそう。元気そうだ。そんな信乃ちゃんを見て力が抜ける。

オレは安堵の息を一つ吐き、苦笑しつつこう言った。

「見た目よりは大丈夫そう……なのかな?」

「おー! 元気元気!」

信乃ちゃんが元気に言った。だけどオレは看護師さんから診察の結果を聞いている。左腕の骨折を始め、全身の打撲や裂傷。まあ元気ではない。

「看護師さんから聞いたよ。左腕、やっぱり折れてたんだね。痛いだろうに……そんなふうに無理して取り繕わなくて良いよ」

「あー……。もう聞いてた……?」

信乃ちゃんが気まずそうに言った。

「うん。もう聞いてた。あのね、信乃ちゃん。オレは君に色々聞きたいことと言いたいことがある」

「……」

信乃ちゃんが凄くバツが悪そうな表情で目を泳がせている。

オレは小さくため息を吐いた。すると信乃ちゃんがびくりと震える。

ああ、そうだった。昼も確かオレがため息を吐いたときそんな反応してたっけ。

信乃ちゃんは今、オレが何を言うか気が気では無いんだろう。結果的にオレを巻き込んだことや黙って消えたことへの罪悪感。そしてオレから怒られたり失望されることへの恐怖。といったところか。

まあ、オレはその辺は一切気にしてないんだけども、一つだけ言うっておこう。

「信乃ちゃん」

「はい……」

信乃ちゃんにはさつきまで半グレたちへ見せていた強気な態度は影も形もなく、殊勝な様子で縮こまる。あまりに大きすぎるギャップに内心でちよつと笑ってしまいそうになるが、それだけオレに対して

は心を開いてくれているということだろう。有難いことに尊敬もしてくれているようで、だからこそ怒られると思って恐縮しているんだろう。

「……」

急に視線を感じた。

桃香ちゃんからだ。桃香ちゃんがオレの方を見ている。

表情は前髪に隠れていて見えないが、なにか敵意のようなものを感じる。

話の流れを考えれば、信乃ちゃんを恐縮させていることへの憤り。何を言おうとしているのかという興味、警戒。そんなところだろうか。

桃香ちゃんはよほど信乃ちゃんが大切らしい。正直やり辛いが、居合わせた大人としての義務は果たすべきだろう。とはいえ、長話や説教をするつもりは今はない。刑事さんにも言ったように、彼女たちに今必要なのは心身を休ませることだ。オレはそう思っている。

だからオレは安堵を滲ませた表情でこう言った。

「もう君とは会えないんじゃないかって、不安だった。凄く心配したんだ。また君と会えて良かった」

それが本心だった。殺されたり、女性としての尊厳を踏みにじられたり、そんな悲惨な目に合う前に合って本当に良かったと思う。そしてその正否はともかく、たった一人で友人を守ろうとしていた姿は……。

「立派だった。よく頑張ったね」

一瞬、ぽかんとオレを見ていた信乃ちゃんだったが、すぐにオレの言葉を咀嚼できたのか、くしゃりと表情を歪めた。

「おこんねーのかよ……?」

「それは君の話の聞いてからにするよ。場合によってはお説教も覚悟してね」

「へへ……。やっぱすげーな、ライルさんは……」

信乃ちゃんはとても穏やかに笑った。信乃ちゃんの体から力が抜ける。まだ張り詰めていた心身の緊張が今、ようやく解れたようだった。

た。

「……」

一方で、未だにじつとオレを見ているのが桃香ちゃんだった。やっぱり敵意、警戒心を感じる。それだけじゃないけど、あまり好意的には見られていないようだ。

信乃ちゃんはそんな桃香ちゃんの様子に気づいたのか訝し気にこう言った。

「桃香おめーも礼伝えろよ。ごめん、ライルさん。悪気はねえんだ、こいつ。さつき喋ってたけど、ずっと口きけなくて」

「……」

桃香ちゃんは縮こまって俯いた。

「大丈夫。さつき会釈してくれたし、気にしてないよ」

オレは桃香ちゃんの方を向いて努めて穏やかな口調を意識して続けた。

「あんなことがあった後だし、男性に対して嫌悪や忌避感を抱くのも当然だと思う。これは信乃ちゃんに対してもそうだけど、無理をして欲しいとは思ってない。そうだね……もつと踏み込んで伝えるなら……。君たちはオレに対して頑張ろうとしなくて良い。怖かったと思う。嫌な思いもしたと思う。君たちはもう充分頑張った。本当によく頑張ったと思う。だから今はただゆつくりと休んで欲しい。オレは今、今夜のことが君たちの心に傷として残らないことだけを心から願ってる」

「……」

桃香ちゃんは前髪越しに凝視してくる。

雰囲気がちよつと緩んだ感じはした。

「しみりとした空気になってしまった。」

信乃ちゃんは例の如く、分かりやすく感動しているから大丈夫そう。さすがに強い。記憶をいじられてすぐに奮起出来るだけはある。だけど、桃香ちゃんが分からないな。

この子は内面に抱え込みそうな感じがするし、緘黙症を患っていたらしいことから、今夜のこと以外でも何か闇を抱えていそう。信乃

ちゃんとは違う方向で危うい感じがする。

しかもオレに対して何か蟠りを抱いている。信乃ちゃんのように分かりやすい表面的な攻撃性が無い分、オレにはそれを汲み取ることはできない。ただでさえ繊細な気遣いが必要になりそうなのに、今の状況ではゆっくりと歩み寄ることも難しい。今オレに出来ることは今言ったことを伝える以外には無いだろう。とりあえずやれることはやったと思う。

うーん……。

面倒くさい。

あとは専門家に任せるべきなんだけど、今回の一件のこともあるし、これからも信乃ちゃんと関わる以上、この子との関わりも避けられるものではないだろうから、腹は括ったけども。

「休んで欲しいと言った手前申し訳ないんだけど、一つだけ、良いかな？ 君たちの保護者……親について」

二人の雰囲気为重々しいものになる。

オレは事情の説明を始めた。

「オレは君たちの力になりたいと思っただけ、ただの大学生のオレにはそれにも限界もある。可能なら君たちの保護者に連絡を取りたいんだ。連絡先を教えて欲しい。もし君たちから事情を説明するのが苦痛なら、オレが間に入るよ。そのときは絶対に君たちの味方で居続けることを誓う」

「……分かった。ライルさんを信じる。意味ねーと思うけど……」

不穏なことを言いつつ、信乃ちゃんが噂のやばい母親への連絡先を教えてくださいました。

桃香ちゃんは……悩んでいるようだ。とりあえず信乃ちゃんの方を片付けようと、オレは病室を出て電話を掛けた。

……。

結論から言うと、クソだった。腹立たしいことこの上ない。

信乃ちゃんのお母さんは興味が無い、そんな金は無いと宣った。電話口からは男の声が聞こえ、時折信乃ちゃんのお母さんは「いやあん」と甘い声を零していて、勝手に通話を切られた。次に掛けた

らもう出なかった。

本気で腹立たしい。

そら信乃ちゃんもグれる。むしろよくあの正義感と漢気を持ち合わせてくれていたと感心する。

さて、病室に戻り、信乃ちゃんにはオブラートに顛末を伝えた。

が、信乃ちゃんは言った。

「どーせ金無いか興味ないとか言ってたんだろ？ それと、男でも連れ込んでたんじゃねえ？」

さすがに何とも言えなくて黙ってしまったオレだが、失敗だった。

やっぱな、と信乃ちゃんは苛立たし気に、しかし少し寂しそうに呟いて溜息を吐いた。

つらい……。

「桃香ちゃんはどうかかな？ 教えてくれる？」

切り替えて桃香ちゃんに話しかけた。桃香ちゃんはまたオレを凝視している。少し痛々しさが戻ってしまったのは、オレの失敗のせいだろう。

桃香ちゃんは答えてくれない。やはり喋ることが難しいようだ。

オレは周囲を見渡した。

近くの棚の上にあるメモとペンを見つける。それを手に取り、桃香ちゃんへと渡した。

「これならどうかかな？」

前髪越しにオレを凝視してくる桃香ちゃんの雰囲気は少し和らいだ気がした。

桃香ちゃんは戸惑ったような雰囲気を見せた後、おずおずとペンとメモ帳を受け取り、さらさらと動かし始める。

「へえ……。きれいな字だな……」

そして渡された紙に書かれている字を見て思わずつぶやいたオレに、桃香ちゃんはびくりと小さく跳ねた。小動物的な可愛いらしい所作だった。

一方、オレの呟きに反応した信乃ちゃんのはしゃぐように言った。

「あ、それあたしも思っ!! いっつう……っ!」

桃香ちゃんがオレに褒められたことを、信乃ちゃんは我がことのように喜んだ。そしてそれが傷に響いたようで悶絶している。

うん、君は良い子だよ。本当に。

桃香ちゃんは恥ずかしそうに縮こまった。小動物的な可愛らしい所作だった。背も小さく小柄だしなおさらそう思う。

再び病室から出て、今度は桃香ちゃんの保護者へ連絡する。

結論から言うと、クソだった。腹立たしいことこの上ない。

桃香ちゃんの親が言った言葉は3つ。

①金は後で全額払うから保証人頼む。

②仕事忙しいから行けない。

③出来の悪い娘だという桃香ちゃんに向けられた愚痴。

これだけだ。控えめに言っただけである。さすがのオレも思わず天を仰いだ。

そら桃香ちゃんも口を閉ざす。

同時に一つ分かったことがある。桃香ちゃんは多分、信乃ちゃんに依存している。どういう関係なのかはまだ分からないけど、信乃ちゃんがオレに求めているモノに近いものを、桃香ちゃんは多分信乃ちゃんに求めているんじゃないだろうか。信乃ちゃんとオレのやり取りに都度反応し、オレに敵意に近い何かを向けてくるところからそのように予想した。

オレは思った。

……やべえ。めんどくせえ。

次から次にオレ自身に降りかかる異常事態とは別に、距離感に細心の注意を払う必要のある年頃の少女二人との関わり。

少しキャパオーバーだ。せめて前者が無ければ良かったんだけど……。

とはいえ、仕方がない。信乃ちゃん一人のときよりは狭まることは否めないが、出来る範囲で桃香ちゃんにも気を掛けることにしよう。桃香ちゃん的生活歴や事情を聞かないことにはどうしようもないけど、それはまた明日以降にせざるを得ないかな。

不幸中の幸いと言うべきか、桃香ちゃんに関してはこちらと保護者



と連絡を取れている。信乃ちゃんに関してはもともとある程度の責任は取るつもりだった。

……引き受けよう。

金銭にルーズでいるつもりはないけども、その辺りはすべてが落ちてから改めて話をすることにして……。

病室へ戻る。桃香ちゃんに事情を説明したところ、「そうですか」というメモ書きを渡された。どうやら普段から桃香ちゃんの保護者はこんな感じらしい。

動揺もせず達観している様子だ。保護者との関係を諦めているのか……それが逆につらい。

重い空気が流れている病室に、くう、と可愛らしい音がした。

信乃ちゃんだ。でも今度はオレも一緒に。

そう言えば夕飯を食べようとしていたところだったんだ。腹が減るのも当然だった。

良いタイミングだ。空気を変えようと思い、オレはそれを利用することにした。

信乃ちゃんの方を向いて、オレは言った。

「信乃ちゃん、何か食べれそう？」

「腹は減ってるけど……。口いてえ」

「そうだよねえ。うーん、ゼリー系の食べ物とかはどう？　ちゅー

ちゅーするやつ」

「あー、いけそうかも」

「よし。じゃあそれと……」

オレはちよつと意地悪な感じの笑みを浮かべて続けた。

「アイス、だよね？」

「あ、えう……。お、おなしやす……」

「よし、お願いされよう！　桃香ちゃんは何か欲しいものはある？

買ってくるよ」

桃香ちゃんは戸惑っている様子だった。

「気にしないで良いよ。今は甘えてくれていい」

オレの言葉を聞いて桃香ちゃんはまだ少し迷った様子を見せた後、

おずおずとメモ帳に何かを書き始めた。

「信乃ちゃんとおなじのがいいです」

メモ帳にはそう書かれていた。

……。ははーん。仲良しだねえ。

この子の場合にはゼリー系のモノである必要も無いと思うけど、こだわりか……。オレの勝手な判断にはなるけど、食べられるならちゃんと食べた方が良く。桃香ちゃんにはおにぎりをいくつか買ってやることにする。

病院の近くのコンビニに向かう。購買はもう閉じてしまっていた。

途中、桃香ちゃんの保護者と連絡が付いたことと、信乃ちゃんに關してはオレが責任を取ることを病院側に伝えた。

その後、何事もなく病室に帰還できた。

夕飯を買いにコンビニに行った時のようなことは起きなかった。本当に良かった。

蓋を外し、ゼリー飲料をベッド上でギヤツチアップされている信乃ちゃんへ渡す。桃香ちゃんには桃香ちゃん用の食べ物が入った袋ごと渡した。

信乃ちゃんは口の中が痛いのか、時折びくりびくりと跳ねながらも速やかにゼリー飲料を飲み干した。アイスが食べたいのだろう。

だが、そこで信乃ちゃんは気づいた。

片手は折れていて、動かすことが出来ない。信乃ちゃんは固いカツプアイスを食べることが出来なかったのだ。

信乃ちゃんの前に拵えられた可動式の簡易テーブルの上に置かれているアイスを、信乃ちゃんは呆然と見つめていた。

信乃ちゃんは何かを考えるような様子を見せたかと思えば、なにやら急に頬を赤らめた。そしてじつとオレを見つめて来る。まあ、顔にもガーゼを貼られまくっているので頬の剥き出し部分は少ないが。

「ライルさん……その……」

何を言わんとしているかは分かる。食べさせて欲しい、と言うことだろう。全然構わない。今日この子は頑張ったから、それくらいのサービスはあって良いだろう。

オレがアイスに手を伸ばそうとしたとき、桃香ちゃんが動いた。

桃香ちゃんは速やかにアイスと包装された木のスプーンを手に取り、速やかにアイスの蓋を開け、片手のワンアクションで木の匙を袋から引き抜いた。

そして流れるような動きでアイスを掬い、信乃ちゃんの口元に差し出した。アイスが乗った木の匙は信乃ちゃんの口元でぴたり、と止まる。

これに困惑するのが信乃ちゃんだ。

桃香ちゃんとオレ、そしてアイスの間で視線がふらふらと動いている。

桃香ちゃんはアイスを差し出したままの体勢で微動だにしない。

凄い圧だ。

やがて観念したのか、アイスへの欲求が勝ったのか、信乃ちゃんはアイスをパクリと口に含んだ。その瞬間、信乃ちゃんの表情がほんにやりと緩む。アイスが傷に染みる痛みを超越した幸福感を味わっているようだ。

そして、桃香ちゃんは既に二口目を準備していた。

早い。

オレは紙パックのリンゴジュースをストローで飲みながらそう思った。

簡単な食事を終えて、やることもやったしと、オレは立ち上がった。

「さて、オレはそろそろ帰るよ。また明日、面会時間になったら来るね」

「えー!? 泊まっただけばいいじゃん!! 添い寝添い寝!」

「そうはいかないって。ちゃんとまた明日来るから。我がまま言わない」

「ちえー!」

駄々っ子というかなんというか。信乃ちゃんはオレに対してはもう完全に気を抜いているようだ。ヤンキーモノ主人公が、昔から可愛がって貰っていたバイク屋を営むOBに構って貰っているとき、またいな雰囲気である。

添い寝というワードに関しては昼の一件があるからオレとしてはどうなんだろうと思うが、信乃ちゃん的にはジョークなんだろう。開き直っているとも言おう。

「改めて二人とも今日はお疲れ様。ゆっくり休んでね」

オレも疲れたのでゆっくり休みたい。

昼寝しておいて良かったと心の底から思う。

二人に挨拶をして病室を出ようとしたとき、信乃ちゃんがオレを呼び止めたので足を止める。

振り返ると、信乃ちゃんはもじもじとしていた。脳裏に廃工場での信乃ちゃんの姿が過る。やっぱりギャップが凄い。

「どうしたの？」

内心を隠して言うオレに、信乃ちゃんは意を決した様子でこう言った。

「すうー……。あのさあ！ そのお……ライル君、って呼んでい？」

「……。良いよ」

ぱあ、と信乃ちゃん表情が明るくなると同時に、首だけオレの方へ向けている桃香ちゃんのお囲気が重々しく険しいものに変貌する。せつかくちよつと仲良くなれた気がしたのに……。

オレは気づいている。

桃香ちゃんの信乃ちゃんに向けられている矢印の重さに。

だからといって信乃ちゃんをお願いを断れば、信乃ちゃんは傷付くだろう。さんが君になるくらいのお願いくらいは聞いてあげたかった。

ヤンキー系のジャンルだと、目上、格上と感じていて、かつ親しみを持っている場合、「さん」より「君」の方が用いられる傾向がある。可愛がってもらっている一つ上の先輩とか、喧嘩が強かったりなどの理由でヒエラルキーが上の同級生が、分かりやすい使用例だろう。あるいは舎弟系のモブが主人公に使っていたりする。

要は信乃ちゃんは完全にオレを『上』だと認識した上で強く親しみを感じてくれている、ということだろう。上下関係を厳しくするつもりはないけど、うまくそういう距離感の方に持つていけると互いに

とつても良いと思う。

幸せそうに手を振ってくる信乃ちゃんに手を振り返し、桃香ちゃんにも手を振ってから、改めて病室から出た。

しかしやはり出費が大きくなりそうだ。出世払いにしても、あまり東堂家の遺産におんぶにだっこはオレとしても好い気はしない。

だからオレは思った。

———そうだ。バイト探そう。

翌日、オレはタクシーを手配し、約束通り病院へ向かった。

今日は信乃ちゃんや桃香ちゃんと話をしたら、その足で警察に行つて事情聴取を受ける予定だ。オレに関しては車の窃盗と、器物破損（車と廃工場の金網）の件もある。

だけど昨夜のアレは事情が事情なので情状酌量の余地は大いにあるはず。頼りになる弁護士も知っているし、その辺はそれほど気にしてはいない。

信乃ちゃんたちの保護者役になるということもそうだ。

それこそ火急ということと臨時でオレが保護者を名乗ったが、二人とも親が居ることは分かっているのだし、半グレの件も含めて弁護士先生に丸投げすればいいだろう。調べてみると色々公的な制度もあったし、昨日の件は何かの手違いということだったんだと思う。担当していたあの弁護士がちよつと未熟だっただけとか。

だから目下の問題は、弁護士先生への依頼料かな……。オマケしてくれたりサービスしてくれると良いけど。最低限の生活費としてならともかく、いくなればオレの趣味に東堂家の遺産を使うのはやはり思うところがある。早急にバイトを探さなければ。とはいえ、信乃ちゃんたちの家庭環境については虐待についての公的機関に繋いでしまえば、後はそちらが何とかしてくれるんじゃないかとは思うので、それまでの辛抱だ。

ただ結果として親と信乃ちゃんたちの関係が悪化したり、そういう機関にお世話になることに対して彼女たちが誤った感情を抱いてしまう可能性は考慮しておいた方が良好だろう。恥ずかしいとか、申し訳ないとか……。そのときは身近な大人として彼女たちを支える、という決意はもうしてある。あとはなるようになっていくだろう。

オレ個人のこととしては、昨日の半グレたちの報復に気を付けたいところだ。

暗かったし顔はバレてないとは思うけど、真つ向から喧嘩を売ったようなものだし、既に水面下でオレの搜索を始めている、なんてこと

もあるかもしれない。例の、拳銃の暴発で手が吹っ飛んだスーツの男はあの後どうなったんだろうか。

逃げたのか、捕まって警察病院に搬送されたのか。それによつてはオレの状況もだいぶ変わるんだけど。といつても、あれだけ大きな騒ぎになったのだし、あの暴走族のケツ持ちをしているだろうヤクザ組織は警察にマークされているはず。そうなれば信乃ちゃんたちに付きまとう危険もなくなるだろう。

いやあ、本当に昨日一日でオレの日常が激変してしまった。もとの平穏に戻るには、一体どれくらい時間がかかるだろう。

うーん……。どうしてこうなったのか……。

ま、しょうがない。切り替えてこう。

言うても自分で選んだ行動の結果だ。

置手紙を見たとき、オレは信乃ちゃんを探さないことだつて出来た。

信乃ちゃんだつてきつとそれを望んであのメモを残したわけだし。決めたのはオレだ。

ぶつちやけ後悔はしてない。大変な現状を嘆きはするけど。いや、きついつす。

でも信乃ちゃんを助けられたとき、オレの脳内にある報酬系の機能は、過去一フル回転していたことをここに告白する。恥ずかしながら、彼女たちを助けられたことへの安堵とは別に、あへえとかうひよお、くらいの達成感と幸福感もあった。

そのことにはオレ自身、別段驚きはしない。

オレはオレ自身を『身近な大人に救つて貰えなかったという過去のトラウマから、誰かの精神的支柱になることに喜びを見出す傾向が少なからずある』という自己分析を行っている。

だからオレは、他人に対して正の方向に作用しそうな感想はしつかりと伝えるし、自分の出来る範囲でなら困つてる人に力を貸そうと思ふわけだ。

とは言つても、さすがに今回はちよつとキャパオーバーしたと思ふ。だからコネのフル活用に舵きりをしたわけで。

この苦境、何とか乗り切ろう。多分この苦境を乗り越えたという経験は、これからのオレのキャリアにとっても得難いものになるはずだ。

何事も前向きに行こうというのが今の考えである。

一方で、オレはもう二度とあんな不快な思いはしたくないので、他人がオレのラインを越えて来るようなら、ちゃんと嫌と伝える。勿論その上で話し合うことも意識しているけど、その結果として人間関係に軋轢が生まれてしまうなら、もうそれはそれでしょうがないと割り切りもする。

桃香ちゃんがどうなるか分からないけど、少し様子見したいところだ。大変な思いをしたことは間違いないし、彼女が何故そうなのかもオレは何も知らない。色々彼女を知った上で合わないと感じたら信乃ちゃんにそれとなく伝えて、オレ達が顔を合わせないようにすればいい。それとは逆に、オレの方が彼女と仲良くしたいと思っても、彼女側がそれを苦痛に感じるパターンもある。そのときも同じだ。彼女のことは他の人に任せて適した距離を保てばいい。まあそれも、ある程度二人が心身共に落ち着いてからはなるけど。

しかし……。

タクシーの窓から流れる景色を眺めていると、どうにも今日はサイレンを鳴らした緊急車両をよく見掛ける。

事故か事件か、朝っぱらから大変なことだ。

もしかして……。

昨日の馬のUMAが関係してるのかな？

以前、彩乃さんと黒竜の戦いを目撃したときも、翌日にその近くの建物が倒壊したみたいなのをニュースを見た気がするし。

どうなんだろう？

その辺、彩乃さんに聞いておけばよかったなー。

それはそうと、彩乃さんは大丈夫なんだろうか。こちらからコンタクトを取る方法が無いので祈るしかないけど……。

病院についた。

見舞いの品を持って信乃ちゃんたちがいる病室へ向かおうとして、



違和感を覚える。

音が消えた。人の気配もだ。

そして外にも異変が起きている。

今の今まで快晴の午前だったはずなのに、窓から見える空には暗雲が立ち込め、病棟内は薄暗くなった。しかもそれだけじゃない。内装が廃病院みたいになった。かび臭く埃塗れの廊下、ひび割れ塗装の剥がれた壁や床。床には廃棄されて捨て置かれた医療備品やガラス片、扉とかだったんだろう木片が転がっていて、天井には割れた蛍光灯。そこにあつたはずの当たり前の日常は、瞬く間にその姿を消していた。

そして、オレの表情からも一瞬で感情が消え去った。

「……」

立ち止まり静かに周囲を見渡す。

何かを言う気力もなく、クソでか溜息を吐いた。

また変なところ来ちゃったなあ……。

これは勘だけど、たぶん彩乃さん関係の異変じゃない。なんというか、雰囲気が違う。

……。

呻き声が聞こえた。地の底を這うような、下水道のような声だった。

粘着質な音が聞こえる。何かを引きずるような音も。少し離れた部屋の中からだ。

当然、踵を返す。

明らかにおかしいもの。見に行く必要もないし、ここで何かの姿を現すのを待つ理由もない。

来た道に戻るのが最適解だろう。

長い廊下。

ちよつと長すぎん？

明らかにオレが歩いてきた病院の廊下の長さじゃない。だって果てが見えないもの。

今日忙しいんだってオレ……。

こんなことをしている暇はオレには無い。

信乃ちゃんのメンタルケア、桃香ちゃんとの関係構築、病院との情報交換に、警察での事情聴取、弁護士先生との会談と信乃ちゃん、桃香ちゃん兩名のご両親への連絡。そして出来るなら葵さんに関しての話を聞くべく、学校帰りの茶々ちゃんを捕まえたい。大学まで休んでいるのだから、やり遂げなければならぬ。

歩いて行けば元に戻るだろうか？

オレは一応来た方向へ歩いてみる。体感的に元の病院だったなら廊下の行き止まりにあたるだろう距離を歩いたけど、景色が変わるところは無かった。

入れたんだから出られるだろうが……っ！

今日のオレは少し機嫌が悪い。というか今まさに悪くなった。勿論理由はお分かりですね。

苛立つてもしょうがない。

考えよう。

彩乃さんの件とはやっぱり違う気がするが、状況は似ているといえ

ば似ている。彩乃さんを探すか？

「あやのさーん!! あやのさーん!! 東堂ですー！ いませんかー!?!」

大声で彩乃さんと呼ぶ。

返事を待ち、少し静かにしてみたが、返事はない。

返事はないけど……背後からはゆっくりとあの粘着質な音と、何かを引きずる様な音が近づいて来る。どこからともなく肌寒い風が廊下を通り過ぎる。

後ろを振り向こうかと思った時、正面に何かを見つけた。

彩乃さんかと思ったが、そうじゃなさそうだ。人型、人影なのは確かだけど、なんかでかい。背丈は二メートル、いやもつとあるか？

しかも人影だ。シルエツト。探偵ものの犯人みたいな、真っ黒の何かが立っている。

なんか始まったなコレ……。

とりあえず最初の音の方へ振り向く。

少し離れた場所に、人型の肉塊が居た。着衣はなく体毛も無い。剥き出しの肌はすべて腐った肉の色をしている。暗い緑がかった灰褐色だ。

なんだあの化け物。

頭部はあれど顔が無い。のっぺらぼうのように、鼻も口も目も耳も見当たらない。ただ腐った肉塊が胴体の上に乗っている、といった感じだ。

ぶよぶよの四肢は浮腫によるものだろうか。肉の弛んだ腕は相撲取りの胴体程の太さで、そして異様に長い。垂れ落ちた手の甲は地面を引きずっていて、垂れ落ちる灰褐色の浸出液が軌跡を示している。何かを引きずるような音と粘着質な音の発生理由が分かった。

見ていると食欲が消滅する外見だ。

不快感が凄まじい。

嫌悪を込めて化け物を見ていると、動きがあつた。

化け物の頭部、人間であれば口のある場所が大きく裂けた。あの化け物には耳が無いが、人間であれば耳まで届くほどだ。

あの化け物は笑っている。

オレがそう認識すると、のろのろと動いていた化け物が凄まじい速さでオレに向かつて走り出した。いや、走り出したというよりは、高速でスライドして来たというべきか。まるで高速のオートトウオーケー平面のエスカレーターのように。

いや、きもいて。

近づかれたら臭そうだし、触ったら服がとんでもなく汚れる。

オレは一步後ずさった。しかし化け物はあまりに早く、瞬時にオレの目の前に到達。

爆散した。

まあ……。確かにそんな気はしたよ……。

爆散した肉塊と、飛び散った体液はすべてオレとは反対方向に跳ね飛んでいて、オレはそれを見下ろした。

思うところがある。

あの至近距離で爆散して、オレが一切の被害を受けていないということは普通に考えて在り得ないだろう。普通ってなに？ って感じの二日間ではあるけども。今は置いておこう。

昨日の世紀末大事故やUMAの挙動、そして今回の事象を見るに……。仮説だが、やっぱり何か……。異能や異物を反射するような力がオレには備わっているんじゃないか？

でもトラックに関しては普通に物理現象だったしオレもそう認識してたから、弾くものの定義はまだ分からないけど……。これはもしかしなくても、昨日の銃の暴発もそれか？ 信乃ちゃんたちのことを優先して考えていたから、拳銃の暴発についてはあまり深く考えずラッキーくらいに思ってたけど……。

ただ自分を引き締めるためにいうが、過信も盲信もするべきではない。

本当に奇跡が連続して起こっただけの、本当にただの偶然という可能性は消えていない。これはそのような考えに執着しているわけではなく、そう考えておくべきという心構えの話だ。そういうものだと過信して、もし次に何か起きたときに呆気なく死ぬ、なんてことになったら目も当てられない。当たり前だがオレは死にたくはないし、しかも今は信乃ちゃんたちのこともある。彼女たちを残して死ぬわけにはいかない。

しかし……。どうやったら元の病院に戻れるんだろう。彩乃さんのときは何か一段落したらいつの間にか戻って来ていたけど、ここには彩乃さんはいないみたいだしなあ……。今日は立て込んでいることもあるし、能動的に脱出へ動いた方がよさそうだ。

一歩歩く。

光が広がる。人の気配。喧騒。空は快晴で、廊下は整理整頓され、汚れも見当たらない綺麗なものだ。

いや、戻れんのかい……。

いい加減にして欲しい。

今のことは忘れよう。

早く信乃ちゃんたちのところへ行きたい。

歩き出す。

光が失われる。人の気配が消える。空は暗雲が立ち込め、廊下は薄暗く汚い。

オレは思った。

——おいおめえいい加減にしろよマジで。

誰にでもなく内心で罵声を吐く。

もう困惑を通り越して怒りが湧いて来る。びっくり系のドツキリを立て続けにされて、最初は恐怖や驚きのリアクションをしていたターゲットが、いつしかそれらを通り越してぶち切れ始める気持ちに分かった。別にドツキリをされているわけではないのは分かっているけど。

だが、ふと気づいた。

さつきとは違う場所だ。廊下にいるのは変わらないが、散乱している備品や壁の様子がさつきとは違う。

立ち止まってもしょうがないのでコツコツと歩く。

前方に何かが見えた。

またあの肉塊の化け物かと思ったが、違うようだ。

さつきのは全体的に丸かったが、今見えているシルエットは異様に細長く、そして白い。それでも確かに人型ではあった。それは軟体動物のようにぐにやぐにやと動く腕を万歳のように上げ、うねうねと体を揺らめかせている。目を凝らして見ると、その白いものが肉だということに気づいた。一切の血の気が引いた肉だ。

当然、帰る。

そう思いゆつくりと振り向こうとしたとき、オレは不注意にも足元の廃棄物を蹴ってしまった。

音が鳴る。

あ、と思つて前方を見ると、白い何か動きを止めていた。オレを認識したようだ。

オレはすぐに白い化け物に背を向けて走り出しそうとした。だがオレが振り返り切る前に、その白い化け物は凄まじい勢いで走り出しオレの前に到達したかと思えば、その挙げたままの軟体動物のような

腕ごとオレに覆いかぶさって来た。

そして爆散した。

あのさあ……。

爆散した化け物の肉が粘着質な音を立てて壁や床に張り付いた。

何がしたいんだよお前は……。

怒りを通り越して呆れまで出て来る。

正直言うところとちよつと焦ったから安心はしているけどね……。

ふん、と鼻息を一つ零す。目を閉じて、とんとんと額を人差し指で叩いた。

考える。

今日の前で起きた現象はとりあえずスルーするとして……。

十中八九、他にもいる。オレは予感をしてきた。そして、さっきの肉塊の化け物と今の白い化け物の挙動を見る限りでは、どうやら化け物どもには目と目が合うと高速で接近してくる性質があるようだ。

いや、それは少し違うか？

あいつら二体とも目というか、顔そのものが無かった。

ではなんだろう？

さっきの肉塊の化け物はオレの背後からゆっくりと近づいて来ていた。当然、肉塊の化け物はオレの存在にオレよりも早くに気づいていたはずだ。それでもオレはオレが振り返るまでは緩慢な動きをしていた。それを踏まえると……。

オレがあいつらを視認したらダメ、とかだろうか？

んー……。どうだろう。

それだと一番最初にオレが見た細長い黒い影がオレに近づいてこなかった理由が説明できない。

だとすると考えられるのは……。

化け物の存在にオレが気づいた、ってことを化け物に気づかれるのがダメ、とかかな……？

オレと対面したときにあの肉塊の化け物が「にちゃあ……」って感じで笑った様子を見るに、目は無くても認識機能はあるみたいだし。それ以外は残念ながらわかりません。ただ、オレがおかしい……い

や、オレの運が良いだけで、あいつらは普通に危険な存在だと思う。とりあえずさつきのように来た道を戻ろうとしたとき、行く先にまた別の何かがあることに気づく。

……。

また爆散することに期待して近づくと手もあるけど、違った時にどうなるか分からないのがなあ……。

とりあえず近くの部屋に入り、様子を伺う。

何かが近づいて来る音がする。からからから、と何か乾いた音だ。息を潜めて待つ。

……。

どうやら通り過ぎて行ったようだ。

今まで色々とネット小説を読んだ記憶はあるが、自分が一体どういう能力を持ち合わせていて何が出来るのか、という情報を最初から完全に把握しているって、凄く有難いことなんだなって、しみじみ思う。

オレは昨日まで自分は無能力者でこの世には異能なんてないと思いつつもしていたわけだし、最近までは普通にそう思っていた。

今だってまだこれまでの一般常識を捨てきれないというか、捨てたくないというか、適応しきれないというか揺れているところがある。こういうのに慣れ切ってしまうと認知が歪み、普通の生活に支障をきたしてしまいそうで不安だからね。

なるべくなら危険は避ける。この考えは最低限は持っていた方が良いと思っている。あくまでオレはいち大学生でしかない。仮にオレがどんな力を持っているようにとも、オレ自身は偉大な人間でもなければ神話の英雄でもないんだし。実際、一度は死んでるわけ。

それにオレに異能が備わっていたとして、それが万能なものとも思えない。

一日に何回？

一か月に何回？

一年に何回？

もしかしたら回数制限があるかもしれないけど、その上限にたった今

到達したなんて可能性だつてある。現実を更新しつつ、地に足は付けて行かないと……。

はあ……。

ため息が出ちゃうね。

誰かオレに、オレのことを教えて欲しい。オレにどんな才能があるのかを。そうしたらこんな悩むこともなく、選択的に行動できるのに。異能があったらあったで悩みも増える。不便で煩わしいとさえ思ってしまう。

……。

また音が聞こえてきた。不自然な音ではない。足音だ。人の足音。音は小さく、足音と足音の間隔は長い。歩幅が大きいというよりは、歩くのが遅いんだ。多分だけど、忍び足のように歩いている。音はオレが来た方向から聞こえて来る。

同時に、化け物の去った方から音が聞こえてきた。さつきと同じ音。帰って来たんだろう。

人の足音はオレの部屋の前に来た。暗闇に隠れて廊下を覗く。

やはり人だ。小柄な女性、しかも若い。制服を着ているところを見るに女学生だろう。

長い黒髪をゆるく束ねて体の前に流している。彼女の印象と特徴を聞かれれば、何の変哲もない制服の赤いリボンが一番最初に思い浮かぶ程度には垢ぬけない感じの、素朴な女子高生がそこにいた。

その子は不安そうにきよろきよろとあたりを見渡しながら、震える拳を下唇に当てている。スカートから伸びる足は内股でおぼつかない。

見るからに恐怖で竦み上がっていますって感じで、見てて可哀そうになって来る。

一方で、化け物の方の音も近づいてきている。まだ曲がり角の向こう側にいるんだろうけど、多分もう少しで女の子と化け物がかち合うことになるだろう。

オレはすぐさま暗い部屋から飛び出し、女の子の口を塞ぐように覆い抱えると、速やかに部屋の中に引きずり込んだ。驚いた女の子は



「んー！」とくぐもった叫びをあげはしたが、体全体は恐怖で竦み上がって硬直していて、抵抗らしい抵抗は無かった。

暗い部屋の中で物陰に隠れ、オレは彼女の耳元にこう囁いた。

「騒がないで。暴れないで。あいつに気づかれる」

穏やかで柔らかな声音を意識して伝える。

「驚かせてごめん。でも、どうか騒がないで欲しい。ここには気持ちの悪い化物がいる」

オレの腕の中で女の子は可哀そうな程に震えている。

オレは囁き声で続ける。

「大丈夫。これ以上のことは絶対に何もしない。どうか信じて欲しい。君を守りたいんだ。オレは東堂雷留という名前で、●●大学の大学生なんだ。証拠は今すぐには見せられないけど、嘘はついてないよ」

学生証を見せるには財布を取り出さないといけないが、女の子から手を放す必要がある。騒がれたらアウトだ。さっきの白い化け物の様子から、化け物には音を認識する機能もある。騒ぐのは悪手だ。

「どうか騒がないで欲しい。出来るかな？」

女の子が小刻みに何度も首肯する。鼻息が荒い。物凄い恐怖で興奮しているようだ。

大丈夫かなあ？

「いいね？ 騒いじゃダメだよ？ 静かに……」

そつと女の子から手を放す。

その時、部屋の前を化け物が通り過ぎていく。日本人形のような、床につくほどに伸びた髪と、網のようなものにがんじがらめにされた体。手に持っているのは……ラケット？

それを見て、女の子の身が竦む。

「ひう……っ」

女の子の口から小さな息が漏れた。オレは咄嗟に女の子の体を引き寄せ、その口をまた塞ぐ。

幸いにも化け物は気づかなかったようで、そのまま通り過ぎていく。

音が聞こえなくなってからオレはまた嘔き声で彼女に話しかけた。「いいかい？ 落ち着いて聞いてね。さつきはいきなり襲うような真似をしてごめん。怖かったと思う。ただああいうのが他にもいて、あれは条件を満たすと襲ってくる性質がある。オレは君をあの化け物から隠したかったんだ。信じてくれるかな？」

女の子の体がかたがたと震えている。それでも今度はゆっくりと首肯した。

恐怖に怯えてはいるが、ある程度は受け入れてくれたらしい。オレは再び彼女から手を放す。

女の子は可哀そうなほどに震えあがっている。呼吸も荒い。早く浅い。過呼吸になりかけていそうだ。

何故こんな見るからに普通の子がこんなところにいるのかは分からないけど、当たり前前の反応だろう。可哀そうに……。

「大丈夫。少なくとも今は大丈夫。まずは落ち着こうか。大丈夫、落ち着いて。目を閉じて……、息を吸って、ゆっくり吐いて……。息を吸って、ゆっくり吐いて……。そう、上手だ。続けよう。慌てないで……。大丈夫。オレが傍にいるからね。落ち着いて……。君は今一人じゃない。落ち着いて、落ち着いて……。そう。いい子だ。大丈夫。落ち着いて……。息を吸って、ゆっくり吐いて……。」

女の子の手の甲を覆うようにして握り、ゆっくりと穏やかな声で囁いた。

女の子はオレの言葉に身を預けるように、深呼吸を繰り返し始めた。過呼吸染みた呼吸の荒さは徐々に落ち着きを取り戻し、体の震えも弱まりつつある。

「よければ名前を教えて貰えるかな？ 自己紹介をしよう。さつきも言っただけど、オレは東堂雷留。君は？」

「……。藤砂律です」

か細い声はまだ震えている。

オレは穏やかな声を意識して続ける。

「そうか。良い名前だと思う。りっちゃんって呼んでもいいかな？」

「……………」

女の子はオレの距離の詰め方に困惑しているようだ。

それを狙って言ったわけだから良かった。

「ほら、なんか今、変なことになってるでしょ？ 少しでも気が紛れたらと思つて。変なときでも初対面のオレにりっちゃんって呼ばれたら、変な感じがして落ち着くかと思つて。どうかかな？」

「あ……なるほど……。そういうことだったんですね……。てつきり変な人なのかと……。でも確かに……。分かりました。りっちゃんって呼んでください。ちよつと照れ臭いですけど……」

りっちゃんは囁き声でそう言った。

だいぶ落ち着いた様子だ。しっかりと話せてもいる。ただ変な人というのは止めて欲しい。

オレは再び話題を戻す。

「君がどうしてここににいるのか、聞かせて貰える？ 学生みたいだけど、学校にいたのかな？ それと……。変な人つてのは個人的にダメージを負うから止めて貰えるかなあ……？」

りっちゃんを恐縮させないようにちよつとお道化たようにだが、嘘偽りない気持ちを伝える。りっちゃんはそれをどう受け取ったのかは分からないが、小さく笑つた。こんな状況だからこそ、自他ともに認める、KYではない、マイペースなオレとの恐怖とのギャップは大きく、影響も大きいんだろう。少しだけ肩の力が抜けたように思う。

りっちゃんは言った。

「はい、ごめんなさい。といつても、わたしも何が何だか……。わたし今日、病院の予約があつて学校には遅れて行く予定で……。それで病院の待合室に居たら、いつの間にかここに……」

「病院？ それって、●●病院？ オレもそこについて、気づいたらここにいたんだ」

「え？ いえ……。違います。聞いたことない名前の病院ですけど……それってどこら辺の病院ですか？」

「●●市の……」

「●●市？」

「うん。●●県の」

「えっ……？ わたし、××県です……」

おう……。

そういうこともあるんだ……。

……どこなんだろう。どっちの病院に近いとかあるのかな？

「わたし、凄く怖がりで……。昔から何かあるときさつきみたいに過呼吸になっちゃって……。すぐ倒れちゃうんです……。でも最近ちよつと酷くて、今日もそのことで病院に……。東堂さん、本当にありがとうございしました。東堂さんが居なかつたらわたし、あの化け物の前で気を失っちゃってたかもしれません……」

なるほど。つまり彼女の前で化け物が爆散するようなことは避けた方が良いでしょう。それに、対面するのもマズい。化け物が現れたときは今みたいにやり過ぎしたうえで、過呼吸になりかけている彼女を都度落ち着けてあげる必要がある、と。なにそのクソゲ。

オレは思った。

——ステルスホラー（ルナティック）かな？

落ち着いた様子の律ちゃんを部屋に残し、オレは首だけを外に出して周囲を見渡した。化け物の姿はなく、音もしない。廊下に体を出して、少し待つ。特に異変も無いことを確認してようやく律ちゃんに手招きをする。

律ちゃんは縮こまりながら無言でオレの傍に寄って来る。体をぴったりと寄せて来るのはひと肌を感じることでしか摂取できない安心感を求めていることだろう。余程恐ろしいようだ。確かに、薄暗い廃墟ってだけでもホラーの舞台に相応しいのに、荒れ果てた廃病院という要素を付け加えた上に、グロテスクな化け物なんて見たら普通なら恐怖が天元突破してパニックになるだろう。

そこで、思うことが一つある。オレは今まで普通に生活していたし、ホラーというジャンルにそれほど興味が無くて触れる機会も少なく、それを気にしてもいかなかったけど……。律ちゃんや桃香ちゃんを見て改めて思った。

オレ、恐怖って感情欠落してねえ？

拳銃を向けられたときや世紀末大事故に遭遇したときもそう。彩乃さんに助けられたときもそう。そしてさっきの化け物に襲われたときもそう。自分のことだから気づかなかったけど……。客観的に恐怖を感じている人を改めて見ると、普通ならそうなるよなって思った。そして、異変に対して一切恐怖を感じていない自分に気づいてしまった。

確かに、それらが命の危険を生じるものだと冷静に判断することは出来る。だけど、そのことに対して恐怖心を抱いた記憶が無い。ああ、危険だから避けよう、と理性的に淡々と思考が処理される。

さっきの化け物もそうだ。その見た目に対して感染症のリスクを忌避したり汚染される嫌悪を抱いても、恐ろしいとは感じなかった。

マイペースに生きることが極め過ぎた……か？

それとも、オレの未知の力が作用しているとか？

よく聞く設定ではある。自分の精神性が能力として発現する、みた

いな。それとは逆に能力に精神が奪われる、みたいなもの。

いや、一つだけ恐怖を感じるものがある。

それはオレが、他者から『一般常識から逸脱している』と評価され、嫌悪・忌避されることだ。逆にそれ以外に対して恐怖心を抱いていないという事実気づき、驚愕する。

そこまでトラウマかあ……あの頃のこと。まあ、それはそう。本当に……辛かったしなあ……。

……。

何とも言えない。

まあ、しゃあない。だからこそ昨日は信乃ちゃんを助けられ、今は律ちゃんを案じた行動が出来るとも考えられる。長所と弱点は表裏一体！ 何事もポジティブに行こう。信乃ちゃんにもそんなこと言ったしね。

死に対する恐怖が無いからといって、それを避ける行動が取れないというわけではないんだし。自分から命綱なしで高いところでパフォーマンスをする、なんてことをやりたいとかも思わないし。死への恐怖を感じていなくても、オレの中の一般常識がちゃんとオレを律してくれる。それが分かったのもラッキーだ。りっちゃんありがとう。

ちよつと考え込みすぎたかな。

律ちゃんが不安そうにオレの腕に手を触れた。また震えてきている。

オレは囁き声で律ちゃんに話しかけた。

「りっちゃんは高校生なの？」

「はい。一年生です」

「そっかあ……。学校はどう？ 楽しい？」

今は11月。新入生気分はもう無くなっているだろうし、交友関係なんかもとつくに固定されている時期だろう。オレは今世では高校生活は特殊だし、前世のことは覚えていないので普通の現役高校生の生活というのが気になる。

「そう……ですね。友達はいます。みんな良い子と一緒にいて楽しい

です」

少し含みのある言い方だったけど、踏み込んで良いものかな。

でもこの状況を一緒に乗り越えるには信頼関係を深めた方が良さだろうと思うので、続ける。

「それは良いね。オレは友達があまりいないから……。最近は少し増えたけどね」

最近増えた友達なんて、実際は信乃ちゃんくらいなので少し、という言葉ですら盛っているとも思うけど、そこは見栄を張らせて欲しい。

「何をして遊ぶの？」

「えっと、カラオケとか買い物とか」

「カラオケかあ。歌、上手なの？ オレはカラオケはあまり行かないけど、結構好きって最近気づいたかな。友人からはオペラとか聞いてそうって言われて笑っちゃったんだけど、好きなのはアニソンが好きかなあ？ りっちゃんはこういう歌を歌うの？」

「流行の歌です。その……わたしもアニソンが多いかな……」

「りっちゃんもアニソン好きなんだ？ 奇遇だね。十八番とかあるの？」

「その、ちよつと心惹かれちゃう、とか。触って！とか。燃え上がれダム！とか。素直じゃなくてごめんねえ！ とか、ですかね……」

……？

流行とは……？

それ、うん十年前のアニメの歌なんだけど……。それも君が生まれるずっと前。

流行ってたのは違うんじゃないけどね。

まあ、名曲は時代を経ても色あせないということだろう。

それはそれとして結構曲名を出してくれたなあ。どれも甲乙つけがたいくらい好きってことなのかな？

ジャンルも多岐に渡るし。関係ないけど燃え上がれダムってネーミングセンス凄いよね……。

「古い歌が好きなのかな？ 確かに昔の曲っていいよね。一曲の歌詞

全部で一つの物語を作っていたり、直接的で分かりやすい言葉選びがされてたり。テンポが一定の曲が多くて、そこに味があるって言うか。歌謡曲の雰囲気を引き継いでるというか、時代を想起させてくれる暖かさを感じるよね」

「そうなんです！」

律ちゃんは目を輝かせて言った。

流れ変わったな。

「わたし子供の頃は体が弱くて、家にいることが多かったんです。でも両親が共働きで一人でお留守番をすることが多くて……、でもお母さん、わたしが寂しくないようにってアニメをたくさん準備してくれて。わたしずっとそれを見てて大好きになって！ 両親とアニメの話をするのも好きなんです。でも……それが全部お母さんたちの世代のアニメで……。それでその、お友達と話が通じないってこともあったんですけど……。でも、東堂さんの言う通り、昔のアニメの主題歌ってその、落ち着いてるっていうか、追いかけてやすいペースっていうか、気持ち落ち着けて聴けるんですよ！ 最近の歌も嫌いじゃないですけど、あんまりテンポが早かったりするとちよつとどきどきしちゃって。急に激しくなるとびっくりしちゃうんです。大きい音が苦手で、カラオケはちよつと苦手に思ってたんですけど……でも誘ってくれるのは嬉しいので行って……。最初はみんな、わたしの選曲に戸惑ってて、わたし、きゆう……ってなっちゃったんですけど、でも、友達の一人と一緒に歌ってくれて、褒めてくれて。凄く嬉しくて。それでカラオケが好きになったんです！ それでもつと歌えるようにって一人でも練習してて。友達はわたしがおつとりしてても落ち着いた感じだから昔のアニソンと合ってるって。それでわたし、もつと昔のアニソンが好きになって」

「そうなんだねえ。そんなに熱く語れるなんて、よつぽど好きなんだなって、りつちゃんの想い、たくさん伝わって来たよ。聞いているとオレも昔のアニソンを聞きたくなつたくらいだ。でも……今はもう少しだけ声量を下げた方がいいかもしれないよ」

明らかに興奮して声量が大きくなって来ていたので少し窘める。



微笑んで言ったので圧を感じさせていないとは思う。

律ちゃんは恥ずかしそうに口元を隠し、身を縮ませて周囲を見渡した。

そして恥ずかしそうにオレを上目遣いに見て、消え入りそうな小声でこう言った。

「ご、ごめんなさい。あまりその、今までそう言ってくれる人っていないくて……。わたしを褒めてくれた友達も、昔の歌自体にはあまり興味ないみたいで。その子は歌自体は流行のポップなのが好きなので……」

「分かるよ。趣味を共有できるって嬉しいよねえ。一体感って言うのかな？ 誰かと気持ちが繋がるって気持ちの良いことだし、もつともつとってなつちやうのも分かる。微笑ましかったよ」

「……うう」

律ちゃんは顔を真っ赤に染めて首を竦めてしまった。

緊張は解れたみたいで良かった。

「お友達も良い子みたいで良かったね。聞いているだけでも好感を抱いたよ」

「はい。とつてもいい子なんです。……帰れるのかな、わたし。お父さん……お母さん……」

友達やご両親に会いたくなってしまうたようだ。こんな不安に晒されれば縋りたくもなるだろう。

しよんぼりとした律ちゃんに、オレも困った顔を浮かべてしまう。

笑ってしまうと申し訳ないが、オレは多分帰れると思うんだよね。でも律ちゃんは確かに。誰かと一緒って初めてだからオレも戸惑うところはある。

言われて思ったが、確かにそうだなと、律ちゃんの不安に納得する。普通、こんなところに突然迷い込んだらその心配も抱くだろう。その辺も少しずれている自覚をして、ちよつとナイーブになるオレである。

無責任なことはあまり言いたくない。かといって素直に分からないうというのも不安を煽ってしまうだろうしなあ。少し考えてオレは

言った。

「……そうだね。不安だと思う。でも信じよう。オレ達は帰れるって。またみんなに会えるって。二人でここから帰ろう。怖いと思うけど、踏ん張って帰る方法を探そう」

「あるんでしようか……？」

「信じて探そう。気持ちを強く持つて。大丈夫。不安になったら遠慮なく言って？　ちゃんと受け止めるから」

「でも……」

信じたけれど信じきれない、そんな感じだ。迷子の子供のように、というか実際に迷子の子供なのは間違いないんだけど、困り泣きそうな表情である。

「そうだよね。不安だよね……。いきなりこんな常識破りな目にあつたら何を信じたら良いか分からないよね。オレもそうだよ」

「……え？　あ、その、ごめんなさい。凄く余裕そうというか、冷静そうで凄く大人なんだなって思ってたので……」

「マイペースをモットーにして生きてきたからね。もう顔に引っ付きちゃって取れないんだ」

「あは。なんですか、それー」

少し律ちゃんが少し笑う。

オレは少し新鮮味を感じて、内心でほっこりとする。

律ちゃんと話していると楽しい。安心できるというか……オレの求めている素朴な平穏がそこにある。

状況的にある程度の配慮は必要だけど、ザ・普通って感じの感性の子だからだろうか。昨日一日で疲弊した心が和んでいく感じだ。

田辺と明日香さんに会いたいなど、ふと思った。

遠くからがらりと、乾いた音が聞こえてくる。

金属性の何かを引きずる様な音だ。さっきの奴とは別みいだない……。

「……ひゅー!？」

律ちゃんの体が跳ねる。悲鳴を小さく抑えてくれたのはありがたい。

律ちゃんは腰が抜けそうなのか、生まれたての小鹿のように震える足で体を支えながら、両手をオレの方に伸ばした。両手も当然震えている。そしてふらふらと震える足を動かし、縋りつくようにオレの体に抱き着いてきた。抱き着いて来たというか、立っているのが大変だから支えにして来たという感じだけだ。

オレは律ちゃんの背中に手を回して安心させるためにぼんぼんしながら、なるべく早く近くの部屋に連れ込む。一緒に物陰に身を潜めた律ちゃんは、かたかたと震える手でオレの腕に手を回し、ぎゅつと体を寄せて来る。目を瞑り、竦み上がって。

めちやくちやビビってる。りっちゃんビビってる。本当に、この子一人だったらマジで即死してそう。

そう考えると、ちよつとこの状況って理不尽過ぎると改めて思う。化け物に見つかったら終わりってわけじゃないのはまだ有情かもしれないけど、誤差だ。

気づかれていることに気づいていないふりをして、ゆっくりと近づいて来る化け物から知らぬふりを貫いて逃げないといけない。そうになると走ったらダメだろう。

そしてゴールも分からないまま、じりじりと迫る恐怖に耐えて彷徨い続けなければならぬ。そしてその最中に前から他の化け物が来たら終わりというクソゲー具合。悲鳴なんてあげたら一発アウトだろうし、腰を抜かしても近づかれてどうなるか分からない。恐怖に屈するまで化け物が近くで待機してくるかもしれないし、近づかれた時点で有無を言わず襲われるかもしれない。

オレは助かったけど、本当に難易度がルナティック過ぎる。

化け物らしき音が離れていく音を確認してから、再びオレ達は部屋を出た。

ようやく動き出せる。

そのとき律ちゃんが何かに気づいたのかか細い悲鳴をあげて言った。

「ひう……!?!?、こ、これ、なんですかあ……?」

見ると、廊下にはじけ飛んだ肉塊だった。

ああ、それさつき勝手に吹っ飛んだ白いバケモンの肉塊だよ。

余計混乱させそうで言えなかった。

「もしかしたら……化け物がたくさんいるし、化け物同士でやり合  
うってことがあったのかもね……」

「……。あの、東堂さん。てててて手を……繋いでも良いですか？」

「……良いよ」

肉片から目を逸らした律ちゃんの手を引いて、オレは前に歩き出  
す。

しばらく歩いていたが、ふと目についたものがあって、オレは立ち  
止まった。

「ど、どうしましたか……？ またなにか……？」

「いや、あれ……。手術室って書いてあるから。何かあるかなって  
思ってる」

「しゅ、手術室、ですか……」

「どうかした？」

「いえ、なんか嫌な予感がして……。どこかで見たような……」

「どこかで見た……？」

気になる言葉だった。

可能性を考える。

ここにはなにか、律ちゃんの人生に関与するものがあるのだろうか  
？

例えば幼いころに入院していた病院だとか。

「思い出せるかな？」

「……ごめんなさい」

「ううん。大丈夫だよ。でも、気になるね」

「はい。どこかで見たような気がするんですけど……でも……分かん  
ないです……」

しよんぼりとした律ちゃんを慰める気持ちを込めてその肩を軽く  
数度叩く。

そうだな……。

これまでの経験からすると、どうやらオレの立ち位置は、物語的に

言えば脇役気味だ。彩乃さんしかり信乃ちゃん然り。大きな事件の中心には誰か別の人がいて、オレはあくまでそこに迷い込んでいる。でもそう考えると、明らかにオレを中心にして展開された世紀末大事故が例外として浮き彫りになる……。気にはなるけど、それは今は置いておこう。

つまり今回の件、互いに迷い込んだという状況ではあるけれど、因果は律ちゃんの方にあると考えるのが自然だろう。

とはいえ、ここが無差別に人を取り込む領域で、これまで何人もここで人が化け物に襲われて死んでいるなんて可能性はある。そして今の状況は、この領域の謎を解き明かしたり打ち破る様な『メイン人物』が現れる前、とか……。例えば……彩乃さんと初めて会った時にオレが思った、茶々ちゃんの物語の途中、みたいな感じの。でもそれだと、律ちゃん……。なんか動機にされそうだね。メイン人物が動くための。行方不明の友人を探してとか、その亡くなった理由を探つて……みたいな。

とはいえ、それはオレの好きだった物語を当てはめた場合の考えであって、現実はその法則が適用すると考えるのはナンセンスだろう。事實は小説より奇なり。現実には正確にジャンル分けやひとくくりに出来る程に単純ではない。だが、ある程度のパターンには分けて考えられるはずだ。少し違うかもしれないけど、統計学ってそういうものだろうし。詳しくないから分からないけど。

とりあえず考えていても仕方がないので、手術室に入ることにする。錆びついた扉を開き、中に入る。放棄された手術台に、メスなどの医療器具、よく分からない機材。

探索する。埃の被ったメスを手に取って眺める。

「どうしたんですか？」

オレに抱き着いている、というか張り付いている律ちゃんが言った。

「いや……武器と違って持ってた方が良いのかなって思ってた」

「ああ……そうですね。持ってないよりは……」

そう言つて離れて行った律ちゃんがメスを手に取る。

「……いや、止めておこう。慣れないものは持つべきじゃないと思う。自分の体を傷つける結果になるかもしれない」

振り回して手を滑らせて隣のオレに刺さったり、律ちゃん自身に刺さったり。何らかの理由で倒れ込んだときに体に刺さったり。そもそもあの化け物たちにこんな小さな刃物が効くとも思えないけど。

「……確かに」

律ちゃんは名残惜しそうにメスを戻した。

名残惜しそうに……？

いや、不安つてことだろう。確かに刃物を持っていれば精神的にマシになるだろうけど、いかんせん剥き出しだからな……。

「え、これ……」

律ちゃんが何かを手を取った。

「どうしたの？」

「これ、昔わたしが失くした……なんでこんなところに……」

律ちゃんが呟く。

律ちゃんの手には片腕の無い熊の縫いぐるみが握られている。

「その縫いぐるみ……りっちゃんのものなの？ どうしてこんなところにあるのか、心当たりはある？」

「いえ……。でも……これ、昔誰かに貰ったものなんです……。それが誰だったかは、思い出せないんですけど……。とても懐かしい感じがします……。あれ……？」

しみみりと呟いていた律ちゃんが、何か困惑したように小首を傾げた。

「どうしたの？」

「わたし、何か……。忘れてる？」

……。

流れ変わって来たな。

「それはその縫いぐるみについてではなくて？」

「それもそうなんですけど……。もっと何か……。大事なことを忘れているような……」

「大事なこと……」

このタイミングでつてことは、この領域に関係することなのは間違いないだろうけど。

ちよつときな臭くなつて来た気がする。

なんだろう。よくあるのは……実は律ちゃんはまだ死んでここはあの世とこの世の狭間でしたとか、誰かに恨みを買つていて引きずり込まれたとか、先祖の因縁がどうのとか前世の魂がどうのとかでその清算のために何か使命を帯びていて、とか。あるいはこの領域を作つてる『何か』と偶然にも波長が合つていて、その記憶みたいなのが流れ込んでいる、とか。

答えは出ない。ただこれは言えると思う。

オレは関係ある……？

どの場合にしても、オレ、全然関係ないじゃない。仮に前世関係で共有事項があるにしても、ちよつと違くないですかね。今更と言えば今更だけ。それともオレを襲つて来たあの化け物が実は東堂家の……。いや、さすがにそれは考えるだけでも失礼だった。忘れよう。そのとき、後ろから物音がした。びくり、と律ちゃんの体が跳ねる。なるほど……。縫いぐるみはどうやら重要なイベントアイテム的なものだったらしい。

がたがたと震え始めた律ちゃんが、音の方を向こうとする。オレは咄嗟に律ちゃんのを引き寄せ、抱きしめた。許して欲しい。

そして耳元で囁いた。

「落ち着いて。アレは多分オレたちを認識してる。今アレを見るのはダメだ。さつき言ったよね？ 特定の条件を満たすと化け物は襲ってくるって。化け物達は、オレ達に自分が認識されたと判断すると襲ってくる。オレ達は気づかないふりを徹底しないといけない。逆を言えば、そうでなければゆっくりと近づいて来るだけだ。逃げられる可能性はある。今からオレは君に寄り添つて、ゆっくりと進んでいく。怖ければ目を閉じていいよ。落ち着いて、ゆっくりとでいいから確実に、あの化け物から離れよう。ちよつと語弊が生まれそうな言い方だけど、オレの体温とか感触にだけ意識を向けて。化け物のことは考えないように。慌てず、落ち着いて行こう。大丈夫。オレが一

緒にいるからね」

律ちゃんはオレの体に身を寄せ、ぎゅつと掴む。そして声も出せないほどに恐怖に震える体で、小刻みに首肯してくれた。

化け物が近づいて来る音がする。じやらじやらと、鎖を引きずる様な音がする。

手術室に入って来た。

オレは化け物の方を見ないように足元を見て、音から離れるように大きく周り、出口へと向かう。

化け物はオレ達の歩いた軌跡をなぞる様に、ゆつくりと進んでいく。

腕の中の律ちゃんの体の震えが強まっていく。呼吸も荒くなっているようだ。

「りっちゃんりっちゃん。大丈夫だよ。一緒にいるからね」

可哀そうなくらいに震えている律ちゃんの腕がオレの服を握りしめる。

「そうだ。今度、一緒にカラオケに行こうよ。君の歌を聞いてみたいな」

そんな他愛の無いことを囁きながら、オレは律ちゃんの体を抱き寄せている腕の指先を上下に動かして、あやすように律ちゃんの体を叩く。

そうして手術室を出る。化け物はまだついてきている。ときおり、足元の障害物の存在を律ちゃんに伝えながら、ゆつくり進んで行く。

「律……」

律ちゃんの名前を呼んだのはオレではない。

律ちゃんを呼んだ声は、後ろから聞こえてきた。まさか、あの化け物、喋れるのか。しかも律ちゃんの名前を……。

まさかオレの失敗か？

りっちゃんと呼んだから……？

でも、本当に人語を理解するような知能があるのなら、なんですぐにでも襲って来ない？

律ちゃんの名を呼んだのは反応を引き出すためだろけど、なんでそ



んな迂遠なことをする？

オレ達がアレの存在に気づいているのは明らかだろうに、なんで対面するまで動かない？

てつきり知能がないからこそその習性だと思っていたけど、他に何かがあるのか……？

「え……う？」

「ん？ どうもしないよ、りっちゃん」

ぼつりと小さくだけど、確かに反応してしまった律ちゃんは、オレの言葉で自分のミスに気づいたようで、がたがたと体を震わせる。

「りっちゃん、落ちつい……」

言葉に詰まってしまった。理由は簡単だ。

いるなあ……。目の前に。

律ちゃんの頭を見下ろして囁いたとき、視界に入り込んだ何かに気づいてしまった。

それが怪物の足だということはすぐに分かった。でも、人に近い。青白い肌に、血色の悪い血管が浮かび上がっている。足には枷がつけられている。その枷からは鎖が伸びていて、その先には鉄球が繋がっていた。

凄く近い。本当に、目の前にいる。

さすがに思考が止まった。

後ろにいたはずなのに前にいる、というのは経験済みだけど、今は律ちゃんがいる。

何を言うべきか、どうすべきか、思考を切り替えるのに時間がかかった。今目の前にいるアレには聴力がある。接近に気づいているようなことを口にするわけにはいかない。それが暗黙の茶番だったとしても。

本当なら目の前にいるから引き返そうと言いたいけど、言葉をぼかす必要がある。

「りっちゃんりっちゃん。さっきの方向に気になるものがあつたんだ。引き返そうか」

察してくれと願うが、察してしまうとパニックになってしまいそう

な危うさもある。

この子、一人だったら本当に生き残れなそうだ。となると、やつぱり立ち位置的には前日譚の名もなき犠牲者の一人なのかな……？

まあ、オレはそれを許さないけど。

律ちゃんを伴ってゆつくりと振り返る。

……。

あれ？

詰んだ……？

足元を見ているオレの視界に、さつき見た足と全く同じ足が入り込んでいた。

「律……」

……。

化け物が律ちゃんの名前を呼んだ。

さすがに困ったな……、これは。

どうすればいいんだろう。

「律ちゃんを絶対逃がさない」という意志を感じる。

律ちゃんはぎゅつとオレの体にしがみ付いて震えている。

「……」

多分目の前の化け物はまたオレ達が方向を変えれば、その方向に現れてオレ達の行く手を阻むのだろう。

オレ達が動かなければ特に何もしてこなさそうだけど、律ちゃんが耐えられない気がする。オレだってずっと立っていることは出来ないし、いずれ疲れてなんらかの行動は余儀なくされるだろう。

……。

仕方ない。

そうなるまで考えるよう。

とんとんと律ちゃんをあやすように手を動かしながら、この状況を打破するための考えに耽る。

時折化け物が律ちゃんの名前を呼び、そのたびに律ちゃんはオレの体に顔を強く埋めて震えあがっている。

そろそろ慣れないかな？

慣れないよなあ……。

「……………」

どれくらいそうしていたのか、化け物が踵を返した。オレの視界から消え、音も遠ざかっていく。

諦めた……………？

オレは小さく視線を動かして入れそうな部屋を見つけると、律ちやんを連れて身を隠す。

「もう大丈夫。目を開けていいよ。よく頑張ったねえ……………」

目を空けてオレの顔を見上げた律ちやんを安心させるために柔らかに微笑んだ。

律ちやんは緊張の糸が切れたのか、目に涙を溢れさせ、顔を両手で覆うと小さく嗚咽を零し始めた。

オレは律ちやんの肩に手を置いて、静かに落ち着くのを待った。

「すみません……………」

「大丈夫だよ。もう落ち着いた？」

「はい……………。ありがとうございます。東堂さんがいなかったらわたし……………」

しばらくして泣き止んだ律ちやんが恥ずかしさと申し訳なさが混ざった様子で謝って来た。

……………。

吊り橋効果かなあ……………。

律ちやんのオレを見るその潤んだ瞳の中になんとなく変化が見えている。

良いとも悪いとも言えないし、あえて律ちやんにそのことを言及するつもりもない。そう言う傾向があるという話だ。

恐怖で張り詰めた精神を守るための防衛機能なんだろうし、今は良いだろう。それでパニックが抑えられるなら、それは今に限ってはあるけど良い傾向と言えるだろう。ならオレは信乃ちゃんのようなときにように距離を取るのではなく、ある程度は受け入れてあげた方が良いかな。

小さく微笑んで、立ち上がる。

律ちゃんもオレに倣って立ち上がった。  
さつきと同じように廊下を覗き、周囲を見る。

……。  
やられた。

化け物がいた。直視してしまった。見た目は……曜日のロードショーで夏にやっていたのをちらと見た、テレビから這い出て来る怨霊にも似ている。その足の近くには鎖に繋がれた鉄球が見える。

長い黒髪を前に垂らして項垂れていたその化け物は仰け反るように頭をあげた。遠目にだが、歪に笑う口元が覗き見える。

オレはすぐに振り返り、律ちゃんに言った。

「ごめん。待ち伏せをされていて、気づかれた。すぐにでもこっちに来ると思う。オレが囷になるから、ここで隠れていて」

「で、でも……っ！」

「いいね？」

そう強く言って律ちゃんから距離を取ろうとしたが、遅かった。

「ひい……！」

律ちゃんが悲鳴を上げる。

やはり速い。化け物はもうオレの目の前にいて、オレ達を見て笑っていた。

律ちゃんも認識されてしまった。オレのミスだ。

化け物の体がうねうねと動き始めた。まるで捏ね上げられたうどん粉の様に縦に伸び始める。

「ひい……！ ひい……！」

律ちゃんが悲鳴を上げる。

化け物は天井にぶつかりそうなほどに伸び、そしてオレに向かって折り返して落ちて来た。

狙われているのは顔だ。体内に入っごようとしているのか……？

「あ……っ。あ……っ」

後ろから律ちゃんの吐息が聞こえる。

化け物がオレの体に触れる。

寸前に、何かがおレの前に飛来し、光を放つ。

「化け物の絶叫が響き、そしてその絶叫と光が収まったとき、もう目の前からは化け物の姿が消えていた。」

ほとりと、オレの足元に何かが落ちる。

それは……腕の無い熊の縫いぐるみだった。

……？

これもしかして、身代わりアイテムだった感じ？

「えっ……？ えっ？」

背後から戸惑いの吐息が聞こえる。

それはそう。分かるよ。

「だ、大丈夫なん、ですか……？」

「みたいだね……」

足元の縫いぐるみを拾いあげてから、オレは律ちゃんの方に振り返り笑いかけた。

しかしなにを言えば良いか悩む。

どうなんだろう。

状況的には悪い……のかもれない。

もし本当にこの縫いぐるみが身代わりアイテムだとして、だいたいその効果は一度だけ使いきりだろう。そんな貴重なモノが……。本来なら律ちゃんの命を守るために使われるはずだったそれを、もしかしたらそんなものが一切必要ないオレが使ってしまった形になるわけ。

凄いやましい罪悪感がオレの中に溢れる。そうになると、やはりオレは全力でこの子を守る必要があるだろう。

「……ありがとう。この縫いぐるみ、オレを助けてくれたみたいだ」

「そう、なんですね……。この子が、東堂さんを……。あつ……」

律ちゃんの手の中で、熊のぬいぐるみの片腕が、まるで砂が風に吹かれるようにして崩れていく。

「……えっ？ あれ……？ うそ……？」

縫いぐるみに起きた異変。

これはもしてかして……。

オレがそう思ったとき、律ちゃんが慌て始める。  
律ちゃんを見る。

オレの目の前で、律ちゃんの体が徐々に透け始めていた。

「ええ……？」

「えっ、えっ、えっ」

律ちゃんがパニックになったようにそう繰り返す。

「落ち着いて、りっちゃん」

「助けて、東堂さん！ たすけ……っ」

オレは律ちゃんに近づきその体に触れようとしたが、その前に完全に透け、消えてしまった。

ぼとり、と両手を失った熊の縫いぐるみがその場に落ちた。

オレは熊の縫いぐるみを拾い上げてじっと見つめた。

「りっちゃん……」

何が起きたんだろう……。

実は律ちゃんが化け物の同類とかで、オレの何かで消されたとか、嫌な考えが過る。

周囲を見渡す。

人の気配、喧騒。窓から差し込む光。

オレは元の病院に戻っていた。

再び手元を目線を落とす。

オレの手には熊の縫いぐるみが握られている。

律ちゃんの身代わりアイテムらしきもの……。

オレは思った。

——やべえよ持って来ちゃったよ。どうすんのこれ……。

オレは思わず天を仰いだ。

とりあえず縫いぐるみをポケットにしまい、足元に無造作に置かれていた信乃ちゃんたちへのお見舞いの品を手にとった。

周囲を見て時計を探す。時間はそれほど経っていない。体感的には結構な時間あつちにいた気がするけど、時間の流れが違う場所だったんだろうか。雅さんと出会った時も時間の流れが変だったから、もしかして関係あるのかもしれない。でもよく聞く設定でもあるから関係ないかもしれない。分からない。

考えながら歩いていたら、すぐに信乃ちゃんたちの病室についた。悩み事は尽きないけど今は切り替えよう。

——東堂さん、助けて。

……。

病室の扉に手を掛けた時に脳裏を過つたのは最後に見た律ちゃん  
の姿。怯えた表情と声。

今日、忙しいんだけどなあ……。

……。

しょうがない。

行くかあ……。

確か律ちゃんが言ってた県ってここからそこまで遠くなかったし、  
用事を済ませたら病院名を調べてあたってみよう。出費が増えるけど……仕方ないか。仕方なくない。辛い。

「やあ……。おはよう」

挨拶をしながら病室に入り、扉の前で一度止まる。

信乃ちゃんはベッドの上に居て、昨日と同じように傍のパイプ椅子  
に座っている桃香ちゃんに何やら話しかけていたようだけど、オレを  
認識するところを向いて笑顔を見せた。

一方、桃香ちゃんは昨日と同じようにオレを見ると警戒のような、  
敵意のような雰囲気醸し出している。二人ともそれほど変わりはない  
ように見える、けど。改めて思うけど、桃香ちゃん、姿勢良いよ  
ね。

「おー！ ライルくんおはよー！ もーおっせーよ！ 来てくんないかとおもったって！」

信乃ちゃんが満面の笑みで迎えてくれる。

こっちこっちとばかりに折れてない方の手でオレを招く信乃ちゃんに苦笑する。

その怪我って身じろぎするだけでもかなり痛いんじゃないかと思うんだけど。

タフだねえ……。

信乃ちゃんに呼ばれてはいるけど、桃香ちゃんが傍にいたのでオレは物理的に距離を保つ。

病院側の配慮で桃香ちゃんと信乃ちゃんと同じ病室で入院することになってよかった。広めの部屋だからちゃんと物理的に距離を保てる。

「遅いかな？ 面会時間始まってすぐだよ？」

「ぴったりに来てくれよー！」

「それって一秒の誤差も許されないってこと？ 待合室から歩いて来だけでも時間かかるのに、無茶言うねえ。オレは完全無欠のスーパーヒーローとかじゃないんだよ？」

「ええ!? 違うん!?!」

「そこは『そこまで言っていない』とか突っ込むところだよ、信乃ちゃん」  
「そんなことねーよ！ ライルくんはアタシんにとってヒーローだもん！」

「……は。そっか」

信乃ちゃんの返しに少し戸惑ってしまった。

不意打ちを喰らった気分だ。もちろん、いい意味でだけど。

いやあ、慕ってくれているなあ。

信乃ちゃんの好意を感じて、オレも気持ちが悪くなった。

「ありがとう信乃ちゃん。嬉しいよ」

「えへへ」

オレは自然に笑みを浮かべていたと思うし、信乃ちゃんも嬉しそうに笑っている。



一方、そんな元気そうな信乃ちゃんの傍で、相変わらず警戒心にも敵意にも似た近寄りが見たい雰囲気醸し出しているのが桃香ちゃんだ。

「桃香ちゃんもおはよう。昨日はちゃんと眠れたかな？」

物理的に距離を取ったまま挨拶をしたオレに、桃香ちゃんは小さく会釈してくれた。

そんな姿にオレは感心してしまう。そして労しくも思うし、尊敬もする。

昨日、寝る前に桃香ちゃんが患っているらしい緘黙症のことと、昨夜のような事件の被害者との関わり方についてオレなりに少し調べてみた。

やっぱり複雑怪奇な人の心に関わることだし、しかも人それぞれ精神状態が違うから、これっていう解決策を見つけることは出来なかった。だけど、あくまで被害を受けた人がどういう状態なのかを常に配慮して、相手の求める距離感を探り関わって行くというのは共通して言えることだと思う。それは普通の人間関係にも言えることではあるんだけど、さらに繊細かつシビアだよ。

突き詰めていけば、選ぶ言葉、発する声の抑揚、浮かべる表情、手や体の動き、そういうのも全部コントロールしないとならなさそうだし。気を抜いた一瞬の言動が、過敏になっている相手を刺激することになりかねないし。

例えば、コップ。普段なら素手で何気なく持ち上げて、無造作に飲み物を入れて飲む。

それを、手袋を何枚も付けて、用意したクッション材の上に置いて、一滴も水気が溢れないように、決まった量だけを、決められた角度、決められた秒数を使って入れる、みたいな。それをコミュニケーションとしてやる……。

正直むちゃくちゃめんどくせえ……。

だけどそれが必要になるのが今回の件ということだ。

正直に言えば、オレは今日、ここに来るかどうか迷った。もしかしたら一夜明けて桃香ちゃんの状態が悪化しているという可能性も

あつたし、オレの何気ない言動が桃香ちゃんを刺激しかねないという不安もあつたからだ。

緘黙症。簡単に言えばストレスなどで言葉を発せられなくなる状態なわけだけど、これに関しては信乃ちゃんと言葉からして、桃香ちゃんは元々患っていたようだ。

つまり。

桃香ちゃんは緘黙症を患うほどにストレスの影響を受けやすく、またそれほどストレスに元々晒されていた、ということになる。

それでこの状態なのは正直凄いと思う。

状況こそ違うけど、パニックで喚き散らしていた当時のオレを思うと尊敬するよね。

異性も含めて、桃香ちゃんが他の人にどう反応するかオレは知らない。信乃ちゃんはああいう修羅場に慣れてそうで、大丈夫そんな気はするけど……。

これからしばらくの間、彼女たちは同性の医療関係者とだけ関わって行くんだと思う。

どれくらい先になるか見当もつかないけど、いずれ踏み込んだりハビリに移行するって段階に入ったときは、その取っ掛かりとしてオレも協力を求められるかもしれないな。

ある程度までは物理的にも距離を縮められる異性として。そのときはオレも協力を惜しむつもりはない。

きつと病院の人達は今まさに現在進行形で彼女たちの力になるための準備を整えているはずだ。桃香ちゃんのこととは専門家に任せよう。オレなら桃香ちゃんを救えるなんて己惚れるつもりもないし。オレ自身、その方が気が楽だしね。

オレは特に何もせず、付かず離れずの距離感をキープしていれば良いだろう。

懸念があるとするれば……。

そもそも性別に関係なく、人間不信とか、対人恐怖症とかになっていてもおかしくはないってことかな。

もしかしたら男女問わず、オレへの態度こそが『大人』に対しては

一番マシなものだった、なんてことも……。信乃ちゃんへの態度を見てると……。

いや、やめよう。

悪い方に考えるのはやめよう。

それはオレも大変だし、桃香ちゃんにとつてもあまりに辛いことだ。

オレは手に持っていたナイロン袋を持ち上げて言った。

「これ、お土産。アイスは昨日の夜食べたからお休みだけど、バニラ風味のプリンを買って来たよ。お昼の時にでも食べて。桃香ちゃんのもあるから、良かったらどうぞ」

「マジイ?!」

信乃ちゃんは裏表なく嬉しそうだ。桃香ちゃんは……分からないかな。

オレ的には、昨日みたいに信乃ちゃんの介助をしてあげて、という思いを込めてのお見舞い品なんだけど、伝わりと良いな。

昨日、桃香ちゃんが信乃ちゃんの手伝いに遣り甲斐を感じていたようだったから。信乃ちゃんも嫌そうでは無かったから良いかなって。そう言えば信乃ちゃん、今朝のごはんはどうやって食べたんだろう。

さすがに昨日の今日だし、やっぱり昨日みたいに桃香ちゃんが手伝ったのかな？

まあそこはあえて踏み込まず、二人に任せよう。

そしてプリンを冷蔵庫に仕舞っていると、オレの背中から信乃ちゃんの声が掛かる。単純に名前を呼ばただけだけど。

「……。ライルくん」

「なにかな?」

「なんでもねー」

「そう?」

信乃ちゃんはそう言って幸せそうに笑っている。

そして間を置かず、またオレの名を呼んだ。

「ライルくん?」

「どうしたの?」

「なんでもねー!」

信乃ちゃんはやはり嬉しそうに笑っている。

オレが傍にすることが余程嬉しいらしい。

そこまで露骨に好意を向けられるとオレとしても悪い気はしない。

確かにしないんだけど、桃香ちゃんがね……。

よく分からないからね……。

真面目な話をする、これだと疎外感を抱いちゃうだろう。ちらりと桃香ちゃんを見るけど、オレを見続けたまま、相変わらず何を考えられているかは分からない。

「なーライルくん。そういえば聞きたかったんだけどさ、ライルくんってなんでアタシらがあそこにいるって分かったん?」

話題にするのは避けてたけど、あっちから踏み込んできたな……。

しかしライルくんライルくんって、オレの名前を呼ぶのが楽しくてしかたないって感じだ。

それも含めて桃香ちゃん大丈夫かなと思いつつ、信乃ちゃんの質問に答える。

「最近見てなかった暴走族が同じ方向に走って行くところを見掛けてね。家に帰ったら妙なメモだけ残して君はいなくなってるし、もしかしたら何かあったのかなって」

「えー? そんだけで? マジ?」

「そんだけと言えばそうだね」

「すっげえ。名推理じゃん」

「そうでもないよ」

答え合わせは通りすがりのカップルがやってくれたし。

「やー、ライルくんは凄いつて! かけえし! すげーし!」

「分かったよ。ありがとう」

「んふふ」

信乃ちゃんからの褒め言葉を受け取ったら、信乃ちゃんが喜んだ。

……。

信乃ちゃん、今日はやけにオレのこと褒めて来るね。

その意図と理由はいくつか思いつくけど……、ちよつと違うんだよね。

まあ、その辺は不慣れってことで今は見守ろう。  
変化の兆しなのは間違いないだろうし。

今後その辺りで信乃ちゃんが苦勞するようなら、そのときにまた寄り添えばいいかなと思う。

「ライルくん、マジでカッコよかったよ。アタシ惚れ直した」  
しかしストレートにぐいぐい来るなあ。

吹っ切れた感が凄い。  
覚えてるか、信乃。

昨日の今日やぞ。肉体関係断ったん。

でも……昨日みたいに痛々しい求愛よりは全然マシかな。

昨日は本当に追い詰められたんだなあって分かる。見てて苦しかったからね。

「ライルくん」

「どうしたの？」

「好き」

「ありがとう」

信乃ちゃん、これまで堪えていたというか、抑えてたものが爆発してる感じがするね。

お母さん好き！

わたしもよ。

そういうコミュニケーションも経験できてなかったんだろうな……。

「カレシんなってくれる？」

「彼氏にはならない」

「ちえー！ ライルくんなら良いのになー！」

信乃ちゃんはそういうが、その顔は無邪気な様子で綻んでいる。  
好意を伝えられるだけでも幸せって感じだ。

……やっぱりそうなんだろうな。

昨日の言動から考えると、これまで信乃ちゃんが異性から向けられ

て来た好意って、その全部に性欲が直結してたんだらうなって……。好きだからやらせて、みたいな。

確かに信乃ちゃんくらい年頃で、信乃ちゃんが関わっていきそうなそっち系の男となると、まあ……。全員がそうだとはさすがに思わないけど、信乃ちゃんの周りには異性はみんなそうだったんだらうな、と。全部が全部悪いことだとは思わないけど、信乃ちゃんにとっては、その環境はかなり苦痛だったと思う。

信乃ちゃんは母親の異性関係で性に嫌悪感を持つてみたいだし、本質的には人格の承認を求めているようだからね。だからこそ昨日の昼に見せた、オレに対してなりふり構わない信乃ちゃんの様子に深刻さが分かるわけだけ。

性的な意味での『身の危険』を感じず、異性に対して人格的な好意を表現できる環境があまりにも新鮮過ぎて浮かれてるって感じなのかもしれない。反動がかいんだらう。しかも注意すべきなのは、それはそれとして異性としてもオレを本気で求めてそうってこと。

いずれ落ち着いて行ってくるといいけどね。

確かに乱暴な言葉遣いそのままではあるんだらうけど、その節々にあった圧のようなものは無くなっていく気がする。

良い傾向だと思う。

でも、今だけだらうね。

信乃ちゃん個人がどうのっていうより、信乃ちゃんが今みたいな感じでいられる環境が他にないって意味で。家に帰ったら元に戻ると思う。

そういう意味ではケガで家に戻らずに済み、信乃ちゃんの苦しみの元凶とも言える母親と強制的に距離を置けている今の状況は、信乃ちゃんにとって大きな意味を持つのかもかもしれない。

昨日電話で話したんだけど、ホントにクソ親だったし、環境もヤバそうだったもんなあ……。あんなどころに戻ったら体調崩すよホントに。電話してるだけで辛かったからね、オレも。

本当に信乃ちゃんはよく頑張つて来たと思う。

確かにグレてはいたんだらうけど、この子は失くしちやいけない大

切なものをしっかりと守り通してた。

本当は最初から頼って欲しいところではあったけど、あのときはまだ、オレは信乃ちゃんにとっては頼るよりも守るために遠ざけたい対象だったってことだろうから、言っても仕方がない。

でも、そうだな……。うん。それだけは伝えておこうか。

無いに越したことは無いんだけど、万が一、また似たようなことがあったら、この子、骨折れてるのに一人で出て行きかねないし。

「そうだ信乃ちゃん。また似たようなことがあったら、今度はオレにも連絡を貰えないかな？」

「えっ……。それは……」

信乃ちゃんはオレの言葉の意図を理解してくれたようで、悩み戸惑う様子を見せる。

そしてか細い声で呟き始めた。

「できねえよ。迷惑かけちゃうし……。元はと言えばアタシのせいだし……」

その返事は分かっていた。

相談しろとか一人で行くとか、言っただけなら世話はない。強制するつもりもない。

ただオレは信乃ちゃんが心配で、出来れば頼って欲しいと思ってる。だからオレはいつも通り、オレの率直な気持ちを伝えてお願いするだけだ。

オレは信乃ちゃんに穏やかに微笑みかけ、こう言った。

「やつぱり嫌かな？」

「い、嫌じゃねえ！ 嫌じゃねえよ！ だから、迷惑を……」

「じゃあダメ？」

「ダメでもない！ ダメでもない、けど……。でも……だって、だから迷惑が……」

「お願い」

「ええ!? お、お願いって……! でも……」

「頼む。心配なんだよ。それにもう友達だろ、オレ達」

「あう……」

信乃ちゃんの声が段々とか細くなり、やがて途絶える。

オレは静かに微笑んで信乃ちゃんの言葉の続きを待った。

信乃ちゃんはちらちらとオレに視線を送ってくるが、オレは静かに待ち続ける。

やがて信乃ちゃんが恐る恐るといった様子で口を開いた。

深い苦悩の末。ようやく絞り出したといった様子でおずおずと、信乃ちゃんはこう言った。

「いいの……？」

「オレがそうして欲しいんだ」

まあ、オレのキャパを越えそうなら、今回みたいに速攻でコネと国家権力に泣きつくけどね。そのときはオレの方も信乃ちゃんの信頼を裏切らないように、信乃ちゃんにちゃんと可能な限り相談してからするつもりではある。今回みたいな急を要する事態なら問答無用で動くけど。

まあ、それを今言うつもりはない。狡い大人でごめんね信乃ちゃん。

「信乃ちゃん。君が桃香ちゃんのためになりふり構わなかったように、怪我をした君を見てオレも思ったんだよ。君は立派な行動をして、確かに桃香ちゃんの危機に間に合ったけど……。オレは君の危機に間に合うことが出来なかった。……悔んでる」

信乃ちゃんの表情がくしゃり、と歪む。泣かなかったのは成長かな？

それとも、桃香ちゃんの前ってことで意地を張っているのかもしれない。

……。

本当に……。

初対面のときの攻撃性や、昨日の限界まで追い詰められた悲痛に耐えかねて零した涙を見ているオレとしては感慨深いものがある。

でも……潮時かな。

ちよつと長居しすぎたかもしれない。分からないけど、桃香ちゃん



が結構我慢してる可能性もあるし、昨日の話をし過ぎた。信乃ちゃんのおレへの態度もそうだし、今日は切り上げた方がよさそうだな。

オレは立ち上がり、桃香ちゃんの方を見る。

桃香ちゃんはやっぱりオレの方を凝視している。変わった様子はない。

「桃香ちゃん」

声を掛けると桃香ちゃんは僅かに身を竦めた。

物理的に距離を取ったまま、オレは桃香ちゃんに微笑みかけ、小さく手を振った。

「今日はもう帰るけど、君も何かあれば教えてね？ 食べたいものとか。メモ書きを渡してくれるだけでいいから。それと、ゆっくり休んで」

「え、もう帰んの!?!」

信乃ちゃんが反応する。

「うん。今日は用事が立て込んでいてね。急ぎなんだ。ごめんね」

「じゃあ、明日は?」

「……。努力はするよ」

「来てよ!?!」

「努力はするから」

無茶言うなあ。

内心でそう思い、苦笑した。

しかし……、信乃ちゃんは桃香ちゃんの状態を理解していないんだろうか。

桃香ちゃんは明らかに緊張している。

信乃ちゃんはオレより桃香ちゃんとの付き合いは長いはずだけど、あんまり桃香ちゃんへの気遣いを感じられないんだよね。

まあ……信乃ちゃんがその辺の機微に疎いと言われれば、失礼ながら納得しちゃうところではあるんだけどね。もともと気遣いが出来る子じゃないってのは昨日の昼の件で分かってるし。人の家でふんぞり返る様などころもあるし。

ほんとこの子たち、どんな関係なんだろうな……。佇まいという

か、座っている姿勢だけでも、桃香ちゃんの教養は感じ取れる。

失礼な考えだけど、桃香ちゃんと信乃ちゃんに仲良くなるような接点が……。

学校の友達って感じはしないしな……。タイプが違い過ぎるし。幼馴染とかなのかな？ 違いそうだけど。

気になることは多い。でも今は二人のことは深掘りしないでおう。思わぬところで地雷を踏みかねない。

簡単に挨拶を終えてそそくさと退散したオレは病院の人と改めて話をした。まだ病院側も信乃ちゃんたちと深い話は出来ていないらしい。本来なら信乃ちゃんも面会謝絶の怪我らしいんだけど、短時間ながらオレが病院側と話し合いをする前に面会を許可されたのは、信乃ちゃんが強くオレを求めていたからとのこと。桃香ちゃんもオレが病室に入るのを許可してくれたらしい。

桃香ちゃんも？

それは意外だったな。

というか信乃ちゃんそんなヤバイ状態であんなにはしゃいでたの？

タフ過ぎるでしょ。

ある程度、彼女たちの今後のこととオレの立ち位置を話した。

要約すると、オレは今の距離感を保つていればいいって感じかな。事が事だから病院側も慎重に進めたいようだ。オレとしてもありがたい。信乃ちゃんとの繋がりを保ちつつ、さっさと制度とか事務的な面倒くさいことは全部弁護士の方に丸投げすればいいだろう。

二人の親について聞かれたのでオレの持つている情報は渡したけど、連絡先は本人たちから聞いてほしいと断って置いた。勝手に教えて信頼を損なっても嫌だし。嫌な顔をされたけど、そのために一時的な保証人になったんだから文句は言わないで欲しい。こつちだって相応の覚悟を持って、彼女たちを守るために引き受けたんだから。

病院で話を終えたあと、病院前でタクシーを拾う。昨日刑事さんから貰った連絡先に電話をかけ、今日は行けなくなつたと伝えた。事情を聞かれたが、「すみません。次は絶対行きますから」と謝って電話を

切る。

タクシーの中、弁護士先生にまた日を改める連絡を入れる。平謝りである。

通話を終え、すぐに別の連絡先にかける。

桃香ちゃんの親御さんだ。

結果から言えば、今日の夜には少し時間が出来るから病院に行くとのことだった。

とりあえずそれには安心した。ホントは今すぐ行けよ思うけど。

通話を終え、すぐに別の連絡先にかける。

信乃ちゃんの親だ。

出なかった。昼夜逆転してそう。

オレは乱暴に通話終了のアイコンをタッチした。

少しだけ肩の力を抜く。

流れる景色を窓から覗き見る。

今朝は緊急車両の出動が多いようだったけど、今は特に見掛けない。

家に着いたので代金を払ってタクシーを降る。タクシーの運転手さんに残っていて欲しいと伝えてから家に入り、改めて遠出の準備を整える。

外に出てタクシーに乗り込む前に、茶都山家のチャイムを押した。

反応はない。

もう一度押す。

やはり反応はない。

誰もいないようだ。

気になる。

実際、茶々ちゃんが行方不明なのだとなれば大事件だ。

しかも茶都山家の人の姿も確認できていない以上、もしかしたら一家全員が事件に巻き込まれている可能性すらあるのか……。

事件の発覚を早めるという意味でも、一度確認しておいた方が良いかもしれない。

オレはタクシーに乗り込み、茶々ちゃんが通っている小学校へと向

かった。

小学校の前で下車し、タクシーの運転手さんにはまた待っていて欲しい旨を伝え、学校の事務窓口を訪ねる。

「え？ それは確かなんですか？」

「ええ。茶都山茶々という名前の子供は本校には在籍していませんでした」

身分証を見せ、事情の説明をすると共に茶々ちゃんの出席確認を求め、その結果を待っていたオレは、事務窓口の向こう側から届いた答えに耳を疑った。

来るところを間違えた……？

いやでも、確かにここだったはずだ。

「あの。本当に確かなんですか？ 最近転校して来た子のはずなんです」

「確かです。今年度、本校には転入児童はおりません」

「そんな……。では、瑠璃川瑠璃という子は在籍していますか？ その子は茶都山さんの友人なんです。その子に聞けば何か分かるかもしれない」

そう伝えると事務員さんは席を外した。上の人と話をしているのかもしれない。しばらくして戻って来た事務員さんはどこか警戒している様子でオレにこう言った。

「瑠璃川瑠璃という児童も本校には在籍しておりません」

「そんな……まさか……」

「失礼ですが……その子たちの在籍校は、確かに本校でお間違いありませんか？」

「……。もう一度確認してみます。お時間を取らせてしまつて申し訳ありませんでした。失礼します」

「いえ……」

オレは困惑している。

事務員さんも困惑しているようだ。

去ろうとしたオレに、事務員さんが言った。

「あの、もし本当に子供が行方不明なら、警察に相談してはいかがで

しょう?」

「そうですね。おっしゃる通りです。ご助言感謝します」

オレは事務員さんに一度頭を下げ、背を向けた。

学校の正門を過ぎ、待っているタクシーまで歩く。

保険証、免許証、学生証。

オレは三種の神器ともいえる身分証のすべてを提示した上で、子供が行方不明になっているかもしれないと、学校窓口に相談をした。さすがに不審者扱いをされて情報を伏せられている、ということはないと思いたい。

本当に、オレが学校を間違えたのか?

タクシーの運転手さんに、東堂家に向かってもらうようお願いする。

もう一度、茶都山家を確認しようと思ったからだ。

……出費が痛い。車、いや、バイクとか買おうかな……。

しばらくして東堂家の前につく。

何の変哲もないというところと豪勢すぎる一軒家が隣ある。特に変わっていない。見慣れた外観だ。

「おや、ライル君。タクシーに乗ってお散歩かい?」

「こんにちは。お爺さんもお散歩ですか?」

茶都山家を見上げていたオレに話しかけてきたのは近所のお爺さんだった。

タクシーに乗ってお散歩とは一体。

まあ、ジジイジョークだろう。

丁度いいと思つて、茶々ちゃんについてお爺さんに聞いてみることにする。

「あの、茶々ちゃん見かけませんでした?」

「ちやちやちや?」

耳が遠いのかな?

「いえ、茶々です」

「お茶?」

「いえ、お茶じゃなくて、茶々ですね」

「ちやちやがちやちやでちやちやちや?」

「楽しそうで何よりです」

オレは今日、忙しいんです。

にこり、とオレはお爺さんに笑いかけた。

お爺さんはほっほと楽しそうに笑うと、こう言った。

「で、なんだっけ?」

「茶々ちゃんです。ここの家の女の子の。用事があつて探しているんですけど、昨日の朝から会えていなくて。ご存じでしたら教えていただけないかな、と」

「……?」

オレの質問にお爺さんはさつきまでのふざけた様子もなく、不思議そうに首を傾げた。

そのとき、オレの中に正体不明の嫌な予感が生じる。

お爺さんは言った。

「この家、前の人が出て行ってからずっと空き家じゃあなかったか?」

「……なるほど」

ちらと表札を見る。言われるまで気づかなかつた。そこには何も記されていない。オレは天を仰いだ。

「ありがとうございます。用事があるので失礼しますね」

オレはお爺さんに小さく頭を下げて、待たせていたタクシーに乗り込み、穏やかにこうお願いした。

「駅までお願いします」

もう、駆け抜けるしかない。

乗り込んだタクシーの後部座席の背もたれに体を預け、車の天井を見上げた。年季を感じるものの不潔な感じはしない、何の変哲もないタクシーの内装だ。

「お客さん、いそがしいね〜」

「はは、そうですね。オレもそう思います」

運転席からタクシーの運転手さんが話しかけてきた。当たり障りのない返事をして、オレは肘で太ももを支えるような態勢で前屈みに座り直す。

また何かが起きている。

分かっているのは、茶々ちゃんと瑠璃ちゃんの……消失？

茶々ちゃんのご両親がどうなっているかは分からないけど、多分、巻き込まれてそうな気はする。

しかも小学校の事務員さんの言葉が正しいなら、学校の書類やデータベースからもその痕跡が消えているわけだから、かなり質が悪い案件だろう。人の記憶を消すなんてレベルじゃねーぞ。現実改変とか過去の改ざんとか、物語のクライマックスなレベル。

何か大きいことが起きている。

それは分かる。

でも見方を変えれば、そこそこの付き合いがあつたお隣さんが蒸発しただけでも言えるのが難しいところだ。周囲は認識すらしていないみたいだけだ。

それはそれで確かに大事件なのは間違いないんだが、明日香さんのときと同じと言えば同じにも思う。

「同級生が突然引越した」とか「会社の同僚がある日突然退社した」とか、フラットに見ればそれくらいの話ということだ。

家庭の事情かな？ どんな事情だろう？

そんな疑念を抱いたとしても、そこからわざわざ相手の住所を調べて訪問したり、探偵を使って調べたりはしない。

深く踏み込んだとしても、担任の先生や上司、他の同僚に話を聞くくらいだろう。もしそれで疑問が解決しなかったとしても、自分が送るべき日常の中に居続ければ、やがてはその人のことや急に会えなくなった寂寥感なんかは薄れ、忘れていく。それが普通だ。人には人の暮らしがあつて、身内とか余程親しい間柄でもなければ、わざわざ藪をつつきにはいかない。

これで誘拐されているところを見たとか、事前に相談されてたとか、そういうのがあればオレも動きようはあるんだけど……。

葵さんが何か知つてそうだが、そもそも葵さんとコンタクトを取るために茶々ちゃんを探していたわけだし、八方塞がりだ。

だから迷いを抱きつつも、オレは茶都山家の異変の究明を保留し、駅へ向かう選択をした。

律ちゃんに関しても、オレが出来ることは多くない。それは分かつてる。

律ちゃんが言っていた病院に着いたところで個人情報なんて教えて貰えるわけもないし、出来ることと言えばさつき小学校でオレがやったくらいのことだろう。それでもわざわざ現地へ向かうのは電話だと悪戯と思われて取り合つて貰えないと思つたから。そして助けを求められた大人としての義理だ。

その後のことは任せるしかない。

多分病院の方から律ちゃんの保護者に連絡が入ればそれでいい。律ちゃんの安否によつては警察も介入してくるだろうから、そのときは目撃者として事情聴取を求められるかもしれないけど、それ以上オレが関与する余地はない。その辺りがオレが関われる限界だろう。

……。

駅に着いたオレは膨れ上がったタクシー代を払い、軽くなった財布に哀愁を感じながら、今日一日を長く共にした車両に別れを告げた。改札口に近づき、その傍に在る販売機で切符を購入する。大学に行くときも使っている駅なので特に困りもしなかった。

そして切符を改札機に通し、改札口を潜る。

……。



またか。

帳が降りる。

突然訪れた静寂、人の気配と人工の光が消え失せ、赤みがかった月光だけが照らす夜を、どんよりと湿った空気が満たしている。

オレはまた明らかに普通からズレた世界に踏み込んでいた。

ここは多分、今朝の病院と類似した場所だと思う。

だけど病院ではない。そして駅でもない。

街だ。

見慣れない街。だけど周囲にはビルやショッピングモール、広い公道など、都会的な要素は見当たらない。

目の前にはアーケードと呼ばれる、アーチ形の屋根を仰ぐ一本道が続いている。

アーケードは放置されて久しいらしく、金属の枠組みだけが残る有様で、屋根としての機能の大半を失っていた。目の前に伸びる一本道には屋根の素材だったと思われるガラス片やプラスチックが散乱している。一本道の左右には錆びたシャッターが降りた個人店跡地が隙間なく並んでいて、この場所に長い間、人の手が入っていないことを如実に表していた。

捨てられ、朽ちた商店街。

それが、今オレのいる場所だった。

「本当に……こんなの普通なら頭がおかしくなるところだよ」

一つため息を吐く。

一日のうちに三度も、「気が付いたら知らない場所にいた」なんて意味不明な事象を体験した。さすがに、自分の記憶の連続性を疑ってしまいそうになる。例えば、オレが若年性の認知症を発症していて、実は自分でここまで来たけどその記憶が飛んでいるだけ、なんて可能性だ。だけどオレの中ではもうその説よりも、「また異変に巻き込まれた」という説の方が信ぴょう性が高い。

最近までこんな非現実的なことが起こるなんて思ってもおらず、「異変」が生じてもなんとかそれをオレの信じる一般常識に当てはめようと頑張っていた数日前に比べたらとてつもない変化だと自分で

も笑ってしまふ。

だけどそれはもう良い。

オレももう納得していることだ。

ただそれはそれとして、気になることがある。

実感は全くないが、これまでの体験から推測するに、どうやらオレには「異変に対してかなり強力な抵抗力」が備わっているらしい。

それは襲って来た化け物が吹っ飛んだり、皆して忘れていたことを覚えていたり、張ってあつたらしい結界をすり抜けちゃったりと、オレ自身の経験や周囲の証言からして間違いないだろう。

だから混乱する。

歩いてるときに無意識に結界をぶち破って入り、変なところに入り込んでしまうまでは分かる。それはそれでぶっ飛んでは思うけど……。

世の中には、学校のクラスメイトや先生、同居している家族が全員インフルエンザに感染してるのに一人だけ全く感染する気配が無いというような人間もいる。オレが異変に対してそういう人間なのだと考えれば納得は出来る。

だけど今回の件はそれだと説明がつかないというか……。律ちゃんとお出会った場所がどういう場所なのかは分からないけど、律ちゃんの言葉が正しいなら、オレと律ちゃんは全く別の場所からあの場所に迷い込んでいることになる。

それが引つかかるんだよね。

まあ、今朝の廃病院もこの場所も、オレが直前までいた場所にもともとあったもので、オレは例の如く結界みたいなものを無意識にぶち破って侵入し、律ちゃんも超常現象の力で遠くから引き寄せられたと考えたら筋は通っているか……。

「とりあえず行くかなあ……」

考えていても仕方がない。

思考の終わりを口に出し、気持ちを切り替えて周囲を見渡した。

正面には潰れた個人店が立ち並ぶ、終わりを迎えた商店街の道が真っすぐに伸び、後ろを振り向けば暗い濃霧が行く手を阻んでいる。

帰るならば、濃霧に突っ込むのが良いと思う。多分帰れるんじゃないかな。

でもここがもし今朝の病院と似た場所なら、もしかすると律ちゃんがいるかもしれない。もともと他県にまで行こうと思っていたところだから、ここで律ちゃんに会えるなら有難い。

オレは周囲を警戒しながら、打ち捨てられた商店街へと足を踏み入れた。

歩きながら周囲を見渡すと、シャッターの降りていない店舗をいくつか見掛ける。

とはいえ営業などしているわけもない。かつては食べ物を販売していたと思われる店の品物台に乗っているのは、どこから飛来したのかも分からない落ち葉くらいなもの。かつては賑わい、所狭しと食品が並んでいただろう品物台は埃を被り、眠りに就いている。

少し上を向けば、辛うじて文字を読み取れるような状態のぼろ布と化した横断幕が掲げられている。笑顔、という文字は分かるけど、こんなところで笑顔なんて浮かべられるわけもない。恥を知れ。

捨てられた古い自転車が転がり、目につく看板は錆び果て本来の色を失い、変色した発泡スチロールが散乱している。

趣があるな……。

ふと、暗い道の先に人影が見えた。

オレは静かに建物の影に身を寄せ、覗き込むようにそれを見つめた。

人影だ、ということには分かった。だけど人ではないということも分かった。

その人影は確かに人に近い形をしていたが、明らかに頭部が大きすぎた。まるで中身がパンパンに詰まったゴミ袋のような大きさの頭部をふらふらと揺らし、佇んでいる。

「どうしたものかなあ……」

小さく呟いた。

本当に、はつきりさせて欲しい。確証が欲しかった。オレがあらゆる異変に対して強い抵抗力を持つ、という確証が。なら意気揚々と無

人の野を行くが如く進むのに。

普段あらゆるネコ科の動物からやけに好かれるからと言って、サバンのライオンにも同じように抱き着くなんてことはしないだろう。一頭二頭は例に漏れず懐いてくれるかもしれないけど、普通に噛みついて来る個体もいるかもしれないし。確証さえあれば……。

身を潜めて待つてはいるが、どうにもあれは動く様子がない。

……。

もしかして迂回しろってことか？

ふと思いつき、辺りを見渡した。少し歩いた先に横道がある。そこを通れば進めるかもしれない。

足に押し掛かる負担を感じながら、コサックダンスの様な動きで身を屈めて横道へと向かう。足元の障害物に気を付けながら横道へと辿り着いた。

商店街の廃道よりもさらに細く、そして不衛生な裏道だった。恐らくかつては海産物を運ぶ際に使われていたのだろう。道の端に打ち捨てられている汚れの付いた発泡スチロールには生臭い匂いが残っていた。

暗い細道を歩く。

道なりに進む。途中の曲がり角を曲がる。

十字路に辿り着く。

正面の道の先に、薄っすらと何かの影が動くのが見える。

右の方は暗くて何も居ない。

商店街がある左方向の道の先には家屋があつて、裏口と思しき扉が半開きになっていることに気づいた。

人が居ると思えないけど、とりあえず入ってみることにする。

「お邪魔しますね」

年季の入った扉は錆びびついているのか重かった。ドアノブを回すと嫌な音がする。

足元を見る。

当然靴なんて置かれていない。

式台に足を乗せる。土台が腐っているのか、大きく軋む。

忍び足をして、それもそれは変わらなかった。

携帯を取り出し、ライト機能をONにする。

周囲を照らした。

勝手口だったようで、入ってすぐに台所があった。蛇口は錆びきつていて、シンクには水気はもはや残っていない。すぐ傍に置かれた水切り箱の中には湯呑が二つ逆さまに置かれている。その向こう側のコンロは油でぎとぎとだ。コンロの奥にある窓ガラスも張り付いた油で濁り切っている。

背の高い四角いテーブルと、足の長い三つの椅子が目についた。老朽化しているようで、座ったら壊れてしまいそうだ。テーブルの上には筒状の箸入れと急須、半球状の小さな虫よけネットがある。虫よけネットの中に置かれているお盆の上に何かが置いてある。

カギだ。

ネットを避けて鍵を手取る。鍵は錆びついている。

……。

なんか……。

なんかだよね……。

ここで誰かが生活していたというのは間違いなさそうだが、それももうずっと前のことのようにだ。

シンクの引き出しを開ける。菜箸やお玉などの生活用品が入っている。少し離れた食器棚に近づいて木製の扉を開いた。

……。

懐中電灯か……。

オレは棚の上に置かれていた懐中電灯を手を取った。

スイッチを入れるとちゃんと点灯する。携帯を仕舞い、懐中電灯で部屋を照らした。

開いたままの扉が目に入る。奥に廊下が続いているようだ。

床の軋む音が気になるが、奥に入り込む。

廊下に面する部屋の扉はだいたい開いている。だけど一つだけ、ぴつたりとしまった引き戸が目についた。なにかあるのかもしれない。

近づいて引き戸を開く。いちいち音が鳴るのは気に入らないが、仕方がない。

引き戸の中は脱衣所だった。ガラスが割れた洗面台の横には古い型の洗濯機。洗濯機の中を覗いた。服が入っている。臭そうだと思った。

隣には曇りガラスの扉。

浴室だろう。

取手に手を掛けて、捻る。

固い。

……錆びて動かないのか？

それとも鍵が掛かっている？

さつき拾った鍵を取り出し、ドアノブの近くに持っていく。

違った。そもそも鍵穴が無い。

それはそうだ。普通、浴室の鍵を外から掛けることは無い。

がちやがちやとドアノブを動かす。

中から鍵が掛かっているのは間違いないと思うんだけど……。

そう思っているとドアノブが外れた。老朽化したドアノブはオレ

の圧に耐えられなかったらしい。

きい、と小さく音を立てて扉が開く。

浴室をライトで照らした。

……何かいる。浴槽の中だ。

オレは浴室の中に入り、ライトで照らした。

浴槽の中で何か小さく丸まって揺れている。いや、震えている？

人だ。

頭を抱えるようにして、小さく丸まっている人の背中が懐中電灯の

光によって暗闇の中に浮かび上がった。

カタカタと震えている背中、髪。

オレの位置からはそれくらいしか分からないが、あの制服は多分そう。

「……りっちゃん？」

オレの呼びかけにびくりと体を震わせた背中は、震えたまま起き上

がり、ゆつくりとぎこちない動きでオレの方に顔を向けた。  
間違いない。

藤砂律ちゃんだ。

恐怖で蒼褪めた顔色はすこぶる悪く、限界まで開かれた瞳は小刻みに揺らぎながらオレを凝視している。

オレは律ちゃんを見て安堵し、同じように安心して貰いたくて、微笑んでこう言った。

「助けに来たよ」

別に助けに来たわけではないけど。いや、助けには来たか。会えたのは偶然だけだ。

オレの言葉を聞いた律ちゃん表情は最初こそ理解できないのか変化はなかったが、急にへにやりと眉が歪んだ。

「ふ、ふふ……ふふ……ふふ……ふふ……」

律ちゃんが急に笑い出す。

これもしかして律ちゃんじゃなくて化け物の擬態か……？

そう思ったオレだったが次の瞬間ぼろぼろと泣きだしたので察した。

どうやら安心と恐怖の大怪獣バトルが律ちゃんの中で起きたせいで情緒がぶつ壊れたらしい。

「えへ、えへ、えへええええ」

喉を鳴らすように笑いながら、涙は止めどなく流れ落ちている。

余程怖かったようだ。可哀そうに。

律ちゃんの笑いはやがて収まり、嗚咽だけを漏らすようになった。

オレはそれを見守る。

……。

しかし暗い浴槽の中で号泣する女の子と、それを懐中電灯で照らすオレという構図ってどうなんだろうなと思いつつ、律ちゃんが泣き止むのを待つ。

「大丈夫？ 落ち着いてきたかな？」

「はい……。すみませんでした……」

「いいよ、謝らなくて。仕方ない仕方ない。それだけ怖い思いをし

たつてことだからね。それに、泣きたいなら泣けばいい。むしろ泣いた方が良くも。なんと言っても、泣くとスッキリするからね」

「……ふふ。優しいですね、東堂さんは」

「そうかな？　そう言つて貰えるのは嬉しいよ」

律ちゃんは浴槽の中で小さく微笑んだ。

オレは律ちゃんに背を向けて浴槽の縁に座っている。

オレは端的に事情を説明した。

あの後元の場所に戻つていて、用事があつて駅に居たらいつのまにかここに居た、と。

「律ちゃんはどうしてここに？　あの後、何があつたの？　聞かせて貰える？」

「……。わたし、東堂さんと別れた後、変な商店街にいたんです。怖くつてしばらく動けなくて……」

「うん」

「黒い靄みたいな方に行こうとしても、気づいたら元の場所に居て……。気づいたら靄がどんどん近づいて来てて、それで……」

「商店街の方に行かざるを得なくなつたんだ？」

「はい。そしたら変なのがいって……。でも、東堂さんのことを思い出してすぐに隠れたんです」

オレの言つてたことを、つてことだと思う。

良かった。

役に立ててたみたい。

「でもまた発作が来て……こわくつて……動けなくて……」

薄っすらと律ちゃんの声が震えて来る。

あえて見えてはいないけど、多分また涙ぐんでいるんだと思う。

「うん……。大丈夫だよっちゃん。今はオレがいるからね。懐中電灯もあるよ」

懐中電灯があるからなんだという話だけど、意味不明なことを言うことで律ちゃんの気が紛れば良いなと思つてのことだ。恐怖で支配されそうな律ちゃんの心の中に「なぜに懐中電灯……？」となんてしようもない疑念を少しでも混ぜられればいいなつて。



「…………。ふ…………。つ。そ、それで…………その、動けるようになって、進もうと思ったんですけど…………変なのがやっぱりいて、それで脇道に入っ…………。そしたらまた奥に…………つ、変なのが…………」

「大丈夫だよ。だーいじょうぶ。落ち着いて落ち着いて。ゆっくりゆっくり。無理して言わなくて良いからね」

あつけらかんとした口調を意識して語り掛ける。

律ちゃんは荒い息を一生懸命深呼吸に変えながら言う。

「だ、大丈夫です。それで…………近くの家に…………ここに逃げ込んだんです。でも変な音が近づいてきて、奥の扉の方に行っただんですけど、開かなくて…………。それで、ずっとここに…………」

「なるほどね…………。ありがとう。大変だったね」

律ちゃんの状況や持っている情報はオレとそれほど変わらないようだ。

ただ律ちゃんはオレと離れてすぐにここに来ていたようなので、もう半日以上こんなところに一人でいたということになる。辛かったろうね。

オレももつと早くに来られれば良かったんだけど、どうしても用事があったからな…………。申し訳なく思う。

ふと思いつ出した。

「あ、そうだ。これ…………返すよ」

「あ、この子…………」

オレは両腕の無い熊の縫いぐるみを取り出して、律ちゃんの掌の上に置いた。

律ちゃんは大切そうに縫いぐるみを掌で包み込み、縫いぐるみを見つめた。

「もしかしたらこの子はりっちゃんを守ってくれるかもしれない」

「その、さつき東堂さんを守ったみたいですか？」

「うん。だから肌身離さず持っていた方がいいかも」

「…………分かりました。そうします」

「縫いぐるみに関してはやっぱり…………？」

「はい。まだなにも…………ごめんなさい…………」

「そっか。仕方ないね」

新しい情報は無し。

しかしどうしたものか。

困っているんだけど、律ちゃんを不安にさせたくないから困っていることは隠しておきたいし。

「りっちゃん。しつこくて申し訳ないんだけど、このことで他に何か気になることってないかな？ この家のことでも、他の建物のことでも、道の途中に何かがあったとかでも良いんだけど」

「えっと……。そういえば、台所になにかの鍵がありました。網の籠？ の中に……」

「ああ、虫よけネットのこと？ 確かにあったね」

持って来てるし。

オレがポケットから鍵を取り出そうとしている間に、律ちゃんが続けた。

「ただ、その虫よけネットが動かさなくて……。ぴったりテーブルにくっついてるといふか、変な感じで……。不思議な力で動かなくなってるみたい……。あ、それ……！」

律ちゃんの話を遮るように取り出した鍵を見せると、律ちゃんは驚いた様子で目を丸くした。

「ど、どうやって……？」

「いや、普通に取って来ただけなんだけど……」

「そうなんですか……」

律ちゃんはよく分かっていない様子でそう呟いた。

オレもよく分かっていない。

……。

もしかして……。

「りっちゃん、さっきこの家の奥の扉が開かないって言ってたけど、それって鍵が掛かってるってこと？」

「いえ、鍵は開けたと思ったんですけど……。ごめんなさい。よく覚えてないです……」

「そっか。ちよつと行ってみるよ」

「あつ……わ、わたしも、じゃあ……」

立ち上がったオレにそそくさと律ちゃんが付いて来る。

ぴったりとくつついてくる律ちゃんの分も合わせて、二人分の足音が暗い家に響く。

問題の扉の前に来た。

鍵は確かに開いているようだ。

オレはドアノブを回す。

普通に開いた。

「お、開いたよ?」

扉の外をライトで照らす。小さな板間があつて、奥には商店街の通りが見える。どうやら小売店の店先のようなだ。

「少し待っててもらえる?」

店先に出て、物陰に隠れて商店街の道を覗き込む。

さつき見た頭の大きい化け物がゆらゆらと佇んでいるのが見えた。

律ちゃんの元に戻り、こう言った。

「律ちゃん、頭が大きいかぼちゃみたいな化け物って分かるかな?」

「はい。分かります」

「その裏手に出たみたい」

「そうなんですか……?」

律ちゃんはオレの言葉の意味をよく分かっていない様子だ。

だけどオレは何となく察していた。

オレは思った。

——これショートカット開通しただろ。

律ちゃん曰く、何故か開かなかったという扉は、オレが開けるともたやすく開いた。

扉を動かす方向を間違えていたとか、律ちゃんがパニックになっていたせいでドアが開かないと思いついていただけという可能性もあるけど……律ちゃんの言葉を疑う気はない。

無いからこそ、気分的には「オレ、またなんかやっちゃいましたあ？（クソでかため息を添えて）」って感じた。

オレがなにかをやったのか、やってないのかが本当に分からない。なんならいつそ、もつと分かりやすく音やエフェクトを出して教えて欲しいと思う。

本当に何の抵抗もなく開いたから、律ちゃんから「この扉が開かない」と事前に聞いていなかったら気にもしなかっただろう。

まあでも道が開けたのは良しとしよう。

この家の反対側に伸びていた暗い十字路の先に何があったのか、化け物の姿が見えた道の先には何があったのか、それは気になるところだけど、今のところ行く必要は感じないかな。

とりあえずは商店街の探索を優先して、何も分からなければ戻って来ようと思う。

「りっちゃん、オレ達はまた化け物から身を隠しながら、元の場所に戻る方法を探すことになるわけだけど……」

こくこく、と律ちゃんが素早く首肯する。

「りっちゃんはどうしたい？ オレに付いて来るか、ここで待つてるか……」

「え……っ？ そんな、っ、連れて行ってください！ お願いします……！ お願いします……！」

律ちゃんは軽いパニック状態だ。焦燥感を押し出しながら、泣きそくな顔で縋りついて来る。

「落ち着いて落ち着いて。大丈夫。もちろん、りっちゃんを置いて行くつもりはないよ。ただ……きつとこの先にも化け物が出てくると

思うんだ。もしかしたら……今朝みたいに襲われることもあるかもしれない。そう考えると、この家に居た方が安全なんじゃないかと思っただけ……。実際、オレが来るまで隠れられていたわけだからね。もちろん、脱出の手掛かりが手に入れば必ず迎えに来る。決してりつちやんを置いて行ったりはしないよ。その上でここに残るかオレと一緒に行くかを考えて欲しいんだ」

「……」

律ちゃんは苦しそうに眉を寄せている。酷く悩んでいるようだ。

彼女にとつてはどつちも地獄だろうな、とは思う。

確かにオレと一緒に行くよりはここに残った方が安全かもしれないけど、いつまでもここが安全という保証もないし。

そもそもオレが無事にここに戻れる保証もない。

化け物に襲われて殺されてしまったり、身動きが取れない状況になったり。意図してそんなことをするつもりは毛頭ないけど、律ちゃんを置いて一人で帰るような事態が発生する可能性だってある。実際、今朝は凶らずもそうなつてしまったわけだし。

そうなると律ちゃんは二度と戻らないオレを一人待ち続けることになるわけだし。いなくなるならせめて目の前の方が良いかなとは思う。そしたら諦めもつくだろう。可哀そうだけど、それに関してはオレにもどうしようもないから許して欲しい。

律ちゃんの答えを待つ。

「ひとりはいやです……」

消え入りそうな声で言った律ちゃんの苦悩は察して余りある。どつちも嫌なんだろうな。それはそうだ。今この瞬間に、すぐにでも暖かい我が家に帰りたいたいに決まってる。それでもどつちかと言えばオレに付いて来る方が良いという判断を下したようだ。

オレは律ちゃんの肩を優しく叩く。

「分かった。一緒に行こう。大丈夫。オレが必ず守ってみせるから」  
自分でも気障なことを言ったと思う。

必ずだとか守るだとか、そういう言葉をオレはあまり好まない。

必ず、なんてことを言ったところで責任は取れないし、一人を守

るということとは本当に難しいことだ。

だから本当は使いたくなかったんだけど、そんなことを言っている状況では無い。今は多少の信条を曲げ、演じてでも、律ちゃんを安心させてあげたいと思った。

言ったからには可能な限り努力はするつもりだけどね。

「と、東堂さん……」

オレを見上げている律ちゃんの瞳が恍惚に潤み出す。

ほお、とその艶やかな唇から漏れる吐息には艶めかしい熱が混じっているように感じた。

いわゆるメス顔だった。

いや、失礼。非常に失礼な思考だった。それはオレも重々承知している。

だけど、サブカルチャーに汚染されたオレの思考は反射的にそんな単語をはじき出してしまった。

オレが今そんなことを考えているだなんて律ちゃんは思いもしないだろう。そして悟らせるつもりもない。

オレは律ちゃんに安心して貰えるように、努めて笑顔を絶やさないように努力している。律ちゃんの瞳の中には、そんなオレの顔がしっかりと映っている。

目と目が合う。見つめ合うオレと律ちゃん。やがて律ちゃんはゆっくりと瞼を閉じるとオレの胸板に頬を当て、腕を体の内側に寄せるようにして小さく纏まり、身を寄せてきた。

オレは肩に手を置いて、そんな律ちゃんをゆっくりと引き離す。

目を開いた律ちゃんは哀し気にオレを見つめて来るが、オレは困ったように笑うことで律ちゃんの無言の訴えを有耶無耶にすることにした。

気持ちは分かるし、オレも律ちゃんは魅力的な女の子だと思う。好きなことに対する熱い語り口とか、友達のことを話するときの友達大好きオーラとか、オレとしても律ちゃんへの好感度は高い。

だけど残念ながらそれとこれとは話が別だ。この異変を乗り越え

ればもう会うこともないだろう。今は吊り橋効果で高揚しているんだらうけど、そこに付け込んでしまえば、いずれそれが冷めたときに傷つくのはこの子だ。それこそ責任が取れない。関係ないと放って置いてもいいんだらうけど、それはオレの心情的にちよつとね。

「りつちゃん、一度家に戻ろうか？ 少し話でもしよう」

「……え？ はい……。分かりました……」

律ちゃんは不思議そうに小首を傾げた。

オレは意味ありげに微笑んで律ちゃんの手を引き、家の中へ戻る。勢いで探索に進んでも良かったんだけど、半日以上もの間一人で恐怖に晒されていたから、心構えをして貰うという意味でも、もう少し心を落ち着かせる時間があつた方が良くと思つたからだ。

そしてどこかに腰を落ち着かせようかと家の中に戻つた訳だけど……居間も和室も床板や畳が腐敗していてまともに座れそうもない。というか、座りたくもない。なので仕方なく浴室に戻り、浴槽の縁に腰を下ろそうと考えたんだけど……。

「え、あの、あそこはその……止めておいた方が……」

いやに真剣な様子の律ちゃんに、浴室に戻ることは拒否されてしまった。さつきまでいたのに？ 妙だな……。

「どうして？ たぶん、あそこが一番安全だと思うんだけど……」

「そ、そうかもしれないですけど……。でも、ダメなんです……。だ、だめなんです……」

要領を得ない律ちゃんの答えに疑問を抱くが、そこまで拒否されてはオレとしてもどうしようもない。

「……？」

「その、もう行きましょう？ やっぱりわたし、あんまりここに長居したくないというか……。わたしはもう大丈夫なので。はい……」

律ちゃんが言った。目が泳いでいるのは気になるけど、言い分には納得する。

一人で半日以上もの長い間こんなところにいたんだ。早く家に帰りたいと思うのは当然だ。律ちゃんの為と思つての提案だったけど、本人に意欲があるなら……。

……。

半日以上も同じ場所に……？

あつ……。

オレは律ちゃんが浴室に戻りたくない理由を察し、しかし察していないふりをして律ちゃんの願いを聞き入れることにした。

「分かった。じゃあ行こうか」

「はい」

きゅ、と律ちゃんの表情が恐怖と緊張で強張る。

「じゃあ、確認だ。化け物には気づいていないふりをする。怖かったら目を閉じて、オレだけに意識を向けて。目を閉じることがあればそのときは教えて欲しい。言葉にするのが難しければ……そうだな、裾を三度引つ張って欲しい。したらオレもそれに合わせるから。いかな？ 他に気になったことがあつたら言つてね。何か見つけたとか、そういうの。もしかしたら脱出の手掛かりになるかもしれないし、オレが気づけていない化け物だったりするかもしれないから」

「はい。分かりました。お願いします……！」

「お願いされました。じゃあ、二人で家に帰ろうね」

「はい……！」

そしてオレは身を潜めながら、巨頭の化け物の動きを見るために再び物陰から顔を出す。少し離れた場所に律ちゃんを居させているのは、今朝のような状況が起きたとき、オレだけが囿になれるようにという配慮だ。

顔のパーツが無いのでアレがどちら側を認識しているのか分かりますが、骨格の感じや肩の向きから推測するに、近くの店舗の中を見ているようだ。

何かありそうだな。

そう思っていると、巨頭の化け物が急に動き始めた。ゆっくりと向かう先は……オレが巨頭の化け物を見たときに入って行った横道だ。つまり、この家へも続いている裏道ということになる。

こつちに来るつもりなのか……？

いや、だとしたら直接この家に来るだろう。わざわざ横道から遠回



りしてここまで来る意味は無い。

分からないが好都合だ。巨頭の化け物の姿が見えなくなつてから少し待ち、再度周囲を見渡してオレは律ちゃんを呼ぶ。

「い、いきますか……？」

「うん。だけど少し待つてもらつて良い？　もしかしたらなんだけど、すぐその店舗に何かあるかもしれない。そこだけ見て来るよ」

「えっ、でも、あの変なのは……？」

「横道に入っていないなくなつたんだ。オレと、多分りっちゃんもこの家に来るときに通つた道だよ」

「そ、それつてここに來るつてことなんじゃ……？」

「それはどうか……。ここに來るなら直接來るんじゃないかと思うんだけど……。心配なんだね？」

「はい……」

「分かつた。一緒に行こうか。もしかしたらさっきの化け物が戻つてくるかもしれないし、氣になる店舗はすぐそこだから、あそこだけささつと見てこようと思つたんだけど……」

ふるふる、と律ちゃんが首を横に振る。もう一人は絶対にごめんだと言わんばかりの様子だ。それだけ怖い思いをしたんだろう。ここから出られてもしばらく一人でトイレに行くことも出来ないんじゃないだろうか。心配になる。

「じゃあ、行こうか」

「……あの、東堂さん」

「どうしたの？」

「その……。手を……」

「手？」

「握つてもいいですか……？」

その質問、今更じゃない？

何度も抱き着いたりしがみ付いたりして來てるのにやけに神妙だし。手を握つても良いかという質問自体も2回目だよ。改まつてどうしたんだろう。

「怖いのか？」

「はい……」

「そっか。いいよ」

リレーのバトンを受け取る様にして、律ちゃんへ手を差し出した。しかし律ちゃんは伸ばしたオレの手を越えてオレに近づいてきて、腕を抱きしめた。

手を繋ぐのでは？

そう思った矢先、オレの掌を律ちゃんの掌がなぞるようにして覆い、掌は閉ざされる。

オレは思った。

——恋人繋ぎ、だと……？

体をすり寄せるようにしてしなだれかかって来る律ちゃんの指がオレの指と絡み合う。

卑しいとは思わない。それだけ怯えているってことなんだと思うから。

でもやっぱり動くのはもうちょつと話をしてからというか、落ち着いてからの方が良かったんじゃないかな……。

というのも、やっぱり律ちゃんの精神状態が平常時とはズレていると感じるからだ。

律ちゃんはきつとこの異常事態に対する認識を「恋人、好きな人と一緒にいる」と変換することで自分を保とうとしている。オレに依存し縋りつくことで「誰かの庇護下にある」と安心しようとしているんだろうな。

とは言っても、オレ自身律ちゃんとは会ったばかりだし、律ちゃんのことを詳しく知っているとわけてもないので、もしかしたら普段からこれくらい積極的に異性に関わる人だという可能性はあるけど。そうは見えないし。

オレとしてもそのような態度を一貫して見せられると保護欲は湧く。

しかも素敵な子だ。好きなことに対する熱い語り口や、友人や家族を語る時に滲み出ていた愛情はオレとしても好ましいものだった。

ああ、良い子なんだなこの子。そんな好感を抱かされた。素朴な優

しぎ、善良さ。そういったものがこの子にはあつて、そしてオレはそういうものを愛でるといふか、重視するタイプの人間だった。

それだけに……律ちゃんのような異性から身体的な密着を繰り返し続けられると思うところはあつた。

そして今は信乃ちゃんのとときののように距離を保てる状況でもない。拒絶することで今朝のように動けなくなられても困るし。

律ちゃんの体温、柔らかな質感が伝わつて来る。シャンプーの香りが鼻を擽る。

——男つてほんと愚かだよな……。

そんな歪んだ悟りに、釘とトンカチで叩きつけるヴィジョンを繰り返す。そうすることで、心の奥底から顔を出そうとするもう一人の自分を……持て余しがちな本能を律する。

オレも男だ。それもまだ無垢な。

普通に好感を抱いている異性にこれだけ身体的に密着されれば……東堂さんの雷留君も「お？ オレの出番か？」って目覚めようとする。男つてそういうところあると思うんだよね。オレだけかな……。

……。

オレと絡み合う律ちゃんの手は、やはり僅かに震えていた。

……。

この子を無事に帰してあげたい。色々と思うところはあつても、それがオレの偽りのない本心だ。

律ちゃんを連れ、巨頭の化け物が見ていた……あるいは守っていた？ 店舗へと侵入する。

奥には生活空間に続く扉があつて、オレはその扉に触れた。やはり特に何もなく開く。消していた懐中電灯を点灯させた。

パツと見では、さっきの家と似たような間取りだ。軋む床板の音になるべく抑えるために忍び足で進む。

和室を照らし、覗き込む。

そこそこの大きさの、年代物のような壺が目に入った。気になるな……。

「りっちゃん、ちよつとごめんね」

和室に入り、壺に近づく。律ちゃんをやんわりと引き離し、壺の中をライトで照らし、覗き込んだ。

「これは……首輪？」

中に入っていたのは首輪だった。当たり前だが人間に使うようなものではない。ペット用だと思う。

首輪を手に取り、ライトで照らす。

「あ、それ……？」

ライトで照らし出された首輪を見て、律ちゃんが何かに気づいたように呟いた。

オレは律ちゃんに首輪を渡す。そのとき、「LINE」という文字が目に入る。

律ちゃんは首輪をじつと見つめている。

「もしかして知ってるのかな？ その首輪のこと」

「はい。知ってると思います。でも……思い出せない……」

「そっか……」

首輪を見つめたまま苦し気に眉を寄せて俯いてしまった律ちゃんの肩に手を乗せる。

「あまり思いつめないようにね。ただでさえこんなところにいるんだ。無理して思い出そうとしても苦しくなっちゃうよ」

「はい……ありがとうございます」

律ちゃんは首輪から目を離し、オレを見上げてそう言った。

そのとき、何か重いものが落ちるような音が聞こえた。天井からだ。

「ひっ……」

律ちゃんは飛び跳ねる程に驚いて、オレの体に抱き着いて来る。煩く感じる程の静寂の中での、いきなりの轟音だ。そらそうなるだろうと思いつつ、少しの可愛らしさも感じてしまう。

「大丈夫？」

「ひゃ、ひゃ……」

囁きかけると、律ちゃんは泣きそうな半笑いを浮かべて見てくる。

まともに言葉も発せられないくらい驚いたようだけど、呼吸が暴走する様子はない。少し耐性が付いて来たみたいだ。

律ちゃんはオレにしがみ付いて、胸の所にその顔を埋めている。オレはそんな律ちゃんを宥めるために背中を優しく叩きながら、上を見上げた。

二階……。

何かいるのか……？

律ちゃんを怯えさせたくないため口には出さないが、そんなことを思う。

どうすべきか悩むな。

見に行くか、立ち去るか……。

「ふ……ふ……」

律ちゃんの足は生まれたての小鹿のように震えていて、オレを支えにもたれかかるようにして何とか立っている感じだ。

止めておこう。

律ちゃんもいるし、何が起きるか分からない。

とりあえずだけど、今は商店街の先、道の終わりまで先に行きたい。そこに何もなければ、さっきの十字路もそうだけど、またここにも戻って来ようと思う。

幸いにも、天井からの物音は続かなかった。

律ちゃんが落ち着くのを待って、店先へと戻る。

商店街の道に出て歩く。特に異変も無い。巨頭の化け物も戻って来てはいないようだ。

しばらく道なりに進む。

思ったよりも長い。どれほど続いているのか、先は暗くまだ終わりは見えない。

「あの……」

律ちゃんがぼつりと言った。

「どうしたの？」

「こんな状況じゃなければ……。その、わたしたち……」

「うん？ オレ達？」

律ちゃんは言い切ることなく口を噤んでしまう。気になったオレの問いかけにも答えず、ぎゅ、とオレの腕に抱き着く力をただ強めた。「いえ……あの、東堂さんって……その……」

話題が変わった。言い辛いのか言いたくないのかは分からないけど、話題を変えることにしたらしい。

律ちゃんは言った。

「お、お付き合いされている方とか、いらっしやるんでしようか……？」

「いないよ」

「そ、そうですか……」

どこかほっとしたような律ちゃんの様子にすべてを察するが、言及は避けることにする。

しかし律ちゃんにも少し余裕が出てきたようだ。ただ、その余裕に比例してオレへの矢印が分厚くなってきているのは感じる。良し悪しだよなあ……。

「あの、東堂さん。わたし……あの……」

「りっちゃん、何かいるみたいだ。こっち、隠れよう」

なんとなく内容が察せられる律ちゃんの言葉を遮り、切り替えてこくこくと素早く首肯している律ちゃんを連れ、近くの脇道へと移動する。

家屋の壁を背にし、首だけを僅かに出して商店街の道を覗き込む。

薄暗い闇の中、赤い月の光に微かに照らし出されたのは、異形のモンスターだった。体毛の無い腐敗した肉体の側面から6本の足が伸びていて、まるで蜘蛛のように体を支えている。しかも6本足は正確には足では無くて、腕だ。人間の腕。それも異様に長い。まるでアシダカグモのような、グロテスクな化け物だった。さらに背中からは用途を失った人間の足のようなものがまるで昆虫の触角のように不揃いに生えている。そして胴体部の先端には、例えばフィギアの後頭部に接着剤を塗って張り付けたような歪さで、生首が拵えられていた。その目は空洞で、深い闇が覗いている。

……うわあ。

あまりに不快な見た目に思わず顔を顰めた。  
広げられた掌で地面をペタペタとならしながらゆつくりと動いている。

律ちゃんは化け物の姿を見る気もないようで、ずっとオレにしがみ付いて腕に顔を埋めている。

それで良いよ。あんなの見ても良いことは無い。

しかし困ったな。

また道を塞がれてる。

この脇道を進むしか無いようだ。

仕方なく脇道を進む。

とはいえ、めんどくさいなあ……。

いつそ突っ切れればどれだけ楽か……。律ちゃんのことも含めて、試すにはリスクがあり過ぎるけど。

T字路に出た。まっすぐと、左。どちらに進むか……。左かなあ。まっすぐ行くと商店街から離れてしまう。

左に曲がり、道なりに進む。

途中、人一人くらいなら通れそうなくらいの隙間が左の道沿いにあることに気づく。家と家の間の僅かな隙間だ。ここを通れば商店街の方に戻れるんじゃないかと思い、覗き込む。

すぐそこに人が立っていた。

ちよつとびっくりした。

化け物の類かと思ったが、違うようだ。腕の無い、薄汚れたマネキンだ。外された腕は地面に転がっている。

なんでこんなところにマネキンが？

そう思ったが、もしかしたら服を売る店がこの近くにあったのかもしれない、と勝手に納得する。

邪魔だな……。

このマネキンが無ければ通れそうだけど……。

手の届く場所に置かれていることもあって、オレはマネキンをどけようと思い、隙間に体を入れ込むようにしてマネキンへと手を伸ばす。

すると、マネキンののっぺらぼうのような顔に突然眼球が出現した。生き物の眼球がむき出しのままマネキンの顔に張り付いているような感じだ。しかもその眼球は人間であれば鼻のある位置、両頬の真ん中くらいのところに現れた。歪だ。そしてその眼球の間が縦に裂ける。

口だ。額から顎のあたりまで、縦に長く裂けた口が出現した。

そしてマネキンの首がろくろ首のようにぎゅい、と伸び、大きく開かれた口がオレの頭部に向かって突っ込んで来る。

爆散。

マネキンの顔が粉みじんに吹っ飛んだ。

まあ、うん……。

マネキン本体が仰向けに乾いた音を立てて倒れた。

オレの後ろに居て状況が何もわかっていない律ちゃんは、びくり、とその体を震わせた。

「大丈夫だよ。そこにあつたマネキンが倒れただけ。多分、衣服店かなにかが近くにあつて、ここに投棄されたんじゃないかな。ごめんね、ちよつと離れて貰える？」

こくこく、と頷く律ちゃんを離れたオレは、しゃがみ込むと倒れたマネキンの足を掴み、隙間から引きずり出した。

そして地面に転がっている一对のマネキンの腕を持ち上げる。

マネキンの手首が動く。

直後に爆散した。

……。

なるほど……。

ま、これで通れるね。

「りっちゃん。っ、通れそうだよ」

律ちゃんはオレが引きずり出したマネキンを怯えたように見えて、マネキンの腕が爆散したことには気づかなかつたようだ。

オレは律ちゃんの手を引き、微笑みかけてこう言った。

「行くうか」

こくこく、と律ちゃんが頷く。



僅かに体を斜めに逸らして隙間に体を入れ込み、衣服を壁に擦りながら細道というか隙間を進んで行く。

そしてその終わりを前に一度止まり、再び首だけを出して周囲を見渡した。特に何もなさそうなので体を出し、隙間の方を見る。律ちゃんが隙間から出て来たとき、気づく。オレ達が来た道、つまり隙間の向こう側から何かはこちらを覗き込んでいた。しかしその何かがちらに出来る様子は見られない。ただ覗き込んでいるだけだ。なら気にしなくても良いだろう。律ちゃんを怖がらせるだけになりそうなのでスルーし、律ちゃんが振り返らないように気を引きながら先へと進む。

少し歩くと、広い場所に出た。大きな道が左右に伸びていて、その道と商店街の区切りとなる位置に、一对の鳥居が設けられた広場だった。

そしてその広場の中央に、そこそこの大きさの石碑のようなものが立てられている。

二人で近づいてみる。石碑で間違いないようだ。特に何か碑文が記されているということもなかったが、代わりに何かを嵌めこむ窪みのようなものがいくつもあることが分かった。

あることに気づき、オレは律ちゃんに言った。

「りっちゃん、これ……。さっきの首輪じゃない?」

石碑の窪みの一つに見覚えのある形があった。

その窪みを指さして律ちゃんに伝えれば、律ちゃんも驚いたように目を丸くした。

「あ、ホントだ……」

「入れてみる?」

「そうですね。じゃあ……」

律ちゃんはポケットからさっきの首輪を取り出すと両手で持って横に伸ばし、首輪を嵌めこんだ。

だが、特に何も起きない。

「……特に何も起きないね」

「そう……ですね」

「ただ、他にも窪みがあるから……もしかしたら他にも何か、ここに嵌め込むものがあるのかも。それを全部集めて嵌め込めば……」

「帰れる……?」

「かもね。いや、きっとそうだよ。やったね、りっちゃん。希望が見えたよ」

オレは周囲を見渡したが特に異変は無い。律ちゃんも体を竦めながら辺りを見渡しているが特に変化を見つけれなかったようだ。

だけど帰れそうな気配がして来た。律ちゃんも少し安心したようで、若干表情が柔らかくなっている。

良かった。

「でもこの石碑、一体なんなんだろうね?」

何気なく石碑に触る。

すると、突然石碑が輝きだした。

首輪を嵌め込んだ窪みは勿論、何もはめ込んでいない窪みからも光が溢れ出し、オレ達を差すように照らした。

「と、東堂さん……っ!」

律ちゃんが慌ててオレに抱き着いて来る。

オレは思った。

———なんかの封印解けた?

石碑が輝きを放つ。

抱き着いて来る律ちゃんに対しオレも片腕で抱き寄せて、成り行きを見守った。

溢れんばかりの光が収束し、空へと一直線に駆け昇って行く。この場所にだけアーケードが無いため遮るものの無い光が、夜の闇を貫いた。周囲の闇が光によって掻き消され、景観が照らし出される。見えるもの自体は変わらないが、中々幻想的な光景だ。ゲームとかで良く見る。

オレは思った。

——エンディングかな？

急展開ではあるけど、オレもなんとなくかセオリーみたいなものをすっ飛ばしてしまったんじゃないかという自覚はあるので良しとする。

それに、これで帰れるならそれで……。

「あ……。わたし、どうして忘れてたんだろう……」

律ちゃんが呟いた。

流れ変わったな……。

不穏な感じなのか、それともスッキリ出来る感じなのかは今のところ分からないけど。

そう思ったとき、大きく体が揺れた。

地震のようだ。商店街も石碑も、全てが揺れている。

ふらついて力が弱まった隙間を縫うように、律ちゃんがオレから離れた。

「りっちゃん？ どうしたの？」

律ちゃんはオレの声が聞こえていない様子で、ゆっくりと石碑の方……光の柱の方へと歩み寄って行く。石碑は既に膨大な光の帯に呑み込まれていて、その姿を確認することはできないけど。

異常事態だ。

瞬時にそう思った。

怖がりな律ちゃんがこんな異常事態に取り乱すことなく一人で歩いていけるはずがない。実際、足取りもたどたどしく、まるで何かに操られているようだった。

「りっちゃん？」

なにこれ……。どういう状況なの……？

とりあえず律ちゃんだ。

光の奔流に近づいている律ちゃんの近くに駆け寄り、その手を引く。

「りっちゃん戻って！ 何があるか分からないんだから！」

「……あれ、わたし？」

引き戻された律ちゃんが我に返ったように呟いた。

やっぱり精神干渉的な何かの影響を受けていたようだ。

律ちゃんの様子を見て思う。

もしかしたらあの光に入れば元の場所に戻れるんじゃないかと思っただけけど、なんかこの感じはむしろ……逆なような……。

「東堂さん。わたし……」

律ちゃんは泣きそうな表情でオレを見て言った。

「あっ……。あっ、あっ……。あああああああ」

「どうしたのりっちゃん、落ち着いて？」

律ちゃんが突然頭を抱えて蹲り、錯乱した様子で頭を大きく振り始めてしまった。

オレは律ちゃんの傍にしゃがみ、その背中をさすりながら言葉を掛けた。

「落ち着いて。急にどうしたの？」

「わ、わたし、思い出したんです……」

律ちゃんはカタカタと歯を鳴らしていて、言葉も震えている。その顔色は気の毒なほど青ざめていて、律ちゃんを感じている恐怖や不安、絶望の大きさを物語っている。

カタカタと歯を鳴らしながら、震える声で律ちゃんは続けた。

「あの首輪のことも、この縫いぐるみのも……。それにわたし、初めてじゃなかった……」

そして律ちゃんは見ていて胸が苦しくなるほどに悲痛に表情を浮かべてオレを見上げ、言った。

「たすけて……!! たすけて……!!」

「りっちゃん、落ち着いて。大丈夫だから。オレが……」

「大丈夫じゃない! 大丈夫なんかじゃない!! やめてよ! 何も知らないくせに!」

律ちゃんが頭を大きく振った。まるで駄々をこねる子供のような所作だけど、悲鳴から滲み出る悲痛さはその比ではない。

「もうやだあ……!! やだよお……!!」

そして律ちゃんは嘆きの言葉を吐き、俯いてしまった。

やだ、やだ、やだ、と壊れたラジオのように小さく繰り返すその姿は余りに憐れで、その悲痛さにオレも表情が歪むのを抑えられなかった。

「りっちゃん。帰ろう。もしかしたらあの光に入れば……」

「……!! いやっ」

律ちゃんは肩に触れたオレの手を振りほどく。

ええ……?」

凄く困惑する。

マジでどうしたの急に。

「どうしたの? あの光の柱に何かあるの?」

「……」

律ちゃんは黙したまま項垂れ動かない。

今の感じからすると、やつぱりあの光は良くないものみたいだ。少なくとも律ちゃんにとっては。

そして律ちゃんの言葉から推測するに……もしかしたらこの子、この世界を繰り返していたりするの……?」

「りっちゃん。今からオレは変なことを聞くけど、答えてくれる?」

「……」

「りっちゃんはさ、この世界……。この商店街やあの廃病院の探索を……何度も繰り返してたりする?」

「……」

返事はない。

だけどオレが質問をした瞬間に見せた僅かな身じろぎこそがその答えだと思う。

なるほど……。

それは……確かにきついか。

さつき律ちゃんは思い出したと言っていた。きっと今、何かをきっかけにして、律ちゃんはループしてきたこれまでのすべての記憶を取り戻した……。

オレには律ちゃんがどういう道のりを経て来たのかも、そのループがどういう条件で発生するのも知り得ない。もしかしたらあの光に入ると全てがリセットされてニューゲームになるのかもしれないし、道中で起きる何かをトリガーにして振出しに戻るといったこともあるのかもしれない。

そして律ちゃんがそれを何度繰り返して来たのかも分からない……。このすべてに絶望したかのような様子を見るに、1度や2度じゃないんだらうってことは察するけど……。

ただでさえ怖がりな律ちゃんだ。アニソンと、友達や家族が大好きな普通の怖がりな女の子。そんな子がたった一人で、何度もこの世界を繰り返していたのだとしたら……。

確かに、それはあまりにも……。

でも、帰るならたぶん、この光だろうとも思うわけで。でも律ちゃんの様子からするとこの光はあまり良くないものようだし……。色々確認したいことはあるけど、まず最初に聞いておきたいことが一つあった。

「これまで、オレみたいな同行者っていたのかな？」

「……」

律ちゃんは何も語らない。身じろぎもしない。

どちらかは分からないけど、でもなんとなく、いなかっただらうなと思った。

「もし居なかつたなら……。今度こそ違うかもしれないよ」

そう言つて、自分の無責任さに呆れてしまう。繰り返すことに絶望

してしまっている様子の律ちゃんに少しでも前向きな考えを持って貰いたくて言ったんだけど……。

「違わなかったらどうするつもりだ？」

「またこの子が振り出しに戻るだけだったら？」

「しかも次は今の記憶を持ったままのリスタートになったらどうする？」

「その絶望がどれ程のモノかを考えてみれば良い。」

「そのとき、オレは責任を取れるのか？」

「この子に偽りの希望を見せて、それを奪う罪深さが分からないわけじゃないだろう。もしも、オレがかつて苦しんでいた時期に「転生」を信じ、受け入れてくれる人がいたとして、もしその人が裏ではオレのことを異常者だと扱っていて、信じ続けた瞬間にその現実を突きつけられる、なんてことがあったとしたら、そのときオレがどうなったかを考えてみる。」

「そう考えれば、ここでずっと座り込んでいた方が遥かに楽なはずだ。」

「重い……。」

「信乃ちゃんに会う前のオレならきつと、「ループなんて有り得ない」と、律ちゃんに言いはしないまでも、内心では思っていたはずだ。だけどオレはループありきで律ちゃんの今後を考えている。」

「だから重い。」

「オレにどうしろと……。」

「いや、深く悩み過ぎるのは止めよう。考えるべきことではあるんだけど、伝えたいことはいつも同じ。素直な気持ちだ。」

「りっちゃん。オレの考えが正しいなら、君はずつと、想像を絶する苦しみを何度も味わってきたことになる。ここで動けなくなるのも当然だ。それだけの経験を君はさせられてきた。オレは君の言うように何もわからない。けど、君のことを少しでも分かりたいと思うてる」

「東堂さんは……やっぱり優しいですね……」

「律ちゃんがゆつくりと顔をあげてオレを見た。」

「わたしを哀れんでくれるなら……どこにも行かないでください。一緒にここに……」

律ちゃんが言うようにしてオレの体に縋りついてくる。

オレは律ちゃんの手をしっかりと握り……首を振った。

「君がここに残るとしても、オレは……残れない。オレにもオレの生活があつて、帰らないといけない理由もある」

律ちゃんの表情が強張り、瞳が揺らぐ。

「確かにあの光に入っても何も変わらないかもしれない。もしかしたら君が危惧するようなことがまた起こるだけかもしれない。オレが居ようと居まいと、何も変わらないかもしれない」

そうならない保証なんて全くない。オレにそれを阻止することも出来ないし、その方法も分からない。

だからきつと律ちゃんの危惧が実現する可能性の方が高いんだろうと思う。

オレとしても律ちゃんを放っておくのは忍びなくて、でも一人で帰る罪悪感が大きすぎるから言っているだけで、根本的な解決策を提示してあげるわけでもない。酷く無責任なことだと思う。

身代わりアイテムと思しきあの熊の縫いぐるみが、律ちゃんから離れた場所に有つたのは……。もしかしたら、律ちゃんが自らそこに置いたのかもしれないと思った。身代わりになるモノを手放し、終わりを迎えるために。きつと、効果は無かつたんだろうけど。

「でも、変わるかもしれない」

オレは力強く言った。

「本当に苦しかったと思う。辛かつたと思う。怖かつたと思う。君は本当に頑張ってきたと思う。たとえそのたびに記憶を失っていたとしても……いや、だからこそ、無知の恐怖を何度も味わわされて来たことになる。もう何もかも諦めてしまいたくなる気持ちは……君が今抱えているだろう思いは、きつとオレの想像を絶するものなんだと思うよ。そうなってしまうても当たり前で、そうならざるを得なかつたんだって……本当にそう思う。でもね、りっちゃん。好きでそうしてるわけじゃないでしょ?」



さつきまでと同じだ。

他にもう道がないからそうするしかない。

だったら、他の道と一緒に探してあげればいい。

それはとても難しいことだけど、二人で考えれば何か新しい答えが出てくるかもしれない。

オレは律ちゃんへ穏やかに語り掛ける。

「教えてくれないかな？ 君が頑張って来たことを。もしかしたら何か力になれるかもしれない」

律ちゃんの目を見つめる。

闇に沈みそうなその瞳の中に、僅かに縋る希望の色が見えた気がした。

そして……律ちゃんはゆっくりと語り出す。

一番最初は、あの廃病院に居たこと。オレと出会った場所とは少し違うとのことだから、多分、オレが一番最初に居た場所だと思う。

そして、何度も化け物に襲われたこと。襲って来た化け物の話の中には、オレの前で爆散した奴らの話もあった。

そして化け物に殺されて、殺されると最初の場所に戻されていたこと。殺され方は多岐に渡り……律ちゃんは苦しそうにすべてを吐き出した。オレはそれを黙って聞くことしか出来なかった。言いたくないけど、言わずにはいられない。誰にも知られたくないが、でも誰かに知って貰いたい。そんな気持ちが伝わってきた。

化け物と対峙したとき、やはりあの熊の縫いぐるみは何度かその光を放ち、化け物を退け律ちゃんを守ったらしい。だけどその度に熊の縫いぐるみは手、足、頭、そして最後には胴体を失っていき、最後には消滅してしまうそう。そしてそうなってしまえば、律ちゃんには化け物に対して為すすべはなく……襲われたら最後、殺されるしかない。そして最初に居た場所に戻っていて、再び進んで行けば、熊の縫いぐるみが退けてくれた化け物が復活していて不意に襲われ殺される。

何度も殺されて、でも帰りたい一心で「覚えて」いき、遂にここに辿り着いた。そして帰れると思って光の中に入れば……その周回の

記憶をすべて失い、元の場所に戻された。それを何度も繰り返してきて、そして今……何らかの理由で全ての周回の記憶を取り戻した。

そして律ちゃんは続けた。

すべてを思い出した今だから分かる、と。

周回を重ねるたびに化け物の危険度が明らかに上がっている、と。

最初は亀のような歩みだった化け物たちの動きが、周回を経るごとに機敏になっていたらしい。

オレと律ちゃんの前で爆散したあの女の化け物の動きについて聞かれたので答えたところ、律ちゃんはこう言った。

「そんな一瞬で距離を詰めてきたり、直接的に襲い掛かって来るなんてこと、最初の頃はしてこなかった」と。

……。

おつも。

面倒くさいを通り越して、あまりに重い。

周回することに敵が強くなる、何故か人気のドが付くマゾゲーはオレも知っている。だけど、それを戦う力もない状態で、リアルで強制的に何度もやらされるなんて、とてもじゃないけど苦しすぎるだろ。

せめてもの救いが周回ごとに記憶がまっさらになることなのだからに救えない。そしてその救いも今吹っ飛んだ。

それは確かに……心が折れても……。

「本当は……。もっと……集めないといけないものもあつたし、通らないといけない道もあつたんですけど……」

律ちゃんはそう言つてオレを見つめる。揺れる瞳の中に、儂い光が灯つては揺らめき消える。

「東堂さん……。わたしを殺たすけてくれますか……?」

律ちゃんは諦念が滲む笑みを浮かべた。律ちゃんを目尻から一筋の雫が零れ落ち、頬を伝う。それはあまりに儂く悲痛な微笑みだった。

……。

目を瞑る。

オレに律ちゃんを助けられるか？

分からない。今の話を聞いても、この状況を打破できる画期的な案は浮かばなかった。コネも使えないし、国家権力にも頼れない。

自分の無力を恨めしく思う。

「……」

言葉を失ったオレを見て、律ちゃんは小さく笑った。

やっぱり希望なんてなかったね、とすべてを諦めた終わりの笑みだった。

律ちゃんの手がオレの掌からすり抜ける。

律ちゃんは静かに俯いて、項垂れた。もはや考えるのを止め、ここで朽ち果てるのを待つつもりなのかもしれない。餓死か、あるいは別の要因か……。

でももしもその先で、また始まりの場所に戻ってしまったらどうなる？

それすらも何度も繰り返すのだとすれば、この子は永遠に……。永劫の時を、苦しみと絶望の中で繰り返し、囚われ続けることになる。

それは嫌だな。オレが嫌だ。

これからのオレの人生を思う。

楽しい時にふと、律ちゃんがここで孤独に項垂れている姿を想起するような、鬱屈した人生になるだろう。

「ねえ、りっちゃん。もう一度だけでいい。試してみない？」

「……」

これまでの周回全ての記憶……絶望、痛み、恐怖、そういったものが一気に叩きつけられて動けないのは分かる。なんかここは安全そうだし、もうここから動きたくないって気持ちも分かる。

でも、今度こそ違うかもしれない。大きな問題、基盤は変わらなくても、少しだけ好転するかもしれない。

かつてオレが「転生者だと認めて貰えない」という現実そのものが変わらなくても、退院し、日常を送れるようになったように。

もしかしたら何かが変わるかもしれない。

だからオレは相応の覚悟を持って、こう言った。

「オレが君を迎えに行くから」

両手を地に着いて頂垂れたままの律ちゃんの傍にしゃがんだまま、オレは言う。

「例え君が全てを忘れても、必ず君を見つけ出すから」

律ちゃんの体がぴくりと震えた。

「帰ろう、りっちゃん」

律ちゃんがゆつくりと頭をあげた。

戸惑いに揺れているその瞳を、しっかりと見つめる。

ゆつくりと、律ちゃんの顔が感極まったように歪んでいく。

「はい……っ」

絞り出すように言った律ちゃんの肩をぼんぼんと叩きながら、内心でため息を吐く。良かった。少なくとも一度くらいなら縋ってみても良いと律ちゃんに思ってた貫えていたらしい。

しかしとんでもない約束をしてしまった。言ったからには反故にするつもりもないけど……。うん……。万が一律ちゃんと同じようなことになったなら、どんな手を使っても探し出す。見つかるまで探偵でも何でも使ってた探そうと思います。なのでオレが元の場所に戻れたら、やっぱり律ちゃんを探しに他県に行かないと……。

ただ、その後と同じような展開になったとしたら……今度こそオレもお手上げというか、あまり気持ちの良いことではないけど、オレだけ帰ることになると思う。そこはもう割り切るしかないな。そうなって欲しくはないけど、オレの人生すべてを犠牲にすることは難しい。あくまでできる範囲で……ということだ。

そして律ちゃんの手を引き、オレ達は立ち上がった。

二人で光の柱へと近づいて行く。

「そうだ。オレの連絡先、教えておくよ。良かったら連絡貰えるかな？ オレも安心するし……。それと、律ちゃんの連絡先を教えてくださいもいい？ 君が現実世界でどうなってるか……探しに行くよ」

「……ふふ。ホントに変な人ですね、東堂さんは」

「うーん……。なんか最近よくそういうことを言われるんだけど、オレそう言われるのあんまり好きじゃないんだよね……」

オレの連絡先を記したメモを律ちゃんに渡すと、律ちゃんが少し呆

気に取られたように止まり、そしてほんのりと泣き笑いを見せる。そして口頭で言ってくれた律ちゃんの家住所と携帯の電話番号を携帯に登録する。

オレが苦笑すると、律ちゃんはふんわりと笑った。目元は真っ赤になつてるけど可愛い。

「よかつたら、なんて。わたし、絶対に連絡しますから。無視しないでくださいね？」 出てくれるまで、ずっと掛け続けますから。電話」

どこか吹っ切れたように笑う律ちゃんからは、初めて会った時のようなか弱い印象は消えていた。

まあ、話を聞いてる限りオレとは別方向で恐怖が欠落してもおかしくはないというか、慣れちゃってそうな感じはする。逆にPTSDみたいになつててもおかしくないと思うけど。

「東堂さん」

「なに？」

「手を繋いでも良いですか？」

「良いよ」

手を差し伸べる。

律ちゃんはゆつくりと、オレの手に手を重ねた。恋人繋ぎではない。だけどどしつかりと手を握る。

「離さないでくださいね……？　どうか強く……」

繋いだ手は少し震えていた。

「何も言わなくて良い。分かつてる」

二人で並び、目を瞑り、手を繋ぎ……オレたちはゆつくりと光の中に入つて行く。

そして、オレの手から律ちゃんの温もりが消えた。

ゆつくりと瞼を開く。

オレは思った。

——よし、探しに行くか。

オレは光の帯を通り過ぎただけだった。変わらない景観が目の前に広がっている。

しかし、隣に律ちゃんはいない。

オレは急いで振り返り、進んできた商店街の道の逆走を始めた。広場を一步出た。その瞬間、突然の轟音。地面が揺れる。

「うあ……なんだ……？」

たたらを踏む。後ろから轟音がするので振り返ると、広場の地面が崩れ始めていた。舗装された地面がひび割れ、奈落へと落ちていく。ひび割れが近づいて来る。オレは走り出した。

商店街の道を逆走する。

途中、さつき見かけたアシダカグモのような化け物が居た。それは気色の悪い動きでオレの方へ走って来る。

どうする……？

でも止まる選択肢はさすがに無い。何故なら後ろの大崩落が近づいてきているからだ。なんとかアシダカグモのような化け物を避けて……そう思ったのもつかの間、やはりすさまじい速さで化け物は迫って来て、その足が全部爆散し、胴体部分は磁石に弾かれるようにオレの頭上を越えていき、奈落の底へと落ちていった。

……よし。走り続ける。

律ちやんが隠れていた家が見える。その中から巨頭の化け物が現れた。

やっぱりあいつ、あの家に向かったのか……。何故か遠回りして。

そんなことを考えるが、止まることは出来ない。崩落が近づいている。

巨頭の化け物がオレに気づき、気持ちの悪い動きで素早く襲い掛かって来る。

が、化け物はその頭が何か滑りやすい物にぶつかったかのようにオレの傍で急速に方向を変えると転倒し、迫ってきた崩落に滑り落ちていった。

……。

OK。ラッキーと考えよう。

さらに走る。最初にオレが入った横道が見えてくる。そこからまた化け物が出て来て、また襲い掛かってきたけど、爆散した。

そして商店街を抜ける。

後ろを振り返ったところ、崩落は丁度商店街の入り口だったところで止まっていた。

崩落の傍に近づく。左右に大きく広がる崩落だ。もはや商店街どころか、商店街の左右に広がっていた住宅街すらも消えている。どれくらいの大きさか……一キロ以上あることは間違いないだろう。

そんな大穴のギリギリに立ち、底を覗き込む。深い深淵が覗いている。

「おー……っ？」

声が漏れる。

突然、深淵の中に巨大な一対の目が浮かび上がった。かと思ったら消えたからだ。

……。

なんだろう。

なんで今になってこんな……。

律ちやんがいなくなっただことと関係があるんだろうか？

いや、そんなことより律ちやんを探そう。そう思い、オレは大穴を覗き込むことを止めて歩き出す。さすがにここから落ちたら死にそうなので降りようとは思わない。

もう行ける場所は一つしかなくなってしまったので、オレは最初に立っていた場所を通り過ぎ、暗い霧の中へと進んで行った。

……。

感じたのは、人の喧騒。

ちやうど到着したらしい電車の騒音が耳につく。

「……」

バイブ音が聞こえ、振動が伝わって来る。携帯だ。

取り出して画面を見るが、知らない番号通知。

オレは通話アイコンを押して、耳に当てた。

「もしもし」

「――」

オレの名前を確認する声がスピーカーから聞こえて来る。

その声を聞いて、オレは思った。

——誰？

「え？ お母さんですか？ はい、東堂雷留です。ああ、なるほど……。ええ、そうですね。約束……してましたから。いえ、すみませ  
ん。はい。今、駅に居て。はい。はい。ではまた……。はい」

電話を切る。

思わず頬が緩むのを感じた。

良かった。

そして携帯を仕舞ったオレは改札口を通り過ぎ財布を取り出して、  
駅員さんに切符の返金を願い出た。

そして、これは数日後のことだ。

「あ、お兄さん。おはよーございますー！」

大学に行こうとしたら、ちょうど学校に行こうとしているらしい  
茶々ちゃんに会った。

あの子あ……。



人生で一番と言って良いほどに激動の二日間をオレは乗り越えた。律ちやんと共に……ではないけど、化け物が徘徊する異界を出た直後にかかって来た電話は、律ちやんのお母さんからだった。

電車の音がうるさくて後から電話を掛けなおす旨を伝えたが、あの場でだいたいのことは教えて貰えたと思う。

藤砂律。

オレが出会ったあの女の子はおよそ一年前、前兆も無く突然原因不明の意識不明となり、ずっと眠り続けていたらしい。そんな子が突然目覚めたと思ったら、眠り続けていたせいで擦れた声で、聞いたことのない人名と電話番号を連呼し始め、その番号に電話を掛けてくれと連呼し始めたらしい。たまたま律ちやんが目覚めた瞬間に傍にいたお母さんは初め、律ちやんが錯乱しているのかと思ったらしい。それはそう。普通ならそう思うだろう。だけど律ちやんがあまりに必死に懇願するため仕方なく掛けたところ、律ちやんが言った聞いたことのない人名と同じ名前のオレが電話を受け取った、ということらしかった。

そして一度電話を打ち切り、家に帰ってから再び通話をする事になった。律ちやんはまだ電話が出来る状態ではないらしく声を聞くことは出来なかったが、律ちやんのお母さんの話によると、こう言っているらしい。

「東堂さんが助けてくれた」と。

律ちやんのお母さんは、電話の最中に律ちやんが目覚めたという実感が湧いて来たらしく、電話口の向こうで感極まったように泣いていた。律ちやんがお母さんのことを大好きだと言っていたように、お母さんも律ちやんのこと大好きな、温かい家庭のようだった。

律ちやんのお母さんは電話の最中であっても嗚咽が混ざることを見えられない様子で、たびたび言葉を詰まらせていた。

「ご、ごめんなさい」

「いえ……。あなたがそれだけ律さんのことを大切に想い、愛してい

らっしやるという証だと、オレは思います。その涙に胸を張ってください。オレとしても律ちゃんが目覚められたことは喜ばしく思いますが、そのことを言葉に詰まるほどに喜べるお母さんの想いには、とても好ましさを感じています。それに律さんのご家族方はこのおよそ一年、とても不安でお辛い思いをされたかと思えます。今、ご家族方が抱かれています喜びと安堵は一入でしょうから。オレと律さんがどういう関係か……気になられているかと思えます。言うまでもないことかとは思いますが、今はオレのことはお気になさらないでください。律さんの目覚めを嬉しく思い、そして律さんの一日でも早い回復をオレも願っています」

と、こんな感じで電話を終えた。

気にしないでくれとは言ったけど、それは「東堂さんが助けてくれた」という律ちゃんの言葉をご家族が信じてくれているという前提の話であって、「この東堂とかいう奴が意識不明になった原因なのでは？」と思われていればちよつと話は変わって来る。そうでないこともオレは祈る。

でも娘さん思いの優しそうなお母さんだった。きつと律ちゃんの言葉に疑問を抱きつつも、そのまま受け入れてくれると思う。電話の内容も、「よく分かってないけど娘を助けてくれてありがとう」みたいな感じで、律ちゃんの「東堂さんが助けてくれた」って言葉を全面的に信じているようだったし。

律ちゃんがどうしてあんなことに巻き込まれたのか興味はあるけど、今は律ちゃんのお母さんに伝えたように、律ちゃんの回復を祈るだけに留めておこうと思う。

そうして、突発的に発生した律ちゃんを巡る異変になんとか終止符を打つことが出来たオレは、日常生活へと戻ろうと頑張っている。

戻った、のではなく頑張っている、というのは、大学へ行った帰りに信乃ちゃんたちのところに寄って少し話したり、弁護士先生への根回しだったり、警察の事情聴取を受けたり……。うん。全然日常に戻れてないからだ。

それでも徐々に落ち着いてきているんじゃないかと思っていた矢

先、再び事件は起きた。

いや、事件が解決した……というべきかもしれない。

というのも、存在が無かったことになっていたはずの茶々ちゃんが突然目の前に現れたからだ。

「あ、お兄さん。おはよーございますー！」

大学へ行くために東堂家を出て門の鍵を掛けていたらいきなり声を掛けられた。

あれからずっと……それこそ昨日の夜まで、茶都山家の表札は無く、家は無人だったはずだ。それが何故今になって現れたのか理解が及ばない。

もちろん心配はしていたし、気にもなっていたけど、いざ目の前に、何事も無かったかのように現れるとこっちが困惑する。

さすがにすぐに反応することは出来なかった。

少し間を置いてから茶々ちゃんの傍に移動し、しゃがみ込んで目線を合わせ、問いかける。

「おはよう、茶々ちゃん。久しぶり……だよね？」

「えっ……!?!」

なにその反応。

びくん、と分かりやすく跳ねた茶々ちゃんの表情は、やはり分かりやすく吃驚仰天といった様子だ。

きよろきよると目を動かしている。

茶々ちゃんは言った。

「え、えーと……。き、きのーも会いましたよ！」

「いや……? 昨日は会ってないね」

怖がらせないように微笑みは浮かべているものの、嘘は見逃さないよとばかりにじつと茶々ちゃんの瞳を見つめる。

「え、あの、あ、会いました……」

「そうだったかな? 茶々ちゃんはとても可愛らしいから、会っていたらそのことを忘れるわけないんだけど……」

「あわわわわ……」

じつと茶々ちゃんを見る。

茶々ちゃんはきよろきよると目を動かし、オレと目を合わせようとしない。

「うーん。オレの気のせいだったかな？ 茶々ちゃんに会えない一夜が凄く長く感じちゃってたみたい。ごめんね？」

「あ、あわわわわ……」

言いたくないということは分かった。茶々ちゃんを含めて一家全員が消滅していたことについては気にはなるけど関係があることもないのでこれ以上は触れないことにする。

なのでもともしたかつた質問を茶々ちゃんへと投げかける。

「ところで、茶々ちゃん。聞きたいことがあるんだ。葵さんって名前の女性、知ってるかな？」

「えっ!?!」

オレの質問を聞いた茶々ちゃんが凄く驚いた様子を見せる。眼は真ん丸に開き、口は半開きだ。

「知ってるんだね……？ 実は」

「お兄さん、葵お姉さんのこと知ってるんですか!?!」

……?

なんか思っていた反応と違うな……。

てつきり、さつきみたいに知ってる雰囲気全開で知りませんって言張るのかと思っていたんだけど……。

普通に知ってること認めたな……。少し拍子抜けしてしまうけど、好都合だ。

「茶々ちゃんの質問に答えるなら、はい、だね。茶々ちゃんは」

「どこにいるんですか!?!」

……。

やっぱり思ってた反応と違うな。

またなんかどうしようどうしよう、みたいな反応をするのかと思っただけ……。

なんだろう、この反応は。

これじゃまるで……。

「実はオレも葵さんのことを探してるんだ。だから葵さんがどこにい

るかオレは知らない。茶々ちゃんなら知ってるかなと思って聞いたんだけど、茶々ちゃんも知らないの？」

「わ、わたしも知りません……」

「そうなんだ……」

じつと茶々ちゃんの瞳を覗き込む。目を見たからって心が読めるなんてことはないが、この子に関しては嘘が顔に出るので多分本当だと思う。

「あの、らいるお兄さんはどうして葵お姉さんをさがしてるんですか？」

「前にちよつと……友人が世話になってね。そのお礼をしたくって」

物は言いようである。

信乃ちゃんの言い回しが移ってしまったかもしれないと内心で苦笑する。

まあ友人が記憶を消されたかもしれないなんて直接的に言うのは憚られたということもある。怒りを滲ませるつもりは毛頭ないけど、オレと葵さんの仲が良好ではないと伝わると、茶々ちゃんもどう反応すれば困るだろうし、あまり良い気もしないだろう。子供というのは人の悪意や敵意に敏感なことが多いから気を遣わせてしまうかもしれないし。険悪とまでは言わずとも、他人の敵対的な人間関係を悟らせるのは可哀そうだと思った。

そんな考えを持って問いかけ、茶々ちゃんの反応を待とうと思っていたが、間髪入れず茶々ちゃんはこう言った。

「えっ……。お兄さんもですか!?!」

……。

また思ってた反応と違うな……。

オレ「も」、つてことは茶々ちゃんも葵さんに何か世話になってお礼をしたいと考えているということだろう。そして茶々ちゃんの場合に関しては、オレが言葉に含ませた裏の意味はなく、純粹に言葉通りの意味だと思う。

……。

葵さんと茶々ちゃんはいったいどういう関係なんだ？

てつきりそれなりに深い関係なんだとばかり思っていたけど、そうでもないようだ。

「茶々ちゃんも葵さんの世話になったの？」

「はい！ 昨日、すっごく危ないところを助けてもらったんです！ わたしは寝ちやつてて覚えてないんですけど……。えへへ」

昨日。寝ちやつてた。危ないところを助けて貰った。

薄っすらとした恐怖と強い尊敬が入り混じったような表情で、茶々ちゃんは葵さんのことを語った。

「そうなんだ？ 葵さんって凄く良い人なんだねえ」

「はい！」

茶々ちゃんが満面の笑みを浮かべる。

了解も無く人の記憶を消すような人間が良い人……？

まあ、その二つは矛盾しないこともあるかもしれないけど、違和感はある。

「茶々ちゃんはどんな危ないところを助けて貰ったのかな？」

「えっと、それはですね！」

「茶々！」

ゆつくりと茶々ちゃんから情報を引き出そうとしていたとき、声が聞こえた。

「あ、瑠璃ちゃん！ おはよー！」

瑠璃川瑠璃ちゃん。茶々ちゃんの小学校の友人で、茶々ちゃんと共に存在が無かったことになっていた女の子だ。

この子もいる、とは……。

この子の場合、この間小学校で聞き込みをしたとき以来情報の更新がされてなかったのも、もっと早くに戻っていた可能性はあるけど……。

そもそもなんでこんな時間にこんなところ……？

それを言ったら茶々ちゃんもなんだけど、大学生の登校時間と小学生の登校時間には結構な差異がある。オレが少し早めに家を出るようになっていたとはいえ、それでも小学生の登校時間にしては遅すぎるんだよね。

そうは思えどとりあえず挨拶をと思い、瑠璃ちゃんにも声を掛ける。

「瑠璃ちゃんおはよう。久しぶりだね」

「……いいえ。わたしたち、昨日会ってるわ」

「へえ……」

微笑みを浮かべたまま、すつとオレの瞳が細くなった。

茶々ちゃんが「昨日も会った」と言い張るのは何となくわかる。家も隣だし、恐らくだけど「不在にしていた」という事実そのものを無かったことにしようとしているんだろう。

だけど瑠璃ちゃんの場合は違う。瑠璃ちゃんはオレとの接点が茶々ちゃんを経由する以外にない。わざわざ「昨日も会った」なんて嘘を吐く理由がないんだ。なのに瑠璃ちゃんは嘘を吐いた。きつと何か理由がある。

まあ、別に良いんだけど。興味はあるけど、無いと言えば無いし。「る、るりちゃん……？」

につこりと見つめるオレと、睨みつけると言ったほどでもないけど警戒心を露わにしてオレを見て来る瑠璃ちゃんを交互に見つめ、「あわわわ」と宣っている茶々ちゃんの三つ巴が生じる。さすがに小学生相手に強く出るつもりはないし、話を合わせて欲しいというならオレとしてはそれはそれで構わないので、オレは改めて微笑みを浮かべ直し、こう言った。

「そうだったね。忘れていたよ。ごめんね」

「……」

瑠璃ちゃんはより一層警戒した様子でオレを見る。

なんでえ？

話合わせてあげたじゃない……。

いや、そうか。

わざとらしくかったかな。茶々ちゃんと違って……という失礼だけど、この子は人の言葉の裏や機微を読み取る力が年齢の割に育まれているようだ。

「そうだ。瑠璃ちゃんにも聞きたいことがあったんだ。葵さんって女

性、知っているかな？」

ひゅ、と瑠璃ちゃんが息を呑んだ。

これは知ってるな……？

オレは続ける。

「実はね。オレの友人が葵さんにお世話になってね。お礼をしたくて探しているんだ」

「……。知らないわ。そんな人」

「えっ……。もぐもぐ」

オレの質問に、瑠璃ちゃんは白を切るといふ選択をした。

それに驚いた様子の茶々ちゃんが何かを言おうとして、瑠璃ちゃんに口を塞がれる。

変わらないね、そこは。

とはいえ、オレも葵さんに関しては「はいそうですか」と受け入れるわけにはいかない。

威圧的にならないように気を付けながら話を続ける。

「どうしても会いたいんだ、葵さんに。……本当に知らないのかな？」

葵さんのこと」

「知らないわ」

微笑みを絶やさず続けたオレに、瑠璃ちゃんは凜々しい表情で言い切った。

前も思ったことだけど、この子は本当に肝が据わっているなあ。

でもなあ……。困るんだよね。

とは言っても……。

なんで嘘つくの？

なんて聞くのもちよつとな……。オレとしてもものつびきならぬ事情があるわけだけど、それは瑠璃ちゃんからすれば関係ないことだし、瑠璃ちゃんにも何か事情があるんだろうということは分かるし……。

とはいえ今更事情を全部説明するのも……。いや、そうするべきか。そう思い直す。

少なくとも茶々ちゃんに関しては葵さんに恩義があるようだし、少



し穿った捉え方ではあるけど要は「恩人を売れ」って言っているわけだから、こちらとしても誠意を見せるべきだと思った。

「実はね、瑠璃ちゃん。オレの」

「知らないって言ってるでしよう？ 行こう、茶々！」

「えっ!? るりちゃん!? え、え……っ!? あ、えつと……らいるお兄さんさようならー!」

瑠璃ちゃんが茶々ちゃんの手を引いてスタスタと歩き出してしまった。

「言……てた……しよ! ……さん……ら! 昨日……つて……人……気を……ろつて」

「そ……で……お……ちが……」

なんか言ってるな……。

聞こえないけど……。

しかし困ったな……。取り付く島もない。

今追いかけても話は聞いて貰えないだろう。とても頑なな感じがしたし、今追いかけてしつこく食い下がると今後の関係に軋轢が生じかねない。瑠璃ちゃんはともかく、茶々ちゃんはお隣さんだしな……。オレと瑠璃ちゃんの間には挟まれると茶々ちゃんも困ってしまうだろう。

なら茶々ちゃんが一人の時にまた話を聞いて……。いや、でも茶々ちゃん葵さんのことあんまり詳しくなさそうだったし、そもそも居場所知らないんだよな……。もしかしたら居場所を推理できるような情報を持っているかもしれないけど……。

なんとなくだけど、茶々ちゃんを含めた茶都山家と瑠璃ちゃんが居なくなっていたことに、葵さんが関係しているんじゃないかとオレは思う訳で。もし何らかのトラブルに巻き込まれていたところを茶々ちゃんが言うように瑠璃ちゃんも助けて貰ったのだとしたなら、その義理も重いものだろう。

しかもなんか警戒されていたし。不信感みたいなものも抱かれてそうだった。

ちよつと気落ちしながら歩き出し、ふと思った。

——オレもしかしてめちやくちや怪しいムーブしてたのでは……？

魔法少女（仮）たちの隠しておきたいらしい秘密を、妙に知ってそんな雰囲気詮索して来たと思ったら、急に話を合わせて来る年上の男性……。

しかも魔法少女（仮）たちの共通知人で、魔法少女（仮）たちも行方を捜している恩人をどうやら探している様子で、魔法少女（仮）たちに探りを入れて来る年上男性……。

うーん……。

敵幹部とかに居そう……？

詳しくないから分からないけど……。

いや……参ったな……。

そんなつもりは無かったんだけど……。

ぽりぽりと頭を搔く。

とりあえず……大学行こう……。

??

やっぱり世の中ってというのは知らないことがたくさんあるものだな、と思う。

オレがオレの人生を送っているように、他の人達もまたそれぞれ別の人生を送っている。人生という道が交わるときもあれば交わらないときもあり、他人のすべてを知ることなど出来はしない。

大学生活を送り、裏社会に関するトラブルに巻き込まれ、さらに別の意味での闇社会に触れたオレのここ最近の日常は波乱万丈なものだった。だけどオレのそんな日々の詳細を知らず、部分的にしか関わっていない人……例えば近所のお爺さんからすれば、オレはタクシーで散歩してる変な若い衆くらい認識だろう。お爺さんはお爺さんで日課の散歩の最中に猫を見掛けたとか腰が痛くなったりとか、孫が遊びに来てくれて張り切っちゃったりとか、お爺さんからすれば大事件に巡り合っているかもしれないし、なんなら若い頃には今のオレと同等かそれ以上に波乱な日々を送っていたかもしれないが、オレからするとジジイジョークで若者を揶揄う人だ。お爺さんの過去どころか、今どんな暮らしを送っているかすらも知らない。

人間はそれぞれ自分の世界の主人公だが、他の人の世界においては脇役だ。

小学校時代の同級生のことを思い出し、しみじみと懐かしむ自分という主人公がいる一方で、「そんなやついたよなあ」と懐かしまれている、誰かの人生にちらと登場した脇役としての自分もいる。

自分にとっては対岸の火事であって、特に自分の人生に関わりのないことでも、対岸にいる人からすればその人の人生における大事件、物語のターニングポイントである。

律ちゃんの件にしてもそうだ。

オレからすると、律ちゃんの件は極端に言えばたまたま通りがかったから出来る範囲で寄り添っただけのことであり、オレの人生の大きな分岐点になる事案ではなかった。だけど律ちゃんやご家族の立場からすれば、今後の人生そのものを大きく左右する大事件である。ち

なみにまだまだ先になるようだけど、律ちゃんのお母さんから、律ちゃんのお見舞いの誘いというか、お願いをされた。入院中の律ちゃんが弱弱しいながら一生懸命に騒いでいるらしい。なんかオレの知ってる律ちゃんとは印象が違うけど、ループの中で強くなったということなんだろう。

今オレが平穏……な生活を送っている平凡主人公な一方で、世界のどこかにはなんらかの問題に直面している崖っぷち主人公もいる。

誰もが人生の主人公であり、誰もが人生の脇役だ。

ものの見方、立つ視点によって、物事は二転三転もする。だから人生は複雑怪奇なのだろう。

ちよつと最近複雑怪奇すぎるけど……。

「ライさんさあ。この後用事あんの？」

夕暮れを迎え、夜の帳が降り始めていた頃、講義を終えたオレに話しかけてきたのは田辺だった。

相変わらず筋骨隆々な田辺の頭部を見る。毛髪が刈り取られた頭部の光沢が凄かった。

その見事な光沢に思わず微笑んでしまったオレは田辺へと言った。

「お疲れ様。田辺、さては最近頭剃ったね？ 綺麗に手入れが行き届いているのが見ただけで分かるよ」

「おー!? 分かんのか〜!? さすがライさんだなあ〜! 実は最近クリームと化粧水変えてさあ。綺麗に剃れるんだよなあ〜! つるつるなんだぜ、つるつる〜!」

間延びした口調で嬉しそうに笑う田辺が自分の頭部をぺたぺたと触っている。

丹念に剃り上げただけかと思っただけど、頭皮を守るためにクリームや化粧水にまで気を遣っているらしい。素晴らしい。明日香さんのドリルに関しても思ったが、オレもそういった身だしなみに対しては二人を見習いたいところだ。

でもオレは割と面倒くさがりで、内心でも結構すぐに面倒だと愚痴することもあるし、今どう思おうが結局は最低限の身だしなみから能動的に踏み出そうとはしないだろうと自覚しているので思うだけだけ

ど。

「ライさんも触るかあ〜?」

「いや、遠慮しておくよ。見てるだけで充分伝わって来るから」

「そっかー」

やんわりと断りを入れると、何故か田辺は残念そうに笑った。

「えー!? じゃああたしに触らせてよたっちゃん!」

オレと田辺が話をしていると、見るからにギャルって感じの女の子が話に加わって来る。

オレ達の話聞いていたらしく、その子は田辺の頭を触りたいらしい。田辺への気安い態度からして友人だろう。確か田辺が仲良くしているグループに属している女の子だったと思う。オレは他人に対して能動的に関わったり覚えようとも思わない淡白なところがあるから、よく覚えていないけど。

「おー! いいぜ〜!」

「やったー!」

田辺がその巨体を女の子の方に向けて前屈させて、頭を差し出した。

女の子は無邪気な様子で喜び、両手でぺたぺたと田辺の頭を触り始める。

感性は人それぞれだと思うので言及は避けるけど、坊主の坊主頭を触って何が楽しいんだろう……?

分からない……。

二人の戯れをじつと見ていると、女の子の手の込んだ長いネイルが目についた。刺さったら痛そうだなと少し思いつつも、それを伏せてオレは言った。

「へえ、手の込んだネイルだね。そんなに細やかに細工出来るものなんだ……?」

「え!? あんたこれ分かんのお!」

女の子はオレの言葉に驚き、そして嬉しそうに笑うと田辺から手を放し、オレの方に近づいてきた。

顔が近い。距離が近い。ぐい、と遠慮も無くといった感じだ。

オレは自然に体を逸らしながら後退して距離を取り、頷いた。

「オレも詳しいわけじゃないんだけど、色々デコレーションされてるからね。相当手先が器用じゃないと出来ないんじゃないかと思ってる。ピンセットとか、虫メガネとかを使って丁寧に装飾されてような感じがするかな。機械で作ってるなら恥ずかしいところだけど、努力を感じるよね。感心する」

オレの言葉を聞いた女の子は瞳をらんらんと輝かせ、嬉しくて堪らないといったふうに関を緩ませた。

「え、なにい?! あんた、話わかんじゃん! ただの根暗だと思ってた!」

失礼だな。

落ち着いていると言って欲しいところだ。あと、一言多いよ。最後の一言要らないと思うんだよね。

「根暗。そうなのかな? でも、その言葉はオレとしてはあまり気分は良くないね」

「ほら、なんかめんどくせー言い方するし!」

めんどくさいか?

しかし失礼な人だな……。

無邪気な感じで笑ってるから悪気は無いんだろうけど、ライン越えなのでは?

一応初対面……じゃないのかな。女の子の言葉から察するに、オレ達は以前にも話したことがあるみたいだし。そういう意味ではこの人のことを覚えていないオレも失礼といえれば失礼か……。

「面倒、か。君がそう感じるのには構わないし否定もしないけど、オレはオレなりに考えがあつてこういう話し方をしてるからそう言われるのは心外かな」

ものすごい勢いで距離を詰めて来たと思つたら不愉快なことを言ってくる。

怒りはしないけど、しつかり苦情は入れておきたいところだ。言われてそのままはストレスが溜まるからね。

この子にも悪気は無さそうなんだが、自分の世界が全てと思つてそ

うな感じはする。

よくも悪くも。こういう子は波長が合えば楽しいんだらうけど、波長が合わないとは距離感が合わずストレスが溜まりそう。今のオレのように。軽口を叩き合える関係性なら、こういう子はかえってストレスフリーで楽しいんだらうなあ、とはなんとなく思う。

台風のような人というか、自分に素直に生きているというか。好きなどころへ行き好きなように進み、人に踏み込んであっけなく離れ、周りに多かれ少なかれ影響を残していく。

周りから大切にされて自由に生きて来たんだらうな、と思う。よく言えば自分に正直で純粹、奔放な魅力がある。悪く言えば極端な無神経、といったところか。

まあ、オレも迂遠な言い方をする傾向があることは自覚してるのでそこは甘んじて受け止めよう。

些細な言い間違いや語弊で人を傷つけないように、そしてオレ自身の感情をしっかりと言語化して伝えることを考えて生きてきたらいつの間にかこうなっていたので、もう変えるつもりも無いし、変わらないと思うけど。

「えー、なに？　つまりどういうわけ？」

オレの言葉を聞いて女の子が小首を傾げながらそう言った。

煽って来てるのか、本当によく分かっていないのか分かりづらいつころだ。

まあオレとしてはあまり関わっていたいと思うタイプの人間ではないので速やかにお暇したいところではある。

「つまり、そういう言い方をされると、オレはかなり嫌な気分になるから止めて欲しいってこと」

「……あ、そーいうこと。ごめん」

「わりい、ライさん。こいつオレより馬鹿だからよお」

田辺は馬鹿じゃないけど、田辺なりのフォロワーということだろう。

「えー、なにー？　この間のテスト、たっちゃん点数そんな変わんなかったじゃん？」

「座学の話はしてねーんだよな」

田辺。君は間延びした口調だけで、座学も人間関係にも敏い良い奴だよ。

内心で田辺の評価を上げている傍ら、田辺は続けた。

「おー、響子。おめーちゃんと謝っとけよなあ。ライさんによー」

間延びした口調は変わらないし、圧が強まってるわけでもないんだけど、田辺が彼女……響子さんに発した言葉は真剣味を感じる。

「えー。謝ったけど？」

「誠意がねえだろうが誠意がよー」

「謝ったってー!」

「まあ、そうだね。えつと……響子ちゃん? は謝ってくれたよ」

「あれえ? あたし名前覚えて貰えてなかった感じ? ひどーい」

「ごめんごめん。響子ちゃんだね。覚えておくよ」

なるべくね。

結構嫌な思いをさせられたから忘れないと思うけど、逆にだからこそ忘れることもあるからな、オレの場合。保証は出来ない。

そんなことを思っただけ丸く収めようとしていたところ、田辺が響子ちゃんに向かってこう言った。

「あんなあ響子よく。ライさんはオレのダチなわけよく。んでさ、お前がめんどくせーだなんだって言ったライさんのそういうところをオレは尊敬してるし、好きなんだわ」

「えつ、告ってんの?!」

「ば、おま、茶化すんじゃねーよ!」

「ちよ、ガチっぽくてウケる」

「あんなあ、マジな話してんだからよく。ライさんは優しいし包容力あるから流してくれてるけどよく。お前、そりゃねーよ。せつかくライさんがおめーが頑張っただけ作ったネイル褒めてくれてんのにさ」

「えー? そんなんガチ説教じゃん。あたしそんな悪いことしたあ?」

「したから言っただらうがよ」

「なにそれ。意味わかんないんだけど」

え、なに。



凄く険悪な感じになって来て困るんだけど。帰っていいかな？

オレはもう流すつもりだったけど、田辺が割と真剣に注意してくれている。

オレのために争わなくて良いよ、別に。

「田辺田辺。いいよ、大丈夫。ありがとう。田辺の気持ちは凄く伝わって来た。オレも気にしてないし。ありがとうね」

「いや〜。ライさんがそれで許してもさ、オレが見てらんねえからさ〜。それによ〜、響子。おめーもそうだよ」

「あたしもって、なにが？」

さっきまで頭を気安くペタペタ触っていた、気安そうな間柄だったとは思えないこの雰囲気。

田辺の配慮に感謝を伝えることで田辺の感情を落ち着かせ、丸く収めようとしたけど通用しなかったのは驚きではある。

そして響子ちゃんは……信乃ちゃんともまた違う方向で精神的に未熟なのかもしれない。気にして来なかったというのか、自分の言動が周りにどんな影響を与えるのかを考える機会があまりなかったんだろうな。あと無意識に人を馬鹿にする癖というか、若干人を見下すような傾向もあるのかな？ 自己肯定感が高そうというか、自信に溢れてストレートなところは彼女の魅力だとは思うけど。

そこまでは考えたところでまだ分からないけどね。

まあ、それを考え過ぎると内向的になり過ぎたり、言葉狩りみたいになって何も喋れなくなってしまうからバランスも大事だ。

オレ自身も人間関係を深めるまでに様子見と段階を踏む癖があったて、その結果迂遠になっちゃってるしね。それを再確認できたという意味では響子さんに感謝したいところではあるかな。

下手に言葉を選び過ぎても、かえって語弊を生むこともある。この間の茶々ちゃんと瑠璃ちゃんのときみたいに。

ただ大事なものは、素直な自分を表現した結果として相手を傷つけてしまったなら、そこも素直に謝るといふことなんだと思う。前提として明らかに適切じゃない言葉を使わないというのはあるけど。

響子さんの場合、めんどくさいとかの言葉が負の意味を強く含んで

いるというか、そう感じる人がいるってことを理解していないだけっぽいけど。オレはそう思うからめんどくさいって言葉は内心で良く思い浮かべても決して言葉にはしないし。そう思わない人からすれば些細な言葉のニュアンスの違いでしかないし。日本語って、難しい。

そんなことを考えながら静観していると、田辺は困ったように頭をペタペタ触りながら、言葉を選ぶように話し始める。

「なんつえば良いんかな〜？ オレさあ、馬鹿だからさあ。みんな仲良くして欲しいわけよく。ライさんはオレンダチだし、響子もそうだしさく。ぎくしゃくして欲しくねえんだよく」

「……」

「……」

あら可愛い。

オレは変わらずとして、響子さんも黙ってしまった。

「ライさん大人だから、にこにこしてくれてるけどよく。わかんねえだろ〜？ 結構嫌そうだったからさあ〜。せめてしつかり謝つってほしいっ〜かさく。心配でよく」

まあ、確かに。

でも今の田辺の言葉で完全に霧散したよね。蟠り。

潤滑剤って、こういう人のことを言うのかもしれないな。

なんてふと思った。

「はあ……。分かったって。ごめんね、東堂くん。あたしが無神経だった」

「いいよ。悪気が無いのは分かってる。誰に対しても忌憚なく踏み込めるって、きつと凄く素敵な長所だと思うし。君の場合、踏み込み方が雑だけど」

「かあーあんたも意外と言うじゃあん？ ふーん？ そういうこと言うんだ？ ふーん？ あー！ あたしもやな気分になった！ 謝って！」

「はは。ごめんね。オレが無神経だった」

「パクんなし!!」

そう言つて響子さんは翳りなく笑つた。

やっぱり長所と弱点は表裏一体だと改めて思う。

最初に思つた通り、波長が合つて打ち解けられさえすれば気持ちの良い子なのは間違いない。

そしてそんなオレたちを見てにこにこ嬉しそうに笑っているのが、手入れの行き届いたスキンヘッドを輝かせている筋肉もりもりマッチョマンの田辺なわけだ。

傍から見てもどういふ状況なんだろうと興味が湧いて来るが、とりあえず話を戻そう。

「それで田辺は何かオレに用？　オレは特に用事は無い……ことはないけど……」

信乃ちゃんたちの件がある。

それ以外は別に無いし、あれからずっと毎日通っているから、田辺が何か用事があるというなら今日は田辺を優先しても良いかなとは思うけど。

「この間カラオケ行つただろ〜？」

「えー、なにそれ？　あたしそんな聞いてないんですけど？」

「おめーあの日いなかったんだからしゃあねえだろ。ふけやがったくせによ。被害者ぶつてんじゃねえよな。いても誘わなかったけど」

「はあ？　なにそれひつどー」

話がまた脱線してる。

仲良さそうなのは微笑ましいところだけど。

もしかして付き合っていたりするのかな？

聞かないけど。

「うっせーなー。お前ちよつとだまつててくれよ。話が進まねえからさ〜」

「なに？　あたしが煩いってこと!？」

「そう言つてんだろ〜」

「ひつどー！　はげ！」

「剃つてんだよ。もういいから。んでさ、ライさん。あんどき、ボー

リングの話したろ？ 良かったらどうかなんて思ってたさ〜」

「ああ、覚えてるよ。今から行きたいってこと？」

「そうなんだよ。どう？」

「良いよ。行こうか」

「マジかあ！ やったぜ〜い！ ライさんありがとなく〜！」

「むしろこちらこそだよ。誘ってくれてありがとう」

「あたしは!? あたしは!? あたしも!!」

ちら、と田辺がオレを見て来る。

オレが良ければ良いということだろう。

それを言葉にしないのは、言っちゃうと圧が掛かってしまうからという配慮かな？

やっぱり良い奴だね、田辺。

「良いよ。一緒に行こうか」

「やったー!! 東堂君やっさおー!!」

響子さんは無邪気な様子で飛び跳ねて喜んでいる。良くも悪くも感情に素直で裏表がないってことなんだろう。

オレは言った。

「ところで、なんだけどさ」

「なにー？」

「君、名前なんだっけ」

「はあー?! マジで覚えてないん!? ひっどー! たっちゃん聞いた今の?!」

「聞いたけど、んな感じだよライさんは。オレも覚えて貰うまで結構話しかけたしなあ〜」

「えー、やっぱ根暗じゃん」

「黙れ張り倒すぞ」

良くも悪くもぐいぐい距離を詰めて来る響子さんは、多分これくらいぞんざいに扱うくらいが丁度いいんじゃないかと思った。信乃ちゃんに対するような感じで慎重に距離感を探っていると、気づかないうちに物凄い勢いで踏み込まれてしまいそうな危険を感じる。以前も思ったことだけど、オレは性急な距離の詰め方はあまり好まな

い。

そう考えての言葉だったんだけど、それを聞いた二人の反応が劇的だった。

田辺は首が千切れ飛ぶかと思うくらいの勢いでオレの方を見てきて、響子さんは何故かちよつと嬉しそうに笑った。

……。

まさか。いやでも。

そう考えると、散らばっていたピースが線で繋がりはじめの感覚がしてくる。

無遠慮に踏み込み人の怒りを買いかねない言動。

和解後のダル絡み。

田辺の見せたちよつとぞんざいな対応への、甘えたような反応。

ガチ説教になるまでは田辺に責められてもヘラヘラしていたこと……まあこれに関しては真剣に受け止めていなかっただけという可能性もあるけど。

そして今の反応。

オレは思った。

——この女、DMか……？

???

田辺と響子さん改め日谷響子さんと共にボウリング場に着いたオレは、久しぶりに見るボウリングボールの数々に若干の興奮を感じていた。あの光沢にはどこか人を惹き付ける何かがあると思う。

どのボールを使うかと思案していると、田辺が一番重い球をひよいと持ち上げてブースへと戻って行った。その肉体は張りぼてにあらずということだろう。オレは田辺と同じボールを試しに持ち上げてみたが、何度もこれを持って大きく腕を振るのは大変だと判断し、そつと戻す。少し軽めのボールを手に取り、オレもブースへと戻った。

「東堂君さあ。とーちゃんって呼んで良い？」

「それはちよつと語弊が生まれそうだから遠慮する」

「あはは！ 冗談だつてじよーだん！ いちいち真面目じゃん！ ウケル」

「君はいちいち面白そうだね」

席に着いたオレを待っていた日谷さんが揶揄ってくる。田辺はトップバッターとして、既にレーンの方に立っていて、ブース内には居なかった。

しかし、日谷さんはいちいち人を小馬鹿にしてくるような感じがして良い気はしない。苦手なんだよね、こういう人。人の心情を考慮する前に、反射的に会話する人。レスポンスが高いって言うのは長所なんだろうけど、知性が伴わないと人を不快にさせるっていう致命的な弱点になるよね。

しかも質が悪いところは、それで相手を怒らせた結果、逆襲されるのを喜ぶ癖を持ってそうなところだ。地頭は悪くなさそうなので、なんならこの女、意図的にやってる可能性もある。もしかして無敵か……？

凄いな……。そういう意味では尊敬に値するかもしれない。なりたいたとは思わないけど。

そういう性質なので、苦手というかあまり関わりたいと思わない相

手の長所も頑張って探してしまいうけど、弱点の方が目について疲れるな。やはり断るべきだったか……。

田辺がゲームを開始するようだ。大きく腕を振った。

田辺がフルスイングして手放したボールは床に触れることなく直線ですつ飛んで行く。そしてピンのすべてを薙ぎ払った。凄く重い音がした。ボールが壁に激突したんだろう。店の壁は大丈夫か？

オレは田辺を二度見した。

こ、これは……。

異変か？

そして当然のようにストライクを叩きだした田辺がブースへと戻って来る。

「たーちゃん相変わらずすつご!! やっぱゴリラじゃん!」

「うっせーなあ〜」

「ゴリラは褒め言葉としてはあんまりよろしくないんじゃない?」

「えー?? ゴリラ可愛いじゃん!」

どうやら田辺の怪力はいつものことらしい。

日谷さんは驚いた様子はなく、素直に賞賛している。一言多いけど。

「ナイスコントロール。凄いな、田辺」

オレが手を上げてストライクを讃えると、田辺は素直に喜んだ様子でオレの掌を軽快に叩いた。オレの掌が弾かれる。すげー痛い。一瞬だけど自分の表情が若干歪んだのを察するが、田辺には気づかれなかったようだ。

オレの番がくる。

一回目はガーター、二回目は6本。

田辺の後だから酷く感じてしまうが、十数年ぶりのボウリングだと考えれば普通なはずだ。むしろ良いはず。

心なしか重い足でブースへと戻る。

「どんまい東堂君! でも下手だねー。ぜったいあたしの方が上手いわこれ」

ヘラヘラと笑いながら励ましてくれたかと思えば……。ケラケラ

と楽しそうに笑っているのは良いんだけど、一言多いんだよ一言。

田辺は僅かに顰め面を浮かべて日谷さんを見た後、申し訳なさそうにオレを見てくる。

根本的なところでオレ達が合わないのは既に察しているようだ。

ここに来るまでも何度かこんな感じの会話があったし。

「んじや行ってきまーす」

「いってらっしゃーい」

軽いボールを持ってブースから離れていく日谷さんに声を掛けたオレの傍に田辺がそそくさと寄って来て、隣に座った。

「……ライさん大丈夫？ ごめんなく」

「ふふ。気にしてくれてるんだ？ 田辺はやっぱり良い奴だなあ。ありがとう」

「いやあく……」

オレの言葉に、田辺は嬉しいような気まずいような、なんと言って良いか困ってそうな複雑そうな表情を浮かべた。

ゲームが進んで行く。

一人盛り上がる日谷さん。多い一言に苛立ちを積もらせるオレ。はらはらと見守る田辺という構図が続く。だが田辺の顔を立って黙っていたオレ、田辺を再三揶揄され辛抱堪らず動く。

「日谷さんさ、一言多いよ。直した方が良いと思うな、その癖」

「はあ？ なに、いきなり」

「日谷さんにとってはいきなりかもしれないけど、オレにとってはそうじゃない。ここに来る前に田辺からも注意を受けていたし、オレもやんわりと指摘していたつもりだけど……伝わってなかったみたいだね」

「なに？ きもいんだけど」

「そうやって強い言葉を使えば誰でも怯むなんて思わないことだね」

じつと日谷さんを見る。

「意味わかんないんだけど。きつしよ」

「それは多分分かるうとしてないだけだと思うよ」

「なにマジになってんの？ うっぎ」



「はわわわわ……」

いきなりどん底の雰囲気叩き落とされた田辺がおろおろとオレと日谷さんを交互に見て戸惑っている。

「日谷さんって明るい性格でレスポンス早いし、凄く楽そうに話をする人だなとは思っただけど、人を揶揄する言葉が最後に混ざるからその好印象が全部吹っ飛ぶんだよね」

「それはそう……」

田辺が神妙に頷いている。人を揶揄する言葉を最後に残したのは今しがたの日谷さんの言葉への意趣返しか、日頃の鬱憤が溜まっているのか。

オレはこういう人とはなるべく距離を置くタイプだけど、田辺は人が良いからある程度我慢して受け入れるんだろうなと思う。

田辺が言っていた、オレに対する印象や評価から考えると……。田辺がオレとの交友を求めてきたのは、オレがそうだったことをしない人だと察したからかもしれない。助けを求めるといって大袈裟だけど、関わっていて気が楽だと思っただけならオレとしても嬉しいことだ。

「なに？ アタシに説教する気？」

日谷さんが不快げに表情を歪めた。

オレとしても説教なんてしたくないけど、今日解散するまでずっとこれに晒されるのはさすがに耐え難いところだ。

オレだけならさっさと帰ったり、さっきみたいに罵倒で切り返すこともするけど、いちいち田辺を揶揄する言葉まで聞かされるのは酷く不愉快だ。田辺を庇うという意味もあるけど、オレがね。友人が揶揄されるのを見聞きするのは不愉快だ。オレも人をからかうのは嫌いじゃないけど、それは大前提として好意を伝えるためという意図がある。日谷さんのはあまりに嘲笑の意図が強い。

「まあまあ、落ち着きなよ。なにか説教って単語にトラウマでもあるの？」

「アンタには関係ないでしょ」

「そだね」

聞いてみただけだし。答えてくれるならオレなりにまた考えたけど、突っぱねられたら深追いしようとは思わない。

ほんのりと微笑んでいるオレと顔を顰めている日谷さん、そして困った表情で頭を光らせているのが田辺だ。

「なに、それ。アンタさ、空気読めないわけ？ 楽しくやってたじゃん」

「いやあ、オレは結構不快だったよ。君は楽しかったかもしれないけど」

「……」

ひくり、と日谷さんの表情が歪む。

効いてる効いてる。

今までなあなあで来たんだろうな。日谷さんの無邪気で明るい……悪く言えば傍若無人な振る舞いを前に、自分の意思を発せられない人が多かったんだろう。

もちろん、日谷さんのそういうところを好ましく思う気持ちの方が強かったり、そもそもとしてオレが「余計な一言」と感じている言葉を重く受け止めず、良好な関係を築いている人もいるとは思うけど。

波長が合えば楽しいし、合わなければ苦痛。それは最初の評価通りだ。

「アンタさあ、頭おかしいんじゃないの？ 普通じゃないよ」

それはオレの逆鱗だから止める。久方ぶりにオレ自身のことと怒りを覚えた。

律ちゃんとか信乃ちゃんにも似たようなことを言われたけど、二人のときは状況がまるで違う。

だけどオレは自分を律した。何故ならここで感情を震わせると、オレの急所を晒すことに繋がるからだ。マイペースをモットーとしているオレだけど、そこを槍でめつた刺しにされるとさすがに自分を保っていられる自信は無い。いつかのときのように怒り狂っても碌なことにはならない。

一拍置いて、オレは言った。

「うーん……。君の普通がどうかは知らないけど、話をするたびに擲

揶揄されるなんてことが続いているのにそれを全く気にしない、なんて人はいいんじゃないかな? 『普通』なら。ただ君が見て見ぬふりをしてるだけだと思っただけど、どう?」

オレとしても以後も関わりを持ちたいとは思わないので黙ってやり過ぎしても良いんだけど……。

オレは日谷さんと田辺の交友関係、その実情を知ってしまった。そしてオレと田辺が友人である以上、これからのオレはきつとそれなりに二人の関係について思考を割かれることになる。

ならもう言っちゃおう、と思っただのが今だった。もしかしたら日谷さんの悪癖が改善されたり、田辺に対してのだけでも態度が変化する楔になるかもしれないし。

「覚えていてもらえると嬉しい。ただそれを表現できないだけで、君の何気ない一言で傷ついている人がいるかもしれないってことを。今までにいなかった? 軽い気持ちで人を揶揄するような言葉を発したとき、ふいに黙ってしまったたり、愛想笑いを浮かべていた人。落ち着いて、ちよつと考えてみてくれない?」

「そ、そんなこと覚えてねーし」

「そっか……それは凄く残酷なことだとオレは思う。ただ……もしそのことに少しでも罪悪感を感じているなら、気を付けた方が良く思うんだ。いずれそれは君自身の首を絞めることになる」

「なんな—」

何かを言い掛けた日谷さんの言葉を遮ってオレは続ける。

「ただ改めてちゃんと伝えておきたいのは、オレは日谷さんが楽しそうに話していたり、明るい雰囲気は凄く好ましく思ってるってこと。日谷さんの元気で明るい感じ、そこはオレ、結構好きなんだよね」

「は……?」

鳩が豆鉄砲を食らったような表情で停止する日谷さんにオレは続ける。

「でも……揶揄されるのは哀しいよ。田辺のことを悪く言ってるのを聞くのも、オレとしては辛い」

「……」

日谷さんがもごもごと口を動かし始めた。

喧嘩モードに入ろうとしていたようだし、思わぬ返しを食らって動揺し、勢いが削がれたって感じかな。

でもオレは別に喧嘩をするつもりはない。

「それだけ。ごめんね、嫌な思いをさせちゃって。田辺もせつかく誘って貰ったのにごめん。日谷さんの言う通りだ。オレは和を乱すようなことをした」

「いや……んなことはねえよ。んなことは……」

田辺が口籠る。

否定も肯定もしなかったけど、ある程度はオレと同じことを思っただけ。はい。同時にオレの言動に困惑してもいそう。

田辺の口ぶりからして、日谷さんの悪癖については軽口を装って日頃たびたび注意をしていたんだと思うけど、全く伝わってなかったんだ。さっきはオレを庇うために明言してくれたけど、和を重んじていそうな田辺は、普段から日谷さんの言動にある程度目を瞑っていたのかもしれない。

声が大きい人に逆らわない、あるいは逆らえないというのは、大多数の人の在り方だろう。面と向かって戦おうとする人は……まあ、いない。子供の頃はぶつかり合っていたけど、大人になるにつれて波風を立てず、自分が我慢した方が遥かに楽なことに気づくからだ。そして社会に出た後はさらに顕著になっていく。職場や高校の学校だと、その人とはずつと付き合っていくか、いけなから、人は以降の関係を悪くすることこそを忌避する。ささくれ立ち傷ついた自分の心から目を背けながら。

孤立していることに気づかないお局様と、内心では忌避しているものの、「大人」だからこそそれを表現しない同僚、なんかが分かりやすい例かな。強い自我に物を言わせて、優しい人や繊細な人を押し込める。オレはそういうことをなあなあにするのは好まない。

「日谷さん。もし、何かオレに言いたいことがあるならちゃんと聞きましょう。ゆっくり話をしよう」

そう言っただけは微笑み、日谷さんを見つめた。

日谷さんは何も言わず、目を泳がせた後、僅かに顔を伏せる。何かしらは伝えられたみたいだ。多分、根は悪い子じゃないんだよな……。オレとは合わないけど。

不快にさせてしまったことは申し訳ないけど、痛み分けということですんで許して欲しい。オレも十分不快な思いをしたから。

しばらく待つが日谷さんは動かないし喋らない。

どうしたものかと考えて、オレはカバンを手に取って席を立つ。

オレはゲームを続けても良いけど、日谷さんが気まずいだろう。あの意味では彼女のこれまでの常識に正面から殴り掛かったわけだから。

もし受け止めてくれるにしても落ち着くまで時間がかかるだろうし。聞く耳を持たないならそれはそれで構わない。一番最悪なのはやっぱり意図して他人を見下し、揶揄しているという、性根が腐つてるタイプのやつ。だとしたらオレとしてはもうこれ以上我慢して関わる必要性は感じない。

オレが同行を許可した手前、本当に田辺には申し訳ないけどね……。

それはもう、オレが1000割悪い。田辺には後日、埋め合わせをしたいところだ。

「改めて、本当に申し訳ない。日谷さんもあまり落ち込んだり、思いつめないで欲しい。怒っているわけじゃないんだ。ここの支払いはオレが持つよ。田辺も、良かったら今度埋め合わせをさせて欲しい」

「ライさん……」

「それじゃあ、またね」

三人分の代金をテーブルの上に置いてオレはブースを離れた。

ボウリング場から出たとき、後ろから呼び止められる。

「ライさんー!」

田辺だった。立ち止まり、振り返る。

「田辺、どうしたの?」

「いや、謝りたくてさあ。やっぱ断るべきだったよな」

「受け入れたのはオレだよ。彼女との相性を見誤ったオレの自業自得

だ」

「そんなことは……」

「ありがとう。その気持ちは受け取っておくよ。ごめんね、本当に。KYだって最近結構言われたんだけど、実際そうなのかも、オレ」

「うーん。それでもねえと思うけど……。正直、オレちよつとスカツとしたしなあ〜」

田辺が苦笑気味に笑う。

「あいつ、ガキの頃からの付き合いでさあ〜。昔はあそこまで酷くなかったんだけど、なんか妙に偉そうになつちまったと言うか……。いつからかは覚えてねえんだけどなく。オレがもつと早く、ライさんが言ったようなことを言つてやるべきだったんだ。実際、浮き始めてたしなあ、あいつ。高校時代のダチも、卒業したらあいつから離れちまったし。大学のダチが離れる前に知れて良かったんじやねえか。なつてオレは思う。なんか最近は大学外の変な奴と付き合い始めてたみたいだし……。良い薬になるんじやねえかな〜?」

「そつか……。今は嫌な気持ちかもしれないけど、今日のことと日谷さんの交友関係が改善されたら良いね」

「そうだなあ〜。それで、ライさん、これ」

そう言つて田辺が差し出して来たのは、オレがテーブルの上に置いてきたボウリング代の一部だった。

「オレの分のボウリング代、返すわ」

「受け取つてよ。お詫びだしさ」

「いや、こんなんでライさんと貸し借りにしたくねえんだ。もつと気軽な感じでさあ〜、行きつけの店のお気に入りのメニュー奢つたとか、そういうのが良い」

「……そつか。君はほんとにいいやつだねえ」

本気で感心する。オレは田辺から代金を受け取つて、財布の中に仕舞つた。

「へへ。なあ、ライさん。また遊んでくれっかな?」

「もちろん。田辺さえよければオレの方からもお願いしたいよ」

「へへ! じゃあ、オレ戻るわ〜。今のあいつを一人にするのもアレ

だからさあ〜。またな〜！」

「ああ。また」

手を振り合って、オレ達は別れた。

田辺の後姿を見送って、オレもまた帰路に就く。

しばらく歩いてしていると、携帯電話の着信音が流れた。

知った番号。

オレは通話アイコンをタッチし、電話に出る。

「もしもし」

「ライルくん！ 今日はいつ来るん!？」

「信乃ちゃん……。元気だね……」

電話の相手は信乃ちゃんだった。

「いや、今日は用事があって行けないよ」

「えー。そんなん聞いてねーよ!」

言っていないし。用事自体も突然だったからね。

そもそも毎日見舞いに行く義務は無いんだけど……求めてくれて  
いる分にはありがたいので言及は避ける。

「用事ってまだあんの?」

「いや、もう終わったよ」

「じゃあ今から来てよ」

「いや、もう面会時間過ぎてるから……」

「やだー!」

「我儘言わない。というか、病院でそんなに叫ばないの。携帯で病室  
から掛けてるんだらうけど、夜の病院は響くから。桃香ちゃんも近く  
にいるんでしょ? 驚かせちゃだめだよ」

「はい……」

しょんぼりとした声が電話の向こう側から聞こえて来る。

オレは苦笑し、言った。

「明日行くから、今日は良い子にしてくれない?」

「わーった。絶対な! 明日な! 朝一な!」

「はいはい。朝一に行けるかは分からないけど、努力はするよ」

信乃ちゃんとの電話を終え、駅に向かい電車に乗り、地元に着いて

東堂家へと向かう。

東堂家の門前に着いたオレは、ふいに茶都山家の窓を見上げる。窓からは薄っすらと明かりが漏れている。ちゃんと在宅のようだ。茶都山家の門の中には車も見えだし、ご両親もいるだろう。一体、先日のアレはなんだったのか……。何事も無かったかのように日々が続いているのが謎過ぎる。

今から訪ねてこの間の話を改めて聞いてみるか……。いや、さすがにそれはバッドマナーか。

そんな考えも浮かんだとき、ふと気づく。茶都山家の反対側、東堂家の門から少し離れた地面に、何か小さなものが置かれているのが見えた。

古ぼけた電灯が薄っすらと照らす夜道で、オレはその何かの方へと向かう。

目を凝らしても良く見えないので、携帯のライト機能を使い、足元を照らす。

そこにあつたのは。

「動物……？」

犬、かな？

柴犬くらいの大きさだ。

首輪が無いから飼い犬が逃げ出したって感じじゃないけど、野良なんだろうか。

この辺に野良犬っていたんだな……。まあ、田舎だしなあ……。

ふと気づく。

やや赤みを帯びた黄褐色の体毛は泥と……。黒ずんだ赤色で汚れている。

もしかしてこれ、血か？

怪我をしている？

車にでも撥ねられたんだろうか……。可哀そうに……。

そう思いつつ、死体の処理をもらうために道路緊急ダイヤルに連絡をしようとしたとき、倒れていた犬が身じろぎをしたのが見えて、手が止まる。



生きている。  
どうしよう。

こういうときは保健所？

でも殺処分されたりしないかな？

薄っすらと犬が目を開けた。

何かを訴えるようにじっとオレを見ている。

良く見ると犬にしてはちよつと顔が細長い。足もだ。

そういう犬種か？

いや、これ、犬じゃないな。狐だ。

なんで狐がこんなところにとは思うけど、まあ田舎だし山も近いし降りて来たんだらう。そして車に轢かれてしまった、と。

可哀そうだけど……。

「くうん……」

切なそうに、苦しそうに狐が鳴いた。

……。

しょうがないなあ……。

開いてる動物病院って近くにあるかな。

調べれば出て来るか？

オレは携帯で検索しながら一回家の中に入る。

ゴム手袋と、以前買った買物カゴにゴミ袋とバスタオルを敷き詰めたものを持ち、狐のところへと戻った。

狐は道路に横たわったままだ。

「ごめんね。痛いかもしれないけど……触るね？」

ゴム手袋をした手で狐を持ち上げ、そつと買い物かごに入れたあと、バスタオルをその体のうえにかけてあげる。その後、手袋を外した。

そしてカゴを腕に下げ、携帯で情報を集めながら、最寄りの動物病院へと歩き出す。

「もうちよつと頑張つてね。きつと助かるからね。頑張ろうね」

カゴの中で力なく横たわる狐に声を掛けながら、オレは思った。

——早くバイト決めないとなあ……。

SK1 (MS、M)

夜分遅くに申し訳ないところではあったが、怪我をした狐を連れて動物病院を訪ねた。

「この子は君のペットなのかな？」

「いえ、うちの前で倒れていたんです。憐れに思つて病院に……」

「そうか……。いや……。しかし……」

訊ねた動物病院の先生は、急患だと聞いてすぐに家屋内から出て来てくれたが、オレが連れてきた急患が狐だと気づいて渋い表情を浮かべた。

「やっぱりそうだよな……」。

野生の狐つて危ないもんな……」。

もしかしたら北海道の狐だけだったかもしれないけど、狐はエキノコックスという危険な寄生虫の宿主とされているし、それでなくとも野生動物である以上、寄生虫や病気の媒体となっている可能性は極めて高い。一般家庭で清潔に暮らしているペットが利用する場所だけに、野生の狐を連れ込まれても困ってしまうだろう。断られることは承知のうえで、それでももしかしたら、という気持ちで来ただけに、苦悶の表情を浮かべている先生を見るとオレとしても心が痛い。

オレも無理強いはせず、すぐに引き下がることにした。

「そうですよね。無理は承知のうえでしたので、お気になさらないでください。夜分遅くに押しかけてしまつて申し訳なかつたです」

頭を下げて病院を後にする。

籠の中で小さく息をする狐を見下ろす。

「ごめんね……」

オレも何とかしてあげたかつたけど、どうしようもない。

哀れには思うけど、これ以上はなんとも……」。

東堂家に帰宅したオレは、庭にカゴを置いた。

家の中に入れるのはやはりリスクが高い。野生動物の生きる力を信じ、見守るしかないだろう。

一度狐を取り出して、もし動けるようになったときに出て行けるよ

うにカゴを横向きに置きなおし、狐をカゴの中に横たえる。浅い呼吸を繰り返す狐の体にバスタオルを掛けてやり、オレはコンビニへと向かった。

コンビニで柔らかいドッグフードと紙皿、そして一応気持ちだけでも思つて油揚げを買い、家に戻る。

横たわる狐の前に紙皿を二枚置き、其処に買つて来たドッグフードと細かくちぎった油揚げ、水をそれぞれ入れる。

「……おやすみ」

手袋越しに撫でた狐の毛は少しひんやりとしていた。

もしも明日この狐が息を引き取っていたら、裏山に埋葬してあげようと思う。きっとそこから降りてきたんだと思うから。

静かに祈りを捧げ、オレは家に入り、寝支度を終え、眠りに就いた。そして翌日。

空になった紙皿を残し、狐の姿は消えていた。

元気になったのか、それとも最後の力を振り絞って自ら姿を消したのかは分からないけど……。

紙皿やカゴ、バスタオルを回収しゴミ袋に入れながら、オレはあの狐が元気になることを祈った。

そして同時に思う。

良かった……。

変なことが起きなくて……。

最近、オレの周りで明らかにオレとは住む世界が違う現象が頻発しているのは認めるところだ。怪我をした野良狐との遭遇なんて、いかにも物語の導入でありそうじゃないか。密かに危惧していたが、何事もなく日常は進んでいる。そのことに安堵した。

その後、オレは約束通り信乃ちゃんの見舞いに向かうことにした。今日は休日で大学は無い。田辺と終わりの講義が重なるのは週末だけだからね。

信乃ちゃんたちのところへ向かう前に、見舞いの品を買おうと思つたオレは最寄りのスーパーに立ち寄った。スイーツコーナーに直行し、適当なものを見繕う。

「んー。シュークリームとかもいいなあ。いや、でもちよつと甘い物をあげ過ぎだよな……。フルーツが入ったヨーグルトとかの方が良いかな？」

餌付けという元も子もないが、桃香ちゃんの状態も若干柔らかくなってきたような気がするし、お土産を持っていくと信乃ちゃんが分かりやすく喜ぶので、差し入れる側としてもなんだか気合いが入る。とはいっても、さすがにケーキ屋さんのお高いものを買うのは金銭的に避けたかったのでスーパーのモノにしたわけだが、ケチだとは思わないで欲しい。

品物を選び、会計を終えてスーパーを出ようとしたところ、アルバイト募集の張り紙が目に入った。時給も良いんじゃないかと思う。東堂家からも近いし、ここでバイトが出来ればありがたい。

張り紙にかかれた電話番号をメモする。本当は今すぐにでも話をしに行きたかったが、長くなると信乃ちゃんが拗ねるので致し方ない。

その後、病院へ行つたオレは信乃ちゃんと当たり障りのない話をし、桃香ちゃんにもちよつと声を掛けて面会を終えた。

驚いたのは、信乃ちゃんはそろそろ退院できるらしいということだ。あれから2週間になるが、骨折とかつてそんな早く治るモノなんだろうか？

これが若さってことなのか……。まあ、怪我が治るのが早いことは良しとしよう。桃香ちゃんは……。先日、責任者がご両親に移ったので病院から情報は貰えなかった。信乃ちゃんの話では、ご両親が退院を渋っている……。らしい。あまり詳しくは聞かなかったけど、桃香ちゃんが元々抱えていた緘黙症が治るまでいつそ入院していればいい、みたいな態度らしい。

嘘だろ……。って感じだ。入院してすぐに治るような症状なら誰も苦労はしないだろうに。

憤りを感じつつも見守るしかない状況に一つため息を吐き、東堂家に帰るため、病院前のバス停でバスを待つ。

それなりに列が出来て来た頃、時間より少し早くに着いたバスに

次々と人が乗り込んでいく。オレも切符を取ってバスに乗り込み、奥の席へ進もうとしたが、妙な音がしたのでふと後ろを見た。使い慣れていない様子の松葉杖をバスの乗降口の床に引っかけてしまい、うまく乗り込めない様子の、ボーイッシュな感じの女の子がそこにいた。どこかの学校の指定のものだろうジャージを着ていて、手には手袋が嵌められている。松葉杖を使っているのは右足を悪くしているからのようなだ。ギプスで宙に固定していた。

そんな女の子の後ろには男性が並んでいるのだが、男性はどうやら搭乗にもたついていて女の子に対して苛立っているようで、眉をしかめて女の子を睨むように見ていた。そして呆れたように一つため息を零す。

おじさんの剣呑な雰囲気気づいたららしい女の子の表情に焦りが浮かぶ。焦りは女の子の手元を狂わせ、さらにバスに乗ることを困難にさせているようだ。泣きそうな表情で必死に乗り込もうとしては、杖を上手く使えなくてバスに乗り込むことが出来ず、さらに焦る。悪循環に陥っているようだった。

「大丈夫？」

そんな女の子を見て居られなかったオレは乗降口へ戻り、女の子へと声を掛ける。

「杖には慣れてないのかな？ 落ち着いて。こう、杖を開いて体を浮かせるようにして……そうそう」

昔、オレも使っていた時期があったので、記憶を頼りに身振り手振りで女の子に伝えた。

女の子は最初こそ目を丸くして驚いていたようだが、すぐにこくこくと頷いて従い始めた。

「大丈夫大丈夫。慌てないでゆっくりね」

オレは女の子の体に触れるか触れないかくらいの距離に手を配置し、もしふらついたりしたらすぐにでも支えられるように傍で見守る。しかし中々足が上がり切らない。女の子の表情に再び焦りが滲む。それも結構強く。さすがに不味いかなと思いつつ、オレは言った。

「手伝わせて貰ってもいいかな？ セーのでオレが支えるから、一気

に足を上げよう」

こくこくと女の子が頷く。

オレは女の子の脇に手を入れ、力を籠める。

「せーのー、よいしょ」

共同作業によつて女の子は無事にバスに乗り込めた。

女の子をバスの手前の席へ促し、まだ並んでいる人へと頭を下げ  
る。

その後、後の人達もバスに乗り込んで、無事バスは発車された。

バスが発車し、いくつかの停留所を過ぎ、オレの降りる停留所があ  
と一つ先となったとき、降車ボタンが光るとともに、チャイムが鳴つ  
た。

鳴らしたのは女の子のようだ。

バスが止まる。

「……」

オレは席を立ち、女の子よりも先に料金の支払いを済ませてバスを  
降りた。次いで女の子がバスを降りようとして、おっかなびつくりと  
した様子で杖を地面に当てている。

「手を貸そうか?」

「あ……。大丈夫です」

そう言ったオレに女の子は恥ずかしそうに笑った。

女の子がゆっくりとバスを降り、杖と共に地面に足を付けた。

それを微笑みを浮かべて見届けたオレは女の子に「お大事に」とだ  
け告げて、当たり前だがオレを置いて走り去ったバスの後を追うよう  
に歩きだした。

「あの、ありがとうございます!」

後ろから届いた女の子の声へ背中越しに手を振って、オレは東堂家  
への帰路につく。

途中、小腹が空いたオレは帰路を少し逸れてコンビニに寄りフライ  
ドチキンを購入した。コンビニの外に出て、紙袋を半分破り、かぶり  
つく。じゅわ、と肉汁が溢れる、が……揚げたてではない。そう感じ  
た。まず衣が固い。揚げすぎてカリカリしているというよりは、空気

に触れる時間が長く乾燥したという感じだ。そして肉が薄くなっている。肉の油分と水分が流れ出てしまった結果、肉の厚みが減ったんだろう。

多分、廃棄時間ギリギリのものを渡されたんだ。

「哀しい……」

小さな不幸せに気分が沈んでいたとき、コンビニ前の駐車場向こうの歩道を、松葉杖をついた女の子がうんしょと歩いているところに気づく。さっきの女の子だ。やはり慣れていないのか、動きはぎこちない。

頑張ってるなあ……。

なんか切ないような誇らしいような不思議な気持ちだ。

「あ……」

転んだ。ギプスを付けている右足を庇うように、左側に。女の子から見た左側は車道だ。今は車の姿は無いから大丈夫だと思うけど、立ち上がるのに時間が掛かると危ないだろう。

オレは転んだ女の子の方へと駆け寄った。

「君、大丈夫？ 怪我は無い？」

「あ、さっきの……」

女の子の傍に転がった松葉杖を拾う。

その間に女の子は自力で座位を取り、オレを困惑したように見つめた。

「その、誤解をして欲しくないから言うんだけど、決して君の後をつけて来たわけじゃないんだよ」

さっきの今でこの再会の仕方はちよつとタイミング良すぎるよね。

オレもそう思う。

変な人だと思われるのが嫌ですぐに弁明をしたが、それはそれで怪しい気もするので困る。

どうしたものかなと思いつつも、まずは女の子を道路から離さないといけないと思ってこう言った。

「怪しいかもしれないけど、危ないから、とりあえず道路からは離れよう。そしたらすぐオレもお暇するから。立てる？」

すると女の子は面白そうに笑い、言った。

「分かります。おいしそうですもんね、それ」

女の子はオレが手に持っている食べかけのチキンを見ながら、やりわりと目を細めている。

オレがチキンを買い食いするためにそのコンビニで停滞していたことを理解してくれているようだ。

「はは……。ちよつと固いんだけどね。美味しいよ。それで……。立てそう？」

「ごめんなさい。よければ肩を貸していただけると……」

松葉杖を女の子に渡そうと思いつけるが、女の子は申し訳なさそうな表情で言った。

「分かった。良いよ」

オレは食べかけのチキンを一気に口の中に放り込み、速攻で咀嚼して呑み込んだ。そして女の子の両手に松葉杖を持たせた後、オレは伸ばして貰った片腕の下から頭を潜らせ、女の子の腕をオレの肩に乗せ、引つ張る。そしてしゃがんだ足に力を入れて、「せーの」と声掛けし、女の子と一緒に一気に立ち上がった。

「じゃあ、ゆっくり抜けるから、杖で体を支えて……」

オレは途中で口を噤んだ。

近づいて来る車に気づいたからだ。車はブレーキを掛ける様子も無く、オレと女の子へ一直線に突っ込んで来る。

……。

正直、ちよつとひやつとした。

怪我をしている女の子と一緒にいたからね……。

いつもの……と言ってしまうことにちよつと物申したい気分だが、まあいつものように、車はオレの目の前で在り得ない軌道を描き、壁に激突した。はい。磁石が反発するように。

「……」

オレとしてはまたか、という感じだが、女の子からすれば驚天動地の一瞬だったことだろう。



女の子はオレに体を預けたまま、目を見開いて事故現場を見つめていた。まるで微動だにしない。恐怖と緊張によつてがちがちに固まってしまっている。

「大丈夫？　びっくりしたよね」

「は、はい……。びっくりしましたね……」

オレの肩に乗っている女の子の腕がかたかたと震えている。

命の危機に晒されたという現実を、少しずつ実感してきているようだ。

「でも、君が何ともなくてよかったよ。とりあえず警察と救急車を……」

「大丈夫ですか!？」

大声をあげながらオレ達の傍に走り寄つて来たのは、そのコンビニの店員さんだった。高校生くらいみたいだから、アルバイトの人かな。

「警察と救急車は呼んでるんで!」

「ありがとうございます。助かりました。行動が早いですね」

「いやあ、ここつてちよつと見通し悪いでしょ？　結構事故が起こる

んですよ……。実はこの間もあつて……。しかも自分のシフト中に。

今月二回目ですよ二回目。先月もあつたし。だから警察への連絡も

慣れちゃつて!」

すごく早口に捲し立てて来る。被害者になりかけたオレ達より興奮しててちよつと戸惑うな……。

「そうなんですか……。それは大変ですね。ところでお店の方は大丈夫なんですか？」

「たぶん大丈夫です!　もう一人いるんで!」

「おい千秋!!　伝え終わったんならさっさと戻つて来い!」

コンビニから店長さんらしき男性が怒鳴り声をあげた。この店員……千秋さんが店を離れたことを怒っているらしい。事情はあの男性も理解しているようだ。というか、この人来るの早すぎだから、多分警察とかへの通報はあの男性がやってくれたんだろうな。

「ダメみたいです!　戻りますね!　ゴメーンお父さん!」

千秋さんは慌ただしくコンビニの方へと戻って行った。親子でやっているランチサイズのコンビニらしい。

「……？」

駆け足でコンビニに戻って行った千秋さんが、何かを持ってまたこつちに近づいて来る。

あれはパイプ椅子か……。

もしかして、この子のために？

良い人だ……。

「これ、使ってください！ 後で返してもらえればいいんで！ では！」

千秋さんは颯爽とパイプ椅子を組み立て、歩道の内側奥に置くと、また駆け足で戻って行った。

「千秋さん！ ありがとうございます！ あなた凄く良い人ですねー！」

「君もねー！」

女の子に肩を貸したままのオレだったが、言いたくて堪らなくなつたので戻って行く千秋さんへ声高に思いを伝えた。

すると千秋さんは少しだけ振り返ってオレ達の方へ手を振り、弾むような声でそう言う。と店の中へと戻って行った。

「せっかくだから椅子に座らせて貰おうか。ちよつと時間かかるだろうし」

「そうですね……」

まだ現実を受け止めきれしていないのか、呆けた様子を見せている女の子を椅子の傍に連れて行き、座って貰う。

「なんて呼べばいいかな？ オレは東堂です」

「ぼくは……あ、ぼくじゃなかった。わたしです、はい。わたしは見越です。見越ゆかりって言います」

ぼ、ぼくっ子……っ!?

初めて会った。まさか実在したとは……。

オレのミーハーな部分が色めき立つ。

いや、今はいいんだ。落ち着こう。そんな状況ではない。

「ちよつと待っててね。車の様子を見て来るよ」

一言断つてから車へと近づく。

燃料漏れなんかは見られない。車のフロントはひしゃげていて、エアバッグが作動しているようだ。

中には男の人が居て、項垂れたまま動かない。肩が動いているので呼吸はしているのだろう。死んではない。

「人、乗ってるよなあ……」

さっきの車の挙動からすると、例の如くオレの未知のパワーが炸裂したんだとは思うんだけど……。今回のこれって普通の人身事故だろ。いや、事故に普通もくそもあつたもんじゃないんだけどさ。

世紀末大事故のときは人が全くいなかった。馬のUMAが同じような挙動をしていたから、アレがオレの白昼夢じゃなければ、UMAと世紀末大事故は同系統の異変で……。だとすると今回もそうってことになりそうなんだけど、人乗ってるしな……。

信乃ちゃんのとときの拳銃の暴発も、やっぱりそういうことなのか……？

オレが仮定していた「異変に対するかなり強力な抵抗力」っていう特性における「異変」って、魔法とかの超常現象だけじゃなくて、物理的・人為的なものも含まれるのか……。

それともこのドライバーに何か秘密が……？

分からない。

オレの力ってマジでなんなんだ？

もつと単純なものだったりするのかわ？

超抜級の幸運、みたいな。

いやでも……それだとそもそもあんな化け物と遭遇したり変な場所に入り込むってのも変な話だしな。

ホントにさ……。

なににの实を食った何人間だとか、オレの能力は近距離パワー型で固有能力は時を止められることだとか、オレの属性は炎を操るだとか。オレも言いたいよ。

自分の能力をシンプルに自覚できることのなんと素晴らしいこと

か。

転生者かもしれない。でも単に精神疾患を患っているだけかもしれない。異能に対して抵抗力があります。でも物理的にもなかなか弾きまます。

不思議だ……。

わけわからんて。

まあ……凄く気になるし知りたいことではあるんだ……け、ど、も！

人に迷惑かけてないから別になんでもいいかなあ。

オレには成りたい自分像があつて、その在り方に不思議な能力の有無は関係ないしね。

これで能力が暴走して周りの人に危害が！

みたいな感じならさすがに落ち込むしめちやくちや悩むけど。

さて、どうしようか。

気を失っているらしいドライバーを下手に動かすのは良くないと思うから警察やレスキューが来るのを待つとして……。

女の子、改めゆかりちゃんの方へと戻る。

「ゆかりちゃん、体の方はどう？ さつき転んだときの怪我とか大丈夫？」

「ぼ……わたしはダイジョブです。ちよつと手足が痛いし、ドキドキしてますけど。それくらいで……」

「そっか……。ゆかりちゃんの親御さんに来てもらったらどう？ たいへんなら帰つても良いと思う。事情聴取ならオレが残つて受けるから」

こんなことがあつた後だから一人で帰るのも怖いだろうし、警察が来て事情聴取となればどれくらい時間がかかるか分からない。すぐ終わる場合もあれば、長引く場合もあるだろう。

幸いにも目撃者はオレとゆかりちゃんの二人。一人帰つても問題ないと思うんだよね。ただでさえ不慣れそうな杖での移動に心身も疲弊しているだろうし。

「……。ぼ……わたしの親、仕事で今、いないんです」

休日なのに一人、不慣れな松葉杖を使い、バスを乗り継いで遠くの病院まで行ってるし事情はありそうだなとは思っていたけど。

「共働きってことかな？ お父さんかお母さんのどちらかでも来てもらえないかな？」

「ぼ……わたしお母さんしかいなくって……」

「そっか……。申し訳ない。悪いことを聞いたね」

「いえ……」

「そうだ。無理して言葉を変えなくて良いよ。普段の一人称がぼくならぼくで構わない」

「そうです？。じゃあお言葉に甘えて……」

「うん」

すっかりした子だなと思う。初対面の人相手に口調を変える。当たり前かもしれないけど出来ない子も多いし。ぎこちないけど。

これが公共の場とかならオレも触れなかったけど、今は別にそうじゃないし。偽るといふと語弊があるけど、素の自分でいて貰った方がオレとしてはやりやすい。

「二応、お母さんに一報は入れておいた方が良いと思うんだけど……」

「それは……」

お母さんに連絡を入れることを何故か渋る様子に思い当たる節があつて、オレはこう質問した。

「心配をかけたくない？」

「はい……」

ゆかりちゃんの気持ちはなんとなく分かる。子供なりの矜持。母親への思い遣り。シングルマザーってことだから、きつとお母さんはゆかりちゃんのために一生懸命頑張っていて、そんなお母さんの愛はちゃんとゆかりちゃんに伝わっているんだろう。だからこれ以上お母さんに無理させたくない、心労をかけたくないと考えて、抱え込んでしまう。

でも、お母さんからしたら教えて欲しいだろうなあ。

教えて欲しいはず。

最近、ちよつとやばめの親と関わることが多かったのでその認識が

崩れかけてきているけど、普通はそのはず。

「一応聞いておきたいんだけど、怖いとかそういうことはないんだよね？」

「え？ 怖いって……なにがです？ あ、今の事故がってことですか？ それは怖かったですけど……？」

親にそういうことを伝えると怒られたり面倒くさがられたりして、相談することそのものがストレスになっていっているような可能性も考慮して、悟られないように一応聞いてみたけど、ゆかりちゃんの反応を見るにそういうことはなさそうだ。

「そっか……。まあ、確かに事故そのものでは特に怪我はしてないし、あくまでオレ達は目撃者なわけだから、君がそれでいいならいいのかなとも思うけど」

他人の親子関係に見ず知らずのオレが踏み込むのも気が引けるので無理強いほしくないけど……。

難しいな。

隠し通せるならそれでいいのかもしれないけど、それなりに時間を経てから今回のことを知ってしまったときのお母さんの気持ちを考えるよね……。

どうしてもお母さんの方の気持ちに寄ってしまうのは……信乃ちゃんとの関わりの影響かなあ。あの子、この間の件もそうだったけど、今後何かあったときにちゃんと相談してくれるか分からないからなあ。相談して欲しい旨は伝えてあるけど、土壇場になって「やっぱり迷惑かけたくない」って一人で暴走しかねない。なんなら実は今だってなにか抱えてるけど、オレには黙ってるのかも在り得る。あとからそれを知ったらやっぱりそれなりに寂しい思いをすと思うんだよね、オレも。

余計なお世話かもしれないけど、これだけは伝えておきたいと思った。

「もし今後、今回のことで何か……心に重さを感じたら、思い切って相談してみてね。ゆかりちゃんの気持ちは楽になると思うし、お母さんもゆかりちゃんに頼って貰えるのはきつと嬉しいと思うから」

「はい……」

反応的には、納得はしてない感じかな。

この子、良い子そうだしなあ。

女手一つで頑張ってるお母さんにこれ以上心配をかけたくないって気持ちはかなり強そうだ。

慣れない松葉杖で遠出したのもそれが理由かもしれない。

親の同伴を「大丈夫」って気丈に断って仕事に送り出した……みたいな。

もしそうなら健気で優しい子なんだけど、怪我してるんだからさすがに頼って良いと思うんだけど……。

我慢するのが癖になってしまっていて、助けを求められないタイプの子なのかもしれない。オレの交友関係で近そうなのは桃香ちゃんだけど、あの子もよく分からないし何とも言えないか……。信乃ちゃんも割と抱え込むタイプみたいだけど、若干ニュアンスが違うし。

考えすぎかもしれないけど、ぼくって一人称は、耐え難きを耐えるためのこの子なりの自己暗示とかなのかもしれないな……。

オレはゆかりちゃんの傍の扉に背中を預けて腕を組み、緊急車両の到着を待つ。

「しかし運が悪かったね。怪我をしてて事故にも遭いそうになるなんてさ。でも事故に遭わなかったのは不幸中の幸いかな？」

「……。そうなんですかね……。やっぱりぼく、運が悪いのかな……」

「……」  
神妙そうに俯いたゆかりちゃんを横目に見る。話は続きそうなので、オレは黙って続きを待つ。

少しして、ゆかりちゃんはこう言った。

「あの……東堂さんって、怪我をされたことってありますか……？」

「うん？　あるよ。もう5、6年前になるけど。長い間入院もしてたしね」

「えっ！　そうなんですか？」

「うん。そう。それがどうかした？」

怪我について質問されたけど、これは多分、オレの過去に興味があ

るとかじゃあないな。

自分の怪我について話す前振りというか、聞いて欲しいんだろう。さっきのお母さんに連絡をすることを渋った様子からして、この子はきつと右足の怪我で生じた心理的ストレスも一人で抱えていて、相談できていないんだと思う。

それで見ず知らずのオレに……というよりは、見ず知らずのオレだからこそ何の憂いもなく吐き捨てられると思った、ってところかな。無意識だろうけど、不器用というか小狡いというか。

袖擦り合うも他生の縁と言うし、オレとしては構わないので、オレからもゆかりちゃんが話しやすいように促した。

そしてぼつぼつと話し始めゆかりちゃんの話へ耳を傾ける。

「ぼく……ソフトボールの部活中に怪我をしたんです。大会も近いのに。エースなのに……」

「へえ……部活のエース？ 凄いな。オレは……、まあそんなに言うほど運動が得意と言う訳じゃないし、縁も無かったから分からないけど……。……仲間に申し訳なくて辛いんだ？」

「はい……。それで、ちよつと考えちゃったんです。もし今、車に轢かれてたら……。復帰はもつと遅くなって……。ただでさえ、いつ治るか分からないのに……」

「そんなに重いなだね。その右足の怪我」

「骨折と、靭帯を……」

「ダブルパンチってことか。不便なのはもちろん、固定して薬とかで和らげるとは思うけど、それでも痛みはあるだろうし。自分のことで身体的にも精神的にも辛いのに、仲間のことも考えて……。それは大変だ」

その上、母親に心配を掛けたくないというのが重なるわけだ。これは母親の前では気丈に振舞ってそうだなあ。そして仲間にはもう迷惑を掛けてるから頼れない。

なるほどねえ。

確かに、見ず知らずのオレを駆け込み寺にもしたくなるかも。

逃げ場がないもんなあ。



余計なお世話かもしれないけど、なおさらお母さんには相談してみたらと思うけど。自分の知らないところでゆかりちゃんがこんな苦しんでるこの方が、お母さんにとっては辛いだろうし。

まあ、分かっても出来ないから辛いんだろうけど。

「お母さんに相談するのはやっぱり大変？」

「……」

「イヤなわけじゃないんだよね？」

「それは、はい。ただ……」

「やっぱり心配はかけたくない？」

「はい。お母さん、いつも大変そう。朝早く家を出て夜遅く帰って来て……それでもぼくには優しいから……。だから……」

「そっかあ……。それはしんどいねえ……」

膝上に置かれたゆかりちゃんがきゅつと拳を握りしめたことに、オレは気づかないふりを……。当然しない。

「友達にもお母さんにも相談できないのはつらいねえ……。思いつめていっぱいいっぱいになるのも分かるよ。でもまあ、それもしようがない。それだけいっぺんに重なって来ちゃったら、悩むのはもうしようがないよ。うん」

「え……？」

ゆかりちゃんが困惑と、期待にも似た驚きを表情に浮かべた。

悩んでいてもしようがないとか叱咤されると思ってたのに、悩むこと自体を肯定するような物言いだっただから驚いたのかもしれない。

怪我自体もうどうしようもないものなんだからそんなことで悩んでも仕方がないってのは、もちろんそうなんだけど……。誰しも悩みたくて悩んでるわけじゃないからねえ。

損だよなあ。

わarii！ 怪我したから後任せた！ 治療に専念して次頑張るわ！

とか、あつげらかんと本心から言える人も世の中にはいるだろう。オレも多分、同じような状況になったら申し訳ないとは思いつつ、しやあないって切り替えられると思うし。

狐のこともそう。昨夜は助けられなくて申し訳ないって思いはしたけど、もし今朝見に行つたときに庭で亡くなつてたとしたら、それはそれとして冥福を祈つて切り替えてたと思う。

「ゆかりちゃん、一つ確認したいんだけど、今どうかな？ オレに少し話をして、ちよつとは気分が軽くなつたりしたかな？」

「え？ あ、そう……ですね。言われてみれば……」

「良かった。悩みが解決したわけじゃないけど、話すと気分が楽になることつてあるからね」

壁に背を預けたまま、ゆかりちゃんに笑いかけた。

「これはオレの経験則なんだけど、悩みつて簡単に答えが出るものばかりじゃないと思うんだ。それこそ、どうしても解決しようがないこともあるからね」

オレの転生者なのかそうじゃないか疑惑と悩みもずーっつと続いているからね。これはオレ的には結構重い問題だし、せつかくオレが医者 of 言うことをさういうものとして受け入れ始めてたの……迷惑なことに今さらになつて急浮上してきたからね。

「だから溜める前に人に吐き出すことが大事だと思うんだ。気持ちがお楽になれば見えて来るものもあるし、ゆっくり考えられるようになるし。学校なら距離を取つてくれる保健の先生とかもいいだろうし、確か未成年用の悩み相談窓口みたいなのもあつたと思うから、そこに電話してみるのもいいかもね。悩み相談のプロフェッショナルがちゃんとゆかりちゃんの悩みを聞いて、一緒に悩んでくれると思うよ」

「……。そんなのがあるんですか？」

「うん。確かあつたと思うよ。せつかくの未成年だけの権利なんだし、使わないと勿体ないかなつて」

「はえー……」

気が抜けた感じのゆかりちゃんを見てやんわりと目を細める。オレに話せたことと、思いがけずに縫れそうな希望が見えて来て少し安心できたのかもしれないな。

しばらくすると救急車が到着して、ドライバーを運んで行つた。そ

の作業に関してオレ達の出来ることは無いので静観する他ない。

救急車の到着に遅れてパトカーが到着し、オレ達は事情聴取を受けることになった。

「では転倒した見越さんを助け起こした際、あの車両がノーブレーキで壁に突っ込んだということの間違いないですね?」

「はい。間違いありません」

「なるほど。ご協力感謝します」

オレは書類にサインをし、思ったよりフレンドリーな警察官からの事情聴取を終えた。

ゆかりちゃんもたびたび質問されていたけど、オレの言葉の裏取り以上の意図は感じられないものだった。ゆかりちゃんが未成年なこともあり、警察官もオレに的を絞って聴取してくれたのはありがたかった。

「すみません。ちょっとお願いがあるんですけど」

去り際の警官を呼び止めて言う。

「この子、家まで送ってあげて貰えませんか? あんなことがあったあとですし、怪我のこともありますから」

警官はちらとゆかりちゃんの方を見て、笑顔で頷いてくれた。

「分かりました。見越さん、パトカーを回してくるから待っていてくれるかな?」

「え、そんな。悪いです」

申し訳なきように慌てた様子を見越さんにオレと警官が追撃を仕掛ける。

「甘えたらいいよ。せつかくだし。パトカーに乗れるなんて滅多にない経験だよ」

「東堂さんのおっしやる通りだよ。遠慮しなくて大丈夫」

警官はそう言つて、コンビニ駐車場に駐車しているパトカーの方へと走って行く。

良い警官で良かった。

そしてパトカーが路肩に停車し、降りてきた警官の一人が座席のドアを開けた。

「え……」

お姫様待遇に恥ずかしそうに戸惑っているゆかりちゃんが微笑ましくついつい笑ってしまう。警官も同じだったようだ。

「どうぞ」

警官は恭しく頭を下げる。

この人もノリが良いというか、悪ノリしてんなあ。ゆかりちゃんが素朴で善良な子だからって……可愛いから見守ろう。

「ゆかりちゃん、お大事に」

パトカーにゆかりちゃんが乗ることを前提としたオレの挨拶にゆかりちゃんはとうとう折れたようだ。パイプ椅子の両脇に立てかけてあった松葉杖を支えに立ち上がり、パトカーの方へと歩き出す。警官の手伝いもあつてスムーズにパトカーに乗り込んだゆかりちゃんはオレを見て言った。

「あの、東堂さん。今日はありがとうございました。ぼく、今日のことには忘れません」

「はは。大袈裟だね。別に忘れていいよ。嫌なことも多かつたら？」

「それはそうだけど……。でも、ぼく、忘れないから！」

感情が昂っているみたいだ。敬語忘れてら。

それが本来のゆかりちゃんということだろう。

良いね。

ぼくっ子は明るく元気で、ちよつと幼い感じでいて欲しい。

できればこれで少しでも前向きになってくれると嬉しいけど……相性もあるからなあ。

電話の向こうにいる相談相手のスタンスと、ゆかりちゃんの求めているスタンスが合致するとは限らない。そうなると「ここに相談しても無駄」ってなって悪化する可能性もある。

祈るしかないけど。

発車するパトカーの中から手を振っているゆかりちゃんに手を振り返す。

そうしてパトカーを見送ったオレは置き去りにされたパイプ椅子を手に取り、これを返すべくコンビニへと向かった。

そして東堂家に帰宅する。

途中、茶都山家を覗く。

二台あるはずの車は見当たらないので、ご両親は出かけているんだろう。少し焦ったけど表札はあったので、また一家消滅なんてことはなっていないようだ。

そうだ。

今は昼間だし、一度試してみようか。

茶々ちゃんが来て来てくれると有難いなど思いつつ、チャイムを押した。

返事は無い。

あー、そうか。

最近物騒って理由で引越して来たのが茶都山家だ。両親不在の際のチャイムには出るなど、茶々ちゃんに言い付けている可能性は十分にある。

だとしたら仕方がない。

そう思つて茶都山家の二階を見上げると……僅かに開いたカーテンの隙間から、こちらを見下ろす二組の小さな人影が目に入った。

……いるなあ。

オレが上を向いた瞬間、さっとカーテンが閉められ、二人の姿が見えなくなる。

多分、茶々ちゃんと瑠璃ちゃんだろう。

いったいオレはどう思われてるんだろう。ちよつと落ち込むなあ……。

肩を落としていることを自覚しながら家に入る。

リビングへ行き、お気に入りのソファに横たわった。

あ、そうだ。

バイトの申し込みしよう。

体を起こして携帯を取り出し、メモした番号へと電話を掛ける。

結果から言えば、オレは明日からバイト戦士になることになった。

そのときは突然訪れた。

バイトを始めてしばらく、大学の講義を終え、その足でバイト先のスーパーに出勤していたときのことだ。

閉店時間を迎え、廃棄総菜や賞味期限切れになった商品の確認と処理、店内の掃除やゴミ捨てなどそれなりに覚え、一人で出来る閉店業務を終えてタイムカードを切り、オレは帰路についた。

しかし途中で忘れ物に気づき、スーパーへと引き返した。

広い駐車場に、車は残業をしている社員さんの一台しか残っていない。

大変だなあと思い、スーパーの入り口付近にある自販機で缶コーヒーを一本買った。残業している社員さんへの差し入れだ。

建物に沿って裏へと回り、裏口から中に入る。パソコンで日報を打っているのだと思い、従業員室へ向かうが社員さんの姿は無い。

もしかしたら店内を見回っているのかと思い、バックヤードから店内へと入る。電灯が弱められた店内は暗い雰囲気、昼とは異なる側面を醸し出している。

こつ、こつ、こつ。

オレの足音だけが響く店内を歩く。

「茶……はや……。瞬ら……に……」

「う……わか……よ。で……いた……よね」

声が聞こえて来る。

囁き声というわけではない。結構大きめの声で話しているようだ。聞こえ辛いのはまだ距離があるからだろう。社員さんの声ではない。女性の声だ。それも幼い少女の声。

聞き覚えがある。

オレはゆっくりとその声の方へと向かった。

「そ……あとで良いから。そんなこと言ったって、仕方ないじゃない。茶々だつてこの間……」

「なにが仕方ないのかな？」

商品棚で区切られた道を抜けた先、広く取られた総菜コーナーの区画、総菜を置く商品台の傍に彼女たちはいた。

茶都山茶々と、瑠璃川瑠璃。推定魔法少女である二人の少女は、オレからだど死角になる位置にあるらしい何かを見下ろしていた。

二人はお互い名前に冠した色合いの可愛らしいドレスのような服を身に纏っている。二人の手に握られているのは、彼女たちの手に収まる大きさのステッキだ。ステッキの先端には大人の握りこぶしほどの宝石が嵌め込まれている。茶々ちゃんのその姿は以前にも見たことがある。初めてオレが明確に「異変」に出会ったときの、あの姿だ。

「こんばんは。小学生がこんなところでこんな時間に何をしているのかな？」

「お、おにーさん……」

「東堂……雷留……」

茶々ちゃんは杖を抱くように身を竦め、瑠璃ちゃん是不審者でも見たように警戒した表情で茶々ちゃんを庇うようにオレと茶々ちゃんの前に立った。

「瑠璃ちゃん。年上の名前を呼び捨ては……あまり感心しないね」  
「……」

瑠璃ちゃんはオレを睨むように凝視している。オレも瑠璃ちゃんと目を合わせるが、瑠璃ちゃんは目を逸らす様子はない。絶対に目を離さない、騙されない油断しない、そんな強い意思を感じる。

普段ならオレの方が折れてあげても良いが、今はそうはしない。夜遅く、閉店したスーパーの店内にいる少女。明らかにこれは甘い対応をしてはいけない類の事案だ。彼女たちの事情も聴くつもりではないが、どのような理由であれ嚴重な注意はする必要があるだろう。必要とあれば親御さんと呼ぶ必要もある。それくらいの事案だ。

一歩踏み出す。

すると瑠璃ちゃんが一歩後ずさりし、茶々ちゃんを庇うように腕を伸ばした。

茶々ちゃんは困ったようにオレと瑠璃ちゃんを交互に見ることを

繰り返している。

さらに一步踏み出す。

瑠璃ちゃんが杖をこちらへと向けて来る。

「それは何のつもりかな？」

あの杖にどういう効果があるかは分からないけど、推定魔法少女である以上、何かしらの魔法が出る可能性は高い。そうなる……危険なのは瑠璃ちゃんだ。もし攻撃とかされて、今までの化け物とかのように爆散なんてされたら目も当てられない。

「これは親切心から言うけど、オレに敵意を向けることはやめておいた方が良く。きっと君も怪我じゃ済まなくなる」

「……」

瑠璃ちゃんは答えない。

だが、ステッキを握る手に力が入ったことは分かった。

何かやりかねない凄みを感じる。

「分かった。これ以上は近づかないよ。ただ聞かせて貰えるかな？君たちがここで何をしていたのか」

「……」

「どうやらオレ達の間には大きな誤解があるみたいだ。君がオレを警戒していることは伝わってる。それがなにかは分からないけどね。だからと言って今までのように引き下がることも出来ない。教えて欲しい。君たちはここで、何をしていたのかな？」

「とぼけないで」

瑠璃ちゃんが言った。

とぼけてないんだよなあ。ホントに分からないから聞いているだけなんだよね……。

「落ち着いて？ 話をしよう。オレはとぼけてなんていないよ。オレは君たちのことを何一つ理解していないんだ」

「嘘」

瑠璃ちゃんがオレの言葉を切って捨てる。

嘘じゃないんだよなあ……。

「嘘じゃないよ」



「ならなんで、あたしがこの杖を向けたとき、すぐに動きを止めたの？  
それにさっきの警告はなに？ 普通、大人の男の人が小学生の女の子に『オモチャのステッキ』を向けられただけで、そんなことを真剣に言うかしら？ 『怪我じゃすまない』なんてこと」

……。

「ごもつとも。」

「つまり、あなたは知っていた。知っていたのよ。あたし達がどういう存在で、あたし達がこのステッキを向けることがどういう意味を持つのかを。違う？」

子供の力でもステッキなんかで殴られたら大人でも普通に痛いとは思う。それに相手が子供とは言え、興奮状態の人間を相手に一度立ち止まって冷静になることを促すのは、大人として当たり前に対応だとも思う。だけど今それを言うのと逆効果にしかならなさそうだから黙っておくことにする。

「……そうだね。君は度胸があつて頭も良い。その通りだ。オレは君たちがなにか特別な存在であることを察していた。だけど、さっきの言葉は嘘じゃない」

「さっきの言葉？」

「君たちのことを何一つ理解していないという言葉だよ。確かに察してはいた。だけどその確証は何も無かった。もしかしたらそうかもしれない……その程度の認識だった」

「この期に及んで……」

瑠璃ちゃんが忌々し気に眉を寄せる。

もう思い込んで聞く耳持たずって感じた。

「本当だ。オレは君たちが何をしているのか、何が出来るのか、そういったことを何も知らない。ただ以前、茶々ちゃんがその姿に変身するところを目撃しただけなんだ。どうか信じて欲しい」

「信じられないわ」

「る、瑠璃ちゃん……！」

「あんたは黙ってて！ あのととき葵さんに言われたでしょ!? 『気を付けろ』って！」

「へえ……」

思わぬ名前が出てオレは目を細めた。

「葵さんがオレのことを？　気を付けろって？」

「ええ、そうよ！」

「ち、ちが……」

「黙ってて！」

「ひう……」

瑠璃ちゃんに叱咤され、何か言おうとしていた茶々ちゃんは竦み上がり口を噤んでしまった。

葵さんがこの子たちに何かを警告した……。そしてその警戒対象にオレが合致した。

それが瑠璃ちゃんがオレに敵意を向ける理由か……。

まためんどくさい。そんなのオレにはどうしようもない。

ただ、ちよつとその話は置いて……。

「瑠璃ちゃん。一時の感情で友達を怒鳴りつけるのは感心しないよ。友情を壊すことになりかねない。茶々ちゃんに謝った方が良い」

「黙って。あなたは……」

「瑠璃ちゃん。茶々ちゃんのことを大切に想うなら謝るんだ」

「なんでアンタに……」

「瑠璃ちゃんがオレのことをどう思っているかは分からない。だけどオレには今の君はオレを敵視するあまり、物事の本質を見失っているように見えるよ」

「な、なによ……。本質って」

「君が今、何のためにオレに杖を向けているのかってこと」  
「……」

「君は茶々ちゃんを守りたいと思っている。怪しい人間であるオレから。違うっ！」

「そ、それは……」

「だったら間違えちゃダメだよ」

瑠璃ちゃんは怪訝そうにオレを見たり、悩まし気に俯いたりと忙しなく表情と顔を動かしている。

何かがせめぎ合ってる感じだ。

「あ、あたしは茶々のことを思ってる！」

「それで傷つけたら元も子もないよって話だよ」

「うるさい!!」

もうダメだな。

オレの話を聞いて貰える状況じゃない。

かといって取り押さえることも出来ないし、そんな理由も無いし。

やっぱり親御さんと呼ぶしかないか……。

「なに？ 何をする気？」

「いや、茶々ちゃんのご両親を呼ぼうと思って。話を聞いて貰えないし、さすがにオレとしても見て見ぬふりは出来ないし」

オレが携帯電話を取り出したことで警戒心を跳ね上げたらしい瑠璃ちゃんに理由を伝える。

だってオレが話を聞いて店長に取りなしてなるべく穏便にと思ったのに話を聞いて貰えないんだもの。もう親御さんに直接注意して貰った方が良さ。

「アンタはまたそうやって茶々の家族を巻き込むっていうの!？」

「また……？ あ、圏外だ。おかしいな……?？」

携帯をしまい、彼女たちの方を見る。

「君たちが何かしてるのかな？」

「やっぱり!」

「断っておくけど、オレがさっき言ったように、オレは元々推測をしていた。さっきの問答で瑠璃ちゃんが言外にオレの推測が正しいことを認めたからそうなのかなと思って聞いただけだよ。少なくともオレはそう受け取った。あと、オレはここで君たちに会ってから、嘘は何一つ吐いてないよ」

そしてオレは一つため息を吐いてこう言った。

「はつきりさせよう。オレの勘違いなら笑って欲しい。君たちは……。いわゆる魔法少女、なのかな？」

「ええ。そうね。でも、知ってたんでしょ？」

「君も中々わからずやだね……。さっきから言っているように、オレ

は知らなかったよ。改めて言うけど、オレは君たちの敵じゃない。信じられないって顔だね。良いよ。なら、こうしようか。君の質問にこれからオレは嘘偽りなく答える。なんでもだ。オレの答えに引っかかることがあるなら、その全てにまた質問して。納得するまで何度でも。オレには君たちに信じて貰える手段がそれ以外にない」

両手を上げて降参を示し、提案を伝える。

それはそれとして社員さんは何処にいるんだ……？

これだけ騒げば気が付いても良さそうなものなんだけど。

社員さんさえ来てくれればバトンタッチするんだけどなあ……。

車もあつたし、さすがにもう帰つたなんてことは無いと思うんだけど。

もしかしてこの子たちがなにかした？

いや……：どうだろう。確かにオレに対しては瑠璃ちゃんからの敵意が凄いいけど、根は悪い子じゃないと思うし、茶々ちゃんだっている。そんなことするとは思えないんだよな……。

「良いわ。なら、答えて。ここに何しに来たの？」

「オレはここでバイトをしてる。働いているんだ。今は仕事終わりで、忘れ物を取りに来た」

「アタシ達の張った結界を通つて来れた理由は？」

「そんなのがあつたのか……」

しくじつたな。

それは……：説明が出来ない。

いや、信じて貰えるかどうかは別にして、ありのまま伝えるしかないな。

「オレには特殊な性質があるらしくてね。君の言う結界とかそういうのが効かないんだよ。それだけじゃない。何かオレに危害が加わりそうになつたとき、その加害対象が爆散したり吹っ飛んだりする。さっきの忠告は純粹に君を守るためのものだった。他意は無い」

「バカにしてるの？」

それはそう。

多分これに関しては瑠璃ちゃんの反応が正しい。

「信じてもらおうしかない。もし嘘発見魔法みたいなものがあるならかけてもらっても……いや、やっぱり止めておいた方が良く。どうなるかオレにも分からない」

「なに、それ。それが本当だとしたら、とんでもない地雷じゃない」  
ひでえ。

でも言い得て妙と言うか。それによく地雷なんて言葉知ってるね。普段なら賞賛を伝えるところだけど逆効果になりそうなのでやめておく。

「じゃあ……あのとき持っていた木刀は何？」

「木刀……？ ああ、パトロールのときの？ あれは友人から預かっていたもので、返すために持ち歩いていたんだ」

「そういえばそんなこと……友人……？ もしかして……」

瑠璃ちゃんが思案気に呟いた。

「なにか気になることがあるの？ あの木刀に。出来れば教えて欲しい」

「教えて欲しいって……。本当に気づいてなかったの？ あの木刀、普通の木刀じゃなかった。あたし達の使う魔法力とは違う、未知の力が宿ったのをあたしは感じた。茶々が言うには、アンタと同じ匂いがするって」

「どういうこと？ ごめん。ちよつと理解できない」

魔法力とかそれとは違う未知の力が宿る信乃ちゃんの木刀とか。それがオレと同じ匂いがするとか。新しいワードが多すぎて混乱する。

「あ、あの……。その……」

茶々ちゃんがおずおずと手を上げて言った。

「匂いって言うのは……あの、ただの匂いです……」

「は？ なにそれ?!」

茶々ちゃんの告白に瑠璃ちゃんは首だけ茶々ちゃんの方に向けて大声で言う。

「魔法力を感じたとかそういうのじゃなく？」

「うん……」

「呆れた。信じらんない。てつきりあんたの感知魔法に引っかかったのかと思ってたのに」

「ご、ごめんね……。恥ずかしくって……」

なにやら空気が変わった気がする。

「もしかしてオレへの疑念は晴れたのかな？」

「いいえ。ただ茶々に呆れてただけ。質問を続けるわよ」

「そっか。いいよ。好きにして」

「ねえ、瑠璃ちゃん。やっぱりおにーさんは……」

「黙ってて」

茶々ちゃんの制止の声を拒絶する瑠璃ちゃんだけど、さつきよりだいぶ柔らかい声なのはオレの忠告を聞いてくれてるからと思っ  
て良いのかな。

「どうしてあ有的时候、『会ってない』って言ったの？」

「曖昧過ぎて分からないんだけど、あ有的时候っていうのは……君たちが行方不明になっていた後に会った日のことでもいいのかな？」

瑠璃ちゃんの目がまた鋭くなる。

「やっぱり。なんであたし達が行方不明になっていたって認識できてるの？」

「分からない。さつき言ったオレの体質のせいだとは思う」

「それで全部片づける気？」

「そうとしか言えないんだ。確かにあ有的时候、オレ以外の人は……いや、オレ以外の世界そのものが、君たちの存在を認識していなかった。そして君たちが行方不明になったと知ったとき……正確には茶々ちゃんとご家族が『居なかった』ことになっていることに気づいたときだけど。オレは君たちの通う小学校に問い合わせに行っただ。もともと茶々ちゃんが不思議な力を持った子供……魔法少女だって推測はしていたから、もしかしたら何かに巻き込まれたんじゃないかって心配になってね。そうじゃないにしても、たとえば誘拐とかなら出来るだけ早く警察に連絡すべきだと思った。それで小学校の窓口  
に問い合わせたら、瑠璃ちゃんまで『居なかった』。正直、驚いたよ」

「……」

瑠璃ちゃんの視線が若干弱まる。

前向きな疑心と強い敵意が闘ぎあつて中和しているような感じだ。  
「瑠璃ちゃん。君が明確に敵意を向けて来た瞬間をオレは覚えて  
いる。そしてきつきの質問から考えると……瑠璃ちゃんは、君たちが  
『居なかった』はずの空白の数日のことを認識している人間を警戒し  
ている……。そうだよね？」

「……」

「確認していないから分からないけど、それってつまり、オレ以外の他の  
人や世界は『空白の数日』の間にも君たちが普通に生活していたと認  
識してること？」

「そうね。あたし達は確かに世界から存在を消されていた。でもあた  
し達が戻ってきた以上、それは無かったことになったはず。事実、あ  
たし達が居なかったなんて、誰も思っていないし言っていないわ。アンタ  
以外はね」

今すぐ、なんで二人が消えてたのか聞きてえ……。

重要なのはそこじゃないから今は聞かないけど。

瑠璃ちゃんが嘘偽りは許さないって感じでオレを見据える。核心  
に迫った質問をしてくるつもりなのかもしれない。

今までも嘘偽りなく答えて来たけどね。

「アンタ、何者？」

思ったより核心に迫る質問ですねえ……。

「何者かと言われたら……普通の大学生だよ。ちょっと特殊な事情は  
あるけど」

「特殊な事情？」

「昔、交通事故に遭ったらしくてね。それ以前の記憶を失った代わり  
に前世の記憶を取り戻した、いわゆる転生者。かもしれないし、そう  
思い込んでるだけの……」

自分でその言葉を他人に言うのはかなり抵抗がある。きついしつ  
らい。

ただどここまで来たらもう逃げるつもりもない。

「……正常では無い人、かもしれない」

「それってどっちにしても普通の大学生じゃないじゃない」  
「そう言われると辛い……」

小学生女兒に傷口を抉られて項垂れる大学生。  
つらいなあ……。

「……。あの、なんか、ごめんなさい」

瑠璃ちゃんが急に謝ってくれた。

「いや、良いよ……。それで、信じて貰えた？」

「……」

黙らないで欲しい。

「ここまで曝け出したんだから、信じるって言って欲しかった。

「ねえ、転生者ってなに？」

「ああ……知らなかった？ 簡単に言えば……死んだ人が魂だけになつて新しく赤ん坊として生まれ直すこと。そのときに残っている、赤ん坊が持っているはずのない瑠璃ちゃんとしての知識や記憶が前世って感じかな」

「……よく分からないけど、アンタが普通じゃないってことは分かった」

「そっか……そうだよね……。普通じゃないよね……そうだよね……」

「ちよ、ちよつと……。……ねえ。アンタが何を落ち込んでるか知らないけど」

瑠璃ちゃんが訝し気に言う。

「アタシや茶々だつて普通じゃないわよ。魔法少女だしね」

「もしかして励ましてくれる？」

「べ、べつにそういうわけじゃ……!」

「どうやら励ましてくれてるらしい。」

「やっぱり根は良い子だよね。」

「ありがとう瑠璃ちゃん。根は良い子なんだね」

「あー、もう！ なんなのアンタは！ 『根は』って余計でしょー!」

「そうだね。ごめんね」

「あー、もうっ!!」



癩癩を起したかのように叫んだ瑠璃ちゃんだったが、遂にその手を下げてくれた。

気が抜けた様子だ。まさかオレがずっと抱えていた悩みがこんなところで役に立つとは思わなかった。なにがどこでどう噛み合うかなんて、そのときが来てみないと分からないものだね。

「信じてくれたのかな？」

「まだ分かんないけど、アンタが葵さんの言う『敵』じゃないことは……なんとなく分かったわよ」

『敵』とはまた物騒なワードだな。

魔法少女たちが明確に『敵』っていう存在だし、物騒な存在なんだろうけど。

気にはなるけど、その辺を聞くのは、とりあえずこの子たちが何でここに居るのかを確認して、しかるべき対応をしてからかな。

「良かった。じゃあオレからも良いかな？　ここで何をしてるの？」

「アンタ、マイペースというか、だいぶKYじゃない？」

「最近よく言われるね。確かに。オレもそうじゃないかと思いはじめてる」

「くっ……」

ペースを崩されて苛立っているらしい瑠璃ちゃん。

残念ながらオレからペースを奪うのは不可能だと思って欲しい。非日常が続いたからこそ分かったことだが、オレはオレが思っている以上に凄まじくマイペースだった。

「ん？　なによ、茶々」

茶々ちゃんが瑠璃ちゃんの袖を引っ張っているらしい。

「おにーさん、『敵』じゃないんだよね？」

「暫定だけど、そうね。絶対とは言えないけど……本当に何も知らないみたいだし……。なに？」

「あやまる？」

「え？」

「おにーさんに謝ろ？」

「そ、それは……」

瑠璃ちゃんがちらとオレを見る。

オレはそんなに気にしてないけど、我がことながらさすがに謝っておいた方が良いと思う。

年上を取る態度としては相当酷かったし。

「じゃあ、いっしょに謝ろ？」

「で、でも……だって……紛らわし」

「あやまろ？」

「うつ……」

「おにーさん、ごめんなさい。ほら、瑠璃ちゃんも」

「くっ……。ご、ごめんなさい。疑って……」

意地っ張りな子だなあ。

まあ、謝れたから良いにしよう。

まだまだ子供だしね。

「許すよ。ただもうちょっと人の話を聞けると良いかな？」

「くっ……。そもそもアンタが」

「おにーさん、ね？」

「東堂さんが……！ いえ、いいわ。あたしが悪かったです……」

「ううん。オレの方こそ勘違いさせるようなことをしてしまっごめんね？」

「くっ……！」

なんで今の言葉でそうなるんだ……。

ああ、罪悪感が掻き立てられるのかな？

それは勉強代としてしっかり受け入れて欲しいところだ。

オレも反省するところはあるけどね。

葵さんのこととか、二人の言う『敵』のこととか、他にもいろいろと聞きたいことはあるけど、とりあえず本題に入ろう。

「それで、どうして二人はこんな夜更けにここに？ 理由によってはやっぱり親御さんを呼ばないといけないんだけど」

「ひえ」

すつと目を細めて二人を見る。

茶々ちゃんは身を竦めた。

「それと、この店の社員さん見なかったかな？ ん……？」

二人の方へ近づいたそのとき、人の足が見えた。倒れている。覗き込むようにして見ると……社員さんだ。社員さんが倒れている。生きてはいるみたいだけど……。まさか本当に二人が何かしていたから姿が見えなかったとは……。

悪戯じゃ済まないぞ……。

「もちろんちゃんと説明してくれるんだよね？ 無関係とは言わせないよ」

「えつと、その、それは……。瑠璃ちゃん！」

「ちよつ、押し付けないでよ!! 事情があるの。事情が!」

「だからそれを聞いてるんだけど……。今度はオレの質問タイムかな？」

「根に持ってんじやないわよ!」

「根には持ってないけど……。一応言っておくけど、叫んで誤魔化しても無駄だからね?」

「……あ、そうだ。茶々、封印を……っ! あっ!」

封印?

また新しいワードが出たな。

そう思ったとき、瑠璃ちゃんが何か気に気づいたように叫んだ。

ほぼ同時に、社員さんの腹部が膨れ始める。まるで焼いた餅のように膨れ上がった腹部は服を突き破った。そして何か飛び出してくる。

倒れたままの社員さんの真上に、何かが浮いている。

犬だ。ただしただの犬じゃない。オレと同じくらいの大きさで、背中にはアルマジロのような甲羅がある。

「茶々!」

「うん!」

二人はそれぞれのステッキを犬へと向けて、何か呪文のようなものを唱えた。二つのステッキの宝石が光を放ち始め、収束。解き放たれた光の帯が宙に浮いている、体を広げ始めた犬へと真っすぐ進む。

しかし光の帯は犬の体を避けるようにあらぬ方向へと進んで行く。

なんかオレみたいだな……。  
ふとそう思う。

これが何なのか分からないけど、オレ、これの同類だったりしないよね？

少し不安になる。

犬が目を開いた。

甲高い遠吠えが店内に響く。

「くっ、魔獣が孵った！ 不味いわよ、茶々！」

「う、うん！」

二人が臨戦体勢を取る。

「二人とも、今ここで何が起きているのか教えて貰える？」

「そんな場合じゃないの！」

「いや、どう動けばいいか考えようと思って……」

瑠璃ちゃんに怒られた。

状況が分からないんだから仕方ないと思う。

魔獣と呼ばれた犬が空中で体を伏せる。

あれは見たことがある。肉食獣が獲物を狙うときの格好だ。

今にも誰かに飛び掛かりそうだ。

そう思ったとき、オレの横を葵色の光線が走り抜け、魔獣へと向

かった。魔獣は空中で跳ねてそれを避ける。

「……。愚か……。忠告はしたはず……」

突然、新しい声が聞こえた。

後ろからだ。

振り向いた先に居たのは葵さんだった。

いつの間に、なんでここに？

そもそもこの店、もう営業時間は終わってるんだけど。

葵さんはオレを一瞥し、瑠璃ちゃんが魔獣と呼んだ犬へと視線を戻した。

意味不明だけど、どうやら今はピンチらしく、駆けつけてくれたらしい雰囲気醸し出している。

魔獣とか言うのが現れてからこの早さ……どこかで見てたのか？

そういえばこの人、この間茶々ちゃんの家を見てたし……。

茶々ちゃんを監視してる？

それとも見守っている？

「えっ!? おねーさん!」

「葵さん!」

茶々ちゃんと瑠璃ちゃんが驚いた声を出す。どこか安心したような雰囲気があるのは、二人にとってはそれだけ信頼できる大人ということなのか？

それにしてもはちよつと……オレから見るとアレだけど……。

そのとき、オレが見ている前で葵さんの体が僅かに宙に浮き始め、僅かに仰け反る。

かと思えば、突然光り出した。輝きの中で葵さんが身に纏っていたスーツが弾け、体のシルエットが鮮明に浮かび上がる。

そして光が収まったとき、葵さんは茶々ちゃんや瑠璃ちゃんの着ている意匠と似たドレスを身に纏い、伸ばした手で握った杖を魔獣へと向けながら、とん、と軽やかに地面に降り立った。

葵さんは油断なし、と言った様子で、凄まじい鋭さで魔獣を睨みつけている。殺意すら感じる形相だ。魔獣も葵さんの殺意を感じ取っているのか、警戒したように身を屈め唸っている。

まさに一触即発の気配。

どうやら戦いが始まるようだ……。

「オレはどうすればいい?」

「……。邪魔……」

「なにがどうなってるか分からないけど、大丈夫なんだね?」

「……。邪魔……」

「分かった」

オレは邪魔らしい。

とりあえず社員さんを連れてこう……。

「社員さんは任せて」

社員さんの足を掴んで引きずり、オレはそそくさと三人から離れた。

「大丈夫ですか？ しつかりしてください」

茶々ちゃんたちから社員さんを引きずって離れ、頬をぺちぺちと叩いた。反応はないが、胸元に耳を当てると脈の確認は出来たし、呼吸もしているようなので気を失っているだけだろう。

社員さんから体を離して立ち上がり、茶々ちゃんたちの方を見る。今まさに戦いが始まるうとしていた。

茶々ちゃんと瑠璃ちゃん、そして葵さんがそれぞれのステッキを魔獣へと向ける。

魔獣は三人からの敵意を感じ取ったのか体を反らし、大きく遠吠えをした。そこに怯えた様子は見られない。闘争本能をむき出しにしたその姿からは、狩人、捕食者としての矜持のようなものを感じ取れる。

律ちゃんの件のおきに見た化け物はともかくとして、初めて見る魔法少女と言う正統派な非日常。心のどこかで期待していたのは、茶々ちゃんの変身シーンを目撃してしまったときから変わらない。

たとえば、空中に描かれる輝く魔法陣、放たれる極光の帯、敵を追尾する小さな光球。三人のステッキがそれぞれの名を冠した色の輝きを放ったとき、オレはついにそういう魔法を目の当たりにするときが来たと期待した。でも、なんかちよつと地味だった。

まず、茶々ちゃんは光を放つステッキを手の中でくるくると回しながら両手を前へと突き出した。ステッキは茶々ちゃんの手を離れ、茶々ちゃんの少し前を浮遊しながら回転速度を急激に上げ続け、光の円を空中に描き出す。やがて激しい輝きが収まったとき、茶々ちゃんの前には神々しい光の盾が浮遊していた。

「やー！」

茶々ちゃんは盾に身を隠しながら魔獣へと突進していく。

瑠璃ちゃんは輝きを放つステッキを刀を持つように握り、足を前後に大きく開くと、頭上を越えて体が反るほどに腕を大きく振りかぶり、ステッキを一気に振り下ろした。そのひと振りは瑠璃色の光の残

像を残し、へそ辺りでぴたりと止まる。光の残像が瑠璃ちゃんの持つステッキを追いかけ、光とステッキが重なったとき、光はステッキ全体を包み込んだ。光はステッキの先端からさらに伸びていき、薄く広がる、刃を形作り安定する。瑠璃色の光で作られた西洋剣だ。

「はーっ！」

瑠璃ちゃんは西洋剣を腰だめに構え、魔獣へと突撃していく。

そして葵さん。葵さんはステッキを握った手を横に広げると、肘を僅かに曲げ、手首をぐるんぐるんと回し始める。ステッキの先から放たれる光が線状に渦を巻き、固定される。

リボンか？

いや、鞭か？

そう思ったとき、渦を巻いていた線上の光がガラスが割れるように飛び散った。

光が形作ったのは鞭でもリボンでもない。現れたのは光の鎖だった。しかも光で作られた長い鎖の先端には、無数の鋭い突起のある球体が繋がっている。フレイル型のモーニングスターだ。一人だけやけに武器が凶悪だった。

「おお……いー魔法だ……いーいや、魔法か……？魔法か……」

夢を破壊された少年のような気持ちで三人を見る。

結構、現実的だなって……。

葵さんが腕を大きく振るった。

魔獣へと突っ込む茶々ちゃんと瑠璃ちゃんの隙間を縫うように、モーニングスターが魔獣へ向かい通り過ぎていく。瑠璃ちゃんと茶々ちゃんはかなり驚いた様子で、自分たちの間を通り過ぎて行ったモーニングスターを目で追っている。

二人に先んじて到着したモーニングスターを、魔獣は体を回転させ、装甲を纏った尾で弾き飛ばした。弾かれたモーニングスターが瑠璃ちゃんの方へと飛んでいく。

「あぶない！」

オレと茶々ちゃんの声が重なる。

瑠璃ちゃんは咄嗟に光の剣の後ろに体を隠した。

「……っ！」

葵さんが腕を大きく引くが間に合わず、光の剣にモーニングスターが激突し、瑠璃ちゃんが僅かに押し戻される。瑠璃ちゃんは困惑と苛立ちが混ざったような瞳を背中越しに一瞬だけ葵さんに向けた。

そして茶々ちゃんが心配そうに叫ぶ。

「瑠璃ちゃん！」

瑠璃ちゃんを心配して叫んだ茶々ちゃん。一方、茶々ちゃんが叫ぶ原因を作った葵さんは苛立たし気に瑠璃ちゃんの背中を一瞥し、魔獣へと視線を戻す。そして葵さんは大きく腕を振った。光の鎖が大きくくしなり、その先に繋がった光のモーニングスターが鎖に追従。魔獣の上方向から落ちて来る。魔獣はそのとき茶々ちゃんに襲い掛かるうとしていた。しかし茶々ちゃんの意識は完全に瑠璃ちゃんに向いている。

「茶々ー！」

瑠璃ちゃんが叫ぶ。

「前!!」

瑠璃ちゃんに名前を呼ばれたことで「えっ」と驚いた様子を見せた茶々ちゃんは、次の言葉でようやく魔獣の接近に気がついた。茶々ちゃんが咄嗟に構えた盾は間に合い、主の身を守る。だが不意打ちをされて踏ん張りが利かなかった茶々ちゃんの小さな体は魔獣の体当たり耐え切れず、大きく弾かれて後退させられる。

そのとき、魔獣の胴体に葵さんのモーニングスターが激突する。

魔獣は衝撃で飛ばされたが、空中で回転すると何事も無かったかのように着地し、再び茶々ちゃんへと飛び掛かる。

葵さんが再び腕を大きく動かし、光の鎖をしならせモーニングスターを振るう。

瑠璃ちゃんが地面を強く蹴り、魔獣に押し込まれた茶々ちゃんのカバーに入ろうと駆けだした。

魔獣は茶々ちゃんの持つ盾の側面を狙うように、横殴りに大きな前足と鋭い爪を振るったが、茶々ちゃんはすぐさま盾の向きを変えるのと、盾の正面を魔獣の攻撃に合わせ、それを防いだ。



「……………っ！ 重っ……………！」

今度はしつかりと迎え撃てたからか、茶々ちゃんが先ほどのように吹っ飛ばされるようなことは無かった。しかし衝撃は大きかったように、茶々ちゃんは体勢はそのままに、滑るように後退させられる。そのとき、光の剣を腰だめに構え、魔獣の脇腹を突く位置に瑠璃ちゃんが駆けつける。

「そのままー！」

瑠璃ちゃんが茶々ちゃんの脇から飛び出し、魔獣に飛び掛かった。握った光の剣で魔獣の前足の脇から逆袈裟斬りに刃を振るう。

しかし瑠璃ちゃんの刃は魔獣の硬い毛皮に阻まれ、その肉まで到達することは無かった。

「かっ……………た……………っ！！ ぎゃっ！」

瑠璃ちゃんの攻撃をもともしない魔獣はしなやかな動きで体を捻り、もう一方の腕を邪魔なものを薙ぎ払うように振るうと、勢いよく瑠璃ちゃんを殴りつけた。瑠璃ちゃんが宙に浮かされたとき、タイミング悪く到達した葵さんのモーニングスターが瑠璃ちゃんの背中を強打する。

「か……………っ！！」

「瑠璃ちゃん!？」

オレと茶々ちゃんの声がまた重なる。

大丈夫か……………？

茶々ちゃんと瑠璃ちゃんは声かけあってるけど……………。

葵さん……………？

ちらと葵さんの方を見れば、罪悪感を抱いているのか、無表情なりに申し訳なさそうに表情を歪めている感じはするけど、どこか不満げのようにも見える。

葵さんがモーニングスターを引き戻す。

そのとき、茶々ちゃんが叫んだ。

「瑠璃ちゃんー！」

瑠璃ちゃんは空中でモーニングスターに押され、魔獣の方へと近づいている。

魔獣はその太い腕を乱暴に振るい、空中で身動きが取れない状態の瑠璃ちゃんを殴り飛ばした。瑠璃ちゃんの体が壁に激突し、ぼりと地面へと落ちる。

茶々ちゃんが瑠璃ちゃんの方へと走る。

魔獣は瑠璃ちゃんへの追撃に動く。地面に倒れ動かない瑠璃ちゃんに飛び掛かり、首を僅かに傾げて口を大きく開く。覗かせた鋭利な牙が、瑠璃ちゃんを頭部を噛み砕こうと迫っている。

咄嗟に、オレは叫んだ。

「こつちだ！こつちだ!!」

オレは近くにあつた商品を手当たり次第に魔獣へと投げつける。魔獣の意識を少しでも瑠璃ちゃんから逸らそうと思つたからだ。

もうやけくそというか、損傷した商品は後で全部買い取る覚悟だ。初任給はすべて補填に消えるだろう。

ソースのボトルとか、肉みその瓶とか、魚の身を解したものを詰めた瓶とか、社員さんに買って来た缶コーヒーとか、とにかく手当たり次第に投げた。だけど全く効果は無い。

オレの行動は多分全く意味は無かつたけど、茶々ちゃんは間に合つた。いや、正確には茶々ちゃんの盾が。

「やー!」

茶々ちゃんは走りながら気合いの雄たけびを上げ、盾を投擲した。盾はブーメランのように半月の軌道を描き、魔獣の横つ面に激突する。

魔獣が僅かに顔を仰げ反らせた。僅かに遅れ、葵さんが再度放つていたらしいモーニングスターが魔獣の横腹に激突する。魔獣の体が大きく仰げ反り、奥へと押し込まれる。しかし魔獣はすぐに両足を地面につき、瞬く間に体勢を立て直すと、倒れたままの瑠璃ちゃんへと再び襲い掛かった。

引き戻されていく葵さんのモーニングスターと入れ替わるように、茶々ちゃんが瑠璃ちゃんと魔獣の間に滑り込んだ。茶々ちゃんは魔獣の横面に当たった後、その場にとどまりながら、まるで羽のようにゆつくりと落ちて来ていた盾の裏側に手を当てて、魔獣へ向けて突き

出した。

そのとき、盾の中央に位置する宝玉が黄金色の輝きを放ち出す。光は瞬く間に収束し、宝玉の中央から上下に伸びる一本の光の線になる。伸びる光の線はもともとの盾の長さを越えてから停止し、上からは下へ向けて、下から上へ向かって、盾の縁をなぞるように半透明の光が光の線から時計回りに流れ出し、光の盾はさらに大きく変化する。

そのとき、僅かに身じろぎした瑠璃ちゃんが、苦し気に言葉を絞り出した。

「ご、めん……」

「っ……っ……！ るりちゃ、あ……っ!!」

瑠璃ちゃんの声に反応した茶々ちゃんの表情が悲痛に歪み、僅かに振り向いてしまった。

その一瞬にタイミングを合わせたかのように、魔獣が茶々ちゃんの盾に体当たりをぶちかます。

不意を突かれたからか、茶々ちゃんは衝撃を受け止めることができない。盾は跳ね上がり、体は僅かに仰け反った。

それだけじゃ終わらない。

追撃だ。

魔獣は片前足を大きく振り上げ、一気に盾へと振り下ろす。

「く、う……っ」

魔獣の巨体と凄まじい力で上から盾を殴りつけられた茶々ちゃんの膝が、僅かに曲がる。

魔獣がさらに盾を叩く。

盾を支える小さな体が上下に揺れた。

葵さんが放ったモーニングスターが魔獣の横つ面目掛けて接近する。しかし魔獣はまるでもう見切ったと言わんばかりに尾を一振りし、モーニングスターを弾き飛ばした。

葵さんが不快気に眉をしかめる。

その間も、魔獣の前足は何度も茶々ちゃんの盾を強く叩きつける。その度に茶々ちゃんの膝が少しずつ曲がっていく。盾を支える細

腕と足はがくがくと大きく震えている。

まだ動けない様子の瑠璃ちゃんが絞り出すように言った。

「っ……逃げ、て……っ！」

「いや!! 今度は、わたしが……っ!!」

瑠璃ちゃんの懇願を茶々ちゃんは跳ね除ける。

「今度は」ということは、似たような状況が立場を変えて起きたことがあるのだろうか。

もう投げる商品が無くなってしまった。被害総額は5桁は下らないだろう。

……いやあない。

オレは信乃ちゃんの件があつてから地道に続けていたジョギングの成果を見せるときが来たと、化け物に体当たりをかまそうと駆けだした。

「おわ……っ！」

化け物の後ろ脚に体当たりをかましたが、オレが吹っ飛ばされた。化け物はびくともしていない。というか、オレを気にしてもいない。そして肩がとても痛い……!

「おにーさん……! 瑠璃ちゃんを……!」

自損事故さながら、魔獣に何をされるでもなく一人で吹っ飛ばされ、近くで転んだみつともないオレに、茶々ちゃんは苦し気な声で言った。

もはや茶々ちゃんは膝が完全に曲がりきり、膝でなんとか立っていられているような状態だ。そう遠からず、魔獣によって押しつぶされるだろう。

葵さんはさつきからずっとモーニングスターを魔獣にぶつけようとしているが、魔獣はそれを器用に弾いている。

「……強……い……」

葵さんの忌々し気な呟きが聞こえて来る。魔獣に対する怒りや憎しみ、あるいは茶々ちゃんたちを助けられないことに対する自責のためか、歯ぎしりまで聞こえて来るほどだ。

「も……っ……っ!!」

茶々ちゃんの苦しげな声。その顔は真っ赤に染まっていて、脂汗が滲んでいる。

どうする？

オレの力じや魔獣に対抗できない。

何故か今はオレが仮定した「異変に対するかなり強い抵抗力」も効果を発揮していないようだ。

はっと、瑠璃ちゃんの方を見る。

瑠璃ちゃんが握ったまま、その形を保っている光の剣。

オレは這いつくばったままそれに手を伸ばし、瑠璃ちゃんの手から取り上げた。

これでなんとかならないか!?

……。

ボケがよ。

光の剣は瑠璃ちゃんの手から離れた瞬間、しゅん、と纏っていた光を失い、ただのステッキに戻った。

瑠璃ちゃんの手から離れたからか、オレが触ったからかは分からないけど……オレが触ったからだというなら、変なところで効果発揮すんなよオレの体質よお!

「だ……っ！」

茶々ちゃんの手足が滅茶苦茶震えている。

もう限界を迎えているようだ。

……。

瑠璃ちゃんだけでも。

そう思い、瑠璃ちゃんを引き寄せようと両手を伸ばしたとき、再度モーニングスターが飛来した。

モーニングスターは魔獣の背中を越えたあと、くるりと方向を変え、化け物の腹の下を通り、また背中を越えて腹の下を通る。光の鎖が魔獣の体にくると巻き付いていき、ある瞬間で、ぴん、と張る。

次の瞬間、魔獣の体が勢いよく宙に浮き、オレ達から離れていく。魔獣を連れ去ってくれた鎖の先を見れば、葵さんが砲丸投げの事前動作のように、ステッキを横向きに振り抜いていた。

うわあ……。

長い鎖に絡め取られて引つ張られていく魔獣の体が、立ち並ぶ商品棚のことごとくをなぎ倒していた。途中、鎖が解かれ、魔獣の体は遠心力のまま壁に激突する。

もうめちやくちやだよ。スーパーが。

どうすんのこれ。さすがにこれはオレ責任取れないよ。

とはいえ、今はそれどころじゃない。

「二人とも大丈夫?」

発光が終息し元の大きさに戻った盾を地面に付けて四つん這いで荒い息をする茶々ちゃんと、横たわったままの瑠璃ちゃんに声を掛ける。

瑠璃ちゃんが肘を支えに僅かに体を起こした。しかし背中痛みが強いのか、一瞬体を強張らせ、すぐに倒れてしまう。

茶々ちゃんはそんな瑠璃ちゃんを横目に哀し気な表情を浮かべているが、四つん這いの体勢から動こうとしない。腕がかたかたと震えていることから考えるに、腕と足に疲労が溜まり過ぎていて動けないようだ。

「あいつ……強い……」

「うん……」

痛みをこらえているからか強張った声で言った瑠璃ちゃんに、茶々ちゃんが小さく同意する。

強いんだ、アレ……。

他が分からないから何とも言えないけど、二人からするとかなり強い部類らしい。

オレは痛む肩を押さえながら二人から目を離し、店の奥を見た。

葵さんがモーニングスターを好き勝手に振り回し、店の壁や天井を破壊しまくりながら魔獣と戦っている。

これじゃあオレのバイト先が無くなっちゃうよ……。

「おねーさん……やっぱりすごいね……」

「……」

茶々ちゃんは感心するように言ったが、どこか複雑そうだ。瑠璃

ちゃんをやったのが葵さんだから無理はない。葵さんも故意では無いだろうけど、酷い……よな。謝りもしてないし。後で謝るのかもしれないけど……。

「行か……ないと……」

瑠璃ちゃんは一生懸命に起き上がろうとしたが叶わず、ぱたり、とまた力なく床に伏せた。悔しそうに俯く。

どうやら葵さんは二人より強いらしい。

二人が一方的にやられた魔獣相手に葵さんは今、大立ち回りを見せている。

互角のように見えるが、二人の反応を見るに間違いでは無いらしい。

頬を地面につけ悔し気に眉を寄せている瑠璃ちゃんの頭を、オレは労わりを込めてそつと撫でた。

「……？」

「無理しないで」

茶々ちゃんの方を見る。

小さな体だ。瑠璃ちゃんもそうだ。小さな女の子。

「素人目だけど、葵さんって凄く強いみたいだし……彼女に任せられないのかな？ 君たちが戦う必要はあるの？」

「……」

「そもそも……あの魔獣ってなに？ 普通の生き物では無いよね」

「……。あん……。東堂さんは……。知らない方が良いわ」

瑠璃ちゃんはオレの質問に答えることを嫌がった。

茶々ちゃんの方を見ると、困った様子ではあるけど何も言う様子はない。

「知らない方が良いって、どうして？」

「……」

「……」

二人は申し訳なさそうな表情で黙ってしまった。

「それも言えないの？」

「その……」

「茶々……。ダメ」

何かを言おうとした茶々ちゃんを瑠璃ちゃんが制止する。

魔獣については何も言えない。言えない理由も話せない。何か事情はあるんだろうけど、さすがに店の惨状も踏まえると納得は難しい。でも怪我をして喋るのも辛そうな瑠璃ちゃんに無理やり話させるわけにもいかないしな……。

「茶々ちゃんも?」

「……」

「それは……オレだから言えないってことなのかな?」

「ち、違うよ!」

「誰に対してもってこと?」

「う、うん……」

なるほど……。

オレだけじゃなくて、誰に対しても魔獣に対して説明できないし、説明できない理由も明かせないと。

彼女たちが魔法少女になった経緯が分からないから何とも言えないけど、たとえばそういう制約や縛りみたいなものがあって、誰かに話したらペナルティが生じる、とかなのかもしれない。それがどういうものかは分からないけど、もし死ぬとか命の危機に直結するようなことなら無理強いも出来ないし……。

「それはそういう話をする君たちに何か不利益があるからってこと?」

オレの質問に答えてくれたのは、のっそりと体を起こした瑠璃ちゃんだった。

「違うわ……」

「瑠璃ちゃん、大丈夫なの? 動かない方がいいよ」

「大丈夫……。今……魔法で治してるから。ちよつと背中のがりが遅いけど……。それより……茶々に聞くのはやめて」

体を起こした瑠璃ちゃんは気怠そうに力なく壁に寄りかかった。

「それはどうして?」

「この子……うっかり言っちゃいけないことを言っちゃいそうだから



……。本当に、あの魔獣のことは知らない方が良いの。それは東堂さんだけじゃない。『魔女』じゃない人はみんなそう……。でも……。もしかししたら……。あなたは違うのかもね……」

「オレは違うってどういうこと？」

「さつき、あなた……。自分で言っただじやない。魔法を弾く体質……。みたいなこと。でもそう考えれば辻褃は合う……。のかもね……」

「思わせぶりに言うなあ……」

「言えるところだけで良いから全部言っただけで欲しいところだ。」

「出来るだけで良いから教えては貰えないかな？ このままだとオレ、理由も分からないままアルバイト先を無くすことになるんだけど……」

「それは、大丈夫。今ここであの魔獣を倒せば、全部『無かったこと』になるから。だから行かないと……。葵さんの手伝いを……」

瑠璃ちゃんは立ち上がろうとするけど、まだ背中が痛むようで壁をずり落ちて尻餅をつく。

「なんて言えば良いのか……」

瑠璃ちゃんの言葉が事実なら、あの魔獣は何が何でも退治して貰わないと困るわけだけど。

「倒せば無かったことになるって言うのはどういうことなんだろう？」

「それも教えて貰えないのかな」

「そうね……。あたし達が言えるのは、誰に対しても魔獣や魔法についての情報を明かせないってことと、知ってしまった人の記憶を消さなければならぬ……。ってこと。これは……。絶対なのよ」

「記憶を消す？ それはあまり穏やかじゃないね」

葵さんがあのととき信乃ちゃんとオレの記憶を消したのは瑠璃ちゃん言う『絶対』のルールに触れたから……？

でもあのととき、魔獣なんてワードは一度も出なかった。もしかしたら実はオレもちゃんと記憶を消されていて、単に信乃ちゃんより消された範囲が狭いだけ、なんて真実が隠されていたりしてらんだろか。分からないな。

ただそうになると、オレも今回の件に関しては記憶を消されることに

なるわけだよな。がつつり知っちゃったし。多分、消えないと思うけど。

「言っておくけど……後であなたの記憶も消させて貰うわよ」

「いや、それは止めて欲しいかな。良い気はしないし……。さつきも言っただけど何が起きるか分からないし。そもそもオレの記憶を消すって無理だと思うんだよ。前に友人と一緒にいたとき、記憶を消す魔法を葵さんに掛けられたみたいなんだけど、友人の記憶は消えてたけど、オレのは消えてなかったし」

「……。覚えてるの……?」

「あれ? 葵さん?」

気づいたら葵さんが傍に立っていた。

服が最初の黒いパンツスーツに変わっている。

「魔獣は?」

葵さんはオレの質問には答えず、視線を動かした。

オレも倣って視線を追うと、八つ裂きになっている魔獣の死体が転がっている。

えぐ……。

何をどうしたのかは分からないけど、口とか肛門から爆弾を突っ込んで爆破した、みたいな惨状だ。

さつきまで大立ち回りをしていたのに、ちよつと目を離したら倒してるなんて葵さんって強いんだな。さすがに二人よりも年上なだけはある。

それだけに残念だ。

葵さんの胸元のブローチに拵えられた宝玉が輝きだしたのを見てそう思う。

「何をやる気なの? 何かオレに危害を加える気なら止めた方が良くい。怪我じゃ済まない。本当に」

きつと信乃ちゃんが記憶を消されたときと同じだ。あのときは特に何ともなかったけど、今回がどうなるか分からない。オレじゃなくて葵さんが。

「本当に止めておいた方が良くい」

あーあ、知らんぞ、勝手にしろ。

そう言つて放置するには、放置した際に生じる被害がでかすぎる。人一人吹っ飛ぶ可能性があつて、それを知っている以上はさすがに見て見ぬふりは出来ない。拳銃が暴発して手が吹っ飛んだ半グレの男くらいの被害で留まるならまだいいけど、律ちゃんのとときの化け物たちみたいに肉片にまでなられると、この子たちのトラウマになつてしまう。

オレは助力を求めて茶々ちゃんと瑠璃ちゃんへと視線を向ける。

魔獣が倒されたことで安堵したのか、茶々ちゃんはぺたんと、外側に広げた自分の足の間に座り込んでいた。

茶々ちゃんは葵さんを見上げてこう言った。

「あの、おねーさん。おにーさんに魔法を掛けないでください」

茶々あ！

君は良い子だよ……。

オレ自身半信半疑な体質を信じてくれるなんて。

「……。何故……？ 意味が分からない……」

「あの、おにーさん、魔法が効かない人みたいで。えつと……ばくはつするらしいです」

「……。……？」

葵さんが小首を傾げる。

確かに今の説明だね。

「……。危険……。あなたも知っているはず……」

「そ、それは……でも……」

茶々ちゃんがオレに助けを求めるように視線を向けて来た。

いや、助けを求めているのはオレなんだけど……。

「葵さん。補足をするよ。聞いて欲しい。オレはちよつと特殊な体質で……魔法とかそういうのが効かなくて、たまたま爆発するんだ。オレにそういうことをした相手が」

「……。聞いたことない……そんなの……」

葵さんは奇妙な生物を見るような目でオレを見て来る。

「信じて欲しい。オレにもどうしようもないことなんだ。脅迫のよう

になってしまうけど……死にたくないなら止めておいた方が良く  
思う。過去に魔獣……とはだいぶ違ったけど、異形の化け物に襲われ  
たことがあって、そのときは化け物が爆散したんだ。拳銃で撃たれた  
こともあったけど、そのときは撃った人の手が爆発した」

「……？ ……？ ……？ ……？ ……？ ……？」

それはそう。

オレも改めて口にして意味不明だと思ったよ。

「意味が分からなくてもそうなんだ。それにさっきの葵さんの質問だ  
けど、答えはYesだと思う。以前会ったとき、オレは友人の女の子  
……信乃ちゃんと一緒にあなたが何故ここにいるのかを迂遠に問  
いかけた。少し話したあと、あなたのブローチが輝いて、光がなくなっ  
たとき、あなたは消えていて、信乃ちゃんの記憶だけが消えていた。  
もしこの話に誤りや抜けている部分が無いのなら、オレの記憶が消え  
ていない証明になると思う。ただオレが覚えているのはこれだけだ  
から、他に何かエピソードがあるなら、それは逆にオレの記憶が部  
分的に消えているってことの証明になると思う。どう？」

「……。信じられない……。」

オレの体質が摩訶不思議すぎるといふことなのか、自負のありそう  
な自分の魔法が通じなかったことに対しての悔しさから出た言葉な  
のかは分からない。けど、驚いた様子を見るに、ある程度は信じてく  
れているんだと思う。多分これは……葵さんからしてもオレの記憶  
は消えてない確認が出来たってことなんだろう。信乃ちゃんがそう  
だったように、オレからも葵さんに関する記憶を綺麗さっぱり消した  
つもりだったということかな。

「それと……。」

ちら、と瑠璃ちゃんを見る。

瑠璃ちゃんはまだ苦しそうに壁にもたれかかっている、オレと葵さ  
んの話の話を黙って聞いていた。

大丈夫そうじゃないな……。

もしかして、どこか骨にひびとか入ってるんじゃないか？

「瑠璃ちゃんに償いを。あなたの武器でこの子は怪我をした」

「……。忠告した……。関わるなど……」

「それは関係ありません。小学生の女の子が負傷し、これだけ苦しうにしている。その原因の一つはあなたの武器だ。オレは今回のことに関して事情を全く理解できていないけど、これだけは分かる。あなたは大人として、取るべき責任があるはずだ。それと、信乃ちゃんの記憶をもとに戻すんだ。人の記憶を消せるほどの力があるとしても、本人の了承も無くそんなことをするのは許されるわけが無い」

「……。忠告した……」

「……。忠告した……」

「忠告したからなんだ？ 自業自得だとしても？ そんなバカな話があったてたまるか。……失礼。警察と救急車を……まだ圏外か」

話にならない。

携帯を取り出して電波を見るとまだ圏外になっている。

オレは医療知識が無いので、瑠璃ちゃんをどうしてあげれば良いのか分からない。応急手当も目に見える傷とかが見当たらないし、体の内部が傷ついているならオレにはどうしようもない。下手に触れず、救急車を待つのが一番だと思うんだけど、それも出来ない。

社員さんの方を見る。起きてくれたら車をお借りして病院へ向かいたいところだけど、まだ気を失ったままだ。

僅かな望みを掛けて葵さんと茶々ちゃんを見る。

「さっき瑠璃ちゃんは魔法で自分の体を癒していると言っていた。二人は瑠璃ちゃんを治すことはできないの？ 癒しの魔法みたいなのは……」

「……。自分にだけ」

「はい。葵さんの言う通りです。でも……」

癒しの魔法自体はあるけど、それは自分には使えないらしい。意外と不便なんだな。

茶々ちゃんが何か続けて言いたそうにしている。オレは黙って聞くことにした。

茶々ちゃんは葵さんを見上げてこう言った。

「おねーさん。この前たすけてくれてありがとうございます。お

ねーさんのこと、そんけーしてます。でも……瑠璃ちゃんに……。謝ってください」

「茶々、いいの。あたしが葵さんの邪魔をしちゃっただけだから」

「よくないよー！ 瑠璃ちゃんつらそうだもん！」

茶々ちゃんが立ち上がった。

睨みつけているとかでは無いけど、強く葵さんを見据えている。

二人が葵さんと会うのは久しぶりなのかな。

さっきのまるで連携が取れていない感じからすると、そもそも共闘の経験も無さそうだったけど。

「あ、あやまってください……っ！」

「……」

茶々ちゃんの真つすぐな目を少し見返してから、葵さんが目を逸らした。

大人の女が小学生女兒に目力で負けてる……。

ということは瑠璃ちゃんへの罪悪感自体はやっぱり葵さんの中にはちゃんとあるんだな。

なのに何で謝らないんだろう。プライドが邪魔をして謝れないとか？ 子供相手だから？ さっきも言っていたように、事前に忠告をしていたら何が起きても自己責任だとも言うつもりか？ それとも他に何かあるんだろうか。

いずれにしても、しょうもない。

「……。ごめん……」

あれ？

意外とあっさり謝ったな。

さつき瑠璃ちゃんにオレへの謝罪を促したときもそうだし、魔獣相手から瑠璃ちゃんを守ったときもそうだけど、この子、いざというときは肝据わってるな……。最終的に押しに弱そうな瑠璃ちゃんとは逆な感じがする。

しかしアレだな。

やっぱり茶々ちゃんは葵さんに助けられたことがあるらしいね。それが多分、この間の『空白の数日』のときのことなんだろうけど。

瑠璃ちゃんはさつき魔獣が倒されたらその被害は無かったことになるって言っていた。『空白の数日』が『無かったことになった』ことを考えると……あれは魔獣によって引き起こされたことなのかな。

この空気感で質問と言うのも気が引けるけど、聞いてみたいと思う。

「茶々ちゃんが助けられたっていうのは、二人の存在がこの世界から消えていたこと？」

「え、あ、はい。そうです」

「茶々！ ダメだって！」

「あっ」

「……。何故知っているの……」

葵さんが急に警戒心むき出しでオレを見て来た。

やっぱり何か事情があるらしい。瑠璃ちゃんがオレに警戒心をむき出しにした理由を、葵さんも知っていそうだ。瑠璃ちゃんの話聞く限りだと、むしろ葵さんが何か吹き込んだようだけど。

「茶都山家のことを近所の人が認知すらしていないかったことと、小学校でこの子たちの在籍確認をしたときに、そんな子はいないと言われたから」

「……。違う……。何故覚えているの……。あなた……まさか……」

「何故覚えているのかって言うのはやっぱり、二人が消えていたっていうことをオレが他の人達と同じように忘れて居なければおかしいってことかな？ だとすればさつき言った通りだよ。オレは魔法とかそういうのが効かない体質らしいから。ところで……「まさか」っていうのは、オレがさつき瑠璃ちゃんの言っていた『敵』なんじゃないか、ってことで良いのかな？」

「……。違うの……？」

葵さんは胸元のブローチに拵えられた宝玉に手を触れる。

いつでも襲い掛かって来ます、といわんばかりの雰囲気だ。

「あのー… 葵さん……っ」

瑠璃ちゃんが大声を出し、その際に生じた痛みで身じろぐ。

茶々ちゃんが慌てて瑠璃ちゃんの傍に駆け寄った。

「瑠璃ちゃんだめだよ……」

「大丈夫よ茶々……。葵さん、その人は違うと思います……。『敵』じゃなくて。ただの……えーっと、変な人です……」

変な人って言うな。

「……。信じられない……」

「信じられなくてもそうなんだ。葵さん。世の中は君が見ているものだけが全てじゃない。世界には、自分の常識を崩すようなことがたくさんある。井の中の蛙大海を知らずってことわざ知らない？」

「……。知らない……」

「知らないんだ」

「……。聞いたことはある……」

「そう……。まあ、そのままの意味だよ。井戸の中に居る蛙は井戸から見えるものだけがすべてで、外にどんなものがあるのか、どんなことが起きているのか知らない。要は視野が狭いってこと」

「……。そう……。でも……記憶は消す……」

「あなたも人の話を聞かないなあ……。それこそ『忠告』だ。止めておいた方が良く」

オレは立ち上がって葵さんの前に立つ。

180を超えるオレの身長で葵さんを見下ろした。

葵さんは怯んだ様子で数歩後ずさりする。

信乃ちゃんのと看もそうだったし、茶々ちゃんにすぐ根負けしたところもそうだし、この人、ヘタレだよな基本。

葵さんの胸元の宝玉が光り出す。

やるかあ……

「やめなつてー!」

さすがに目の前で人間が爆散するのは見たくない。

オレは光の中に突っ込み、がむしやらに手を伸ばし、触れたものを握った。

葵さんの手かな、これは。

「……。うそ……っ!」



光の中から葵さんの慌てたような声が聞こえた。  
葵さんの手を握っていたオレの手が急に空を掴んだ。

なんだ？

すり抜けた？

「いない……」

光が消えたとき、既に葵さんの姿は無かった。ついでに魔獣の肉片も無くなっていて、魔獣と葵さんの戦いで破壊されたスーパールの内装が綺麗に元に戻っている。

魔獣が倒されれば無かったことになるという瑠璃ちゃんの言葉は本当だったようだ。

傍にはまだ瑠璃ちゃんと茶々ちゃんがいる。

社員さんもだ。

瑠璃ちゃんは魔獣に負わされた怪我は治っているようで、すくつと立ち上がった。ただ背中はまだ痛むのか、立ち上がったときに前かがみで少し呻いていた。

オレは二人の方を向いて言った。

「さすがに説明して貰えるよね？ もししてくれないなら、オレは君たちの親御さんと呼ばなければならぬ。このまま帰っても良い。だけどオレは社員さんや君たちの両親、それに学校にも今夜のことを……君たちがここに入り込んでいたことは伝える。だけでも事情を説明してくれて、情状酌量の余地が……仕方ないと判断できることがあれば、出来る限り黙っておく」

「でも……」

「……」

この期に及んで渡る二人に、オレは肩を落とし、周囲を見渡した。

さっきの戦いでオレが魔獣に向かって投げ、破損してしまった商品が散乱している。

「これ、全部弁償しないといけないんだよ、オレ。何も知らずにそれって、さすがに可哀そうだと思わない？」

瑠璃ちゃんと茶々ちゃんが困ったように顔を見合わせた。

顔を見合わせている二人の少女を前に、オレはオレで結構頭を抱えている。

多分だけど、今回の騒動に関して……特に魔獣については監視カメラに映っていないんじゃないかと思う。三人の魔法少女……魔女？ についてもだ。

結局カメラがこの異変をどんなふう記録しているのかは見てみないことには分からないけど、もしも。もしもオレが何もなかったところにいきなり叫び出して商品を投げまくっているような映像が残っていたとしたら、まず間違いなくオレは警察のお世話になることになるだろう。あるいは過去の既病歴を探られ、『そういうもの』として扱われかねない。結果としてそうなるのは……致し方ないとしても、それで他の方に迷惑を掛けるのは断固として避けたいところだ。

とりあえず破損した商品はすべて回収して代金を払うとして……。

社員さんの方を見る。

まだ気を失っているようだ。証拠隠滅のつもりはないけど、掃除はしておこう。当然、残業代なんて請求するつもりはない。

内心で頭を抱えながらも携帯を取り出して、社員さんのために救急車を呼ぼうと思う。見たところ特に異変も無く、眠っているだけのようだけど……。念のためだ。

そのとき、瑠璃ちゃんが声を掛けてきた。

「なにをしているの？ 本当に電話を掛ける気？」

「ああ、今は違うよ。社員さんのために救急車を呼ぼうと思って」

「その必要はないわ」

「そうは思えないけど」

「……。今のあの人はただ眠っているだけ。放って置いてもそのうち目覚めるわよ。しかも、すぐくスッキリしてね」

「その言葉を「はいそうですか」と信じるには、ちよつとオレは除け者すぎるかな……。情報が無すぎるよ。納得できる要素が無い。君たちのことも、あの魔獣についても」

レスキュー番号だけを入力した携帯を手にしたまま瑠璃ちゃんを見る。

瑠璃ちゃんはしつかりオレを見て言った。

「それこそ、「信じてもらうしかない」わ」

「それは違うね。君にはまだ話せることがある。違う?」

「だから、話せないのよ……。これ以上は」

「本当にそうなのかな? オレは今回、君たちが秘匿しておきたい現場に居合わせてしまった。君はそういった人の記憶を消すことがルールだと言っていたけど、多分、オレの記憶は君たちの手じゃ消えないし、消そうとしたときに君たちの身に何が起きるかも保証できない。オレはもう他人じゃないんだ」

オレは瑠璃ちゃんに微笑みかけてこう言った。

「そうだな……。こう考えたことはない? 君たちは社会的にはまだ子供で、制約もたくさんある身だ。こういうことをするにあたって、不自由なことも多いと思う。今回のことはまさにそれだと思う。オレのような魔法が効かないって人が他にいないとも限らないし」

「いるわけないでしょ!」

「いないとも限らないし」

瑠璃ちゃんの勢いの良いツツコミを無視して続ける。

「そんなとき、話の分かる外部の協力者が一人くらいいたらな……。つて」

「それは……。あなたがそうなるって言うの?」

「成れるかもしれないってことだよ。そして誓って言うけど、オレはこの件に興味本位で首を突っ込もうとしているわけじゃない。さつきも言ったように、オレはここに散らばった商品の弁償をする義務がある。この件が表沙汰になったとき、もしかしたら……。いや、高確率でオレはここを首になるだろうし、最悪の場合、社会的地位を失う可能性だってある。分かりやすく言うと、前科が付くってことだね。大学を辞めなければなくなるかもしれないし、この地域に居られなくなる可能性だってある。オレは今、君たちが思っている以上に危うい立場にいるんだよ。普通に考えて、かなり深刻な状況だ。そして、

もしも君たちがオレの記憶を消したとすれば、オレは身に覚えのない罪を、何故自分がこんなことをしたかも分からないまま、金銭的にも社会的にも償うことになる。それはとても恐ろしいことだよ、瑠璃ちゃん。賢い君なら分かるよね？ オレには知る権利があるはずだ」マジで。

何の事情も分からないままこれだけの商品の弁償をするとか、いくらなんでも、さすがにやってられなくて……。

それに、信乃ちゃんの件がある。オレの身に何かあれば、火の粉はオレを越えてあの子にも降りかかるだろう。弁護士先生に後を託すにしても、彼女はきつと哀しむ。特に信乃ちゃんの件はオレが自分の意思で踏み込んだことだ。ここで無責任に消えることは許されないだろう。

それはそれとして、瑠璃ちゃんには言わないけど、図らずも巻き込んでしまった側にも、相応の責任は生じるはずだ。本当なら葵さんにその役割を果たして欲しいところだけど、消えてしまったので仕方がない。

瑠璃ちゃんの様子を見るにオレが巻き込まれたのは本当に偶然のようなので、吊るし上げるようなことはしないし、必要以上に責めるようなことを言うつもりもないけど、不運にも巻き込まれた人間がどういう状況に陥っているのかは理解して貰いたいところだ。

「……」

「君が事情を話すことで生じる責任はオレが取るよ。もしも『魔法少女』としての上司とか、所属している機関、組織があるなら、直接オレがその話をしてもいい。それくらいはなんとか……。ただ、もしも……事情を話すことで君たちに大きな不利益を生じるなら無理強いはいはしないよ」

「不利益って？」

「君たちが……そうだな。例えば死んでしまったり、手足を失うとか、記憶を失うとか、さっき言った所属機関から厳しい罰を受けるとかそういうの」

「は？ そんなのないわよ、別に」

「無いんだ……。じゃあなんと言えないの？」

「それは……」

瑠璃ちゃんが口籠る。

「茶々ちゃん？」

「えつと……えつと……」

なんで二人して口籠るのか。

ここまで話をしてなお茶々ちゃんできえ何も言えないとなると……。

「もしかしてだけど、それって君たちじゃなくて……聞いた人の方に不利益が生じるのかな？」

「瑠璃ちゃん。もうはなそーよ……」

「茶々！」

「なるほどね。今の反応である程度は理解したよ。君たちはずっとオレを案じて情報を伏せてくれていたわけだね。ありがとう」

「……」

「おにーさん……」

二人は申し訳なきように、微笑んでいるオレを見上げている。

「茶々ちゃんはおしとやかだけど人を想いやれる強い芯を持っているようだし、瑠璃ちゃんのそれも突き放すことで危険から遠ざける……厳しさを孕んだ優しさなんだったことは伝わった。君たちは優しい子だ。でもね、今回に関してだけ言えば、その優しさは発揮するべきじゃない。子供二人で抱えきれぬ許容量を明らかに超えている。オレはそう思うよ」

「瑠璃ちゃん……」

「……。分かったわよ。良いのね？ 警告はしたわよ？ どうなっても知らないからね？」

「大丈夫。オレもそれなりに大人だ。自分のケツは自分で拭くよ」

「け!」

「お尻……」

瑠璃ちゃんがぴや、と驚いた様子を見せ、茶々ちゃんはほんのりと気まずそうにする。

なるほど。なんとなく二人の性癖というか、在り方は感じ取れた。何がとは言わないけれど、ストリートかむつつりか、みたいなどころ。「そうね……なにから話せばいいかしら」

「とりあえず魔獣についてだけで良いよ。そこから気になることを質問させて貰うから。それと……」

「なに？」

オレは片手を顔の前に持ってきて「ごめん」というハンドシグナルを作り、こう言った。

「掃除道具持ってきていい？ 時間もあまり無いし、話は掃除しながらで……」

「……」

瑠璃ちゃんは白い目でオレを見てこう言った。

「KY」

「……。よく言われるなあ、最近……」

「やっぱりホントに変な人なんじゃない」

変な人って言うな。クソガキって言うぞ。そして哀しいから止めて欲しい。

ちよつと苛立ちを感じながらもそれを表には出さずに掃除道具を取りに行くオレの後ろから誰かが駆け寄って来る音がした。振り向くと茶々ちゃんが居て、おずおずとこう言った。

「あの、おてつ下さいます」

「君はほんとにいい子だね……。ありがとう。助かるよ。ホントに」

その優しさにしみじみと感じ入るものがある。

茶々ちゃんに箒と塵取りを任せ、オレはモップを取りに行った。

その後、掃除を始めたオレと茶々ちゃんの近くで座っている瑠璃ちゃんが話を始めてくれる。

「手伝うわよ」

「いいよ。背中、まだ痛むんでしょ？ 無理しないで」

「……」

瑠璃ちゃんは不満そうだ。

オレを手伝ってくれるという瑠璃ちゃんの『気持ち』を受け取るこ

とを拒否しているわけだから気持ちは分かるけど、今は大事にして貰いたい。

「気持ちは嬉しいよ。でも、今は自分を大事にして」

「すぐ治るわよ」

「うん。だから治ってからね」

「なおってからね！」

「茶々あ、あんた覚えときなさいよ」

楽しそうに掃除をしている茶々ちゃんにヤジを飛ばす瑠璃ちゃん。

さつきまでのオレへの態度とか、魔獣の件もあるけど、なんとか色々丸く収まりそうで感無量だ。

「じゃあ、魔獣について説明するわよ」

「うん」

茶々ちゃんが箒で綺麗にしてくれたところをせっせとモップで水拭きをしながら話を聞く。

「あれはね。人の『夢』を食らう魔法獣なの。人の心の中に寄生して、人の心の中の『夢』を食べて成長し、やがて現実の世界に孵る。そして孵った魔獣は宿主を食べるのよ。その存在ごとね」

「存在ごと……？　もしかしてそれが……初めから世界に居なかったことになる、あれなのかな？」

「そう」

「じゃあ、茶々ちゃんと瑠璃ちゃんがしばらく『世界から消えていた』のは、魔獣に食べられてたからってことか」

「……そういうことになるわね。情けないけど……あたしたちはあの日、茶々のご両親から孵った二体の魔獣の対処に失敗したの」

「なるほど……。茶都山家と瑠璃ちゃんの存在が消えていたのはそれで……ってことは、茶々ちゃんが葵さんに助けて貰ったって言うのは」

「ええ。あたしたちを魔獣の腹から解放してくれたのが、葵さんだったの。あたしは会うのはそのときが二回目だけど、茶々は初めてのはずよ」

「うん。はじめてだった」

「そうなんだ。そんなことがあったんだ……」

はー……。なるほどなあ。

それは確かに、二人も葵さんに対して強い恩義を感じるわな……。ある意味で殺されるより悲惨な状況を食い止めてくれたわけだし。

「じゃあ社員さんはそれに寄生されてたってこと？　君たちがこの時間ここに来たのはそれで？」

「そう。魔獣が孵るときには魔力の乱れというか、予兆があつて……。あたしたちはそれを感じ取つて孵る前にそれを駆除するのが役目なの。逆に、予兆が出るまで人の中にいる魔獣を感知することはあたしたちにも出来ない。しかも予兆が現れるのつて、数日前だったり孵る直前だったり個体差があつて……。予兆が出てから孵るまでの期間が短い魔獣に限つて、滅茶苦茶強いよ。このお店の人もそうだった。茶々のご両親も……。だから今回は孵る前にあの人を強制的に眠らせて、その間に記憶を消すことで対処しようとしたの。魔獣に寄生されてる人は多かれ少なかれ自覚があつて、それを消せば魔獣は封印……。眠りに就いて孵らなくなるから。茶々は気に入らなかつたみたいだけどね？」

「そうなんだ……。あるとき「仕方ない」って言っていたのはそれで……。じゃあ、葵さんが記憶を消すことに固執している様子なのも？」

「だと思つて。少なくともあたしはそう。そもそも魔獣つてというのは、自分たちの存在を『認識している』人間を好んで宿主にする傾向があるの。何も知らなければリスクは下がる。だから記憶を消すのよ」

なるほど。

確かに筋は通っている。

今日の魔獣とこの子たちの戦いも壮絶だったし、魔獣退治に関する彼女たちの労力を考えると……。魔獣が増えかねない危険因子の排除に動くのは当然だろう。

「問答無用で記憶を消すのは……。どうせ話しても忘れるからつてことなのかな？」



「そうね。それと、記憶消去の魔法も完全じゃないから、もしかしたらほんのりと覚えてるかもしれない。魔獣はその『ほんのり』を嗅ぎつけて来る」

「なるほどね……。じゃあ魔法についても教えられないって言うのは？」

「似たような理由よ。魔法と魔獣は切っても切れない関係なの。魔法を知っていけば、魔獣はそれを嗅ぎつけて来る。狙われるリスクが上がるのよ。それなのにこの子は……」

瑠璃ちゃんは呆れたように茶々ちゃんの方を見た。茶々ちゃんは知らんぷりをして掃除を続けている。

「あの日の朝、あたしが茶々と一緒にあなたに会いに行ったのは、あなたの記憶を消すため。茶々から「変身したところを見られた」って聞いたから」

「そういうことか……。それで最初に茶々ちゃんの変身シーンを見たとき、必死に魔法じゃないって誤魔化して……。そう考えると……。うん。確かにちよつとアレだね」

迂闊と言うか意識が低いというか。

茶々ちゃん、相当怒られちゃったんじゃないかな、瑠璃ちゃんに。あのとき、いやに茶々ちゃんが恐縮していたのはそれでか……。納得した。

でも、そっか……。

誤解が解けた後も瑠璃ちゃんが頑なに「事情の説明はできない」って言っていたのも、記憶を消すって譲らなかつたのも、本当に他意無くオレを守るためだったのか。オレを危険から遠ざけるために……。

ごめん。

分かんよそれは。

世の中って難しい……。

「分かった。あと、これが個人的には一番気になっているんだけど、瑠璃ちゃんがオレを警戒していた理由って何なの？ 葵さんが警告したって話だったけど、オレ、葵さんに特に何かをした覚えは無いんだよね。会ったのも一回だけだし」

「えつと……それは、その」

瑠璃ちゃんが口籠る。

おや………?

「それはですね」

「ここぞとばかりにとことこと近寄って来た茶々ちゃんが声を上げる。

「おねーさんは、おにーさんのことはなにも言っていないのです」

「というと?」

「……」

自信満々に胸を張って嬉しそうに言う茶々ちゃんと、とても気まずそうに顔を逸らす瑠璃ちゃん。

ちよつと面白いな。

茶々ちゃんが箒でとんとんと床を叩く。調子に乗っているようだ。

可愛いけど、箒の先が痛むからそれやめて。

「おねーさんが言ったのは、えつと……なんだっけ? 瑠璃ちゃん」

「あ、あんた、こ、ここここであたしに振るわけ!?! 鬼!?!」

「瑠璃ちゃん、葵さんはなんて言ったの?」

「あ、アン……東堂さんに気を付けろって」

「本当はなんて言ったのかな?」

「……あたしたちが居なくなっていたことを認識してる奴に気を付けろって」

なるほど。

確かにオレがピンポイントで当てはまってしまうわけだけど、だからといってオレ個人のことを言っているわけじゃない。

あのととき瑠璃ちゃんが言ったことは事実じゃなかったわけだ。

茶々ちゃんも訂正しようとしたしな……。

これはこの子の視野の狭さが招いた思い込みだな……。

それでずつとあの態度か……。それは確かに、茶々ちゃんも謝れつて圧も掛ける。

「なるほどね。じゃあもしかしてだけど、『敵』っていうのは、その条件に当てはまる人のことを言うのかな?」

「え？ ええ……。魔獣は自然に発生するもの……。のはずなんだけど、魔獣を操れる奴がいるらしくって……。葵さんの話だと、そいつが『そう』らしいの」

「つまり、魔獣が倒されることで無かったことになったはずの被害を認識している人間ってことか。それが君たちの敵」

「そうね」

「なるほどね。そういうことか。それでオレを……。実際には違ったわけだけど。でも、確かにそれは勘違いしても……」

「ちら、と瑠璃ちゃんを見る。気まずそうだが、オレが理解を示すような態度を見せていることにどこか安堵しているようだ。」

でもケジメはちゃんとしておこうか。

「ところで瑠璃ちゃん。オレに何か言いたいことはあるかな？ ちなみに、オレは『改めて言っておいた方が良いことがある』んじゃないかって思っているよ」

「うっ……」

気持ちには分からないでもないけどね。

危機的状況を救われたことで盲信したんだろう。オレはそうなって欲しくないから信乃ちゃんや律ちゃんとなるべく距離を取るようになっていたわけだけど、あの感じじゃ葵さんがそこまで考えてると思えないし。

そんなときに瑠璃ちゃんにとって神にも匹敵するような人の『警告』に合致する人間が現れたとなれば、あの態度も理解できる。

でもそれとこれとは別だよね。

にこのこと瑠璃ちゃんを見ていると、瑠璃ちゃんはしばらく悩んだあと、ぽつりと言った。

「ご、ごめんなさい……。勘違いでした……」

「許します。オレも紛らわしかったよね。でも……。今度からは気を付けて。オレだから良かったけど、他の人にするにはちよつと褒められた態度じゃなかったから」

「あん……。東堂さんみたいな人が他に居てたまるもんですか」

「今回のことだけじゃないよ。それに……。もし本当にオレが『敵』な

ら、警戒していることがバレた時点で状況は最悪だと思っただけ。瑠璃ちゃんは どう思う？」

「……。 はい……。 そう思います……。」

「ふふ」

小言を食らい意気消沈している瑠璃ちゃんを見て、茶々ちゃんが笑っている。

瑠璃ちゃんは恨めしそうに茶々ちゃんを睨み、茶々ちゃんはひよいとそっぽを向いた。

「瑠璃ちゃん。 八つ当たりはダメだよ。 茶々ちゃんはずっと瑠璃ちゃんを止めてたんだから」

「……。 はい」

「よろしい。 これはお節介だけど、瑠璃ちゃんはまだ少し茶々ちゃんの話に耳を傾けると良いかもね。 相手が何を考えているのか一度ちゃんと聞いてみてさ」

どうも瑠璃ちゃんには猪突猛進なところがあるようだ。

そして茶々ちゃんは瑠璃ちゃんよりも視野は広そうだけど、引つ込み思案だから強く自分の意思を伝えきれないところがある。 見ていてそう思った。

でも、二人がもつと分かり合うことが出来れば、良い影響を互いに与えそうだなとも思う。

互いの長所を活かし、互いの弱点を補い合う関係になれそう。

そのためには色々な意味で強そうな瑠璃ちゃんの方が自覚しないといけないとも思うけど。

「……」

瑠璃ちゃんが不貞腐れてる。 気が強そうだしそうだよなって。

オレは苦笑して、瑠璃ちゃんの頭をぽんぽんと叩いた。

「な、なにすんの！ 子ども扱いしないでよね」

「はは。 ごめんね。 ところで……。 君たちが魔法少女になった理由はなにかあるの？ これは完全に興味本位だから無理して言わなくても良いけど」

「別に、たいした理由じゃないわ。 あたしたちにも合ってるか分かる

ないし」

「そうなの？」

「そーなんです」

「そうなんだ……」

そうらしい。

「ただ、夢を見たの。魔獣に襲われる夢。夢の中で魔獣と戦って、倒して、目が覚めたらこの石を握ってて、なんとなく事情を知っていた。それだけ。これは茶々も一緒よ」

「うん。いつしよだよ」

「二人一緒に魔法少女になったってわけじゃないんだ？」

大いなる意思とか、変な小動物に諭されて二人一緒に魔法少女になったってわけじゃないんだな。

「違うわよ。あたしの方が早い。先輩ってわけ」

ふふん、と胸を張る瑠璃ちゃんだけど、もうそんな威厳は崩壊していると思うよ。

「瑠璃ちゃんとはまじゅー退治のときにぐーぜん会ったんです」

「ちよつと手強い魔獣と一緒に倒したのが最初の出会いかな……。後からおんなじ学校だったって知ってびっくりしたけどね」

「えへへ」

「なんでそこで照れてるのよ」

茶々ちゃんが照れ臭そうに笑っている。かわいい。

さながら新婚夫婦が馴れ初めを語られて恥ずかしがっている、みたいな感じかな。

色々と話を聞けて、納得できることも多かった。

結構すつきりしたと思う。

ただ茶々ちゃんも瑠璃ちゃんも無敵の魔法少女じゃなかった。普通に負けてるみたいだし、葵さんが助けてくれなかったらそのまま消えてなくなってたらしいのがハードだね。

現実的と言えばそうなのかもしれないけど、もうちよつとライトな感じでも良かったんじゃないか……と思わないでもない。

今回のことはオレとのいざこざでミスって大事になったようだけ

ど、『空白の数日』のときは真つ当に敗北しているわけだし。この子たちがやってることって、かなりリスク高いよね。

しかもボランティアなわけだし……。

「話をしている思ったんだけど、他に魔法少女はいないの？ 聞いているだけでもかなり危険だし、もし葵さんみたいに大人の魔女？ がいるなら、任せた方が良くないかなって思うんだけど」

「いないと思う」

「うん……。会ったことないよ」

瑠璃ちゃんと茶々ちゃんはそう言うが、本当にそうなんだろうか。

魔法少女になる条件が夢の中で魔獣に打ち勝つことなら、他にも居そうだけどなあ、魔法少女。

ただ、一つ思ったことがあって……。

魔獣に負けると最初から存在しなかったことになるわけだから……。

他に魔法少女が居たとして、その子たちが魔獣と戦って敗北していたとしたら……。

二人が他の魔法少女を認識していないのも当然というか……。

二人の件からして、魔獣のルールが魔法少女にも適応されるのは確認できているわけだし。でもそれだと魔法少女側が魔獣に食べられた人は消える、ついているルールを認識しているのはおかしいか。だつたらやっぱ他にはいないのかな？

どうなんだろう。なんか急にホラーみたいな展開になって来たな、これ。

「ちなみになんだけど、魔獣を放って置くとうなるの？」

「宿主だった人は存在ごとと消されて……その被害は広がっていくと思う。そして、『消化』されてしまえば、たとえ魔獣を倒しても食べられた人は戻らない」

「そうか……被害者は世界から忘れられるから、そもそも被害が認知されない。だからそうなる前に食いとめないといけない。結構厄介だね……」

「そうなの。分かった？ だから魔獣が孵る前に、宿主を見つけ次第

その記憶を消した方が楽だし安全なのよ。誰にとつてもね。事前防止策ってわけ。事前防止策」

なんか偉そうだな。

でも正論だとも思う。

ということは、オレはともかく、信乃ちゃんが魔獣に寄生されていたのか？

だから葵さんはオレ達の記憶を消した？

可能性はあるけど、どうかなあ。

これは完全に偏見なんだけど、彼女の場合は違う気がする。

しかしこれはどうしたものかな。

事情は分かったけど、オレに出来ることは無さそうだ。

彼女たちを危険だからと止めるのは簡単だけど、代替案が無い。もしも信乃ちゃんや田辺が急に消えて、しかもオレ以外それを認識していないなんてことがあればとても哀しい。

代わりに戦うよなんて言えるはずも無いし……。

最初に言ったように、外部の協力者として彼女たちのサポートを出る範囲でするのが良いのかな。オレには関係ない好きにやっていると距離を取って日常に戻るには、茶都山家との付き合いがね……。それで茶々ちゃんになにかあれば……。急に隣の家から娘さんが消えたりしたら、事情を知っている身としてはさすがに心苦しい。だから出来る範囲でのサポートが適切かなと思う。懸念点は、また彼女たちが敗北して消えてしまうようなことがあったとき、オレにはそれを解決する手段がないってことだ。葵さんがまたなんとかしてくれるならいいけど……。葵さんだって多分無敵の人じゃないだろう。少なくとも人間性にちよつと……。弱点が多いのは分かったし。

二人には頭が下がる思いだ。自分達には関係ないと魔獣関連から距離を取ること出来るだろうに、世のため人の為に率先してボランティア活動を続けている。

「そうだね。話を聞いて……。オレとしても二人には頭が下がる思いだよ。自分の命の危険を自覚した上でそんな危険なボランティアを続けるなんて」

自分たちが『食われた』経験がある以上、魔獣退治がどれだけ危険なことかを二人は自覚しているはずだ。そのうえでまだ続けているのだから、その善良な精神性には頭が下がる。

「その危険を承知で、君たちはまだそれを続けるの？」

「ええ。もちろんよ」

「う、うん……」

瑠璃ちゃんは胸を張って、茶々ちゃんは瑠璃ちゃんの方をちらちらと伺いながら言った。

それぞれの反応にこの件に対する向き合い方や在り方のようなものを感じ取れる。

「そっか。分かった。確認だけど、きつと君たちは自分の両親や友達にも本当のことを言えず、ずっと二人で頑張ってたんだよね？ もしかしたら『伝えた』からこそ、『空白の数日』が生まれてしまった可能性もあるけど……。きつと、茶々ちゃんのご両親は二人がやっていることを知らないんじゃないかな。少なくとも今は」

「うん……」

「そうね」

茶々ちゃんは神妙に頷き、瑠璃ちゃんはふいとそっぽを向いた。

茶々ちゃんは多分『空白の数日』の件だろうけど、瑠璃ちゃん一家もまた何か一波乱あったっぽいな。瑠璃ちゃんは葵さんに会うのは二回目だと言ってたから、もしかしたらそういうことなのかもしれない。だとすれば、それはやっぱり……うん……。

葵さんに心酔もすると思う。

むしろさつきはよく葵さんからオレを庇おうとしてくれたよ。

なんとなく分かったかもしれない。

瑠璃ちゃんはきつと葵さんみたいになりたいんじゃないかな。

オレが『かつて現れなかった大人』に成ると誓ったように、瑠璃ちゃんは『現れてくれた大人』のようになりたいと……。

それは決して悪いことじゃないけど、出来ればもっと多くの人を手本に育って欲しいなあと思う。

それと、オレとしてもちよつとだけ葵さんへの認識も変わったひと



時だった。

彼女たちへの認識もそうだ。大きく変わった。

だから頑張っている健気な女の子二人に、オレなりに言葉を送りたいと思う。

「二人のご両親の代わりにはなれないしなるつもりもないけど……今、たぶん君たちの状況を一番知っている身近な大人として『お願い』をしたい。聞いてくれる?」

モップを持ったまま二人の前でしゃがみ、目線を合わせて言う。笑顔はなく、真剣に。

「他の人を助けようとする姿勢は尊いものだと思う。オレは君たちを尊敬しているし、知人として誇らしくも思う。だけどそれで君たちになにかあれば、一番傷つくのは君たちの一番大切な人だ。さつき使命と言う言葉を使っていたけど、君たちのやっていることは義務じゃない。どうかいざというときには自分を大切にすることを優先して欲しい。お願いできるかな?」

「……見捨てろってこと?」

「瑠璃ちゃん……」

瑠璃ちゃんが強い瞳でオレを見つめ返してくる。

茶々ちゃんはオレの言葉の意味が分かっているんだろう。だから瑠璃ちゃんを宥めたい、けど出来ない。そんな葛藤を感じる。

でも安心して欲しい。オレはここで言葉を濁すつもりはない。

「そうだよ。知らない誰かより、君たちの方が大切だから」

「……っ」

瑠璃ちゃんが怯んだ。

「君たちにはそう思ってくれている人が居て、君たちにもきつとそういう人がいると思う。それが誰かは言わなくても分かるよね?」

きつと今、君たちはその人のことを考えていると思うから。だからどうか無茶はしないで欲しい。何かあれば相談して? 出来る範囲で協力するから。それが『変な』お兄さんからのお願いだ」

「……変なって、自覚あるんじゃない」

「あのねえ……。そういうのって本人が強調したら触れないものなん

だよ、瑠璃ちゃん」

ちようど、掃除も終わったところだ。

茶々ちゃんから箒と塵取りを預かり、モップと一緒に片付けに行く。水バケツはそのあとで。

「片づけたら送って行くよ。社員さんは……病院に連れて行かなくて本当に大丈夫なんだよね？」

「ええ。それは間違いないわ。いつもそうだから」

「いつも、か。やっぱり、それなりの場数を踏んでるんだね。片付けて来るから待つてね」

掃除道具を片付け終わり、一度締めたレジを開き、かき集めたバーコードを打ち込みまくって会計をする。

く、苦しい……。

あとは……。

さすがに床で寝っ放しは社員さんが可愛そうなので、なんとかスタツフルームの椅子へ連れて行ってあげよう。

社員さんの傍に行き、抱えようとしたけど、重い。やっぱり引きずるのがやつとだな……。

「どうしたものかな……。」

「どうしたんですか？」

眠っている社員さんの前で腕を組んで悩んでいるオレに、茶々ちゃんが近づいてきた。

「ん。社員さんを裏まで連れて行ってあげたいんだけど抱えられなくてね。引きずっていくのはさすがに気が引けるから。うーん。台車とか使おうかな……。」

「そうなんですネ。分かりました！」

茶々ちゃんが変身し、社員さんを両手で掴んだ。万歳の格好で、社員さんを横に持ち上げてこう言った。

「いきましようー！」

「……そうだね」

正直に言うと、さすがに反応に困る。

パワーあるね、というのは女の子には褒め言葉じゃないだろう。褒

め言葉と受け取ってくれる人もいるかもしれないけど、この子は多分そのタイプじゃない。

シニールだな……。

後ろをついて来てくれる両手を挙げた茶々ちゃん、持ち上げられて力なく反っている社員さんをちらちらと見ながら、スタツフルムへと向かう。

途中、茶々ちゃんがふいにこう言った。

「あの、おにーさん。さっきはありがとうございました」

「ん？ なにがかな？」

「その、うれしかったです。いっしょーけんめい、わたしたちを助けようとしてくれて」

「ああ、魔獣に体当たりしたこと？ 気にしないで。結局、なんの意味も無かったし。君たちを助けてくれたのは葵さんだよ」

「そうですけど、そうじゃないんです」

茶々ちゃんが真剣な様子で言う。

「たくさん物を投げてくれました。お金……たくさんかかるんですよ？」

「……」

思ったより真剣な話だったので改めて茶々ちゃんの方を向く。

茶々ちゃんはこう続けた。

「わたし、勇気がもらえました。おにーさんは魔法が使えないのに、一生懸命で……。魔獣に体当たりもそうですけど……。その、おねーさんのことは尊敬してますけど、でも。瑠璃ちゃんのこともあつたし……。だからおにーさんがおねーさんに、瑠璃ちゃんに謝ってつて言ってくれたこと……。わたし、うれしかったです。それにお金のことも、何も言わないし……」

うーん……。

泣き落として一回言ったけど、茶々ちゃんの中ではカウントされてないらしい。

しかしえらくしどろもどろだな。もうちよつとはつきり喋ってた気がするけど……緊張してるのかな？

まあ、人に気持ちを伝えるのが恥ずかしいって人もいるからね。

「あの、わたしもお小遣いで……お年玉があるので……」

「それはダメ。だめだよ？ 子供がそんな気を遣わなくていいの。オレはその覚悟があつてああしたんだから。茶々ちゃんは真似しちゃうダメだよ？ いいね？」

「ふふ……」

茶々ちゃんが小さく笑った。

そして少し口をもごもごと動かしてから、照れ臭そうに笑い、こう続けた。

「あの……。わ、わたし。その、お、おにーさんみたいな人に……なりたい、です……。な、なんて……。えへへ……」

「……」

恥ずかしそうに茶々ちゃんはそう言ってくれた。

なにこの子、可愛い。いじらしい。

「ふふ……」

思わず微笑みが零れた。

それをどう受け取ったのか、茶々ちゃんが恥ずかしそうにこう言った。

「あ、む、無理ですよ。わたし、おにーさんみたいにはつきり言えないし……。瑠璃ちゃんを止められなかったし……。ごめんなさい、変なこと言っちゃって」

「そんなことないよ。オレは茶々ちゃんの気持ちがとっても嬉しいよ」

胸に染み入る感情を言葉に乗せて、しんみりとオレはこう言った。

「ありがとう」

「え、えへへ……」

茶々ちゃんは嬉し恥ずかしそうに笑った。

オレは思った。

——社員さん、邪魔だなあ……。

いや、考えてもしょうがないんだけど。彼は完全に被害者なわけだから。

でも今のやり取りの間、社員さんずっと茶々ちゃんの上で浮いてたからね……。

そうこうしているうちにスタッフルームに着く。

パソコン前の椅子に……いや、落ちたら大変か。茶々ちゃんには申し訳ないけど、和室仕様の休憩室まで移動し直すことにする。

休憩室に着いたら、茶々ちゃんには社員さんを畳の上に横たえて貰った。そして社員さんの傍に凹んだ缶コーヒーを置いて……。

「おつかれさまです」

一筆書いた紙を、缶の下に挟んでおいた。

その後、瑠璃ちゃんを先に、オレ自身も帰宅と同時に送迎できる茶々ちゃんを次に自宅へと送り届ける。瑠璃ちゃんには「飛んで帰れる」から良いと拒否されたが、そこはオレも折れずに押し通した。飛んでいるところを見られたら、それこそ本末転倒だろう。

魔獣の性質を考えれば、あまり力に溺れない方が良い。

そう伝えると瑠璃ちゃんはバツが悪そうな表情を浮かべた。

そのことを考えつかなかったのはやっぱり子供だなどちよつと安心する。

久しぶりに波乱な一日を終え、オレも帰宅し寝ようかなと……。

その前に郵便ポストを覗いた。

中には差出人の分からない封筒が一つ入っている。

あて名は間違いなくオレだ。

封を開けて中を見る。

中には意味不明な図が描かれた紙が一枚だけ。

魔法陣のようにも見えるけど……。

ちよつと今日は疲れたし気も滅入っているから止めて欲しいなど、またなんか始まりそうな気配を感じて辟易する。

魔法陣が光り出した。

光はオレを呑み込み、オレの手の中で魔法陣が描かれた紙が燃え始める。

「……」

魔法陣が燃え、光が収まる。

燃えカスが風に乗って散らばった。

なんだったんだらう……。

オレは指先に残った魔法陣が描かれていた紙の燃えカスと封筒を持って家の中に入り、それをゴミ箱にぽいと投げ入れ、風呂に入った。布団に潜り込み、眠る前にふと考える。

出費が凄い。もしかしたらバイトも首になるかもしれない。この地域にもいられなくなるかもしれないし、大学ももしかしたら……。変なことにも色々巻き込まれるし。不幸が色々続けている。

オレは思った。

——そうだ。御祓い行こう。

それがいい。

そうしよう。

オレは安心して眠りに就いた。

## 巫女2

スーパーの一件の後、特に何もなく週末を迎えることが出来た。

瑠璃ちゃんの話だと、魔獣はその存在を知る者を好んで狙うという話だったから気にしてただけで、特に何もなかった。たぶん「異変に対するかなり強力な抵抗力」というオレの体質が、狙って来た魔獣を知らない間に爆散させてたんじゃないかな。そもそも遡れば茶々ちゃんの変身シーンを見たときから、オレは魔獣に狙われる要件を満たしていたわけだし。いまさら警戒する必要もないのかもしれない。

売り物を破壊しまくった件についても特にお咎めは無かった。

後始末と弁償をしたとはいえ、やったことについては罰も覚悟の上で社員さんに謝罪を……とあの日の翌日、出勤した際に社員さんに話をしに行ったんだけど……。「もしかして閉店後に売り上げが出ていたことか？」なんて確認されたので話に乗っかって肯定すると、「お前かく」なんて気楽なノリで言われた。

社員さんは移動した覚えのない休憩室で目覚めたあと、そのまま開店作業に入ったらしい。その際、閉店後の時間帯にレジを使用した形跡を見つけ、不審に思い監視カメラを確認した。しかし夜間、レジを使用した人間は一人も確認できなかった……。

そんな怪現象に気づいた社員さんは、若干怯えながら働いていたらしい。オレが名乗り出たことで犯人が分かってスッキリしたと笑っていた。

なのでオレは、

「退勤後、忘れ物を取りに戻って来た際、ついでに生活用品の買いだめをした。社員さんは疲れて眠られていたようなのでコーヒーの差し入れだけして帰った」

とその話に乗っかって誤魔化すことにした。

嘘を吐くのはたいへん心が痛んだが、平穏な日常のための致し方ない犠牲と言うことで自分を納得させる。とりあえず被害はオレの財布以外は無いわけだから、許してもらいたいところだ。

監視カメラについては「電子機器の不具合でも起きたのでは？」と

しらばっくれさせてもらった。このスーパーは建物の老朽化が目立つし設備も古いので、その説をすんなりと受け入れてくれたようだった。閉店後に勝手にレジを使ったことに関しては「以後はしないように」と口頭で注意されたので、素直に謝罪しておいた。社員さんいわく、なんかの処理が面倒くさいらしい。

あと、缶コーヒーの差し入れはお礼を言われたので、ついでに連日の残業について社員さんを改めて労ったんだけど……、なんか泣きそうな顔してた。

辛いんだろうな……。  
そりやそうだよ。

だって今の話で一番の『怖い話』って、『勤務先で起きて、そのことに対しては何の疑問も抱かず、そのまま出勤した』ってところでしょ。普通にやベエって。

思えばこの人、開店から閉店まで店にずっといるもんな……。

隣れに思い、流れでそのまま社員さんの愚痴を聞いていたら気に入られたらしい。今度ご飯を奢って貰えることになった。といつても外食に連れて行ってくれるというわけではなく、まかない賄にスーパーの弁当を……ということだったけど。

もちろん充分過ぎる程ありがたいことだ。最近はお費が激しかったからね……。

あとは？みに行こうと誘われた。社員さんの仕事が忙しすぎていつになるかはマジで分からないけど、とも言われたけど。

ぜひご一緒させてくださいと返答し、社員さんとの絆を深め、あの日のこともまた一件落着となった。

そして、電話で予約したお祓いの当日。

オレは神社の鳥居の前に立っている。

正直に言うと、御祓い自体にはあんまり期待はしていない。気休め程度の気持ちだ。お守りは買うつもりだけど。

御祓いってどんなことをされるんだろう。

清めの塩やありがたい水を振りかけられたり、ふさふさした紙の付いた変な棒で叩かれたりするのかな？



そんなことを考えながら鳥居を見上げる。

雅さんがいた神社とは違い、ちゃんと看板……扁額にも神社の名前が記されている。

よし、行こう。

いや、待てよ……？

境内に足を踏みいれようとして立ち止まった。

ふと思った。

オレ、御祓いなんて受けて大丈夫か？

化け物もいたし魔法少女もいたし竜もいたしUMAもいた。信乃ちゃんは……この間話した時、いつの間にか未来予知が出来なくなっただとか言っていたけど、そういう超能力を持っている人だっていたし、もうずっと会っていない明日香さんだって明らかに何かありそうな感じだった。

今更、非日常の存在を疑う余地は無い。

そして今、オレは思った。

——他にもなんかいるそう。

たとえば霊能力者みたいな人だ。

幽霊、怨霊、悪霊、そういった人に悪さをする怪異を祓い、退けることを生業としている人達。

それは日本における異能、非日常の定番だろう。

あんだだけ変なことが実在してるのに、定番の異能者だけがないなんてことがあるか？

もし、この神社の人が偶然にもその筋では有名な『本物』で、御祓いの最中にオレにそういう力を使ったとしたら……どうなるだろう。

あれ？

急に静かになったな……。

そう思ってから後ろを見たら、そこには爆散した神職の方の肉片が転がっていた……なんてことになったら洒落にならない。

……。

さすがに考え過ぎかな？

——とんでもない地雷。

この前、瑠璃ちゃんに言われた言葉が今になって思い出される。改めて思うけど、上手いことを言うねあの子も。褒めないけど。

お祓い、キャンセルしとく……?？」

お守りだけ買って帰るか?」

実際、何か悪いモノに憑かれてて悪さをされているって感じはしてないし、強行する理由はない。でも御祓いから逃げようとするこの考え方が既に憑かれている証拠だなんて考えもあるらしいし。

うーん……。

その辺も神社の人に相談してみても良いけど、もし異変に欠片も関わりが無い普通の神職の方だった場合が嫌だな。「なに言ってるんだこいつ。狂ってるのか?」みたいな反応されたりすると古傷に響く。でも神職の方はそういうことを生業にしてるわけだから、さすがにそんな反応はされないか。

それに最近、不本意ながら……変な人扱いされることが多くて、耐性が付いてきた気もする。剥き出しだった傷にかさぶたが張られてきたみたいなきな感じかな。オレ自身、ちよつとずつ考え方が変わってきている実感はある。

そのきっかけは……やっぱり信乃ちゃんか。

あの子には本当に感謝しないと。

よし。

相談してみよう。

お祓いをしてくれる人が普通の人だったら、オレと信乃ちゃんと桃香ちゃんのお守りを買ってさっさと撤収すればいい。以前、律ちゃんにも自分で言ったことだ。今までとは違うやり方でやれば意外な解決策が出てくるかもしれない。

意を決して鳥居をくぐった。

「えっ?」

その瞬間、拳銃の発砲音にも似た音が響いた。なにか……空気が破裂するような音だ。

かなり大きな音だった。神社全体に響くような。

何が起きたのかと周囲を見渡したけど、特に何も無いように見え

る。掃除の行き届いた綺麗な境内だ。

「マタギでもいるのかな？」

山近いし。

困惑しつつも一歩踏み出す。

「えっ？」

ばきばきばきイ、と大きな音が響いた。

音のした方を見る。そこそこの大きさのありがたそうな樹が縦に真つ二つに割れていた。

「腐ってたのかな」

腐ってたからといって、樹がいきなり縦に真つ二つに割れると思いますか？

いいえ、思いません。

だからといってオレにはどうしようもないだろ。

人差し指の爪先で、痒くもない額を搔く。

割れた木をじっと見ても何も変わらない。

また歩き出す。

「……」

なにか重い音が落ちるような低音が響いた。

音の方を見る。

石の灯籠が崩れ落ちていた。

一歩踏み出す。

んぎやあああああ！

なんて、断末魔のような叫び声が聞こえてきた。

少しして、重い音。

その方向へ視線を向ける。

石の狛犬の首が地面に転がっていた。

さらに一歩進む。

後ろで何かが落ちる音と、硬いものが碎けるような音がした。振り返る。

鳥居の下に何か落ちていた。鳥居に掲げられていた扁額が落下したらしい。砕け散っていた。

「……」

非常に申し訳ない気持ちで湧いて来る。

オレは何もしてないけど、何故か非常に申し訳ない気持ちになる。  
一歩踏み出す。

「おお……っ」

晴れ渡った空に轟いた雷鳴に促され、咄嗟に上を見上げる。次の瞬間には、社の屋上に落雷が到達していた。青い空にはうっすらと雷の軌道が残され、そしてすぐに消えた。

まさに青天の霹靂な瞬間だ。凄い現場に居合わせてしまった。  
……。

なんか今の雷の軌道……。

オレに落ちて来たような気がしたけど、直前で直角に曲がったような気が……。

またなんか始まったのか？

露骨に何かに巻き込まれるパターンと、何か起きそうで特に何も起きない拍子抜けのパターンとがあることはオレも経験から分かっている。これがどっちかといえ……まだ分からないな。周りに化け物とか怪獣もいないし、それっぽそうな人影もない。

帰るか……。

お祓いに来てるのに祓って欲しいことが起きたら本末転倒だし……。

でももしかしたら、これが実はオレに憑りついている何かによって生じていることで、御祓いを恐れているとしたら……。

一歩踏み出す。

立ち止まって周囲を見る。

特に何も起きなかった。

また一歩踏み出す。

特に何も起きなかった。

良かった。

何か起きそうで何も起きない、壮大に何も始まらないパターンだったようだ。この間の意味不明な手紙と似たようなものだろう。不快

だけど害はそんなにない。神社にはとんでもない実害が出てるけどオレには関係ない……関係あるかなあ……。ありそうだよなあ。「すみません。こんにちは。お祓いの予約をしていた東堂です。どなたかいらつしやいませんか？」

目ぼしい建物に入り、内部を見渡しながら声を張る。

誰もいない。返事もない。

だけど誰かが居たような形跡はある。それがどれくらい前までいたのかまでは分からないけど。

困ったな。

奥まで入るのも失礼だし、ここで待つか？

予約していたからオレが来ることは分かっているはずだけどな、この人も。

その後、待つことおよそ2時間。

誰も来ない。

予約の時間もとうに過ぎている。

一人も姿を見せないなんてことある？

途中で席を立ててトイレに行ったり、お守りとかを売っている露店形式の小さな売店に顔を出したりしたけど、誰もいない。境内はオレが入って来た時と同じだし、鳥居の向こう側に見える景色も特に変わりはない。平凡な街だ。また変なところに迷い込んだって感じもしないし。

何か起きてる……？

さっきの落雷が人に当たってたとか……。

ありえるな。

それだと大変だ。

すぐを探して救急車の手配をしないと。

オレは席を立ち、神社の奥へと進む。

「すみません！ 誰かいませんか？ 大丈夫ですか？」

声を張って探索を続けていると、前方に人の背中が見えた。

見るからに「私が神主です」という衣装の男性。

何か持つてるな。なんだろう。

金属バットか？ しかも釘バット？ 金属バットに釘？

いや、あれ、メイスか。不釣り合いと言うか、物騒だなあ……。

神主さんの背中から声を掛ける。

「こんにちは。お祓いを予約していた東堂ですが、約束の時間になっても誰にも会えず、何かあったのではないかと奥まで……すみません」

「は……？」

振り返った神主さんが呆気にとられたような表情を浮かべる。

「お、お祓いですか？ そのような約束は……」

「……？ いえ、確かに予約を……。履歴も残ってます」

お祓いの予約をした文面があるわけでは無いけど、この神社に連絡した証拠として携帯の通話履歴を見せる。すると神主さんは表情を露骨に顰めた。

「なにか気になることでも？」

「いえ……、確かにこの電話番号は……このものですが……」

「ですよ？」

「とはいえ、お約束をした覚えはありませんので、今日の所はお引き取りを……」

「それはちよつと……いくらなんでも。オレも2時間くらい待ったんです」

「いやはや申し訳ない。巫女が私への連絡を怠ったのでしよう。大変申し訳ありません。ですが私も今日は予定がございまして……」

「いえ、オレが話をしたのは男性でした。電話なので確証はないですけど……思えば、あなたの声だったような気がします。快く引き受けてくれた」

ちっ、と小さく湿った音が聞こえた。

こいつ、舌打ちしやがった。

なんて人だ。

「その態度は……どうなんでしよう」

「……帰れよ」

ぽつりと神主さんが呟いた。

ちゃんと聞こえたぞ。なんだこの神社は。最低だ。それにしても……変だな、色々と。メイスを持つてる神主さんもそうだけど……なんだ……?」

「なにかおっしやいました?」

「いえ、申し訳ない。実はうつかり忘れてしまっていたようで、この後すぐに別件を入れてしまったのです。申し訳ないですが、今日の所は」

「先ほどとは話が違うようですが……。それにその話が本当だとして、その態度はどうなんでしょう?」 舌打ちに顰め面……非常に不愉快です」

「下等な人間が……っ!」

オレの言葉が癩に障ったらしい。神主さんは地の底から響くような声を絞り出してオレを恫喝してくる。

選民思想というか、神職を特別視してるのかな。神に仕える自分は偉い、なんて思い込みがあるのかもしれない。

なんか……がっかりだな。神仏に仕える方っていうのは哲学に造詣が深く、真摯な人だっていう印象があったから……。

「あなたも人間ですよね? それとも……神主というのはそれほどに偉い職業なんですか? もしそうお考えなら、その認識は改められた方が良くかと。それに……」

今、気づいた。

神主さんの体に隠れていたから気づくのに遅れたけど、神主さんの向こう側に狐が横たわっている。体毛が赤く染まっている。血を流しているんだ。そして神主さんの持つメイスにも同じような赤い痕跡。

とんでもない現場にはち合わせてしまった。

「その狐、どうされたんです?」

「……。悪さをしてたのでね。懲らしめていたんだ」

「確か、狐は保護動物に指定されていたはずですよ。そうでなくても……やり過ぎじゃありませんか? 害獣駆除なら相応の手段があるはず。そんな鈍器で殴る必要はない。あなたはその狐を蹴ってたん

「じゃありませんか？」

「……」

神主さんは忌々し気に表情を歪めるが答えない。

「分かりました。オレはそう受け取ります。ならばこれは明らかな動物虐待、あまりに非人道的な行いだ。酷すぎますよ。あまりにも。残念ですが、然るべき場所に通報させていただきます」

「……っ!!」

神主さんの形相が怒りによって鬼のように変わる。

いや、鬼のようかどうか、鬼じゃね？

真っ赤に染まった顔はただ頬が紅潮したなんてレベルじゃなく真っ赤に変わったし、ツノが生えて来てるし、口も大きく裂けて牙も覗いてるし、露骨に体がモリモリでかくなってきてる。

「舐め腐りおつてエ!! 喰ろうてやるわあ!! 人間があ!!」

神主さん改め鬼が、見上げる程に膨れ上がった上背を前のめりにオレを見下ろし、服の袖が千切れ飛ぶほどに肥大化した腕を振りかぶった。凶悪なほどに鋭利で大きな爪のある手がオレの顔に……!

「バカなああああ!!」

鬼の腕が爆散した。

「この私があアアアアア!!」

爆散した腕の端から亀裂がどんどん体へと広がって行く。

鬼が数歩後ずさり、逃れるように身じろぎをするが、亀裂はどんどん体中へと広がっていき、最後には全身が爆散した。

千切れ飛んだ服だけがその場に音もなく落ちる。

オレは思った。

——どうしろと。



### 巫女3 ↓ 妖狐1

鬼の体が光の粒子となり、まるでスノードームの中の雪のように散って行く。

いや……、ゆつくりとどこかへ向かっているようだ。

狐だ。

狐の体の中に吸い込まれるように光が消えていく。狐の体が柔らかな光に包まれた。

かと思えば、光の中でどんどん姿が変わって行く。

おや……？

狐の様子が……？

なんてナレーションが流れそうな感じだ。

光の中で狐の姿が変化していく。

触ったらダメかな……？

ダメだよな。キャンセルされそうだ。進化かどうかは分からないけど。

「この人……」

やがて光が収まったとき、そこにいたのは……。

「雅さん？」

全裸の雅さんだった。

……。

何が起きているのか理解しようと目まぐるしく働いている思考を一端置いて、雅さんに近づいた。

とても磨き抜かれた体だと思う。保護欲を掻き立てる華奢な骨格、程よく乗った脂肪に、引き締まった筋肉。黄金のくびれ、豊かな母性、脚線美。まるで古代の彫像……芸術的な美しさ。それだけじゃない。血の通った『性』の艶めかしさが共存している。ただ筋トレをするだけでは到達できない領域……芸術に明るくはないが、感心させられる。きつとこれほどまで女性の肉体美を極めるに至るには、並大抵ではない努力があったことだろう。いや……狐が化けているだけならそれでもないのかな。

ただ哀しいかな。そんな体も、今は全身痣や傷だらけで酷く痛々しい。ふさふさの尻尾も力なく横たわって……。

尻尾？

まあ、狐だもんな……。

どっから現れたとか、もう考える必要もない。狐だよこの人。狐。キツネ。キツネが人間に変身しましたね。

世の中にはそういうのもあるんだ……？

狐か……。

雅さん、狐だったか……。

そうか……。

たしか初めて会ったとき、山ほどじゃがいもを煮てたけど、狐ってじゃがいも好きなのかな……？

あの日のアレは狐に化かされてたってことか……。言うほど化かされた記憶は無いけど、そうか。じゃあ世紀末大事故は狐の……というか雅さんの幻術だったってことなのか。それにしても初対面のときの反応が妙だよな……。

そもそも、何故ここに雅さんがいるのか、あの鬼は一体何なのか、そもそも何故狐から人の姿になったのか、オレが神社に入ったときのあれこれはどういったものなのか……分からないことだらけだ。

まただよ……。

せっかく魔法少女の事情をある程度把握できたのに、また理屈じゃ説明できないことが増えた。

鋼鉄の正常性バイアスがぶつ壊れ始めている。ウケる。

まあ、それは置いておこう。今、一人で考えても答えは出ないし。

雅さん……。

この人、いわゆる獣人なのかな。

それとも妖怪変化、みたいなやつ？

さっきのが本当に鬼なら、雅さんもその類な感じはする。初めて会ったときの言動もなあ……今から考えるとそれっぽかったし。

この場合、動物病院と普通の病院、どっちに連れて行けばいいんだ。倒れている雅さんの傍に近寄る。

尻尾を見る。やはり本物だ。ケツというか、尾てい骨のあたりからしつかりと生えている。

触れて良いものかどうか……。痣だらけ傷だらけの体は、触っただけでも痛そうだ。

「大丈夫ですか？　意識は……」

息はあるようだけど返事はない。

どうしよう。

こういうのって連れて帰るのがセオリーか？

信乃ちゃんときは彼女自身が警察沙汰を嫌ったから意志を尊重したのと、不良の抗争真っ只中って感じだったから、最初はあの夜だけのつもりで匿ったけど……。明らかに事情が違いそうだし。それにこの神社、結構遠いんだよね。東堂家から。物理的に連れては帰れない。せめて狐のまままでいてくれたら……。

「あれ……？」

見る見るうちに雅さんの体中から痛々しい痣と傷が消えていく。

超再生能力。

もしかしてこの人、彩乃さんと同類か？

近くに彩乃さん居たりする？

人が居なかったのはそれで良かったり……？

でも超再生能力って亜人とか異人によくある能力ではあるか……。

「彩乃さん、いる？」

一応、周囲を見渡してこっそりと呼びかける。

「彩乃さん？」

声を張って名を呼んだ。けど反応は無い。いないらしい。別件か否かは分からないが、彩乃さんが近くにいないうことだけは間違いないらしい。

雅さんの浅かった呼吸が安定してくる。

体中の痣や傷もほとんど残っていない。

単に全裸の美女が神社の砂利の庭で寝てるだけの構図になった。

シニールだ……。

オレは上着を脱いで雅さんの体に掛けた。

オレではどこかへ連れて行くこうにも引きずることしか出来ない。かえって傷だらけになりそうだ。

とりあえず神社の人を呼ぼう。もしまだいたら、だけど。

さっきの鬼みたいに人間に擬態している化物とかじやなきやいな……。

雅さんから離れ、神社を散策する。

人っ子一人いやしない。何故だ。

一回りして雅さんの所へと戻って来た。

雅さんはまだ寝ている。

仕方ない……。

起きるまで待つてよう。

それからしばらく、夕暮れが近づいてきたころ、雅さんが僅かに身じろぎをした。

「ん……」

近くの木の根に座って弄っていた携帯を仕舞い、立ち上がる。

雅さんの傍に寄り、しゃがみ込んだ。

「ん……あ……う？」

雅さんが薄っすらと目を開ける。

あんまり近くても驚くだろうから少し距離を取って……。

「大丈夫ですか？」

「あ……う？ おのれは……」

「以前、一度会ったことがあります。東堂です。なにやら倒れていらしたので介抱を」

雅さんが起き上がる。痛みとかは無さそうだ。動きがスムーズだった。

オレが掛けていた上着がするりと落ちる。美しい肌、豊満な母性が曝け出された。

ぐい、と視線が頂点に吸い寄せられるのを鋼の精神で律する。

母性をほっぼりだした形になるが、雅さんは特に恥じらう様子もない。まあ、狐だしな……。いや、逆の可能性もあるにはあるか。元々が人間で、狐の姿が変身後っていう。

それにしても狐ねエ……。

あの夜の狐、この人だったのかなあ。

「……………あ……………」

雅さんがオレを上から下までゆっくりと視線でなぞる。

「大丈夫ですか？ 記憶が混濁しているのかもしれない。慌てないでゆっくり……」

「そうじゃ……………っ！ 魔人……………っ！」

雅さんが取り乱したように周囲を忙しく見渡した。

魔人っていうのはさっきの神主さんのことだと思う。

「落ち着いてください。大丈夫です。爆散しました」

「は……………？ 何を訳の分からぬ……………」

雅さんはそこまで言っつて、はっと表情を変える。

「お、おのれは……………！」

「思い出されましたか？ 東堂です。以前……………」

「おのれ……………っ！ おのれ東堂……………っ！ おのれと出遭<sup>お</sup>うてから儂は……………っ！ 女の恥をかかされたあげく住処を追われ……………っ！ あ……………っ！」

雅さんの表情が悲痛さと怒りが入り混じったようなものになり、叫ぶ。

かと思えば、スンと困惑したような表情に変わり、周囲を見渡した。

「彼奴の気配が無い……………？ よもやこの身の力は……………」

雅さんがぎこちない仕草でオレを見た。

「おのれは……………」

「おのれではなく、東堂です」

「……………。東堂、おのれは魔人を……………どうしたと……………？」

「オレが何かしたってわけじゃないんですけどね……………。神主に化けてた……………のかな。雅さんに暴行を加えていたあの鬼みたいなやつなら爆散しましたよ。もう大丈夫です」

「……………」

雅さんは柔らかく握った拳で艶やかな唇を隠し、気味の悪いモノを見るような目を向けて来る。

あまり良い気分じゃない。

「どうかされました?」

「どうもこうも……。おのれは……」

「雅さん。色々と聞きたいこともあるかとは思いますが今は抑えて……。オレも色々と聞きたいことはありますけど、今はそれよりもご自分を案じてください。見た感じではもう大丈夫そうですけど、実際どうですか? 痛みもそうですが、気分の方はどうですか?」

人の姿であればマシというわけでもないけど、狐の大きさと人間の大きさでは加えられる力や与えられる威圧感は段違いだろう。狐の姿では、きつと身体的苦痛だけでなく、精神的な苦痛や恐怖も大きかったんじゃないかと思う。

「そうじゃな……。位階があがったゆえか傷は……。お……。? 尾が……」

ずっとペタリと地面に投げ出され動かなかった尻尾が突然ひゅんと動き出した。母性をほっぴり出したままの雅さんの背中越しにふりふり、と尻尾が躍る。

「尾が生えとる!」

雅さんはどうやら自分に尻尾が生えていることに驚いているらしい。何をいまさら……。?

確かに以前会ったときは尻尾が無かったけど。

ふさふさの長い尻尾の先が背中から肩を越え、雅さんの顔の前へと躍り出た。雅さんは自分の顔の前で尻尾を揺らし、感極まった様子で見つめている。

「なんと……。! なんと……。っ! ようやつと儂にも尾が……。!」

雅さんの口ぶりからすると、どうやら雅さんには長い間尻尾が生えていなかっただけで、コンプレックスを感じていたみたいだ。以前に会ったときは尻尾を隠してたんじゃないかと、そもそも生えてなかったということか。

雅さんは本当に嬉しそうに自分の尻尾を見つめている。欲しかったおもちゃを買って貰えた子供のように純粹で嬉々とした表情だ。髪型の影響か、雅さんにはアンニュイな印象を抱いていたのでギャツ

プが凄い。

しかし……さつきまで暴行を受けていたとは思えない切り替えの早さだな。飛ばれてたこと自体を引きずっている様子はまるでない。人間じゃないからこそってことなのかな。

「なんとというか、はしゃがれているところ申し訳ないんですけど、本当にもう大丈夫なんですよね？」

「あ……う。まあ、不自由はせぬ。むしろ軽やかじゃ」

雅さんはいきなり立ち上がった。腰回りを覆っていたオレの上着が地面に落ちた。

今、オレはしゃがんでいる。

すっぽんぽんの妙齢の美女が、オレの目の前に立っている。

オレは視線を目の前の黒から太もも、膝、脛、足先へと移動させた。さつきまでオレの上着で隠されていた部分にも、怪我や痣は残っていない。本当に全身が回復しているようだ。

一方、雅さんは異性が目の前にいることを気にした様子もなく、手を開いたり閉じたり、足を振ったり腕を回したりと体を動かして調子を確認している。剛毅な女性だなと思うが、そういえば狐だったと思ひ直す。

「大丈夫そうでは良かったです」

落ちた上着を拾って立ち上がり、雅さんと目を合わせながら上着を差し出した。

「どうぞ。隠してください」

「……あ？ ああ……おのれは初心子じゃったな」

初心とか関係なく、マナーとして隠して欲しい。何も感じないと言えどそれは嘘になるけど、親しくもない全裸の女性が至近距離にいるという非現実的な状況は単純に居心地が悪い。

それに……

これはオレ自身の尊厳にも関わることなので絶対に口外することはないが……今日のお祓いのために、オレはすべての邪念を吐き出してきている。

それにしても、雅さんはやはり全裸を晒していることを気にも留め

ていないようだ。以前、しおらしくオレを誘って来た人と同一人物とは思えない。

もしかして、アレは演技だったのか？

なるほど……。

抱くことを願われる……確かに、ああいう流れに弱い男は数多いだろう。抜群の演技だったことは認めざるを得ない。昨今急増している性病等のリスク意識をオレが持っていないければ……。

そうして乗って来た男を……どうするんだろう。

食べる……？

性的に？

それとも物理的に？

あの日、扉を開けて居たらオレはどうなって……。

——瞬間、爆散して逝った者達の姿が脳裏を過る。

……どうもなっていないか。

むしろ雅さんがどうなってたんだろう。あの頃はまだ非現実を真剣には受け止めきれなかったから、目の前で雅さんが爆散なんかしてたら立ち直れなかったかも。

差し出していた上着が雅さんの手に渡った。

だが雅さんは前を隠そうとしない。

「どうしました？」

……。

気が散るから尻尾を上下左右にぶんぶん振り回すのは止めて貰いたい。せっかく意識して雅さんの顔を見つめているのに、尻尾の動きに視線が持つていかれ、見ないようにしている雅さんの体の一部にピントが不意に合ってしまう。

しかし……本当に尻尾の存在が嬉しくて堪らないって感じだな。よっぽど重いコンプレックスだったんだろう。

雅さんが言った。

「この布では上か下のどちらかしか隠せぬ」

「それは確かに……。とは言っても、オレももう脱げるものが……」

肌寒い季節になっではいるが、オレはまだ薄着な方だ。もうTシャツ



ツしか着ていない。これを脱ぐと上半身裸の変態になってしまう。そして下はオレも脱ぎたくはない。

神社の人がいれば服を貸して貰うだけどいなかっただし、これは後で服を買ってくる必要があるかな。また出費かあ……。

「儂はどちらでも構わぬ。おのれに任せる」

「じゃあ、上で」

「……」

即答したオレに、雅さんは「なんだこいつ」みたいな目を向けて来る。

いや、上半身はどうしても視界に入ってくるけど、下半身は目線を下げなければ問題ないと思って。

雅さんは言う通りにオレの上着を羽織り、前を閉めてくれた。

やっと一息吐ける。

オレは一步下がり、雅さんに深々と頭を下げた。

しまった。頭を下げたら見えてしまう。

すぐに目を閉じる。

「遅くなりましたが、以前は迷子になっていたところを助けて頂いて本当にありがとうございます。結局、ちゃんとしたお礼も出来ないまま黙ってお暇することになってしまつて……本当に申し訳なかつたです。ご心配もおかけしてしまつたかもしれないかもしれませんが……おかげさまで、あのあとは特に問題なく家に帰れました」

「なんじゃ。おのれ、やはり気狂いの類か……？」

感謝を伝えてそんな返しをされたのは初めてだ。

衝撃が凄い。

顔をあげ、雅さんの目を見る。

「気狂いっていうの、やめていただけますか？ 不愉快なので」

「不愉快は儂の方じゃ。女の恥をかかせおつた」

ワンナイトラブの誘いを断つたことだろう。

「それは……すみません。恥をかかせるつもりはありませんでした。決して雅さんに魅力が無いというわけではなく」

「なんじゃおのれ、男色か。ならば迂遠な言い回しをせずとも」

「違いますね。誤解しないで貰えますか？」

さすがに尊厳まで傷つけようとは思わないので、「性病持つてそうなので断りました」とは言えないけど、言いたい気分になって来る。……。

改めて思うけど、あの夜、断つてよかった。

確かに雅さんはオレが今まで見てきた中で一番綺麗で妖艶な体だとは思う。けどこの人、狐だもんな。性病どころの話じゃない。

「戯れはもうよい。……で？ おのれは何者じゃ」

雅さんは直前までの雰囲気とは打って変わり、初めて会ったときのような鋭く冷たい気配を滲ませた。

「何者と言われても……。普通の大学生です」

「おのれのような普通があるものか。いかようにか魔人の一角を滅し、儂の術を見抜く目。おのれ、今も見えておるな？ 儂の尾が。あのときもそうじゃ。迷子などと、儂を謀りおった。御柱の裁きをいかにように避けた？ 儂の用意した飯を食らい、嵐の幻げんの中、なにゆえ現世へ戻れた？ おのれは一体、何者じゃ」

雅さんは鋭くオレを見据える。

「な……っ」

……？

雅さんが何かに驚いたような声を零したと思たら、あんなに動き回っていた尻尾が急にしんなりした。しかも震えてる。

狐もイヌ科だし感情が露骨に出てるなら……怯えてるのかな。

もしかしてオレに何か感じているんだろうか。

それとも、魔人とやらを滅ぼしたオレを上位存在と見ていただけか……。

——とんでもない地雷。

瑠璃ちゃんの言葉がまた頭を過る。

「話をする前にオレも一つ聞いておきたいんですけど、雅さんって狐の妖怪なんですか？ それとも獣人？ きつと人間が狐に変身できるってわけじゃないんですよね？」

「……」

雅さんは「嘘だろお前」みたいな表情を浮かべてオレを見ている。「おのれはそのようなことすら分かっておらぬのか……？」まことか……？」

「分からないです。普通は分かるものなんですか？」

「……」

雅さんは「まじで言ってるのか……？」みたいな目でオレを見ている。

そっちの常識押し付けられても困るよ。

もしかしたら茶々ちゃんや瑠璃ちゃんなら雅さんがそういう存在だつて一発で分かるのかもしれないけど、オレは今まで一般社会で普通に暮らして来たんだから分からなくてもしょうがないと思う。

雅さんは質問に答えてくれない。

「分かりました。先にオレが答えます」

なんかもう慣れてきた『体質』について説明をした。

雅さんの態度は変わらない。

しおらしく萎えた尻尾もそのままだ。

「そのような存在が……この世に……？ 神々でも現人神でも魔人でもない……陰陽道に連なる者でもない……」

雅さんがじつとオレを見つめる。

「か弱い人の子にしか……見えぬが……」

雅さんが愕然としている。

バケモンみたいな扱いされてる気がする。

おかしい。

オレは一般社会で普通に暮らして来た。老人会では若い衆として可愛がつて貰えている自覚があるし、バイト先の社員さんからも？みに誘って貰えた。友人も普通に……というか出来たし、バイト先の先輩とも関係は良好だ。成績も可もなく不可もなく、身長は平均より高いけど運動神経が秀でているわけでもない。てっぺんなんて取ろうと思っても取れないし、ドベを取ることもない中間層。ちよつとハードな過去がある、能力的には普通の大学生。それがオレのはず。なのに異変が関わると一気に『とんでもない地雷』、『なにこいつ』つ

て扱いになるんだから世の中って不思議だ。

最近は妙に異変に巻き込まれることが多く、異変関係者には目立って見えているようだけど、オレの体質って普通に生きる上ではまったく役に立たないからね。今年になるまでオレ自身も気づかなかつたくらいだし。

これから大学を卒業して社会人になるにあたって、面接でのアピールポイントにも出来ないし、仕事の役に立つこともない。

いや……？

工事現場や工場なら役に立つかもしれない。

そう考えると割とすごいギフトなのか？

新しい視点だ。

おお……。

ちよつと嬉しくなつて来た。

「雅さん、ありがとうございます。おかげでオレ、ちよつとスッキリしました」

「な、何じゃあ、突然。やはり気狂いの……」

「その言葉、止めて貰つて良いですか？ 不愉快なので」

何故、妖怪（仮）に気狂い扱いをされなければならないのか。

雅さんが素早く首肯した。

……？

まあ、改めて貰えるならそれでいい。

「それで、雅さんって妖怪なんですか？」

「……」

雅さんは答えることを戸惑っているように見える。オレとしては中途半端なやり取りが齎す弊害は茶々ちゃんの件で学んでいるので、しつかり基本情報を交換したいんだけど。

狐の妖怪。

ふと思った。

「もしかして妖怪だって名乗ったら退治されるかも、とか心配されますか？」

「……」

「なるほど。やっぱりそういう能力の方もいるんですね……。ですけどオレは違います。さつきも言いましたけど、オレ、本当にただの大学生なんですよ。仕事もスーパーで雑用のアルバイトをしているくらいで……」

「……」

雅さんが何も言わなくなった。

怯えているようだ。

無理もないのかも。

治ったとはいえ、雅さんが一方的にあんな酷い目に合わされた魔人を吹っ飛ばしたのがオレだ。妖怪は基本的に退治されるものだし、オレがそういう人だって警戒しているのかもしれない。

でも……急に、なんだよな。ホント今さつきオレを威圧するような言動を取ったばかりだし、それまでは普通に話せてたのに。……。

もしかして雅さん……。オレが気づいてないだけで、今、オレに何かやったか？

それを跳ね返されたか消されたからビビり散らかしてるのか？

うわ、ありそう。

ホントに急だったもんな。

タイミング的にはオレに「何者だ」って聞いて来たときだろう。

「あの、雅さんって悪い人ですか？」

ちよつと含みを持たせて問いかけてみると、物凄い勢いで首を横に振った。

ああ……。

これやってるわ。

だからといって何が出来るわけでもないんだけど……。

「雅さん、人に危害を加えたことってありますか？」

ぶわ、と雅さんが総毛立ち、脂汗が滲む。

「あるんですね……？」

「ち、誓って殺めてはおらぬ。ただちよつと吸っただけで……。皆、悦んでおった……っ。合意の上じや……っ！」

ワンナイトラブのことかな？

どうやら雅さんは性と精の気を吸うタイプの怪異らしい。その割にはクナイを持ち出してパワータイプの片鱗も見せてたけど。

でも、操って無理やりってわけじゃないなら、雅さんの誘いに喜んで乗った人がどうなっかっていようとそれは別に……。

「それと妖狐の嗜みゆえ……化かしを少々……」

やっぱり妖狐なんだ、雅さん。

九尾の狐ってこと？

でも尻尾が生えたことを大喜びしてたから、まだ見習いみたいな感じなのかな。

九尾の狐って言えば、古代中国とか平安の日本で美女に化けて王朝をどうのこうのって話だったはず。狐の妖怪ってみんな女に化けて男を誘惑するんだろうか。

『化かし』か。

夜道でびつくりさせる程度の可愛いものなら良いけど……。いや、それもそれでめっちゃくちや迷惑ではあるよな。

どうなんだろう。

雅さんの善悪を理解したところで意味は無いけど。

オレが出来ることなんて警察と弁護士を呼ぶことくらいだから、国家権力が通用しない相手にはどうしようもない。茶々ちゃんや彩乃さん達のような……魔法も超身体能力もないオレには、仮に雅さんが悪い妖怪であったとしても戦うことなんて出来ないし。

……。

「雅さん。お願いがあるんですけど」

「……」

「これからは人に危害を加えないで欲しいです。出来ればいいので」

「……？」

雅さんは困惑しているようだ。

オレの真意を測りかねているらしい。

「もし、妖怪が人に危害を加えないと生きていけない生態なら、オレの

願いは破綻します。それは雅さんに死ねと言っているようなものだからです。だからといって人に害を為す存在を見逃すことは出来ませんから……。熊や猿はもちろん飼い犬でさえ、ラインを越えれば殺されます。雅さんが人を害する妖怪なら、今後もしも雅さんを退治できるような人に出会ったとき、オレにはその人に雅さんのことを……人に危害を加える妖怪のことをきちんと伝える義務があります。でも、雅さんには助けて貰った恩がありますから、出来ればそうなって欲しくない。そう思っています。それがオレなりの誠意です」

「……」

「実際、どうですか？　お願いは聞いて貰えますか？」

「……」

雅さんは困惑の表情でオレを凝視している。

「その場しのぎの謀りを口にするとは思わぬのか……？　古来より我らは人を騙し、化かして来た」

「それは考えるだけ無駄だと思っっています。オレは雅さんのことも妖怪のことも、何も知りません。人間同士だって分からないのに、種族すら違う。オレの方だって、妖怪である雅さんに人間側のルールを押し付けて枠に嵌めようとしているだけです。だから騙されたとしても、それは仕方のないことかな、と」

「……」

「ただ……後から嘘を吐かれたのだと分かったら。それはとても哀しいですね」

「奇なことを……。儂を見逃すと？」

「いえ、違います。見逃しはしません。先ほども言いましたが、然るべき人と出会った場合、どのような場合でも報告はします」

「な……っ!?!」

「ただし、もしも雅さんが退治されそうになったとき、オレとの約束を守ってくれているという確証があれば、オレはオレの全力で雅さんを庇います」

「……っ」

雅さんが息を呑んだ。かと思えば、俯いて何かを考え込み始める。

垂れていた尻尾がじわじわと動き出している。

「悪……彼奴……庇護下……」

なんか不穏なワードが聞こえたな。

やっぱりこの狐、悪い奴か？

「女狐め。我が同胞をよくも」

突如、獣の唸り声にも似た低い声が聞こえた。声は激しい怒りによって震えている。

声が聞こえた方に目を向ける。

上空。

空に男が浮いている。

「天狗だ……」

赤い顔、長い鼻。鳥のような羽。

天狗だ。天狗がいる。

「違う」

「え？」

雅さんが言った。

「あれはかつて在った同胞の形を奪い現世に迷い出た魔の世の民じゃ」

「ごめん、雅さん。凄く緊迫した様子で説明してくれてるのに申し訳ないんだけど、何言ってるのかよく分かんない」

「……」

「つまり有名な妖怪の姿をしているってだけで、実際には中身が全然違う魔界の住人ってことでもいいのかな？」

「分かっとうろらが……」

オレの解釈で合っているらしい。

魔界なんてあるのか……

日本の妖怪にまつわる伝奇……地域で小さく纏まったような展開を想像してたのに、魔界。

急にスケールが大きくなって来たな……

きつと律ちゃんと迷い込んだ異界とは違うんだろうし……。まさか一緒だったりする？



あの化け物がこうなってる……いや、無いか。  
改めて思うんだけど、この世界ってどうなってるの？

異変の種類が豊富すぎる。  
裏世界。パンクしない？

こんなにいっぱい異変があつてなんで何一つ表社会に情報が漏れてないんだ？

魔法少女は……被害者が消えるのか。

律ちゃんの件は……一人だけ。

彩乃さんは彩乃さんが食い止めてるから漏れてなくて、明日香さんの件は……よく分からない。信乃ちゃんの件は普通に一般社会の闇と言うか、警察沙汰になっている。というかオレがした。

そう考えると、上手いこと噛み合って回ってる気もする。

それとも……オレがまだ知らないようなことも含めて、この世に存在する全ての異変を把握し、情報を管理しているような組織があつたりするのかな。異変の被害を全部ガス会社に押し付ける鬼みたいな組織とか。

「う……っ！」

天狗が手に持っていた巨大な葉っぱのような団扇を大きくひと振りした。

すると雅さんが急に中腰になり、辛そうに両手で顔を覆った。髪の毛がオールバックになっている。雅さんのいるところにだけ、強風が吹いているようだ。

「ぐっ、うっ……！」

「雅さん、大丈夫？」

雅さんが呻くごとに、腕や太ももに鋭利な刃物で裂いたような傷が生まれ、血が噴き出し、風に飛ばされる。痛そうだ。それだけじゃない。オレの貸した上着も被害にあっている。

あの天狗が何かしたんだろう。

「その天狗」

「うん……？」

天狗がオレを見下ろし、訝し気に小首を傾げた。

「何をしているのかは分からないけど、今すぐ止めろ。雅さんを傷つけるな。不愉快で腹立たしい」

「女狐の色香に魅入られたこの世界の人間か。弱小。吹けば飛ぶ矮小なる小物よ。運よく我が嵐の範囲外におったようだが……。目障りだ、死ねい！」

天狗が団扇を大きく振るった。

「な、なにが……っ!? 馬鹿な……っ!?」

団扇が爆散した。

「貴様、何をした!?!」

「なにも……」

「とぼけるな! いや、女狐、貴様か!?!」

「えっ!?!」

いつの間にか突風から解放されていた雅さんだが、顔や体中が傷だらけになっている。痛そうだ。攻撃全弾ヒットしました、みたいになってる。酷い……。

そんな状況でいきなり天狗から怒鳴られたものだから、雅さんはかなり驚いた様子だ。思わずと言った様子の声も出ていたし。

ごめんね、雅さん。

多分犯人オレ。

「ならばこの一撃を以て『最後のあやかし』に引導をくれてやる!!」

天狗が空中で姿勢を変えた。雅さんの方に頭を向けて一文字に、翼を羽ばたかせ、突っ込んで来る!

咄嗟に雅さんの腕を引っ張った。傷だらけの腕だから、掴まれたら痛いと思う。でもそんな配慮をしている余裕は無かった。

雅さんとオレが天狗の軌道上で重なった。オレはそのまま反対側まで雅さんを引っ張り飛ばすつもりだったが、天狗の突進があまりに速く、そしてその速さで進路を変えられるほどの器用さによって、天狗はそのタイミングでオレ達に……っ!

……。

シュレッダーに入れられた書類みたいに、天狗はオレの目の前で光の粒子になって消えた。鬼の魔人と違って断末魔すら残せなかった

のは、そのあまりの速さのせいだろう。

「……………」

光の粒子がオレの頭上を越えて後ろに…………。

「おっ、おっ、おっ!？」

雅さんがやけに艶やかな嬌声をあげる。

見ると…………体が光っている。

少しして光が収まると、尻尾が一本増えていた。

「尾が…………っ！ 儂に尾が二本も…………！」

雅さんは二本に増えたもこもこの尻尾を振り回し、喜びに浸っている。

そんな雅さんをじつと見る。

どういう理屈？

経験値制つてこと？

雅さん、勝ってないというか戦ってさえいないけど、いいのかこれで。

「あつ…………」

見つめていたオレに気づいた雅さんが気まずそうに尻尾を動かすのを止めた。

ほぼ全裸だ。

切り傷だらけだった雅さんの体は既に治っている。だけど、オレが貸した上着は細切れになり、雅さんの体に僅かに布が引つかかっているだけの状態になっていた。

哀しい…………。

「…………」

「…………」

雅さんを見つめる。

雅さんもオレを見つめている。

尻尾が動いた。

雅さんの股下から尻尾が出て来て、前を隠す。もう一本の尾が胸元を隠した。

…………。

オレは思った。

——出来るなら最初からしろや。

雅さんがすすすとオレの傍に寄って来る。豊満な体をぴたりと寄せ、媚びるようにしなだれかかり、こう言った。

「東堂様……。妾でも構いませぬ……。どうかあなた様の身の回りのお世話をさせていただきます……。お傍に置いてくださいませ……」

露骨だね……。

でも、そういう正直な人は嫌いじゃないよ。

「きやつ」

オレは雅さんを引きはがした。

## 巫女・妖狐

「もう、意地悪なお方……」

引きはがした雅さんが「シャイなんだから……」、「分かってますとも」とでも言いたげに妖しく微笑んでいる。

違うよ。何も分かってないよ。

いちいち疑われたり聞かれても面倒だから、オレの体質についてさつと理解してくれたらいいことはありがたい。

ただ一連の流れからして魂胆が透けて見えてるから、今更そんな態度を取られたところで「なんて可憐でいじらしい人だ。守護らねば」とはさすがにならんでしょ。演技派の妖狐ならもうちよつと頑張つて騙して欲しいところだ。どうせ騙されるならオレも気持ちよく騙されたい。

とはいっても、なんというか……この人も必死なのかなあ。

さっきの鬼といい今の天狗といい、彼女は敵対しているらしい存在に対して全く歯が立ってないように見えた。住処がどうか言っていたし、妖怪大戦争とでもいうのか、雅さんは魔人とやりに負けて落ち延びた家なき狐こなのかもしれない。

そう考えると可哀そうだ。

彼女がなんで狙われているのか、どういう状況に置かれているのかくらいは聞いてあげてもいいかもしれない。

「寒くないですか?」

「あ……」

雅さんは息を呑んだ。

一瞬だけ驚いたような表情を浮かべたものの、すぐに変化する。

薄っすらと染まる頬。やんわりと綻ぶ口元を掌で隠し、濡れた瞳を嬉しそうに細めた。

まさに、意中の相手に気遣いをされて感極まった、というふうに見える。

でも全裸なんだよなあ。

「東堂様……!?! 私わたくしを……案じてくださるのですか? なんとお優し

いお方……。嬉しゅうございます……」

「まあ、全裸ですし……。最近寒くなつて来たからどうかと思つて」  
「もつたいなきお言葉……。東堂様のような益荒男に、私のわたくしのような婢はしためが気にかけて頂けるなど……。まさに夢心地でございます……」

雅さんがまた懲りずにそそくさと寄つて来た。

手を伸ばしてきてオレに触ろうとしたかと思えば、寸前で引つ込め、躊躇つたような素振りを見せる。そして触りたいけど触り難い……。みたいな葛藤をしているかのように、恐る恐るといった様子で指先だけをオレに触れさせた。

なにしてんだこの人。

雅さんを観察しているから黙っているだけのオレをどう捉えたのか、雅さんは触れた指先をオレの体の表面で滑らせ、指の腹、掌と順に接触面積を増やしていく。

「東堂様……。私、寒うございます。心が寒うございます……。どうか私に東堂様の温もりを……。お分けになつて……」

雅さんはそう言いながらそつと身を寄せてきた。寄りかかられている割には体重を全然感じないのは、雅さんが軽いのか、そういう寄りかかりのテクニクか……。

しかもこの妖狐、さりげなく胸を隠してる尻尾をずらしたな。少し硬い二つの突起と柔らかな母性が、上着を失い薄着になつているオレにダイレクトアタックをかましてくる。

「雅さん……。う。あの」

「魔人どもを前に動じない胆力、寄り纏りたくなる上背はたくましい大樹のよう……。そしてその瞳のなんと暖かなこと……。まさに闇夜を照らす月光のようでございます……」

雅さんが潤んだ瞳で上目遣いに見つめて来る。

しかし綺麗な顔だ。認めざるを得ない。

目元も瞳も鼻筋も唇も、何もかもが整っている。オレが今まで会つた中で多分一番整つた顔だ。なのにいちいち妖艶さが滲んでいる。しかも圧を感じる類の美貌ではなく、どこか親しみのある暖かな顔つきだ。狸顔つてやつかな。狐なのに狸顔。

妖艶さと言えば、彩乃さんもそうだった。彼女が支配者の妖艶さなら、雅さんは被支配者の妖艶さというか……保護欲や支配欲を掻き立て、男の理性を擦って来るタイプだ。しかもこの狐はそれを意識的にやってる。

「ああ……。東堂様……。どうか私を……」

遂に頭も含めて全身でしな垂れかかって来た雅さんが零した吐息と声は、震えあがるほどに柔らかい。

身も心も、尊厳すらも含めて、この人のすべてがオレの手の中にあるという実感がある。守ってあげたいという庇護欲と、この人を守らなければという責任感が湧き上がる。

今、この人を力強くかき抱けば、きつと嬉しそうに嬌声を零し、されるがままに欲望のすべてを受け入れてくれる。そんな確信を抱かせて来る。

出来る……。

男を手玉に取って来たことを言外に自負するだけはある。

あえて皆まで言わなかったのは小技か？

無防備にすべてを曝け出しているようで最後の一线だけは相手に越えさせようとするところもにくい。選択させることで主導権を手放し、「手に入れた」という実感を抱かせ、独占欲まで持たせるつもりだ。

困るなあ……。

そもそも受け入れる気がないわけだからオレには。

いやにしおらしいからさつきみたいに引きはがすのも罪悪感が湧いて来るし。

男の本能はパーリナイだけど、理性と価値観は「乗るな」と警鐘を鳴らしている。絶対面倒くさいことになる。

「……」

オレに身を寄せている雅さんのつむじを見つめる。

「雅さん。オレは性急なのは好まないの、自制をお願いしますね」

「……」

追いつがって来ないように素肌の肩に手を置いて距離を取る。

雅さんが一瞬愕然とした表情を見せる。

胸の突起隠してくれない？

「お、お恥ずかしい……。私、少し急いでおりました……。東堂様への想いが抑えられず……。お恥ずかしゆうございます……。」

さすがというべきか、瞬時に切り替えたようだけど……。

内心ではキレてそう。

以前断ったことを女の恥をかかされたって怒ってたようだし、プライドが高いんだろうな。断られたこと無さそう。

きつと何か言いたいこともあるんだと思うけど言っごないのは、オレの機嫌を損ねたくないからかな。信乃ちゃんのとくみためにオレとの関係を単純に大切にしたいからって理由じゃなくて、打算ありきで。

今現在、雅さんとオレでは雅さんの方が立場が弱いようだ。少なくとも雅さんはそう思ってそう。初めて会ったときは立場が逆だな。

「雅さんは別にオレのことが好きでそういう態度を取ってるわけじゃないですよね？」

「そんな……。私は東堂様のことを……。」

「普通に話をしていただければ聞きますよ？ 困っていらっしやるなら、出来る範囲でなら手助けもしますし。そんな下手に出なくても……。」

「そのような……。私はただあなた様を思う一心でございます……。どうか私の想いを否定なさることは……。どうか、なさらないで……。私はただ、あなた様を……。」

雅さんが悲し気に顔を背けた。

つ、強い……。

オレが察していると分かっいてなお、演技を徹底し続ける凶太さ、意地。直前までの粗暴な態度の一切を感じさせない繊細な所作。初心な少女の自然なぎこちなさや照れはあつても、演じることへのぎこちなさがまるでない。最初からこの人はこういう人で、本当にオレに恋をしているんじゃないかと勘繰らせるほどの演技力だ。

雅さんは自分にオレを溺れさせる気だ。目的は多分、魔人とやらの



盾にするため。「出来る範囲」程度ではなく、自分から彼女のために身を捧げたくなるほどの、強い恋愛感情を植え付ける気だ。

これが妖狐。人を化かし、心を弄ぶ日本屈指の大妖怪の同類……。そんなド汚い恋愛頭脳戦みたいな駆け引きを、普通に大学生活を送っていたオレ相手に仕掛けて来ないで欲しい。

雅さんに相応しい相手はきつと他にいると思うよ。

もしこれが信乃ちゃんのと ききたいに、『貞操観念が明らかに根付いているのに、それ以外に現状を変化させる方法が思いつかない』、つていうことなら言葉を尽くして止めるし、窘め寄り添うことだつてした。それは相手を傷つけるのがオレになつてしまうからだ。

でも彼女の場合はきつと全く無理してない。

そもそも日常的に楽しんでたみたいだし、これで釣れたらラッキーむしろ安い、くらいに考えてんじゃないかな。以前のことともそうだし、さつきも吸うとか言つてたし。サキユバスの食事、みたいな感じなのかも。

「申し訳ないですが、仮に雅さんが普通の学友だとしても、良いお返事は出来ません。オレはあなたに恋愛感情を持たないからです。そして以前お伝えしたように、オレはパートナー以外と関係を持つつもりはありません」

「……」

雅さんが黙った。

「プライドを傷つけてしまったなら謝ります。以前のことも含めて。そのうえで、さつきも言いましたが、普通にあなたの状況を教えていただければ、出来る範囲で、ではありますけど、協力はしますよ」

「……」

「雅さん？」

「承知しております……。あなた様は人の身。どれほどお慕い申し上げようとも、私は所詮、わたくし下賤の身。卑しい妖狐。ですが、もはや止めるすべが分からぬのです……。っ！ あなた様を恋い慕う想いが溢れて止まらぬのです。どうか東堂様……。っ！ 勝手は承知の上……。ですがせめて、あなた様を想うことだけは、どうかお許しいただきと

うございます……っ。たとえ叶わぬ想いとて……あなた様を思うことだけは……っ」

っ、強い。

必死の懇願が堂に入っている。

意地でもオレのことが好きという体を貫く気だ。しかも超至近距離で女優顔負けの演技で迫られたら、心情が動いてしまってもおかしくはない。全裸だし。

「雅さん。普通に話していただければそれで別に……。あなたがきつと大変な状況に置かれているだろうことは察しています。オレとしてもあなたには恩もありますから、義理は果たしますよ」

「恩だなどとそのような……。私はただ、東堂様を想う一心にございます。どうか……。信じていただだけませぬか。あなた様に疑念を抱かれるなど、私にとつてはあまりに辛く……。胸が締め付けられる思いでございます……」

雅さんは切なげに腕を自分の胸元に当て、身を竦めた。

どうか分かって欲しいと、切なく哀し気な表情で訴えかけて来る。徹底してるな……。

迷子としてあの神社に迷い込んだとき、雅さんがどんな思惑でオレを歓待したのかは分からないけど、オレ自身が恩義を感じている以上、それを返せたとスッキリするまではオレとしても話は聞くのに。無理なことは無理って言うけど。

無理って言わせたくないからこそ、このムーブなんだろうってことも分かるけど。

「おのれ東堂、とか言ってたのにですか？ 怒ってたみたいですけど」「言葉の綾に……ございます。誓ってそのようなつもりは……」

どんな綾だよ。

「いえ……。東堂様はご不快な思いをされたのですね……。申し訳ございません。私が愚かゆえにそのような……。お許しくださいませ……二度とそのようなことは申しませぬ。どうか……」

そう言われるとな……。めんどくせえな……。

これが雅さんの素じゃないっていうのが逆にめんどくさい。

「分かりました。それはもういいです。それで……雅さんはオレに何を求めているんですか？ 魔人とかいうのから守って欲しいということなら、申し訳ありませんがお引き受けできません。オレは普通の大学生で、戦う力は無いので」

「……。そのようなことは……。いえ、東堂様の手を煩わせるつもりは毛頭ございませぬ。ただお傍に置いていただきとうございます」

「それは……つまり、うちに居候させてくれということですか？ 数日泊まるくらいならともかく、さすがにそれは……」

とりあえず物理的な距離を詰め、心の距離は時間を掛けて、つてことかな。打算ありきだから分かりやすくしてそこは助かるけど、最初の妖怪ムーブが無かつたら騙されてたと思う。

それはそれとして、居候はさすがに……。

たとえばお隣さんが長期出張になるからしばらく茶々ちゃんを預かってくれとか、信乃ちゃんの家に入れられないからしばらく居候させてくれとかならオレも考えはする。でもそれは前提として、ある程度の信頼関係があることと、お隣さんからの『お心付け』や、公的制度のアシストがあつての話だ。完全に無償で人一人を居候させるというのは嫌かなあ。

「家事全般には自負がございます。それに私は妖狐ゆえ、食い扶持をお気になさることもございませぬ。私はただただ、あなた様の身の回りのお世話をさせていただけることが幸せでございます」

「なるほど……。食費を自分で賄ってくれて、家事全般もやって貰える……。それは確かにありがたいことですね……」

つまり、セフレ兼家政婦（タダ）との同棲。

なんだこれは。

美人でおしとやか、男を立ててくれる言動に加えて家事スキルも高く、昼は貞淑、夜は情婦。

男にとってめちやくちや都合が良い。良すぎる物件だ。

もれなく意味不明な厄介事がついてくることを除けば。

事情の説明を避けてるのもそれでかな？

全貌を知られると困ることがあって、先に泣き落としと色仕掛けでオレを籠絡しようど……。

ただ、逆効果なんだよなあ。

オレは普通に助けてって言われた方がやる気が出るというか……。雅さんの露骨な手のひら返しというか、態度の変化はあまりにも分かりやすくオレとしても嫌いじゃないんだけど、打算ありきは好きじゃない。

つまり、こういうことか。

オレに恋愛経験が乏しいことを知り、『性と恋慕』で攻めてきた雅さんは、しかしそれだけだと攻略が厳しいと判断し、家庭的な要素も持ち出して来た。

以前ご馳走していただいた食事は確かに美味しかったし、家事全般が出来るというのは嘘では無いだろう。片付けが出来るかどうかは分からないけど。というか木刀の件も聞かないと……。全部聞きたいけど、違ったときがあまりに失礼過ぎるな……。

「普通に事情を話してくれる気はありませんか？　そうでなければオレとしてもこれ以上は話が出来ないと判断して帰るしかないんですけど……。それと前、隠して貰えますか？」

「そんな、事情など……。私はただ、あなた様のお傍に……。」

そう言いながら、雅さんは再び前を尾で隠してくれた。

「ありがとうございます」

雅さんに小さく頭を下げてから続ける。

「確認したいんで」

「お父さん!!」

えっ？

急に知らない声が出たせいで言葉を呑み込んでしまった。

声が出た方に目を向けると、巫女服を着た女性がこちらに走って来るのが見える。

さっきまで神社の中には誰もいなかったのに……。今来たのかな？

レンズの厚い丸眼鏡に、黒髪を三つ編みにし、うなじ辺りから両サ

イドにおさげを流す髪型が特徴的な素朴な雰囲気の巫女さんだった。SNSで狙ってやっている人たちのような華やかさは無い。それだけだとレトロな文学少女といった素朴な風貌だが、巫女服を着ているせいか逆に目立っているように思う。

こういう人が眼鏡とって髪を降ろしたらめちやくちや印象変わってドキツとするときあるよね。

巫女さんは全裸の雅さんを認識すると凄い形相になって走る速度を上げた。

そしてオレを雅さんから引きはがすようにオレの肩を引っ張り、オレと雅さんの間に入り込む。

「貴様、妖狐か！ 父をどこへやった!?!」

巫女さんが雅さんへ向かって叫んだ。

オレは思った。

——良かった。お父さんってオレのことじゃなかった。

いや、最近は色々あったからさ。

「未来から来たオレの娘が」みたいなのだったらどうしようかと……。

「あの、あなたは……」

「あなたは下がって!」

この人なのかなと思って巫女さんに話を聞こうと思ったら遮られた上に割と強く物理的に押し返された。気だけじゃなく、力も強いようだ。

見た目が図書委員とかやってそうだなって感じだから大人しい人なのかと勝手に思ってた。

女性は雅さんを睨みつけたまま、背中越しに語り始める。

「危ないところでした。あなたはわたしの後ろに居てください。あの女は妖怪です。美貌と言葉で男性を惑わし、食い物にする化生。突然のことで信じられないかもしれませんが、妖怪は実在します。そして、大変危険な存在です。しかもオレは狐……。もし伝承に語られる九尾の狐をご存じであれば、その危険性はお判りいただけるかと思えます。ですが、わたしは妖怪退治を生業とする一族の出。ご安心を。」

あなたはわたしが守ります」

かつけエ。

「おい、狐。貴様、父をどこへやった!? この人をどうするつもりだった!?!」

「はあ? いきなり現れたと思うたらなんじや、小便臭い生娘が。儂が九尾の狐と同類などと、恐れ多いことを抜かすな」

雅さんが何とも言えない表情で女性を小馬鹿にする。

まあ、二本しかないもんね尻尾。

それにしても、この巫女さんはこの神社の人なのかな。もしお父さんがあの神主さんのことを言ってるなら……爆散させましたオレが。

どうすればいい?

どうすれば責任を取れる……?!

そんなことを考えているオレを他所に、二人のやり取りがヒートアップしていく。

「きむ?! 狐が何を根拠に……っ!」

「おーおー。臭いよる臭いよる。男を知らぬゆえ、手入れもしておらぬか? 小便はちゃんと拭いとるか?」

「あなた、奴の言葉を聞かないでください! 妖狐は人の心を惑わします!」

惑わされてるのは君だけだよ。

でも確かに。

「あの、雅さん。そういうことを言うのは止めて欲しいです。聞いていて不快になる」

「は……っ?! も、申し訳ございません……! 私としたことが、東堂様のお耳になんとはしたないお言葉を……っ」

「なっ!?!」

巫女さんが凄い速さで振り返り、困惑と敵意が入り混じった表情を向けて来る。

なんか妖怪を使役する奴、みたいに思われてそう。

「雅さん、余計なことを言わないでください。今、明らかに誤解されま

した。あの、違うんです。オレは東堂といいます。今日はここにお祓いに……。予約してたんですけど……あなたはここの……？」

「なるほど、そういうことでしたか……。確かに予約が入っていたことは存じてます。つまり、あなたはあの妖狐に取りつかれたがためにお祓いを……。分かりました。わたしが父に代わり、今この場で奴を祓います！」

巫女さんが懐に手を入れたあと、手を横に広げた。指先に挟んであるものは……お札か。

まあ、定番ではある。

「観念しろ、狐！」

「儂相手に祓うなど、よう吠えたな小娘が！　上がりし我が位階、おのれで試してしんぜよう!!」

……あ、東堂様。少々お待ちくださいませ。ご心配なされずとも、灸を据えるのみでございます。決して危害は加えませぬゆえ、ご安心くださいまし」

それを危害って言うんじゃないかな。

でも正当防衛というか、巫女さんが暴走しているのは否めないから止めないと。

「狐。そうやって人の心を支配しているという訳か……っ！」

雅さんの言葉を聞いて、巫女さんが振り返った。

「どういう状況かは察しました」

マジ？

オレは察せてないと思うよ。

「いや、その狐さんは雅さんといって、決して悪い狐……かどうかはまだ分かりませんが、話を」

巫女さんが哀れむようにオレを見ている。

「察します。信じられないかもしれませんが、あなたはあの狐に騙されていたんです。みだらな愛人、貞淑な妻、いじらしい恋人、古来、狐はそのように装い人に近づき、堕落させてきました。とても強力な妖怪です。その妖狐に取り憑かれながら、よくぞお祓いの決心をされましたね。あなたはとても強靱な精神をお持ちのようだ」

なんか「洗脳されてるけど、深層心理でそれに抗って神職の方に助けを求めに来た被害者」みたいな扱いされてんな。

「よく頑張りましたね。もう大丈夫ですよ。奴を祓い、必ずあなたを救います」

巫女さんが指先に挟んでいるお札をオレの額に近づけて来る。

あつ……、それは……。

巫女さんの向こう側で「にやつ」と笑った雅さんが見える。

気づかれないとでも思った？

覚えとくね。

「なっ!？」

巫女さんのお札が燃え上がる。

知ってた。

「か、家宝の札が……!?!? それほど強力な呪いを!?!? それともあなたが!?!?」

巫女さんがパニックを起こしている。

「あー、もう無茶苦茶だよ。」



## 巫女・妖狐2

いきなり現れた巫女さんは妖怪退治を生業にしている方らしく、凶悪な妖怪である雅さんを祓い、雅さんに憑りつかれ洗脳されているオレを救うためにお札を取り出した。そのお札は強力な力を宿す巫女さんの家宝の品であるらしい。巫女さんはこれから起こることから、あるいは現在受けているだろう雅さんからの悪影響からオレを守るため、オレにお札を貼り付けようとして……お札は燃えカスになった。

札は塵となりもはや欠片も残っていない。巫女さんは顔面蒼白となり、空を掴まみ震えている指先を見つめている。

「ごめんなさい。オレの体質のせい……」

憐れなくらいテンションが下がった巫女さんの泣きそうな瞳が、困惑の色を宿しオレを見つめる。

罪悪感が凄い。

巫女さんの向こう側には、残忍な笑みを浮かべた雅さんが見える。

雅さんの尾が胸部と下半身から離れ、その尾の先を巫女さんとオレに向けた。尾の先に青白い炎が灯る。狐火というやつか。

巫女さんは気づく様子が無い。オレは巫女さんを背に隠し、咄嗟に前に出た。

放たれた狐火がオレの目の前で霧散する。異変への抵抗力、オレの体質は有効のようだ。良かった。火傷するのも覚悟でやったけど、何事も無くて。

人に危害を加えないで欲しいという願いと約束は速攻で破棄された。哀しい……。

「雅さん……。残念です。オレは本当に、あなたに協力するつもりだった」

「と、東堂様……！　ち、違います！　違うのです！　どうぞ誤解なされませぬよう！」

「どう誤解するところが――」

「洗脳が解けてる……？　まさか、燃え散ることで最後の役割を果た

した……?」

「ごめん。巫女さん、それ違うと思う。ちよつと黙ってて欲しい。だけど巫女さんは大きな独り言を続けた。」

「何が起きたのか一切分からなかった……」

オレも分かかってないから大丈夫。

「わたしたちの神通力とは違う系統の術……。そして妖狐の術を打ち消すほどの力……。それに、東堂……。あなたはまさか……。つ!?」

なんか考察してくれているけど……。何か知ってるのか?

「伝説の、仏閣生まれのTさん!」

「いや、違いますね。確かにTではありませんけ」

「聞いたことも見たこともない力! まさに神仏の加護! やはりあなたは仏閣生まれの……。!!」

「いえ、違いますね。ちよつと今はその話は置いて貰って。雅さん、今の」

「東堂様! どうかお聞きくださいませ!」

「しかしそれほどのお力をお持ちであれば洗脳など……。ましてやお祓いなど不要。一体何者!」

「あの、ちよ」

「東堂様! 東堂様! どうか私の言葉に耳を傾けてくださいませよ  
う……。っ!」

「まさか狐を使役している!? 社の結界が破れているのはあなたが」

「聞いて。聞いて」

「先の炎は幻術でございます! 特段人を害するものでは」

「父の言っていた異変とはまさか」

「おい、聞けよ。聞け」

哀しいかな。

オレが凄んだところで別にとんでもない突風が吹いたり重力が強まったり不思議な威圧感が出るわけでもない。

こういうときはお手上げだ。

オレは二人から距離を取り、雅さんが起きるまでの間腰かけていた

木の根に再び腰を下ろした。

幹に背を預け、じつと空を見上げる。

まだ何やら言っているようなので、携帯を取り出していじる。

「東堂様？」

「東堂さん？」

オレの行動にようやく二人のマシニングントークが止まった。

不思議そうにオレを見ている二人に言う。

「ああ、二人が落ち着くまでのんびりしようかと。それで……どうでしょう？　話は聞いていただけそうですねですか？」

「あ、はい……。すみませんでした……」

巫女さんは恥ずかしそうに俯いた。自分の暴走を省みているようだ。そしてオレの態度から、巫女さんは自分が何かしらの誤解をしており、現状に危機的なものはないということも察したみたいだ。オレとしても巫女さんを責めるつもりはない。言動から察するに、誤解はあれどオレを助けに来てくれたようだから。

雅さんは土下座する勢いで頭を下げ……というかオレの前で土下座をした。ケツの位置が妙に高いのが気になる。

「東堂様……。申し訳ございません……。どのような罰であろうと受け入れる所存でございます」

ケツが震えている。ここからは見えないが、尻尾が割れ目をうまく隠しているようだ。巫女さんが雅さんの行動に凄く困惑しているようだ。うだが、そっち系で引いている感じはしない。

「とりあえず雅さんの話を聞きます。ただその前に……、巫女さん。名前を教えて貰ってもいいですか？　オレは東堂雷留です。東と本堂の堂に、雷を留めると書きます」

温和に微笑むと、巫女さんはますます恥ずかしそうな表情を強める。

そしてぺこりと頭を下げた。

「取り乱してしまい、申し訳ありませんでした！　また、ご丁寧にありがとうございます。わたしは涼音と申します。鈴院涼音です。風鈴の鈴に病院の院で鈴院。りんりんって呼ばれることもありますけど、

涼音のすずは涼しいのすずでして苗字の鈴とは違うんです」

「なるほど。こちらこそ丁寧にありがとうございます。綺麗な響きの名前だと思います。涼音さんも混乱しているとは思いますが、まずはオレ達の事情を聞いていただけますか？ 妖怪退治を生業にされているとのことですが、このように、こちらの雅さんは今のところは……」

……。

言うほど無害か？

さつきおもくそ人に危害を加えようとしていたけど。

でもそこをほじくり返すと話が進まないから今はそう言うしておく。

「無害なので、ひとまず矛を収めて頂いて」

「……」

涼音さんは全裸でぶるぶる震えている雅さんとオレを見比べて逡巡しているようだ。雅さんの露骨な震えは多分演技だけど、涼音さんから見たらそうは思わないだろう。どうだろうな。やっぱり妖怪を使役する正体不明の男、みたいに見えるのかな。

あつ……。

涼音さんがまた指先を哀しげに凝視している。

それはオレの罪悪感をバチクソに掻き立てるから止めて貰って。

「分かりました。わたしも家宝をう、う、う、うし、失った理由を……知る必要がありますから。聞きましょう……。ただし、話の途中、少しでもこの妖狐が妙な動きをすれば問答無用で祓います。いいですね？」

めちやくちやダメージ受けてるやん。

そんな大事なものだったのか……。

まあ、家宝だもんな。

不可抗力の極みみたいなものだけど申し訳ない……。

オレに対して土下座したままの雅さんが唸るようにこう言った。

「矮小な生娘如きが儂を……」

「貴様にとってわたしが矮小な存在であることが事実でも、わたしは命を賭して貴様を祓う覚悟がある」

「雅さん。それ以上はオレも擁護できません。さっきの話を思い出しててください。オレは今、あなたの側に立つか涼音さんの側に立つか悩んでいます」

雅さんを窘めたあと、涼音さんに視線を向ける。

「涼音さんも、お願いですので雅さんを刺激する言動は避けて頂けませんか？ あなたにも事情があることは理解しています。」

妖怪退治を生業にされているということですから、雅さんを強く敵視し警戒するだけの理由を、あなたはきつとお持ちなんでしょう。普通の大学生であるオレが知る由もないような、妖怪の非道な行いを……これまでに何度も目の当たりにしてきたのかもしれない。

ですが、彼女はオレの知人なんです。知人をそのように言われてしまえば、オレも黙ってはいられません。勿論先程あなたがおっしゃったように、オレが彼女に騙されているという可能性も考慮しています……お願いします。一度、フラットに話をしてもらえませんか？」

「……。分かりました。良いでしょう。確かに、あなたは狐に支配されているように見えません。……非礼をお詫びします」

ぺこり、と涼音さんが礼儀正しくオレに頭を下げた。

そして全裸土下座をしたままの雅さんの背中に視線を向ける。

「この妖怪に対しては、すべての話を終えた後、必要であればそうします。それでよろしいですか？ 東堂さん」

「はい。聞き入れて頂いてありがとうございます。本当に……」

なんか、涼音さんが割とすんなり受け入れてくれたので感動してしまった。最近会った人達の中では田辺に次いで大人だ。

なんでだろうな……。

「ふう……。では、まず雅さん。どうぞ」

「ありがたき幸せ……。あなた様に突き放されては、私は生きてはいけません……。東堂様。先の炎は幻術でございませぬ。特段、人に害を為すものではなく……。少し、そんな小娘をからかってやろうと。多少の痛みはあれど、傷はつきませぬ。まことにございませぬ。私は東堂様からの御申しつけを違える気など毛頭ございませぬ」

「なるほど……。確かに、いきなり悪い狐扱いをされたわけですから、少し驚かすくらいは憂き晴らしは理解できます」

それはそれでやっぱり価値観が違うなとは思うけど。

「では涼音さん。どうですか？ さっきの炎は幻とのことですが、実際そうでしたか？」

「いえ……」

「小娘、謀りを……！」

「雅さん抑えて。涼音さん、どうぞ」

「お恥ずかしい話ですが、分からない、というのが正直なところですよ。一瞬でしたし……」

口をつぐんでしまった涼音さんは、その先を言いたく無さそうだ。

「どうやらこの狐はわたしよりも……」

どうだろう。雅さん、魔人つてのにぼろ雑巾みたいにされてたからな……。強さの基準が無いから何とも言えない。でも格上相手にオレを守ろうとしてくれたのか。良い人だ……。

雅さんが強いのか、この巫女さんがその道の人としては控えめなのかは分からないけど。

「東堂さん。あなたは何者ですか？ 普通の大学生って言ってましたけど、そうは思えません。それに、先ほど体質とおっしゃってましたけど……」

「それは」

「やはり仏閣生まれ、神仏の加護を受けた……！」

「いえ、違います。そう思われるのは、さっきの炎を掻き消したことが理由ですよ？ だとすれば説明します。オレは『異変に対してかなり強力な抵抗力』のようなものを持っています。体質ですね。この体質は魔法や化け物からの干渉を無効化し、ときには相手を爆散させます。が、技術ではないので能動的に使用することはできません。そして神仏の加護を受けたという認識もありません」

「体質……？」

「はい」

「それに、魔法……？ 霊能力ではなく？」

「……。涼音さん。世の中には、思いもよらないことがたくさんあるんですよ」

なんか、涼音さんの反応が新鮮で嬉しくなる。

「そして、オレはちよつと特殊な体質と重めの過去を持っているだけで、普通の大学生です」

「それは普通とは言いませんよ」

「いえ、オレは別に起業をしていたり、会社に勤めながら通っていたりするわけでもありませんので。大学生という括りの中では、特筆すべきものありません。空を飛べたりとかも出来ませんし、魔法を使えたりするわけでもありません。普通に授業を受けて普通に生活をしています」

「東堂さんは……普通ということになにかこだわりが……？」

「こだわりというか、本当にこれといったとりえもない普通の大学生なので……」

「……」

雅さんは静かに土下座をしたままだ。

涼音さんは小首を傾げている。

「小娘。東堂様が普通だとおっしゃるなら普通じゃ。口を挟むな」

それを聞き、涼音さんの目が鋭く細まる。

「なるほど。そういうことでしたか」

「そういうことってどういうことでしょう？」

「東堂さんの体質が本当であっても、一定の干渉は受けている、ということ。狐の都合のいいように認識を弄られている」

「な、馬鹿なことを！ 東堂様は最初から……！ 貴様、余計なことを申すな！ 濡れ衣じゃ！ 誤解なされたらどうする!？」

土下座スタイルから僅かに頭をあげた雅さんが涼音さんを睨みつける。

「この慌てよう……。やはりそういうことですね！」

「く、この猪眼鏡!! 東堂様！ 私は誓ってあなた様にはなにも！」

「二人とも、落ち着いてください。涼音さん。どういふことですか？」

「東堂様！ お考え直しく下さいませ！ この小娘の話など……っ！」

「雅さん、少し静かにして貰ってもいいですか？ ちゃんと話は聞きますから。涼音さん、お願いします」

「く……っ！ 東堂様……！」

「良いでしょう！」

涼音さんがくい、と眼鏡をあげる。

「わたしの考えはこうです！ 東堂さん、あなたは狐の精神干渉を受けています！ 何故なら、東堂さんが本当に普通の大学生なら、こんな状況で、そんなに冷静ではられないからです！ 昔、わたしの普通のクラスメイトが妖怪に襲われたときはもつとパニックになっていました！ あなたは狐に自分は普通だと思わされているのです！ 恐らくはその方が御しやすいからでしょう！」

雅さんに会う前からオレの認識はそれほど変わって無い。異変に対する向き合い方は変化したが、それは雅さんには全く関係のない、信乃ちゃんや律ちゃんとの一件があつたからだ。そもそも雅さんと会うのは久しぶりなうえに二度目だし。雅さんもそんな素振りは見せなかつた。

「オレは雅さんから特に何もされてません。根拠は……雅さんの要望を全部断っているからです。涼音さんの話では、妖狐は男を虜にし操り人形するようですが、特にそういうことはありません」

「ですから、部分的な干渉と言っています。きっとその体質があるからこそ、気づけないんです。東堂さん、目を覚ましてください！」

なんだこの女は。

いや、オレを案じてくれてるのは分かる。思い込みは強そうだけど、それだけ妖怪に対しての警戒心が強いんだろう。そしてオレを助けようとしてくれてる。

無下にはせず、一度考えてみようか。

とはいえ、オレは別に他人に「オレは普通だ」と主張して無理やり認めさせるつもりはない。周りがオレをどう思うかは自由だし、直接「お前は普通じゃない」って侮辱的に言っつこないなら別に。



「涼音さんがオレを案じてくれていることは分かりました。ありがとうございます。……ですが……雅さんからの干渉、ということは無いと思っております」

「ですからそれが！」

「違うんですよ。オレ、もともとこういう……マイペースな人間ですし、雅さんと会ったのは今日が二度目、しかも一か月以上も開いてます。それとも、その妖怪というのは、そんな短時間で人の認識を歪められるものなんですか？ だとしたらオレの根拠は揺らぐかと思えますけど……」

「そ、そうでしたか……。それは、確かに……」

さすがに妖怪でもそういうことは出来ないらしい。

「イノシシが。思い込みで儂をわるう言いおつて。恥を知れ恥を」

雅さんが小声で言っている。

「では東堂さんはその、普段からご自分のことを普通だと……？」

涼音さんが困惑したような表情を浮かべている。

「そうですね。普通だと思っております」

「おつしやる通りでございます。東堂様は普通の殿方。何も思い悩むとはございませぬ。私は……ありのままの東堂様を、お慕い申し上げます。……」

「狐、そうやって人の心の隙を……！ 貴様こそ恥を知れ！」

涼音さんが雅さんに厳しい声を叩きつけると、優しい表情でオレを見る。

そして穏やかに語り掛けて来た。

「東堂さん。わたしも同じです。幼い頃は自分は普通か否か、そんな疑問を抱き、悩みました。生まれ持った特異な才は人を孤立させるものです。自分には見えないものが見える。自分には感じられないものを感じられる。それだけで人は人を排し、孤立させます。わたしのこの容姿も、自分を偽り普通に溶け込むためのモノ……伊達眼鏡です」

涼音さんは何かを憂うように、哀し気な表情で眼鏡の縁に触れている。眼鏡自体は気に入っそう。

「涼音さん……」

なんか急に重い話になったな。

だけどその髪型と小物、レトロ過ぎて逆に浮いてると思う……。

でも、そっかあ……。

涼音さんも苦勞して来たんだなあ。

眼鏡と髪型で自分を普通に溶け込ませようとしている涼音さんと、かつて自分のアイデンティティを捻じ曲げて普通に潜り込もうとしたオレ。

確かに、今の話だけでも共感するところがあって、一気に親近感が湧いて来る。

「東堂さん……」

涼音さんが悲し気に目を細め、慈しむように微笑んだ。

「もし、わたしが自分を普通の大学生と言ったら、あなたはそれを受け入れてくれますか？ 霊能力を持ち、妖怪を認識し、戦う力を持つわたしを」

「それは……」

「そういうことです。霊能力を持つわたしと、まるで神仏に愛されているかの如く不思議な体質を持つあなた。似て非なる存在ではありますが、しかし普通ではないという最も大きな事実は確実に通じ合っています。そんなわたしたちですが今、遂に巡り合った。わたしたちは孤独ではないのです！」

ふ、と涼音さんが微笑んだ。

なんて人だ……。

さすがは神職、巫女さん。

渾身の演技を見せていた雅さんより、余程オレの琴線にクリティカルヒットしている。光の陽キャ……。まずい、語彙が……。

しかも色んな意味で『本物』。

思わず、吐露していた。

「涼音さん……。実はですね。オレ、前世の記憶があるんです」

「現世と幽世は表裏一体。そういうこともあるでしょう。わたしと同じような年頃でしように落ち着かれていますので、むしろ納得です」

なん、だと……？

「では、オレは転生者である、と？」

「それはわたしには分かりません。ただ、あなたがそう思うのなら、それで良いのでは？ 特殊な生まれや特異な自己認識は必ずしも社会に認められるとは限りませんが、重要なのはどのように生きるかだと思えます」

くい、と指先で伊達メガネを持ち上げる優等生然とした涼音さんに、オレは輝きを見た。

強い。

祓われる……！

「涼音さんは過去にそのことでいじめられたり、苦しい思いをされたことは？」

「もちろんあります。東堂さんも同じでは？」

「そうですね。いじめとは違いますが、苦しい思いはしたことがあります」

「そうでしょうか」

わたしも同じです、と言わんばかりに涼音さんは頷き、続けた。

「母はわたしが幼いころに亡くなりましたが、わたしには父という理解者が居ました。妖怪退治という生業、家業を選んだことは、父に誇れる自分で在りたかったからです。ちなみに、東堂さんは……？ ご家族はご事情を？」

「いえ、東堂の家族は皆、オレも巻き込まれた事故で亡くなっています。前世の記憶はその際に」

「お気の毒です……」

涼音さんが悼むように目を伏せる。

雅さんは明らかに変わり始めている流れを察し、オレと涼音さんを戸惑ったように交互に見ている。なんか蚊帳の外で可哀そうだなと思わないでもないけど、今は静かにしてもらえるとありがたい。

オレは続けた。

「妖怪退治というあなたの家業は、人の生活を守る気高い生業だと思います。しかしそれは回り回ってあなたを苛めた人を守ることに繋

がるかもしれませんが。そこに葛藤はありませんでしたか？」

「ありました」

即答。頷いた。

「当時のことは今でも覚えていますし、恨んでいないわけでもありません。今、偶然にも再会するようなことがあれば、多少の仕返しはするでしょう。当時もしましたけど。ですが先ほどもお伝えしたように、わたしは父や亡くなった母と……妹に誇れるわたしでありたかったです」

涼音さんが小さく笑う。

仕返しはしたのか……。

どんなことをしたんだろう。

さらっと凄いこと言うなこの人。うーん、強い人だ。

「オレもそうです。オレには理解者は居ませんでしたけど、だからこそ『かつて求めた理解者』にオレ自身が成りたいと考えています」

「素晴らしいお考えです。わたしはあなたを応援します！ よければ

……お、お友達になりませんか？ 良ければ……」

「勿論です。よろしくお願ひします、涼音さん。オレもあなたを尊敬し、応援します」

「よろしくお願ひします！」

涼音さんが嬉しそうに手を差し出して来た。

それ以上の言葉はいらない。オレもそう感じた。

オレは涼音さんの柔らかい手を握り返す。

雅さんが目をガン開きした呆けた表情でオレ達を見つめているのが横目に映る。

「あ……」

オレは思った。

——お父さんのこと、どう説明しよう。

## 巫女・妖狐3

いやあ、この人も良いこと言うなあ。

色々と修羅場をくぐってるみたいで、実感がこもった力説だった。気休め程度の気持ちで来てみたけど、良い出会いがあつて良かった。

妖怪退治を生業にしてるなんて明らかに普通じゃない自己紹介だったけど、自分が人と違うってことを受け入れて生きている……人の心の強さみたいなものを感じて、オレも嬉しくなった。

さて、お父さんのことをどうしよう。

涼音さんはここの巫女さん、娘さんってことらしいし、神主さん……多分、さつきの鬼がそうだと思うんだけど、吹っ飛んだんだよね……。雅さんの中に吸い込まれてたようだから、雅さんの中で生きてるよつていうのは、さすがにノンデリ過ぎてヤバイか……。

さつきの神主さんは明らかに人外だったし、オレだつて襲われた側だから仕方ないといえばそうなんだけど、どう説明したものかな。

あなたの父親は鬼で、オレを襲つて来た結果爆散しました。

そう言うしかないんだけど……

涼音さんの話だと、涼音さんにとつては尊敬に値する父親だったよ。うだ。だからもともとお父さんが鬼だったつてことは無いと思うけど、擬態してたら分からないか……。でもそうだとしたら、涼音さんが鬼とか魔人とやらの子供つてことになるんだよ……。半妖的な。

だからどうこうつてことはオレには無いけど、涼音さんはシヨック受けるんじゃないかな。自分が半妖つてことはさつきの話的にもかく、お父さんが人を襲うような存在だったつて言う事実。雅さんは……。鬪るのはどうかと思うけど、妖怪退治と言われたら納得できないわけではないし。

それよりもヤバイのは、お父さんとさつきの魔人が別人……たとえば神主さんに化けていたり、体に乗っ取つていたりした場合だ。本物の神主さんがどうなったのか、つていう安否の話になつてくる。他の場所にいるのか、それとも……。涼音さんがお父さんを探していたよ

うだったのも不安要素だよな。

「涼音さん。大切なお話があります」

涼音さんは仰々しく頷いた。

「分かります。連絡先を、ということですね？」

「いえ、違いますね」

「えっ、違うんですか？」

「違いますね……」

「連絡先の交換はしていただけない、と……？」

「いえ、そういうわけではありません。涼音さんのような方と連絡先を交換できることはオレとしても光栄です」

「！ 良かったです！ では、連絡先を……」

「いや、それは後で……」

……。

なんだろう。凄くがつついて来る。人間関係に飢えてるのかな？

「幼少期には迫害を受けてたらしいし、似たようなものを背負っている人を見つけれられて嬉しいのかもしれないけど……同業者っていないのか？」

妖怪退治を生業に出来るくらい魑魅魍魎が跋扈してるなら、同じような人が他にそれなりにいてもおかしくはないだろう。妖怪なんて古来から語られているわけだし、時代によっては国の中枢にそういう人達が何人も居たわけで……他にはいないってことは無いだろう。

涼音さんの口ぶりからすると、涼音さんのお父さんも退治屋ってことみたいだし、当然同じような人たちとのコネクションは持つてるはず。娘が孤立して苦しんでいることを知ったら、見かねて同業者を紹介するくらいはすると思うんだけど、交流とかってしたことないのかな？

それか……時代の流れの中で妖怪退治という家業が廃れていき、今ではもう涼音さん一家しか退治屋が残ってなくて、連絡も完全に断たれるくらい散り散りになってる？

いや、そうなるとその前提が崩れる。

妖怪退治が仕事として成り立たなくなるくらいに妖怪が減ったつ

てことだから、今も涼音さんが生業に出来ているってことがおかしくなる。涼音さんの家系が退治屋の中でも一際強力な力を持つていて、鈴院家だけが退治屋として残ったとかなら、業務独占ってこともあって稼げると思う。ただそうなると、涼音さんから格上扱いされてる雅さんの強さランキングの順位が跳ね上がることになるし、そんな雅さんが手も足も出ない魔人の強さが天元突破する上に、オレの体質がヤバイ。

どちらにせよ、それならなんでこんな田舎のそんなに栄えてない神社に居るのかって話にもなるし。この国にはもつと大きくて由緒ある神社が多くあるから、そういうところの偉い人になってないとおかしい。地元に思い入れがあつて残ったとかなのかな？

「あの、涼音さん？ あんまり手をにぎにぎされるとくすぐったいんですけど」

「あ、申し訳ありません……！ つい……」

「つい……？」

涼音さんがそわそわしながらオレの手をにぎにぎしてくる。

つい、で人の手をにぎにぎするのか……。そんなに人の温もりに飢えてるのか？

それとも男性の手が珍しくてってことなのかな。雅さんからそこをすごい擦られてたからオレも察してはいるけど。巫女さんならそっちの方がいいまであるんじゃないかと思うけど、そういうの関係なしにとんでもないセクハラだから怒るの分かる。

手を放す。

「お聞きしたいんですけど、妖怪退治を生業にされている方って他にもいるんですか？」

「いえ、わたしは聞いたことはありませんね」

……。

おや？

雲行きが……。

「それは……何故？」

「父の話によると、江戸時代末期から妖怪が姿を消し始めたらしく、第

一次世界大戦の頃にはほとんど絶滅状態だったとのこと。父も祖父や曾祖父から聞いたと言っていました」

「おや…………？」

「それで退治屋も廃れた、ということですか？」

「らしいですね」

…………

「生業、とは？」

全裸土下座の状態から頭をあげてオレ達を見つめている雅さんに問いかける。

「雅さん、実際どうです？ 今の話」

「…………。そこな娘の言葉は真にございます。我ら妖怪は徳川の世より数を減らし、大妖怪の類は残らず討たれております。例外は無く…………残されしは私の<sup>わたくし</sup>のような尾すら持たぬ非力なモノ、あるいは有象無象の類のみかと存じます。出来て…………闇夜に紛れ怪音を鳴らす程度のこと。人を害するほどの力はございませぬ」

雅さんがかつと目を見開くと、力強く言った。

「だというのに！ 妖怪退治を『生業』などと…………！ そこな小娘は東堂様を謀っております！」

「ええ…………？ 涼音さん、ホントですか？」

「う…………っ」

なんだその反応は。

マジで嘘を吐いていたのか。確かに二人の話をすり合わせるとそうなるわけだけでも。

えー、どこから嘘なんだ？

オレ、人間不信になりそう。誤解を招きかねない態度ではあったけど、瑠璃ちゃんつてめっちゃくちや誠実だったんだ…………。話せない事情も分かるし、嘘は吐かなかったし。

「ち、違います。違うんですよ」

「何がですか？」

「わたしが生業にしていると言いますか…………名乗っているというか…………。わたしが！」



「はい」

「わたしが妖怪退治を生業にすると決めたので、わたしは妖怪退治屋なんです！ わたしがそう思うならそれで良いんです！」

「つまり自称だと？」

「……。そういう考え方も……。出来なくはないかもしれませんが」

「そうですか……」

涼音さんがニヒルに笑う。

なるほど……。

さっきの「自分がそう思えばそう」っていう言葉に、そんな事情があったとは……。生き方は人それぞれだし、考え方自体は共感もしたけど……。そんな伏線回収の仕方はしないで欲しかったなあ。

雅さんが涼音さんを睨みつけて言った。

「おのれ、小便臭い小娘が。東堂様を謀りおつて！」

雅さんがオレのために怒ってくれている……。と思うんだけど、ちょいちよい悪い顔してたの見てるから、点数稼ぎのチャンスをしっかりと掴もうとしているようにも見えて、なんともな……。

「謀つてない！」

いや、事実として謀つてはいるよね。

「わたしは妖怪退治を生業にしている！ 狐如きが侮辱するな！」

「ならば言うてみい！ これまでどれだけのあやかしを祓った!?!」

「……」

無いんか。

「ほうら。思った通りじゃ。儂でさえ現世うつしよに出れば人型を維持できぬ

！ もはや祓われるほどのあやかしなど現世にはおらぬ！ 東堂様  
！」

「はい」

オレの方を向いた雅さんは、直前まで涼音さんを見ていた猛獣のような表情から一転させた。好きな異性が変な女に騙されることを心配している乙女のような表情に。

ここまで来ると感服するよ、オレも。

「こやつを、信じてはなりません……っ！ 私こそが真実をお伝え申

しております……っ！ 東堂様、どうか……っ！」  
めんどくせえ。

無茶苦茶だよ。

「人間の姿をしてるじゃないか！ 今!! それにわたしだって妖怪退治くらいしたことはある！」

「ふっ。これじゃから何も知らぬ小娘は……。儂が今、この姿を保てておるのは魔人を取り込んだが故のこと」

「魔人？」

魔人は涼音さんも知らないワードらしい。

雅さんはここぞとばかりに目を見開いた。

「かーっ！ 魔人の存在すら知らぬとは退治屋が聞いて呆れるというもの！ へそで茶が沸くわ！」

「く、狐エ!!」

「ほれで？ 言うてみい。どんなあやかしを退治したんじゃ？ お？」

「あの、ちよつと待つて貰つて良いですか？ 涼音さんさつき、クラスメイトが妖怪に……とか言つてましたけど、それを祓つたということではないんですか？」

「あ……。いえ、それは……」

「なんです？」

「その……あんまりムカついたので……」

むかついた……？

この人、もしかして。

「もしかしてそのクラスメイトって、涼音さんを迫害していたっていう……？？」

「……」

嘘だろ。

いや、まあ、それ自体は仕方ないのかなあとも思うけどね。

「じゃあ、涼音さんが妖怪をけしかけたってことですか？」

「違います！」

違うらしい。

それはそうか。

妖怪自体がもういないって話だったし。

「ただ、わたしの式神でそれっぽいのを作って……」  
なるほど……。

「けしかけた？」

「けしかけたというか……塾帰りの夜道で一人の所を見計って、ちよつと驚かせただけです……」

それをけしかけたって言うんだよ。

この人、狐と同じことやってんじゃねエか。  
やべエよ。

「もしかして、さっき言ってたちよつとした報復っていうのはそれですか？」

「はい……」

報復と妖怪エピソードを同時に発生させるな。

でもそうになると、いなくなったらしい妖怪を涼音さんはどこで認識したんだろう。

「じゃあ妖怪を祓ったというのは……？」

「それは本当です！　こう、ちっちゃく光る炎みたいなのとか、小指の爪くらの大きさのミドリムシみたいなのとか。その辺に浮いてますので」

「そりゃあ、妖怪にもなれとらん有象無象の類じゃ。やや子であろうと触れるだけで祓える程度の木端よ。まさかとは思いますが……。小娘、おのれはそやつらを指して『退治した』など言うてるんじやなかなろうな？　ん？」

「く……っ」

涼音さんが悔しそうに顔を顰める。雅さんが徐々にどや顔になっていく。

雅さんのターンが来ているようだ。

「じゃあ、普通じゃないものが見えるというのは確かなんですね」

「そうですとも！　わたしには妖怪を視認する力があるんです！」

涼音さんが自信あり気な言葉を聞き、雅さんは白けた表情でこう

言った。

「まあ、木端とはいえ『視えて』おるんなら眼力があるのは確かじゃろうが……」

そうなんだ……。

前提が狂ったな。考え直さないと。

雅さんの話と涼音さんの反応を纏めると……。

涼音さんは自称『妖怪退治を生業にしている』というだけで、実際に妖怪退治をしたことはないし、見たこともない。

妖怪は昔いたけど現在では滅びていて、残っているのは、雅さん的には妖怪とも呼べない有象無象のみ。

妖怪の滅びに伴い、妖怪退治という生業も廃れ、今では存在しない。そんなところか。

天狗っぽい魔人の言っていた『最後のあやかし』ってのはそういうことなのか？

雅さんが言うような有象無象なんかじゃなく、最後に残った『妖怪』。それが雅さん……？

なんか話が大きくなって来た。

「なるほど……。雅さん、補足ありがとうございます」  
「恐悦至極でございます……！」

へへー、と雅さんが頭を下げる。

いちいち大げさだけど、もう気にしないでおこう。

「二人の話だと、妖怪そのものがもういないってのは共通認識でしたよね？」

「左様でございます」

雅さんは土下座の状態から体を起こし、正座の体勢でオレをうつとりと見つめて来る。胸元に手を置き、可愛らしく体を縮める所作をつけて。

徹底してるなあ……。

「いるんですけど……？　まあ確かに、この狐のような本格的なのは初めて見ますね」

「じゃあ、雅さんって何者なんです？」

「私わたくしは……か弱き妖狐に過ぎませぬ」

「嘘だ！ 貴様のようなか弱い妖狐がいるわけが……！」

「落ち着いてください。さつきから思ってたんですけど、涼音さんって雅さんにめちやくちや強気ですけど、大丈夫なんですか？ 初めて見るちゃんとした妖怪で、しかも雅さん、強いんですね？」

「ここは神域ですから。魑魅魍魎はここでたいした力を振るうことはできませんし、わたしは力を振るえば何倍にも強くなれます。強力な妖怪相手には防衛機能もあるらしく……」

「へえ、そうなんですか……」

防衛機能……？

防衛機能……。

ふーん……？

「らしい、というの？」

「はい。昔からこの神社の中では妖怪を……」

「妖怪にもなれておらぬ有象無象じゃ。纏めるでない」

「うるさい！」

雅さんが茶々を入れ、涼音さんが怒る。

仲が悪いのは分かったから、せめて今はスムーズに話を進めて欲しい。

「妖怪を！ 見掛けなかったので、どうしてかなと思ひまして、父に聞いたんです。もう何百年も前のことになりましたが、ご先祖様が神様の力をお借りして境界を作ってくれたらしくって。それが今も機能している、父は言っていました」

へえ。人の造ったものが何百年も残るといふのは普通に凄いな。

というか、神様っているんだ……。神様の力を借りたってことにしただけの可能性もあるけど。

雅さんがちよくちよく言っている『御柱』っていうのもなにかの神様のことなのかな。

「なるほど。じゃあ親の仇みたいに雅さんに接してたのは、特に何か根拠があるわけではなく……」

「根拠なら在ります！ 本を読んでたくさん勉強しましたから！ 妖怪、特に狐は質が悪いんですよ！ 古事記にもそう書いてありました！ それに、わたしは妖怪退治を生業とする者として、絶対に祓うという義務があります！」

あ、頭でっかち……。

まあ、それ以上は良いかな。

涼音さん側の事情はある程度分かった。

要は涼音さん、初めて見る妖怪を相手にとんでもなく興奮してたんだ。

雅さんへの態度は、妖怪は凄く悪いモノっていう思い込みと……妖怪退治に対しての理想や気負いみたいなものが重なって、敵意が爆発的に膨れ上がったからってとこかな。

よ、妖怪!? しかも妖狐！ 大物だ！ 遂に出会った！

あ、男の人が襲われてる!? 助けなきゃ!

お父さんいないし変なこと起きてるけど、だいたいこの狐が悪いんだろ!?

妖怪退治デビュー戦だおらあ!

あれ? 男の人の認識が変? それ本で読んだことある! 妖狐の得意なやつだ! おのれ妖狐ゆるさん!

ようやく掴めたよ……。

疲れるなあ。

次は雅さんの事情を聞いて、必要なら涼音さんに見逃して貰えるように説明できるようにしないとイケない。

お父さん、神主さんの話はひと段落つけてからにしよう。じゃないと多分拗れて收拾がつかなくなる。

「しかし、この狐は一体なんなんですか? 東堂さんも、か弱い妖狐なんて戯言は信じてませんよね?」

「まあ……」

「そのような……っ! 東堂様……、私は……っ!」

雅さんが悲し気にしなを作り、土下座状態で顔を伏せた。

「雅さん。オレもずつと言っていますけど、ちゃんと事情を把握しないことにはどうしようもありません。力ある妖怪が滅び、妖怪退治をする人も居なくなったらしい現代で、あなたは何をされているんです？ 妖怪に詳しいらしい涼音さんすら知らない、魔人とはなんですか？」

「……」

雅さんは動かない。

何か考えてるのかな。

「雅さんは魔人に狙われているんですよね？ どうして狙われているんです？」

「東堂様……っ！ ど、どうかお約束を……！ わたくしをお傍に置いてくださると……っ！ どのようなことでもいたします……っ！ どうか……っ！」

「ごめんなさい。約束は出来ません」

「そんな……っ！」

全裸土下座をしている雅さんが震えている。演技かどうかは分からないけど、真に迫るものはある。

罪悪感はあるけど、さすがに全貌が分からない約束は出来ないよ……。

「ここまで言いたがらないってことは、相当な厄介事なのかなあ。」

「あの……東堂さん。ここまで言ってるんですし……」

涼音さん？

なんであなたが惑わされてるんですか？

きつと根が良い子なんだろうね。

「東堂様……っ」

「雅さん……。オレは出来もしないことを出来るといいたくないですし、やるかも分からないことをやるとも言いたくありません。出来る範囲でなら協力はしますが、それ以上は出来ません。これは何があっても変わりません。そして……もう充分、誠意は見せたつもりです。申し訳ありませんが、これ以上このままならオレは失礼しますよ」

「お、お待ちくださいませ……っ！ お待ちくださいませ！ 東堂様

！ 東堂様……っ！」

立ち上がったことでオレの本気が分かったのだろう。

雅さんが慌てて顔をあげ、座位のまま足を這いずり、オレに縋りつこうと手を伸ばす。

「東堂さん……」

涼音さんが切なそうな表情でオレを見て来る。

なんでオレが悪者みたいになってるのか不思議だ……。さっきまで罵り合ってたのに。

立ち止まり、雅さんを見る。

雅さんは観念したように話し始めた。



## 巫女・妖狐 4

「わたくしは住処を追われたのです……」

ぽつりぽつりと話し出した雅さんは悲痛な表情を浮かべている。

それも演技なのかは分からないけど、ひとまず信じてみようとは思ってる。違ったらもう義理は果たしたということで、後のことは関与しないけど。

「住処というと、以前お会いしたあまり榮えてはいない……趣のある神社ですか？」

「はい……」

「狐が神社に住んでいた……？ まさか、お稲荷様ということでは……」

「涼音さん。今は雅さんの話を聞かせてください。お願いします」

「あ、すみません……つい……」

「そうじゃ、おのれは黙つとれ小娘」

「雅さん」

「も、申し訳ございません……」

未だかつてないくらい面倒な二人が同時に出会った上に犬猿の仲間なんて辛いよ。間にいるオレが。

……。

今日、オレがここに来なかったらどうなってたんだらう。この二人。

涼音さんが来るまで雅さんが無事だったか分からないし、父親っぽい魔人を相手に涼音さんがどう対応したのかも分からない。思えばオレが勝手にあの神主さんが涼音さんの父親だろうと推測してるだけだから、実際は違う可能性もある。さすがにそこは合ってると思うけど……。

雅さんの危機に涼音さんが間に合ったとして、そのとき、涼音さんはどう対応しただろう。一緒に雅さんを退治するのか、それとも雅さんを庇って魔人を相手に戦うか……。

考えてもしようがないけどね。

「ああ、そうだ。忘れていました。涼音さんにオレと雅さんの関係を伝えておきます。といっても、以前、山で迷子になった際に助けて貰った以上のことはないんですけど……」

「それは狐が東堂さんを迷わせたのでは？」

「しとらんー！」

「分かってますよ」

「東堂様……っ！」

「はい。では続きを聞かせてください」

「……」

雅さんは口を開き喋ろうとしたが、思い留まったように口を閉じた。

なんだ……？

「雅さん？」

「も、申し訳ありません……。あのときのことを思うと涙が……」

辛そうに掌で顔を覆った雅さんを見て、オレも胸が苦しくなる。

そうだよな……。

どういう事情かは分からないけど、家を追い出されたってことなら哀しく無いわけがない。それに、ここでは酷い暴行を受けていたわけだから、もしかしたら家から追い出されたときも暴行を受けたのかもしれない。

気丈に振舞っているだけで、雅さんもつらいのかもな。

……演技かもしれないけど。

オレのせいで、みたいなこと言ってたし。オレを刺激しないような伝え方を考える時間稼ぎかもしれない。

いや、一度しっかり話を聞くと決めた以上はしっかり受け止めよう。

「辛いことを思い出させてしまったようで、申し訳ありません。ゆっくりでいいですよ」

「狐……」

涼音さんが同情しているようだ。しかもなんかそわそわしている。トイレに行きたくなつたのかな？

日が傾き始めてるからオレもなあ……。上着がなくなっただけからな……。

「……。話は随分と遡りますが……」

雅さんが話し始めた。

「あれは300年以上も前のこと……」

めちやくちや遡りますやん……。

想像以上だった。

「妖怪が次々に姿を消し始めたのでございます。当時名の通っておりました大妖怪から、弱小妖怪まで、問わず。当時、わたくしは生じたばかりの子狐同然でございましたゆえ、詳細は御柱よりお聞きしたことでございますが……」

御柱って何者なんだろう。

気になるけど、話を聞いていればいざれ分かるかな。

「妖怪とは多くが群れることのない個の者ゆえ、多くの妖怪が姿を消してようやっと、残された妖怪たちはその事実に気づき始めましてございます。初め、残りし妖怪は人の仕業と考えておりました。古き時代、わたくしの先達である『九尾』を封じたような輩が、再びあらわれいでたのだと……。しかし人の世にそのような噂は無く……。詳細を掴めぬまま、妖怪は次々に姿を消してゆきました」

それが涼音さんも言っていた、江戸末期から妖怪が消えていったつていう話か……。

「名のあるあやかしの悉くが姿を消したころ、それは現れました。あのときのことは忘れませぬ……。わたくしはそのとき、兄弟と共に故郷の山で木の実を食<sup>は</sup>んでおりました。食い飽きた味……。そう思っておりますが……。今となってはもはや食むことの出来ぬ……。忘れがたき味でございます……」

「雅さん……」

「狐……」

「わたくしは驚きましてございます。わたくし共の前に現れたそれは、九つの尾をもつ化生の姿……。わたくし達妖狐がおしなべて憧れる大妖怪の似姿でございました。わたくし達は眷属にしていたきた

く近づき……瞬きの間に、兄弟妖狐が滅されましてございます。運よく生き残ったわたくしは命からがら逃げ惑い……。わけの分からぬうちに故郷の山を飛び出した折、故郷の山を支配しておりました大妖が……滅されたことを悟りました」

気配が消えた、みたいな話なのかな……。

九尾の姿をしたモノっていうのが魔人なら、妖怪が数を減らしたのは魔人の仕業だったってことなのか……。

「山の主の庇護を失ったわたくしは、人里に野狐として紛れ……幸いにも、わたくしを哀れんだのか、物好きな人間より施しを受け、生き延びることができました。ございます。ですがあるとき、旅の祓い屋に目を付けられ……」

當時を思い出しているのか、雅さんが悲し気に目を伏せた。

「わたくしは度々住処を変え土地を移し……故郷の在処すら忘れるほどの時を経たころ、人化の術を修め、男を喰らう妖狐へと至りました」それは性的につてことだよね？

殺してないんだよね？

「殺したのか……！」

涼音さんが突っ込んだ。

だろうね。

「殺しておらぬ！　ようやと一人前になったばかりのころじゃ！　下手に騒ぎを起せば祓われるじやろう!!　もうおのれは黙っておれ！」

「まあ、落ち着いて。どうぞ、雅さん。続けてください」

しかしさつきまでしんみりと話していたのに切り替えが早い。

妖怪だからこそその切り替えの早さなのか、こういう態度が人間の心を打つと知っているからこそその演技なのか……。分からないな。

「わたくしのこの身は男からたいそう生まれ、以後は名のある家の主の妾や妻として過ごしましてございます。しかしながら、決して好んでのことではありませんね……。わたくしのようなあやかしが生き残るすべは他になく……。まこと、苦しゅうございました……っ!!

東堂様……っ！　わたくしが恋慕う殿方は長き時の中、東堂様ただ

お一人でございます……っ！　ようやつと出会えた、まことの……っ！

胸に手を当て、切なそうにしなを作りながら身を乗り出し、オレに訴えかけてくる雅さんにオレはこう言った。

「分かりました。続けてください」

さすがにそれは嘘だよ……。

初対面するとき、ノリノリで誘って来てたし、さつきも合意でヤツたつて言ってたもの。あの言い方は他の男の人相手でも、間違いなく雅さんから誘ってる。

「やはり妖狐……伝承と同じか……」

涼音さんが答え合わせをしている。

「慰み者として苦しき日々を過ごしていたある日、再び『九尾の似姿』がわたくしの前に現れましてございます。わたくしはあまりの恐怖に我を忘れ、必死に逃げ惑い……気づけばとある寺の前におりました」

寺。

神社じゃなく？

「異変を察したのか、老いさらばえた坊主が姿を見せましたが……坊主は口が利けぬのか、何も言わずわたくしを追って来た『九尾の似姿』の前に……。わたくしはあまりの恐怖にその場を離れましてございます。坊主のその後は、分かりませぬが……。今なお、あの坊主には深く感謝しております」

ホントかな……？

これ幸いと逃げただけじゃないのかな……。

「江戸時代末期に妖狐と戦ったお坊さん……。それって伝承の……」

ちら、と涼音さんを見る。雅さんも少し鬱陶しそうに涼音さんを見た。

オレと雅さんから視線を受けた涼音さんは、慌てたように口元を隠す。

雅さんへと視線を戻した。

雅さんが悲し気に目を伏せる。

「わたくしは再びすべてを失い、傷だらけのまま放浪し……やがてある土地に辿り着きましてございます。東堂様と巡り合った狭間の地……」

雅さんがオレに熱い視線を送って来る。

「そこにおわしたお方こそ、『御柱』でございました。『御柱』はかつて『古き獣の神』と畏れられし、あらゆるあやかしの祖とでも言うべきお方であらせられました……この国の始まりのとき、人の手により討たれ……現世と常世の狭間にて長き眠りにつかれていらしたようでございます」

……。

スケールがでかくなって来たぞ……。

口を挟む気は無いんだけど、そのくだりっているのかな？

何で魔人に狙われてるのか、魔人はどういう存在なのか……。それを教えてくれればそれでいいんだけど……。

「波長が合ったのでございましょうか……。『御柱』はわたくしが『御柱』の下に身を寄せることを許してください、こう申されました」

——『魔の世の人』があやかしを滅ぼし、現世への侵食を始めておる。あやかしを集め、迎え討たねばならぬ、と。

『あやかし』とは『魔の世』と『現世・常世』を別つ壁。人の世でいうなれば、おぞん層のようなものでございましょう」

おお……。

横文字が出てきた……。

「しかし『御柱』は封じられ動けず、微睡の中を揺蕩う身。わたくしは『御柱』に代わり、現世に残るあやかしを召集するという命を賜りましたが……。時折、狭間へと流れ着くモノや迷い込む人の子より、人の世の変遷と……。あやかしが滅びたことを知りましてございます」

……。

なるほど、分かんない。

合ってるか分からないけど……。

妖怪って言うのは人の体で言うところと垢みたいなもので、あり過ぎると困るけど、無いとそれはそれで困るって感じなのかな。

ただちよつと引つかかるんだよな、今の話。

雅さんがその狭間の地っていうところに来たのが徳川の時代。江戸時代の末期。涼音さんの話だと、妖怪が絶滅したのがだいたい第一次大戦の頃。

その間、雅さんは何をしてたんだ？

時間の流れが違う……にしても、長すぎる。

もしかして『御柱』からの勅命、サボってたんじゃない？……。

「魔人共に妖怪が滅ぼされ、現世より『壁』は消え、もはや世に残る妖怪はわたくしのみとなつて久しく……しかしわたくしと『御柱』が在る限り、最後の一線は越えられませぬ。ゆえにわたくしと『御柱』は、時折『狭間』に迷い込む魔人共を確実に討ち取り帰さぬことで『狭間』の存在を隠し通しておりました。『狭間』であればわたくしの力は飛躍的に強くなりましたゆえ……。しかしあるとき『御柱』は前触れなくそのお姿を隠され、『狭間』の結界が破れましてございます。なにゆえかは……」

雅さんが目を逸らし、言い淀む。

『狭間』が浮き彫りとなったことで、魔人共は群れとなり、次々と攻め込んで参りました。わたくしも応戦いたしましたものの、多勢に無勢……。もはや生き延びるには『狭間』を捨てる他なく……。狐として身を隠しておりましたが、『御柱』の居場所を探るために捕らえられ……。今に至ります」

なるほど……。

理由は不明だけど、雅さん達を隠していた結界がある日壊れたことで場所が特定されてしまい、攻め込まれたのか。

そして雅さんが狙われているのは、本当の意味で最後の妖怪である『御柱』という存在を探すため……。

世界の壁とか『御柱』だとか、そもそも魔人がどういう存在なのかとか、魔人を放置したら人間の方はどうなるのかとか、分からないことが新しく増えたり、分かったようで分からないままだったり、色々と情報過多だけど、雅さんが危険な状況に置かれているって事だけは理解した。

……。

スケールがでかい。

明らかにオレとは住む世界が違い過ぎる。

この一年というか、直近の半年間に色々あったけど、一番スケールが大きいんじゃないかな。

なんでそんなにスケールが大きいくせに、これまでの異変の中では影も形も見せなかったのか……これが分からない。

茶々ちやんと瑠璃ちやんなら知ってても良さそうなもんだけど、そんな素振りは一切なかった。

涼音さんは魔法なんて知らないと言う。

これ、ホントに同じ世界……同じ星の問題なのか？

まあ、飽食を嘆かれているこの国から少し離れた国で飢餓に苦しんでいる人がいるっていうのが、この現代社会の現状だ。自分の周りでは見えないことが、別の場所では当たり前前にあるっていうことだろう。それは異変も社会問題も同じってことなのかな。

たとえるなら……魔法少女がこの国の少子高齢化問題で、今回の件が地球温暖化問題、みたいな。

分からないことだらけだけど、雅さんが一気に態度を翻した理由には納得がいった。

どこまで本当かなのかは結局のところ分からないけど……オレは信じることにする。

その上で……、雅さんの頼みを聞くかどうかはまた話が別だ。もちろん無下にはしたくないけど……。

「東堂様……。」無理を承知でお願いいたしたく……！　どうかわたくしをお傍に……っ！　どうか……っ！」

雅さんは額を地面に擦りつけている。

そう言われても……。

オレにあるのは、正体不明の体質だけ。オレ自身でさえ詳細を把握できていない上に、能動的に使える気配は全く無く、どこまで通用するかも定かじやない、不可解な体質があるだけだ。

雅さんはオレのそんな体質を当てにしているんだろうけど……。



これが反社会勢力が相手とかなら警察とか弁護士を呼ぶけどさ。どうしようもなくないか？

「少し考えさせて……いえ、多分考えても答えは変わらないと思うので、今お伝えします。心苦しくは思いますが」

「う……あ……。と、東堂様……っ！」

雅さんが顔をくしゃくしゃにして、駄々っ子のように突っ伏した。く、苦しい……。

これはたぶん、結構マジな奴だ。

重いよお……。

雅さんがどれほど苦しんでいるか、どれほどの苦境に立たされているのか、多少は理解したつもりだ。

彼女は本当に苦しい状況にいる。

住み慣れた住処を追われ、長く一緒にいた存在を失い、彼女が生きた時代から比べてあまりに変わり果てた現代に、たった一人放り出された。そして、自分ではどうしようもない相手から命を狙われている。

本当に苦しいと思う。

雅さんは今、物凄く不安で心細くて、どうしようもないほどに恐ろしい思いを抱えていると思う。

だから藁にもすがる思いで、オレに取り入ろうとしているんだろうな。

自分では歯が立たなかった相手を問答無用で爆散させたオレの体質に最後の希望を見出して……。必死に。

御柱さんから言われた仲間探しの命令を聞かなかったっぽいのも、単純に外に出るのが怖かっただけなのかもしれない。外に出るとまた狙われるかも……。そう考えて動けなかったのかも。

理解した。

理解したからこそ、雅さんの願いは受け入れられない。

雅さんの願いを引き受けると、オレは支援者じゃなく、当事者になつてしまう。今までの異変とは全然違う状況だ。

たとえるなら……知人にお金を貸すなんてレベルを超えて、借金の

保証人になるみたいなものか。さすがにそれには領けない。

オレにもオレの生活がある。

それはオレの『出来る範囲』を越えている。

それほどまでに……自分の生活をかなぐり捨てられるまでに他人に肩入れするには、損得では計れない強い感情が必要だ。

なにかって言えば、愛だよ愛。

それか、えぐいぐらいの精神的依存でも良いけど。

雅さんはオレにそれを抱かせるために、徹底した演技を続けていたんだろう。だけどオレが痺れを切らして帰ると言ったから、泣き落としをするしかなくなつた。そんなところか。

いやあ、可哀そうだな、ホント。不憫すぎる。

妖怪だからとは言い難いレベルだ。

……。

オレが好んだ物語の主人公なら二つ返事で了承したんだろうけど、さすがにオレにそれは無理だ。

「雅さん。オレにはあなたを守ることはできません。それはお伝えしておきます」

恐る恐るといったふうに顔をあげた雅さんの表情が絶望に染まる。

「一緒に対策を考えましょう。いなくなつた御柱さんを探すとか……心当たりはありませんか？」

「と、東堂様……っ！」

雅さんが表情を明るくするけど、オレは相談に乗るっただけだからね。マジで。

「……？」

オレの横から涼音さんが前に出た。涼音さんは雅さんの傍に寄りとしやがみ、雅さんのむき出しの方に手を乗せる。そして優しい声音でこう言った。

「妖怪退治を生業とするわたしと、妖狐であるお前。わたし達は決して相容れぬ立場だけど……わたしも協力する。なんか……見てられないよ」

涼音さん、優しい。

さつきまで狐狐って雅さんのことを目の敵にして罵ってた人と同一人物だとは思えない。

「いや……おのれに同情されても別に……」

おい、狐。

聞こえてんぞ、止めろ。

それはそれとして、やっぱり演技は入ってたのかあ……。まさに狐というべきか。ひとまず、ちゃんと断っておいて良かった。

「ん……う？」

少し離れた藪から何か音がした。聞こえたのはオレだけじゃなかったようで、雅さんと涼音さんも同じように反応し、オレ達はほとんど同時に藪を見る。

がさがさ、と葉擦れの音が大きくなる。

「雅さんの尻尾の毛が逆立ち、藪を睨む。」

涼音さんは懐に手を入れて何かを探すように動かし、探し物が無いことに気づき、泣きそうな表情を浮かべた。すみません。

「あー？ なんだあ……う？」

男の声だった。

どこかで聞いたことのある……。

藪の中からのつそりと人影が立ちあがった。

……。

全裸だ。

全裸の男が藪の中から……。

「お父さん!? ちよ、やだ！ なにしてるの！」

「涼音？ あ、なんでオレ全裸なんだ!？」

良かったあ。生きてたよお父さん。

## 巫女・妖狐5

全裸で現れた男性を、オレは知っていた。

さつき鬼に変貌した人だ。涼音さんの反応的に、彼は涼音さんの父であり、この神主さんで間違いないと思う。

おかげで分かったことがある。

それは、神主さんとあの鬼の魔人が完全に別の存在だということだ。

涼音さんの話だと、お祓いの予約は確かにされていたらしい。そして、それを受けたのは涼音さんの父親である神主さん。

そしてあの鬼は最初、オレがお祓いの予約をしていることを知らなかったようだった。

ここから分かるのは、あの鬼と神主さんが情報の共有をしていないってこと。オレを帰らせるために単に惚けてた可能性もあるにはあるけど……。

事情をそれなりに知ってそうな人の登場に、オレは正直、安堵した。

今回の件、分からないことがまだまだ多すぎる。

魔法少女の二人の件は、葵さんが不確定要素として大きすぎるが、その葵さんも魔法少女の二人と関係を持っていたから、2人からの話で全貌を掴むことが出来た。

だけど今回の件、オレ達3人の視点が錯綜し、前提が何度も覆されるせいで全貌がまるで掴めない。しかも涼音さんと雅さんの二人は、意識的・無意識的問わず、主観で自分たちに都合の良いように話を捻じ曲げている。涼音さんは生業の件だったり、雅さんはオレへの好意のことだったり。雅さんの話を疑いたいわけじゃない。むしろ信じたい。だけど2人の主観があまりに強すぎて、どこまでが真実なのか本当に分からない。

それに、雅さんに関していえば、彼女はまだなにか……オレ達に知られると都合が悪いことを隠してる。

そもそも、なんで雅さんはこの神社の中にいた？

雅さんの話だと、魔人に捕まったという話だった。

それを信じるなら、雅さんはここに居る理由は、魔人に連れてこられたから。そういうことになるわけだけど……。

なら、魔人はなんで、捕まえた雅さんをここに連れて来たんだ？

この神社には本物の霊能力者が在籍していて、結界なんてものまで張ってある。

そんな場所を、どうして魔人は重要人物の拉致先として選んだんだ。邪魔が入るなんて分かり切ったことだろう。

理由として考えられるのは、妖怪が力を発揮できないという結界の存在かな。

つまり、魔人は雅さんの力を封じたかった。だとしたら魔人には、雅さんの力を封じないといけな理由があつたのか……。

それとも単に念のため？

分からない。

雅さんの話には不可解な点が多い。多すぎる。

オレの視点、雅さんの視点、涼音さんの視点。

あまりに立場が違うせいで、情報が錯綜している。

まるで人狼ゲームをしているみたいだ……。

全員が嘘を吐いていないという前提で、3人のうち、2人以上の視点で合致する情報をピックアップすると……大きく3つになるのかな。

1つ目は、雅さんと御柱さん以外の妖怪が絶滅したということ。その結果、退治屋という生業が廃れ消えたこと。

これは雅さんと涼音さんの話が重なってる。

2つ目は、涼音さんが本物の霊能力者だということ。

これも雅さんと涼音さん。

3つ目は、雅さんが魔人と敵対していて、かつ魔人と雅さんの間には、大人と子供くらいの力の差があるってこと。

これはオレが実際に目の当たりにした状況と、雅さんの話が重なる。

この情報過多で混沌とした無茶苦茶な状況の中、オレが確かな情報として信じられるのはこの3つになる。

重要な決断をするにはあまりに情報が不足している。  
なんでこんなことに……。

オレは……気休めとはいえお祓いに来ようと思うくらいには、厄介事の連続に辟易していた。

なのに、御祓いに来た先でまた厄介事に巻き込まれた。

しかも、1か月ぶりくらいに再会したうえ、まだ会って2回目ではなく、言っていることが本当かどうかも分からない曰くつきの女性（妖怪）から、自宅に居候をさせて欲しいとお願いをされている。

オレは東堂家の遺産で食ってるだけの、まだ働いてもいない二十歳そこそこの大学生です。

それなりに儲かっている弁護士とコネがある以外は、社会的地位や権力を持っていない。警察を呼ぶ、救急車をお願いするなど、全国民に許されている範囲以外では、国家権力を使うこともできない。

しかもオレは別に『異変』の中のコミュニティに属しているわけでも無いし、コネを持っているわけでもない。

雅さんの願いを受け入れたとすると、オレはこの先、それこそ雅さんが死ぬか自分の意思で傍を離れるまでの間ずっと、雅さんを襲う困難のすべてを肩代わりすることになる。

そうなったとき、オレには正体不明の体質以外に身を護る手段が存在しない。

魔法組織や超能力者の集団・秘密結社、異能を取り扱う国家機関……そういったものがオレを守ってくれるわけでもない。

可哀そうな犬猫を子供が拾ってくるのは訳が違う。

可哀そうだから飼ってあげようよ、助けてあげようよ。可哀そうだから保護しました。良いことしたなあ、で終われるような話じゃない。

犬猫の場合であっても、最終的に責任を取るのは保護者だ。

だけどオレは天涯孤独の身。何かあったとき、ケツを拭いてくれる保護者が居ない。行動の結果生じる責任は、すべて自分で取らないといけない。

オレの立場は『犬猫を拾って来た子供』の位置には無い。子供が犬

猫を拾って来た『保護者』の位置にある。

どれほど犬猫が可哀そうだったかという事情を子供から説明されても、『保護者』としては苦悩するだろう。

よほど余裕がなければ飼育費用は生活の負担になるだろうし、体調管理やエサの準備、糞便の世話など、日常の作業は増える。アレルギーなどの不安要素を解決する必要もある。そもそも動物を飼える住居じゃないことだってある。

しかも今後、正体不明の不審者が『その犬猫は殺します』と暴力的な手段も厭わず家に押しかけて来ることが分かっている状態だ。そしてそれらに対応しなくてはならないのは他の誰でもない、オレ。

雅さんの願いを受け入れるということは、そういった大小問われない負担と責任のすべてを理解し、受容するということだ。

なんとかなるだろう、なんて気持ちで引き受けられる話じゃない。

これからもオレの生活は続いていく。オレは今まで通り大学には通うし、異変の中に生業を見いだせない以上、オレはこれからも一般社会の中で生きていく必要がある。

そこにオレの異能の有無は関係ない。

雅さんを受け入れるということは、これまでの生活の中に新たな責任を抱えるということだ。

もしかしたらこれまでの生活が一変するかもしれないし、近隣住民にも被害が及ぶかもしれない。そこまで考えれば、軽はずみな返事は出来ない。

今、雅さんの言葉を表面的に受け取り、その頼みごとを引き受ける人がいたとしたら、その人は……ちよつと情熱的過ぎるんじゃないかと思う。

とはいえ、情に流されたらしい涼音さんを否定する気はない。

むしろ好ましく思う。年齢の割には直情的だとは思うけど、彼女はきつとまだ純粹で、損得を省みない情熱があるってことだと思うから。

そしてもしも涼音さんが、今オレが考えていたようなりスクの全てを踏まえたうえで、雅さんに協力することを瞬時に決断したのだとし

たら……まさに巫女の鑑。これまでオレが出会って来た人達の中で、涼音さんは最も気高い人である、と認識を改め、最大の敬意を表したい。

雅さんのことは不憫だと強く思うけど、どうしてもオレにそれは出来ない。

安易に引き受けた結果、顕在化した負担と責任に耐えきれず「やっぱり無理でした。出て行ってください。さようなら」と途中で見捨てることの方が悪質だと思うからだ。そして「知らなかった、こんなことになるなんて考えもしなかった」と投げ出すのはあまりに無責任だし情けない。そんな言い訳は通じない。だったら最初から引き受けるなという話になる。

それにもかしたら、それすらも出来ない状況に陥るかもしれない。どうしようもない状況に陥ったとき、保護者がおらず助力を願えるような組織・機関との繋がりを持たないオレを待っているのは、逃れられない破滅だけ。

借金の保証人のようだと考えたのはそういうことだ。

しかもどれくらいの額かも分からない上に、会ったばかりの人。心苦しいけど、領けないよ。

一般的にこういう状況が生じたとき、人はさっさと雅さんから距離を置くんだろうか。それとも、悩むことなく雅さんを受け入れるんだろうか。

分からないけど……、今はどちらも選べない。

もう少し詳しく話を聞いて、オレに何が出来て何が出来ないのかを把握しておきたかった。

その結果、雅さんがやつぱり、もうどうしようもないくらいに八方塞がりの状態に陥っていることが分かったなら……。

まあ、しゃあない……。

何が起こるか分からないけど、ギリギリまで付き合おう。そう思っていた。

だから、ある程度事情を知っていそうな大人の登場はともありがたい。本当にありがたい。多角的な視点で情報の精査が出来る。



外出先で全裸の男性に遭遇するなんて事案で、これほどまでに安心感と希望を抱けるなんてことは今後二度と無いだろう。

……。

この人も涼音さんみたいな立ち位置だったらどうしよう。さすがにオレも倒れるかもしれない。帰りはしないけど。

「お父さん！ とりあえず隠してよ！ 信じられない……っ！」

涼音さんが嫌そうに顔を背ける。

お父さんは慌てて股間を両手で覆う。少し弛んだお腹が揺れる。

……。

見えて辛いものがあるよね。

「こんにちは。神主さんですよ？ オレは東堂と申します」

「ん？ あ、ああ……。こんにちは……。？ 東堂さんというと、お祓いのご予約をされていた東堂さんでしょうか？」

「そうです」

どうやら本物の神主さんらしい。

神主さんが言う。

「これはこれは……。わたしは神主の鈴院と申します。申し訳ありません、こんな格好で……。わたしもなにがどうなっているのか……。ん……。？ なっ……。！」

神主さんが雅さんに気づき、慌てて視線を逸らした。

「これは一体、何事でしょう！？ なぜ裸の女性が境内に……。！」

股間を両手で隠している全裸のおっさんが全裸の女性にびっくりするというのは、中々凄い絵面だ。

取り乱している神主さんを視界に入れないようにしながら、涼音さんが寄って来た。

「東堂さん東堂さん。普通の反応ってこういうのだと思いますよ」

「なにがです？」

「全裸の男性が藪の中から出てきたら、普通は挨拶なんてしませんよ」

「……。まあ、確かにそうですね」

「でしょう？ でも大丈夫です。わたしは分かっていますからね」

涼音さんがふふんと笑った。

「オレも別に驚いていないわけじゃないですけど……。では、取り乱されていた涼音さんはやっぱり普通の人ということですか？」

「そ、そういうわけではないですけど……」

普通じゃないことにある種のこだわりを持っているらしい涼音さんが少し不快気な様子を見せる。

オレは笑った。

「分かっています。冗談ですよ」

「む。まあ、なんととっても、わたしは普通ではないですからね」

涼音さんが誇らしげに言った。

その近くで、雅さんが立ち上がる。

「東堂様……っ！」

雅さんは腕で体を隠しながら小走りに駆け寄って来ると、神主さんの視線から逃れるようにオレの後ろに隠れた。終始、裸を見られることに強い羞恥心を感じているような素振りを徹底している。そんな貞淑なキャラではないと思うけど、それは良い。

オレは神主さんを見る。神主さんは恥ずかしそうに身を振った。やめろ。

「あなたはこちらの神主さんで、涼音さんのお父さんということでお間違いはないですか？」

「え？ ええ、はい」

「良かった。では、失礼を承知の上ですが、単刀直入にお訊ねします。魔人、という存在に心当たりはありますか？」

「……っ!!」

神主さんが息を呑んだ。

知っているようだ。

「御存じなんですね？」

「なぜあなたがそれを……。あなたは一体……？ ただのお祓い希望者では……ないのですか？」

「ただの御祓い希望者でした。数時間前までは。確認しておきたいのですが、アナタは人間ですよ？ 魔人や妖怪、特に鬼のような……。そういう存在ではない、普通の人間。お間違いありませんか？」

「何を言って……？ あなたは一体……」

神主さんは困惑しているようだ。

「大学生です。一年次の。他の肩書は特にありません。最近はこちらと普通じゃないことに巻き込まれることが多いくらいで」

「あの、その自己紹介だと逆に混乱しますよ。東堂さん」

「でも他になんて言えば……？」

「それはそうですけど……。東堂さんって、本当にただの大学生なんですか？ 実は大学を隠れ蓑に妖怪退治をしているとか……」

「ないですね。本当に、最近までは普通に生活していた普通の大学生でした」

「その割にはだいぶ場慣れしているというか……。肝っ玉ですね……。全然取り乱さないし……。本当に本当ですか？」

「本当ですって。逆にお聞きしたいんですが、取り乱さないとおかしいんですか？」

「おかしいってことはないですけど、やっぱり普通じゃないですよ。でも、分かっていますから。わたしは、ね？」

涼音さんがドヤと笑う。

何が言いたいんだこの人は。わたしはあなたと同類だよ、というアピールをしているのかな。

その割にはだいぶお父さんの全裸姿での登場に取り乱していたようだけ。

「それって褒めて貰ってるんですよ？」

「もちろんですよ。どんな状況でも取り乱さず落ち着かれているなんて、凄いなと思います。肝っ玉です！」

「ありがとうございます。自分でも理由は分からないんですけどね」

「そうなんですか？ なにかそういう修羅場を潜ったりとかされたの

では？」

「いえ、こういうことは最近までなかったの。まあ、転生の件では……長い間修羅場の真ただ中にはいたと思います」

「あのー、実は感情……喜怒哀楽のどれかが欠落しているとか？」

「してませんよ。とんでもないこと言わないでください……」

すげエこと言うな、この人。

思わず呆れた視線を向けてしまう。

でも……。

「喜怒哀楽が欠落しているわけじゃありませんが、普通の感性の人なら取り乱すだろう状況下においても、オレの精神は平常時から大きく逸脱しない。それは事実として認識しているつもりです。落ち着いているように見えるのはそれでかと思えます」

「むう……。異変を寄せ付けない体質に、異変を前に動じない精神性……それはつまり……」

涼音さんが探偵のように口元に手を当てて考え込んでいる。

なんだろう。

涼音さんが何を考えているのか気になるところだが、神主さんが遠慮がちにこう言った。

「あの、何の話をされていらっしやるんでしょう？ それに、娘をご存じで？」

股間を手で隠しただけの全裸男がオレを不審げに見ている。

「すみません。涼音さんとは先ほど友人になったばかりです。意気投合しまして。それより、オレの質問には答えていただけますか？ 急いでしまして申し訳ないですが、急ぎといえ急ぎなものですから……」

「そうだよ、お父さん。魔人のことを知ってるの？ それになんで裸なの？」

涼音さんが考えることを切り上げ、言った。

「……。涼音、お前まで魔人のことを……。？ そこにいる妖狐に関係があるのか？」

股間を手で隠しただけの全裸の神主さんが雅さんの方を見た。

雅さんは身を竦めてオレの背に隠れている。

何とも言えない。

絵面だけ言えば神主さんは警察のお世話になっても文句は言えないと思うけど。

「こちらの全裸の女性は雅さんです。神主さんのおっしやる通り、狐

の妖怪……。それが分かるということは、あなたも霊能力があるんですね？ それか、雅さんのことを最初から知っていたか……。オレは彼女から妖怪や魔人について一通り聞いています。なので……。関係者ではない、と突き放さないでいただきたいというのが本音です。オレは先ほど、あなたの姿をしていた魔人と思しき存在と遭遇し、襲われました。その理由を知りたいと思っています。教えていただけますか？」

「……なるほど。わたしの記憶が途切れているのはそのせいでしょう」  
「それと、不幸すぎるすれ違いが起きないようにお伝えしておきたいのですが、オレは『異変に対するかなり強い抵抗力』を持っています。体質のようなものです。あなたの姿をしていた……。恐らくは魔人はオレを襲ったとき、その体質によって爆散しました」

「……爆散？」  
「はい」

慣れてきたやり取りをしている横で、涼音さんがなんともいえない表情をしている。

ああ……。

家宝らしいお札、燃えちゃったもんね……。ごめんね……。

神主さんが困ったような表情でこう言った。

「……。いや、疑うわけではないのですが、にわかには信じ難く……」  
「そうでしょうとも。言っているオレも毎度のことながら、内心では頭を抱えています」

「……。毎度のこと……。？ 毎度……。？ あなたは一体……。いえ、今は置いておきましょう。確かに、筋は通る。あなたが魔人に襲われたとおっしゃりながら、無事でいられていることが、です。分かりました。あなたにも事情を知る権利がおありのようだ。お伝えしましょう。どうぞ、こちらへ」

ありがたい。理解してくれたようだ。

神主さんは股間を手で隠したまま、肩をくねらせることで道を示した。

涼音さんがお父さんの挙動を見て何とも言えない表情を浮かべる。

神主さんは股間を隠したまま、どこかへと歩き出した。  
ケツの割れ目がオレ達の前に現れる。

涼音さんが露骨に表情を顰めた。

神主さんの案内に従い、神社の奥へと向かう。

社の中へ入った時、神主さんが言った。

「しばしこちらでお待ちください。服を着てきます」

「お願いします」

オレは即答した。

「すみません。よければ雅さんに服をいただけませんか？ 妖狐とは

いえ肌寒い季節ですし、裸というのは憐れで」

「東堂様……っ！」

背中側から雅さんの声が聞こえる。

「そうですね。分かりました。涼音。お前の服を持ってきて差しあげなさい」

「えっ……妖狐にわたしの服を？」

さつきは同情していたようだったが、妖怪嫌い自体は特に変わっていないようだ。涼音さんが難色を示した。

神主さんは服を着るために去っていく。

「涼音さん、すみませんがお願いします」

「……。分かりました。友達の頼みですからね！ 狐、付いてきて」

「儂に指図を」

「雅さん？」

雅さんはどうにもプライドが高いというか、人間を見下しているようだ。いちいちバチバチするのは止めて貰いたい。

雅さんの言葉を遮って、涼音さんへと頭を下げた。

「すみません、涼音さん。せっかく服を貸していただけるのに……」

「東堂さんが謝ることでは……。もともと、その狐と親しいとか、そういうわけではないんですよ？」

「そうですね。ただ、雅さんに服を着て貰いたいのはオレなので。それだけです」

「なるほど……。ところで、東堂さん」

「はい？」

「わたしのことは涼音とお呼びください。是非とも。敬語も結構ですの〜」

「涼音さん、という呼び方に問題が……？」

「いえ、そういうわけではありません。が、わたしたちは友達なので」「遠慮はいらない、と？ 分かった。涼音って呼ぶよ。涼音も好きに呼んでくれていいよ」

オレの返答を聞いた涼音さんの表情が、ぱあ、と明るくなった。

「じゃ、じゃあ、雷留君って呼ぶね」

「はい」

涼音さんは嬉しそうに頷くと、そそくさと去って行く。

「狐、行くよー！」

「はあ……。東堂様、行ってまいります」

では、と律義にお辞儀をして、雅さんも涼音さんの後に続いていく。

一人残されたオレは、皆の帰りを待つ。

しばらくして、服を着た神主さんが戻られ、さらに遅れて女性陣が到着する。

雅さんが静々とオレにお辞儀をし、当然と言わんばかりにオレの隣に置かれていた座布団に正座をした。

それを見た涼音さんは不満そうに片眉をあげたが、特に何も言わず、神主さんの隣に座った。オレは正座が辛いので足を崩させて貰っているが、お三方は立派な姿勢で正座している。さすが、といったところか。

「さて……何からお話しすればよいものか……」

神主さんが言う。

オレは話をスムーズに進めて貰いたくて、こちらが知っていることを先に伝えることにした。

「お話の前に、オレ達が既に知っていることを伝えさせていただけますか？」

「おお、それは助かります。是非とも」

「では……妖怪が既に滅んでいること。伴い、妖怪退治屋という生業

が消え去ったこと。鈴院家がかつて妖怪退治屋であったこと。これは涼音さんから伺いました。そして雅さん……妖怪ということで、妖怪側の情報をお持ちでした。雅さんが言うには、妖怪が減んだのは魔人の仕業であり、妖怪という存在そのものが魔人がこの世界へと侵入することを阻んでいた、とのことでした。そして、雅さんこそが『最後のあやかし』とのことでしたが……いかがでしょう?」

「なるほど……。大まかなことは既にご存じ、ということですね……。それはそれで私もちよつと初耳の話もありましたが……。それはともかくとして、いきなりですが、本題を」

涼音さんが姿勢を正した。

オレも僅かに緊張しているようだ。

雅さんは……なんともまあ、清楚な巫女さんに徹している。目を瞑り、静かに話を聞く姿勢だ。

可憐な雰囲気がいまい。

「とは言え、私も詳しいわけではありません。ご存じの通り、妖怪の絶滅に伴い、退治屋・祓い屋という生業は長い歴史に幕を閉じました。根本的な理由は妖怪の絶滅に相違ありません。ただ、それを助長した『何か』があったのです」

「助長した『何か』……?」

オレの疑問に、涼音さんも困惑した表情を浮かべた。

「それ、初耳だよ、お父さん」

「言っただけだから。お前は成れもしない妖怪退治屋になると言っただけ耳持たん。このことを伝えれば、なにをしでかすか分かったものじゃない」

「はあ? ちよつとお父さん? なにそれ」

神主さんの涼音さんへの認識もオレと似たような感じらしいことが、今のやり取りだけで分かった。

慣れているのか、神主さんは涼音さんの言葉を聞き流し、話を続けてくれる。

「江戸の時代。当時、妖怪の滅り方に比べれば少なかったもの……霊能力を持つ人間が数を減らしていた。山での遭難や転落などの事



故死、病死、そして『生業』での殉職……時代背景を考えれば、不自然ではない理由ではありません。もともと商売仇でありましたし、妖怪が減少したことで退治屋の需要も減り、看板を下ろす退治屋も増え……横のつながりが希薄になっていました。だからこそ……先人たちは気付くのに遅れたのです。妖怪と同じように、霊能力者もまた、絶滅に瀕していたことに」

おお……？

流れが……。

話が重くなってきた感じがする……。

「それに気づいたのは、私の祖母、涼音の曾祖母の友人だったとある霊能力者の方でした。実際にお会いしたことはありませんが……祖母はその方から手紙と書物を預かっていたそうです。それがこちらです」

神主さんが古い書物を一冊、床の上に滑らせるように置いた。

「祖母の友人は、先祖の日記を読むことが趣味だったようです。そして祖母の友人は先祖の日記の中に『久しぶりに他の霊能力者に連絡を取ろうとしたら既に鬼籍に入っていた』という文が散見していることに気づかれました。先ほども言ったように、不自然ではない理由でしたが……祖母の友人の祖先は、人づきあいがマメな方だったようです。退治屋にしては珍しく横のつながりが太く……だからこそ、多くの霊能力者の情報が集まった」

「つまり、霊能力者が故意に命を奪われている可能性に気づいた……？」

神主さんは強く頷いた。

「ええ。そして、ある仮説を立てられました。それが、『魔人』という存在です。退治屋の歴史上、たった一度だけ、その名が出た文献があります。霊能力者だけが知る文献で、それは『仏閣生まれのTさん』のお弟子様が残した書物です。『T』というのは、書物の劣化によって『田』という字だけを残り、そのお名前が消えてしまっていたために、私が付けた便宜上の名前ですが……。」

さつき涼音さんが言っていた人か……。

「ある夜、二体の妖狐が争っている場に遭遇したTさんは、一体を見逃し、一体と戦われたそうです。その一体は……伝承に語られる、九つの尾を持つ妖狐であったと。書物には記されています。戦いの詳細は伝わっていませんが、Tさんはその戦いの傷が元で間もなく亡くなられ……その前に、言い残されたそうです。「アレは妖怪ではない。もつと別のもの。『魔の人』だ」と」

あらあ……繋がって来たなあ。

雅さん、そのことに関して嘘は吐いてなかったのか……。

ちら、と雅さんを見る。

雅さんは素知らぬ顔をしている。Tさんの最後に思うところはまるでないようだ。

感謝してたんじゃなかったのか……。

「これも祖母の友人の手紙に書かれていたらしいのですが……。過去、殉職した霊能力者の死因に、引っかかることがあったそうです。殉職した霊能力者の方々は、当時最高峰と謳われた実力者の方々だったのです。当時、最高峰の実力を持つていた方たちだけが、殉職されていたのです。人の目がある場所での事故や、病死ではなく、殉職。そして、殉職された霊能力者の方たちの最後の仕事には、必ずと言っていいほど、古の時代に『祓われたはずの』大妖怪の姿が見られます。大ムカデ、鬼、天狗、九尾、そういった世間一般にも知られているほどの大妖怪たち。それらが再び現れたという報告があり、彼らは一門総出で『祓い』に出向き……最も力のない、たった一人を除いて帰らなかった。祖母の友人は、その一人を伝達係としてあえて残された者、と認識したようです」

「伝達係……？」

「ええ。妖怪は祓ったが、自分を除いて全滅した。そのように伝えていたようです。実際、その後は同じ大妖怪の被害報告が出なかつたため、彼らは英雄として祀られ、そして忘れられていきました」

「つまり……魔人は妖怪だけでなく、霊能力者もまた殺して回っていた？ ということですか？」

「祖母の友人はそうのように確信したようです。そして……虫の知らせ

のようなものがあつたのかもしれない。ご自分の考えと情報を簡潔にまとめ祖母に託し……間もなく、亡くなられたと」

……。

なんとというか、ちよつと鳥肌立った。怖いわけじゃないんだけど、なんか悪意のある大きな流れみたいなものを感じて……。

「祖母の友人は、近代では珍しい力を持つ霊能力者だったようです。遠い遠い先祖返り……衰退していた家系に現れた麒麟児。とはいえ、妖怪が滅び去った時代です。特にそれが役に立つということは無かつたようですが……。人に倦怠感を与える程度の有象無象を祓い慕われる程度で、やはり生業にするには時代が……ということですよ」  
神主さんはちら、と涼音さんを見た。

自称退治屋家業を猛烈に反対しているらしい。気持ちは分かる。「そして幸か不幸か……祖母はそれほど力を持たない人でした。魔人の目的は分からないが、アナタが狙われることは無いだろう、と。手紙には書かれていたそうです。それを私は、祖母が亡くなる直前に知らされました。ちようど、涼音が霊能力者としての才能の片鱗を見せ始めた頃のことです。実は……私の父、涼音の祖父は……私がまだ若い頃、涼音が生まれるよりもずっと前に、交通事故で早世しています。父は祖母よりも強い霊能力者であり、私の師でもありました。そんな父を凌駕するほどの才を見せ始めた涼音のことを、祖母は案じたのでしよう」

……。

それって……。

「祖母がずっとそのことを語らなかつたのは……私が祖母に似て、たいした霊能力を持っていなかったからだと思います。……ただ少しだけ、虫の知らせのようなものを感じる力があるくらいで、父や涼音には到底、及びませんから」

「虫の知らせ……。それは、未来予知のような？」

「それほどのものではありません。本当に、嫌な予感がする、程度のモノです。ただ……それが最近になって強まっていました」

神主さんは思いつめた様子で俯いた。

「涼音は、先祖返りです。今、どれほどの数の霊能力者が残っているかは分かりませんが……涼音は恐らく、現代にて最高の霊能力者だと私は思っています。確かに世が世なら、退治屋として生きていける。それだけの才能を持っていると思います」

「え……？ お父さん、わたしには才能がないって……」

「すまない。お前には、力を伸ばして欲しくなかった。祖母の話と、父の件があったから……」

神主さんが苦しそうに続ける。

読めて来た……。

「私は危惧しました。涼音が……『魔人』に命を狙われるのではないかと。強まる虫の知らせ……何か事前に対策が出来ないかと。私は東堂さんのお祓いの予約時間の直前まで魔人について調べていて……」

神主さんは哀し気に天を仰ぎ、ぽつりと言った。

「気づけば、全裸でした……」

最後にとんでもないことをぶん投げて来るんじゃないよ。

いや、真面目に言ってるんだとは思っただけでも……。

「最後に視たのは、鬼でした。伝承に語られる鬼の姿そのまま……恐らく、東堂さんが見たのはそれでしょう。恐らく私は鬼に……魔人に憑りつかれた」

「それは……意識と体を奪われていた、ということですか？」

「だと思えます。魔人に憑りつかれた者がどうなるのか、魔人が妖怪と霊能力者を狙う理由が何なのか、申し訳ありませんが、私にも分かりません。ただ私は涼音を守るために出来ることを、と……」

爆散したのは神主さんの体に乗っ取っていた鬼。

そして神主さんは全裸で藪の中から出てきた……。

どういふことだろう。

神主さんの体だけ、爆散の直前で分離した……とかなのかな。そんな感じはしなかったけど……。

ただ一つ分かったことがある。

雅さんの立場が結局どういふものなのか分からないままってことだ。

オレは雅さんの方を向いてこう聞いた。

「雅さん。鬼と天狗はさっきの奴だと思っんですけど、大ムカデとか他の大妖怪とか……心当たりありますか？」

雅さんは静かに頷いた。

『狭間』にて襲って来た者達の中に、それらの姿もありましたゆえ……。狭間であればわたくしにも対抗手段はございましたが……。数に押され、落ち延びた以上……。もはや……」

雅さんが切なげに目を逸らす。

もはや、オレに頼るほかない、つてことか……。

「雅さんの話では、魔人は何らかの理由で現世への侵攻を目論んでいるようです。その結果、この現世がどうなるかは分かりませんが……」

ちら、と雅さんを見る。

「……。魔人共の侵攻を許せば……。恐らく、人間は魔人共の餌として喰われ、滅びるでしょう」

雅さんの言葉に、涼音さんと神主さんが絶句する。

「そんな……」

「なんと……」

オレは思った。

——ホントかあ？

ちよつと間があつた。考えてたよね。

オレが断り辛いように、それっぽい理由を考えてたんじゃないのか……？

でも本当だとしたらもう断ることは出来ない。オレも他人事じゃない。全人類に関わる規模の話だし、しかも雅さんを助けられたかもしれない妖怪仲間は既に滅び、霊能力者も涼音さんが最高峰となると……。

「では、妖狐……雅さんを守ることが我らの使命となるわけですか……」

「妖怪退治屋が妖怪を守る……改めて考えると、普通じゃないわね……」

神主さんと涼音さんが言った。

神主さんが続ける。

「この神社であれば、と言いたいところですが……魔人の侵入を許していますからね……。何故異形の存在が入り込めたのかは疑問ですが……それだけ強力ということでしょうか」

……。

何とも言えない嫌な予感がオレの中に……。

「しかし、手はあります」

「なにか秘策のようなものが？」

「ええ。鈴院家には先祖代々伝わる家宝の札というものがあるので。一族の霊能力が衰退した祖母の代まで、およそ1000年。私たちの一族は先祖代々、たった一枚の札に強力な霊力を詰め込んできました。それがあれば、大妖怪や魔人にも対抗できるかと思えます」

「あつ……」

思わず漏れ出たオレの呟きに、神主さんは若干訝し気な表情をしたが、それ以上は気にすることなく、涼音さんの方を見た。

「涼音。世を守るためだ。私も何も言うまい……。アレをお前に託す。頼んだぞ」

「あつ……」

優しい表情で言った神主さんだったが、言われた方の涼音さんは汗だくになり青ざめた。

「ん？ どうした？」

神主さんは不思議そうにしている。

涼音さんが助けを求めるようにオレを見る。

オレは顔を背けた。多分、腹痛を耐えるような様子に見えていると思う。

「あの、神主さん。謝らなければならぬことがあります」

「謝らないといけないこと、ですか……？ それは一体……？」

「家宝のお札、燃えました。燃えカスです」

「はっ」

「さつきお伝えしたオレの体質で、ですね……。オレが雅さんに憑り

つかれていると誤解した涼音さんが、オレを助けるために使おうとしてくれまして……。そのときに、燃えました……。」

ちら、と涼音さんを見る。

涼音さんは懐から折りたたまれたハンカチを取り出した。

そしてゆつくりと開く。

僅かに燃え残ったカスが、ハンカチの上に乗っていた。

「お父さん……。家宝の札です。日頃から勝手に持ち歩いてました。ごめんなさい……」

「オレからも……。申し訳ありません……」

FXで全財産溶かしたような顔をして、神主さんは天を仰いだ。

## 巫女・妖狐6 / 巫女・妖狐1

燃えカスとなった家宝のお札を呆然と見つめている神主さんの復帰を待つ。

静かに、恐縮して。

雅さんは目を閉じて反応を示さない。自然体な感じだ。待つ。

神主さんが緩慢な動作で動き出した。涼音さんの持つハンカチへと震える手を伸ばす。

「これが？」

神主さんの言葉は抑揚も無く端的なものだったが、だからこそ現実を受け入れられてないという心境を感じさせる。まるでこの世の終わりを目の当たりにしたかのような絶望感と浮遊感のようなものが伝わって来た。

オレは深く頭を下げ、言った。

「きつとオレの体質のせいだと思います。オレには、他にそうなった原因が思いつきません。本当に申し訳ない」

謝ることは苦では無かった。

オレに自覚は一切ないし、オレの体質で家宝のお札がこうなったという根拠も証拠もない。謝る道理もないかもしれないが、罪悪感を抱いてしまった以上、謝罪せずにはいられなかった。

神主さんはぎこちない動きでオレの方を見た。顔面蒼白で、今にも倒れてしまいそうだ。

「体質……。さつき言っていた、あの……？ 魔人が爆散したという……？」

「ええ。異変に対するかなり強力な抵抗力……とオレは定義しています。そしてこれまでの経験から推測するに、どうやら無差別に作用するものらしく」

「札を異変と認識した君の体質が、札を燃やした……？」

「恐らくは。申し訳なく思います」

神主さんは力なく首を振った。



「……。いや、君のせいではない。もとはと言えば、勝手に持ち歩いてきた涼音の責だ……」

神主さんの声には力が無い。深くため息をついて項垂れる。

涼音さんがびくりと跳ねた。

「だが……ますます分からなくなった」

神主さんがぼつりと言った。

「分からなくなった、とは……?」

「東堂さん、あなたのことですよ」

頭をあげた神主さんは、困ったようにオレを見た。

「過去、多くの妖怪や、恐らくは霊能力者を手に掛けてきた魔人。そして我が一族に伝わる家宝の札……。それらを自覚なく滅ぼすその体質とやらが、私には理解できません。一体、あなたは何者なんです……。?」

「本当に普通の大学生なんです。成績は可もなく不可もなく、先生方の覚えがめでたいわけでもありません。誰も信じてはくれませんが……。確かに交通事故で天涯孤独の身となったという重めの過去はありますが、オレ自体は普通……。大学生活も普通に送っていましたし、これからも普通に生きていただけなんです」

神主さんは一度瞑目した。そして涼音さんを一瞥してオレに言った。

「それは……大学生としては普通、ということですよね? あくまで学力的や立場的には平均的な大学生である、と」

「それもあります。ですが、それだけではありません。確かに過去は波乱に満ちていましたが、今は人としても普通だと思っています」

神主さんが小さく「なるほど……」と呟いた。

そしてもう一度涼音さんを見てから、オレに言った。

「ひとつお伺いしたいのですが、東堂さんにとって普通とは一体何ですか? 普通の人、とは?」

「東堂様……っ!」

雅さんが急に割って入る。

どうしたんだろう、急に。

神主さんが厳しい視線を雅さんに向け、涼音さんは驚いたように雅さんを見た。

神主さんは静かに言った。

「雅さん、どうされましたか？ 私の今の問いかけに、何か不都合が？」

「……っ」

雅さんが逡巡し、悔し気に顔を背けた。

不都合がありますって反応だけど、一体……？

「どうでしょう、東堂さん。お答えいただけますか？」

「はい……。それは答えられます。オレにとって普通の人とは、『他者の事情や境遇を尊重し、抱える苦しみや喜びに共感し、時には身を削ってでも手を差し伸べる人』のことです。それがオレにとっての普通ですし、そう在りたいと思っています。そしてさらにその先で、『頼れる大人』になりたい、と。そう思い、生きてきました」

涼音さんが奇妙な反応を示している。

神主さんは小さく笑い、頷いた。

「なるほど。では、あなたにとって『頼れる大人』とは？ これも答えられるのでは？」

それも答えられる。

信乃ちゃんや律ちゃん、明日香さんのときもそう在りたいと行動したわけだし。

「そうですね。誰かが困っているとき、力を貸してくれる人です。単に話を聞く、相談に乗る、知識や経験から具体的な解決方法やその例を出す。必要であれば……自ら動くことも厭わず、向けられる悪意や困難への盾になる。そんな、色々な引出しを持っている人です」

「なるほど。これはあくまで私の所見でしかありませんが、やはりあなたは誠実で善良な人のようだ」

「……？ ありがとうございます。どうして会ったばかりのオレにそのような評価を？」

小さく頭を下げると、神主さんは笑った。

「お札のことです。故意に破壊したわけでもなく、あなたがやったと

いう証拠もない。わざわざ明かす必要もなかった。なのにあなたは、札が焼失したことを自分のせいだと謝罪されました。謝らずにはいられないと言った様子で。だからあなたがそういう人なのではないか、と思いました。私も仕事柄多くの人間を見てきましたから。なんとなくですが、分かります。嘘を吐くのは得意じゃないんだろうな、と」

そうでもないと思うけど……。バイト先ときは有耶無耶にしました。

ありがたいとは思いますが、こそばゆい評価でもある。

「ですので、はつきりとお伝えします。東堂さんのおっしゃったことは『素晴らしい理想』です。平均的な考えや行動……。『普通』ではありません」

「いえ……。オレはそうは思いません。世の中には募金として身を切る方だっていますし、ボランティアというものもあります」

「なるほど。では、それをしない方のことを普通ではないと考えますか？ 何故しないんだ、と問い詰めますか？」

「そんなことはしません。その人にも事情があるでしょうし、義務でなければ悪いことでもありませんから」

「そうです。私も多くの人を見てきました。良い人もいれば悪い人もいた。東堂さんの言うように、人には人の事情があります」

……。

何が言いたいのか、なんとなく分かって来た。

なるほど。

多分神主さんが言いたいことは少しずれているが、涼音さんが『普通ではないことにこだわりを持っている』理由も、オレの考えがあつていれば分かってくる。そしてそれは、オレが涼音さんの言葉が腑に落ち切らなかつた理由でもあるし……。求めていた回答の一つであると思う。

神主さんは言った。

「東堂さんは何を以て『普通』を定義されていますか？」  
はっ、と気づきを得た。

オレが『普通』と考えていることをしない人、出来ない人が居る。だけどオレはその人達のことでもまた『普通』と捉えている。

確かにそれは明らかかな矛盾だ。

じゃあなんでそんなものが生じているのか。

答えはすぐに出た。

「オレです。オレはオレを基準に『普通』を定めていました」

——オレ『が』普通だ。

それは周りを押しのけることで確立する強烈な自我であり、異常事態すらものともしない平常性。

普通じゃないとレッテルを張られたことへの苦しみが反転したものの。

悪意なく人を苦しめる存在が『普通』であってはならないという強い義務感と、その存在もまた様々な事情からそうなったのだという共感性と、自分こそが普通だという強烈な自我がバチクソに激突して生じたもの。

それが最近周囲から指摘され、オレも違和感を感じていた歪みの正体か。

スツキリした。

オレは大衆の中にいたかったし、大衆をオレの基準に合わせたかった。

凄く傲慢だなと我がことながら笑ってしまっけど、自分のことを理解できたということもあって、悪い気はしない。

「ありがとうございます。長年つかえていたものが取れた気分です」

「それは良かった。ご存じかどうかは分かりませんが……涼音も幼い頃……少し、アナタと似たようなモノを抱えていたものですから。どうにもお節介を」

「存じてます。涼音さんも幼い頃に苦労されたと」

神主さんが「そうですね……」とか細く呟き、柔らかく笑った。

涼音さんからそこまで聞いているのか、という理解の呟きだろう。

神主さんはどこか嬉しそうに涼音さんを見てから、改めてオレを見

て言う。

「東堂さん。改めてお伝えしますが、あなたの考え方は素晴らしいものだと思います。善良で誠実……。父として、東堂さんのような考え方を持つ同級生や先生が、当時、涼音の周りに居てくれれば……。そう思わずにはいられません」

神主さんが穏やかにだが力強く続けた。

「だからこそ……その善良さを『普通』とひとくくりにはせず、大きな個性として大切にしていただきたい。私はそのように思います」

身に染みる言葉だ。

自分で考えるところでも気恥ずかしいが……。そうか。オレは善良な人だったのか……。

気恥ずかしいが、そう在れたなら嬉しいことだ。

しかし……。すごい。

これが神主さんという仕事に就く大人。父親というもの。

こういう人が普通なのかな。いや、きっとこの人が凄い人なんだろう。

オレは深く頭を下げた。

「ありがとうございます。肝に銘じます」

神主さんは嬉しそうに頷くと、雅さんの方を警戒するように見つけた。

「是非に。世の中には……。歪みや自覚なき葛藤に『付け入る者』もいますから」

オレも神主さんに倣い、雅さんを見る。

雅さんは忌々し気に眉を寄せて俯いた。

この妖怪……。

さては気づいてたんだな。

確かに効果的ではあったと思う。

正直、かなり揺れていた。

雅さんを拒絶することへの罪悪感が強まっていたし。

まあ、オレの中の常識的な価値観が無意識に警鐘を鳴らしてくれていたからよかったけど。

殺し屋のようなものに追われてるらしいほぼ初対面の女性を家に匿うのはさすがに躊躇する、っていうのはさすがに普通の価値観だと思いたい。

さすがは神職とでも言うべきか。

家宝のお札が燃えカスになった直後にここまで人に気遣いが出来るとは、なんて素晴らしい人なんだろう。

……。

涼音さんはこのお父さんの忠告を無視してたのか……。別の意味で凄いな。

「しかし、困りましたね」

ひと段落したことを悟ったのか、神主さんが本題に戻した。

胸元を摩っているのはストレスがヤバいからだろう。可哀そうに……。

神主さんはオレの方を見て言う。

「お札が失われたとなると、頼れるのは涼音の力と東堂さんの体質のみ。人類の存亡をかけた戦いにおける手札がそれだけとなると心もとない。この妖狐が全て本当のことを言っていれば、ですが」

神主さんは気分が悪そうに胸元を摩っている。胃が辛いんだろう。千年規模の家宝を失った直後だというのに気丈に振舞われているだけでもすごいのに、建設的な話を続けようとされるのは頭が下がる。

正直、オレはこの事態が凄くめんどくさく感じてきているんだけど。

言つてもしょうがないので、オレ達はさらに話を続けた。

オレと神主さんは、雅さんから魔人の脅威についてと、涼音さんが魔人を相手にどこまで通用するか、という見解を引き出した。

大妖怪の似姿をした魔人を相手には通用しないと思うが、下級のモノであれば問題ないという判断だった。しかし天狗と鬼がかなり上澄みだったらしく、それが滅ぼされたとなれば、下級の魔人が個別に襲ってくることはないとのことで、来るとすれば上澄み連中か、下級であつてもかなりの数でまとまって来るはず、と。

雅さんについて。

もともとは木端妖怪に毛が生えた程度の力だったらしいが、結構強くなったらしい。その理由は魔人の力を吸収したから、とのこと。

御柱さんの力を使っていた『狭間』にいたときと比べれば大きく劣るものの、それでも今は涼音さんよりちよつと強いらしい。

基準がよく分からないけど、現代最高峰の霊能力者と見込まれる涼音さんより強いって、やっぱ凄いなだろう。そして雅さんより強い魔人を問答無用で爆散させるオレの体質ね。

神主さんが言った。

「東堂さんが体質に気づかれたのはここ一年とのことでしたが……もしや以前にも魔人に襲われたことが？」

「それが分からないんです。魔人かもしれないし、そうじゃないかもしれない」

「曖昧ですね……どうということでしょう？」

オレはこれまで身の回りで起きたことを神主さんに伝えた。

すると神主さんは困ったように唸った。

「魔法少女に魔獣、異界の化け物、西洋の竜や麒麟に似た怪物……。聞いたことが無い……。妖怪以外にもそんな存在が……。あるいはそれもまた魔人……？」

涼音さんが何かに気づいたように、はつと神主さんを見る。

「お父さん！ 世の中にそれだけ怪異がいるなら、わたし退治屋で生きていけると思うわ」

涼音さんの言葉を聞いた神主さんは信じられないものを見るように涼音さんを見て、頭を抱えると深い溜息を吐く。

オレは思った。

——子育てって、大変なんだな……。

「雅さん。実際、どうでしょう？ オレが今言ったような異変も、魔人が起こしていることなんでしょうか？」

「……」

雅さんが目を細め顔を伏せた。

考えてる。

この狐……。

合っていたらすぐに返答するだろうに、どう答えるか考えているということは、違うんだらうか。問題は何を考えているのかってことだけだ。

いや、そもそも違ったら違ったで面倒くさいな。じゃあアレらは一  
体なんだって話になる。

「雅さん？」

「……左様でございます。それらもまた、魔人が引き起こせし異変  
……。東堂様は既に、多くの魔人を祓われてございましたか……」

「……」

「……」

オレと神主さんはアイコンタクトを取った。

神主さんも多分オレと同じ考えなんだと思う。

信用できねエ……、と。

でももし本当のことを言っているなら……と考えると無下には出  
来ないのが難しいところだ。

神主さんは一度外の方を確認した。

だいぶ長く話していたようで、外も暗くなってきた。

神主さんは言った。

「東堂さん。本日はここに泊られてはいかがでしょうか。話はまだ長  
くなりそうですから。食事や衣服は用意しますので」

夜も話をしようということだろう。

仕方がない。

「ではお言葉に甘えます」

「良かった。では私は夕飯などの準備をしに一度離れます。話も長  
かったので、東堂さんも少し休憩を」

「オレも何か手伝えることはありませんか？」

「大丈夫ですよ」

神主さんが笑って言った。

そのとき、涼音さんが「あつ」と声を漏らした。

「忘れてた。お父さんお父さん。多分魔人のせいだと思うんだけど、



境内、凄いことになってたよ」

「なに？」

離れようとしていた神主さんが立ち止まり、涼音さんの方を懐疑的に見る。

雅さんは不思議そうに小首を傾げ、オレは静かに目を閉じた。

涼音さんが続ける。

「扁額と狛犬の首が落ちてたし、灯籠は崩れてたし、木が縦に割れてたの……」

「なるほど……。魔人め……。結界をそうやって潜り抜けたか……」

「あの……。もしかしたらオレの体質のせいかも……。すみません」

「……」

「……」

神主さんとオレの視線が重なる。

神主さんは天を仰ぎ、

「魔人め……。許せんな……」

そう言つて去つて行つた。

走る。

走る。

大きな異変、その波動を感じた。

そこら中に散らばっている小さな妖怪たちが持つ妖力と似ているようで違い、そして比べ物にならないほどに大きな力。

懐に入れた家宝の札が震えている。込められた力が今にも暴れ出そうとしているような。

胸がざわつく。嫌な予感がする。

お父さんの言葉が脳裏を過る。

虫の知らせ。お父さんは自分の力が最近強まっていると言っていた。

わたしもお父さんの力が強くなってるのは感じてた。

お父さんが強くなっているんじゃない、お父さんの力がより強く発動している感じ。まるでご先祖様がお父さんに力を貸しているような、不思議な感覚。

買いだしの途中、うちの方からその感じが凄くした。遠く離れていても身近に感じるような力の波動。霊力と妖力、そして未知の力が混ざり合った歪な力の波動だ。

わたしは買い出しを切り上げ、すぐにうちへと走った。  
いやな予感がする。

お父さんはそう言っていたし、わたしも今、それを感じてる。  
階段を駆け昇り、鳥居をくぐる。

破壊された境内が視界に入ったけど、止まらなかった。  
力の波動を凄く感じる方向へ、走る。

「お父さん！」

「……」

見慣れた背中を見つけて叫んだ。

お父さんは見慣れない鉄の棍棒のようなものを手に握っていた。

振り返ったお父さんは、血塗れで……だけどその血がお父さんのモノじゃないってことはすぐに分かった。

きつとお父さんの向こう側にいる着物を着た女性のものだ。

わたしにはすぐに分かった。あの女性が人間ではなく、妖怪……それも狐の類だということが。そして……お父さんがお父さんじゃないってことも、わたしは既に理解していた。

それでも認めたくなくて、理解できなくて、わたしはお父さんに近寄り、声を掛けた。

「お父さん？ どうしたの……？ その女って、妖怪……狐だよな。やっぱり妖怪っていたんだね……？」

「……霊能力者か。まだそれほどの力を持つ者が残っているようだな」

お父さんが振り返り、冷たい目でわたしを見た。

「ただの人間ならば見逃したが……霊能力者となれば話は別だ。そこ  
の狐ともども、ここで死ぬがよい」

「お父さん……っ！」

お父さんはお父さんだった。

声とか姿が、じゃない。感じ取れる霊力がお父さんそのものだった。

だからお父さんが何か別のものになってしまっていることは分かっていたても、すぐには受け入れられなかった。

お父さんが妖怪退治をしている。そう思ったかったし最初はちよつとだけそう思った。

でも、今の言葉を聞いて冷静になった自分もいた。

「憑かれたんだね。やっぱり、妖怪はいたんだ。でも、大丈夫。わたしがお父さんを助けるから!!」

懐から取り出したお札を掲げる。

奥では妖狐が驚いた様子を見せていたが、今は無視する。

広げた両掌の上でお札が宙に浮く。

迸る霊力が光の奔流を作り出し、わたしの服や紙が風に靡く。

お父さんの姿をした何かが鋭く視線を細めた。

「破アー!!」

宙に浮くお札をそのままに、手を引いて体の前で腕を回し、両掌をお札の背面に向けて勢いよく突き出した。

両掌はお札に届かず虚空を押ししたが、お札からは霊力の波動が飛び出した。丸太のような太さの霊力波がお父さんの姿をした何かを呑み込む。

「やった……！ お父さん！ もう大丈夫」

「人間風情が……っ！」

腕を体の前で交差させた体勢で、お父さんの姿をしていた何かが呻くように言った。

「お父さん……う。」

お父さんはお父さんではなくなっていた。

まるで塗装が剥がれ落ちるように、お父さんの体が崩れ、中の何かが見えている。

「おとおおとおおー！」

お父さんだった何かが唸り声をあげ……お父さんは目の前からいなくなつた。

見上げる程の筋骨隆々な巨体。血を塗りたくつたかのような赤い肌。そしてツノ。

「鬼……！ 貴様、お父さんをどうした!!」

「ふん、貴様はコレ<sup>の</sup>の娘か。知る必要もない。死ねい!!」

凄<sup>い</sup>速<sup>さ</sup>で近づいてきた鬼が、わたしに棍棒を振り下ろした。

咄<sup>嗟</sup>に手を動かせば、お札が追従しわたしと棍棒の間に移動する。

霊力の盾が棍棒を弾き、鬼はたたらを踏むように数歩後退した。

「人間がア！」

まさに鬼の形相。

怒り狂つた鬼が雄たけびを上げる。

鉄の棍棒をどこからともなく顕れた赤黒い炎が覆う。

「お父さんをどうした!!」

わたしは突進した。スライディングの要領で鬼の巨体の足元に滑り込み、その足に札を叩きつけようと腕を振るつた。

鬼はその巨体に見合わない俊敏さで飛び跳ねて札を避けると、その丸太のような脚でわたしを潰そうとスタンプのように踏みつけて来る。

咄<sup>嗟</sup>に身を翻しそれを避け、バク転を繰り返して移動する。新体操のような動きだと自分でも驚いた。お札の力がわたしに流れ込んでくる。身体能力が向上していることを実感する。

狐の姿が横目に映るが、どうでもよかつた。

地面に降りた鬼が突進してくると、わたしが着地するタイミングは同時だつた。

わたしの防御は間に合わず、お腹に重い一撃を喰らう。

「がっ……」

わたしは吹っ飛ばされた。

その進路上に狐が居て、狐も巻き込まれる。

社に激突し、扉が壊れる。

「い、いたい……いたい……」

お腹も背中も、体中が痛い。こんな痛みは初めての経験だった。荒事なんて無縁だったから。そう望んではいたけど、実際にそうなることやはり違う。

けほ、とせき込んだ。

いやな味がして、口から何かが飛び出る。

血だった。

「はあ、はあ……」

痛み。恐怖。

そういったものがわたしの身を竦ませる。

下敷きになってしている狐のことに気づいたのは、狐が呻き声を漏らしてからだった。

鬼が近づいて来る。

嗜虐的な笑みを浮かべて、ゆっくりと。

「……」

怖い。

あれはなんなの。

お父さんはどうしたの。どこにいるの。

這いずるようになって後ずさった。狐の上から退いたとき、狐がむくりと体を起こした。

「怯えておるな……」

狐は言った。

「あれは儂とおのれを殺すじやろう。死にたくなければ、あれを滅する他ない」

「なにを……、あつ……」

狐が変なことを言った。

どういうことか聞こうとしたが、喋るだけで体中が痛い。

「アレは魔人と呼ばれるモノじゃ。人の世をおのれらの理に染めあげようとしおる害獣よ。儂にとっても、おのれにとっても、の……」

「……」

何を言っているのか理解できなくて、狐を凝視した。

狐はこちらを振り返らず、言った。

「おのれの父はあの魔人に喰われ死んだ」

それが真実なんだということはずぐに分かった。

あの鬼から感じる妖力と未知の力の隙間、あの鬼の体の中から、確かに慣れ親しんだ優しい霊力を感じるから。

わたしは溢れそうになる涙を堪えてた。きつと酷い顔をしていると思う。

「仇を討つのなら力を貸そうぞ。儂は『雅』。世に残る最後の『あやかし』じゃ」

狐は立ち上がり、背中越しにそう言った。

なにがなんだかわからない。

何が起きているのか分からない。

狡猾で有名と勉強した妖狐の言葉がどこまで本当なのかも分からないし、そもそも言っていることの意味も理解できていない。

だけど、一つだけわかる。

それはお父さんがもういないってこと。あの鬼に殺され、食われたんだらうってこと。

家宝のお札をくしやりと握りしめた。

激情に身を任せ、1000年に渡り溜められた札の力のすべてを解放させる。わたしの体に流れ込む霊力はあまりに大きく、わたしの体を飛び出して周囲に溢れかえった。小出しに引き出すという発想が無かった。わたしの体だけでは収まり切らず霧散した余剰霊力は後から考えるとすぐく勿体ないものだったが、その一部は妖狐の体を包み、流れ込んだ。

狐の腰から一本の尾が生えて来る。

狐はそれに気づいていないようだった。ただ、狐の力が飛躍的に上昇したことは理解した。

力が湧いて来る。痛みが引いていく。

多分、錯覚じゃない。お札から溢れた霊力がわたしという存在の位階を押し上げてくれたんだらう。霊能力者、祓い屋としてのランクアップ。最初で最後のご先祖さまからの贈り物。

立ち上がったわたしは鬼を見る。

鬼はさっすきの嗜虐的な笑みを引つ込め、顰め面をしていた。

狐が腕を広げる。広げた掌に青白い炎が生み出された。狐火か。

「よいか、小娘。儂らが死ぬか、儂らが殺すかじゃ。何も考えるな。ただ殺せ。奴を殺せ。殺せ」

暗示をかけるように狐は繰り返した。わたしも心の中で繰り返した。自分に暗示をかけるため。

痛みや恐怖、困惑、そういうものを忘れるため、ただ狐の言葉に身を委ねた。

——激しい戦いの末、わたしたちは鬼を滅することに成功した。

両腕が千切れ飛び倒れ伏す狐の傍で、傷だらけのわたしは座り込んでいた。肉が削げた箇所もあるが、なんとか五体満足の状態だ。

目の前では腹に大穴が開いた鬼が仁王立ちしていて……その腹の傷が徐々に広がり、光の粒子となって崩壊していく姿を見つめている。

やがて鬼の体のすべてが崩壊し、その光がわたしと狐に流れ込んできた。

「……」

お父さんの気配が完全に消えた。

鬼が消えるときに少しだけ現れて最後の言葉を遺してくれる、なんてこともなかった。鬼の消滅と共に、お父さんの霊力も消えた。

わたしは茫然と鬼の消えた虚空を見つめ続けた。

——それがわたしと狐……妖怪退治屋を生業にすることを願った女と、『最後のあやかし』の出会いであり、これより続く、世界の存亡をかけた長い戦いの幕開けだった。

「変な夢、見たな……」

どこかの病院の、真夜中の病室で、金髪の少女がトイレへと立った。

## 巫女・妖狐7 / ヤンキー少女

食事と寝支度を終え、オレ達は再び会議をするために集まった。

食事の際、神主さんの御飯だけ女性陣と比べてもさらに少なかつたのは、きつと胃の調子が悪いからだろう。

神主さんと涼音が食事の準備をしてきている間、オレと雅さんは境内の片づけをしていた。雅さんはオレと一緒になら喜んで、と嬉々として受け入れてくれたが、どこまで本音かは分からない。垣間見える本性からすると、「なんで儂がそのような……」的なことを考えているかもしれない。実際その通りではあるので、そこはオレも頭を下げたお願いをした。

昼間は人影の一切が無かったが、掃除中はたびたび参拝客の姿も見えたので、もしかしたら魔人が例の如く人避けの結界のようなモノを発動していたのかもしれない。

「改めて、これからの方針について話をしよう」

神主さんが言つて、オレも頷く。

とんでもないことに巻き込まれてしまったが、致し方ない。

いつの間にか、神主さんの口調が敬語ではなくなっていた。神主さんの中でオレとの距離が縮まったということだろう。

「先ほどは少し話がズレてしまったが、東堂君の体質について理解を深めておきたい。私は恥ずかしながら戦力には到底なり得ないし、涼音は発展途上。これは私のせいでもあるが……。頼れるのは東堂さんの体質だけということになる」

あえて雅さんのことを外したのは雅さんが胡散臭いことと、人間側の戦力だけを数えたかった、という意味でかもしれない。

妖怪なんてオレからすればお伽噺の存在だが、かつて実際に存在し脅威を振りまいていたんなら、妖怪と密接に関わっていた鈴院家にはきつと、妖怪の危険性について記された書物みたいなものが残されているんだらう。だから神主さんも涼音もオレ以上に妖怪を警戒するし、敵視しているんだと思う。

それはそれとして、雅さんも割と危険な類の妖怪だとは思うが。



人を殺すとか、そういうことをしたって話は聞かないけど、人、特に男性の悩みや欲望に付け込んで取り入っているというのがね……。雅さんは自称弱い妖怪だったという話だから生き残るためには致し方ない部分があったのかもしれないけど、どうだろう。

昔の狐の妖怪には傾国なんて言葉も使われていたはずだし、国とまではないかとも、家庭の一つや二つ崩壊させたなんて悪事も働いているかもしれない。引っかかる男もどうかと思うけど、それだけ雅さんの手練手管が優れているとも言えるだろうし。

「とはいえ、昼にお伝えしたこと以外に新しいことは特に……」

神主さんが唸る。

「一般社会では認知されていないような存在を拒絶する体質。しかし可能性の話として、車や拳銃による被害も防いでいる……。私としてはまさに神の加護を受けた者あるいは現人神としか思えない。その善良な性根もその影響と考えれば……」

「ありがたいお言葉ですが、さすがに持ち上げ過ぎですよ」

神主さんからの評価がやけに高いからくすぐりたい。

「ところで、神様っているんですか？」

「分からない。私は存在すると信じている。霊能力というものもあるし」

「そうですか……。妖怪がもう雅さんと御柱さん以外いないなら、そっち方面で、と思ったんですが……。仕方ありませんね」

「そうだな……」

涼音が手を挙げた。伊達メガネを外し、髪を降ろしている。印象が違つてちよつと目を惹かれる。

「なんだ、涼音」

「雷留君の体質って名前が長いでしょ？ 二つ名みたいなの付けた方がいいかなつて。考えて来たの」

神主さんが「マジかこいつ」みたいな目で涼音を見て、オレの方を申し訳なさそうに見た。

「構いませんよ。オレも『異変に対するかなり強力な抵抗力』と毎度言うのはめんどろですし」

「能天気で申し訳ない……」

神主さんがため息を吐く。

「いえ。明るくて可愛らしいと思います」

「……っ」

雅さんが表情を顰めた。

嫉妬しているのか、嫉妬している演技なのか。演技だと思うけど、まあ徹底しててすごい。

涼音が恥ずかしそうにやけている。可愛らしい。

「涼音、教えて貰えるかな？ オレの体質の通称」

「うん。雷留君の体質の名前は……『一般領域』！」

……。

「……」

「……」

「……」

「雷留君の周りを一般常識に落とし込み、異変を無力化させる領域を作り出す力！ どうかかな？」

別に変な領域を作り出す力なわけじゃないけど。

「……」

「……」

「……」

「……？ ノーマル・エントランスとかの方が良かったかな？ それとも異変抗体とか、どう？」

「……」

「……」

「……」

雅さんは興味が無いのか目を瞑っている。

神主さんとオレでアイコンタクトをした。おめーの娘だろなんとかしろ、と意を乗せると、すまないと返って来た。

「異変抗体にしようかな。色々考えてくれてありがとうね、涼音」

ちら、と神主さんに視線を送る。

神主さんは頷くところ言った。

「さて、魔人にどう対抗するか、だが……」

さつきと話を進めて欲しいという意図を汲んでくれた神主さんが切り込む。

「確証がありませんし、オレ個人としては出来れば取りたくない方法ではありませんが、魔人に攻撃させてオレの体質で……」

じつと涼音が見て来る。

「異変抗体で爆散させるのが手っ取り早いかなって思いますね。できればやりたくはないですけど、他に方法が無いなら……」

「君の体質……」

じつと涼音が神主さんを見る。

「異変抗体……は、自覚なく作用するんだったな。確かに、いぎというときに作用せず無防備を晒すことになる可能性があるとなればリスクは高い。異変のすべてを対象とするのなら、近くにいるその妖狐が吹っ飛んでいない理由も気になる。何か条件があるはずだ」

「敵意の有無なのかもと思いましたが、車や銃の被害を防いでくれたことも異変抗体によるものなら……」

「君が危険だと感じたもの？」

「ただ、あんまり危険だっただって感じたことってないんですよオレ。死ぬかも、とは頭では思うんですが、危険として捉えられないというか」「うーん。ますます分からない。君の精神状態に反応して作用するものではないのか……。それともその体質が君の精神に作用している……？ 過去、感情の高ぶりによって霊能力の質が変わるという術師もいたらしいが……そうでもない、か」

神主さんが腕を組んで悩まし気に言った。

「やはり神の加護ではないのか？ 神が東堂君を見守っていて、なにを弾きなにを滅するか、神が判断されている」

「どうなんでしょう。否定はしきれませんが……。オレを守ってくれているなら、そもそも厄介事に関わらせないと思うんですよ。結果なんてものを突き破って戦場に突っ込んでいるわけですし」

「それもそうか……」

神主さんが悩まし気に唸る。

「どうしたものか。東堂君からは本当に霊能力の類を一切感じないからな……。私の感じ取る力が弱いということはあるが、涼音もそれに関しては同じ意見だ。その体質……」

涼音の視線を感じ取った神主さんが片眉をあげる。

「異変抗体の存在は信じるが。試すわけにもいかないしな」

「そうですね。神主さんや涼音が爆散するところは見たくありません」

「となると、ぶつつけ本番になる、か。ジョーカーよりも扱いが難しい。基本は涼音と狐で何とかしてもらおうのが基本方針になる。しばらくの間、涼音と狐はここから出ない方が良さだろう。魔人の侵入を許し、境内を覆う結界も破壊されていたが……霊脈に立つこともあつて、霊能力者の力を押し上げる機能は生きている。万全の態勢で迎え討つならここが一番だ」

神主さんはオレを見て言った。

「東堂君さえよければ、しばらくここで暮らしてはどうだろうか？」

「……」

「不都合があるかな？」

「不都合、というほどじゃありません。ただホームシックが……」

「もう、か？ 早いな……」

住み慣れた家が一番なので。

とはいえ仕方ないところもある。しばらくはお邪魔することになるだろう。

そして今後の話をもう少しして、今日は解散ということになった。

最後に、オレはお願いをした。

「神主さん、涼音。お願いがあつて。雅さんのこと、名前で呼んでは貰えませんか？ 狐、というのは蔑称に聞こえてしまつて。あまり良い気がしないものですから」

神主さんは優しく笑うと頷いてくれた。

涼音は不服そうではあつたが、一応の了承を示してくれる。

そして神主さんが席を立ち、三人が残され、オレも与えられた部屋に向かおうとして……涼音から待たされたが掛けられる。

「あ、雷留君。ちよつと……」

「どうかした？」

「忘れてるよ？」

「忘れてる？ ああ……」

涼音の手に握られている携帯に気づき、言わんとすることを察する。

「そうだったね」

オレも携帯を取り出し、互いのコードを読み取って連絡先の交換をする。

涼音はだらしなく笑っている。

「ついに、『フレンドリスト』が二人に……っ！」

……。

オレと神主さんの2人ってことなのかな。

まあ、オレも似たようなものだけど。

なんか尻尾が増えたときの雅さんみたいな喜び方で微笑ましい。

「じゃあ、また明日」

「また明日！」

オレの挨拶に元気よく帰してくれた涼音に手を振って、オレは改めて部屋へと向かう。

足音がする。

立ち止まると足音も止まった。

振り返ると、当然のように雅さんがいる。

「雅さん？」

「今宵はわたくしめに、東堂様の無聊をお慰めさせていただきます」  
ぶ、ぶれねエな。

人の家だよ？

妖怪って凄い。改めてそう思った。

でも、長い人間社会から隔離されてたようだし、価値観が昔ってことなのか。

昔の日本ってそんなに性に奔放で寛容だったのかな？

それはさすがに昔の日本人に失礼か。

「狐エ！ お前はこつちだろう！」

どどどどど、と足を音を立てながら涼音が走って来る。

涼音は雅さんの腕を引っ張ると、引きずって行く。

「雷留君！ また明日！」

「おのれ小娘が儂の邪魔を嫉妬ならば三人で」

「ぎげんな淫乱狐！」

騒がしい二人がいなくなるのを見送って、オレも部屋へと戻った。  
今日は疲れた。ゆっくりと休もうと思う。

夜中、体を感じる妙な違和感に気づき、目を覚ました。  
くすぐったいような、気持ちいいような。

太ももを筆で擦られているような感じと、腹を柔らかいものでさす  
られているような感じ。目を開けて、布団を持ち上げ、中を見る。

雅さんが居た。

夜這いか……。

この狐……すごいな……。

さすがにオレの異変抗体は作用していないらしい。異変つちや異  
変だけど、オレとしては有りなシチュエーションだからかもしれない。  
い。

ただそれは恋人同士のじゃれ合いという意味であって、他人の家で  
付き合ってもいない人にそれをされるのはちよつと敬遠したいとこ  
ろだ。

「雅さん。オレはする気はないですよ」

「東堂様……どうかお情けをわたくしに……」

「く……っ」

雅さんが色っぽい目でオレを見る。

オレの腹に頬ずりをしたかと思えば、生暖かいざらついた感触がへ  
そ周りを擦った。

舐められた。

やばいつて。

柔らかい感触が下半身に広がっている。

雅さんは全裸だった。

「雅さん……。もしかして、一人で寝るのが怖かったりします？」  
ぴたり、と雅さんの動きが止まる。

これは本当なのかもしれない。

まあ魔人に寝込みを襲われないとも限らないもんな……。

涼音や神主さんという選択肢は……。ないか。ここで雅さんが神主に色仕掛けをするとオレに好意を持っているっていうムーブが破綻するし、涼音は雅さんには同情的ではあるけどアレだし。

「……。童のようでお恥ずかしゅうございます……」

オレの腹の上で雅さんが身じろぐ。指先でオレの腹でぐるぐると円を描いているようだ。擦りたい。

「今日だけは……。一緒に寝るだけなら良いですよ。あなたも色々大変でしたもんね……。ただ、服は着てください」

仮に雅さんが男だったとしても、今日は甘んじて添い寝を受け入れよう。

雅さんがもぞもぞと布団を出た。

近くに畳まれていた服をそそくさと着だし、オレの布団の中に改めて潜り込んできた。

強硬手段を取るよりは妥協案に乗った方が良いと思ったのかな。オレとしてもその方がありがたい。放置すればオレも乗ってしまうだろう。だからこそ、オレはそうなる前に強い拒絶を雅さんに示すしかなくなるからね。

「雅さん、おやすみ」

「東堂様は……」

「んー？」

「いえ、なんでもありません……」

なんだろう。何を言い掛けたのか気になるけど、眠い。  
意識が暗転した。

翌朝。

食事のとき、涼音にめっちゃ怒られた。

「誓ってやましいことはしていないよ」

「そういう問題じゃないよ、雷留君！」

「分かってる。自宅で他人がつて、考えるだけでも気分は良くないよね。だけど雅さんも色々あって不安だと思ったから、昨日だけの約束で添い寝だけしたんだ。ごめんね。神主さんも、風紀を乱すようなことをして申し訳ありません」

「う、うむ……」

神主さんはちらちらと雅さんの方を見ている。

「お父さん？」

涼音はその下心を感知したのかどすの効いた声で釘を刺し、神主さんは顔を隠すように茶碗を持ち上げ、ご飯を掻き込んだ。

その後、神主さんと二人きりになる機会があつて、ふいに聞かれた。

「本当に……していかないのかね？」

「……」

割と下世話な人だった。

「してませんよ」

「ううむ……」

神主さんが悩まし気に唸る。

まあ確かに雅さんつて絶世の美女ではあるし、体も見たから思うけど、かなりプロポーションも良い。誘われて断る男の方が少ないと思う。

「雅さんとは会つて二回目です。今後絶対はない、とは断言しませんけどいくらなんでも性急すぎますから。オレはそういうのは好きじゃないんです。なんとというか……。急に近づかれ過ぎるとかえつて距離を取りたくなる質でして」

「まあ、大多数のモノはそうだろう。性欲が勝るといっただけで」

「神主さんは性欲が勝る側だと？」

「若い頃なら分からなかったが……今はさすがにな」

神主さんは苦笑した。

そして胸元を摩る。胃の不調は変わらないようだ。可哀そうに……。

「そうだ。言い忘れてました。オレ、昼過ぎには出ないといけないん



です」

「用事かい？」

「ええ。バイトのシフトが昼から入っているの」

「バイト……？ 休めないのかい？ 昨日の今日だから……」

「すみません。他の人と交代での出勤なので、動ける人がオレしかいなくて、どうしても丸々は休めなくて。何かあれば連絡をください。なんとか戻ってきますから。それに、しばらくご厄介になるわけですから、着替えとかも取って来たいですし」

「そうか……。いや、そうだな。いつ現れるかも分からない魔人に怯えているよりは健全、か……。君も気を付けて」

「はい。神主さんも」

その後、身支度を整えてスーパーのバイト先へと出向く。

東堂家からならともかく、神社からだとは交通費が掛かるのがちよつとネツクだな。引越したというわけではないから、さすがに交通費の支給はして貰えないだろうし……。

作業服に着替え、こっそりと携帯をポケットに入れる。

本当はダメだけど、今日もいた社員さんに「急用が入るかもしれない」と説明し、マナーモードにして緊急の連絡以外では決して触らないと誓い、特別に許可を戴いた。

緊急の連絡もなく退勤時間を迎えたオレは、タイムカードを切り、社員さんや同僚に挨拶をしてバイト先を後にする。

日が落ちる時間も早くなって来た。少し前まで明るかったのに、もう夜の帳が降りようとしている。

一度東堂家に戻り、泊りの準備もしたい。神社に戻るのには完全に日が暮れてからになるだろう。

徒歩で帰宅し、何気なく茶都山家を見る。電気が点いているし、車もある。問題は特になさそうだ。良かった。茶都山家のお二人は異変に巻き込まれたとのことだったから心配だ。茶々ちゃんたちの話だと、異変に巻き込まれた際の記憶は既に消されているらしいから、もう魔獣に襲われることも無いんだと思うけど。

茶々ちゃんが傍にいるってだけで危険なら……それはかなり問題

だよな。小さい子が両親の元を離れるわけにもいかないし。とはいえ、茶々ちゃんが魔法少女になってから結構時間が経ってるから、さすがにそれは希有だろう。

家に入り、電気をつける。どこに仕舞ったか、大きめの旅行鞆を引つ張り出して、衣服や生活用品を乱雑に放り込んでいく。

携帯の充電器。必需品だ。歯ブラシ……は新しいのを買うとして、冷蔵庫の中の食品は……冷凍食品はそのまま良いけど、期限が近くて持っていけそうなものは持って行こう。紙パックのリンゴジュースはその場で飲み干した。胃がちやぽちやぽする。

ふいにポケットが震えた。

携帯電話だ。

魔人が出たのか。

すぐに取り出し、ディスプレイを見る。

——ふみやしのぶ  
譜宮信乃。

なんだ。

信乃ちゃんか……。

ディスプレイの通話ボタンをタッチし、電話に出る。

「やあ、信乃ちゃん」

「ライルくん」

信乃ちゃんの声は不機嫌そうだった。

一昨日も昨日も今日も面会に行っていないから怒ってるのかな。

「いつ来んの」

「いきなりだね。どうしたの?」

「来ねーからじゃん」

信乃ちゃんは不貞腐れているようだ。

「オレも用事があるから毎日に行けないうよ。ごめんね」

「あたし、退院決まった」

信乃ちゃんはぶつきらぼうに言った。

手続きとかは弁護士さんをお願いしてたからオレは知らなかったけど、この三日でだいぶ進展したようだ。

「そうなんだ。おめでどう。よかったねえ」

「よくねーし、めでたくもねーよ！」

信乃ちゃんが怒鳴る。咄嗟に電話から耳を離し、再び近づける。  
なるほど……。

退院して親元に戻るのが嫌なんだろうな。そもそも信乃ちゃんが  
大怪我をした一連の事件はお母さんに端を発したものだし、拳銃を  
持っていたあの半グレも潜伏したままだ。あのケガで警察の捜査を  
どう掻い潜っているのか疑問だけど、信乃ちゃんに報復をする機会を  
虎視眈々と狙っている可能性もある。

信乃ちゃんは保護施設とかに入ることすんなり了承するような  
子でも無いし、弁護士さんの意見と折り合いがつかないのかもしれない。

色々とオレに相談したいことがあつたのになかなか来ないから痺  
れを切らしたつてところか。

「分かった。明日行くよ。直接会って話がしたいんだよね？」

「……」

疲れたような吐息が一つだけ聞こえた。

「大丈夫？」

「……。ごめん」

「大丈夫。大変なのは信乃ちゃんなんだから」

「……ごめんね」

「はは、大丈夫だった」

思いつめたような信乃ちゃんの謝罪の言葉を、気にしてないと笑い  
飛ばす。

「かつとなつただけでしょ？ それだけ思いつめてるってことなんだ  
と思うよ」

多感な時期だし、仕方ない。

いずれ落ち着くときも来るだろう。

「またアイス買って行くよ。バニラで良い？」

「ライルくん……。あたし……」

「大丈夫。自分を責めなくて良い。前も言つたろ？ 信乃ちゃんは充  
分頑張つて来たんだから。今は休んで良いんだって」

甘えるのも休むことだろう。

気を張らなくて良い、感情を素直に吐露できるってだけでも、心は休まるものだ。

「桃香ちゃんは元気にしてる?」

「うん」

「明日、必ず行くから」

「うん」

「あまり思いつめないで。きっとなんとかなるからさ」

「うん……。ありがとう……」

「それじゃあ、また明日」

「うん。また」

そのとき、電話の向こうから乾いた破裂音のような音が響いた。

「なに、今の」

「分かんない……。でも……」

信乃ちゃんが口籠る。

オレも多分同じことを考えてる。

以前、聞いたことがある音だったから。

「拳銃?」

「あたしもそう思った。は……? うそだろ……?」

「どうかした?」

「今、窓から外見てんだけど……。病院の周り、凄い数の車が……。あいつ……」

「どうしたの? あいつって?」

「この間の、半グレだ」

オレは家を飛び出した。

何ができるかも分からないけど、信乃ちゃんの所へ向かわずにはいられなかった。

大通りへ走り、タクシーを拾いたい。

こういうとき、バイクや車があればと思わずにはいられない。

「信乃ちゃん、今向かってる。きっと病院の人が警察に連絡してくれてると思うけど」

いつ来るかは分からない。

工場跡での一件のときは、警察の到着がえらく遅かったから。

「狙いは君たちだと思う。後先考えてない無茶苦茶な行動だ。だからこそ何をしてくるか分からない。桃香ちゃんと一緒に隠れて。携帯もマナーモードに、バイブも消して。メッセージで連絡を。いいね？」

「マジかよ……。あいつ、めちやくちやだ。撃ちやがった！ 病院の人を！」

電話の向こうで信乃ちゃんの声がヒートアップしている。

発砲って、マジで無茶苦茶じゃねーか。狂ってるだろ。

それだけぶちぎれてるってことか……。無関係な人まで巻き込んで……。

不味いな。

この子は根っこの部分で正義感が強い。若さゆえか無鉄砲さもあ

る。半グレたちの狙いが自分の身だと分かっているこの状況で、周りの人に被害がでるのを見過ごせる子じゃない。

「信乃ちゃん、聞いて。聞いて欲しい。今起きていることは君のせいじゃない。悪いのはすべて半グレだ。いいね？ 絶対に」

「ごめん。ライルくん」

「信乃ちゃん!!」

電話が切られた。信乃ちゃんはきつと、半グレたちを止めるために走り出したんだ。

「くそ!!」

怪異の中では一切乱れなかったオレの感情がざわついて来る。

落ち着こう。

焦っても良いことは無い。

タクシーが中々拾えないのがもどかしい。

オレは手を挙げたまま警察に通報した。警察は既に情報を持っていたようで、派遣の準備中とのことだった。

ようやくタクシーを拾う。

どうでもいいことだが、奇遇にも以前お世話になったタクシーの運転手さんだった。

世間話をする気にも成れず、話しかけられても粗雑な返答になってしまったことは申し訳ない。

病院に押しかけている奴らがどれだけの人数なのか分からない。

オレ一人行ってどうなるわけでもないかもしれないけど、行かないよりは行った方が良さだろうと思う。

問題は、行ってなにをするかだ。

警察が来るまでの時間稼ぎ。

消火器で噴射攻撃とか……？

……。

「すみません、運転手さん。1000円ショップに寄って貰って良いですか？」

ライターオイルを買い占めようと思う。

## ヤンキー少女2

信乃ちゃんとの電話からおよそ30分。

病院の前では半グレの仲間たちが大量の車でバリケードを作り道を封鎖していて、大混雑していた。

警察や消防はまだ来ていないようだけど、どうなってるんだ？

余りに遅い。病院への銃撃なんて稀に見る大事件だぞ。

病院内の人がどう対応しているかは分からないけど、ためらいなく拳銃を発砲するような奴を相手に出来ることなんて、自分の身を護る以外にはないだろう。つまり信乃ちゃんは警察も来ないまま、およそ30分孤軍奮闘を強いられているってことだ。

……。

行くしかないよなあ……。

うーん……。

どうなるだろう。

名前を捨てて街を出る、くらいは考えておこう。

本当に、どうしてこうなったのか。こういうこととは無縁の生活を送っていたはずなんだけど……。

まあ、これもオレの行動の結果だ。今ここで中途半端に投げ出せば死にはしないだろうけど、大きな悔いと未練が残る。やると決めたかには、最後までやり遂げよう。

パンパンになった買い物袋を手に提げて、オレは人の壁を作っている半グレたちの前に歩み出た。

「なんだあ？ てめー、見て分かんねーのか。取り込み中なんだよー！」

人相の悪い男が、手に持った鉄パイプのようなものを見せびらかすように動かして、にやにやと下種な笑みを浮かべてオレに近づいて来る。

顔が近い。タバコ臭いし息も臭い。

「下っ端のチンピラに用はないよ。どいてくれる？」

「あゝあゝ!?!」

「こんなところで人払い役させられてるってことは下っ端ってことだ

「思ったんだけど、違ったのかな？」

「んだあてめえ!!」

チンピラが鉄パイプを振りかぶった。

オレは買い物袋を提げた方の手に持っているライターオイル入り100円シヨップ霧吹きトリガーを引き、中身をチンピラに向けて噴射した。

「ああ、目が!! いてえ、いてえ!!」

「そうだよ。痛いよね。ごめんね……。なるべく早く目を洗った方が良く思うよ」

「あ、あ、あ!! ああああ!!」

チンピラが前屈みになって顔を押しえて呻きながら後ずさる。

「なにやっつてんだてめえ!!」

別のチンピラが襲い掛かって来ようとしているので、そっちにも霧吹きを噴射する。

チンピラが立ち止まったため顔にはかからなかったけど、服に霧が染みこんだ。立ち昇る刺激臭に気づいたのか、チンピラは鼻をすすりと鳴らすと、弾かれたようにオレを見た。そして自分の服を見つめ、またオレを見る。今度は化け物でも見るような目で。

「が、ガソリン……? うそだろ……!?!」

下種な笑みを浮かべてこちらを見ていた周りのチンピラたちがどよめく。

「なんだあいつ」「ガソリンってまじ?」「ガソリンはやべえだろ……正気じゃねえよ」「狂ってんだろ……」「どこの組の奴だ?」

失礼な。オレは一般人、カタギだよ。

オレは霧吹きを持っていない方の手をチンピラに向けて伸ばした。チンピラの視線がオレの掌からはみ出ているライターに吸い込まれる。

「服……、汚してしまつて申し訳ない」

ライターのスイッチに指を乗せ、親指に力を籠める。

「なつ、なん、なんだお前! イカれてんだろ!? 頭おかしいんじゃないのか!!」



「その言葉はあまり好きじゃないんだけど……そういう話をするつもりも無いんだ。通らせて貰いたくて。いいよね？」

ライターを掲げたまま前に進むと、チンピラが怯えた様子で道を開けてくれた。

通りすがりに一言、オレは言った。

「どいてくれてありがとう」

「く、狂ってんだろ……！　頭おかしい、こいつ……！　……おい、大丈夫かよ」

チンピラはチンピラなりに仲間意識もあるようで、服が汚れたチンピラは、目を押さえて蹲ってしまった人に声を掛け、怯えたようにオレを見た。

先へ進む。

途中、何人か近づいて来ようとしたが、霧吹きを噴射して中のライターオイルを引っかけておいた。

仕方がない。

大人数を想定した自衛の手段がこれ以外に思いつかなかった。

でも、悪いのはイカれたことをしてる君らだと思う。

小走りに先へ進むと、病院の正門付近に人影が見えた。

チンピラとはどうも雰囲気が違う男達が誰かを囲むように並んでいて、その後ろに見覚えのある男が立っている。あのときの半グレだ。片腕を包帯でぐるぐる巻きにしている、手の先はよく見えない。

「変な奴がー」

「あ、あ？」

オレの後ろから大声で半グレのボスと呼ぶ声があった。オレはボスに駆け寄りながら買い物袋からボトルを一本取り出した。これも100円ショップで買ったやつ。着脱式の蓋をぽん、と外し、中のオイルをボスへとぶん投げ、中身をぶちまける。

ボスは咄嗟に両腕で顔を庇ったあと、オレに銃口を向けてくる。

「こんにちは。それはライターオイルです。あまり詳しくはないんですけど、発砲したら火だるまになるのかなって思います」

「何者だ、お前は……」

ボスは鼻を鳴らし、体に染みこんだ液体が引火性の高い液体だと理解したようで、愕然とした様子でオレを見ている。

オレは病院の出入り口前で血塗れで蹲っている信乃ちゃんを一瞥した。

せつかく退院を目前に控えていたのに、また重い怪我を……。

「信乃ちゃん、助けに来たよ！」

信乃ちゃんは痛みが酷いのか、緩慢な動作で顔をあげる。

「ら、ライル……くん……っ!!」

信乃ちゃんは痛みかそれとも別の理由か、顔をくしゃくしゃにしてオレを見ていた。

見ているだけで痛々しい。もしかしたら、どこか撃たれてるかもしれない。出血がひどい。

「無視をするなあ!!」

ボスががなり、銃口を向けて来る。だが引き金からは指を離していた。燃えるのは嫌なようだ。

オレはライターのスイッチに指を掛けて腕を突き出し、病院へ向けて叫んだ。

「彼女の手当てをお願いします!!」

病院から見知ったナースさんやドクターが飛び出て来て、信乃ちゃんを連れて行く。

「らい、る、くん!!」

信乃ちゃんがオレの方へ弱弱しく腕を伸ばしながら運ばれていくのを見送った。

「……狂ってるのか？ いきなり出てきて、ふざけたことを……っ！」

「……」

「なに黙ってたんだ！ ああ!？」

「……」

いや……、単にお前と喋る気もないんだわ。

多分、何言っても話は通じないと思うし、舌戦をする気も、説得をして改心して貰おうとも思っていない。このまま警察が来るまでここにおいて、法の裁きを受ければいいと思う。

「おい、お前ら！ こいつ囲め!!」

「消火器の用意をお願いします!」

オレは周りに集まってきているチンピラへ霧吹きをかけまくりがら叫んだ。

そして買い物袋の中の瓶を取り出して蓋を外し、容器ごとライターオイルを打ち水のようにそこら中にまき散らす。そして空になった買い物袋をチンピラたちの方へ投げ、ライターを突き出してこう言った。

「言っておくけど、これは脅しじゃない。お前たちが強硬手段に出るなら迷わず火をつける。オレも無抵抗で殺されたくはないからね。一応、消火器は用意して貰ったよ」

「てめえらビビってんじゃねえぞ!!」

「火傷は辛いつて聞くよ。オレやこいつに命を賭ける価値があるのか、考えてみて欲しい」

チンピラたちが互いに顔を見合わせながら、その場で停滞する。ボスは苛立たし気な様子で舌打ちをした。

「なんだてめえは!! どのモンだ!!」

「……」

「無視してんじゃねえぞ!!」

ボスが拳銃を握ったままオレに駆け寄って来ようとする。

ポケットから蠟燭を取り出し、ライターで火を灯した。

「脅しじゃないって言ったはずだけど」

「ま、待て！ 待て待て待て！ 分かった！ 落ち着け！ そもそも、お前だって無事じゃすまねえだろ……!」

拳銃を握ったままボスが両手を前に突き出してオレを制止する。

お前が警察が来るまでそこで待ってればそれでいいんだよ……。

「……」

「な？ 落ち着けて」

「……」

オレは何も言わずにボスを見つめ続ける。

半笑いだったボスの表情がじわじわと恐怖に歪んでいく。

「ようやく分かって貰えたみたいでなにより。なるべく一線は越えたくないから、逃げないでもらえるとありがたいかな。素直に警察のお世話になった方が良いと思う」

「それは……逃げたら燃やすってことか？」

「そうだね。信乃ちゃんのことを忘れろ、なんて言っても信用なんてできないし」

「お前、あの女のなんだ。なんでそこまでする？」

「……」

そういう問答に答える気はない。

黙っているオレに、ボスが声を震わせて言った。

「狂ってる……」

「狂ってる？ いや、オレは『普通』だよ」

中学生の女の子にここまでやるお前の方が狂ってると思う。

青褪めたな。

ボスが目を見開いてオレを見ている。

チンピラたちも怯えたようにぎわめいている。

いや……どう考えても病院にカチコミ掛けてくるやつらの方がおかしいだろ。自分のことを棚に上げるのはよくない。

サイレンが近づいて来る。

「くそ……なんでこんな……。さっさと切り上げるはずだったのに……」

そのとき、乾いた破裂音が響いた。

「う、あ……」

オレの目の前で、ボスがゆっくりと崩れ落ちる。

肩から噴き出した赤色。

撃たれたんだ。

誰に？

音のした方向を見た。しかしそれらしい人影はない。向こう側は救急の入り口が病院の本館建物から飛び出すように作られているから、隠れられると分からない。多分、建物の陰から撃ったんだと思う

けど……。次から次へとよくもまあ……。

警察の人が走って来る。機動隊ってやつかな。シールドを構えて突っ込んできて、チンピラたちを次々に押さえ込んでいく。

オレの周りにもシールドを構えた人たちが集まって来た。

警察の人達は「こいつはどっちだ……？」と迷っているようだったので、手に持っていた蠟燭の火をふー、と息でかき消してポケットにしまい、両手を挙げた。

「ご苦労様です。オレは通報者です。あなた方が来るまでの時間稼ぎをしていました。そこに倒れている人、どうやら誰かに撃たれたみたいで、逮捕するより治療をした方が良いと思います」

警察の人達が顔を見合わせる。

……。

結局、オレも警察に連行されることになったが、とりあえず一件落着くということの良いだろう。あとは信乃ちゃんが無事なら良いけど……。

警察署から解放されたのは夜遅かった。目撃者の証言もあって、それでもかなり早めの解放なんだと思う。警察の人からはかなり強めに注意を受けたが、来ないのが悪いだろ。信乃ちゃんがどうなっていたか分からないし。

署を出てからようやく、電源を切らされていた携帯の電源を入れた。

……。

着信履歴。結構な数だ。

しかも、電話の主は……神主さんだ。

着信時間は電源を切った直後。

嘘だあ……。

オレはタクシーを拾い、神社へと急行した。

## 巫女・妖狐 8

急いで駆けこんだ神社は酷い有様だった。

昨日崩れたものとは別の無事だったはずの灯笼は崩れていたし、扁額がなくなってしまうた鳥居は根元から圧し折れて倒れていたし、半壊した社は屋根が消し飛び、吹き抜けのようになっていた。

鳥居から社に続く石畳の道の上で、涼音と雅さんが力なく倒れており、神主さんがその傍にしゃがみ込んでいるのが見えた。

「すみません、遅くなって。魔人が出たんですか？」

「ああ」

オレは涼音の傍で救急箱を広げていた神主さんの傍に駆け寄った。倒れている涼音は意識が無いようだ。巫女服は血塗れで、怪我を負っているのは間違いないだろう。

オレを見上げた神主さんは困惑した様子だが、その瞳の中にどこかオレを責めるような色が見える。

神主さんの様子や周囲の状況的に考えると、オレが到着したのは、恐らくはすべてが終わってからのことだろう。連絡を貰えればすぐ戻ると言っておきながら、いざとなって連絡すらつかなかったわけだし、涼音も軽くない怪我を負っている。

責めたくなる気持ちも分かる。

「すみません。トラブルがありまして、どうしても電話に出れず。魔人はどうなりました？」

「涼音と雅がなんとか撃退したが……。この有様だよ……」

「そうでしたか」

神主さんは不服そうな様子だ。

「涼音の容態は？ 雅さんは……」

「雅は気を失っているだけだ。涼音が魔人を倒したとき、魔人が光の粒子となって雅に吸い込まれ、そうしたら雅の尾が増え、傷が治った。君の言った通りだった。涼音も同じだよ。雅のように全快とはいかないようだが、見た目ほど酷い状態ではなさそうだ」

「そうですか……。警察と、救急車を呼びますか？」

「その発想は無かったな……」

神主さんが驚いたように言った。

なんでその発想が無いんだ。

まずそっちだと思っただけだ。

「いや、止めておこう。警察はその後が面倒だ。政府にもはや妖怪などと信じる者はいないだろうし、なるべくなら人には知られない方が良い」

「それはどうして？」

「あれは……常人には耐えられるモノではない。住む世界が違う……まさに魔の人だ。私は鬼と対峙したとき、一瞬で意識を失ったが、アレは恐らく、生物の自己防衛機能によるものだ。それを、今回の魔人を直視し、分からされた。私の霊能力を容易に貫通し、錯乱状態になりかけた。常人がああ魔人の放つ禍々しい魔の力の波動を黙視したり近距離で感じれば、恐らく正気は保てない」

……。

魔人ってそんなにヤバいの？

オレ、天狗のときも鬼のときも全く感じなかったけど……。

「確かに、雅とは違う。アレは妖怪ではない。魔の人だ……」

神主さんの声は僅かだが震えていた。

思い出しているからだろうか。手も震えているように見える。それほど恐ろしい存在なのか……。

「情けない話だが……涼音が戦っている間、私は何もできなくなった。竦み上がり、腰を抜かしていることだけしか……」

神主さんが畏怖するように見上げた。

「君は本当に、あの魔人を前に動じず、何もせず、滅ぼしたというのか……？」

「ええ、まあ……」

神主さんは瞳を揺らし、小さく震える吐息を漏らした。

「雅の気持ち分かる。君は……。いや、なんでもない……」

神主さんが躊躇うように目を逸らした。

……。

つらい。

オレが変な目で見られているってこともそうだけど、神主さんの心が折られていることがつらい。それほどヤバい相手だったのか……。

「たいへんだったんですね……」

「大変ななんてものではない。今でこそ2人とも全快に近い状態だが……。雅は両腕を引きちぎられ、横腹に穴を開けられていたし、涼音も片目を……」

「それほどですか……。本当に申し訳ない。オレが居たら、もしかしたら……」

「すまない。君に継ることも、責めることも筋違いとは分かっている。分かっているんだが……言わせて欲しい。何を、していたんだ……？」

「いえ……。娘さんが目の前で酷い目に遭うことを、もしかしたらそれを止められたかもしれない存在が、本来ならばいるはずのときにいない。当然の思いだと思います。実は……」

言い訳をするつもりもないが、オレがどういう状況だったのかを伝えた。

全てを伝え終わると、神主さんは信じられないものを見るようにオレを見て言った。

「君は……。なにか、そういう星の下に生まれたのか……？」

「最近までこんなことは無かったんですけどね。いや、事故のことを踏まえれば、以前からそうだったのかもしれませんが……」

「それにしても、重なり過ぎている。いや、出来過ぎている……？ いやいや、そもそも放火とは……、それ以外に方法が無かったというのは分かんないが……。もしも引火していたらどうしたんだ？」

「それは……仕方のないことだと思います。そもそも、オレとしても本当はあんなことをしたくはなかつたんです。半グレたちだけならともかく、周りの人にも危害が及びますし、放火は重罪ですから。ですが、丸腰である場に行っても、人質にされるか、袋叩きに遭うかの二択だったと思います。オレの目的は、その狙われていた子……信乃ちゃんの救出なので、それでは困ります。それに、オレも半グレたち



に目を付けられて街を出るリスクを踏まえたうえで行動していたので、彼らにも相応の報いのようなものは必要かな、と」

神主さんが揺れる瞳でオレを凝視し、唇を震わせた。

「き、君は……。いや、そうだな……。そうなのかもしれない……」

「含みがある言い方のようですが？」

「い、いや……。なんでもないと。なんでも……」

気になるが、オレが不快になる様な事を考えているんだろう。

オレを不快にさせないための気遣い……。気になるが、甘んじて受けよう。

「ところで……。一人はどうします？ 運ぶにしても、オレは人を運べるほどの力はないので、担架のようなものがあれば助かりますが」

「ああ、そうだな。私も……。担架ならある。取って来よう。少し、2人を見ていてくれ……」

神主さんがゆっくりと立ち上がり、おぼつかない足取りで離れていく。

よつぽど心に来てるな。それほど魔人が恐ろしかったのか。

それを2人で退治した涼音と雅さんは凄いね。

しかし……。これだけの被害が出るとなると、やっぱり雅さんの願いを断つたのは間違いでは無かっただろう。近所への被害も大きくなりそうだ。

あ、そうだ。

茶々ちちゃんと瑠璃ちゃんに相談してみてもいいかもしれないな。

もしかしたら、魔人が魔獣とも関連がある存在で、瑠璃ちゃんの言っていた『敵』っていうのが魔人のことだとしたら、すべてが繋がると、解決の糸口も見えるかもしれない。

小学生に頼るといえるのは、大人としてどうかと思うし、それ以前に、小学生を危険な事件に巻き込むというのも憚られることだけど、それも言っではいられない。

彩乃さんなんて即戦力だろうからできれば声を掛けたいけど、連絡先知らないしな……。

でも、彩乃さんの場合はどうなんだろう。あの怪獣たちは彩乃さん

を狙っているという話だったけど、魔人が狙っているのは雅さんだし、完全に別件なんだろうか。

よく分からないなあ。話が出来ればいいんだけど。

彩乃さんを探すにしても、茶々ちゃんに声を掛けるにしても、明日はどうしても休めない講義があるし、バイトのシフトも入ってるから、行動を起こすのは明後日以降になるかな。

でも信乃ちゃんがどうなったのかも気になるんだよな。

病院でのことだし、すぐに治療を受けてるはずだから大丈夫だと思うけど、確認はしておきたいな。でも今からまた病院に様子を見に行くのは難しい。

考えることもやることも多くて困るなあ。

悩んでいると、神主さんが担架を持って戻って来た。

2人で涼音を室内へ運ぶ。

次に雅さんを運ぼうというとき、雅さんが妙に妖艶な声を漏らし、身じろぎをした。

「雅さん、気がつかれました?」

「ん……。東堂……。?」

はっ、と雅さんが目を開ける。

「東堂様……。っ！ わたくしは……。っ！ ああ、まこと、恐ろしく……。っ！」

起き上がった雅さんが継りついて来る、

今、呼び捨てにしたよね?

やっぱり全部演技だったんだ、この狐。

意識を取り戻した瞬間にまたムーブを徹底するのは感心するけど……。

神主さんは呆れたように雅さんを見ている。

ぐい、と雅さんを引きはがし、また近づいてこられないように肩を押さえる。

そして膝立ちの状態の雅さんの頭から膝まで、見えている全身を視線でぞる。

というか、この妖怪、また裸なんだけど。

激戦で服が千切れ飛んだってことなんだとは思うけど、神主さんの言うように怪我が治っているせいで、単に綺麗な肌が丸出しになっているだけに見えて……。

「前、隠して貰って良いですか？」

「あつ。お恥ずかしゆうございます……っ」

雅さんが尻尾を動かし、恥ずかしそうに前を隠した。

昨夜のことを考えると一貫性が無いような気がしなくてもない。だけど、昼と夜で意中の相手に見せる顔を変えらるというのは、昔の日本では器量よしの女性の代名詞みたいな扱いだつたから、そういうことなのかな。

雅さんが前を隠してくれたときになつてようやく、雅さんは自分の尻尾が三本になっていることに気づいたようだ。以前のように喜び出した。

大丈夫だな。

神主さんの話だとかかなりの重傷を負つてたはずだけど、気にした様子もない。タフだ。

「雅さん、申し訳ない。肝心なときにいなくて」

「そのようなこと、おっしゃらないでくださいまし！ 東堂様はこうして駆けつけておいでくださいました。わたくしはそれだけで……っ！」

「そう言つて貰えるとありがたいけど……。本当にごめん。雅さんが辛いときに傍に居られなくて」

「東堂様……」

雅さんが呆けた表情を浮かべた。

かと思えば、感極まりましたというような表情に変化しオレに身を寄せて来ようとするので手で制す。

そして、オレと雅さん、神主さんは無事だつた建物の室内に入り、顔を合わせる。

話をするためだ。

神主さんと雅さんの話は、当然だが合致していた。

虫のような外見の魔人、強力な力を持っていて、かなりの死闘を強

いられたこと、神主さんが戦闘に於いては役に立たなかったこと。

雅さんの話だと、虫の魔人は上位層ではあるが、上位層の中では下位とのことだ。天狗と鬼が上澄みも上澄みということ、あの2体よりも強力な魔人はそうはいないらしい。虫の魔人は先走ったんじゃないかというのが、雅さんの見解だった。

それを聞いて改めて思ったのが、魔人はめっちゃくちゃ強さらしいのに、やろうと思えば組織として行動も出来るんだなってこと。

今回はたまたま虫の魔人が単独で来てくれたから良かったけど、もしも下位であつてももう一体魔人がいたらきつと殺されていた、という雅さんの話を聞いてオレも申し訳なさが強まる。

「ここに至っては……本当に、東堂君の体質が頼りになる」

「そうなりますよね。オレとしては、信頼できないものをあてにするのは気が進みませんが」

「雅の話を信じるならば、魔人共は恐らく、次は集団で攻め込んで来るだろう。あれほどの……格が違う子どもが数で押してきては、どうしようも……。もはや猶予はない、と考えた方が良い」

「そうですね。となると……」

「東堂様……。わたくしは、東堂様の身のお世話をさせていただきとうございます！」

滅茶苦茶嬉しそうに雅さんが言った。

3本に増えた尻尾もぶんぶん揺れている。

「雅さん、確か昨日、尻尾が2本に増えて位階がどうのって言ってましたけど、3本に増えて何か変わりました？」

「わたくしの妖怪としての力が強くなったことは間違いありませんが、とうてい魔人共には……」

雅さんがしょんぼりと項垂れる。

嘘か本当か分からないけど、信じるしかないか。

となると……仕方ないのかなあ。

ああ、さようなら。大学生としての普通。

翌日。

その日に履修している講義のすべてを何事もなく終え、荷物の整理

をしていると、外が何やら騒がしくなってきた。

近くに座って講義を受けていた田辺の近くに、名前は忘れたけど、この間の感じの悪い女の子が走って来て、言った。

「マジすげーいって！ 巫女さんが二人、正門とこいる！」

「はあ？ 何言ってるんだ？」

田辺が困惑したように言った。

オレも同じ気持ちだったが、オレには心当たりがあるので内心で溜息を吐く。

「じゃあね、田辺。また」

「おー、ライさん。またなあ〜」

「またなあ、じゃなくて！ 見に行こうって！」

オレが教室を出て、少し遅れて田辺たちが出て来る。

当然、オレと田辺たちが向かう方向は一緒なわけで……。

「おーい！ 雷留君！ 迎えに来たよー！」

「東堂様……っ！」

「ちよ、おい！ きつね……、雅！」

正門へと続く道を歩いていくと、正門の近くに2つの人影と、軽自動車が止まっているのが見える。

オレが二人の姿を認識したと同時に、向こうもオレのことを認識したんだろう。

一人は伊達メガネと二房のお下げ髪が特徴的な、レトロな文学少女といういでたちの巫女……というか、涼音。今朝、目を覚ましたときにはすっかり元気になっていた。

もう一人はふわふわとした黒髪をし、おっとりとした雰囲気の顔つきの中に妖艶さを醸し出している巫女……というか、雅さん。

雅さんは小走りにオレの傍に駆け寄ってきたかと思えば、躊躇いもなくオレの胸元に飛び込んできた。

それを止めようとして間に合わなかった涼音が遅れた駆けつけて来て、雅さんの服を引っ張り、オレから引き離そうとする。

「きゃっ」

雅さんが可愛らしい悲鳴を小さく上げた。

構内がどよめく。

まるで意図したかのように……というか、意図したんだろうけど、雅さんの服が綺麗にはだけ、雅さんの肩と母性の谷間が？き出しになった。

男たちの視線を一気に集める。

一方、結果的に雅さんの服を？いだ形になった涼音には、一定の非難の視線が集まった。

雅さんが恥ずかしそうにして、はだけた着物を手繰り上げ肌を隠そうとするものだから余計に。

そして雅さんは身を締め、オレの体に身を寄せた。

ハプニングによる羞恥心に、たまらず親しい人の体で身を隠した、というような流れだ。

そして当然ながら、あの巫女が泣きついているあの男は誰だ、とオレが注目される。

「涼音……」

「ら、雷留君？ どうしたの……？」

オレが恨みがましい視線を送るが、涼音は理由が分かっていないように困惑している。

ああ、オレの大学生としての普通まで無くなってしまった……。哀しい……。

「雅さん、狙ってやりました？」

「そのような……っ！ わたくしが肌を見せるのは東堂様だけでございます……！」

本当かなあ。

わかれないけど、本当なら恥をかかされたのは雅さんなわけだから……。違うと思うけど……。

なんでこんなことになったのかという理由を結論から言うと、オレが大学に行くのを譲らず、2人が付いて来ることになった。

オレが講義を受けている間、二人は大学の近くで適当に時間を潰していた。連絡があればすぐに行ける距離でだ。そして講義が終わる予定の時間に、2人は迎えに来てくれたというわけだ。

オレが行くって言ったのに……。

多分、雅さんが来たがったんだらうけど……。

「ら、ライさん……？ その人達は……？」

「ん？ ああ、田辺。こちらは友人の鈴院涼音さん。神社の巫女さんで、こちらは雅さん。同じく神社の巫女さん」

「友人の涼音だ」

「東堂様の下女の雅じゃ」

「下、下女？ それって……」

「いや、違うから……」

強い困惑と、少し悲し気な田辺の表情が印象的だった。

## 巫女・妖狐9

面倒くさいことになってしまった。

きつと失われる普通の大学生活へのせめてもの抵抗として、二人を神社の巫女さんとして紹介したのに、雅さんがまた余計なことを……。

寂しそうに困惑している田辺の心境がどういったものかは分からないけど、ありがたくも慕ってくれているらしい田辺に失望されることは避けたい。

「田辺。雅さんの言うことは気にしないで欲しい。彼女はどうかやら虚言癖があるようなんだ」

「ま、まあ、さすがに信じたわけじゃねえけどさ……。ちつとびっくりしたのは確かだけどよく。つか、ライさんがそこまで言うってのも結構だなあ」

田辺はどうやらオレを信じてくれるらしい。

面白がつて騒ぎ立てるようなこともしないし、良い奴だよ本当に。それに比べて、雅さんは……。

雅さんは田辺の視線から逃れるように身を竦めて視線を逸らし、崩れた巫女服を急いだ様子で整えた。

傍目に見てるだけだと、本当にハプニングで肌が露わになってしまった淑女って感じた。田辺も目のやりどころに困っているようだ。

だけど大丈夫だよ、田辺。

この人、本当のところは全裸を見られることにまるで抵抗がないんだ……。

雅さんの徹底されたムーブからすると大丈夫だとは思うけど、一応釘は刺しておこう。

「雅さん。これ以上はオレも許容範囲を越える。自重して欲しい」

田辺はオレの物騒な物言いに困惑しているようだった。

雅さんは、不快感を押し出したオレの言葉を聞くと焦り怯えたような様子を見せた。両手を下腹部の前に揃えて置き、綺麗な動きで小さく頭を下げると、これ以上は出しゃばりませんとばかりに、数歩後退



る。

田辺は胡散臭そうに雅さんを見ていたが、雅さんの一連の動きを見て、再び困惑したような表情を浮かべる。

「なんか……大変そうだな〜」

田辺が苦笑した。

「どうやらこれ以上は触れないでいてくれるらしい。」

雅さんなりに必死なんだということは分かるけど、オレに取り入ろうと形振り構わなさ過ぎて、かえって颯感を買っていることにどうか気づいて欲しい。

もう少し大人しくしてくれれば、オレだって無下にはしないんだけど……。人の迷惑を考えないというのは、やはり妖怪だからなのか。それとも、こういうムーブを好む相手が多かったんだろうか。

困るなあ。

「だけど魔人関連のことを考えると、雅さんを突き放すことも出来ないしなあ。」

「世界を魔人から守る最後の一线であるらしい雅さんのことは、嫌でも守らないといけない。神主さんからも頼まれてるし。」

「オレの体質も役に立たないな……。確かに脅威からオレを守ってくれるみたいだけど、こういう細かいところではまるで意味をなさない……。」

「しかし周囲からの視線が痛い。人が集まっただけで鬱陶しい。」

「今は次の講義が始まるまでの僅かな休憩時間でしかないから、だいたいの方は直にいなくなるとは思うけど、あまり大勢の印象に残りたくはない。以後の大学生活が余計に騒がしくなってしまう。」

「さっさと撤収したいところだ。」

「じゃあ、田辺。またね。次の時限の講義も取ってたろ？」

「え？ まあ……。」

「それじゃ」

「田辺に軽く手をあげて別れを告げ、正門外の車へと向かう。」

「雅さんが付いて来るのは分かったけど、涼音が動かないな。」

「涼音？」

振り向いて涼音を呼ぶ。

涼音は何故か田辺を見つめていた。

「涼音、行くよ?」

「ふっ……」

涼音はオレの声掛けには答えず、田辺を見たままニヒルに笑う。田辺は困惑した様子を見せ、すぐに表情を顰めた。

涼音は田辺の反応を見ると満足そうな表情を浮かべ、オレの方へと寄って来る。

「雷留君、行くっか」

機嫌よさげに通り過ぎていく涼音の背中を見つめる。

なんだ……?」

今のやり取りに一体どういう意味が……?」

涼音が田辺を煽ったらしいことは分かるけど……」

まさかとは思うけど、オレが田辺より涼音と雅さんを優先したこと  
に優越感を持ったのか?」

それを相手である田辺に伝えるためのやり取り……?」

なんでそんなことをするんだ。」

涼音は友達が少ない……というか、いないようだし、独占欲でも弾  
けたか。」

「田辺」

顔を顰めている田辺に声を掛ける。

「よければまたカラオケに行こう。メッセージで空いてる日を教えて  
貰えるとありがたいかな」

「ライさん……!」

田辺が嬉しそうに笑う。頭も輝いているが、つるつるだった頭に  
薄っすらと髪が伸び始めているから以前ほどの光沢は無い。

「それじゃあね」

もう一度田辺に手を挙げて別れの挨拶をし、今度こそ車の方へと向  
かう。

車に近づくと、雅さんが恭しく車の扉を開けてくれた。

「え……。ああ、ありがとうございます」

雅さんが静々と会釈した。

以前言っていたように、オレの身の回りの世話をするというのは嘘ではないらしい。ありがたいのはありがたいんだけど、VIP待遇すぎて笑ってしまいそうになる。オレは吸わないけど、もしもオレがタバコでも啜えようものなら数秒でライターとか出してくれそうな気配がある。

後部座席なのは隣に座るためなのかな。

雅さんを無視して助手席に乗るのも感じが悪いので、素直に後部座席に乗り込んだ。同じタイミングで涼音が運転席に乗り、遅れて雅さんが反対側に回り、オレの隣に乗り込んで来る。

バックミラー越しに涼音が雅さんを疎ましそうに見ているので、オレは見なかったことにした。

「雷留君、バイト先のスーパで良いんだよね？」

「うん。頼むよ。ガソリン代は出すから」

「……」

バックミラー越しに見える涼音の表情がにやけている。

「どうしたの？」

「いやあ……」

涼音が照れたように笑った。

「なんかこういうのって、友達って感じがするなあって」

「そう？」

反応に困るな。

今のやり取りに涼音は友情を感じたらしい。

喜んでるみたいなので良いか。

「はよう出せ」

雅さんが言った。

またこの人は流れをぶった切る……。

涼音さんは妖怪を、雅さんは妖怪退治屋を毛嫌いしている。

互いにちゃんと名前を呼んで欲しいという頼みは聞いて貰えたけど、それ以上の改善はなかなか難しいようだ。二人の問題だから変に出しやばるつもりはないけど、あんまり険悪だとオレも不愉快になる

からある程度は抑えて貰いたいところだ。

車が発進する。

正門近くにまで見物に来ていた学生たちから離れていくと、にゅ、と雅さんの尾が生えてきた。

「尻尾……隠してくれたんだ。ありがとう、雅さん」

「……」

雅さんはオレを見て静かに微笑んだ。

自然な所作に気品を感じる。

絶対に本人には言わないけど、オレ以外への横柄な態度や、オレへの露骨な媚売りを止めてくれれば結構すんなりと懐に入ってきて来そうなんだよな……。

さすがに長い間、男を手玉に取って来たと自称するだけはあるって、雅さんの所作の一つ一つに惹きつけられるものがあることはオレも否定はできないし。

「雷留君、勘違いしちやダメだよ。雅は単に妖怪バレしたくなかっただけだから」

「黙れ」

バックミラー越しに涼音が雅さんを睨み、雅さんにもらみ返している。

せつかく感謝したのに台無しだよ。

「雷留君さ、バイトってやめられないの？」

「突然だね……。どうして？」

「これからもずっと送迎っていうのはどうかなって思ってたね。待ってる時間も長いし」

「そうは言っても、オレも稼がないといけないから辞めるのは難しいよ」

「うちでバイトしたらいいと思う！」

「神社で？ 売り子とかってこと？」

「そう！ お給料は弾むよ！」

「お金出すのは神主さんだろ……？ 確かに悪い案じゃないとは思いますが、オレもすぐには決められないよ。入ったばかりだし、近所だか

ら付き合いもあるし」

「いつそうちに引つ越したらどうかかな？ そしたらそういうのも関係ないでしょ？」

「いや、それはさすがに……」

神社に永久就職はちよつと……。

「ふっ」

雅さんが馬鹿にするかのように鼻を鳴らした。

涼音の表情が苛立たし気に強張る。

この人らは定期的に喧嘩しないとならない縛りでもあるのか？

雅さん、悪い顔してるなあ。めちやくちや姿勢正しいし、佇まいが淑女のそれだからギャップが凄い。

涼音がバックミラー越しに雅さんを睨んだ。

「雅さん。運転中に運転手の気を逸らすようなことは絶対にするな。もしも何かあればオレ達だけじゃなく、色んな人が被害を被ることになる。弁えるべきだ」

さすがにこればかりは頼みつつ形で言うんじゃない、強く窘めない  
とまずい。

「も、申し訳ありません」

語気強く叱ると雅さんは縮こまった。

「ごめん、涼音。さすがに運転中はオレが手綱を握るから、雅さんのことは気にせず、運転に集中して欲しい」

「は、はいー」

ん……？

縮こまっている雅さんだけじゃなく、涼音もなんかどぎまぎしてるな。

まあ、涼音にも言外に釘を刺したつもりだったし、一触即発な二人を諫めるにはそれくらいでちょうどいいかもしれないし、触れないでおこう。

「……ん？」

しばらく大通りを道なりに進んでいると、ふいに車が道を逸れた。

このまま進むと、かなり遠回りになる。帰れなくはないけど非効率だ。どうしたんだろう。

雅さんは道なんて知らないから特に気にした様子もなく、流れる景色を窓から眺めている。ときおり、ほう、と感心するような声が聞こえるのが印象的だ。新鮮なんだろう。今朝も車が動き出したときテンションが上がってたしな。

車はどんどん道を違えたまま進む。涼音に何か考えがあるのかと思っ黙っていると、ウインカー音が鳴ると共に車が減速し、近くのコンビニへと入って行く。

「買い物？」

「う、うん。ちょっとねー」

「ふうん。オレも少しのどが渴いたから飲み物でも買おうかな」

リンゴジュースか、アップルティーがあればいいな。

「雅さんも何かいる？」

「あつ……」

隣の雅さんに声を掛けると、呆けた様子を見せる。

なに、その反応。

「東堂様、お怒りであらせられたのでは……」

「それとこれとは別だよ。そもそも怒ってもないよ。叱っただけ」

「……」

雅さんは困惑した様子だ。

「どうする？ なにか要るなら買ってくるよ」

「……。東堂様、よければわたくしも一緒にしても……？」

「いいよ」

雅さんが少し驚いた様子を見せ、安心したように吐息を漏らした。

全員が車を出ると、涼音はセンサーで車をロックし、足早にコンビニへと入って行く。

オレは涼音の背中を見送り、車の向こう側から回って来る雅さんを待って、コンビニへと向かう。

「そうだ、雅さん。お願いだから、あまりオレの周囲で騒ぎを起こさないで欲しい。雅さんとはこれからも一緒にいるわけだし、これ以上、

雅さんを悪く思いたくない」

「……」

身に覚えがあるのか、振り返って見た雅さんは静かに俯いた。

隣に気配を感じないから後ろを向いたけど、やっぱり後ろに控えていた。徹底してるな。

でも……。

「前も言ったと思うけど、素直に頼ってくれればオレは出来る限り力を貸すつもりだ。その出来る限りって言うのも、雅さんを全力で守るってことでみんな話をつけた。それは雅さんもその場にいたから知ってるはずだけど、どうしてまだそれを続けるの?」

「東堂様は本当に……率直なお方でございますね」

「そうだね。それは自分でも思う」

「わたくしも、お伝えしたかと存じますが……わたくしは東堂様をお慕い申し上げております。身の回りのお世話をさせていただけることが、幸福である、と」

「それは本当のことなの?」

「真にございます」

「そっか……」

目を閉じる。

胡散臭いし、この数日の雅さんの様子からして、彼女を信用できる要素は欠片も無い。彼女を信じたいと思うけど、信じさせることこそが彼女の目的なのだとしたら……と警戒してしまう。

だけど、ふと思った。

もうどつちにしろ、彼女の思惑であるオレ達の庇護下に入るという目的は達成されてる。それでもなおこのムーブを続ける理由は、考えつく限り二つ。

本当にオレに好意を持つてくれているか、見捨てられては困るかの二通りだ。

後者だとすれば、ちよつと状況が変わる。

雅さんからすると、オレ達は実のところ雅さんを『見捨てることができる』状態だということになるからだ。

それは、雅さんがなんらの事情で命を落としても、オレ達、ひいては人間にとってそれほど悪影響が生じないということ……。

つまり、彼女は嘘を吐いているってことになる。

御柱さんが残っていれば、雅さんが祓われるようなことになっても問題がないってことなのか……。それとも、そもそも魔人という存在が人間にとって脅威ではないのか……。でも神主さんの話だとヤバいみたいだし……。前者なのかな。

どちらにせよ……。

「雅さん。オレはあなたのことを見捨てようとは思わない。故郷を失い、生きるために逃げ続けたというあなたの境遇を思えば、オレも胸が痛い。きつとあなたは生き残るために必死なんだろうなと、勝手な印象だけど、そう感じてる。不安も恐怖もあるだろうし、オレ自身、あなたに安心して良いとは言えない」  
でも。

「昨日、オレがいないとき、少なくとも涼音は命を賭けて戦った。あなたを守るために。ひいては人類を守るためだったとしても、それを知るよりも前に、涼音はあなたの境遇に同情し、あなたのために戦うことを選んだ。どうか、その想いだけは蔑ろにしないで欲しい。涼音はあんな態度だけど、きつとオレ以上に雅さんのことを案じてると思うから」

多分ね。

妖怪に人の心が無いなら今の話は無駄だ。

人を利用するのが当たり前という価値観なら、今の言葉は届かない。

むしろオレ達が心を砕こうとしていることを察し、これ幸いと付け入ろうとしてくるだろう。

できれば人の思いを理解できる妖怪であって欲しいし、今はそうできなかったとしても、そうなって欲しいと思うけど……。

「東堂様……」

雅さんは困惑した様子だ。

おっと？



マジで困惑してる感じがする。  
思っていた反応と違うな。

嬉々として乗っかって来るか、肅々とオレの言葉を受け入れる素振りを表面上は見せるか、慇懃無礼な態度で涼音のことは断固拒絶するとかかなと思ってた。

「東堂様は……わたくしに何を求められますか……？ 可愛がってはくだらないのでしたら、わたくしはなにを……」  
「可愛がる……？」

相撲部屋とかで言う可愛がるなのか、赤ん坊やペットに対しての庇護欲から生まれるものなのか、大人の男女の関係性で言う可愛がるのか、先輩と後輩とかそういう感じなのか……。

色々考えられるけど、これまで雅さんが取って来た行動……オレに媚び諂うような態度から考えると、性を含めた主従関係のことなんじゃないかと思う。

「突然何を求めるって聞かれても、別に何も……。今の状況もオレが望んだものじゃないですし」

「わたくしは、不要でございますか」

「どうしたの急に」

なんだ……？

なんか違うぞ。

「先ほどから、東堂様はわたくしに気安く話しかけてくださっております。それはわたくしを受け入れてくださったということでは……？」

いや、単にオレの中の雅さんの株価がさっきの一件で落ちたってだけだよ。

さすがにストレートにそれは言えないけど。

要は庇護下に入る代わりに差し出せるものが見つからなくて不安になってることなのか。

一番自信がありそうな性接待も断ってるもん……。

「別にそんなの気にしなくてもいいよ。オレはそもそも最初から雅さんのことを受け入れてるし、こうなった以上はオレも最後まで付き合

うつもりだから」

嫌だったけど。

初めて会ったときの恩と義理はもう清算してるけど。

「でも、どうしても雅さんがオレに見返りを用意したいって言うなら……普通にしててくれればそれで」

「普通……でございますか……?」

「ああ、ごめん。伝わらないよね。なかなか慣れなくて。そうだな……雅さんが少しでも人に優しく生きてくれたなら、それが嬉しいかな」

「人に優しく……? それが東堂様のお望みとあらば……」

「そんなに畏まらなくても良いよ。人に優しくって言っても、雅さんの出来る範囲で良いし。オレも最初は雅さんのことを見捨てようとしたんだし、無理強いするつもりはないんだ。オレの知らないしからみとかもきつとあるんだろうし」

「承知いたしました」

雅さんが恭しく頭を下げた。

なんだろう、この感じ。

もしかして雅さんって、オレに対しては本気で服従してるのか?

根本的なところに強者の庇護下に入るっていう目的があるわけだから、完全に裏表が無いとは言い難いけど、オレへの態度そのものは本心からやってる?」

弱肉強食的な感じか。

格上の存在の庇護下に入る代わりに下僕のように付き従う、序列がしっかりした群れを作ってる的な。狐の生態ってどうなんだろう。確かイヌ科だったからそういう習性とかあるのかな?

そう考えると、妖怪というか野生動物的には真つ当な生き方なのかもしれない。

「まあ、とりあえず店に入ろう。駐車場で長々と話すようなことじゃないし」

「かしこまりました」

「行こうか」

雅さんを伴ってコンビニの中に入る。

涼音の姿が見当たらない。

「あれ？ 涼音がいないな……。先に入ったはずだけど」

すんすん、と雅さんは鼻を鳴らすと、とんでもないことを言ってみせた。

「涼音はただいま大便を拵えております」

「雅さん、それ、絶対涼音の前で話題にしちゃだめだからね。約束して」

「お誓い致します」

「うん。絶対ね。もし破ったらしばらく雅さんのこと無視するから」

「それは……恐ろしゅうございます……」

火を見るよりも明らかな未来を避けるために釘を刺しておく。

「じゃあ、飲み物を……」

飲料コーナーへ向かって歩き出した瞬間、違和感を覚えた。

人の気配が消え、急速に世界から音が遠のいていく。

ああ、久しぶりだな。

次の瞬間、コンビニ前から轟音が響いた。地面が揺れる。

すぐにコンビニの外に出た。

涼音の車があった場所にクレーターが出来ていた。当然、車は見当たらない。

ここが彩乃さんの結界の中なら、本物の涼音の車は大丈夫なはずだけど……。

というか、ちよつと、畳み掛けて来過ぎじゃない……？

周囲を見渡すと、雅さんの姿も無い。どうやら彼女は置いてきてしまったらしい。

コンビニの外に出て、巨大なクレーターを覗き込んだ。

ぱらぱらとクレーターの中を小石が転がる音が小さく響く。

「彩乃さん？」

クレーターの中に誰かいる。

だけどそれは人呼ぶにはあまりにグロテスクな肉塊だった。

だけどそれは蠢いていて、徐々に人の形を取り戻しつつある。超再

生能力……彩乃さんかなやっぱり。

彩乃さんらしい肉塊は一体どこから飛んできたんだろう。そう思い、顔をあげた。

「わぁ……」

遠くに人が立っている。高層ビル程の背丈の……巨人だ。

まるで巨大な人体模型のようなグロテスクな容貌の巨人がそこにいて、こちらを無機質な瞳で見つめている。

巨人の周りを何かが飛んでいる。

巨人は掌を広げ、腕を乱暴に振り回した。

すると、飛んでいた何かが丁度巨人の掌に呑み込まれる。巨人は握りこぶしを口元に動かし、舌をべろんと垂らす。そして広げた掌をべろりと舐め挙げて、何かを呑み込んだ。

「白夜……っ！」

クレーターの中から悲痛な叫び声が聞こえた。

見れば彩乃さんがいた。

やっぱりあの肉塊は彩乃さんだったんだ……。

彩乃さんは上半身を起こし、悲痛な表情で巨人の方を見上げていた。

彩乃さんの体はまだ修復途中のようで、体のあちこちに小さな瓦礫片がめり込んでいる。彩乃さんはその瓦礫片を指先で掴み、勢いよく引き抜いた。

彩乃さんの体から血が噴き出し、痛みに呻く声が漏れる。痛そうだ。

「彩乃さん、大丈夫ですか？」

「えっ……。嘘……。あなた、生きていたの……？」

声を掛けると、彩乃さんは凄く驚いたようにオレを見上げた。

どうやらオレは死んだと思われていたらしい。

彩乃さんが立ち上がり、オレを見上げた。

オレは思った。

——また全裸だ。

目の前のクレーターの底には全裸の彩乃さんが居て、遠方には人体模型のような全裸の巨人が見える。

オレは思った。

——どっちもでかいな。

人体模型のような全裸の巨人は男性の体をしている。当然、人間のサイズからしたらあまりにも凶悪なものがぶらついていたわけ……。

一方、彩乃さんの引き締まってるのに一部がでかい体を見る。

引き締まった筋肉質な肉体に溢れんばかりの母性。

まるでアマゾネスやバルキリーのようだだ。

見たことはないけど。

雅さんの全裸には女性的な裸婦像のような印象を受けたけど、彩乃さんはまさに戦士って感じだ。

思い浮かんだイメージは鹿や馬。

発達した筋肉は無駄なく実用的。しなやかで弾力がありそうだ。

彩乃さんはかなり過酷な戦いを続けてきたようだから、自然と体が鍛えられてきたんだろう。それでいて男性的な固い筋肉の体という感じではなく、女性的な丸みもある。母性は雅さんに引けを取らないだろう。

オレを見て驚いていた様子の彩乃さんだったが、軽やかな一回の跳躍でクレーターから飛び出し、オレの隣にやはり軽やかに降り立った。

オレに全裸を曝け出しているというのに全く恥じる様子を見せない彩乃さんのその堂々とした立ち姿に感心するばかりだ。

「久しぶりだね、彩乃さん。今ってどういう状況なのかな？ あの巨人は君の敵ってことで良いの?」

「あなた、本当に動じないわね……」

「そうだよねえ」

「あの、そうだよねえ、じゃなくてね？ あなたのことを言っているの

「だけど」

「まあ、話すと長いから今は無しにしてくれる？　あと、良ければこれ」

上着を脱いで彩乃さんへ差し出した。

彩乃さんはじつと上着を見て首を振った。

「気持ち嬉しいけれど、結構よ。きつとすぐに破れてしまうもの」

「そっか……。大変なんだね」

受け取って貰えなかった上着を着直すと、彩乃さんは小さく笑い、樂しそうに口元を隠した。

彩乃さんは堂々と全裸を晒している。

隠すところが違うんだよなあ。

彩乃さんは巨人を一瞥すると、ふんわりと髪を揺らしながらオレに向き直った。

「どうしてかしらね？　結構きつい状況だったけれど……。あなたに会ったら、何故だか負ける気がしなくなったの。お礼を言わせて頂戴。あなたのおかげで少し、落ち着いたから」

「よく分からないけど、役に立てたなら良かったよ」

前を隠して欲しいけど、上着は断られてしまったからなあ。

今の状況で隠せる手段としては手ブラくらいなわけだけど、オレが彩乃さんの母性を手ブラするわけにはいかない。かといって、彩乃さんが自分で手ブラをしてくれたとしても、オレの視覚的にちよつと刺激が強くなるのは否めない。

よつて彩乃さんも堂々としていることだし、現状を黙認することにする。

「それで、どういう状況なのかな？　オレは逃げた方が良いの？」

「そうね。出来れば遠くに……」

彩乃さんはぎゅ、と拳を握りしめた。寂し気に眉根を寄せている。「あなたとはもつとお話をしてみたかったけど……。そんな時間も無いかしらね。白夜もいなくなってしまったみたいなもの」

遠方の巨人はそこのビルや家屋を薙ぎ払い、踏み潰し、騒音を立てながら暴れている。なにかを探しているのだろうか。多分、彩乃さ

んを探しているんだとは思うけど。

「白夜っていうのは、あのおじさんのこと？ さつき……巨人に食べられた……」

「ふふ……。そうねえ、おじさん、かしらね。アレはわたしの妖力で作った使い魔なの。ふふ。単なるお人形遊びだけれど、ずっと一緒に戦って来たから……。少し、寂しいわ」

「そっか……。それは寂しいね……」

「ねえ、あなた。もしも……。いえ……。何でもないの。忘れてちようだい」

なんか、えらく思わせぶりに、含みのあることを言うなあ。

なんだろう。長年連れ添った使い魔を失ってナイーブになってるのは分かるけど、オレに何を求めようとしたんだろうな。

彩乃さんが手を伸ばし、掌を広げると、刀が飛んできて彩乃さんの手に収まった。力強く柄を握ると、雷が刀と彩乃さんの腕を包むように生じた。

「おお……。すごいね。雷使いつてこと？」

「ふふ。あなた、子供みたいな反応をするのねえ。どちらにせよ場違いではあるけれど、微笑ましいわ」

「また子ども扱いする」

「ふふ。ごめんなさい。この雷は、以前の怪物を倒したときに手に入れた力よ。あなたと一緒に倒したあの怪物。あなたの忘れ形見だと思っていたけれど……。生きていてくれて良かった」

「ああ……。タイミング、悪かったもんね。また会えてうれしいよ、彩乃さん」

全裸で刀を握る彩乃さんは絵になるけどシニールだ。

「わたしも、あなたに会えて嬉」

瞬間、景色が切り替わる。

腹に感じた衝撃と、浮遊感。流れる風を感じる。

また彩乃さんがタツクル気味にオレを肩に抱えて跳躍したらしい。

眼下では、へし折られたビルの高層部がオレ達の居た場所に突き刺さっている。

巨人が投げたらしい。

「ありがとう、彩乃さん。毎度のことながら、手間を掛けてしまつてごめんね」

「あなたつてやっぱり変な人ねえ……」

彩乃さんに抱えられるのも慣れたものだ。

彩乃さんは以前と変わらない振る舞いだが、オレがさっきの話……白夜という使い魔を失ったことを知っているからか、無理をしているようにも見える。

しかし、白夜という使い魔……遠目にしか分からなかったけど、おじさんだった。それについては彩乃さんも否定はしなかったし……作つた使い魔をわざわざそういう様子にするってことは、彩乃さんの癖なのかな？

それはそうと、肩に担がれているオレの目の前には、引き締まった筋肉と密度の高そうな骨盤を守るために適度な脂肪が乗つたプリケツがある。

まさか全裸の人達に会うだけでなく全裸の人に担がれて移動する日が来るとは思わなかった。ちよつと笑つてしまいそうになる。

遠方の巨人が雄たけびを上げ、足元の建築物を蹴り潰しながらオレ達へと走つて来る。

彩乃さんは家屋の屋根を足場に、忍者のように駆けまわる。オレを抱えて、全裸で。

「……」

彩乃さんが深い溜息を吐いた。

「本当に……あなたつてどういう人なのかしらねえ。本当ならここには入つて来られないはずなのに、三度も……」

「ごめんね」

「どうして謝るのかしら？」

「きつと邪魔なんだろうなって、オレ」

「……。あなたつて本当に変な人ねえ……」

彩乃さんは苦笑したようだった。

ケツしか見えないから分からないけど。



「助けて貰ってありがたいけど、オレのことは放って置いてもいいよ？ 自分で何とかするから」

「放って置けないからこうしているんだけど、分からないかしら？ 察しの良さそうなあなたでも」

「なるほど。それは一本取られたというか……おみそれしました。彩乃さんは優しいねえ」

心が温かくなる。

おっと、ケツが視界に。目を閉じよう。

「ふふ。そう言われて悪い気はしないわねえ。とはいえ、どうしたものかしら。アレは動きが鈍いから逃げる分には問題ないけれど、ずっと逃げ続けるわけにもいかないし。あら……？」

彩乃さんがすすすと鼻を鳴らした。

「あなた、何か臭うわね。何かしら……？」

「ごめん。臭かった？」

「いえ、ごめんなさい。あなたの体臭のことじゃないの。でもなにかしら、この臭い」

オレの体臭がきついという訳じゃないらしい。

「嫌な臭い……。なにかは分からないけれど、良くない感じがするわねえ。獣、かしら」

……。

獣って言うのと雅さんのことか？

雅さんの臭いに反応しているのか？

確かに大学で密着されたけど……。

「わたしやあの怪獣たちとも違う……なにかしら？ とても気になるわ……。でもそんな時間は無いわね……」

彩乃さんがビルの側面を重力に逆らって駆け昇る。

流れる景色が凄い。視点の動きが壮観だ。大部分にプリケツが映ってるけど。

屋上に着いた彩乃さんがオレを降ろしてくれた。

そしてすぐに立ち上がり、巨人の方を向くと、背中越しにこう言った。

「ここで待っていてくれるかしら？ あなたとはゆっくりと話してみたいわ。興味があるの、あなたのこと。今度はどこにも行かないでいてくれると嬉しいけれど……。わたしも早めに終わらせるつもりだけれど、もしも長くなりそうなら、帰っても良いわ。きっと自力で帰れるのでしよう？ ここから。あなたは」

「たぶんね」

「そう。本当に……変な人ねえ」

彩乃さんは肩越しに微笑むと跳躍し、高い金網の上を華麗な動きで越え、飛び降りた。

金網に近づく。なんとか下を見れないかと顔を近づける。

ビルの側面を蹴りつけたんだと思うけど、彩乃さんは家屋の屋根を足場にしながら、既に巨人の方へと向かっていた。

「彩乃さん。なんか君って、私はあなたの正体になんとか察しがついてます、みたいな雰囲気を出してるけど……。それって十中八九間違ってると思うんだよね……」

残念ながら。

オレの声が届かないところまで全裸のまま行ってしまった彩乃さんを遠くから見つめる。

できれば動かないで欲しいと言われたけど、どうしたものか。

雅さんと涼音を残してきてしまっているから、帰れるなら帰りたいたいけど……。彩乃さんには何度も助けて貰っているから、初対面のときのようにさっさと消えるのは気が引ける。

当然携帯の電波は届いていないので涼音に連絡は取りようがないわけだけど、向こうからするとオレはどうなっているんだろう。急に消えたって感じなのかな。

彩乃さんがさっき「生きてたの？」って言ってたから、以前……馬のUMAのときは、死んだと思ってしまうようないなくなり方をしたみたいだけど。

「おお……すごいな……」

屋根の上を軽やかに駆け、巨人へと迫った彩乃さんが何かをしたように、走っていた巨人が大きく仰け反った。遠目に小さく見えるので

詳細な動きは分からないけど、全裸なので肌の色が目立つ。どこにいるかは結構わかりやすかった。

巨人の顔……左顎下から右眉にかけてに大きな裂傷が生まれ、直後に鮮血が噴き出した。刀で斬りつけたんだろう。

全裸の彩乃さんが光っている。

「輝いてる……」

確かに彩乃さんの肉体美はオレとしても輝いて映ったけど、雷を帯びているだけだ。だけというのも変な話だけど。

なんだろうな……。改めてこういう分かりやすい異変を目の当たりにして、自然に受け入れていることを自覚すると、茶々ちゃんの変身を見掛けたときから遠くに来たなあと思う。

「あつ……」

大きく腕を振りかぶった巨人の腕に彩乃さんがぶっ飛ばされた。

オレと巨人の中間位まで吹っ飛び、地面に激突。轟音と共に大穴が開く。

思うんだけど、人間の体が地面に激突してアスファルトやコンクリートの方が負けるって凄くない？

「彩乃さんの体、固すぎ……？」

というか、いつも地面とかにめり込んでるな、あの人。

大丈夫なんだろうか。

肉片になっても死なないのは見てるけど、痛いのは痛いみたいだし……。見てて辛いものがあるな……。

とはいえ、あの巨人相手にオレが出来ることもない。小石をぶつけても意味なんて無さそうだし、異変抗体に頼って突っ込んで機能しなかったら無駄死にだ。以前……犬のような魔獣に体当たりをしたとき、オレの異変抗体は機能せずに逆に吹っ飛ばされた。もしかしてだけど、あくまで受動的な異変に抵抗するというだけで、認識した上で能動的に関わろうとすると機能しないのかもしれない。だとすれば、なんて融通が利かない体質なんだろう。誘い受けかよ。

光る肌色が地面から飛び出し、巨人の方へと突っ込んでいく。巨人が体に裂傷を負い、また離れた場所で轟音と共に建物が崩れ、地面に

クレーターが出来る。そしてまたクレーターから光る肌色が飛び出し、巨人へと突っ込んでいく。

繰り返されるそれを、オレは見守ることしか出来ない。もどかしい。

「彩乃さん!! がんばれー!! 負けるな!! 頑張れ!!」

せめて応援だけはしておこう。

遠くて聞こえるかは分からないけど、ビルの屋上から大声で彩乃さんへ声援を送る。

なんだろうな……。

思えば、こんなに一生涯命何かを応援したことって無かった気がする。

「ああっ!! 彩乃さん!! 頑張れ!!」

彩乃さんが吹っ飛ばされて、思わず嘆きの声が出る。しかしすぐにまた彩乃さんが戦いに戻り、声援を張り上げる。喉が痛くなってきたが、彩乃さんの方が痛いだろう。オレも頑張るしかない。

「彩乃さん……。もしかして……」

巨人の体に刻まれる傷が一か所に固まり始めたのを見て、オレは寒気がした。彩乃さんの狙いが分かったからだ。

オレは思った。

——ち●ぽかよ。

彩乃さんは巨人のシンボルを徹底して狙い始めていた。切り落とすつもりなのだろう。確かに効果的だと思う。だけど見ていて辛い。

「……」

なんとなく腰が引ける。声援を送ることを何故か戸惑ってしまう。

見れば、巨人の腰がなんとなく引けているような……。

いや、気のせいだろう。巨人は股間の傷を気にした様子はないし、守ろうとする動きも見られない。そこに付いているというだけで、急所というわけではないらしい。

彩乃さんもそれに気づいたのか、巨人の体に生じる傷の位置が変わった。

太ももの付け根だ。ち●ぽから移動している。

彩乃さんはもしかすると、巨人の足を切り落とそうとしているのかもしれない。

「頑張れ！ 頑張れ!! やればできる！ 負けるな！ そこだ！」

オレは声援を再開した。

しかし喉が痛い。

じつと静かに、祈りながら見守ることもできるけど、声援を送ることを止めたくはなかった。

彩乃さんが以前、お礼を言われて元気が出たと言っていたので、声援を送ったら喜ぶかなと思って。それにあの巨人を放置していたら現実もヤバイなことを言っていたので、是非とも勝ってもらいたい。

もちろん、一生懸命に戦いを続けている彩乃さんを応援したい、力になりたいという気持ちも嘘じゃない。

そして数時間の時が流れた……。

「……」

いや、長いつて。

もう何時間戦ってるんだ……。

さすがにもう声が出ない。息をするだけでも染みるような痛みがあるもの。

彩乃さんの方が大変なのは承知だけど、さすがにこれ以上は喉が……。

無茶しすぎた。

オレは屋上の冷たいコンクリートの床に座り、彩乃さんの戦いを金網越しに眺め続けていた。

応援をする気持ちを、彩乃さんを心配する気持ちもある。どうか勝って欲しいという願いも健在だ。

だけどいかんせん長すぎてね……。

雅さんと涼音、どうしてるだろう。

彩乃さんには是非とも早めに勝って貰いたいところだ。

「……！」

声は出ないが、思わず前のめりになった。

彩乃さんが遂に巨人の足を切り落としした。凄い。地道な作業が遂に実を結んだ。これには感動せざるを得ない。

片足を失った巨人が膝をついた。

今度は巨人の腕に裂傷が刻まれ始める。彩乃さんの次の目標は腕の切断のようだ。

「……！！」

巨人の太すぎる腕で彩乃さんが吹っ飛ばされた。これも何回目か分からない。毎度のこと復活してくれるので安心感はあるけど、いちいち豪快に周囲を破壊するから心配になる。彩乃さんの超回復能力……オレの体質もそうだけど、回数制限とか条件なんかがあったりしたらと思うと気は抜けないよね。

片足を失ったことで巨人の機動力は落ちたけど、巨大な腕を振り回すだけで大災害だ。彩乃さんも腕を切り落とそうと頑張ってるけど、これも時間がかかりそうだ。

さすがに帰るか……？

帰れるなら、だけど。

ちよつと試しに……。

高層ビルの屋上からビルの中に入るための扉を探し、ドアノブを回す。鍵が掛かっついていて開かない。当然、周囲に鍵なんて落ちていないし、扉を壊せるような器具も無いし、力もない。

オレは再び金網に近づき、彩乃さんの戦いを見守ることにした。

「……！！」

おつと……座ったまま寝ちやいそうになっていた。かくん、と首が落ちるような感覚に意識を覚醒させる。

彩乃さんはまだ戦っていた。

頑張つて。

頼むから。

「……」

そしてまた数時間の時が流れた。

オレは横になって彩乃さんの戦いを見守っていた。

もう日付も変わる頃か……。

肌寒い。風邪をひいてしまうかもしれない。彩乃さんに上着を渡さなくてよかった。断って貰えてよかった。寒いもの。それに背中が痛いし、冷たいし。

「……………」

闇夜の中でさえ輝きを失わない彩乃さんの裸体……というか、実際に光ってるわけだけど、その動きが鈍る様子はない。凄いな。もう何時間も動きっぱなしだし、痛い思いをたくさんしているだろうに、変わらず戦い続けている。以前も休日なのに制服を着て戦っていたことから、もしかしたら平日からずっと戦ってるんじゃないかって思ったけど、やっぱりそうだったんじゃないかと思う。

今回、会ったときは既に……既について言うのも変だけど……全裸だったから分からないけど、オレと会うまでもう結構長いこと戦ってたって可能性もあるよな……。

……。

オレは座り直し、声は出せないなりに、心の中で彩乃さんへ声援を送り続けた。

そしてさらに数時間の時が流れる。

夜明けだ。

眠いような眠く無いような、浮ついた感覚だ。多分、思考が鈍っていると思う。

「……………」

オレは立ち上がった。

遂に。遂に彩乃さんが、手足を失いうつつ伏せに倒れて身じろぎをするしか出来なくなった巨人の首を落としたからだ。

きつとこれで終わりだろう。長かった。まさかこんなことになるなんて……………。

「……………」

今のオレは多分、目が死んでいると思う。

首を落とされた巨人の背中が割れ、中から巨人よりは遥かに小さいけど、人間からしたら充分大きい人型が現れたからだ。まだ続くんか……………。

人型はスタイリッシュな体形だ。タイツを着てるのか、すらつとした体は遠目には真っ白く見える。そして背中には真っ白い羽。天使使って感じがする。

大丈夫か？

帰りたいたいのはそのうだけど……。

彩乃さん……。

あんなに一生懸命頑張ってたのに、僕はまだ変身を二回も残している、みたいな展開を見せつけられて……。

でもさすがと言うべきか、彩乃さんは新しく頭れた人型に攻撃を仕掛けた。

「……」

バケモンですよん……。

あの天使、明らかにさっきの巨人よりもヤバイ奴だった。

何故なら、彩乃さんが吹っ飛ばされる間もなく、空中で汚い花火に早変わりしたからだ。

それにしても……ここまでえぐい破裂音が聞こえて来たぞ。ほんただけだ……。

お……？

彩乃さんが天使のすぐ下から飛び出して来た。

地面に散らばった欠片から再生したようだ。彩乃さんも中々凄いな。明らかに人間やめてます。

でも、彩乃さんはすぐに破裂した。

そして少ししてまた彩乃さんが天使に突貫していく。

今度は天使の攻撃を避けたようだ。

空中で彩乃さん……というか、雷光がクルクルと回りながら、上下左右、自由自在な軌道を描いているのが見える。

天使が動いた。

天使も彩乃さんの動きに合わせてるように空中を自在に飛び回っている。さつきとは趣が違う戦いだ。

「……」



あつ……。汚い花火が……。

これどうするんだ。かなり劣勢に見えるけど。マズいんじや……。こんな攻撃も通らず、一瞬で汚い花火にされるような相手に勝てるんだろうか。彩乃さんが負けたら世界もヤバイんだよな……。

耐久力に物を言わせて粘り勝ちを狙うにも、彩乃さん、あの天使に歯牙にもかけられてない感じがしてて、有効とは思えない。そもそも彩乃さんはどこまで耐久出来るんだろう。諦めません勝つまでは戦法で年単位で戦うとは無いよな……。でもそうするしか勝つ方法が無いなら仕方ない？

いやあ、そうなるとオレもずつとここに居ないといけないから辛いな。さすがに凍死か餓死すると思う。

……？

彩乃さんが天使に背を向けて、こつちに向かってくる。

ビルの側面を駆け昇り、金網を越えてオレの下に舞い降りた。

天使はいいのか？

「……」

「ふう……ふう……」

彩乃さんが荒い息を整えている。

やっぱりつらかったんだな……。前もつらそうだったし。

彩乃さんが苦し気に天を仰ぐ。

そしてオレを見てこう言った。

「単刀直入に言うわね。今のわたしでは、アレには勝てない。どれだけ時間を掛けても」

彩乃さんは本当に悔しそうに俯いた。

やっぱりそうなんだ。そんな感じはした。

「ここを捨てるわ」

「……」

「納得できないという顔ね……」

いや、別に。

ただ喉が痛くて喋れないだけだよ。

「あなたの危惧しているように、アレはここから解放され現実に顕現

するわ。ここであいつを抑えておくことはできるけど……アレはまだ生まれたばかりの赤子のようなもの。成長を続け知恵をつければ、今のわたしでは手に負えないわ。いずれ殺されてしまう。あなたも分かるでしょう？」

ごめん、分かんない。

オレは静かに首を横に振った。

「戦えと言うの？ あなたは……。逃げるな、と。そう言うのね。……ひどいひとね」

彩乃さんは哀しそうに眉を寄せた。

いや、特にそういうことは思っていないし言っていないよ。

喉が痛いし分かんないだけなんだ。

オレは自分の喉を指さした。

「……」

「首？」

喉です。

首を振って訂正しようとしたが、彩乃さんは自己解決したようであろう続けた。

「首を狙えってことかしら？ そんなことは分かってるわ。だけど、今のわたしの力では通じないの。そしてアレはどんどん学び始めている。今は退くしかないの」

違う、そうじゃない。

オレは首を横に振った。

すると彩乃さんが怒りの表情を浮かべた。

「わたしだって好きで撤退を選んだわけじゃないわ！ どうしても勝てないの！ 今でさえそうなのに、アレはどんどん強くなってるのよ！」

違う。そうじゃない。

オレは首を横に振った。

彩乃さんの怒りがボルテージを上げていくのが分かる。

「死にたくないなんて理由じゃないの！ わたしがアレに取り込まれれば、もうアレを止めることが出来る存在がこの世界からいなくなる

！あなただつて分かるでしょう!？」

「ごめん。分かんない。のど、いだくて。」  
「えっ……？ す、凄い声ね……。あつ、そういえばずっと応援してくれたものね……」

オレの応援聞こえてたんだ。

「ありがとう。とても励みになったわ。本当に」

彩乃さんは気恥ずかしそうに顔を逸らした。

その気恥しさは応援されたことに対するものなのか、すれ違いを察して恥ずかしくなったのかどっちなんだろう。

「逃げてる？」

「え、ええ。……良いのね？」

頷く。

オレに出来ることは無いし、巨人相手に粘り勝ちした彩乃さんがどうあがいても勝てないというならそうなんだろう。

確かに気になることは言っていた。あの天使を放置して逃げれば現実世界がヤバいことになるって。彩乃さんを殺しに来てる怪獣たちを野放しにしたら現実世界がヤバいって言うのは前も言っていたけど、遂にその時が来てしまったらしい。少なくとも彩乃さん的には。

でもさつき彩乃さんも取り乱しながら言っていたけど、死ぬまで戦えて言うのは酷だ。どうにかして欲しいとは思うけど、今彩乃さんが負けるともう取り返しがつかなくなるらしいので、だったら反撃の時を伺うのが正しい判断なんじゃないかな。

一度撤退し、犠牲を耐え忍んで再起を図るっていうのは割とよくある展開だし、オレも好きだけど、現実で起きると辛い。

でも彩乃さんが誰よりも辛いんじゃないかな。状況を一番理解しているのは彩乃さんだろうし、彼女に世界の命運が懸かっているからこそ、彼女は大局を見て辛い判断を下した。だから今、感情的になっ  
ていたんだと思うし。

そもそもあの天使ってなんなんだ。

魔人……なんだよな、多分。

でもなんで雅さんじゃなくて彩乃さんを狙ってるんだ。もしかして彩乃さんが御柱さんだったりする？

だとしたら、雅さんと涼音を連れて来てみんなで戦うって手はどうだろう。

どちらにしても彩乃さんの言うように撤退はしないといけないとは思うけど。

「きつと、たくさんの人が殺されるでしょう。きつと国も多くが滅びる。アレがここから解放されれば、この国は終わり。数日も持たないわ。ふふ。わたしは構わないけど、あなたは困るんじゃないかしら？」

そりや確かに困るけど、どうしたの。

なんで急にそんな悪ぶるの。

最初はオレに残って戦えって言われたと勘違いして激昂してたのに。

……。

もしかして。

オレが逃げることを肯定したから逆に罪悪感が湧いてきて辛くなってきたのかな。それで断罪して貰いたいって感じか。

うーん、状況が分かってないオレにそれを求められても困るな。

そもそも彩乃さんが一生懸命頑張ってた姿はずっと見てたわけだし、そんなことは出来ないよ。それが彩乃さんの刹那的な望みでも、本心ではきつと違うだろうし。

しかも喉痛いからそんなたくさん喋れないし。

「おっつっかれ」

うっ……喉が痛い。

オレは上着を脱いで彩乃さんの肩に掛けた。

よく分からないけど、とりあえず戦いが終わりということなら肌を隠しても良いと思う。

肌寒いし、全裸だし。

白夜って言う使い魔……相棒を失って傷心もしてるだろうし、ちよつと休んだらいいんじゃないかな。これから世界が悲惨なこと

になるっていうのが本当ならオレとしても心苦しいけど、別に彩乃さんのせいじゃないし、責めてもしようがない。悪いのは彩乃さんじゃないんだから。

そう思っても全部伝えると喉が痛いので上着を掛けることで伝えれば良いなと思った。

「アヤノ」

機械的な声が聞こえた。

はっと彩乃さんが声の方へ振り返り、オレは少し上を向いた。

彩乃さんがしまった、と言わんばかりに表情を曇める。

そうだね。ちよつと話し過ぎたね。

彩乃さんだけだったらさっさと撤退してたんだろうけど、これはオレが居たせいなのかな。

少し離れた空中に、いつのまにか、でかい天使が浮いていた。近くで見た天使から受けた印象は、率直に言うとか典的なエイリアン。巨大なグレイのような見た目で、背中には鳥のような羽。細い手足が太い胴体とアンバランスで不快さを感じさせる。

「ウラギリ者。腹立たしい下劣な存在が……」

天使が機械的な声で、出来の悪いボイスロイドのように喋ったかと思ったら、いきなり口調が流暢になった……。これが学んでるってことなのか。

しかし、えらく渋い良い声だな……。

「……」

腕を引っ張られ、体が浮く。

彩乃さんに小脇に抱えられたオレは、既に宙に浮いていた。

「いい？ 口を閉じていて。舌を噛むわよ」

彩乃さんは初めて会ったときと同じことを、しかしあのとときと比べて全く余裕のない声で言った。

確かにオレへの配慮が無くなっている。着地や跳躍時の揺れが荒い。

ちよつと嬉しいな。

よつぽど追い詰められているんだろうに、それでもオレを見捨てな

い彩乃さんの在り方に温かさを感じる。

やっぱり彩乃さんは優しい人だ。

「逃がすと思うか？ 我々は長き時を待った」  
破裂音。

やけに良い声の悲鳴が後方から上がる。

「なんだ……！ 何をした!？」

天使の声が聞こえる。

あいつ、何かしたのか？

今回は前側に抱えられてるから後ろが見えないけど、破裂音がしたから……異変抗体が作用したのかもしれない。

良かった。なら大丈夫だろう。一安心だ。

「なんだこれは！ なにが……！ 何をした!？ 何を持っている!?!  
リリ——」

再びの破裂音と共に声が途絶える。

多分、もう大丈夫なんじゃないかな。例に依るなら。

「あ、や、の、さ、ん」

「……」

呼びかけるが聞こえていないのか反応が無い。

スピードもかなり速いから風の音で掻き消されてるのかもしれない。  
い。

下手に動いて落つこちても嫌なので仕方なく身を任せる。

……。

……。

……。

「……」

あれ？

体を起こす。

知らない場所だ。どこかの家の中かな。

綺麗に整った質素な部屋の中、知らないベッドの上におれはいる。

ああ、そうか。オレ、寝てたのか。

確か彩乃さんに抱えられて長いこと移動してて……徹夜明けだっ

たこともあつていつのまにか寝てしまつてたみたいだ。

じゃあここは……彩乃さんの家なのかな。

ベッドの傍の小さな棚の上にオレの携帯が置いてあるのに気づく。  
手に取り、画面を見る。

……。

着信履歴やべえ。

「あら……起きたのね。よく眠れたかしら?」

部屋の扉が開き、入って来たのは彩乃さんだった。良かった。

もしこれで全然知らない人が出てきたらどうしようかと思った。

それはそうと、彩乃さんは濡れた髪をタオルで拭いている。風呂上がりのようだ。緩く纏ったバスローブから覗く素足や鎖骨が色っぽい。既に彩乃さんの全部を見ているわけだけど、隠されている、見えないからこそ感じるものもあるよね。ミロのヴィーナス的な。

彩乃さんの向こう側にキッチンが見える。ワンルーム物件のようだ。

オレが今いるベッドと、布で覆われて中身は分からない小さな棚、小さなテーブルが置かれているだけの質素な部屋だ。

彩乃さんはここに住んでいるんだろうか。

「ん……。おはよう」

喉は痛いけど、さつきほどじゃない。

声もしやがれているけど、喋れないほどでもない。眠っている間に喉はだいぶ回復したようだ。人間の体って凄い。

「ここは彩乃さんの部屋?」

あまり喉を使わないように……腹に力を籠め、鼻を通して抜けるような声を出す。

ベッドの縁に腰かけ、彩乃さんを迎える。立ち上がるつもりだったが、彩乃さんが傍に寄って来て、優しくオレの肩を押さえる。

座つてろということだろうか。

「ふふ。おはよう。と言つても、もうお昼過ぎなのだけれど」

「そんなに寝ちやつてたか……。ごめんね。君の部屋だろうに……。無神経だった」

「いいの。可愛かったもの。あなたの寝顔」

彩乃さんは妖艶に笑い、オレの隣に腰かけた。慣れた動作で足を組



む。滑らかな肌、引き締まった太もも、脹脛を一瞥し、オレは彩乃さんへと視線を向ける。

「ふふ」

彩乃さんはオレに流し目を送りながら、一度組んだ足をわざわざ組み直した。

「どうかしら？　このまま……わたしと熱い時間を過ごす気はない？」

小首を傾げた流し目だ。色っぽい。

でも、この子高校生っぽいんだよな。制服着てたし。

こういうことに慣れてるのかなあ？

雅さんと同類だったりする？

雅さんとは攻め方が違うけど。誘い受けだしな、雅さん。

「悪くない誘いだね。オレも、彩乃さんとは、これからもっと親密になりたいと思ってるよ。まだ共有した時間は少ないけど、彩乃さんは優しい人だっと思うから。きっと大変だったろうに、何度も助けてくれてありがとう」

「ふう……」

彩乃さんは安心したような、どこか寂しそうな、それでいて楽しそうに溜息を吐いた。

「あなた、やっぱり変な人ね」

「それ、口癖なの？　あんまり何度も言われるとあまり良い気はしないんだ」

「そう？　ごめんなさいね。それじゃあ……面白い人」

彩乃さんが微笑んだ。

慈愛のようなものを感じる。

なんだろう……すやすや寝てる子猫を見たときみたいなの……。

まあ、面白い人なら……。妥協しよう。彩乃さんもオレの願いを聞いて言い換えてくれたわけだから。

「ねえ……」

彩乃さんが前屈みになり、オレに流し目を送って来る。谷間を見せてつけているんだろう。オレの反応を楽しそうに待っている。風呂上

がりの彩乃さんの体が赤く火照っていて、色っぼい。

「戦いの後つてね、とつても疼くの……」

前屈みの彩乃さんはバスローブの胸元を少し開くと、両肘を膝の上に置き、両腕を胸元に寄せて肩を竦めた。寄せて上げられた胸元の溝が深くなり、ぽわんと柔らかさそうに溢れる。

「とつても欲しくなるのよ……」

ちろ、と彩乃さんの可愛らしい舌が赤い唇を舐めた。蛇のようだ。

「……お」

押し倒された。ちよつと、力がとんでもねえよ。一瞬たりとも抵抗できなかった。

彩乃さんがオレの腹の上にまたがり、顔の両脇に手を置いた。情欲に染まり濡れた瞳がオレを射抜く。火照った顔が獲物を狙う蛇のようだ……と思つたのは失礼かな。

「獣のように……混ざり合いましょう……」

いやあ、なんだろうな……。

最近こういうの多いな。

信乃ちゃんもそうだったし、雅さんもそうだし。

追い詰められていた信乃ちゃんや、男に喰うこと・襲われることが嗜みみたいな考えを持つてる雅さんに、彩乃さん。彩乃さんの場合は……試してるのかな？

改めて思い返すと初対面のときに思わせぶりなことを言っていた気がする。お願いしたのに何でいうこと聞かないの、みたいなの。当時はちよつとヤバイ奴だと思つたけど、色々経験した今、アレは何か……性的に魅了された異性を従える的な力を持つてるからこそその言葉なのかもしれない。まあ、一切感じないんだけど。

求められるのが嬉しいか嬉しくないかで言えば嬉しいし、ありがたいとも思うんだけど……どうしても気が乗らない。

信乃ちゃんは言わずもがなだし、雅さんは打算ありき、彩乃さんはよく分からないけど、スポーツ感覚……なのかな？

オレが求めている深い関係は、互いを尊敬しあい、認め合った先にあるもの。むしろぶりつくように求めるものじゃないんだ。

雅さんが恥をかかされたって怒ったのも分かるけど、こればかりはもう価値観の違いだからどうしようもないんだよね……。

オレの首元に顔を近づけて来る彩乃さんの肩に手を当てて押し返す。

とんでもない力を持つてるらしい彩乃さんがそれで止まるとは思ってたなかったのに、すんなりと止まってくれた。やっぱり彩乃さんってば、優しいんだ。

「ごめんね。その渴きは……オレじゃ癒してあげられないよ」  
「……っ」

彩乃さんが驚いたように息を呑み、目を丸くした。

もしかしたら普段は使い魔の白夜さんと致していたのかもしれない。彩乃さん曰く、お人形さん遊びということらしいけど。夜のお人形遊び……。

「いつもは……白夜さんとしてのの?」

「はあ!? 馬鹿を言わないでくれる?!」

彩乃さんが素っ頓狂な声をあげた。表情も妖艶なものから、可愛げのあるものへと変化する。

「はあ……」

盛り下がった様子の彩乃さんがオレの上から転がるように退いたので、オレは体を起こした。

彩乃さんは頭痛でも堪えてるかののように頭を押さえている。

なんか申し訳ない。

オレはベッド脇の棚の上に目を向け、こう言った。

「二人の写真もあったから、仲が良いのかなと思っただけだ。観光地で撮ったのかな?」

そこにあるのは小さな写真立て。中に納められた写真には幼い彩乃さんと白夜さんと思しき男性が写っていて、この部屋の中にそれ以外の写真は見られない。

彩乃さんが作った使い魔を指して仲が良いというのも変な話かなと思うけど、わざわざ旅行先でツーショットを撮り、その写真だけを飾るくらいだから、そうなのかなと思っただけ。

でも彩乃さんの取り乱し具合を考えると違うみたいだ。

「……」

彩乃さんは静かに立ちあがると棚へ近づき、写真を見せないように伏せてしまった。その際の寂しげな横顔が印象的だった。

「これは白夜じゃないわ」

「そうなの？」

「ええ」

オレも白夜さんのことは遠目に見ただけだから、写真の人物と同一人物かどうかは分からない。似てるようにも思うけど、彩乃さんが違うと言えば違うんだろう。

彩乃さんが艶やかな長い黒髪を頭の上で纏めだした。うなじが綺麗だ。

髪を纏め終えた彩乃さんが振り返り、小さく笑った。

「わたしのお願いを断れる異性なんて、あなただけ。誇っていいわよね？」

「お願い……。以前も思わせぶりなことを言ってたよね。お願いしたはずだけど？ とか。あれってどういう意味なのかな？」

「本当に自覚が無いのねえ。不思議な人。何もわかってないのに、全てに抗うなんて」

「もしかしてオレになにかしてるの？ だったら以後は止めた方が良いや。あの馬の怪獣や、さっきの天使みたいになるかもしれない」

「さっきの天使……。そうなのね……。中々こちらに顕現しないから、もしかしたら、と思っただけど……。やっぱり、あなたが何かしたのね？」

彩乃さんがいちいち色っぽく言う。

「たぶんね。オレも、よく分かってないんだけど」

「そうね……。教えてあげる。あなたがどういう存在なのか」

彩乃さんが自信ありげに笑う。

でも、多分間違ってるよ。

「あなたは妖魔族と人間の間に生まれた半妖魔。わたしと同じ、ね」  
違いますね……。

「しかも恐らくは……わたしの母よりも高位。妖魔の神に近い存在の子よ」

「それも違いますね……」

「そう考えれば、すべての辻褃が合うの」

「ごめん、合わないの……」

「わたしの結界をすり抜けて来られたことも、麒麟が手を出せなかったことも、『深淵の目』が押し戻されたことも。そして、天使を退けたというあなたの言葉と、今、わたしの妖力を断つたことで確信したわ。ああ……」

彩乃さんは陶醉したような瞳でオレを見ている。熱い吐息を零した。

座っているオレの膝の上にまたがり、肩に手を乗せてきた。目の前に豊かな母性が迫る。圧巻の対面騎乗……

お風呂上がりで良い匂いだ。好きな匂いだ。是非ともボディーツープの銘柄を知りたい。

「心当たりはないかしら？ わたしたちは異性に対して魅了の力を持つ。それは妖魔族の人間を惑わす力の片鱗……。あなたがわたしの誘いを頑なに拒むのは……きつと女に辟易しているからでしょう？

あなたの気持ち、分かるわ。誰よりも、ね……。そしてわたしの魅了が効かないのは、あなたとわたしが同族だから……。それも、あなたがわたしの母よりも強い妖魔の子で、わたしよりも潜在能力が上だからこそ……」

……心当たりがないかと言われると、答えに困るな。

最近の女性との交友関係ことを思い返すと、確かに無くはないかなって感じではあるから。

でも彩乃さんの仮説が10割間違っていることは確信している。だって田辺の友人の女子との関係は最悪だったし。

というか、魔人案件じゃないのか？

なんか、重なる点がるでないんだけど……

やっぱりこの世界、どっかおかしくないか？

異変が多く生じてるのは百歩譲って良いとしても……繋がりが無

さすぎる。

「信じられないのも、驚くのも無理はないわ。わたしも驚いたもの。まさか、わたしに同類がいたなんて。本当に……驚いたわ……」

彩乃さんがオレの頭を掻き抱く。

別のことで困惑していたんだが、誤解を与えてしまったらしい。

「初めて会ったとき、もしかしたら違って思ったの。2度目に会ったとき、擬態した彼らかもと疑った。でも、あなたはどこまでも誠実な『人』だった。そして今日、確信したの。わたしたちは血脈が欠けた者同士……。わたしたちは理解し合える。苦しみを分かち合える。わたしとあなただからこそ……とろけ合うように繋がれる。唯一あなただけが、そしてわたしだけがこの世界で……。歯車が重なり合うように……最も深いところで、何よりも強く……」

柔らかい母性が押し付けられる。

「愛し合えるはずよ……」

いやあ……。

盛り上がつてるところ本当に申し訳ないけど……違うと思う。

はあはあ、と彩乃さんの息が荒くなってきている。

興奮しているようだ。

戦いの後は疼くって言うのは嘘じゃないらしい。

「彩乃さん、待って」

「自覚が無いのね……。ふふ、大丈夫よお？ わたしは淫魔の血を引く女……。交わりの中で開いてあげる……。わたしに身も心も委ねて……。わたしもあなたに、わたしのすべてを捧げるわ……」

彩乃さんの顔が近づいて来る。

「わたしの隙間をあなたで埋めて……」

それは男と女のド直球な下ネタなのか。

それとも心のことなのか……。

力が強い。

押し返そうと思ってもびくともしない。

そして、ぱあん、と破裂音。ごっん、と鈍い音。

うわ……。やば……。

彩乃さんが何かに弾かれたように急激に仰け反り、オレの膝の上  
に下腹部を乗せたまま、頭が机の上につかつた。伸ばされた両腕が  
まるで助けを求めるように直立している。

あ、力が抜けてぺたんとな落ちた。

「大丈夫……？」

腰と背中筋がヤバそうだな。

幸いにも汚い花火になったわけではない。死んだわけでも無いよ  
うだ。敵意や殺意が無かったからってことなのか……。これまでの  
異変のようにならなかつたのは本当に良かった。

ただ、気を失っているようだ。

声掛けに返事が無い。

「だから言ったのに……」

彩乃さんが言っていた魅了かなんかを使つたんだろな……。意  
識してなのか無意識なのかは分からないけど……。

オレは仰け反つたまま動かない彩乃さんの背中に手を回し、引つ張  
り寄せる。

かくん、と首が力なく垂れ、引き寄せた反動でオレの肩に乗つた。

「……」

なんとなく事情は分かつた。

どうやら彩乃さんは妖魔とかいう存在の母と人間の父親のハーフ  
で、妖魔から命を狙われているらしい。あの天使の話では裏切り者  
ということだったので、母親が妖魔側を裏切つて人間の方に寝返つた  
てことかな。

それで娘である彩乃さんが命を狙われるっていうのもオレからし  
たらおかしい話だけど、妖魔からしたら彩乃さんも憎悪の対象なん  
だろう。

ぼんぼんと背中を叩く。

この子も苦労してるんだな……。

「おとうさん……」

寝言か……。

以前、復讐とか言つてたし、もしかしたらご両親は……。

気を失っている彩乃さんをベッドに寝かせ、布団を掛ける。  
目元から流れ落ちる一筋の雫を親指で拭った。

「……」

部屋の中を見渡す。

ペンと紙を見つけ、オレの電話番号と名前を記し、テーブルの上に置いた。

携帯のアプリを使って現在の位置情報を割り出す。県外か……。結構遠いな……。

帰るにも出費がかさむなあ……。

玄関から外に出るとき、一度振り返った。

彩乃さんがこれまでどれだけ苦労して来たのか、その全貌は分からないけど、同族を見つけて本当に嬉しかったんだろう。

同族じゃないけど。

「ごめんね……」

頭吹っ飛ばしちやっつたのはマジでごめん。

部屋を出て、着信履歴に折り返す。

ワンコールも待たずに通話が繋がった。

「雷留君！ 大丈夫!？」

涼音の第一声がとんでもなく大きい声だったので、思わず携帯を耳から話した。

「あー、うん。大丈夫。心配かけてゴメンね。そっちはどう？ なにかあった？」

「ううん。何も無いよ。雷留君が居なくなっただけ以外はね！ どうしたの？ なにがあったの？ 大丈夫なの？」

「こっちもだいじょうぶ……ぶ、だと思っ。でも、そっか……。そっちはなんともないんだね。またオレの知らないところで魔人が来てたらどうしようかと……」

「それは大丈夫。それより、なにがあったの？ 雅の話だと、急に目の前から消えたって話だったよ」

「あー……そういう感じなんだ……。話すとちよつと長くなりそうだから、帰ったら話すよ」



「ん……。分かった。じゃあ、迎えに行くよ。今どこ？」

「実は……」

「ええ!? 県外!? 雷留君、信じられないくらいに神隠しに遭ってるじゃないの! 異変抗体はどうしたの!？」

「いやあ、それも話が長くなるから……」

「涼音、かわれ! 儂が東堂様のご無事を」

「黙れ雅! 今わたしが話を」

「またねー」

オレは通話終了のアイコンをタッチし、サイレントモードにしてポケットにしまった。

## 巫女・妖狐 10

涼音との電話を終えてすぐ、バイト先のスーパーに電話を掛けた。無断欠勤してしまったことを謝るためだ。電話に出たのはいつもの社員さんだった。

オレが無断欠勤したことを心配してくれる言葉には罪悪感と感謝を抱いたが、無断欠勤したオレの代わりに急遽出勤したらしい社員さんの疲れ果てた声音には心配してしまう。

いや、そうか……。

オレが欠勤した穴埋めが見つからず、せつかく半休だった社員さんがまた駆り出されたのか……。申し訳の言葉もない。

オレも溜息が出てしまう。しかも、今日だってもう昼間だ。講義は欠席になってしまった上に、昨日の穴埋めで夕方に出勤することになってしまった。断ることも出来たけど、さすがに無断欠勤してしまったのでその清算はしておきたい。

電車で帰るとして……うーん、駅まで涼音に迎えに来てもらえると助かるな。あとでまた連絡を入れよう。

これじゃあ今日は信乃ちゃんのお見舞いには行けないな。

一昨日の夜に起きた病院襲撃事件とかいう前代未聞のテロ行為の顛末も気にはなる。

インターネットニュースはその話題で持ち切りだ。当然と言えば当然だけど、ネット社会の弊害だなあ。病院前で半グレたちと戦っている信乃ちゃんの写真がアップされている。写真を撮っている人がいたようだ。遠いから画像は鮮明では無いし、モザイクも入ってるけど、あまり良い気はしないな。警察の人達が動いてくれているのか、画像は順次消されて行っているみたいだけど、一度ネットに上がってしまった以上はどこかには残ってしまう。

悔しいな。あの子はなんでそんな動乱の渦中に……。

なんとか時間を作って会いに行き、労わってあげたい。

そんなことを考えながら徒歩で最寄りの駅に向かい、新幹線に乗って一時間とちよつと。

再び軽くなつた財布にから笑いが零れる。

見知つた駅に着き、改札が出る。

駅前のロータリーに涼音の車を見つけた。涼音の方もオレを見つけたらしく、車から降りて来る。手を振った。

移動中に再度連絡すると、涼音は快く迎えを了承してくれた。本当にありがたい。得難い友人だ。

涼音の車に近づくと、後部座席から降りたらしい雅さんが、車の向こう側から姿を見せた。

そして当然のことながら、見た目だけなら大和撫子な巫女さんと、レトロな文学少女な風貌の巫女さんの二人組なんてとんでもなく注目を集める。昼間ということ人で少ないのは不幸中の幸いか。しかしその少ない人の中に、コスプレイヤーとでも勘違いしているのか、携帯を取り出し、涼音たちの写真を撮り出す人がいる。

それに気づいた涼音が不愉快そうに眉を潜めた。

雅さんは周りの人達が何をしているのか理解していないというか、気にも留めてないと言つた感じだ。

雅さんが車の外周を回り、オレ側のドアの傍に立った。

雅さんの意図を察する。

案の定、雅さんはオレのために後部座席のドアを開けた。そして小さく頭を下げ、オレの到着を待っている。

ありがたいけど、注目を集めている状況でそれはちよつと……。

しかも高級車とかじゃなく、ただの軽自動車だ。何事だと無駄に勘繰られてしまう。まあ、大学とは違ってこの場限りのことだからそれほど問題はないか……。

それはそれとして、許可も無く涼音たちの写真を撮っている人間が不愉快だな。

最近では交通事故の現場でも、モラルなく写真撮影をする通行人がいると聞くけど、彼らもそういうことしそう。信乃ちゃんの写真を撮っていた人らも……。

コスプレ大会の現場とかなら分らないでもない。だけど、ああいうお祭りごとの場でも、写真を撮る際はちゃんと本人の許可を得ると

いうし、皆それをマナーとして遵守していると聞く。  
気分が悪いなあ、ああいう手合いを見るのは。  
車に近寄る。

「雅さん、ありがとう。少し待って貰って良いかな？」

「承知いたしました」

雅さんに軽く手を挙げる。

雅さんが姿勢正しく頭を下げた。

綺麗な所作だなあ。昔、地主とかに取り入っていたって話だったから、その時代に覚えた礼儀作法なのかな？

かなり栄えている武家とかに入っていたのかもしれない。

「涼音」

「雷留君、おかえり」

「ただいま。わざわざありがとうね。急な頼みだったのに」

「大丈夫。もともと迎えに行くっていったのはわたしだし、友達を迎えに行くってわくわくするから！」

「そうなんだ……」

よく分からない感覚だけど、友達を迎えに行くのは涼音的にはわくわくする事らしい。

会ってまだ三日四日なのに、随分と親しみを感じてくれているらしい。オレとしても割と友情を感じてはいるけど、結構な温度差がありそうで戸惑ってしまうな。

涼音はこれまで、父親以外に特別な人間に会ったことが無く、孤独を感じていたということだったから、そのフラストレーションが爆発してすっ飛んできてるんだろうとは思っている。

オレとしても、涼音の友情には応えたいと思う。

「涼音は無断で写真を撮られるのって嫌だよね？」

「そりゃあ、嫌だけど……。ああ、あれ？」

涼音は諦念を滲ませ、呆れたように笑った。

「街中に出るとたまにいるのよ。ああいうの。地味な格好をしてるはずなんだけど……。おかしいことだね」

うーん。

レトロな文学少女な風貌は確かに地味の代名詞ではあるんだろうけど、レトロ過ぎて浮いてるといふか……。

さらに巫女服だからどうしても目立つのは仕方ないと思う。

オレも道端で涼音を見たら少なくとも二度見はすると思うし。

だからと言って無断撮影はダメだろう。

「分かった。ちよつと待つてくれる？」

「えっ？」

涼音の意味も確認したし、オレは無許可で涼音たちを撮影している三人組のところへと向かう。

「こんにちは。今、彼女たちの写真を撮られてました？」

「あ？ なに、お前」

「彼女たちの友人です」

「あー？ 撮ってねえから消えろよ。だりいな」

「きも」

「頭おかしいんじゃないネーノ？」

けらけらと笑う三人組。

いきなりすごく攻撃的だな。やましいことがあることの裏返しと受けとった。

モラルと教養のない奴は嫌いだよ。

「彼女たちの写真を消して貰いたいんですけど、お願いできませんか？」

頭を下げる。

「奇異な格好に見えるかもしれませんが、彼女たちはコスプレをしているわけではなく、本職の巫女さんなんです。仕事の合間に、友人であるオレを迎えに来てくれた……。オレのせいで不快な思いはして欲しくない。写真を撮られたのなら、どうか、お願いします。消していただけませんか？」

「分かったよ……」

「すげー」

三人のうち二人は頷いてくれた。

その二人の腰がちよつと引けているというか、信じ難いものを見る

ような目でオレを見て来るのが気になったが、消してくれるならそれでいい。

オレは最後の一人に視線を向ける。

「あー？ オレは撮ってねえよ」

「おいおい……。消してやりやいいいだろ」

しらばつくれる男を連れの男が諫める。

「撮ってねえつつつてんだろ！ 証拠あんのかよ、証拠！」

連れの男達は困ったように肩を竦めた。これ以上オレのために動いてくれる気はないらしい。

「お願いします」

オレは再度頭を下げた。

「んー、じゃあさ」

男は下品な笑いを浮かべて、こう言った。

「あの子たち、紹介してくんね？ 最近暇してんだよね」

「おいおい……。さすがに引くわ……」

「まじ？」

男の言動に、連れの男達も戸惑っているようだ。

というか、やっぱり撮ってんじやねえか。知ってたけど。

さて、どうしたものかな。

そう思った矢先、後ろから「お前様」と雅さんの声。

「何か面倒事でございませうか？」

お前様……？

久しぶりに聞いたな。もしかして名前を伏せてくれたのか？

だとしたら……気が利く。ありがとう。

「ん……まあ、そうだね」

「やはりそうでございしましたか」

「近くで見るとすっげー美人……。ねえ、君、かわいいねえ？ どう？

これからオレらと遊ばない？」

男はスケベ根性丸出しの顔で雅さんに近づき、その体に触れようと手を伸ばした。

雅さんに伸ばされた手を掴む。

「あんだ、それはライン越えだろ。弁えなよ」

男と雅さんが驚いたようにオレを見た。

雅さんは嬉しそうに着物の袖で口元を隠した。徹底してますね……。

「あー？ なに？ もしかして調子乗っちゃってる感じ？ 女の前だからって？ かつこいいねー？」

掴んだ男の手を押し下げる。

「なにすんだよ」

「写真、消して貰えます？」

男が舌打ちをして、オレを睨みつけて来る。

オレは男の目を見つめ返した。

「写真、消して貰えます？」

「お前、頭おかしいんじゃないの……？」

「写真、消して貰えます？」

「きもー」

男がオレの手を払い、数歩後退る。

キモイのはお前だよ。

男は携帯を構え、オレと雅さんへと向ける。

「そんなに写真撮られるのが嫌なら撮っちゃおー！」

男の言動に、さすがに驚きを隠せない。

凄い頭悪そうだな。人の嫌がることをするのに人生をかけてるのか？

そう思ったとき、男の目の焦点が合わなくなった。そしてぐるんと白目を剥き、動かなくなる。

「ええ……？ 君、大丈夫？ どうしたの？」

虚ろな様子の男に声を掛けたが返事はない。

連れの男達の方を見る。なにか彼が病気を抱えているのか聞こうと思っただけ……彼らも様子が変だ。がたがたと震えながら、怯えるようにどこかを見ている。

彼らの視線を追って見た先には、雅さんがいる。

雅さんは柔らかに微笑んでいて、オレと目が合うと恭しく頭を下げ

た。

オレは雅さんの傍に寄った。

そして小さくお辞儀をしたままの雅さんの耳元に顔を近づけ、囁くようにこう訊ねた。

「もしかして、なにかしたの？　というか、なにかしてる？」

「うふふ」

姿勢を正した雅さんは妖し気に微笑みながら、口元を袖で隠した。

うーん。

これは妖狐。

中々写真を消してくれない男は虚ろな目で虚空を見つめているし、男たちは声も出ないほどに怯えているようだ。かと思えば、他の男達からも表情が消え、虚ろに虚空を見つめ始めた。しかもなんか、恍惚としているような気も……。

「この無礼な童わっぱらにご命令くださいまし」

「命令？」

「先ほど何か仰っておられたではありませぬか。東堂様が頭を下げる必要などありません。わたくしめに命じてくだされば、人の子を従えるなど赤子の手を捻るも同然でございます」

凄いいこと言うね……。

「ちなみに、なにをしたの？」

「少しばかり夢の中に誘ったのみでございます」

「つまり、洗脳してるってこと？」

「そのような表現も……間違いではございません」

「洗脳、ね……。彼ら、後遺症とか残る？」

「わたくしは東堂様の命を違えませぬとも。この童らは夢を見ておるにすぎませぬゆえ、目覚めれば恙なく日常に戻りましょうとも」

「そう……」

うーん……。

……。

しゃあないね。

先に道理に背いたのはあつちだから、これも因果応報ってことで。



あ、涼音が全力疾走でこっちに向かってきている。  
理由は雅さんだろう。

「なにをしているんだ!」

涼音が怒っている。

妖怪退治屋を生業にする予定の涼音からしたら、雅さんのこれは目に余る暴挙に映るだろう。

正直、オレは別に良いかなって思うけどね。

罪のない善良な人間が我慢を強いられて損をするよりは、悪意のある人間が因果応報を受けた方がスッキリするもの。

「雷留君も、なんで止めないの!?!」

「そうは言われても、何をしてるか分かんないし。雅さん、そんなに凄いことしてるの?」

ぶつちやけ、これで穏便に解決するならそれでいいかなと思ってました。

「雷留君、ホントに感じないの……? あかね、今ここ、妖気凄いよ? それに、雅はこの人たちから精気を吸ってる。見過ごせないよ。おい雅、いい加減やめろ!」

結構なことが起こってたらしい。

オレは雅さんの方を見た。

「雅さん?」

「ご容赦を! この童らは少々血気盛んゆえ、少しなら構わぬかと思い! 東堂様もお困りのようでごさいましたので……」

「それはそうだけど……。涼音、雅さんはまだそれ、やってるの?」

「やってる。おい、雅いい加減止めろ」

「黙れ涼音。東堂様。東堂様が止めると仰せならば、すぐにでも。しかし東堂様の目的を果たされてからでも遅くはないかと存じます……。今であれば、童らは東堂様の御意のままに動きます」

「この狐! 人を操るとは!」

「いや、ちよつと待って、涼音。それはそうなんだけど」

「立腹の涼音を諫め、雅さんに問いかける。」

「雅さん、本当に彼らに後遺症は無いんだよね?」

「……。多少の倦怠感は……」

「さつきは無いって言ったのに……」

「め、目覚めれば間もなく治まるものにごさいます！ 対価として、相應の悦楽も与えておりますゆえ……どうかご容赦を！」

「倦怠感ってどれくらいのもの？ 全力疾走した後みたいな感じ？」

「個人差はあるかと存じますが……東堂様も、それ自体はご経験があるかと。であれば、問題ないこともご理解いただけるかと存じます」  
悦楽。倦怠感。オレも経験がある……。

そして話に聞く雅さんのやり口……。

「あっ……」

察した。

なるほどね。

男達を見て、視線を下へ向ける。どことは言わないけど隆起している場所がある。

ドスケベ狐め……。

「ごほん。夢を見てるって言ってたけど、いつ目覚めるの？」

「東堂様のご指示を果たせば自ずと」

「それは嘘じゃない？ 隠し事も無い？」

「ありません」

「……。まあ、そういうことなら……」

「え？」

オレが納得を示したことで、涼音は困惑したように小首を傾げた。

いいよ。

そのままの君でいて。

オレは雅さんに促されるままに、男達に写真を消すように言った。すると男たちは虚ろな様子で携帯を操作し出した。そして写真を消した証明として、携帯の画像フォルダまで見せてくれたんだけど、なにやらいかげわしい画像が多かったので、やましいことがあるなら警察に出頭してはどうかと言ってみる。

男達は覚束ない足取りで駅前の交番がある方へと歩いていく。  
やましいことあったんだな……。

それはそうと……。

実は雅さんって、思ったより危険な妖怪なのでは？

今回のことはオレの認識だと割と善行なんだけど、これを何の縛りも無く好き勝手に使われると世の中がヤバイ。

さすがは妖狐と言ったところか。

これ……雅さんとはちゃんと関係を築いておいた方が良さそうだな。

今はオレを保護者として立ててくれてるし、価値観がズレてはいるけど、なんだかんだむやみに人間に危害を加えるということは避けてくれているようでもある。でもオレが不要になったとき、どうなるかわからない。

雅さんは自分をかなり弱い妖怪だと言っていたけど、魔人を倒すとレベルアップするらしいし、今どれくらい強くなってるかわからない。尾がどんどん増えていつてるわけだし、それこそ伝説の九尾みたいになられたらと考えると……。

魔人との戦いがいつまで続くのかは分からないけど、雅さんの敵対者がいなくなったとき、雅さんがどう動くかは正直なところ掴めない。もしもすべてが終わった後、恐らくは涼音以外の霊能力者を失っている人類に対し、最後の大妖怪として敵対してくるようなことがあるれば……ヤバイよね。

そのとき、涼音がどの位置にいるかは分からないけど、きっとそうなるころには、雅さんもオレのことを熟知しているだろう。今のところ、異変抗体はオレだけを異変から守る体質だとしか思えないから、雅さんは徹底的にオレを避ければ好き放題ができる。

以前にオレに見せた態度や涼音への言動、今の野郎どもへの対応や、神主さんを歯牙にもかけない様子からして、基本的に人間を見下しているのは間違いないようだし。

とは言っても、どうしようもないけど。

前から思っているように、雅さんに人への情が芽生えることを祈り、誠意を持って接し続ける他ないかな。

「雷留君……」

涼音は戸惑っている。

洗脳されている男達とのやり取りですべてを察したらしく、さつきまでの憤りは収まっているようだった。自称妖怪退治屋として思うところはありそうだけど、事情が事情だから強くも言えないって感じかな。

「待たせてごめん。用も済んだし、行こうか」

ぽんと涼音の肩を軽く叩きながら横切り、涼音の車へと向かう。

「待って」

涼音が呼び止めたので振り返る。

「あの、ありがとう」

涼音の言葉に、オレは静かに頷くことを答えとした。

何のこと？

と聞くのは察していない振りがわざとらしいと思った。

お礼なんて良いよ。

というのは本心だけど、涼音が伝えてくれたせつかくの気持ち宇宙に浮くかなって。

「お節介じやなかったかな？」

「そんなことない」

「ならよかった」

「びつくりはしたけど。雷留君は……凄いね」

「何が？」

「なんだろう……。行動力？」

「行動力？ そうかなあ？ オレ、結構面倒くさがりだよ」

「だって……普通、あんなのに関わりに行かないよ」

「どうして？」

「面倒くさいことになるから」

「だからって何も悪いことしてない涼音が嫌な思いをして、そのまま泣き寝入りなんて、理不尽だと思わない？ オレはそんなのは嫌だし、涼音も嫌なものは嫌だろ？ オレは涼音には嫌な思いをして欲しくないよ」

「わ、わたし『には』……っ!？」

「うん」

「……っ！」

涼音がきゅ、と唇を閉めて姿勢を正した。

喜んでくれているんだろう。オレなりの友情がちゃんと伝わっているようで良かった。しつかり気持ちが伝わると嬉しいよね。

「わ、わたしも、ちららいらいるくんには」

「おう、涼音。儂も手伝ったんじゃないか？ 言うことがあるじやろ。ん？」

すん、と涼音の表情が冷えた。

「……。何言ってるんだ。お前だってこっち側だろ。撮られてるんだよ、お前も！」

そんなやり取りをしながらオレ達は車へと戻った。

小走りに車へ向かった雅さんがオレのためにドアを開けてくれたので後部座席に乗り込む。

雅さんはオレの方のドアを閉めると反対側に回りドアを開け、オレの隣に乗り込んだ。慣れたもんだな。適応力が凄い。

運転席に乗り込んだ涼音が苦虫をかみつぶしたような表情でバツクミラー越しに雅さんを見ていた。

今度から助手席に乗った方が良いかもな。

車が出発する。

しばらくして、ふと思いついたことを口にした。

「あのさ。巫女服なんだけど、避ける気はないの？ 目立ちたくないなら洋服とかにした方が良さそうだけど」

「それはダメ。巫女服はわたしのアイデンティティだもの。なんてってわたしは巫女で妖怪退治屋なの。普通じゃない凄い巫女だから」

「そう……」

「わたくしは東堂様のお望みであれば、ふんどしサラシ姿であろうと喜んでお応え申し上げます」

「いや、それは望まないかな……」

とは言いつつも、雅さんどうこうは置いておいて、美女のふんどしサラシ姿っていうのはちよつと興味があるね。

それは哀しいが否定できない。

☆☆☆

さて、バイトを終えて、東堂家へ向かった。

先日出来なかつた泊りの支度をやり遂げるためだが、バイト中の四時間、待つてくれていた涼音には頭が下がる。

東堂家に着いて、長く使われてこなかつた敷地内の駐車場に涼音の車が停まったときは、少し感慨深いものがあつた。

昨日、大学に行く前にテキストだけ取りに来たときは門前で待つて貰つてすぐに発つたから、駐車場には入らなかつたし。

敷地内の駐車場で車から降り、東堂家を見上げた涼音の顔はとても高揚していたように思う。たぶん、友達の家に来たつていうのが初めてなんじゃないかなつて。遊びに来て貰つたわけじゃないけど、足になつて貰つてるお礼も兼ねて、おもてなしを……と思つて、気づく。

信乃ちゃんの件で荷物をほつたらかしていたから、昨日の朝の時点で食べ物……。さすがに水道水を出すわけにはいかないし。

そわそわとしながら家に上がった涼音に何のおもてなしも出来ずに申し訳なく思う。

雅さんはなんか不思議そうに小首を傾げていた。覚えがあるような無いような、と言つていたので、もしかしたら前に門前で死にかけていたあの狐が雅さんだったのかもしれない。覚えていないようだけど。だとしたら魔人にやられて逃げている最中だったのかも。

先日の時点でおおよその荷物は纏めていたのでそれほど時間も掛からずに泊り支度を終え、東堂家を出る。

茶都山家の電気は消えていたが、車はあつたので大丈夫だろう。茶々ちゃんに連絡先は渡してあるから、何かあれば連絡はくれるはず。出来ることもそうはないけど。出来れば、強い魔獣と戦わないで欲しいなと思う。

明日はシフトも入つてないし、大学が終わり次第、茶都山家に電話してみよう。出来れば会う約束をして、涼音たちと会つて貰いたい。答え合わせも出来るだろう。

それはそれとして、信乃ちゃんの様子も見に行きたいな。

彩乃さんから連絡が来なかったのは意外だったけど、生きていたのは確認してるから大丈夫だろう。もしかしたらまた怪獣……妖魔と戦ってるのかもしれないけど、無事だと良いな。あまり辛い思いをせずについて欲しい。

しかしやることが多い。メモ帳でも買おうかなあ。忘れてしまっそうだ。

神社に着いた。

半壊した社にはシートが掛けてあった。神主さんが頑張ったのだと涼音から教えてもらう。

へえ……。凄いな。

大工さんと呼ばないのは、お金が無いかららしい。それは仕方ない。

そして、オレ達は宿坊の和室に集まった。

神主さんが言った。

「まずは改めて。涼音から聞いてはいたが、無事で何よりだよ」

「御心配をおかけしました」

事情を説明すると、神主さんは頭を抱え、涼音と雅さんも困惑した様子を見せた。

「妖魔……？ 妖怪ではないのか……？ 一体……。いや、それよりも。東堂君。君は、その、大丈夫なのか？」

「何がですか？」

「一昨日の病院の件と言い、それ以前のスーパーの件と言い……。あまりに異変に巻き込まれ過ぎている」

「そうですね。だからお祓いに来たんですよ、オレ」

「む……。力不足で申し訳ない」

「ああ、いえ。すみません。そんなつもりでは……。オレもちよつと変だなんて思ってるってことを伝えたかったんです」

「それをちよつとで済ませる君の胆力には頭が下がる……。私は魔人の件だけでいっぱいだよ」

「んー。たまたま居合わせるだけなので、気は楽ですよ」

「いや……偶然とは思えない。なにか運命のようなモノを、私は感じるよ。それが良いか悪いかは……何とも言えないがね……」

「運命……」

それにしても運命多すぎじゃない？

どんだけ異変まで運ばれるんだ……。

「まあ、オレのことは今は置いておきましょう。雅さん、妖魔って言うのに心当たりはある？」

「いえ……、分かりかねます。わたくしたちをそう呼称する人間もおりましたが……西洋の竜や麒麟、巨人などは覚えがありません。海の外のことは詳しくは知りませぬが……麒麟など人間の空想でございましょう。それらも魔人というだけではございませぬか？」

妖怪が空想って言うのもなんだかな……。

「どうだろう。全部が全部そうとはとても……。魔人が雅さんの抹殺を目的にしてるなら、他県の平凡な女子高生を異界に引きずり込んで無限ループに陥れる理由が分からない。魔獣の生まれ方も気になる。魔人がそうやって現れるなら別だけど……」

魔獣が成長すると魔人になる、とか……？

それでも律ちゃんのが件がノイズなんだよな。

彩乃さんは自分を淫魔との半妖って言ってたけど、魔人の子ってことなのか。だとしたら雅さんとは別に狙われているのは理由が付く、か。簡単に言えば彩乃さんの件は魔人の内輪揉め……。そう考えると辻褃はあうのかも。

彩乃さんの仮説は辻褃が合ってなかったけど。

「もしかすると……」

神主さんが言った。

「妖怪が消え、魔人が現れたことで……何かが起きているのではないか？ 世界の法則が乱れるようなことが」

「それって……」

涼音が何故か興奮したように反応した。

退治屋家業が捗りそうだからって喜ぶなよ。

「とはいえ、我々だけでは堂々巡りだ。東堂君の言うように、連絡がつ



く魔法少女たちと話をしてみたいところだ」

神主さんがオレに視線を向けて来たので、頷いて応える。

「はい。時間が出来次第、連絡を取ってみます」

神主さんが頷き、雅さんの方へと視線を向ける。

「それで、東堂君。雅が話があるそうだ。わたしたちは昨夜、ある程度は聞いたのだが……」

「話？」

雅さんが頷いた。

姿勢の良い正座だなあ。

「わたくしも遂に三尾となりました」

「遂についているのはよく分からないけど、おめでとう」

オレの言葉を受けて、雅さんは静かに三つ指をついた。

「三尾になって良いことがあるの？」

「ありますとも。妖力が強まったことで、有象無象共を纏め、支配する力を得ましてございます」

「有象無象って言うと、涼音が言っていた……その辺に浮いてるっていう？」

「おっしゃる通りでございます」

「なんかね」

ふいに、涼音が言葉を差し込んだ。

「結界が壊れたことで、雅、ここでも力が発揮できるんだって。しかも霊脈から力を汲み取ってさらに強く成れるらしいよ」

罰当たりな、と涼音が最後にぽそりと呟く。

神社の巫女さんからすると、神社の霊脈というのから妖怪が力を吸い取るということはあまり良い気がしないものらしい。

雅さんがこう言った。

「有象無象共を集め、纏め、一つの妖怪へと昇華させます。それらをここに防衛力として配置し、霊脈と繋げ、強化いたします。さすれば、魔人ともある程度は戦えましょう。あやかしの相性や属性で強化の幅も変わりますゆえ、戦力の増強が見込めます。わたくしより強いものは作れませぬが……」

神主さんが頷いた。

「妖怪が増えるのは思うところはあるが、戦力が多いに越したことはない。この地の霊脈と涼音の霊力、雅の妖力で従順な妖怪……妖怪を基にした式神を生み出し、この神社に防衛戦力として各所に配置、魔人を迎え撃つ」

涼音が続けた。

「でも、小さい妖怪にも限りがあるから、強い式を作るために、色々なところから材料を集めないといけないんだって。全国津々浦々、妖怪集めの旅だよ、雷留君！」

「涼音、旅行に行くわけではない。遊びでもない。勘違いするなよ」「分かってるよ、お父さん」

皆の話を聞きながら、オレは思った。

——タワーディフェンスかな？

## 巫女・妖狐11 / ヤンキー少女3

対魔人戦略についての話を終え、とりあえず今日は解散することになった。

昼間まで寝ていたとはいえ、色々あつてオレも疲れている。横になると、すぐに眠りについた。

翌朝目覚めると……なんだろう。不思議と良い匂いがした。

最初、神主さんが朝ご飯の支度をしているのかとも思ったけど、即座に否定する。食欲をそそるような匂いじゃなかったからだ。香水のような、違うような。花の匂い……。いや、芳香剤？

考えるも答えは出ず、疑問を抱えながら大学へ行くための支度をす

る。  
着替えを終え、食堂へと向かった。

一昨日もそうだったけど、雅さんは既に食堂に居て、オレを迎えてくれた。

「おはよう。今日も早いね」

「おはようございます。東堂様をお出迎えいたしますのは当然のことでございます。どうぞこちらへおいでくださいまし。朝餉の支度は整っておりますゆえ」

雅さんが小さくお辞儀をし、掌でテーブルと椅子を示した。雅さんが示すオレの席には既に朝ご飯が用意してある。おいしそうだ。実際、雅さんの御飯って美味しいんだよね。初めて会ったときもそうだったけど。

一昨日の朝と同じなら、雅さんはもう食事は済ませているんだろう。

テーブルの上にオレの食事しか置いていないのは……神主さんや涼音がもう食べたというわけではなく、雅さんがオレの分の食事しか用意してないからだ。これは一昨日の朝もそうだった。

涼音や神主さんの世話をする気は一切ないらしい。徹底してオレだけを優先する姿勢には逆に感心するし、特別扱いされること自体には悪い気はしない。涼音や神主さんを蔑ろにしないなら、ではあるけ

ど。雅さんは神社の家政婦というわけでは無いし、涼音たちの食事を作る義務も別に無い。だからオレの分だけしか朝ご飯を作っていないことを責めることは出来ないし、責めるつもりもない。ここで涼音たちが自分たちの分も作れと言うのなら、オレは涼音たちを窘める側に回らないといけないだろう。

涼音たちは雅さんを守ろうとしているし、涼音に関しては雅さんの境遇に多少の同情を感じているのは確かだろうけど、雅さんの方からすると涼音たちの助けは別に……って感じみたいだし。

オレ自身、一昨日の朝、雅さんの献身に対し、申し訳ないからと一度断ったんだけど、それを聞くつもりはないようだ。オレに絶対服従のようできて、その実、オレの役に立つと雅さんが確信していることについてはオレの意見を聞かず押し通そうとするところは……実のところ好感を持っている。

すっかり自分を持っている、という意味で。

雅さんの割り切り方とかも、オレとしては嫌いじゃないんだよね。ただ、雅さんの言動で嫌な思いをする人が居て、それがオレの目に入るようなら止めるし注意もするけど。それを見ないといけないオレが不愉快だから。

涼音との関係は……互いにぶつかり合ってるから別に良いかなって。どちらかが一方的についていうならそれも止めるけど。見ないといけないオレが不愉快だから。

オレがテーブルに近づくと、雅さんは椅子を引き、オレが所定の場所に立つのを待っている。

「雅さん。そういうのはやらないで欲しい。ありがたいとは思ってるんだけど、あんまり細々とした気遣いはかえって居心地が悪くてね」

車のドアを開けて貰うというのは最初こそ新鮮で面白かったけど、ずっと続くとはちょっとね。雅さんを使用人として雇用している形ならオレだって遠慮なくサービスを受けるけど、今は雅さんのサービスに対する対価をオレの方で用意できていない。雅さんをサポートするというのも今のところは口だけで、肝心の魔人襲撃時に不在という

体たらくだ。かえって申し訳ないと思う。

「雅さんは以前、対価がどうと言っていたけど、逆だよ。オレの方が雅さんのそういった気遣いに対してかえせるものがない。心苦しいよ」  
ただの親切だったり、現代ではなかなか見られないけど雅さんの忠誠心なんか天元突破してるからオレの世話をしたくてたまらない、とかならそれはそれとして受け入れるけど、雅さんは明確に見返りを求めているわけだし、受けたサービスには対価を払わないといけない。タダより高い物はないのだ。

「……」

雅さんが考える素振りを見せる。

オレのことを気遣ってサービスを中止するかどうか考えている……と思いたいけど、どっちの方がオレの機嫌を損ねないかって方を考えてそう。

「……そのようなことは」

雅さんが言った。

「そのようなことはおつしやらないで。お慕いする殿方の身の回りのお世話をさせていただくことは女の幸せに御座います。そもそも、わたくしは既に、東堂様によって救われた身……。どうかわたくしをお傍に……」

これだもんな。

断ったり遠慮しようとするところだもの。

魔人が余程怖く、オレの異変抗体を余程頼りにしているようだ。

以前、オレが不在のときに魔人を二人で撃退したり式神を使えるようになったりと、雅さん本人も強くなっているらしいのに徹底してこの態度を崩さないのは……上澄みの魔人達がそれほど強いということなのか。それとも、やっぱり今後のことを考えてオレの懐柔は続けたいということなのか……。

どちらでもいいんだけど、ただ気になるのは……。

「疲れない？」

「と、申されますと……？」

「涼音と喋ってるときの雅さんは素というか、自然体な感じがして楽

しそうだから、オレに対して無理してたら哀しいと思つてさ。前も言つたけど、魔人関連については、どうあれオレは雅さんの味方をするよ」

「甘いよ、雷留君」

「涼音、おはよう」

寝ぐせでばさばさの長髪をそのままに、眼鏡をかけていない涼音が部屋の中に入って来た。話を聞いていたらしい。

「昨日見たでしょ？ 雅はどこまで行つても妖怪なの。人類の危機つてことでわたしも味方をしてるけど、必要以上に気を許すのはダメ。あくまでわたしたちは人間と妖怪なの」

「涼音がそう思うのは自由だけど、それを本人の前で言うのはさすがに配慮に欠けるんじゃないかな？」

「雅の前だから言うんだよ。見張つてるぞつて、釘は刺しておかないと」

「それは分かるよ。でも雅さんにそんなつもりが無かつたら、いたずらに心を傷つけるだけになる。信じて貰えるかどうかはともかく、疑っていることを露骨に態度に出されることは辛いことだよ」

「雷留君は知らないから言えるんだよ。過去、妖怪たち……。特に妖狐のせいでどれだけの家庭や人間が破滅して来たか……。鈴院家の書物を貸してあげるから、雷留君も読んで。そしたらわたしの言つてることも分かるから」

鈴院家に伝わる書物によると、多くの妖狐というのはそうやって人を墮落させ、骨抜きにし、やがては精神的な立場を逆転させて人を服従させるものらしい。そして妖狐に屈した人間は、妖狐の餌を運ぶ働きアリとなり、破滅する。かつて鈴院家はそういつた妖怪を祓つていたらしい。妖狐専門というわけではないけど、人のコミュニケーションに入り込んで悪さをする妖怪の悪行には詳しいようだ。

だからそういつたことが詳しく書いてある古い書物を幼い頃から読み漁り、その思想に染まっている涼音は雅さんへのあたりが強くなるんだろう。

正直、墮落する人間の方もどうかと思うけど、水は低きに流れると

も言うし、甘い誘惑を断ち続けるといふのは難しいことだ。

それはそれとして、やり方が迂遠というか、妖狐側の努力も凄いと  
思う。

強大な妖狐は昨日雅さんがやったように、そんな手間を掛けずに幻術を使ってさつさと人を洗脳したり、孤立した人間を幻術で巢に誘い込んで単に食べる妖狐もいたらしい。それが物理的にか性的にか、どちらもかは分からないし、妖狐を含めた妖怪は既に現代では滅び去っているのです、確認はできない。

「……」

少し考える。

雅さんは目を閉じ、静かに佇んでいる。口を出す気はないようだ。

いつもなら、

「涼音え……」

「雅イ……」

なんて睨み合っている頃だろうに。

落ち着いて考えよう。

オレは雅さんを内心では信用していない。これは一貫している。だけどそれを露骨に態度に出すのは雅さんを傷つけるリスクを考え  
て控えている。だから涼音の言葉を否定して反論する気は無いし、だからといってすべてを受け入れる気もない。

オレだけは雅さんを信じる！

なんて気も無いし。

涼音の言葉にムキになって反論したり、感情的になって雅さんへ肩入れしても碌なことにはならない。

仲良くしてくれるのが一番ではあるけど、個別の感情や価値観を持つ者同士、みんながみんなそう上手くはいかないからね……。反発せざるを得ない二人が密接な関係を保たなければならぬ今の状況が悪いよ。

「分かった。涼音の言う通り、書物は読んでみるよ。ただ、オレが哀しくなるから、そういう忠告は雅さんのいないところでお願いできない？」

「雷留君……」

涼音がほつと息をついた。

オレもほつとする。受け入れてくれるようだから。

四人のコミュニケーションで、うち三人から疑心を向けられるって辛いと思うからね。オレも全部を信用しているわけじゃないけど、中立でいたい。判断を下すのは、雅さんという存在の心をもっと知ってからも遅くは無いだろうし。

そんな雅さんは薄っすらと目を開け、横目に涼音を見ていた。色々と思うところがあつたらぬ目だ。恨みが籠つてるような……。オレ達の仲違いを狙つてたとかじゃないよね……。そういうところで信用無くすんだよと思わないでもないけど、今のやり取りはそうなるも仕方ないところはあつたと思う。

かと思えば、雅さんは哀し気な表情を浮かべて、こう言った。

「東堂様……わたくしを疑われるのですか……」

「雅、わたしはそれをやめろつて言つてるんだ。気にもしていないくせに、白々しい」

「涼音え！」

「雅い！」

睨み合う二人。

やつぱり始まつたよ。

霊力と妖力がぶつかり合つているのか、部屋がきしむ音がする。オレは何も感じないけど。

「あのー、二人とも、ヒートアップする前に聞いて欲しい。何をしてるかは分からないけど、それ、やめた方が良くない？ クリック音つていうのかな、凄しい。少なくとも涼音は止めた方が良くないよ。なにかが壊れて苦労するのは神主さんだからね。これ以上あの人の胃を壊さないであげて欲しい。雅さんも抑えて貰えるとありがたいかな」

魔人に襲われて娘と他人に全裸を晒し、1000年受け継がれてきたという家宝を失い、先祖伝来の境界が壊れ、神社の備品や社が破壊され、世界存亡の危機の只中に叩き落とされ、その対策に頭を抱えて



いる神主さんにさらに苦労が増えると思うと胸が痛くなる。

というか、涼音は一人娘なんだから労わってあげてくれないかな。妖怪退治屋になるっていう無謀な夢、強力な霊能者として生まれたからこその一般社会でのしがらみ、魔人に命を狙われるかもしれないという危惧……ただでさえ一人娘の涼音を案じてただろうに、さらに畳み掛けるように厄介事が増えたんだから。

せめて神主さんを支える奥さんが居ればと思うけど、ずっと前に離婚してしまっているらしいからなあ。

涼音の親権を神主さんが持っているということは、余程別れた奥さんの方に離婚原因の非があつたか、あるいは涼音の体質とかで夫婦間で何かあつたか……。詳しく知らないし聞くんもりもないけど、神主さんの悩みは尽きないだろう。

可哀そうだよ、神主さん。その割には……というのは偏見だけど、髪は少なくないんだよね。

「うっ……」

涼音がバツの悪そうな顔をしている。

雅さんは、オレが言うなら、と佇まいを直した。

部屋のクリツク音が止まる。

止めてくれたらしい。

「二人ともありがとう」

二人に笑いかける。

「雅さん、御飯、ありがたくいただきますよ。雅さんの御飯は美味しいから、正直なところ、もつと食べたいって思ってるんだ」

「東堂様……」

雅さんが感激したように口元を両手で隠した。

「く……っ！ わたしだって雷留君に……っ！」

料理が出来ないらしい涼音が悔し気に唸り、拳を強く握りしめた。別にオレに……友達のために料理を作れないからって、それをそんなに悔しがる必要はないと思うんだけど、妖怪に負けるっていうのが癪に障るのかな。まあ……涼音の田辺に対しての態度を見るに、涼音の『友人』という概念と、その距離感がバグってることはオレも察し

てる。だけど、そこに恋愛感情は無い、と思っっている。信乃ちゃんや律ちやんのような感じはしないし。

「涼音。オレは妖怪とか霊能力とか……涼音が知っていることを何も知らないから、フオローしようとしてくれてありがとうと思ってるよ。思えば初めて会ったときからオレのことを心配してくれていたし、感謝してるよ。ありがとうね」

「雷留君……」

ほう、と涼音の吐息。

落ち着いてくれたようだ。

「それに、車も出して貰ってき。本当に、頭が上がらないよ」

これはマジでそう。

オレも車かバイク買わないとな……。買おうと思えば買えるけど、そういうのはやっぱりちゃんとバイトで稼いでからにしたいところだ。お小遣いとして自己管理して貯めて来たお金は、タクシー代と電車代と病院代、お見舞い代で吹っ飛んだし……。

哀しい。

思えば、結果として奢ることになった明日香さんとの喫茶店代から妙な浪費は始まったんだよな……。

明日香さん……。

いや、さすがに八つ当たりだ。控えよう。

そういえば、明日香さんは今、何をしてるんだろう。あの人と御曹司みたいな奴との会話も、今から思うとめっちゃ物騒なワードが飛び交っていた気がするし。連絡が取れないからどうしようもないけど、もし彼女の身に何かが起きていたらと考えると心配になる。元気でいてくれていれば良いけど。

涼音もオレのことを心配してくれてるんだってのは伝わった。

妖怪や魔人という常識を超えた存在が相手だからこそ、涼音も初めての友達を守ろうと必死なんだろう。異変抗体があるから大丈夫だと考えず、オレの心身を案じてくれることは嬉しいし、好ましい。

涼音の態度が必要以上のものなのか、適切なものだったのかは、いずれ分かることだろう。

☆☆☆

あの日、あたしの世界は終わった。もしかしたら、始まってすらいなかつたのかもしれない。

男漁りをする母親は、常に家に見知らぬ男を連れ込んでいた。同じ男だったり、別人だったりしたけど、ともかく、あたしの……あの女の家に、男がいないという日は無かつた。あの女の嬌声と、男の唸り声を聞かない日は無かつた。

あの女は男から金を貰い生計を立てていた。あたしはその金で育つた女だ。

汚い、と思った。

それがあたし自身のことなのか、あの女のことなのか、金のことなのか、男達のことなのかはよく分からない。ただ……汚いという強い思いだけがあたしの中にあつて、あの女の家に行たくない、あの女の顔を見たくないって思った。だからあの女の家に戻ることは、中学になつてからは少なくなつた。

夜の街を歩いていたら、必ず男があたしに群がって来た。

いくらで寝るのか、そんな話ばかりだった。

一度、人の良さそうなおっさんについていったことがある。こんなおっさんでもこういうことすんだなあって、落胆と呆れが強かつたことを覚えてる。

おっさんと一緒にホテルに入り、おっさんの裸を見たとき、あたしは吐いた。

おっさんはうげえ、と汚い声を出し、あたしの嘔吐にドン引いて、距離を取つた。当たり前だと思うけど、何故かあたしは凄く哀しくなつて……激昂した。

おっさん……ジジイは逃げるように部屋を出て、一人になつたあたしは泣いた。

それから、あたしは男に期待しなくなつた。

それからあの女の家には帰らず、夜の街を彷徨つた。

一度、でけえ男に絡まれたことがある。  
ナンパ。下卑た魂胆が露骨な野郎だった。

すげなく断ると野郎は激昂し、力づくでものにしようと思ひ掛かっ  
てきやがった。

レイプされる、という生理的な恐怖を上回る激しい怒りを感じ、気  
づいたとき、男は血塗れでその場に倒れてた。

そのとき、あたしは喧嘩が強いつてことに気づいた。

それから、夜の街を彷徨った。確信を持って。

はつきり言えば、声を掛けて来るジジイたちから金を巻き上げるた  
めだ。

近寄つて来るジジイ共は、一喝したらすぐに尻尾を巻いて逃げた。  
そんな姿が面白く、それだけでもあたしの中の何かが満たされる感じ  
がした。

一喝しても喰いついて来る馬鹿を煽り、手を出させ、返り討ちにする。  
そうして金を巻き上げ、あたしは漫喫やらで寝泊まりし、飯を  
食った。

腹が減ったらあの女の家に戻り、飯を食って外に出る。そんな生活  
から解き放たれて、あたしは自由になれた気がした。

あんな……金のために娘を売ろうとしたクソ女の家にはいたくな  
かった。

気づいたら、あたしの周りには人が集まっていた。

身売りするしかなかった女たちが、あたしのおこぼれに与ろうとし  
てることには気づいていたけど……良い気分だった。

姐さん、姐さん、と年上年下問わず、あたしを崇め奉る女たち。あ  
たしは男達から金を巻き上げ、女たちを養ってやった。男たちも、自  
分達より強いあたしに媚び、取り入ろうとおべつかを使っていた。中  
には善人ぶつて聞こえの良い言葉を並べるカスもいたけど、結局はあ  
たしの体目当てだった。強い女を抱いた……そんな称号が欲しかっ  
たみてえだ。反吐が出る。

色んな奴らから持ち上げられて、あたしはいっつか……自分が何か  
特別な存在だつて勘違いしてた。

いつちよ前に特攻服と木刀なんかも用意して気合いを入れて、親の金で飯を食ってる勘違いしてるチンピラ、ヤンキー、中坊なんかもぶちのめし、あたしは天下を取った気でいた。

あたしには……未来を見るって特別な力があつた。

自分の危機を映し出す力だ。自由には使えねえけど、何かをしようとしたとき、フラッシュバックするみたいに頭ん中に浮かぶ。

だからホントにヤバいことから手は引いて、絶対に安全なことだけをして、好き勝手やった。

半年くらいそんなことをして……バカなことをしたと思うけど、あの女の所に帰った。

なんでかは分からねえけど。なんとなく。

それが間違いだった。バカなことをしたと思ってる。

そのとき、あたしはレイプされるっていう未来を見た。

あの女が連れ込んだ男に。だけど帰った。

馬鹿だと思う。

本当に、バカだと思う。

あたしは……あの女を試した。

あの女があたしのためになにかしてくれんじゃねえかって。

結果、血塗れで倒れている男の前に、あたしはあの女から罵倒された。

そのあと……また根無し草に戻ったけど、いつのまにか、気づいたときにはあたしの周りから人が消えていた。あたしに群がっていた女も、あたしを自分の女にしようとして性欲丸出しのくせに口ではくせえことを言ってた野郎どもも、みんな。

そのころから、妙なヴィジョンを見るようになった。

地球に隕石が落ちて……世界が荒廃し、暴力が支配する世界に変わるって未来を。

そればかりが見えて、他に見えなくなった。

自暴自棄になって……好き放題やった。

きつと乱暴で横暴だったと思う。

あたしの周りから人が居なくなつたのはそれだけが理由じゃねえ

けど、それも半分くらいはあったと思う。

もう半分の理由が分かったのは、闇討ちをされて怪我を負ったとき。

いつも通り特攻服着て木刀持って、調子こいてる馬鹿をぶちのめすために、その馬鹿どもが溜まつてるって場所へ向かったら、想像以上の人数が居て、あたしは背中から襲われた。孤立させるために、あたしの周りから人がいなくなるように細工してやがったんだ。そして誰も、あたしにそれを知らせなかった。それがあたしの築いた王国の答えだった。

意気揚々と現れてご高説を垂れたのは、あたしが半殺しにしたあの男。

そいつは半グレで、ヤクザにも通じてたらしい。

質の悪い暴走族まで動員しやがって、あたし一人を大勢で囲んだ。でも……あたしがこれまでぶっ飛ばして金を巻き上げて来たチンピラも混ざってたから、自業自得かもなって思った。

あたしは必死に戦って、包囲網から逃げ出したけど……動けなくなって蹲った。久しぶりに地球滅亡以外で見たヴィジョンは……ここに居続けるとすぐに見つかり、男達の慰みモンになるってもんだつた。

必死でその場から逃げて、あたしは身を隠した。

昔世話をしてやった年上の女を頼って……売られた。

違和感を感じて逃げ出したから事なきを得たけど、あたしの中のなにかにひびが入る音がした。

街は見張られてる。

あたしは前の女より信用できる女を頼り、また売られた。

あたしは過去、一番世話をしてやった女を頼り……やっぱり売られた。

そのとき、あたしの中の何かが壊れる音がした。

途方に暮れていたとき、昔、気まぐれに助けてやった女と再会した。助けてやったというか、邪魔したというか。

桃香って名前の、電車に突っ込んで死のうとしてたバカだ。桃香は

あたしを見つけると駆け寄って来て、聞きづれえ小せえ声でなんか言ってた。

こいつなら……と思つて、半ば脅して家に転がり込んだ。

親が共働きで家に帰らねえことが多く、しばらく身を隠せることも都合が良かったが……正直、桃香との生活は楽しかった。

けど、桃香とリビングで飯を食つたとき、桃香の親が帰って来て、追い出された。桃香は泣いて縋ってくれたけど、言葉は無かった。桃香はあたし以外には口がきけない奴だった。

桃香が親にぶん殴られて、あたしは激昂して親をぶん殴つた。そのときの、桃香の猫のように伸びた目、嬉しそうな顔は忘れられねえ。

あたしは警察を呼ばれ、逃げ出した。

そして当てもなく、残つた金で漫喫を梯子していたとき……桃香が攫われたことを知つた。

あたしのせいだ。

あたしのせいで、半グレ共に目を付けられた。

あたしは桃香を助けるために単身で半グレ共の巢に乗り込み、男どもを半殺しにして桃香を逃がし……数に押され、敗けた。タイムマンなら負けねえのに。

腕を折られ、足を折られ、動けなくなつたあたしは、あの半殺しにした男に……最低な形で女にされた。

あの半グレはきもちのわりい畜生野郎で、動けないなりに反抗したあたしを好み、唾を吐きかけられて喜んでいた。思い出したくもねえ扱いをされて……そのうち、あたしん心は折れた。

あたしは半グレの女になった。

吐くほど嫌だった行為にもいつしか何も感じなくなり、自暴自棄に生理的な快樂に身を委ねた。

あたしは半グレから昔のような攻めたファッションを禁じられ、娼婦のように着飾り振舞うことを強いられ、やがてそれに違和感を持たなくなった。歳を偽つて、あるいはそれが良いとそのままの歳を明かし……あの女と同じことをさせられるようになった。心は既に冷たく凍り付いていた。

外も中も、あたしという存在は消えていった。

それからしばらくして、ヴィジョンが実現した。

地球が滅び、世界が変わった。

遠くに引越したと聞いた桃香とは、遂に再会することは出来なかったが、それで良いと安心した。あたしの今の姿を、桃香には見られたくないと……変わり切った心の奥で思ってたから。

世界が終わり、新しく始まった。

そこでは超能力……特殊な力を持つ人間が増えて、世界は暴力が支配した。

あたしは運が悪いことに生き残り、もつと運が悪いことに、あの半グレも生き残り、強い力を得て、勢力を拡大していった。

王として君臨する半グレの横に、あたしは所有物として置かれた。あたしは勝ち取ったトロフィーだよ。これまでで一番反抗的な女を屈服させた証だよ。

反吐が出る。でも、あたしは死んだ目で、従順に半グレの言うことを聞く機械になっていた。

そして……ある日のことだ。

あたしが、昔の世界でならとつくに成人式を終えていただろう時代。歳を数えることもしなくなったが、たぶん、三十手前って頃。

暴虐の限りを尽くしていた半グレの勢力を打ち破り、あたし達の前に、たった一人の女が殴り込んできた。

昔、あたしが着ていた特攻服と木刀を持って、大人になった女が殴り込みを仕掛けてきた。

各地で半グレが従える構成員が次々に虐殺され、拠点が放火されているとは聞いてたけど、本拠地まで攻めて来るとは思っていなかった。

そして準備不足で女と女が率いる軍勢を相手取った半グレの勢力は崩壊し、ついにたった一人の女が、大将首目前まで迫った。あたしは半グレの盾として、半グレ野郎に言われるままにその女と戦い……敗けた。

最期はあつけないもので……半グレに文字通り盾にされ、あの女の



超能力が直撃して瀕死の重傷を負った。

本当は分かったた。

あたしは、半グレの勢力が減びない道を選ぶことも出来た。王のお気に入りとして、贅の限りを尽くす今の暮らしを続けることだつてできた。

あたしには未来を知る力があつたから。だけど……あたしは。

この終わりが訪れることを願つたんだ。

「桃香……ごめんなさい……。私は……」

「えっ……？　なぜ、オレの昔の名を……。お前、まさか……。信乃、ちゃん……？」

どうやら、桃香はあたしだつて気づいていなかったらしい。

仕方がない。

あたしはあの頃からは見た目も、中身も、何もかもが変わつてしまった。

そのあと、あの半グレと桃香がどうなったのかは分からない。

ただ、あたしは桃香の腕の中で、暗い世界へと沈んだ。その頬を伝う涙に、途方もない喜びと幸福を感じながら……。

### ☆多☆多

「信乃ちゃん、泣いてるね……」

「そうですね……。だいじよぶかな……」

見舞いに来たら信乃ちゃんが寝ていて、どうしようかなつて思つてたら、桃香ちゃんが話しかけて来た。正直今までで一番ビビつたまである。

ただ、桃香ちゃんが話せるようになったことは嬉しいね。良い声してると思う。

良かったねと、オレがはしゃぐと驚かせてしまうかなと思つて自制し、あれからのことを話していたんだけど、寝ていた信乃ちゃんが急に眠つたまま涙を流し始めたものだから驚いてしまった。桃香ちゃ

んも心配し、同調してくれている。  
でも、なんとというか。アレだな。  
普通に話が出来る桃香ちゃんに違和感がある、という失礼だけ  
ど、まだ慣れないな。

聞くところによると、話せるようになったのは……病院前での信乃  
ちゃんの奮闘と、オレの放火未遂を見たときからということだ。消火  
器用意！って叫んだところ。

ええ……？

どういう心境の変化が……。

「捨て身になれば何でもできるって。そう思えたんですね。ふふ」  
そう言った桃香ちゃん的笑顔は、オレが知る誰よりもその……極  
まっていたと思う。

責任感じるけど、強くなったのは良いことだ。いいね。もしも……  
アレが桃香ちゃんに悪い影響を与えたなら、感じる通り、責任は取る  
うと思う。

「あ、信乃ちゃん。起きた？」

はっと飛び起きるように上半身を起こした信乃ちゃんが息荒く肩  
を揺らしている。

ぎこちない動きでオレを見る信乃ちゃんに、オレはこう言った。

「大丈夫？ うなされてたみたいだけど」

「う……」

最初、呆然とこっちを見ていた信乃ちゃんだったが、急に顔をく  
しゃくしゃくにして、目元に涙をためだした。

オレは足早に信乃ちゃんに近づき、軽くしゃがんで目線を合わせ、  
笑いかける。

「大丈夫だよ。もう怖いことは無いから。オレもいるし、桃香ちゃん  
もいる。シュークリーム、買って来たよ」

「う、わああああー！」

信乃ちゃんが飛びついてきた。

元氣と言えば元氣だけど、傷に響くから止めた方が……とも思いつ  
つ、信乃ちゃんを受け止め、頭を撫でる。

よっぽど怖い夢を見たのか。

そうだよな。普通にトラウマになるような事件の連続だったもんなな。

本当に、信乃ちゃんにはゆっくりと休んでももらいたい。

オレは信乃ちゃんの頭を撫で落ち着くのを待つ。

ちらと視線を送った先で、桃香ちゃんが満面の笑みを浮かべていたのが印象的だった。

何を考えてるんだろう……。

子供のように泣く信乃ちゃんを宥め、時を待つ。

やがて落ち着いた様子を見せた信乃ちゃんに、穏やかに問いかけた。

「大丈夫？ よっぽど怖い夢だったの？」

「……」

信乃ちゃんはオレから体を離すと、赤く染まった顔で、しかめっ面を浮かべた。

「どうしたの？」

凄い顔してるけど。

「いや……その……」

「うん」

「忘れちった……」

「忘れたって……何の夢を見たかってこと？」

「うん……」

信乃ちゃんは気恥ずかしそうに頷き、俯いた。

「ライルくんがその……頭撫でてくれて、気づいたらなんで泣いてるか忘れてた……」

「……」

なにそれ。

まあ、夢って割とすぐに忘れるって言うけど。

泣くほど強烈な夢もそんなすぐに忘れるものなのか。

「そっか……。でも怖い夢なんて早く忘れた方がいいから、かえって良かったんじゃない？」

「よくねえ。恥じいよ……。いくらこええからって、すぐ忘れるような夢で泣くななんて、ガキじゃねんだから……っ！ あたし……バカ……っ!!」

信乃ちゃんが一人で悶えている。

どんな夢を見たかって話せた方が気が楽だと考えているらしい。

確かにこういう夢だから泣くのは仕方なかったって納得できる理

由があつた方が精神的には楽かもね。

でも……ぶつちやけ今更だと思ふんだよね。

信乃ちゃんに微笑みかける。

「そんなに気にしなくても……。十代も前半なんだし、まだ子供でも良いんじゃない？」

む、と信乃ちゃんが不満そうな顔をする。

背伸びをしたい多感な年頃の少女相手には失言だったかな……。すると信乃ちゃんは拗ねたように唇を尖らせ、そっぽを向いた。

「そりゃ、ライルくんに比べりゃあたしはガキだよ。ガキ」

反応が子供だ……。

でも、自分が子供なことを受け入れられる、一つ二つ壁を飛び越えて成長した子供だ……。思わず笑みがこぼれる。

これが子の成長を見守る親の心境なのか……。

愛らしさ、微笑ましき、そして信乃ちゃんが一皮むけた瞬間を見届けられたことに対する幸福感が湧き上がって来るのを感じる。

「ごめんごめん。拗ねないで」

「拗ねてねーし」

信乃ちゃんが拗ねている。

「まあまあ。オレは嬉しかったよ？ 信乃ちゃんがオレを、辛い思いをしたときに泣きつける相手だつて思ってくれてることが分かって。ありがとうね」

咄嗟に縫れる相手がいるって良いことだと思う。オレにはいないし。

そもそも人に泣きつきたくなつたような覚えはないけど。

「だ、だーかーらー！ なんてライルくんが礼を言うんだよっ！ 逆だろ逆！」

「信乃ちゃんがオレを頼ってくれたことが嬉しかったから」

「あう……」

微笑ましく信乃ちゃんを見守っていると、信乃ちゃんは顔を真っ赤にぶるりと震え、ぎゅつと唇を閉めた。

良かった。

もし夢の内容を覚えていて、怖い思いをまだ抱えてるならまた違った対応を取ったけど、ホントに夢の内容を忘れてるみたいだな。

いったい、どんな夢だったんだろう。強がりの信乃ちゃんが人前で泣くほど怖くてつらい夢みたいだから、わざわざ思い出させるようなことはしないけど、気にはなるな。

ともかく、笑い話に出来て良かった。

「うふ。信乃ちゃん可愛い」

「も、桃香……」

いつの間にか、妙に恍惚とした表情で桃香ちゃんがオレの隣に立っていた。

信乃ちゃんがちよつと引いたように口元をひくつかせる。

どうした……？

桃香ちゃんが微笑んだまま、言った。

「信乃ちゃん」

「なに……？ 桃香……」

「うふ」

桃香ちゃんは何も言わず、嬉しそうに笑った。

……。

なんとなく察した。

喋れるようになり、信乃ちゃんの名前を呼べるのが嬉しいんだろう。

桃香ちゃんはもともと、信乃ちゃんの世話を甲斐甲斐しく焼くほどべつたりだったわけだし。

桃香ちゃんは上品に両手を合わせ、手の甲を頬に添わせた。

「せっかくだし、東堂さんの持ってきてくださったシュークリーム、いただきますしよっ？」

お上品な口調に所作。お嬢様って感じではある。顔を隠していた前髪を七三に分けてるから、以前の印象からがらりと変わっている。

お嬢様と言えば、明日香さんを思い出す。雰囲気は全然違うけどね。明日香にあったのが優雅さなら、桃香ちゃんにあるのは……妙な

圧かな。

「じ、自分で食べれるからな……?」

「うふふ。遠慮しなくていいのにな」

力関係は察した。

オレは携帯の時計を確認し、二人に言った。

「来てすぐに悪いけど、そろそろ帰るよ」

「えー? はやくねえ?」

「あら……お早いですね……」

「ごめんね。人を待たせて」

「……」

信乃ちゃんがなんか不満そうな、不安そうな表情を浮かべている。

それを一瞥し、桃香ちゃんがオレを見てこう言った。

「女性ですか?」

「……!!」

信乃ちゃんが驚いたように桃香ちゃんを見る。

桃香ちゃんは微笑んでオレを見ていた。

「そうだよ」

「……」

「あらあ……。そうですかあ」

信乃ちゃんの切なそうな表情は……だいたい察するけど、そればかりはどうしようもないな。

桃香ちゃんのはのんびりとした口調だが、妙に深くなった笑みに含みを感じる。

「恋人さん、でしょうか?」

「いや、友達だよ」

「そうですかあ。ちなみに東堂さんにはお付き合いされている方や、好きな人ついていらっしやるんでしょうか?」

「恋人はいないし、これといって好きな人もいないね」  
「なるほど」

うふふ、と桃香ちゃんが笑う。

こんなキャラしてたんだ、桃香ちゃん。

なんというか、そこはかたくない強さのようなモノを感じるけど、そんな桃香ちゃんを口がきけなくなるほど追い詰めていた家庭環境とは。憤りを感じる。

「そうだ、桃香ちゃん」

「はい？」

「オレと淀みなく話せてるから、大丈夫そうだなとは思ってるけど、桃香ちゃんはもう大丈夫なの？ オレのこともそうだし、以前のことも」

「……」

桃香ちゃんは深い笑みをたたえたまま、こう言った。

「些事です」

「些事？」

「はい。火を付けたらすべて些事です」

桃香ちゃんは間延びしない口調で言い切った。

オレは思った。

——いつちゃんやべえやつやん。

「そつか。気持ちの問題って事だろうけど、一応。……やつちやだめだよ？」

「東堂さんはされようとされてましたよね？」

「えっ？ えっ？」

信乃ちゃんが戸惑っている。

あのときのやり取りは覚えてないのかな？

「あの状況で、他に自衛の手段が思いつかなかったからね」

「そういうことです」

つまり他に手段がなければそういうことも辞さない覚悟があるということか……。

なるほど。

理不尽に屈さない心意気は好ましい。

ただ、桃香ちゃんは追い詰められ過ぎた結果弾けたって感じがして、危うい感じもしなくはない。

さつきも思ったけど、責任は取るか……。



「そこまで追い詰められる前に、オレや信乃ちゃんに相談してね？  
一応弁明しておくけど、オレはあのとき、警察に連絡して到着を待って  
たんだ。でも、警察の到着があまりに遅かったから、自衛と信乃  
ちゃんを守る最後の手段としてあの行動を取った。決して、自暴自棄  
での行動じゃないんだ」  
「なるほど。ですが、本気ではありませんたよね？　そして、お覚悟もさ  
れていた」

半グレとの話が聞こえてたのかな……？

「それはもちろん。遊びであんなことはしない」

「信乃ちゃんを守るために？」

「自衛も兼ねてね」

「もし……」

桃香ちゃんが躊躇うように言った。

「わたしが同じ状況に陥ったとしたら、ああやって助けられますか  
？」

「……」

「お、おい？　桃香……？　どうしたんだよ、おまえ……」

信乃ちゃんが戸惑っている。

桃香ちゃんはじっとオレを見つめている。

桃香ちゃん、どうしたの？

何が目的でこんな質問を……？

オレに何か期待してるんだろうけど、それが何か分からないな。信  
乃ちゃんと同等の扱いを求めているにしても、なんのために？

単なる承認欲求か、安心感のようなモノが欲しいのか。オレにそれ  
を求める理由はなんだろう。頼りにされてるというか、頼りにしたい  
と思ってくれてるのか。

桃香ちゃんも中々ハードな家庭環境みたいだし、外に居場所が欲し  
いのかもな。

なるほど。

「関係性によるかな」

「……？　同じ状況という条件で質問させていただいたと思います

けど……」

食い下がってくるね……。

「オレと信乃ちゃんの関係は少し複雑だね」

信乃ちゃんはオレに異変に対する向き合い方を変えるきっかけをくれた子だから。

「オレは信乃ちゃんに感謝しているし、過ごした時間は短いけど、強い親愛を感じてる」

「あう……」

信乃ちゃんに流れ弾が……。

「もし桃香ちゃんが同じ状況に陥ったとき、オレが信乃ちゃんと同じくらいの親愛を君に感じていたとしたら、戸惑うことは無いと思う」

「親愛……。信乃ちゃんのことを愛している？」

「火だるまになるリスクを厭わない程度には」

「あう……」

言葉を失っている信乃ちゃんを横目に、桃香ちゃんはっこりと微笑んで、言った。

「分かりました。ありがとうございます。不躰な質問をしてしまい、申し訳ありませんでした。それと、これまでの失礼な態度も」

「いや、いいよ。君とこうして話せるようになってよかった。きっかけがアレだけど……。それで、つかえは取れたのかな？」

「おかげさまで」

「ならよかった。オレで良かったらいつでも……というにはちよつと最近忙しいんだけど、出来る範囲で時間は取るから、何でも気にせず相談してね。お互い、奇妙なことに巻き込まれた縁もあるし」

「ありがとうございます。頼りにしています」

ふふ、と桃香ちゃんが笑う。

信乃ちゃんがオレと桃香ちゃんの間で視線を忙しなく動かし、対抗するように言った。

「あ、あたしもライルくんのこと頼りにしてるから！ またあいつらから助けて貰って、助けに来てくれて……っ！ あたし、あの！ えっ……！ ありがとう！ あたしの方がすげえ頼りにしてる！

好き！」

いや、そこは別に対抗しなくても、と思つたら、最後に告白を入れてきた。溢れる思いが止まらないって感じだな。こんなに思つて貰えるのは、幸せなことだ。応えてあげるとは……少なくとも今は出来ないんだけど。

そう思っていると、桃香ちゃんが信乃ちゃんを見て、妙に楽しそうにこう言った。

「ふふ。わたしは信乃ちゃんのことにも頼りにしてますよ？」

「えっ。お、おう」

桃香ちゃんから切り返されると思っていなかったらしい信乃ちゃんは戸惑った様子を見せる。

そんな信乃ちゃんを見て、桃香ちゃんは笑う。

実際の所どういう意図があつたのかは聞いてみないことには分からないけど、以前の桃香ちゃんの様子からして、信乃ちゃんの気持ちには気づいてそうだ。

桃香ちゃんがしたのは、オレの恋愛関係の現状と、信乃ちゃんに対してのオレの気持ちの確認。そして自分がいまオレの中でどの位置にいるのかの大まかな把握……。

信乃ちゃんのアシストと、外部とのコネ造りの両立つてことで良いのかな？

「桃香ちゃん、今の質問にどんな意図があつたのか聞いても良い？」

桃香ちゃんが苦笑した。

「どうかした？」

「いえ……。その、やっぱり物怖じしない方だな、と」

「どうして？」

「だいたいの方はこういつた質問の意図はあえて『流す』かと思ひまして。切り込むなあ、つて」

「切り込んで？　む……。でも、そう言われると、桃香ちゃんもそうだったと思うけど……」

「はい。必要なことだったので」

「必要なこと……。そっか。もしかして答えづらいことだったかな？」

無理しなくても良いよ。ごめんね」

桃香ちゃんがまた苦笑する。

「いえ。東堂さんは強い方ですね」

「強い……？ オレが？」

「はい。東堂さんは、自分を貫く意思と、人を尊重する優しさが両立されているように思います」

「そう？」

小さく笑い、息をつく。

「褒めて貰えてるなら嬉しいよ」

「東堂さん、わたし、東堂さんのこと、尊敬しています」

桃香ちゃんがやんわりと笑った。

「えらく突然だね。オレ、君になにか尊敬されるようなことしたかな？」

「先ほどお伝えした通りです。わたしに、というより、その在り方に憧れました。……ここでずっと、見ていましたから」

憧れ……。オレみたいになりたいってこと？

茶々ちゃんも言ってくれたけど、そう言っただけだとありがたしい嬉しいよね。

「そうなんだ？ ありがとう。嬉しいよ」

「いえ……。私の方こそ、改めてお礼を言わせてください。初めてお会いしたあの日のことも、ここでの、これまでのことも……。東堂さんにお会いできて本当によかった。私見ですが……。自分の意思を押し付けて来る人に、わたしの気持ちを都度、慮ってくれる人は、今までいませんでしたから……。父も、母も」

桃香ちゃんは少し俯いてそう言った。

間延びした口調を止め、重く深刻な声音に、彼女の抱える闇を見る。

「そっか……」

確かに、電話で数回話した程度だけど、彼女の両親は一方的に強く用件を突き付けて、相手に有無を言わせない人、という印象が強い。

桃香ちゃんにも日常的にそうだったんだろう。

「話し相手の声や表情、口調、話す勢い……。そういうのが強いと、言

いたいことがあっても中々言い出せなかつたり、すぐに考えが纏まらなくて話せない？」

問いかけると、桃香ちゃんは驚いた様子を見せた。

だがすぐにどこか安心したように笑った。

「そうですね……。はい。その通りです」

話せなくなったのは、そのジレンマの肥大化かな。単純にこれと言いつ切ることは出来ないけど、要因としては大きいんじゃないかな？

なにより、一番近い存在である両親から押し込められていたっていうのが大きそうだ。

「そっか……。会う人会う人に都度、それを察してとも言えないし……。辛かったねえ……」

「はい……。はい……」

桃香ちゃんは泣きそうに笑い、何度も頷いた。

「これから、優しい人とたくさん出会えると良いね」

「はい。でも、もう信乃ちゃんと東堂さんに会えました」

桃香ちゃんは嬉しそうに笑った。

「あ、あたし!? え!? あたしだって……! その、色々きつくねえ……。っ」

「口が悪いことは自覚あるんだね……」。

意図的などころもあつただろうけど。

「信乃ちゃん、根は優しいです」

「それは同感」

「あう……。や、やさしくねーよ! あたしは……悪い奴なんだよ! で、でも……」

ちらと、信乃ちゃんがオレを見た。

なんだろうと思つて見ていると、聞こえるか聞こえないかくらいの声量で、信乃ちゃんはこう言った。

「ほ、ほめてくれたのは……。う、うれしいっつーか……。あ、ありがとう……。っ」

おお……。

オレと桃香ちゃんはタイミングよく目配せし、同時に満面の笑みを

浮かべた。

可愛い。

オレの真似っこだ。

この年頃の子は心身共に成長が早いと聞くけど、本当だなあ。

微笑んで静かに信乃ちゃんを見守るオレの隣で、桃香ちゃんは嬉しそうな様子でこう言った。

「信乃ちゃん、可愛い」

「あう……」

「可愛い可愛い可愛い可愛い」

「うるせえ！ しつけーんだよー！」

女の子たちが戯れている。

桃香ちゃんを見る。

結局、さっきの質問の意味ははぐらかされてしまったなあ。

意図してのことかどうかは分からないけど、言いたくないって事なら……。ま、それでいいや。

今は信乃ちゃんと桃香ちゃんの成長と良い変化を素直に喜ぼう。

「じゃあ、今度こそお暇するよ。信乃ちゃん桃香ちゃんも、何かあれば相談してね。バイトとかもあるから、すぐに電話に出られるとは限らないんだけど、折り返しはするから。できれば都合の良い時間をメッセージで教えて貰えれば、時間も作れると思う」

「はい。ありがとうございます〜」

「えー」

ごねる信乃ちゃんを宥める。

「信乃ちゃんはず怪我を治さないと。退院したら、また、うちにおいて。手料理、ご馳走するから」

「そうだ！ それだよー」

信乃ちゃんが元気な声で叫ぶように言った。

傷に響かないのか心配になる。

どうやらオレが近くにしていると興奮してしまうみたいだし、電話での連絡はするにしても、ある程度治癒が進むまでは面会頻度は下げた方が良さだろう。まあ、忙しいから自ずと下がるとは思うけど。

そうして、オレは病室を出ようとして、また待ったが掛かる。信乃ちゃんだ。

「ライルくん！　ありがとう！」

振り返り、信乃ちゃんを見る。

信乃ちゃんはベッドの上で、複雑な感情が入り混じった泣きそうな表情でオレを見ている。

「わかんねえけど。わかんねえけど！　ありがとう！！　ホントに！　ありがとう！」

「……うん」

涙を零しながらそう言った信乃ちゃんに微笑みかけて手を振って、オレは病室を後にした。

「大好き！」

周りに迷惑だから叫ぶのは止めなさい。

閉じられた病室から届けられた溢れんばかりの思いを背中に受けて、オレは苦笑した。

☆☆☆

しかし良かったあ。

信乃ちゃん、後遺症が残らない程度の怪我で。拳銃で肩を撃たれたらしいから、傷は残るのは悔しいところだけど。しかし回復力凄いよな、あの子。喧嘩も大人数の男相手に張り合うくらいだし。

もともとの体力もある子だ。

退院は伸びてしまったけど、そう遠からずまたそういった話も出るだろう。

病院を出て、駐車場に向かう。

車の中で涼音と雅さんが待っていてくれた。

雅さんはオレの存在に気づくと素早く車を降り、いつものように後部座席のドアを開けて待っていてくれる。

「おかえりなさいませ、東堂様」

「ただいま。ありがとう、雅さん。でも、帰りは助手席に座るよ」  
「……さようでございましたか。申し訳ございましたね」

雅さんが後部座席のドアを閉め、助手席のドアへと移動しようとしたので、手で制す。

「大丈夫」

「出過ぎた真似をいたしました」

「そんなことないよ。ありがとう」

雅さんが小さく頭を下げたのを見て、苦笑する。

貴族扱いだなあ。

雅さんはなるべく目立たないように祓い屋から逃げ続けていたって話だったから、大名とかのトップ層は避けていたんじゃないかってオレは思っているんだけど、そう考えると、なんとなく、分かる気がする。

昔の日本で、野心はあるけど中途半端な地位で頭打ち、なんて人が絶世の美女にこんなさされたらたまらないだろうなあ……つて。骨抜きにもなる。

助手席側のドアを開け、車に乗り込む。

運転席ではニコニコの涼音がいた。

「お帰り！」

「ただいま。待たせたね」

「ううん。今帰ったところだから」

「小妖怪集めは上手くいったの？」

「うん。この辺のはあらかた取り尽くしたから、しばらく出ないかも」  
オレと別行動をとっている間、二人は式神の素材となる小妖怪集めに精を出していた。その成果は上々らしい。

「ならよかった。じゃあ、行こうか。よろしくお願いします」

車を出して貰うお礼を伝える。

「OK！ 雷留君の家の隣だったよね？」

「うん。駐車場は東堂家の方を使って良いから」

「了解！」

元氣良く返事をしてくれた涼音が車を出してくれる。



運転中、涼音がふいに言った。

「どうだったの？ ヤクザに狙われてたって子」

「包帯でぐるぐる巻きだったけど、元気そうだったよ。カラ元気って感じでも無かったし……銃で撃たれたって言うのに、強い子だ」

「銃かあ。今の時代で、銃を持って病院を襲撃するなんて奴がいるんだね……」

「本当にね」

「それを無事撃退為された東堂様のお力はさすがと言うべきかと」

「それはそう」

雅さんの言葉に、涼音が同調する。

「撃退ってほどじゃないよ。警察がタイミングよく来てくれたからなんとかあったってだけ」

「でも、異変抗体があるからって無茶するんだから」

「他に手が無かったからねえ……。半グレが悪いよ、半グレが」

「だからってライターオイルをまき散らして脅すなんて……」

脅しじゃなくて必要に迫られれば本気である半グレを火達磨にするつもりだったけど、それは言わなくて良いだろう。

「涼音。東堂様は女子を身を挺して救われた益荒男じゃ。讚えられこそすれ、窘められる所因はない。そうでございましょう、東堂様」

「いや、涼音の気持ちはありがたいよ。心配してくれてるんだって分かっているから」

涼音が何か言う前にオレが止める。

「そうでございしましたなら、出過ぎた真似を……。ところで東堂様、その女子は東堂様のよき人、ということではございましょうか？」

「いや？。でも、大切な友人だよ」

恋バナがしたいってわけじゃないだろう。

今後会ったときにどういう対応をするのが正しいかを知っておきたいのかな？

「友人……。雷留君。わたしは？」

「友達でしょ？」

「……」

前を向いている涼音の横顔を見る。

ふてくされていいる。むくれている。不満そうだ。

大切って頭につけなかったのが不服のようだ。

「涼音。あの子とは知り合って長いし、個人的な恩もあるんだ。一概には比べられないし、比べるものでもないよ」

「……」

不満そうだ。

涼音が言う。

「わたしは雷留君のこと、大切な友達って思ってるけど？ 一番ね！」

一番って、友達がオレしかないから……。

言わないけど。

「ごめん、涼音。嫌な思いにさせたことは謝るよ。今の雅さんの質問には答えるべきじゃなかった。オレが軽率だったね。許して欲しい」

「……別に、そんなことはないけど。許すとか許さないとか、そういうのでもないし」

拗ねるな拗ねるな……。

親を弟妹に取りられた子供じゃないんだから、とも思うけど、涼音の友人感が特殊なのはわかってるし、そうならざるを得なかった境遇も理解できるから……どうしたものかな。

「……。涼音。オレ達はまだ出会ってから一週間も経ってないわけだし、焦ることは無いよ。オレ達はこれから仲を深めていくんだから」

「……それは、そうかもしれないけど」

「それに、前も言ったけど、涼音と初めて会ったときのこと、オレはちゃんと覚えてるよ」

一週間も経ってないから当然ではあるけど。

「初めて会ったときって、全裸の雅と一緒にいたときだよね？」

「うん。実際には違ったわけだけど……涼音は見ず知らずのオレを、身を挺して助けようとしてくれただろ？ かつこよかったよ、涼音は。だから、って言うてしまおうと損得に聞こえるかもしれないけど、涼音のそういうところが好きだから、友達になりたいと思ったんだ」

「……まあ、わたしは妖怪退治屋だし。妖怪に憑りつかれた人を助け

るのは当たり前だからね」

涼音の険し気な横顔が若干和らいだように思う。

「……わたしの方が先に会ってたら」

小さな声で涼音が呟いた。

若干和らいだというだけで、やっぱりオレの一番じゃないと気が済まないみたいだ。でもなあ、今言った通り、そこはもうどうしようも……。

涼音としても、理解はしているけど、心が追い付いてこない、つてとこかな。それだけオレと友人になれたことが嬉しいと感じてくれているということだろうし、ありがたいことではある。可能な範囲で応えたいところだ。

そんな涼音の様子をバックミラーで見ている雅さんが、小さな声でぽつりと言った。

「ま、稀に見る強い独占欲じゃな……」

……。

それはそう。

その後、茶都山家に向かったが、残念なことに留守だった。

時間的には茶々ちゃんも下校して家に戻っていても良い頃なんだけど、学校で遊んでいるのかもしれない。それか、魔法少女としてのボランティア中か。

車は無いが、茶都山という表札は出ていたのは確認しているので、また一家で何かに巻き込まれたということは無いと思う。

オレの携帯に連絡を入れるようになって茶々ちゃん宛てに留守電に入れておこうと思う。用件は適当に……勉強についてとかで良いかな。

話を合わせてくれると良いんだけどね。でもあの子、「え？ 知らない……」とか親御さんへ条件反射的に答えたりしそう。親御さんには町内会の件で信頼して貰えてると思うから、変な疑いはかけられないと思うけど。

茶都山家の前で電話をし、留守電を入れ、東堂家の郵便物を確認する。

すると、いくつかの郵便物のうち、一枚だけ切手の張っていない手紙が入っていた。

誰からだろうと思ひ裏を見てみると、茶都山という文字が。封を開け、中を読む。

どうやら茶都山家はご実家の不幸があつて地元へ帰省しているらしい。唯一親しくしているお隣さんであるオレにはその旨を伝えておきたかつたとのことだ。

タイミングが悪いけど、こればかりは仕方がない。

瑠璃ちゃんだけでも話をしておくべきか……。二人そろつての方が良いかな。どうだろう。

以前……スーパーでの一件のときに送って行ったから、家は知ってるし、一度行つてみても良いかな。なるべく早い方が良さだろうし。ということで、涼音に道案内をしながら、瑠璃川家へと向かったが、不在だった。一応、表札も確認したけど、ちゃんがある。

いないものは仕方がないということで、また後日、瑠璃川家には向かうことになるだろう。茶々ちゃんにはちゃんとメッセージを残しておいたし、帰省と言ってもご両親共に働いているわけだから、そう長くは滞在しないだろうし、戻り次第茶々ちゃんから連絡が来るだろう。

### ☆☆☆

時は流れ、年末。

およそ三週間、奇妙なことに———というと染まつてしまったなあと思うけど、あれから異変という異変は一切起きなかった。

魔人が攻めてくることも、信乃ちゃんがまた誰かに狙われることも。

そして、彩乃さんから連絡が来ることも。

茶々ちゃんから連絡が来ることも。

魔人が攻めてこなかったことと、半壊した神社の自力での復興や対魔人防衛線の構築で忙しく、涼音や神主さんも忘れていた……という

より、後回しになっていた。

オレもバイトや大学、神社の修繕の手伝いなんかをして後回しになっていったけど、さすがに三週間は長い。もちろん、その間にも動かなかつたという訳じゃない。あの後にも二回ほどか茶都山家や瑠璃川家に行ったけど、やっぱり留守だった。

共働きの茶都山家は分かるし、瑠璃川家も同じなら変な話でもないけど、さすがに留守番に残したメッセージに返答が無いのは変だよな。

どうすべきか……。

という話を神主にしようと思ひ、神主さんの部屋へと向かう。途中、テレビのある部屋を通る。

涼音と雅さんが露骨に距離を取りながらテレビを見ている。

涼音はミカンを、雅さんは……蒸かし芋を食べているようだ。バターを乗せたやつ。おいしそう。やっぱり雅さん、じゃがいも好きなんだなあ。

チャンネルの取り合いで喧嘩をしているようなので、見ないふりをして通り過ぎる。

神主さんの部屋の襖の前で立ち止まり、問いかける。

「神主さん、少しお時間良いですか？」

……。

「神主さん？」

返事が無い。

「失礼しますよ？」

襖を開ける。

すると……神主さんが仰向けに倒れていた。

「神主さん？ 大丈夫ですか？ どうされました？」

近寄る。

息はあるから、寝ている？

疲れてるのかな……。

そうだよな。毎日大工仕事してるもんなあ……。

寝かせてあげよう。

そう思い、押し入れを開け、中から布団を取り出し、手に持って振り返る。

「ええ……う？」

神主さんのお腹が天井へ向かって、まるで焼いたお餅みたいに膨れていた。

見たことあるぞ、これ。

「魔獣……」

そのとき、オレの脳裏に瑠璃ちゃんの言葉が過る。

——知られてはダメなの。

あつ……。

痛恨の極み。

神主さんに新たな苦勞が……。

ごめんなさい。

完全にオレのミスです。

伝えるべきじゃなかったのか……。

でもまさか、神主さんが……。

「涼音！ 雅さん!!」

大声で喧嘩をしているだろう二人を呼ぶ。

そのとき、神主さんの腹からちぎれ、大きな卵が宙に浮き、縦にひび割れた。

魔獣が瞬る際には予兆というのがあられるらしいけど、オレは何も感じなかった。それは仕方ないとしても神主さん本人や近しい間柄である涼音からもそういった話は一切聞いていないから、予兆は直前まで無かった……ってことで良いと思う。

そして瑠璃ちゃんの話では、魔獣は予兆が現れてから瞬るまでの期間が短ければ短いほど強大な力を持つということだった。

だとしたら、神主さんから瞬る魔獣は、かなり強いってことになると思うんだよな……。

一体何が始まるんだ……。

涼音と雅さんは大声で呼んだし、きつとすぐに来てくれると思う。

出来れば、魔法少女たちにも来てもらいたい。彼女たちは魔獣の発生を感じ取れるらしいし、今の状況をどこかで察知して駆けつけてくれないかなって。

ただ……彼女たちとは三週間も連絡がついていない。そう都合よく来てくれはしないんじゃないかって言う予感はある。

状況は進む。

オレの目の前で、神主さんの腹から分離した肉の卵が砕け散り、中から何かが現れた。

赤い体毛に覆われた、猿のような姿をしたやつだった。頭頂部にはサイのようなツノが生えている。

鬼のような猿。

神主さんに寄生していた魔獣がこんな姿をしているというのは、以前、神主さんが鬼の魔人に襲われたことと関係があるのか、単なる偶然か……。

「うきやきやきやきやきやきやああああッ！」

鬼猿が甲高い雄たけびをあげた。

うるせえな。

思わず顔を顰めた。

オレはそれだけしか感じなかったけど、魔獣の叫び声には何かがあ

るらしく、急に家が軋み始めた。猿の叫びが物理的に家屋に影響を与えているようだ。真上から塵や埃が降って来る。

「やめなよ。落ち着きな。叫ばないで欲しい。分かるかな？ オレの言葉」

通じるかも分からないが、鬼猿を宥めようと語り掛ける。

これ以上、神社を壊すようなことはやめてあげて。神主さんもう、持たない……。

「涼音ー！ 雅さーん！ 早くー！」

家が壊れる前に来てあげて。

二人を大声で呼ぶ。

しかし、来ない。

来る気配も感じない。

足音も聞こえない。

まさか聞こえてないのか？

そんなはずは……涼音たちが居た居間と神主さんの部屋は中庭に隣する一本道の廊下で繋がっていて、そう遠くない。

なんとなく、いやな予感がする……。

そう思ったとき、家が大きく揺れ、轟音が響いた。

その後、何か……乾いた木材が崩れ落ちるような音が聞こえてくる。

家が壊れる音だ。

だけど、目の前の鬼猿は特に何もしていない。

何が面白いのか、仰け反りながら甲高い声で笑っているだけだ。

つまり、音の発生場所はここじゃない。

音は涼音と雅さんがいる居間の方から聞こえた。

もしかして、向こうでも何か起きてんの……？

たとえば……、こんなイヤなタイミングで魔人が襲撃をしてきたとか。

そんなことある？

それとも、魔獣と魔人が裏で繋がっていて……とか？  
分からない。



というか、いくらなんでも人類の脅威多すぎんだろ。

オレは鬼猿に背を向けて、駆けだした。

神主さん、間に合ってくれ。

魔獣の存在を知った人間に寄生して生まれるという、瑠璃ちゃんの話は正しかった。そしてその話には続きがある。宿主を喰らい、存在を消すという続きが。

あの鬼猿を放って置けば、神主さんが殺される。

目指すは居間の奥、台所。

目的は包丁とホウ酸団子を手に入れること。さすがに拳銃とか猟銃とかは置いてないだろうし……刀とかないのかな？

効果があるかはわからないけど、何か武器になりそうなものは。

途中で涼音と合流したら聞いてみよう。そして涼音の車の鍵を借りよう。

涼音、ごめんね。

あまりやりたくはないけど、もしも他に手段が無いなら……涼音の軽自動車で魔獣に体当たりしようと思ってる。

「うわあ……やっぱそうだったんだ……」

神主さんの部屋から出て廊下を走る。

居間の前を横切ろうとして、オレは足を止めた。

襖が倒れて丸見えになった部屋の中に、まあ有り得ない大きさの蛇が蜷局を巻いて鎮座していた。ライオンのように顔の周囲を一周する鬘と、馬のような縦長の鬘を持つ大蛇だ。

さっきの音と揺れはこいつが原因か……。大蛇の頭が天井を破壊したようで、木の板が居間の中で無造作に転がっていた。

雅さんが廊下に近い場所で立ち尽くして、大蛇はしゅーしゅー、と舌を出し入れしながら、雅さんを見下ろしている。

「雅さん」

「東堂様……!」

オレの声に雅さんが振り向いた。安堵の色が見える。

「この蛇は魔人？」

「い、いえ……。これは魔人ではありませんぬ」

雅さんは小さく言った。

魔人じゃないのか。

じゃあ、一体……。

ふと気づく。

「涼音はどこ？」

「涼音……？」

「涼音」

「……？」

「……」

雅さんが困惑した様子を見せる。

演技には見えないし、こんなときにそんな嘘を吐く理由は無いと思う。

それはつまり……。

ふいに、魔獣に喰われた者の末路を思い出す。

——世界からその存在が消える。

こいつ、魔獣か？

だとしたら……。

「涼音、喰われたの……？」

大蛇はしゅーしゅーと舌を出し入れして動かない。

マジか……。

でも、雅さんの反応からするとそれしか……。

なんてことだ。

涼音も魔獣に寄生されていたのか。

オレのせいだ。

オレが瑠璃ちゃんの話を実剣に考えていなかったから。

関係者としての意識が希薄だった。

自分が大丈夫だからと油断した。

涼音たちなら大丈夫だろうと過信した。

魔獣という存在の法則は、オレ以外の人間には確実に適用される。

しかも、涼音のような、現代最高峰の霊能力者という肩書を持つ女性であっても。強いらしい涼音でさえ、魔獣にはこんな僅かな時間で

捕食されるのか。雅さんだっていたのに……。

魔人を撃退したこともある二人がいてこの有様って……もしかして魔獣って魔人よりヤバかったりするんの？

雅さん。

雅さんは大丈夫なのか？

単に寄生されてないのか、人間じゃないから難を逃れたのか、それとも寄生はされてるけど、孵るタイミングが今じゃないだけなのか。ともかく、雅さんがいてくれれば選択肢が増える。急に雅さんからもなんか出てくるとかは止めてほしい。

蛇の魔獣が雅さんをじっと見ている。ちろちろと舌を出し入れしながら、首を前後に動かしている。なんの動きなんだ。

一方、雅さんは怯えていた。

蛇を見据え、じりじりと後ずさりながらオレの傍に近寄って来る。熊に出会ったときみたいだな……。目を離すなっていうやつ。

怯えてるみたいだけど、こいつそんなヤバイのか？

近寄って来た雅さんに問いかける。

「雅さん。あの蛇、倒せる？」

「……」

雅さんは蛇から目を離さず、オレに背を向けたまま首を横に振った。

無理らしい。

大蛇がのっそりと首を持ちあげ、顔を雅さんに近づけて来る。

オレは咄嗟に雅さんの肩を掴み、引つ張るようにして背に庇う。

大蛇の首はぴたりと止まり、後退する。そしてまたオレ達の方へと首を近づけようとして、また首を後退させた。

何の動きだよ……。

というか、襲ってこないな。

思えば、スーパードの時もそうだった。

犬の魔獣は瑠璃ちゃんたちには襲い掛かっていたけど、オレのことは気にも留めていなかった。オレが体当たりしたときも、特に反撃もしてこなかった……。

何か理由があるんだろうけど、今は……。

「雅さん、神主さんを頼める？ 神主さんの所にも魔獣がいるんだ。鬼のような、猿のような奴が。魔法少女たちが来てくれるまで、なんとか神主さんを……」

「神主……？」

「……」

怯えが滲んだ雅さんの声に、さつき涼音のことを聞いたときと似たような違和感を抱いた。

オレは察した。

——神主さん、逝ったか……。

鈴院家が滅亡の危機に瀕している。

「雅さん……。魔獣の性質については理解してるよね？」

「人を喰らい、その存在を抹消する怪異であるとのことでした。ごさいました。……」

「そう。今、二人やられた」

「……二人？」

「うん。前もそうだったけど、オレは異変抗体で魔獣に消された人たちのことを覚えていられるらしい。喰われて消化されるまでに助けられれば、二人は戻ってくるはずだ。雅さんにも協力して欲しい」

「逃げませぬか……？」

「えっ？」

雅さんが言った言葉に耳を疑った。

背に庇っている雅さんの方へと思わず振り向く。

雅さんは怯えが滲んだ表情でオレを見ていた。

「こ、このような事態は想定外でございます。この地を捨て、東堂様の本拠へと撤退することこそが最善かと。隣家に住まう魔法少女とやらに任せるのです」

「いや……。それは最善じゃないよ。放って置いたら神主さんや涼音がどうなるか分からない。助けないと」

「東堂様、どうかお考え直してください。わたくしたちの使命は、魔人よりのこの現世を守ることにはございません。万一わたくしが魔獣に喰われ

でもすれば、魔人共はこれ幸いと現世に現れ、人を襲うでしょう」

「それは……」

確かに一理あるけど。

オレは携帯を取り出した。

茶都山家に電話をする。魔法少女に救援を要請するためだ。しかし留守番電話のアナウンスが聞こえ、電話を切った。

やっぱりダメか……。こっちに向かっている最中って考えるのは希望的観測だよな。

せめて魔法少女たちが参戦する確約があれば、尻の軽い雅さんの重い腰を上げてくれるんじゃないかと思っただけ。

他に頼れそうなのは彩乃さんくらいか……。

でも彩乃さんにはオレが一方的に連絡先を伝えただけで、オレの方は彼女の連絡先を知らないんだよな。

武闘派とはいえ、信乃ちゃんを駆り出すわけにはいかないし、律ちゃんには戦う力はない。

警察を始めとする国家権力にも頼れない。

オレのコネは何一つ使えない。

そして雅さんには戦う気が無い。

「ふう……」

溜息を吐く。

「いいよ、雅さんは逃げて」

「東堂様……?」

雅さんが困ったように言った。

「まさか……戦うおつもりですか?」

「結果としてそうなるかもしれないけど、こいつと戦うというより、二人を助けたいんだ」

「東堂様は、おっしゃっておられたはずでは? 魔獣には、ご自身の体

質でも対抗できなかった、と」

「まあね……。確かに、前はダメだった」

「ではなぜ……っ!?!」

「何故って言われても……普通そうしない? さすがに二人を見捨て

られないよ」

涼音の車で突撃を……と思ったけど、茶都山家が消えたとき、車もなくなっていた。涼音の車も無くなってるかもしれない。なにか……なにかないか？

オレは大蛇の横を駆け抜け、割れて転がっている窓ガラスを手にとった。良い感じに尖っている。刺すくらいなら出来そう。分厚そうな鱗を貫通できるかは分からないけど……。

「……っ。と、東堂様！ おやめくださいませ！ 御考え直してくださいませ！ 東堂様は確かに魔人すらも寄せ付けぬ益荒男でございませが、魔獣とやらには……！」

「うん。まあ、無力だね……。分かってるよ」

「では、何故!? アレはわたくしたちを襲おうとはしておりませぬ！ 放って置けばよろしいかと！」

「いや、だからさ……。二人を見捨てられないんだって。皆は忘れても、オレは二人のことを覚えてる。オレだけが消えてしまった人たちのことを永遠に覚えて続けるなんて、そんなのは嫌だよ」

「東堂様……！」

「雅さんは逃げてても良いよ。オレは出来るだけのことはやってみる。まあ、出来れば手伝って貰えるとすごくありがたいんだけど」

「東堂様……！ どうかお考え直してくださいませ！ 万一東堂様の身になにかあれば、わたくしは……。っ！ わ、わたくしだけでは魔人共から逃げられませぬ！ 討たれまする！」

「……。あのね、雅さん」

オレ達を観察しているのか、しゅーしゅーと舌を出し入れするだけで動かない大蛇の前に、オレは雅さんの方を見た。

「雅さんはオレのことを頼りにしてくれてるんだらうけど、でもオレだって、いつかは雅さんの前からいなくなるんだよ」

「は……。？」

雅さんは何言っただこいつ、と言わんばかりに呆けた表情でオレを見つめる。

「できれば大往生をしたいと思ってるけど、人間なんて、いつどうなる

か分からない。オレだって、いつか死ぬときが来る。人間である以上、いつかはね」

「人間……？」

「いや、人間だよ。さすがに。人間」

雅さんの反応的に、普通とか普通じゃないとかを通り越して、そもそもオレを人間として認識していなかったことが分かってちよつと困惑する。

彩乃さんもオレのこと人間じゃないとか言ってたけど、さすがに人間だろ。人間だろ……。

もしかしてホントになんか隠された血筋が……みたいなことあったりする？

少年漫画的な。宇宙人とか、そういう……。

「オレが生きてる間に片が付けばいいけど、魔人って江戸時代からいるくらいだから、かなりの長寿だよな？ しかも長い時間をかけてこの世界への侵攻の地盤を固めてきたくらいには気も長いし、知恵もある。もし魔人がオレの体質を脅威と見て雅さんの排除を先送りしたら……、人間であるオレは何もできないまま死ぬ。そうなればいざ、雅さんはオレが居なくなつた時代で、たった一人で魔人を相手にしなければならなくなるときが来る」

「そ、それは……っ！」

「そうになったら、もう終わりだよ」

逃げ癖、というには酷だけど、雅さんはそういう傾向があるように思える。

話して貰つた生い立ちを考えれば仕方ないというか、そうならざるを得なかつたのは分かるけど、ずっとそれだと、最終的には自分で自分の首を絞めることになると思う。

少なくとも、御柱さんと他の妖怪が残っていた時代に、雅さんが勇気を出して動き、仲間集めをしていれば、ここまで魔人に追い込まれるってことは無かつたはずだし。

逃げ続けた先にあるものが幸せな結末だとは思えないし、その結果は既に出てしまっている。

妖怪仲間が全滅し、雅さんが長い時間支えとしてきた御柱さえ姿を消し：孤独となった雅さんを待ち受ける未来は、既に現実となった。

「たまたま、オレと涼音がいて、終わりの一步前に戻ってこれただけ。『だけど今なら、終わりを避けた道を見つけ出せるかもしれない』」

「それは、どのような意味で……」

「雅さんは忘れていいことだけど、今オレが助けようとしてる涼音と神主さんは、魔人と戦おうって気概のある人達だったんだ。そして、その力もあった。妖怪が雅さんを残して全滅し、雅さんを守っていた御柱さんさえも居なくなつた今、多分、これがやり直せる最後の機会だと思おう」

「……」

「ごめん、雅さん。激励のために、あえてきつい言葉で言うよ。雅さん。あらゆることから逃げ続けてきた人生に、君は終止符を打つべきだ。きつと、今ならそれが出来る」

雅さんが押し黙っている。

悩んでるな……。

大丈夫かな、時間。魔獣が動き出さなかなって言う意味で。

それにしても魔獣が動かない。

舌をちろちろ出し入れしているだけで……。

なんでだろう？

「わ、わたくしは……」

「雅さん。怖いのは分かる。これまでそれを普通として受け入れざるを得なかつたことを変えるって、とても大変だと思う。だけど、今を逃したら、君は大切なものを失うことになる。それも一つじゃない。雅さんの、有り得たかもしれない、より良い未来を失うことになるんだ。怖いのは分かるよ。でも、踏み出すべきだ」

「わ、わたくしは……っ。東堂様、わたくしは……！ では、東堂様に永遠の命を！ わたくしと契約を結び、妖怪となられば、不老の力を……！」

「えっ？」

思わず雅さんを凝視する。



それマジ？

雅さん、そんなことできるの？

それはちよつと興味あるなあ……。不老か……。そうなつてくるとちよつと話が変わつて来るぞ？

いや、違うよ。

それは後で改めて詳しく話を聞くとして、今はそこじゃない。そもそも異変抗体で弾かれそうだし。

「雅さん。雅さんはもう一人じゃないんだ。もう逃げなくて良い。理不尽に屈さなくていいんだよ。勝ち取るんだ、雅さんの自由を。雅さんが望む普通を」

「東堂様……」

「想像してみてよ。魔人が居なくなった世界で、雅さんは何がしたいのか。雅さんの願いを阻む障害がなくなった未来で、雅さんはなにがしたい？」

「……」

考えたな。

そして、すぐに無理だと諦めた。

それが雅さんを蝕む闇、諦念であり、トラウマだ。

オレが囚われていたものと同じ。

だけど、諦めなくて良いんだと伝えたい。困難はあつても、諦めなくて良いんだと。

雅さんの件では、オレにも生活があるからと、受け入れるかどうかを酷く悩んだ。

今でも考えることは多い。

だけど結局、雅さんを受け入れた今が一番スッキリしている。

咄嗟に麒麟から彩乃さんを守ったときもそう。

信乃ちゃんや律ちゃんを助けに行つたときもそう。

涼音や神主さんと一緒に雅さんを守るって割り切つた今の方が、前よりもずつと気分が良い。やっぱりそれがオレにとっての『普通』で……。その『普通』を捨てなかつたからだ。

最近自覚した、強烈な自我という名の、『オレだけの普通』。

目覚めの直後、外から与えられた、一般社会としての『普通』。

この二つが衝突することで生じていた歪みは、この半年間の出会いの中で、なだらかに整えられてきている。

きつと雅さんにもあるはずだ。

敵わないから逃げなければならなかったという、今まで甘んじる他になかった押し付けられた『普通』と反する、雅さんの本心が望む『雅さんだけの普通』が。

それを捨てないことがきつと、一番大事なことだと思っただ。

「雅さんの問題を片付けられたとき……。一体、どんな気持ちになるんだろうね……」

想像し、思わず呟いた。笑っている、と思う。

数百年に及ぶ、想像を絶するような雅さんの苦悩。晒されてきた苦境。

それらが解決したときに抱く雅さんの解放感は、一体、どれほどのものだろう。

雅さんが解放される瞬間を見届けられたなら、そのとき、オレの中にはどれだけの喜びが満ちるんだろう。

考えるだけで……。笑みがこぼれる。

卑屈に逃げ続けざるを得なかった雅さんが、心の底から解放される瞬間、雅さんは何を思うんだろう。幸福だと、微笑むだろうか。静かに涙を流すだろうか。

「……と、東堂、さま……?」

「どうしたの、雅さん?」

「あ、いえ……。その、お顔が……」

顔?

笑ってはいるけど……。変だったかな。

雅さんは狼狽えた様子でオレを見ている。腰が引けているようだ。雅さんの反応はよく分からないけど、オレは微笑んだまま雅さんにこう言った。

「いつになるか分からないけど、いつか魔人の件が片付いたら……。一緒に故郷を探さない?」

「……っ！」

雅さんが目を見開き、大きく息を呑んだ。

以前、住処を追われたとか、故郷を忘れたとか、そういったことを言っていた。

同情を引くには有効なワードだけど、本当のことだとしたら、きつとそこに雅さんの無念があるんじゃないかと思って提示した言葉だ。もちろん、生きたいというのは生物の本能ではある。だけどそこに付随する、雅さんだけの思いがきつとあると思った。

そして、それは正解だったようだ。

雅さんが逃げ続け、生き続けてきた理由。

理不尽を前に屈辱を抱き逃げ続け、基本的に見下しているらしい人間にずっと昔から媚び諂うことで身を守って来た雅さんが、その奥で抱えていた願い。

それが、故郷に帰りたいという哀愁。

帰巢本能。

さつき、オレの問いかけにきつと想起して、瞬時に押し隠した雅さんの望み。

雅さんは驚きに放心している様子だったが、徐々に涙ぐんだ表情へと変わっていく。もしかしたら、自覚すらしていない願いだったのかもしれない。

それを言葉で伝えられたことで引きずり出され、封じていた思いが溢れて来た……って感じかな。

「雅さん。何度も言うけど、オレは雅さんの力になりたいと思ってる。魔人から守って欲しいって要望じゃなくて、雅さんの本当の願いを叶える手助けがしたいんだ」

「……」

「でも、雅さんが望むような……四六時中付きっ切りみたいなことは無理だ。オレの出来る範囲を越える」

さすがに雅さんのためにオレ自身の生活を犠牲にすることは出来ない。前提として、あくまでオレの出来る範囲で、という条件が付く。だから根本的には、雅さんの願いを遠ざけたあのときから、オレの

考えは変わってない。そこを変える気は無いんだ。そこが崩れると、自立を失い依存に変わる。オレはそれを好まない。

雅さんには、なんで自分にだけそんなに冷たいんだと思われるかもしれないけど、それに関しては別に雅さんに限った話じゃない。他人のためにそこを踏み越えるには……、信乃ちゃんから受けたような、強い親愛を抱く特別な何かが要る。

恋人や家族の為なら厭わないことも、さすがに友人には気後れする、くらいのもんだけど。金の貸し借りとか。

「だけど、『出来る範囲』は広げられるんだよ。助けてくれる誰かが居れば。どういう風に記憶しているか分からないけど、涼音が居たから、雅さんは大学にもついてこれたし、オレがバイト中も近くに居られた」

車での移動、魔人と戦う場所の確保、相談相手、話し相手としての役割。涼音の存在はきつと、オレにとっても雅さんにとっても、得難いものだったはずだ。

だから雅さんも、魔人に対抗すべく、戦う準備を少しずつ始めてた。まあ、それを雅さんが忘れてしまっているから困るんだけど。

そうなんだよね。

雅さん、少しずつ出来てたんだよ。オレから自立して、涼音っていう……悪友？を得て、逃げないことを始めてた。

それを意味の分からない魔獣とかいうのに奪われるのは、どうにも癪に障る。

「そして、張本人である雅さんが積極的に動いてくれれば、それはさらに爆発的に広がるはずなんだ。強大な魔人……鬼と天狗は滅んだ。魔人一体なら、涼音と雅さんの二人で倒せる。道は今まさに、雅さんの目の前に広がっているよ」

雅さんの瞳が僅かに動く。

みんなで頑張って、それでももしものときが訪れるなら、そのときは責任を取って盾になる。それに関しては前例もあるし、まあ……出来なくはないと思うし。

「だから……さあ、雅さん。オレの手を取って。雅さんの夢を、共に

……」

手のひらを広げ、雅さんへと伸ばす。

雅さんはオレの掌を食い入るよう見つめている。

ほお、と雅さんが熱い吐息を吐いた。

……？

その反応はちよつと想像していたものと違うな……。

たとえば「はい！ 頑張ります！」みたいなのを想像してたんだけど。

雅さんのオレを見る目に、これまでと違う何かが灯つているようにも感じる。表面的な服従……乾いた瞳の中が濡れているような……。

……。

何か間違つた……かな？

いや……嘘は吐いてない。そもそも事実しか言つてないし。

雅さんが忘れてるだけで、雅さんと涼音、二人で勝ち取った功績も多いしな。

雅さんは多分だけど、自己評価が低いんだと思う。だから自分の中で色々と格付けして、格下と見れば露骨に態度に出すんだろうし。

逃げ続けてたらそうもなると思うけど、現状をしっかりと伝え認識してもらふことで、自己評価を改めて貰えれば良いよね。

魔人に一人では立ち向かえないことが事実でも、雅さんはもう一人じゃないんだし。

「東堂様……。わたくしは、見つけられるでしょうか……。故郷を……。」

「もちろんだよ。雅さんが望むなら、オレは協力を惜しまないとも」

「ああ……。東堂様……。」

雅さんが蕩けた様な吐息を漏らす。

いや……だから、なんか違うんだよね……。

オレは雅さんに近づき、雅さんはオレに近づいて来る。

「な……っ!？」

途中、ふいに雅さんが大蛇の方へと弾かれたように顔を向けた。

「……っ?」

オレも做って大蛇を見るが、特に変わった様子はない。

「どうかした？」

「声が……」

「声？」

「声が聞こえる……。女……。？ 誰じゃ……。儂に語り掛けて来るこの声は……」

オレには全く聞こえないけど……。

「おのれは誰じゃ……。誰なんじゃ……」

雅さんが困惑した様子で大蛇の方を見ている。

そして、雅さんはこう言った。

「は……。？ 早くしろ……。？ もう無理……。？」

雅さんがそう言った瞬間、とぐろを巻いて鎮座していた大蛇の体がうねり、頭が天へと伸びあがる。残っていた天井が蛇の体によって破壊された。

車の急ブレーキ音にも似た金切り音が夜の静寂を切り裂いた。

……。

もしかして、この大蛇がずっと動かなかったのって、涼音が中で止めてくれた感じ？